福島県文化財調査報告書第531集

阿武隈川上流河川改修事業

高木地区遺跡調査報告

高木遺跡

第２分冊［本文編２］

２０１９年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告

高木（たかぎ）遺跡

第２分冊［本文編２］

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 座　標　値　　日本国土座標第Ⅸ系で設定した。

(2) 方　　位　　図中の方位は真北を示す。表記がない場合は図の真上を真北とする。

(3) 標　　高　　水準点を基にした海抜標高で示した。

(4) 縮　　尺　　挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。

(5) ケ　　バ　　遺構内の急傾斜の部分は「　　」で、緩傾斜の部分は「　　」で表現した。また、後世の撹乱の傾斜部は「　　」で表現した。

(6) 土　　層　　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
（例）基本層位－ＬⅠ・ＬⅡ…、遺構内堆積土－ℓ１・ℓ２…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、『新版標準土色帖22版』(小山正忠・竹原秀雄編著　1999　日本色研事業株式会社発行)に基づく。

(7) 網　　点　　は黒色処理を、　　は被熱範囲を示す。それ以外は各挿図中に用例を示した。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。

(2) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕は一点鎖線で示した。

(3) 番　　号　　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし､写真図版中では「１－１」と示した。

(4) 注　　記　　出土グリッド、出土層位などは遺物番号の右脇に示した。

(5) 遺物計測値　　計測値・石質は各実測図脇に示した。(　)内の数値は推定値、[　]内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、次のとおりである。

須賀川市：ＳＫＧ	高木遺跡：ＴＫＧ	竪穴住居跡：ＳＩ	掘立柱建物跡：ＳＢ
柱列跡：ＳＡ	溝跡：ＳＤ	焼土遺構：ＳＧ	土坑：ＳＫ
土器埋設遺構：ＳＭ	畑跡：ＳＸ		
柱穴・小穴：Ｐ	グリッド：Ｇ	基本土層：Ｌ	遺構内堆積土：ℓ

総　目　次

［第１分冊］

序　章

第１節　事業の概要 …… 1
第２節　調査に至る経緯 …… 2
第３節　調査経過 …… 2

第１章　遺跡の環境と調査方法

第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 9
第３節　調査方法 …… 12

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概観 …… 14
第２節　基本土層 …… 15
第３節　住居跡（１～160 号住居跡） …… 33

［第２分冊］

第２章　遺構と遺物

第３節　住居跡（161 ～ 237 号住居跡） …… 1
第４節　建物跡 …… 111
第５節　柱列跡 …… 167
第６節　畑跡 …… 171
第７節　方形区画遺構 …… 187
第８節　溝跡 …… 195
第９節　祭祀遺構・土器集中地点 …… 212
第 10 節　土坑 …… 223
第 11 節　土器埋設遺構 …… 266
第 12 節　焼土遺構 …… 274
第 13 節　遺物包含層 …… 276
第 14 節　遺構間接合遺物 …… 284
第 15 節　遺構外出土遺物 …… 285

第３章　総　括

第１節　遺物 …… 292
第２節　遺構 …… 321
第３節　まとめ …… 346

［第３分冊］

付章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定（平成 27 年度分） …… 3
第２節　出土炭化材の樹種同定 …… 16
第３節　放射性炭素年代（平成 28・29 年度分） …… 37
第４節　樹種同定・種実同定 …… 47
第５節　自然科学分析 …… 61
第６節　プラント・オパール分析 …… 76
第７節　大型植物遺体同定 …… 79
第８節　レプリカ法による土器圧痕の同定 …… 86

写真図版 …… 95

付図１　遺構配置図 弥生時代終末期～古墳時代前期
付図２　遺構配置図 古墳時代後期～中世

［第２分冊］目　次

第２章　遺 構 と 遺 物

第３節　住　居　跡（161 ～ 237 号住居跡）…… 1

161号住居跡（１）　162号住居跡（４）　163号住居跡（５）　164号住居跡（６）
165号住居跡（７）　166号住居跡（８）　167号住居跡（９）　168号住居跡(10)
169号住居跡(11)　170号住居跡(12)　171号住居跡(14)　172号住居跡(15)
173号住居跡(17)　174号住居跡(19)　175号住居跡(24)　176号住居跡(26)
177号住居跡(28)　178号住居跡(29)　179号住居跡(31)　180号住居跡(32)
181号住居跡(33)　182号住居跡(35)　183号住居跡(37)　184号住居跡(38)
185号住居跡(39)　186号住居跡(40)　187号住居跡(41)　188号住居跡(42)
189号住居跡(43)　190号住居跡(45)　191号住居跡(46)　193号住居跡(48)
194号住居跡(51)　195号住居跡(52)　196号住居跡(54)　197号住居跡(55)
198号住居跡(58)　199号住居跡(59)　200号住居跡(62)　201号住居跡(63)
202号住居跡(64)　203号住居跡(65)　204号住居跡(66)　205号住居跡(67)
206号住居跡(68)　207号住居跡(69)　208号住居跡(71)　209号住居跡(72)
210号住居跡(73)　211号住居跡(74)　212号住居跡(76)　214号住居跡(77)
215号住居跡(79)　216号住居跡(80)　217号住居跡(82)　218号住居跡(84)
219号住居跡(85)　220号住居跡(86)　221号住居跡(87)　222号住居跡(88)
223号住居跡(89)　224号住居跡(91)　225号住居跡(96)　226号住居跡(97)
227号住居跡(98)　228号住居跡(99)　229号住居跡(101)　230号住居跡(103)
231号住居跡(104)　232号住居跡(105)　234号住居跡(106)　235号住居跡(107)
236号住居跡(108)　237号住居跡(110)

第４節　建　物　跡……111

１号建物跡(111)　２号建物跡(112)　３号建物跡(114)　４号建物跡(116)
５号建物跡(118)　６号建物跡(119)　７号建物跡(121)　８号建物跡(122)
９号建物跡(123)　10号建物跡(125)　11号建物跡(126)　12号建物跡(127)
13号建物跡(129)　15号建物跡(131)　16号建物跡(132)　17号建物跡(133)
18号建物跡(135)　19号建物跡(137)　20号建物跡(138)　21号建物跡(140)
22号建物跡(141)　23号建物跡(142)　24号建物跡(143)　25号建物跡(144)
26号建物跡(146)　27号建物跡(148)　28 a･b号建物跡(150)　29号建物跡(153)
30 a･b号建物跡(155)　31号建物跡(158)　32号建物跡(158)　33号建物跡(161)
35号建物跡(162)　36号建物跡(162)　37号建物跡(165)　39号建物跡(166)

第５節　柱　列　跡 ……167
１号柱列跡(167)　２号柱列跡(168)　３号柱列跡(169)　６号柱列跡(169)
第６節　　畑　　跡 ……171
畑跡Ａ群(171)　畑跡Ｂ群(173)　畑跡Ｃ群(176)　畑跡Ｄ群(177)
畑跡Ｅ群(178)　畑跡Ｆ群(179)　畑跡Ｇ群(181)　畑跡Ｈ群(183)
22号畑跡(184)　28号畑跡(185)　50号畑跡(186)　52号畑跡(186)
第７節　方形区画遺構 ……187
１号方形区画遺構(187)　２号方形区画遺構(192)
第８節　　溝　　跡 ……195
１号溝跡(195)　２号溝跡(195)　３号溝跡(196)　４号溝跡(196)
６号溝跡(198)　７号溝跡(199)　８号溝跡(199)　９号溝跡(199)
10号溝跡(201)　11号溝跡(201)　12号溝跡(202)　13ａ･ｂ号溝跡(203)
14号溝跡(203)　15号溝跡(205)　16号溝跡(205)　17号溝跡(207)
18ａ･ｂ号溝跡(208)　19号溝跡(208)　20号溝跡(208)　21号溝跡(209)
22号溝跡(210)　24号溝跡(211)
第９節　祭祀遺構・土器集中地点 ……212
１号祭祀跡(212)　２号祭祀跡(215)　１号土器集中地点(218)
第10節　　土　　坑 ……223
４号土坑(223)　11号土坑(223)　12号土坑(228)　31号土坑(228)
36号土坑(228)　37号土坑(231)　39号土坑(231)　40号土坑(233)
42号土坑(234)　45号土坑(234)　47号土坑(234)　55号土坑(236)
56号土坑(236)　58号土坑(238)　60号土坑(238)　62号土坑(240)
76号土坑(240)　77号土坑(240)　99号土坑(243)　115号土坑(243)
117号土坑(243)　121号土坑(249)　133号土坑(249)　143号土坑(249)
154号土坑(253)　158号土坑(253)　177号土坑(253)　180号土坑(253)
181号土坑(258)　183号土坑(258)　194号土坑(261)
第11節　土器埋設遺構 ……266
１号土器埋設遺構(267)　２号土器埋設遺構(268)
３号土器埋設遺構(269)　４号土器埋設遺構(269)
第12節　焼土遺構 ……274
１号焼土遺構(274)　２号焼土遺構(275)
３号焼土遺構(275)
第13節　遺物包含層 ……276

第14節　遺構間接合遺物 ……284
第15節　遺構外出土遺物 ……285

第3章　総　括
第1節　遺　物 ……292
第2節　遺　構 ……321
第3節　ま と め ……346

挿図・表目次

［挿図］

図278 161号住居跡 …… 1
図279 161号住居跡出土遺物 …… 3
図280 162号住居跡・出土遺物 …… 4
図281 163号住居跡 …… 5
図282 164号住居跡 …… 7
図283 165号住居跡 …… 8
図284 166号住居跡 …… 9
図285 167号住居跡 ……10
図286 168号住居跡 ……11
図287 169号住居跡 ……12
図288 170号住居跡 ……13
図289 171号住居跡・出土遺物 ……14
図290 172号住居跡 ……16
図291 173号住居跡・出土遺物 ……18
図292 174号住居跡 ……21
図293 174号住居跡出土遺物（1） ……22
図294 174号住居跡出土遺物（2） ……23
図295 175号住居跡 ……25
図296 175号住居跡出土遺物 ……26
図297 176号住居跡・出土遺物 ……27
図298 177号住居跡・出土遺物 ……28
図299 178号住居跡 ……30
図300 179号住居跡・出土遺物 ……31
図301 180号住居跡・出土遺物 ……33
図302 181号住居跡・出土遺物 ……34
図303 182号住居跡・出土遺物 ……36
図304 183号住居跡 ……37
図305 184号住居跡 ……38
図306 185号住居跡 ……40
図307 186号住居跡 ……41
図308 187号住居跡・出土遺物 ……42
図309 188号住居跡 ……43
図310 189号住居跡 ……44
図311 190号住居跡・出土遺物 ……45
図312 191号住居跡・出土遺物 ……47
図313 193号住居跡 ……49
図314 193号住居跡出土遺物 ……50
図315 194号住居跡・出土遺物 ……52
図316 195号住居跡・出土遺物 ……53
図317 196号住居跡・出土遺物 ……54
図318 197号住居跡 ……56
図319 197号住居跡出土遺物 ……57
図320 198号住居跡・出土遺物 ……59
図321 199号住居跡・出土遺物 ……61
図322 200号住居跡・出土遺物 ……62
図323 201号住居跡 ……63

図324 202号住居跡・出土遺物 ……64
図325 203号住居跡 ……66
図326 204号住居跡 ……67
図327 205号住居跡 ……68
図328 206号住居跡 ……69
図329 207号住居跡 ……70
図330 208号住居跡・出土遺物 ……71
図331 209号住居跡 ……72
図332 210号住居跡・出土遺物 ……74
図333 211号住居跡 ……75
図334 212号住居跡・出土遺物 ……77
図335 214号住居跡・出土遺物 ……78
図336 215号住居跡・出土遺物 ……79
図337 216号住居跡・出土遺物 ……81
図338 217号住居跡 ……83
図339 218号住居跡 ……84
図340 219号住居跡・出土遺物 ……85
図341 220号住居跡・出土遺物 ……86
図342 221号住居跡・出土遺物 ……88
図343 222号住居跡 ……89
図344 223号住居跡・出土遺物 ……90
図345 224号住居跡 ……92
図346 224号住居跡出土遺物（１） ……94
図347 224号住居跡出土遺物（２） ……95
図348 225号住居跡 ……96
図349 226号住居跡 ……97
図350 227号住居跡 ……98
図351 228号住居跡 …… 100
図352 229号住居跡・出土遺物 …… 102
図353 230号住居跡 …… 103
図354 231号住居跡・出土遺物 …… 104
図355 232号住居跡・出土遺物 …… 106
図356 234号住居跡 …… 107
図357 235号住居跡・出土土器 …… 108
図358 236号住居跡 …… 109
図359 237号住居跡 …… 110
図360 １号建物跡 …… 111
図361 ２号建物跡 …… 113
図362 ３号建物跡 …… 115
図363 ４号建物跡 …… 117
図364 ５号建物跡 …… 119
図365 ６号建物跡 …… 120
図366 ７号建物跡 …… 121
図367 ８号建物跡 …… 123
図368 ９号建物跡 …… 124
図369 10号建物跡 …… 125
図370 11号建物跡 …… 126
図371 12号建物跡 …… 128
図372 13号建物跡 …… 130
図373 15号建物跡 …… 132
図374 16号建物跡 …… 133
図375 17号建物跡 …… 134
図376 18号建物跡 …… 136
図377 19号建物跡 …… 137
図378 20号建物跡・２号柱列跡 …… 139
図379 21号建物跡 …… 140
図380 22号建物跡 …… 141
図381 23号建物跡 …… 143
図382 24号建物跡 …… 144
図383 25号建物跡 …… 145
図384 26号建物跡 …… 147
図385 27号建物跡 …… 149
図386 28ａ号建物跡 …… 151
図387 28ｂ号建物跡 …… 152
図389 29号建物跡 …… 154
図390 30ａ号建物跡 …… 156
図391 30ｂ号建物跡 …… 157
図392 31号建物跡 …… 159
図393 32号建物跡 …… 160
図394 33号建物跡 …… 161

図395 35号建物跡 …… 163
図396 36号建物跡・３号柱列跡 …… 164
図397 37号建物跡 …… 165
図398 39号建物跡 …… 166
図399 建物跡出土遺物 …… 167
図400 １号柱列跡・出土遺物 …… 168
図401 ６号柱列跡 …… 170
図402 畑跡Ａ群 …… 172
図403 畑跡Ｂ群 …… 174
図404 畑跡Ｃ群 …… 176
図405 畑跡Ｄ群 …… 177
図406 畑跡Ｅ群 …… 178
図407 畑跡Ｆ群 …… 180
図408 畑跡Ｇ・Ｈ群 …… 182
図409 22・28・50・52畑跡 …… 185
図410 畑跡出土遺物 …… 186
図411 １号方形区画遺構（１） …… 188
図412 １号方形区画遺構（２） …… 189
図413 １号方形区画遺構（３） …… 190
図414 １号方形区画遺構（４） …… 191
図415 ２号方形区画遺構（１） …… 193
図416 ２号方形区画遺構（２）・出土遺物 … 194
図417 １・３号溝跡 …… 197
図418 ２・４号溝跡 …… 198
図419 ６～９号溝跡 …… 200
図420 10～12号溝跡 …… 202
図421 13ａ・ｂ、14号溝跡 …… 204
図422 15・16・21号溝跡 …… 206
図423 17号溝跡 …… 207
図424 18・19・20号溝跡 …… 209
図425 22号溝跡 …… 210
図426 24号溝跡 …… 211
図427 溝跡出土遺物 …… 212
図428 １号祭祀跡 …… 213
図429 １号祭祀跡出土遺物 …… 214
図430 ２号祭祀跡 …… 216
図431 ２号祭祀跡出土遺物（１） …… 217
図432 ２号祭祀跡出土遺物（２） …… 218
図433 １号土器集中地点 …… 219
図434 １号土器集中地点出土遺物（１） …… 221
図435 １号土器集中地点出土遺物（２） …… 222
図436 土坑（１） …… 227
図437 土坑（２） …… 229
図438 土坑（３） …… 230
図439 土坑（４） …… 232
図440 土坑（５） …… 235
図441 土坑（６） …… 237
図442 土坑（７） …… 239
図443 土坑（８） …… 241
図444 土坑（９） …… 242
図445 土坑(10) …… 244
図446 土坑(11) …… 245
図447 土坑(12) …… 246
図448 土坑(13) …… 247
図449 土坑(14) …… 248
図450 土坑(15) …… 250
図451 土坑(16) …… 251
図452 土坑(17) …… 252
図453 土坑(18) …… 254
図454 土坑(19) …… 255
図455 土坑(20) …… 256
図456 土坑(21) …… 257
図457 土坑(22) …… 259
図458 土坑(23) …… 260
図459 土坑(24) …… 261
図460 土坑出土遺物（１） …… 262
図461 土坑出土遺物（２） …… 263
図462 土坑出土遺物（３） …… 264
図463 土坑出土遺物（４） …… 265
図464 土坑出土遺物（５） …… 266

図465　土器埋設遺構 …… 270
図466　土器埋設遺構出土遺物（１） …… 271
図467　土器埋設遺構出土遺物（２） …… 272
図468　土器埋設遺構出土遺物（３） …… 273
図469　土器埋設遺構出土遺物（４） …… 274
図470　焼土遺構 …… 275
図471　遺物包含層グリッド別
　　土器出土点数 …… 276
図472　遺物包含層断面図 …… 276
図473　遺物包含層出土遺物（１） …… 279
図474　遺物包含層出土遺物（２） …… 280
図475　遺物包含層出土遺物（３） …… 281
図476　遺物包含層出土遺物（４） …… 282
図477　遺物包含層出土遺物（５） …… 283
図478　遺物包含層出土遺物（６） …… 284
図479　遺構間接合遺物出土遺構・
　　グリッド …… 285
図480　遺構間接合遺物 …… 286
図481　遺構外出土遺物（１） …… 288
図482　遺構外出土遺物（２） …… 290
図483　遺構外出土遺物（３） …… 291
図484　出土土器集成　弥生時代終末期（１） 294
図485　出土土器集成　弥生時代終末期（２） 295
図486　三叉（角）構成文の変遷 …… 298
図487　出土土器集成　古墳時代前期（１）… 302
図488　出土土器集成　古墳時代前期（２）… 303
図489　出土土器集成　古墳時代前期（３）… 304
図490　出土土器集成　古墳時代前期（４）… 305
図491　出土土器集成　古墳時代前期（５）… 306
図492　出土土器集成　古墳時代後期（１）… 311
図493　出土土器集成　古墳時代後期（２）… 312
図494　出土土器集成　古墳時代後期（３）… 313
図495　出土土器集成　奈良時代 …… 316
図496　出土土器集成　平安時代（１） …… 318
図497　出土土器集成　平安時代（２） …… 319
図498　出土土器集成　中世 …… 321
図499　弥生時代終末期　遺構配置図 …… 323
図500　古墳時代前期　遺構配置図 …… 327
図501　古墳時代後期　遺構配置図 …… 332
図502　奈良時代　遺構配置図 …… 336
図503　平安時代　遺構配置図 …… 339
図504　中世　遺構配置図 …… 342
図505　中世　Ⅲ区掘立柱建物跡　変遷図 … 344

［表］

表２　土坑一覧（１）…… 224
表３　土坑一覧（２）…… 225
表４　土坑一覧（３）…… 226
表５　平底甕と台付甕の比率…… 307

第３節　住　居　跡(161～237住居跡)

161号住居跡　ＳＩ161

遺　　構（図278、写真189・270）

本住居跡は、Ⅴ区、調査区南部のＮ・Ｏ－23グリッドで検出した。検出面はＬⅣで、暗褐色土が方形に広がる範囲として検出された。標高236.5ｍの平坦な場所である。他の遺構との重複はない。周囲を、145・154・162・184・187号の各住居跡に囲まれている。

平面形は四隅がやや丸みをもつ方形で、規模は、東西3.4ｍ、南北3.7ｍである。西辺は北から19度西に傾く。壁は残りがもっともよい場所で25㎝の高さが遺存し、四方とも70度ほどの比較的急な角度で立ち上がる。床面は、全面に貼床が施されている。上面は水平かつ平坦となっており、貼床の厚さは最大10㎝である。掘形の底面には緩やかな凹凸がみられた。

堆積土は４層からなる。ℓ１は暗褐色の砂質土、ℓ２は黒褐色の砂質土、ℓ３は壁の崩落によって壁際に堆積したにぶい黄褐色砂質土である。いずれも自然堆積土とみられる。ℓ４は暗褐色砂質土を斑状に含む褐色の砂質土で、貼床の構築土である。

住居内の施設は、地床炉１箇所を検出し、柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

地床炉は床面の北東部に位置し、北壁から55㎝、東壁から71㎝離れている。平面形は東西方向に長い楕円形で、東西65㎝、南北55㎝の規模で床面が焼土化している。厚さは床面から４㎝の範囲まで焼土化していることを断ち割りによって確認した。

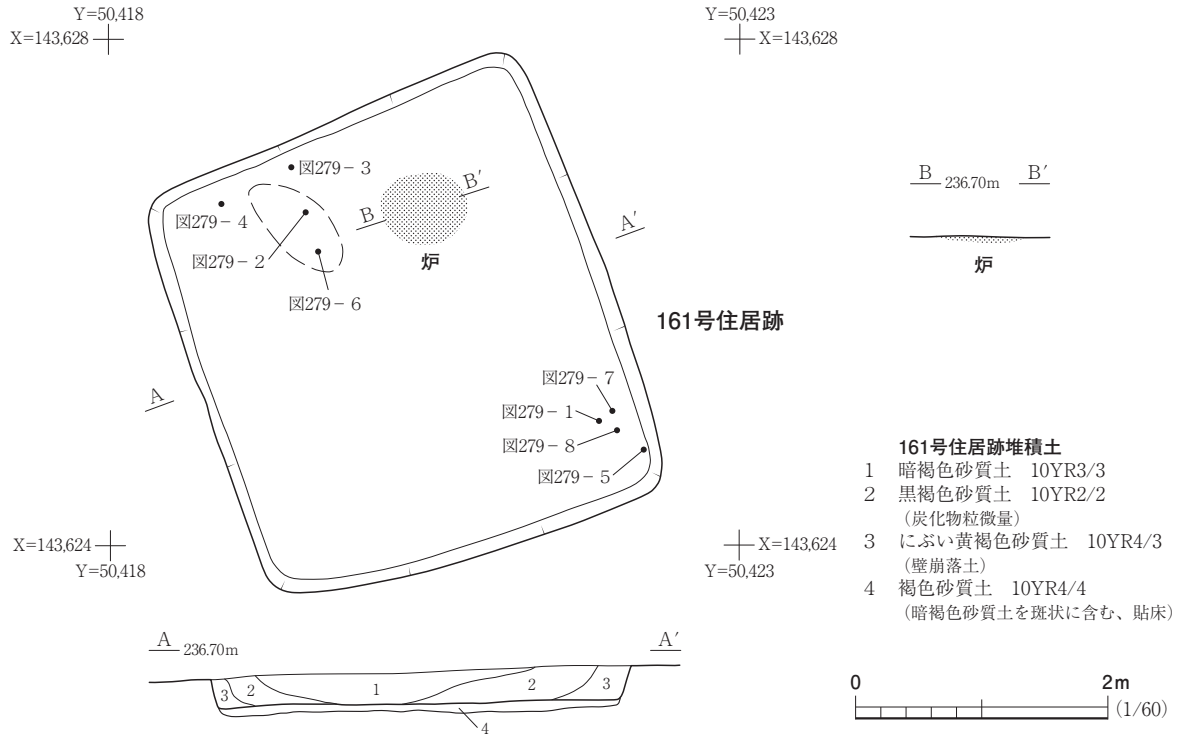


図278　161号住居跡

遺物は、北西隅・南東隅の２箇所の床面から８点の土器がまとまって出土した。北西隅付近から出土したのは図279－２～４・６で、４はほぼ完形、６は90×45㎝の範囲につぶれた状態で出土した。南東隅付近から出土したのは図279－１・５・７・８で、８以外は完形ではなくいずれも土器の一部のみである。この他、南西隅付近と北東隅付近からも土器の破片が出土した。住居の廃絶時に遺棄したものと考えられる。

遺　　物（図279、写真411・412）

本住居跡からは上述の土器を含む182点の土師器が出土した。このうち上述の８点を図示した。

図279－１は高杯である。脚部を欠損する杯部のみが出土した。内外面にハケメが施される。杯部の底面、脚部との接合部には、成形時に杯底部内面から脚頂部に挿入した粘土が下方に突出する。杯部内面の底には、直径約４㎝の円形の剥離がある。

２は脚付きの鉢もしくは壺である。脚部は「八」字に広がり、脚頂部には短い中実部分がある。体部の大半と口縁部を欠損する。体部外面にナデ、脚部外面にケズリ、体部内面にヘラナデ、脚部内面にナデが施される。

３は壺である。ややつぶれた球形の体部の底面にわずかな平坦面を作って平底としている。体部と底部の境は判然としない。口縁部は上半を欠損する。体下部には径３㎜の小孔が穿たれている。外面から内面に向かって焼成前に穿孔されていることが、内面にこびりついたまま焼成された粘土屑の存在から分かる。外面と口縁部内面に赤彩が施される。

４は甕である。口縁部から体部にかけての一部を欠損する。中央部を浅くくぼませた平底で、球形でなで肩の体部、「く」字に外反する口縁部をもつ。口縁部内外面にヨコナデののちハケメが、体部外面にハケメが施される。体部内面には、中位以下にヘラナデ、上部にケズリが施される。体部下半は被熱により弱く赤変し、体部外面のごく一部に炭化物が付着する。

５は甕である。「く」字に外傾する口縁部となで肩の体部上半が遺存する。調整は、口縁部の内外面にヨコナデ、体部の外面にナデ、同内面にヘラナデが施される。外面のごく一部、口縁部から体部にかけてには、ごく薄い黒褐色の付着物がみられる。ススやコゲなどの炭化物とは異なるもので、薄い墨が塗られたようにも見えるが、それとも異なるもので、付着物が何であるかは判然としない。

６は甕である。平底の円板形の底部、やや胴長で最大径を中ほどにもつなで肩の体部、「く」字に屈曲し、きわめて緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁部内外面にヨコナデ、体部外面にナデを施す。体部内面には、最大径の付近に横方向のケズリが施されている他はナデである。

７は台付甕で、緩やかに内湾する台部のみが出土した。最上部外面、体部との境には、台部に付加した粘土紐の積み上げ痕を残す。外面に縦方向のケズリもしくはナデ、内面にヘラナデを施す。

８は有孔鉢である。小さな平底の中央に径約1.5㎝の焼成前穿孔を有し、椀形で無頸の体部をもつ。口縁端部は平らではなく不規則に波打つ。体部には内外面ともナデ調整が施され、底部の外面には、平底の角を削り取ったようなケズリが施されている。

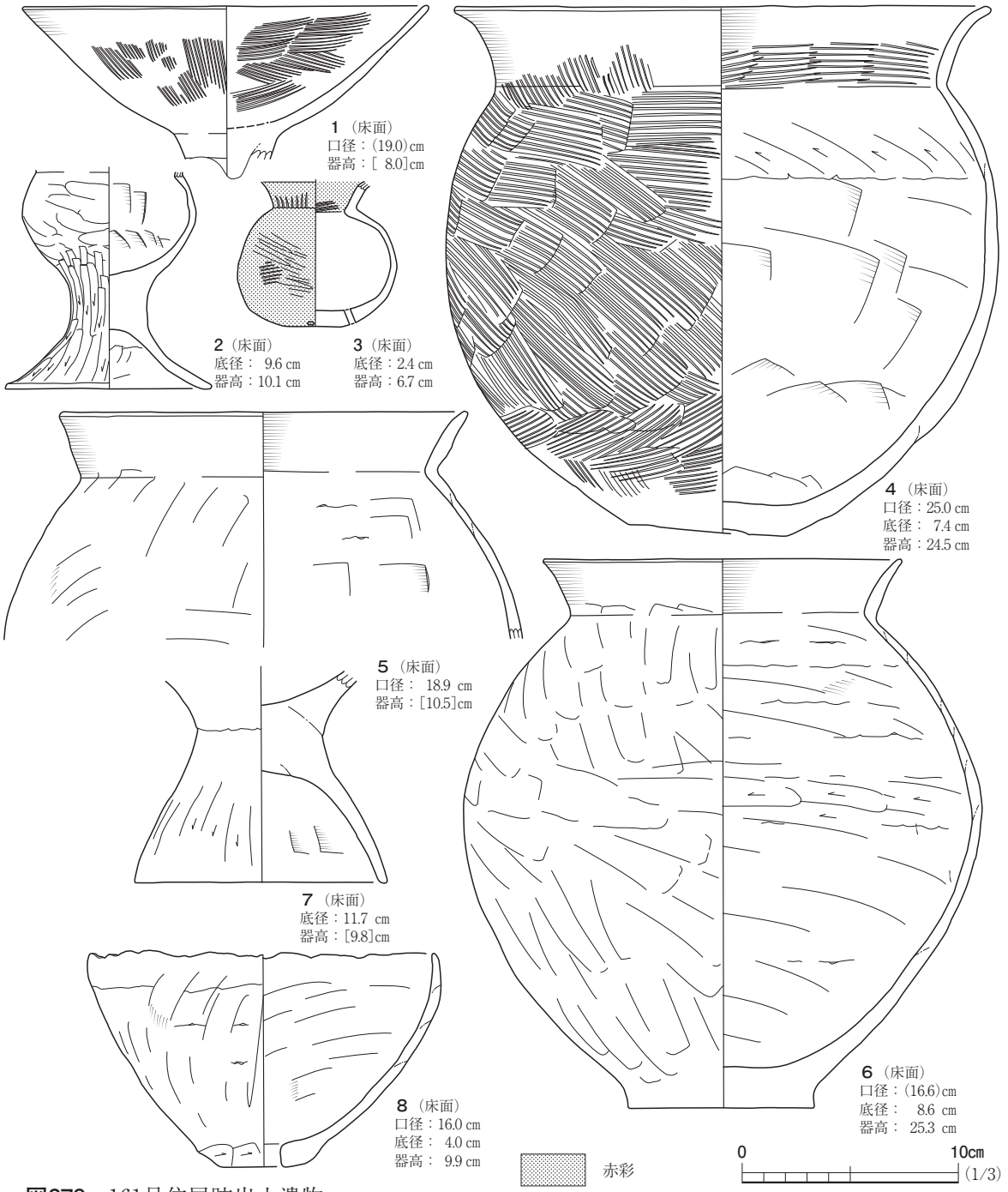


図279　161号住居跡出土遺物

ま と め

本遺構は、東西3.4ｍ、南北3.7ｍの小型の住居跡である。床は全面に貼床が施されていた。床面中央から北東側に寄った位置に、地床炉が検出された。柱穴や貯蔵穴といった住居内の施設は検出されなかった。遺物は土師器を８点図示した。炉の脇と、南東隅の床面からまとまって出土しており、住居廃絶時に遺棄されたとみられる。床面から出土した土師器の特徴から、古墳時代前期に位置づけられる。（青　山）

162号住居跡　ＳＩ162

遺　　構（図280、写真190）

Ⅴ区南部のＯ－23・24グリッドに位置し、標高236.5ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣである。184号住居跡と重複しており、本遺構のほうが新しい。

平面形はやや不整形な隅丸長方形で、規模は6.0×4.9ｍである。方位は北東壁で北から38度西に傾く。周壁は、遺存状況が良い部分で20㎝であり、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼床が施される部分と、基盤層であるＬⅣをそのまま床面としている部分が認められた。

住居内堆積土は６層に分層される。ℓ１～５は砂層である。なかでも住居南側に堆積するℓ４・

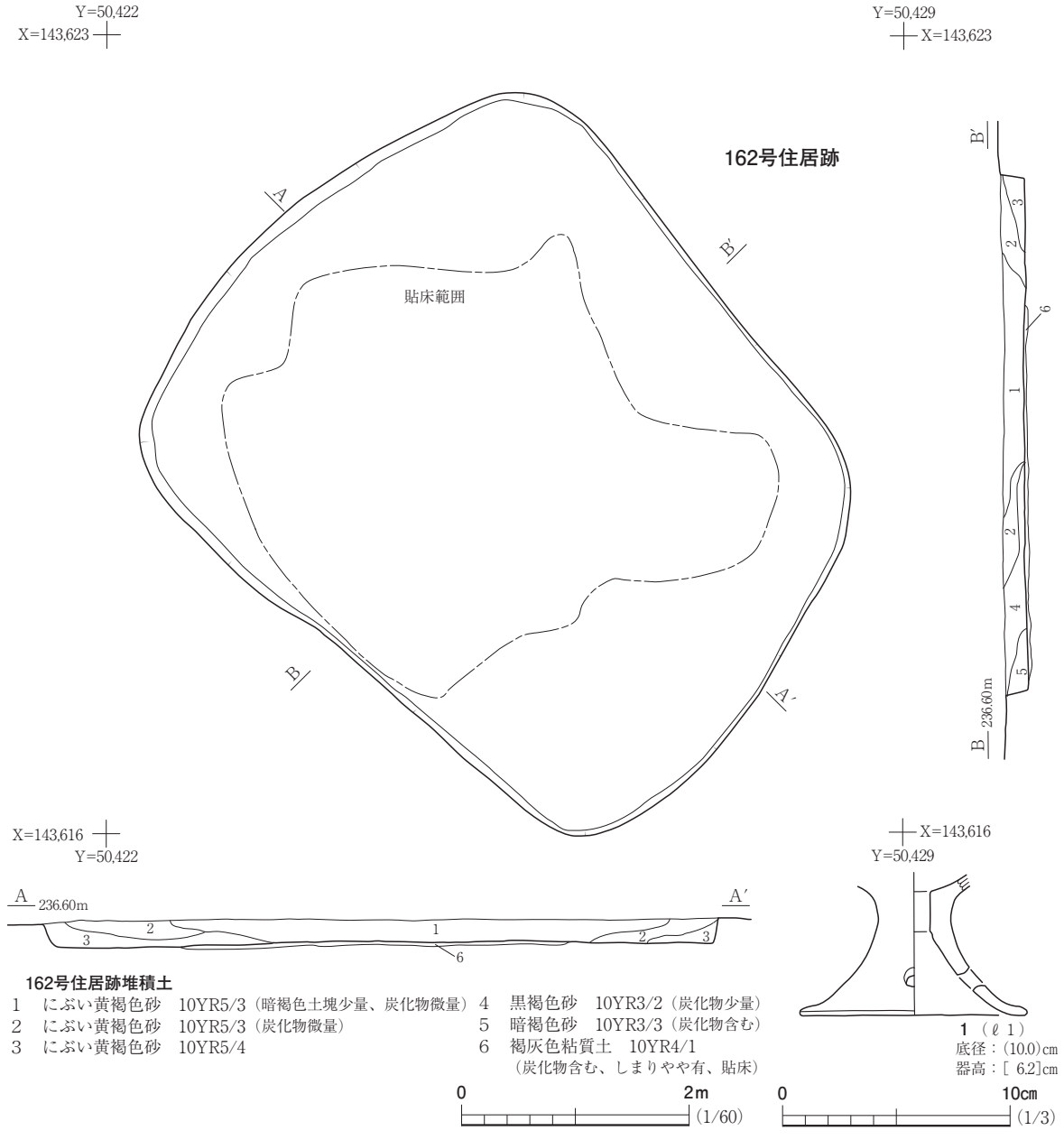


図280　162号住居跡・出土遺物

５は他の層に比べると炭が多く含まれている。いずれの層も堆積状況から自然堆積と思われる。ℓ６は粘質の土層で水平に堆積し、部分的に踏み締まりが認められたことから、貼床と判断した。

住居内の施設は明確に確認できなかった。南壁付近の床面において、周辺より炭化物が多く含まれる範囲を検出したが、焼土化した痕跡や掘形などは確認できなかったため詳細は不明である。

遺物は壁際の堆積土から多く出土しており、竪穴の埋没時に周辺から流入したものと思われる。

遺　　物（図280）

遺物は土師器が196点出土した。図示できたのは図280－１の器台の破片である。脚部は「八」字状ぎみに広がる。脚部中央孔は貫通しとなり、中位にも円窓が穿たれている。内外面には赤色顔料の痕跡が部分的に認められたが、受け部内面には認められず、赤彩されたかどうかは不明である。

ま と め

本遺構は、6.0×4.9ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。床面には粘質土で貼床が施されていた。しかし柱穴や地床炉といった施設や、遺構に伴う遺物は確認されなかった。検出面や堆積土の遺物から古墳時代前期に機能した遺構と考えられる。（神　林）

163号住居跡　ＳＩ163

遺　　構（図281、写真191）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＮ－19・20グリッドに位置している。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は認められない。

堆積土は１層である。ＬⅢｂ粒とＬⅣｂを多く含む灰黄褐色の砂質土である。堆積過程は層厚が

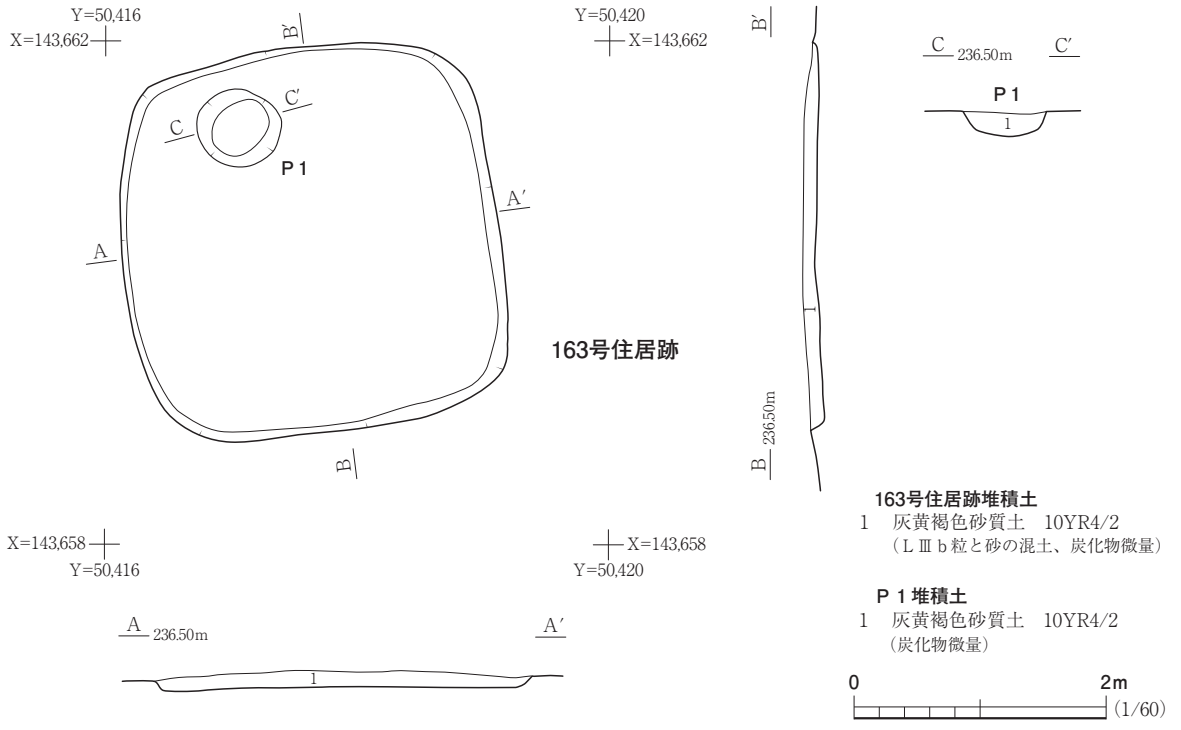


図281　163号住居跡

薄いため判然としない。炭化物が含まれているが、その量は微量であり、本遺構が掘り込まれるＬⅣを主体としている層のため、自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は3.0×3.0ｍである。周壁は、残りの良い南壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で12㎝である。方位は、東壁を基準とするなら５度西に傾く。床は、基盤層であるＬⅣｂをそのまま利用して平坦となっている。しかし踏み締まりは弱く、基盤層との差異もあまりないことから使用頻度の低い住居跡であったことが伺える。

住居内の施設は、ピット１基を検出した。Ｐ１は、北壁側中央からやや西に寄った、壁際に位置する。機能は貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面はすり鉢状を呈する。規模は、長軸70㎝、短軸65㎝、深さ15㎝である。堆積土は炭化物を微量含む灰黄褐色砂質土である。住居内堆積土と同じ土であることから、住居廃絶時には開口していたことが伺える。

遺物は、土師器が３点出土している。いずれもℓ１から出土しており、周囲からの流れ込みと思われる。出土した土師器は、小片のため図示できなかったが、いずれも甕の胴部片で、器面にはハケもしくはナデの痕跡がみられる。いずれも古墳時代前期の所産と考えられる。

ま と め

本遺構は、3.0ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。所属時期は、判断材料が乏しいが、検出面や出土遺物などから、古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

164号住居跡　ＳＩ164

遺　　構（図282、写真192）

本遺構は、Ｖ区南部のＭ・Ｎ－19グリッドに位置しており、標高236.4ｍ付近の東側から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は、３号建物跡、30号畑跡で本遺構が古い。30号畑跡の検出中に焼土の集積を確認したため、周辺を精査したところ6.0ｍほどの半月形に広がる遺構の範囲と確認されたことから、住居跡として調査を行った。

堆積土は炭化物を含む、にぶい黄褐色砂質土の単層である。遺構の遺存状態が非常に悪く層厚が薄いことから堆積過程は明らかにできなかった。

平面形は、西側を失っているが、隅丸長方形と考えている。規模は遺存長6.0ｍである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で13㎝である。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して西に20度傾く。床面はＬⅣに構築しており、水平かつ平坦であるが、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央よりやや北側に１箇所確認した。平面形は楕円形である。規模は長軸70㎝、短軸60㎝ほどで、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは１㎝と薄いことから、使用頻度は低いと思われる。

ピットは東壁の南東側から１基検出した。規模などから貯蔵穴と考えている。平面形は不整な隅丸方形で、底面は平坦に掘り込まれていた。規模は長軸125㎝、短軸105㎝、深さ22㎝である。堆

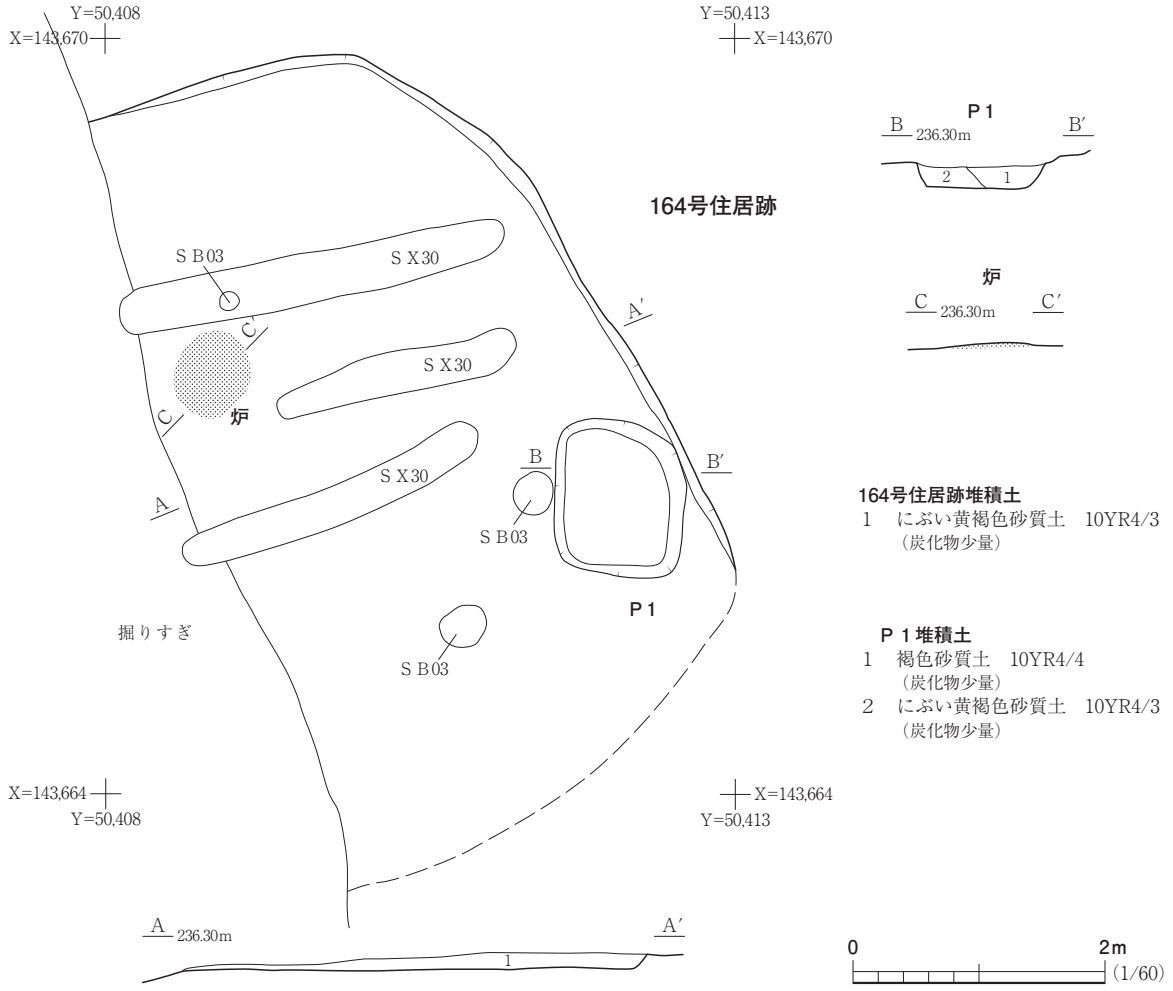


図282　164号住居跡

積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物を含む褐色砂質土である。ℓ２は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。いずれも自然堆積土である。遺構内からは遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は、6.0ｍほどの隅丸長方形の竪穴住居跡である。床面中央からは地床炉１箇所と貯蔵穴が検出された。遺物は出土していない。遺構の所属時期は、判断材料が乏しいが、遺構の検出面や周辺の遺構との関係から古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

165号住居跡　ＳＩ165

遺　　構（図283、写真193）

本遺構は、Ｖ区中央部のＮ－18・19グリッドに位置しており、標高236.1ｍ付近の東側から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構はない。164号住居跡の北側を検出中に方形に広がる遺構の範囲を確認したため、住居跡として調査を行った。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は褐色の砂層である。ℓ２は炭化物を微量に含む暗褐色砂質土で、周辺から流れ込むように堆積している。いずれも自然堆積土である。

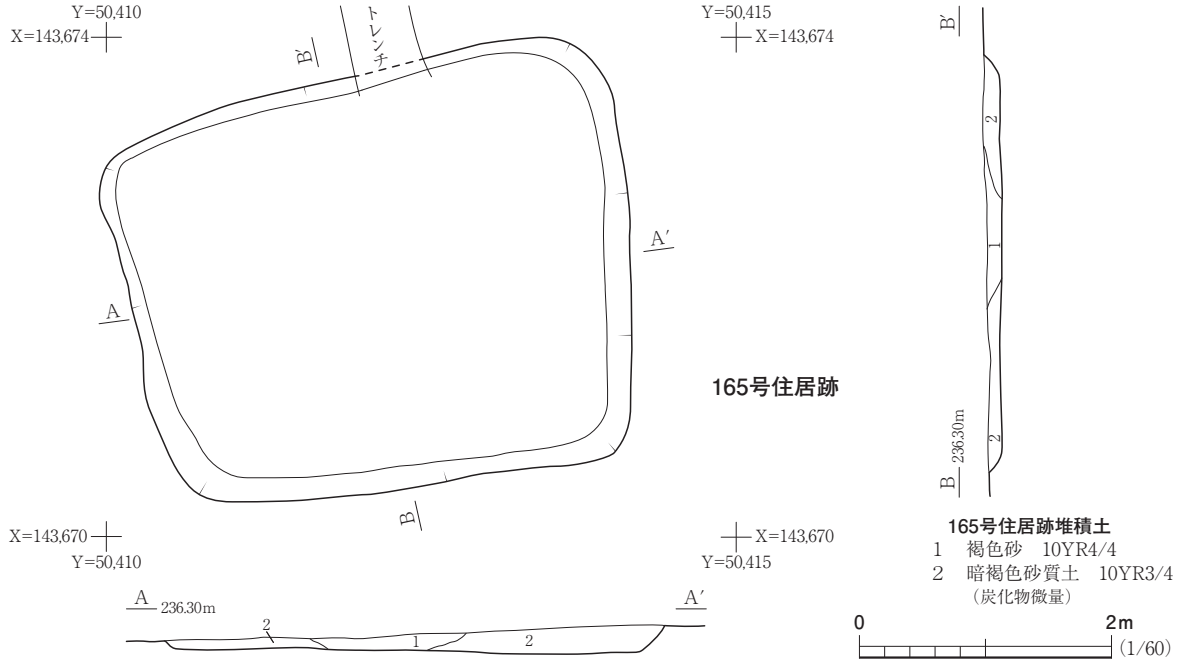


図283　165号住居跡

平面形は、隅丸長方形である。規模は3.9×3.5ｍである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で25㎝である。方位は、西壁を基準とするなら北に対して西に５度傾く。床面はＬⅣに構築しており、踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、一切確認されなかった。遺物はほとんど認められず、土師器が１点出土した。小片のため図示していない。古墳時代前期の所産である。

ま と め

本遺構は、3.9×3.5ｍほどの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出されなかった。遺構の所属時期は、情報が少なく判断材料に乏しいが、検出面や周辺の遺構との関係から古墳時代前期頃に機能したと考えられる。（中　野）

166号住居跡　ＳＩ166

遺　　構（図284、写真194）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＮ－18グリッドに位置している。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。撹乱の壁面を土層観察用に掘削していたところ、断面に周壁の立ち上がりと、周辺から楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。東側の大部分を撹乱で壊されており、遺存状態は非常に悪い。重複する遺構はない。

堆積土は炭化物を含む暗褐色砂質土の単層である。堆積過程は自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、残りが悪いが、隅丸方形か長方形と考えている。規模は、遺存長が3.8ｍである。周壁は残りの良い北壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で20㎝である。方位は西壁を基準とするなら30度西に傾く。床面はＬⅣｂに作られ、平坦で踏み締まりは弱い。

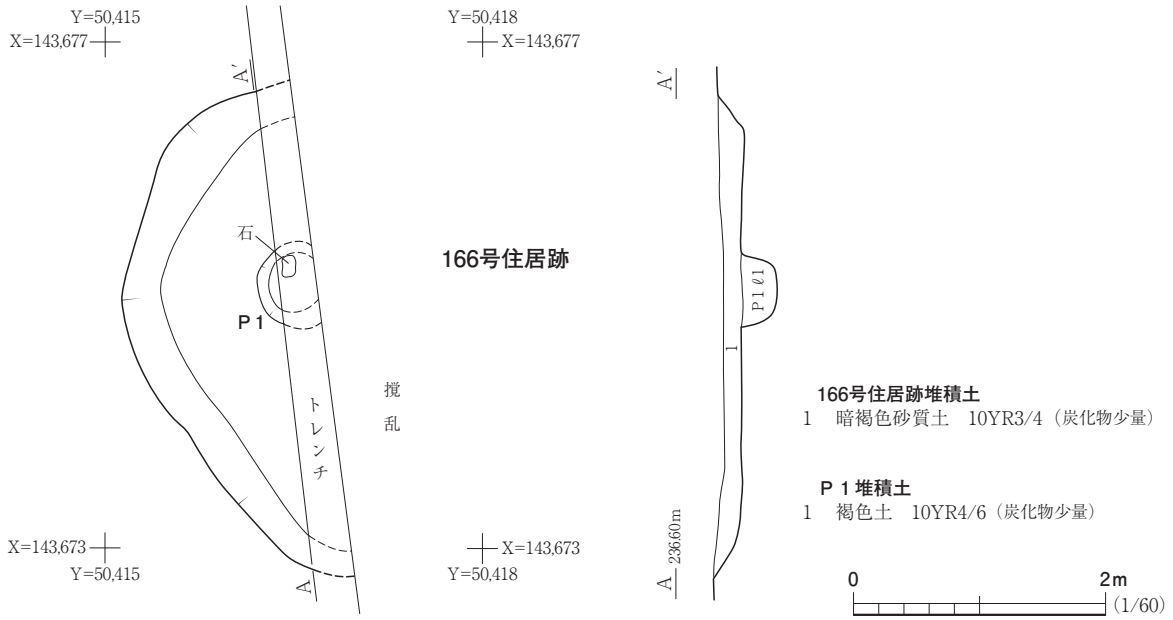


図284　166号住居跡

住居内の施設は、ピット１基を検出した。Ｐ１は床面中央に位置する。機能は貯蔵穴と考えている。平面形は東側を失っているが円形と考えられ、底面はすり鉢状を呈する。規模は直径70㎝、深さ30㎝である。堆積土は炭化物を少量含む褐色土で、15㎝ほどの焼礫が１点含まれていた。

遺物は弥生土器が１点出土している。地文として縄文を施した胴部の細片である。

ま と め

本遺構は、東側の大半が攪乱によって破壊されており、詳細は不明であるが、隅丸方形か長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。所属時期は、判断材料が乏しいが、検出面や出土遺物などから、弥生時代終末期から古墳時代前期頃の時間幅のなかで考えている。　（中　野）

167号住居跡　ＳＩ167

遺　　構（図285、写真195）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＭ－16・17グリッドに位置している。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。30号畑跡を検出していた際に、周辺から楕円形の範囲を確認したことから住居跡として調査した。東側の半分が削平されており、遺存状態は非常に悪い。重複する遺構は、171号住居跡と30号畑跡である。本遺構が30号畑跡より古く、171号住居跡より新しい。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、残りが悪いが北西側と南西隅の状態から、隅丸方形か長方形と考えている。規模は、遺存長が5.9ｍである。周壁は、残りの良い北壁側では70度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、南壁で７㎝である。方位は、西壁を基準とするなら北に対し15度西に傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣｂに作られ、平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉を床面の中央で１箇所検出した。平面形は円形である。規模は直径

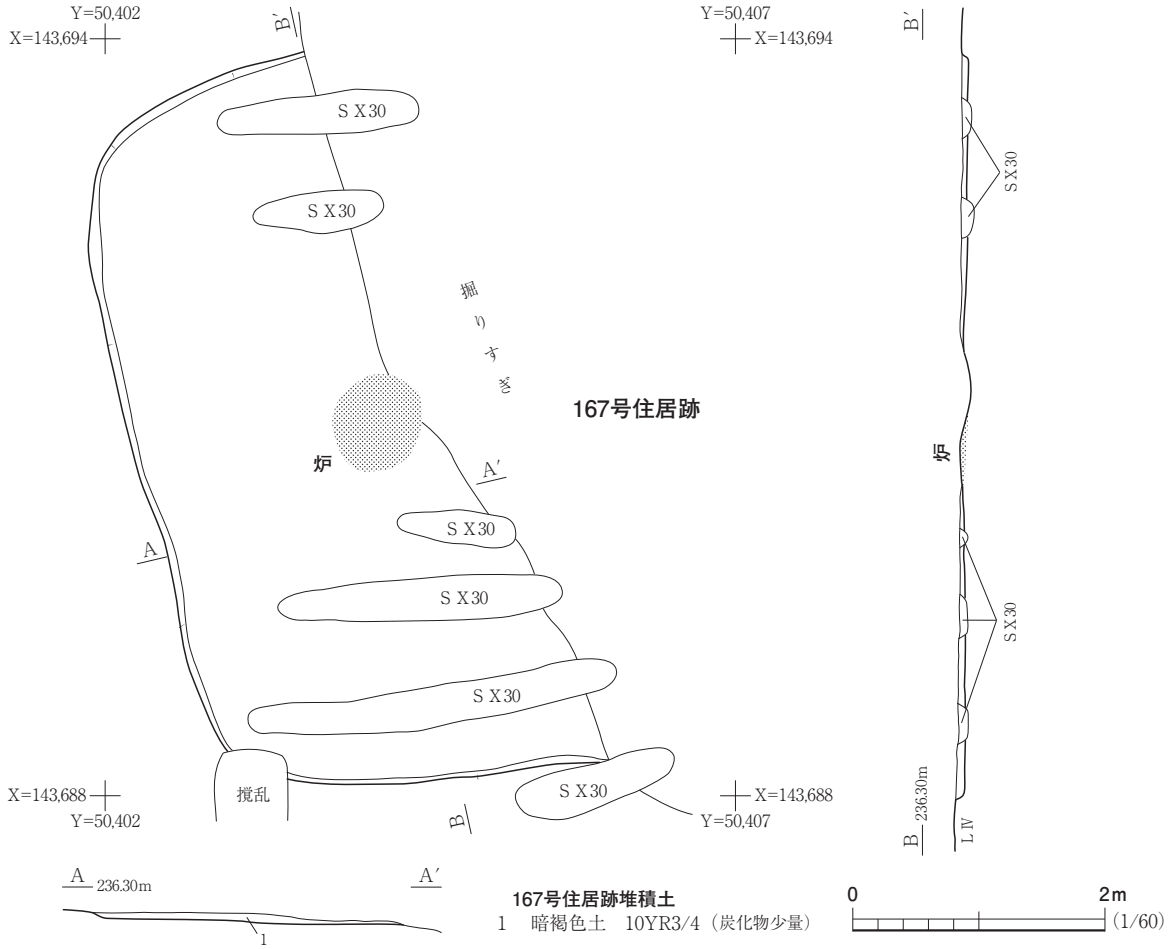


図285　167号住居跡

75㎝ほどで、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で１㎝であり、床面からわずかに盛り上がっている。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、隅丸方形か長方形の竪穴住居跡である。地床炉が検出された。所属時期は、判断材料が乏しいが、検出面から弥生時代終末期から古墳時代前期の時間幅の中で考えている。　（中　野）

168号住居跡　ＳＩ168

遺　　構（図286、写真196）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＭ－16グリッドに位置している。標高235.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。167号住居跡の北側を検出していた際に、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、170号住居跡で、本遺構が新しい。

堆積土は、３層に区分した。ℓ１はＬⅣ粒を多く含み、炭化物を微量含むにぶい黄褐色砂質土である。ℓ２は褐色砂質土で、ℓ３はにぶい黄褐色砂質土である。いずれの層も自然堆積土である。

遺構の平面形は、隅丸長方形である。規模は、4.2×3.7ｍである。周壁は、残りの良い北西壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北西壁で35㎝である。方位は、北西壁を基準とす

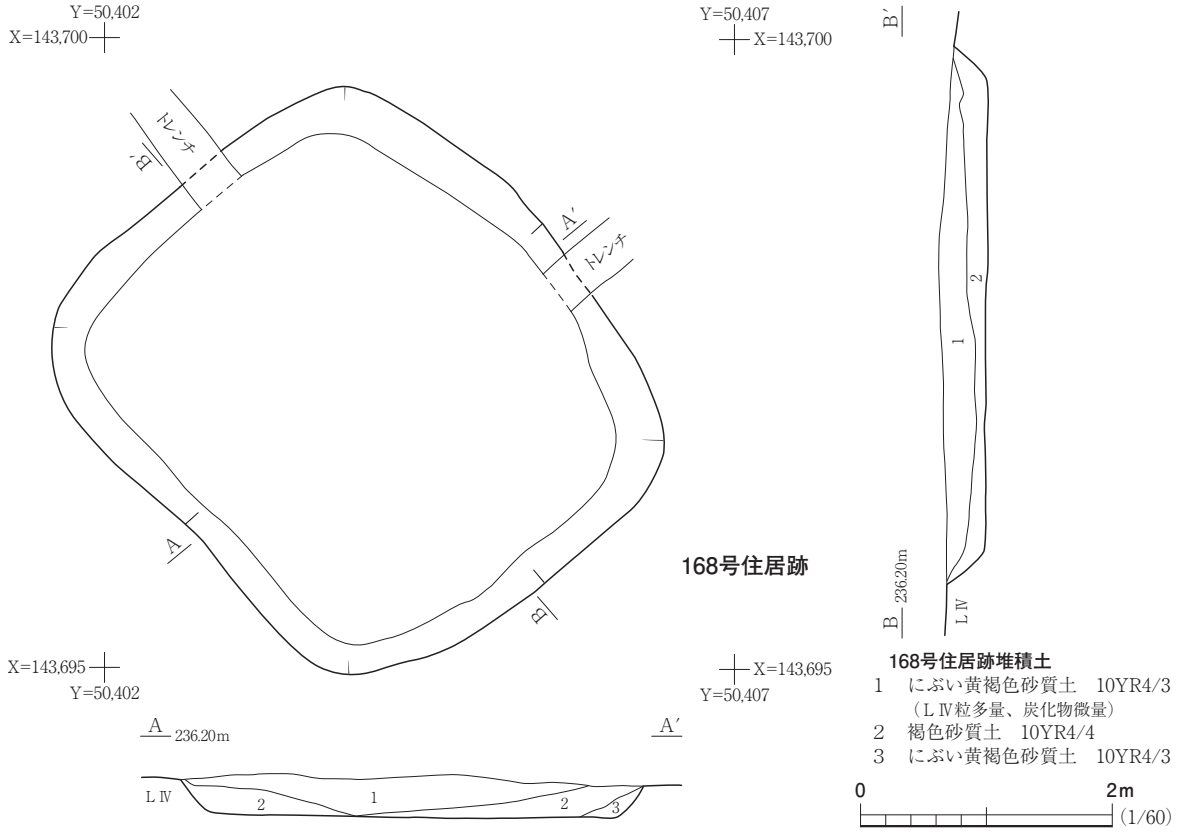


図286　168号住居跡

るなら40度西に傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣｂに作られ、平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設は検出できなかった。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、4.2×3.7ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は確認できなかった。所属時期は、遺物も出土していないことから判断材料が乏しいが、検出面などから弥生時代終末期から古墳時代前期頃の時間幅の中にあると考えている。　（中　野）

169号住居跡　ＳＩ169

遺　　構（図287、写真197）

本遺構は、Ⅱ区北部のＮ－17・18グリッドに位置している。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は、30号畑跡で本遺構が古い。166号住居跡の北側を検出している際に、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査した。東側を撹乱によって壊されており、周壁もほとんど残っておらず、遺存状態は良くない。

堆積土は、ＬⅣ粒を多量に含む暗褐色土である。堆積過程は自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、隅丸方形か長方形と考えている。規模は、遺存長が6.1ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で12㎝である。方位は、西壁を基準とするなら25度西に傾く。床面は、ＬⅣに作られている。おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

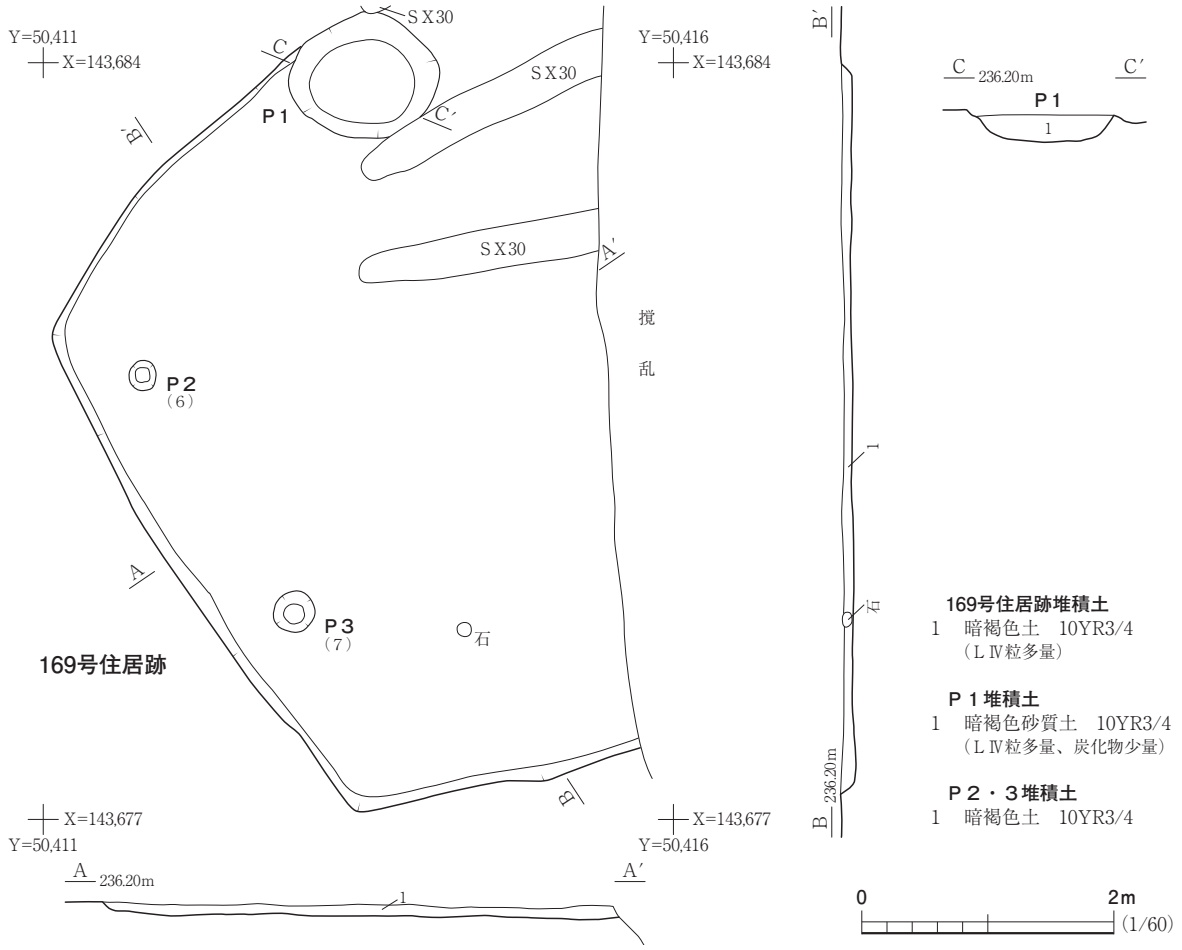


図287　169号住居跡

住居内の施設は、ピットを３基検出した。Ｐ１は、北壁側の中央に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。平面形は不整な楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、長軸120cm、短軸100cm、深さ22cmである。堆積土は、ＬⅣ粒を多量に含み炭化物を少量含む暗褐色砂質土である。Ｐ２・３は、西壁側の北側と南側に位置する。平面形は円形で、規模は、Ｐ２が直径23cm、深さ６cm、Ｐ３が直径35cm、深さ７cmである。Ｐ２・３の堆積土は暗褐色土である。ピットの機能は不明である。遺物は出土していないが、床面から焼礫が１点出土した。

ま と め

本遺構は、遺存長が6.1ｍの隅丸方形ないし長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴とピットが検出された。所属時期は、遺物もなく判断材料が乏しいが、検出面や周辺遺構などから弥生時代終末期から古墳時代前期と考えられる。（中　野）

170号住居跡　ＳＩ170

遺　　構（図288、写真198・267）

本遺構は、Ⅱ区北部のＭ－16グリッドに位置している。標高235.7ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。168号住居跡を調査していた際に、方形に広がる遺構の範囲を確認したこと

から、住居跡として調査した。重複する遺構は、167号住居跡と168号住居跡である。本遺構が、168号住居跡より古い。167号住居跡とは、位置的に重複するが、直接的な堆積土の切り合いがないため、新旧関係は明らかにできなかった。

堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は層厚が薄く不明である

遺構の平面形は、隅丸長方形である。規模は、4.1×3.7ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では70度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で15㎝である。方位は、西壁を基準とするなら北に対して20度西に傾く。床面は、ＬⅣｂに作られ平坦かつ水平である。微細な炭化物粒や焼土粒が散在し、全体的に硬く踏み締まっていた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央から１箇所検出した。平面形は円形である。規模は直径58㎝ほどで、焼け方は弱いが暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは１㎝である。炉の使用面上には、26×16×７㎝ほどの不整な台形状の礫と10㎝ほどの円礫が出土した。大きいほうの石は上面が平坦で被熱していた。炉の使用時も据えられており、石の上面が炉床となっていた可能性も考えられる。

ピットは１基検出した。Ｐ１は、東壁側の中央に位置する。床面の位置などから貯蔵穴と考えている。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径85㎝、深さ23㎝である。堆積土は、炭化物を少量含むにぶい黄褐色土である。

遺物は図示していないが、弥生土器の小片が２点出土している。

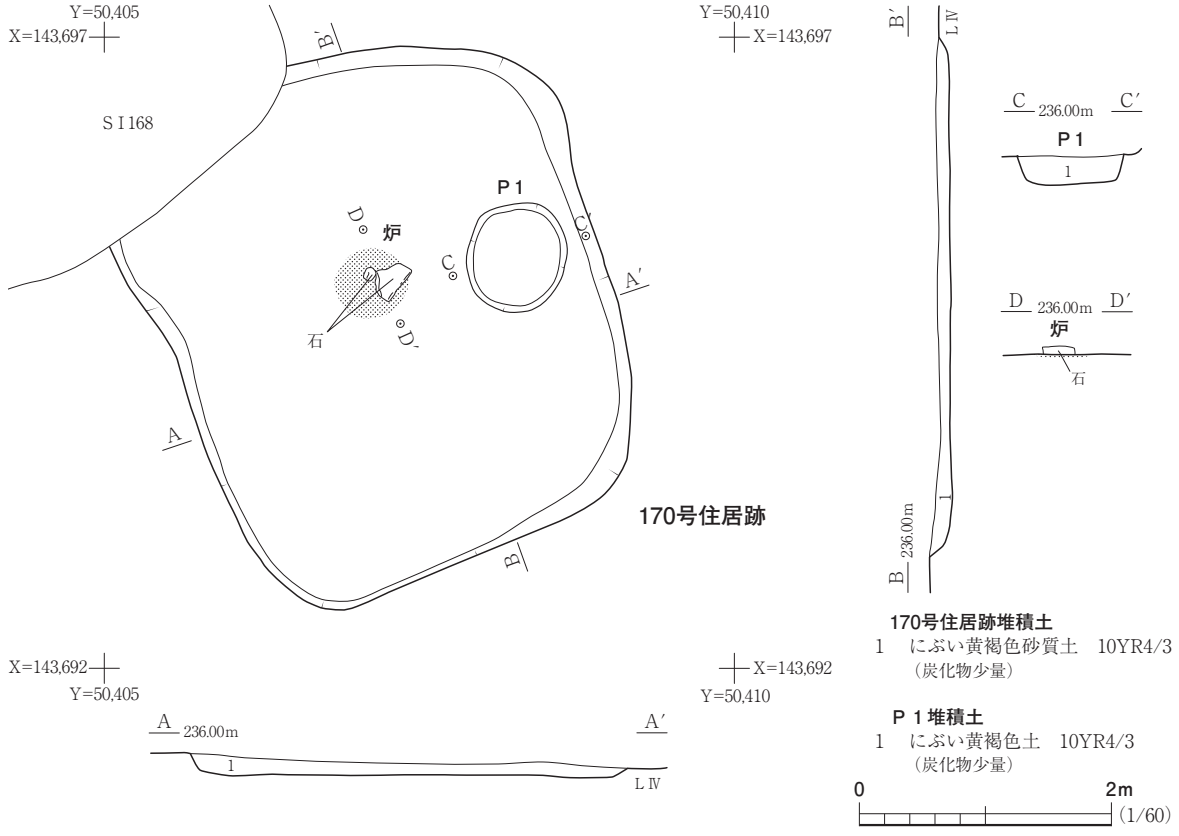


図288　170号住居跡

ま と め

本遺構は、4.1×3.7ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴が検出された。地床炉には上面が平坦な石が設置されていた。所属時期は、他遺構との重複関係や検出面などから弥生時代終末期から古墳時代前期の時間幅の中で考えている。　（中　野）

171号住居跡　ＳＩ171

遺　　構（図289、写真199）

本遺構は、Ⅱ区北部のＬ・Ｍ－16・17グリッドに位置している。標高235.9ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は、167号住居跡、30号畑跡で、いずれの遺構よりも古い。土層観察用のトレンチの精査時に、周壁の立ち上がりと暗褐色土が広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査した。

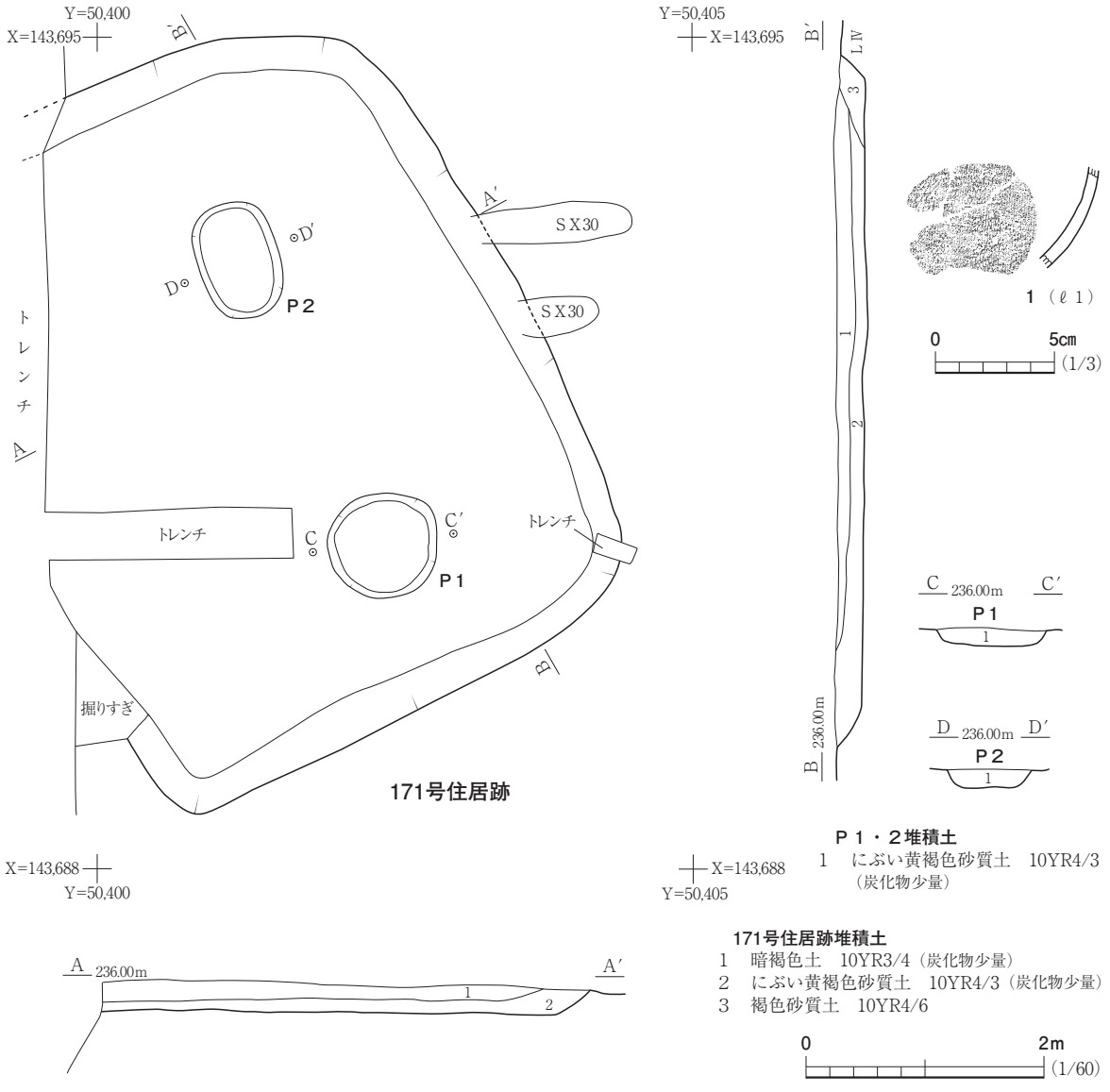


図289　171号住居跡・出土遺物

堆積土は３層に区分した。ℓ１は炭化物を含む暗褐色土である。ℓ２は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。ℓ３は褐色砂質土である。堆積過程はいずれも自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、西側の一部を失っているが、おおむね隅丸長方形である。規模は、5.9×4.6ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で23㎝である。方位は東壁を基準とするなら、北に対して西に25度傾く。床面は、ＬⅣをそのまま利用しており貼床などは認められなかった。しかし微細な炭化物が表面に付着しており、ＬⅣとの差は明確であった。また、硬化しており、踏み締まりによるものと考えている。

住居内の施設はピットを２基検出した。いずれも床面の位置などから貯蔵穴と考えている。Ｐ１は、南壁側中央よりやや東に位置する。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径95㎝、深さ12㎝である。Ｐ２は北壁側の中央からやや南東に寄って位置する。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は98×78㎝、深さ15㎝である。Ｐ１・２の堆積土は炭化物を少量含むにぶい黄褐色土である。床面を覆う住居内堆積土ℓ２に近似していることから、自然堆積土と考えている。遺物は、ℓ１から弥生土器の小片が少量出土している。

遺　　物（図289）

遺物は弥生土器が４点出土しているが、いずれも小片で摩耗しており、図示できたのは1点のみである。図289－１は地文のみで、器種は不明だが胴部片とみられる。

ま と め

本遺構は、5.9×4.6ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。所属時期は、検出面や周辺遺構との重複関係などから弥生時代終末期頃と考えている。（中　野）

172号住居跡　ＳＩ172

遺　　構（図290、写真200）

本遺構は、Ⅳ区西部のＥ・Ｆ－12・13グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。平成27年度調査で79号住居跡を調査した際に、南東側に不整形な遺構の範囲を確認していた。平成29年度調査において、Ⅳ区の追加調査を行った際に再検出し、住居跡として調査した。重複する遺構は、79・177・178・180号住居跡である。本遺構が、79号住居跡より古く、それ以外の遺構より新しい。

堆積土は、炭化物塊を含むにぶい黄褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、不整な隅丸台形である。規模は、東壁側の南北長が7.6ｍ、西壁側の南北長が5.7ｍ、東西長が最大で5.8ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で22㎝である。方位は東壁を基準とすると北に対して30度西に傾く。床面はＬⅣｂを利用し平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設は、ピットを10基検出した。検出位置は、Ｐ１が南西隅に、Ｐ２が南東隅に位置する。Ｐ１・２は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。いずれも貯蔵穴と考えている。規模

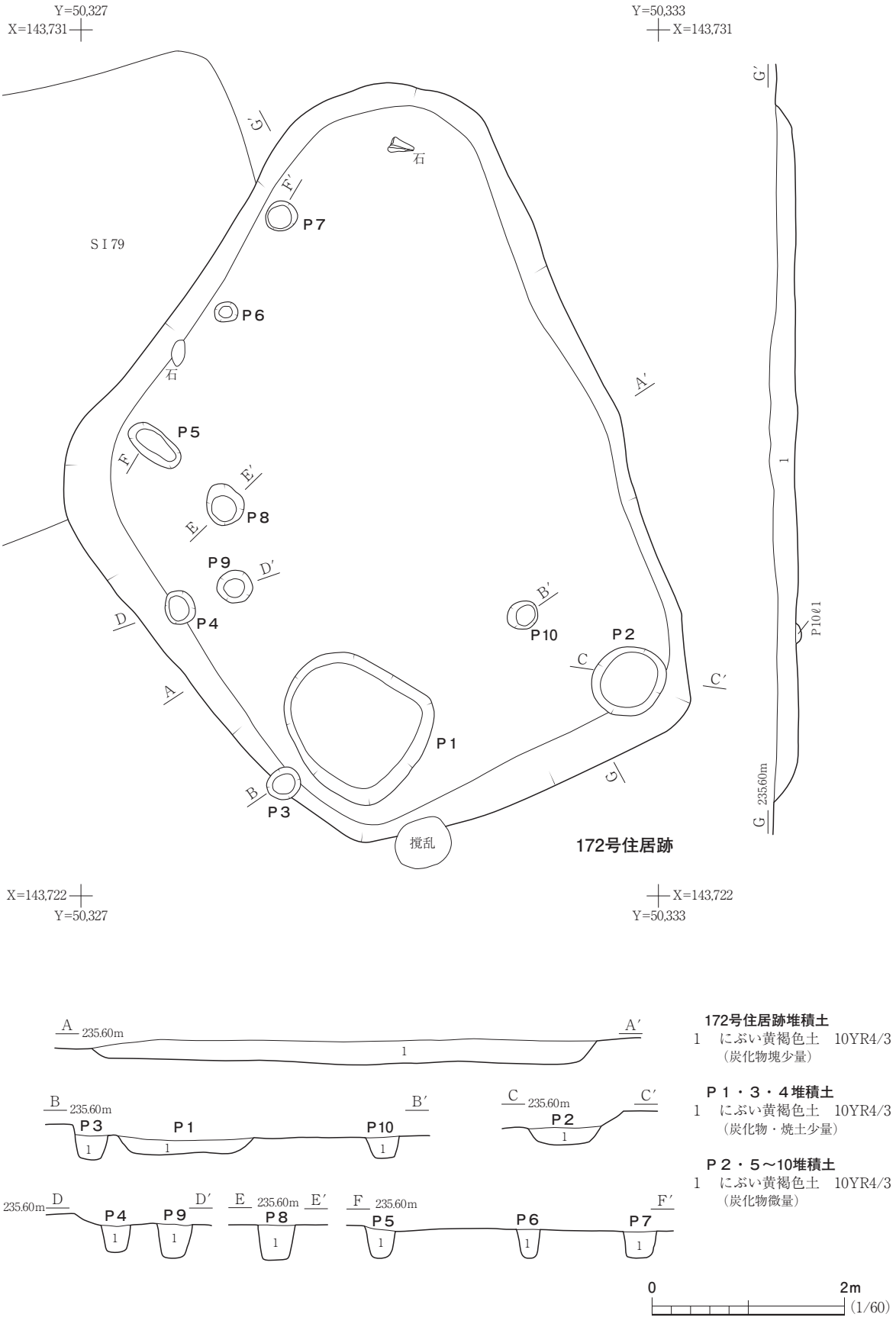


図290　172号住居跡

は、Ｐ１が長軸158㎝、短軸138㎝、深さ16㎝であり、Ｐ２が長軸80㎝、短軸７５㎝、深さ18㎝である。Ｐ３～10は壁際に位置する小規模なピットである。Ｐ３・４は西壁の壁際に位置する。Ｐ５～７は北壁側に沿うように位置する。Ｐ８・９はＰ４よりやや床面の中央側に位置する。Ｐ10はＰ２の１ｍ北西側に位置する。これらの小ピットは、いずれも断面形が円柱状で、柱穴の可能性が高い。規模は22～44㎝、深さは20～33㎝である。ピットの堆積土は、炭化物や焼土粒を少量含むにぶい黄褐色土である。

遺物は図示していないが、弥生土器が２点出土している。撚糸を施した胴部片である。また、北壁中央や北東隅付近の床面では30×20㎝ほどの礫が出土している。

ま と め

本遺構は、7.6×5.8ｍの規模の不整な隅丸台形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が２基と柱穴が検出された。小規模な柱穴は、多くが壁際に沿うように掘り込まれていた。所属時期は、他遺構との重複関係や検出面などから弥生時代終末期頃と考えている。（中　野）

173号住居跡　ＳＩ173

遺　　構（図291、写真201）

Ⅴ区南西部のＮ－24・25グリッドに位置し、標高236.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。181・183号住居跡と重複しており、本住居跡がもっとも新しい遺構である。

平面形はやや不整形な方形で、規模は東西3.2ｍ、南北3.5ｍである。方位は西壁で北から10度東を指す。周壁は、もっとも残りの良い部分で20㎝ほどであり、床面より急斜度で立ち上がる。床面は貼床が施されている。北側に向かって緩く傾斜するが平坦である。

住居内堆積土は６層に分層される。ℓ１～４は竪穴の大半を覆う土で、榛名山－伊香保テフラ(Hr－FP)と思われる白色粒子を多く含んでおり、ややしまりがある。レンズ状に堆積することから自然堆積土と考えられる。ℓ５は住居中央部の床面上に堆積する砂層である。ℓ６は掘形底面を覆う土で、硬く締まり水平に堆積することから貼床と判断した。

住居内の施設はカマド１基、ピット１基を確認した。カマドは住居南西隅に位置しており、燃焼部と煙道を確認した。燃焼部は底面の焼土化した部分のみで、袖は確認されなかった。煙道は住居壁から細長く住居外に延びている。先端の煙出し部分はピット状になっているが、底面の高さは煙道部分とほぼ変わらない。カマド内堆積土は３層に分層した。このうちℓ１・２が燃焼部に堆積し、ℓ３が煙道に堆積している。ℓ１は住居内堆積土と共通する土である。ℓ２は焼土粒を多量に含む灰黄褐色土である。周りの土より粘性が強く、カマド構築土に由来する可能性が考えられる。ℓ３は煙道を覆う黒褐色土で、周辺からの流入土とみられる。

Ｐ１は住居南西隅に位置しており、貯蔵穴と考えられる。平面は楕円形で、規模は長軸80㎝、短軸55㎝、深さ40㎝である。底面は平坦に作られ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は１層で、住居内堆積土ℓ３に近似した灰黄褐色土が堆積している。

173号住居跡堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（炭化物・白色粒多量、しまりやや有、灰黄褐色土塊混入）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒多量、しまりやや有）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（白色粒多量）
4　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物・焼土粒少量、白色粒含む）
5　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（暗褐色土塊混入）
6　黒褐色土　10YR3/1（白色粒含む、しまり有、灰黄褐色土塊混入、貼床）

173号カマド堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（白色粒多量、炭化物少量、焼土粒含む）
2　灰黄褐色土　10YR5/2（焼土粒多量、炭化物含む、しまりやや有）
3　黒褐色土　10YR3/2（炭化物少量、焼土粒含む）

P 1 堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（白色粒少量、炭化物・灰黄褐色土塊含む）

図291　173号住居跡・出土遺物

遺物は、貯蔵穴の堆積土から完形の土師器杯が１点と、カマド燃焼部脇から凹石が出土した。

遺　　物（図291、写真412）

本遺構からは、224点の土師器片、石器１点、不明鉄製品１点が出土した。土師器はほとんどが細片で、図示できたのは土師器杯と凹石をそれぞれ１点ずつである。

図291－１はロクロ成形の土師器杯である。体部は内湾ぎみに立ち上がる。外面の体部下端～底面にかけて手持ちヘラケズリによる再調整が施される。内面はミガキ後に黒色処理が施される。２はやや大きい礫を利用した凹石で、一面にのみ径４cmほどの凹みが４箇所ほど認められる。全体に被熱痕とみられる赤変・黒変が認められるが、凹みはそれらを壊すように形成されていることか

ら、カマドの構築材を凹石に転用した可能性も考えられる。

ま と め

本遺構は、平面方形で3.5×3.2ｍの住居跡である。住居内施設としてカマドと貯蔵穴が確認された。カマドは煙道と焼土化した燃焼面を確認したのみで、袖や構築材などは確認されなかった。住居廃絶時にカマドも壊され、構築材などは竪穴外に持ち出されたと考えられる。出土した遺物は少ないが、土師器杯の特徴から平安時代の遺構と思われる。（神　林）

174号住居跡　ＳＩ174

遺　　構（図292、写真202・203）

Ⅴ区南西部のＮ・Ｏ－24グリッドに位置し、標高236.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣ上面である。北東側に184号住居跡、南西側に181・186号住居跡が隣接している。北壁から西壁にかけて確認調査のトレンチによって上部が削平されていたが、全体的に遺存状態は良好であった。

平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形で、規模は6.8×5.2ｍである。方位は東壁で北から17度西に傾く。周壁は遺存状況が良い部分で55～60㎝で、床面から急斜度で立ち上がる。床面は平坦で基盤層であるＬⅣをそのまま利用して形成されている。表面には微細な炭化物が付着しており、基盤層や堆積土との差異は明瞭であったが、踏み締まりによる硬化面などは確認されなかった。

住居内堆積土は10層に分層した。レンズ状に徐々に堆積した状況が全体として認められる。ℓ１～３は粘性が強い暗褐色の砂質土である。褐色土塊や粘質土分が多く、止水状態の洪水堆積層とみられる。ℓ４～７・９は粘性が弱く粘質土分をほとんど含まない砂質土である。壁際を中心に堆積し、竪穴内に流れ込むような状況が認められることから、周辺からの流入土と思われる。ℓ８は遺構下部全体に堆積し、一部は床面を覆っている。炭化材及び細かい炭化物が非常に多く含まれている。この層より上位の周壁が部分的に焼土化していることから、火災の痕跡と思われる。住居北西側では炭化材が認められなかったが、これは確認調査のトレンチによって削平されたことによる。炭化材には長大なものも含まれるが、位置や方向に法則性は認められない。また、この層の下に流入土とみられるℓ10が堆積していることから、住居の屋根や構築材が火災によって、そのまま崩落したものではないと判断している。

住居内の施設は、地床炉１箇所、ピット10基、ベッド状遺構１箇所を確認した。

地床炉は住居中央からやや北寄りに位置する。掘形の平面は南北方向にやや長い楕円形で、規模は65×50㎝である。中央の50×37㎝の範囲が焼土化しており、焼土の南縁には長さ30㎝ほどの石が、長軸を東西に向けて据えられていた。火床側の面は赤変していた。堆積土は４層に分層した。ℓ１が焼土化した火床面で、ℓ２～４は掘形埋土である。火床面は床面と同じ高さである。

ピットは規模や位置関係から、Ｐ１～４、Ｐ５、Ｐ６～10 の３つに大別される。Ｐ１～４は方形に配置されており主柱穴と考えられる。平面は直径20～25㎝の楕円形で、深さは30～35㎝である。柱痕跡は認められず、暗褐色または暗灰色土を含む砂質土が堆積していた。Ｐ５は住居南

東隅に位置している。平面は45×35㎝の楕円形で、深さは25㎝である。堆積土は３層に分層された。ℓ１・２は住居内堆積土ℓ８に近似し、ℓ３は住居内堆積土ℓ10に近似している。住居廃絶時には開口していて、住居と同時に埋没したと思われる。位置と形態から貯蔵穴であると考えられる。Ｐ６～10は主柱穴より小型の柱穴である。このうちＰ６・７は南北方向の主柱穴に平行するように並び、Ｐ８～10は東西方向の主柱穴に平行するように並んでいる。いずれも直径および深さ10～15㎝の楕円形である。Ｐ６には炭化した細い杭材が遺存していたが、非常にもろく取り上げ時に崩壊してしまった。

ベッド状遺構は住居北壁中央に位置している。平面は台形で長辺100㎝、短辺65㎝、壁から50㎝ほど住居内に張り出す。基盤層であるＬⅣを掘り残して作られており、床面からの高さは20㎝で上面は平坦となりやや硬化していた。

遺物は、主に床面および住居内堆積土ℓ８から出土している。床面の遺物は、図293－３・４、図294－１・２の土師器と棒状の自然石(図294－５～13)であり、いずれも住居北側から出土している。図293－３・４の鉢は正位と逆位で並んで出土し、図294－１の台付甕は、地床炉の北側で横転した状態で潰れていた。棒状の自然石は北東隅に集積されたような状態で出土した。ℓ８上面では、住居東側で甕２点(図293－11・12)と小型土器３点(図293－２・５・６)がまとまって出土した。甕はいずれも横倒しの状態で潰れている。このうち潰れた甕(図293－11)の上には河原石１点と小型土器３点が並べ置かれており、意図的な廃棄である可能性が考えられる。

遺　　物（図293・294、写真412・413）

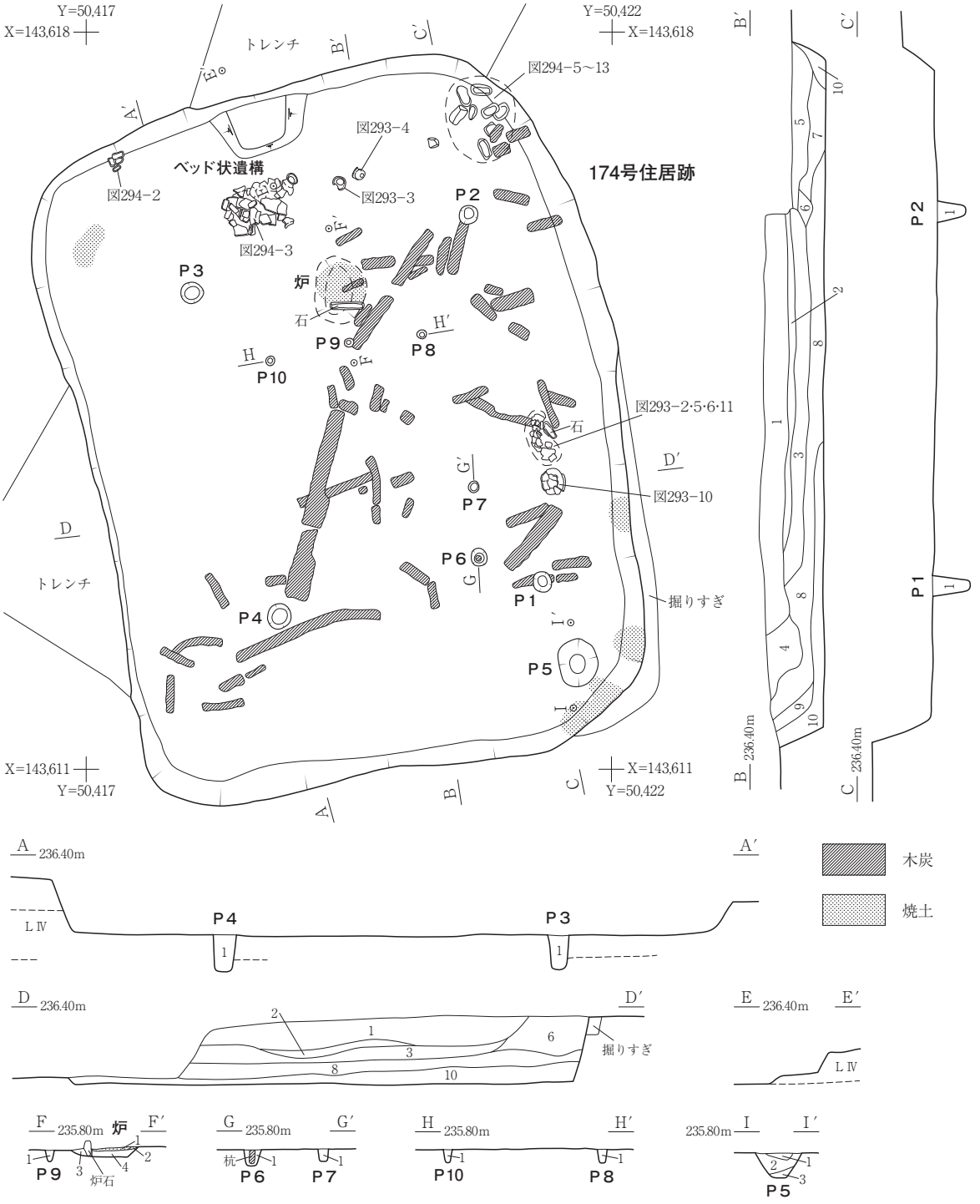
遺物は、土師器377点、石製品１点、棒状の自然石９点が出土し、土師器15点、石製品１点、自然石９点を図示した。図293－１は脚部を欠損した器台である。やや内湾ぎみに立ち上がる。

２～８は鉢である。２は小型で、器形はわずかに外反しながら立ち上がる。３・４は、平底の底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部との境は、外面がくびれ内面は屈曲する。口縁部は頸部から外傾しながら立ち上がる。５・６は小型で、ハケメが施される。７は口縁部を欠損しており。底部は中央付近が円形に浅く窪む。８は口縁部が「く」字状に外傾し、胴部は中位に最大径を有する。

９・10は壷である。９は頸部から口縁部にかけての破片で、外反しながら立ち上がる。10は平底の底部と胴部下半が遺存する。内外面ともにナデ調整が施される。

11・12は平底の甕である。11は口縁部が「く」字状にゆるく外反し、胴部は中位よりやや下に最大径を有する。内面底部付近には帯状に薄いコゲが付着している。12は口縁部が「く」字状に外傾し、胴部は中位に最大径を有する。11は外面にナデ、内面にヘラナデが施され、12は外面および口縁部内面を中心にハケメが施される。

図294－１～３は台付甕である。１の口縁部は「く」字状に外傾し、胴部中位に最大径を有する。台部は柱状部でわずかに屈曲し、裾にかけて直線的に広がる。胴部外面には帯状にススが付着し、部分的に吹きこぼれと見られる痕跡が確認される。２は台部の破片であり、裾にかけて直線的に広がっている。３は胴部上半と台部の下端を欠損しているが、裾にかけてやや内湾ぎみに広が



174号住居跡堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（褐色土塊含む）
2　暗褐色砂質土　10YR3/3（褐色土塊多量）
3　暗褐色砂質土　10YR3/3
4　暗褐色砂質土　10YR3/3
5　暗褐色砂質土　10YR3/3
6　暗褐色砂質土　10YR3/3
7　暗褐色砂質土　10YR3/4
8　黒褐色砂質土　10YR3/1（炭化材・炭化物塊含む）
9　暗褐色砂質土　10YR3/3
10　褐色砂質土　10YR4/4

174号炉堆積土
1　赤褐色土　2.50YR5/8（焼土粒塊含む）
2　褐色土　10YR4/4（黒色土塊含む）
3　褐色土　10YR4/4（黒色土粒含むＬⅣに近い砂）
4　褐色土　10YR4/4（焼土粒を含むＬⅣに近い砂）

Ｐ１〜４堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（黒色土塊含む）

Ｐ５堆積土
1　黒褐色砂質土　5YR3/1（焼土粒含む）
2　黒色砂質土　7.5YR1.7/1（炭化物含む）
3　褐灰色砂　10YR4/1（黒色土小塊含む）

Ｐ６・７堆積土
1　褐色土　10YR4/4
（ＬⅣに近い砂、炭化物含む）

Ｐ８・10堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4

Ｐ９堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4

0　2m　(1/60)

図292　174号住居跡

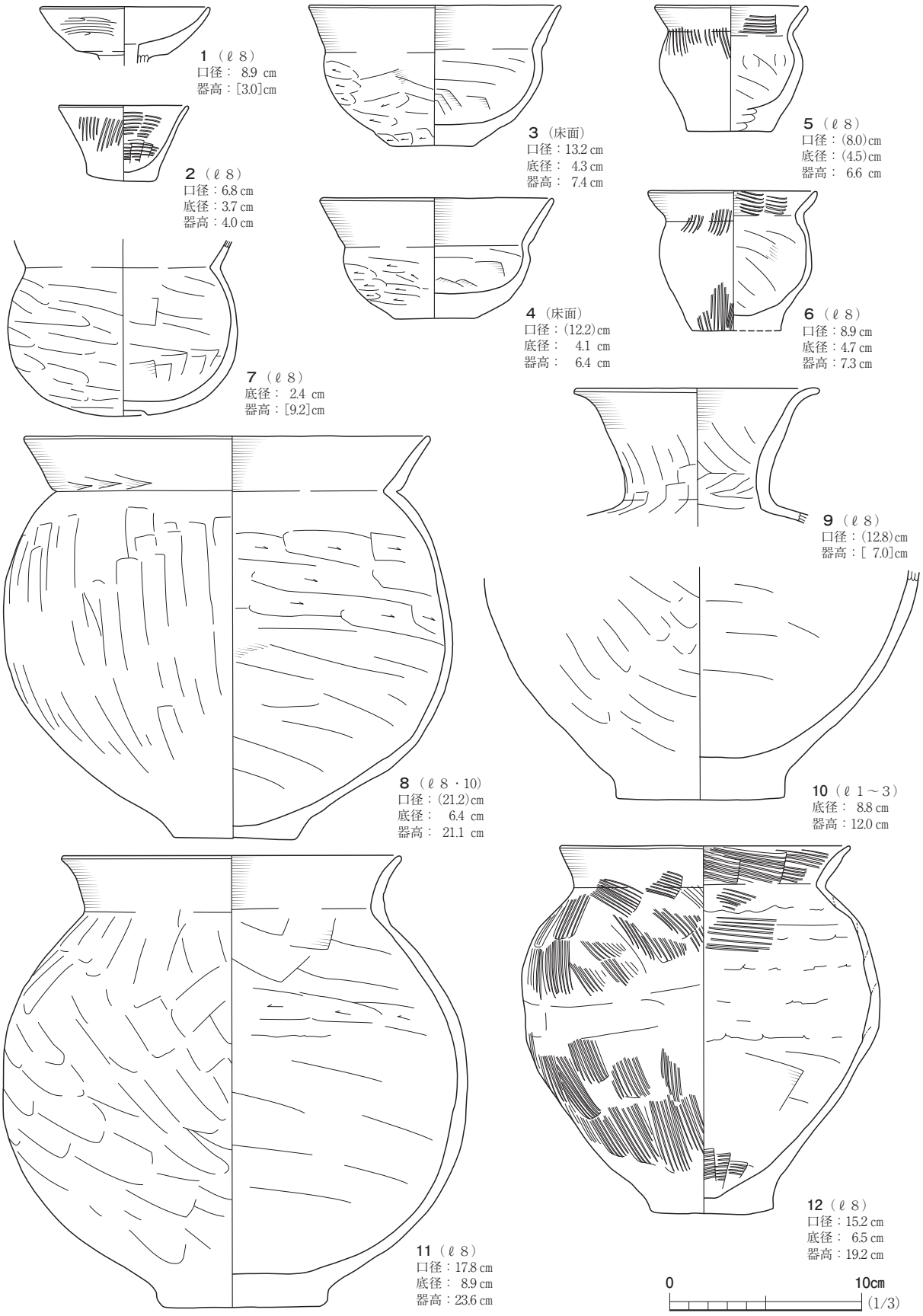


図293　174号住居跡出土遺物（1）

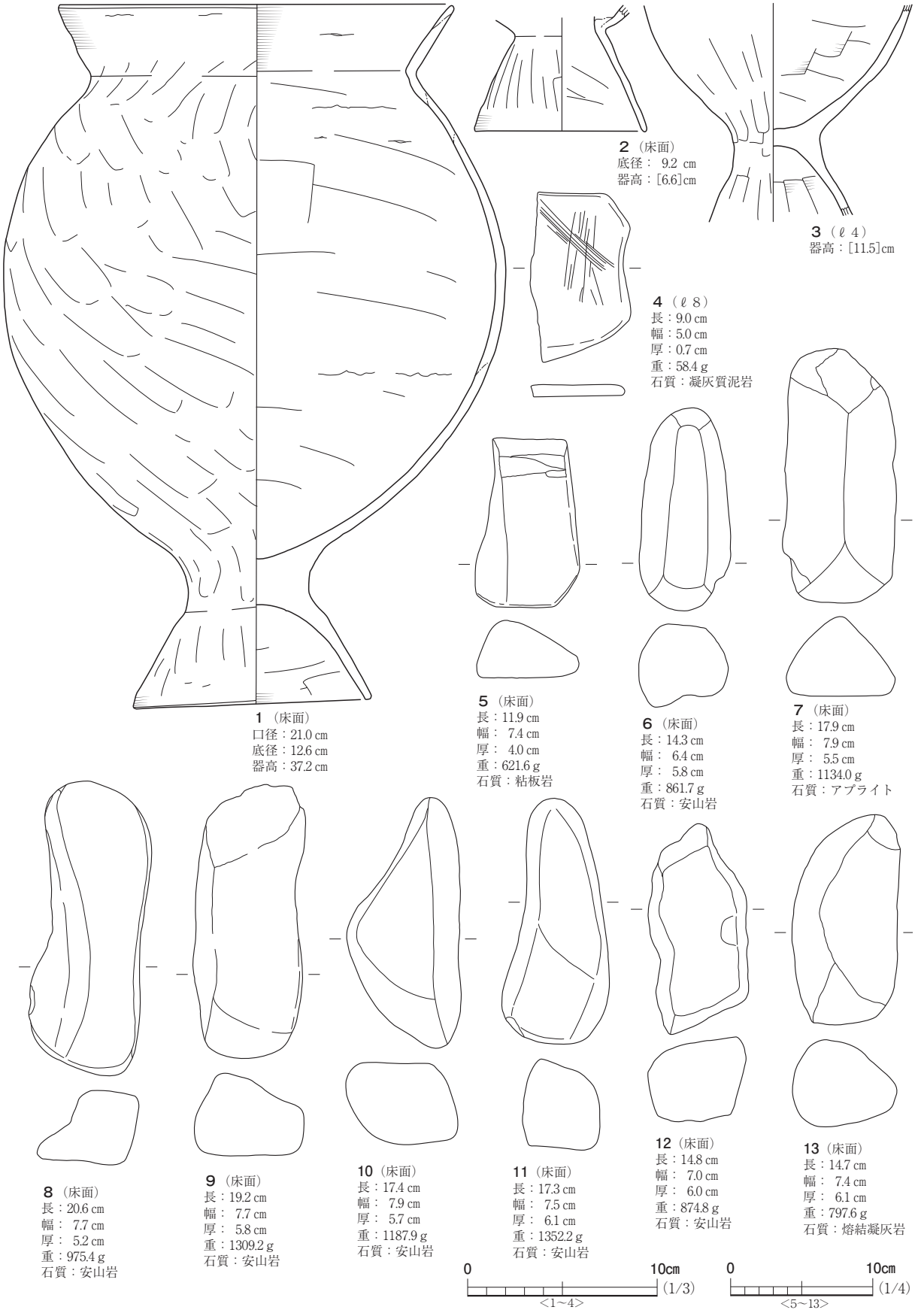


図294　174号住居跡出土遺物（２）

る。４は表面に線条痕が認められる偏平な礫で、砥石として用いられたと思われる。

５～13は明瞭な加工痕が認められない自然石であるが、同じ形状のものが集積されたような状態で出土しており、意図的に住居内に持ち込んだものと判断した。12の表面には紐ズレによるとみられる凹みが認められる。いわゆる「編物石」と呼称される性格のものを想定している。石材は安山岩を中心に粘板岩・溶結凝灰岩・アプライトが用いられており、基本的には阿武隈川で採取できる石材を中心に用いている。長さは14.3～20.6㎝、重量は621.6～1352.2ｇであり、おおむね15㎝未満で800ｇ前後のものと、20㎝以下で1200ｇ前後のものに分けられる。

ま と め

本遺構は、6.8×5.2ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内には地床炉１箇所、主柱穴が４基、貯蔵穴が１基、主柱穴の内側に位置するピット５基、ベッド状遺構１箇所が認められた。地床炉には炉石が据えられていた。堆積土下層で多くの炭化材や焼土を確認し、火災が起こったことが判明した。この層からは比較的遺物がまとまって出土しており、中でも潰れた甕の上に河原石と小型土器を置く特異な出土状況が確認された。しかし、炭化材や焼土と床面の間には自然流入土の堆積が認められることから、この火災は住居廃絶後の窪地で意図的に行われたものと考えられる。出土遺物から古墳時代前期に機能した遺構と考えられる。（神　林）

175号住居跡　ＳＩ175

遺　　構（図295、写真204）

本遺構は、Ⅳ区西部のＦ－13・14グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。平成27年度調査で63号住居跡を調査した際に、西側に不整形な遺構の範囲を確認していた。平成29年度調査において、Ⅳ区の追加調査を行った際に、周辺を再検出し、住居跡として調査した。重複する遺構は、63・177～180号住居跡、２号溝跡である。本遺構が、63・177・179号住居跡、２号溝跡より古く、178・180号住居跡より新しい。

堆積土は、３層に区分した。ℓ１・３はにぶい黄褐色土である。ℓ２は褐色砂質土である。いずれの層にも炭化物が微量含まれる。堆積過程は、おおむね自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、北側を失っているが、南北に長い楕円形と考えている。規模は、南北が遺存長8.2ｍ、東西長が最大で4.8ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では40度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で15㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して20度東に傾く。床面はＬⅣｂに作られ平坦で踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設はピットを10基検出した。ピットは、土坑状のものと小穴状のものがある。土坑状のものは、Ｐ１～４・６・７・10で、床面の南部から中央部に位置する。平面形は、楕円形から円形である。規模は最大で長軸110㎝、短軸85㎝、深さ25㎝である。最小のものはＰ６で直径55㎝、深さ11㎝である。底面はおおむね平坦に掘り込まれている。Ｐ５・８・９は壁際に位置し、断面形は円柱状を呈する。規模は、直径22～32㎝、深さ18～28㎝である。ピットの堆積土

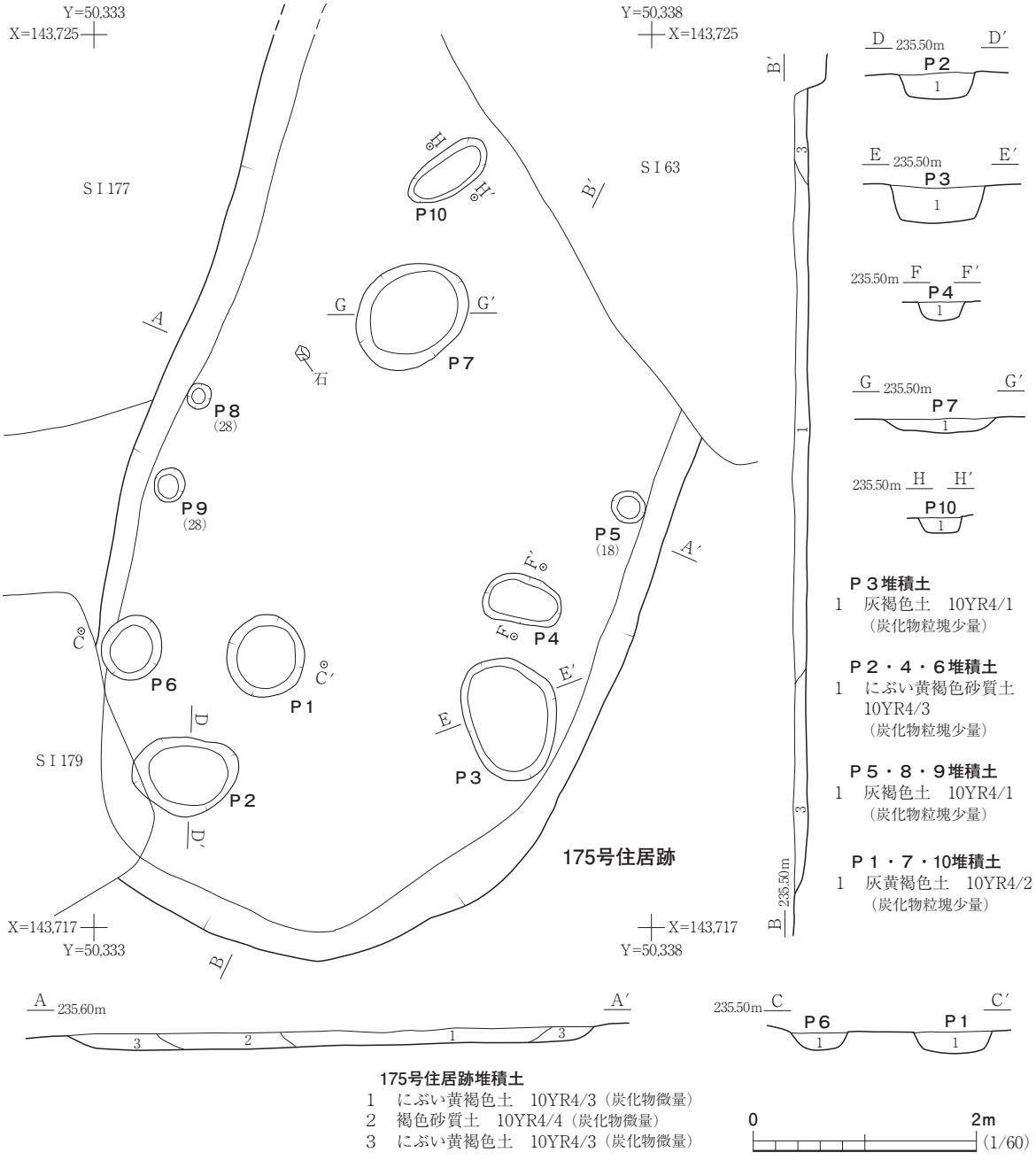


図295　175号住居跡

は、炭化物粒塊を含む灰褐色土やにぶい黄褐色砂質土などである。おそらく規模的に見て、Ｐ１～３・７は貯蔵穴の機能を果たしたものと推測している。それ以外のピットについては機能を明らかにできなかった。遺物はＰ１の北側に堆積するℓ２から図296－１の遺物が出土した。

遺　　物（図296、写真413・436）

遺物は、弥生土器29点、石器１点が出土し、弥生土器６点と石器１点を図示した。

図296－１は弥生土器の蓋である。天井部には４箇所の孔が見られる。孔はすべて外側から穿孔されている。口縁部の上段には段が付く。口縁部は一箇所、外側へ反り返る部分があり、波状か片口状に張り出す可能性もある。口縁部側には、単節縄文で横位方向に施文し、段の上部は１㎝の

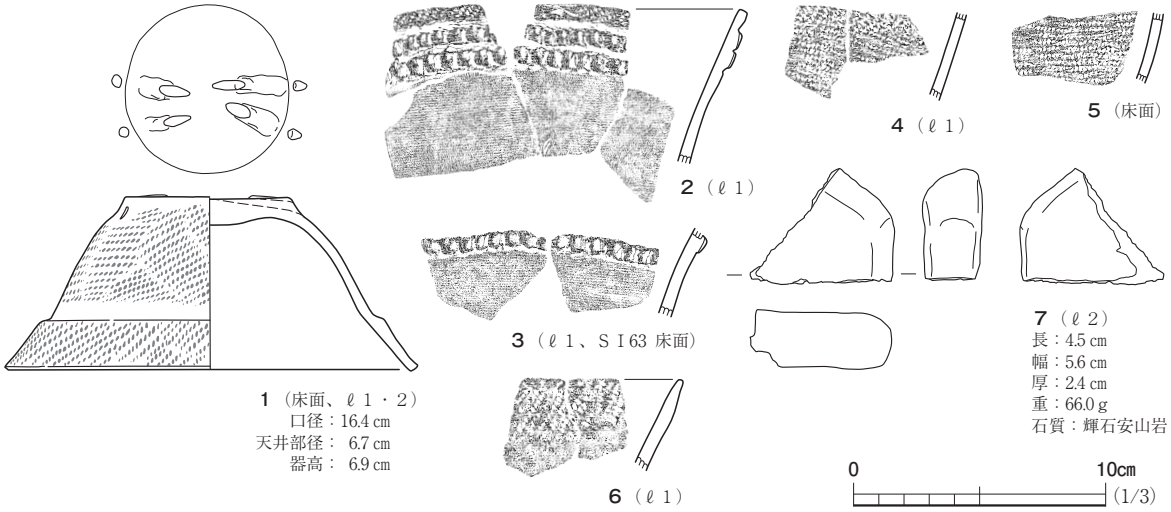


図296　175号住居跡出土遺物

幅で無文部となる。体部上段から天井部にかけては、斜位方向ないし縦位方向に単節縄文を施す。２・３は。口縁端部直下に３条の隆帯を巡らせ、最上部の隆帯に縄文を、それ以下の隆帯には指頭押捺文を施す。４～６は器面に縄文が施される。7は礫石器の破片である。

ま と め

本遺構は、長軸が8.2ｍ以上の南北に長い楕円形の竪穴住居跡である。ピットが10基検出され、一部は貯蔵穴と考えられた。堆積土からは、弥生土器の蓋が出土した。所属時期は、他遺構との重複関係や検出面などから弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

176号住居跡　ＳＩ176

遺　　構（図297、写真205・270）

本遺構は、Ⅳ区南部のＧ－14グリッドに位置している。標高235.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。重複する遺構はない。

堆積土は、炭化物粒塊を含むにぶい黄褐色土の単層で、堆積過程は自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、南西隅が丸みをもつ不整な方形である。規模は、5.0×4.6ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では60度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で30㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対してわずかに西に傾く。床面は、ＬⅣｂに作られており平坦である。硬く踏み締まっており、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の北西隅から南東側へ１ｍほど寄った位置で１箇所確認した。平面形は円形である。炉の火床面が、床面のより５㎝ほど高くなっている。炉の規模は直径65㎝ほどで暗赤褐色に強く焼土化している。特に炉の中央部分では45×25㎝の範囲で強く焼土化しており、使用頻度が高かったと思われる。

ピットは、４基検出した。Ｐ１は床面の中央からやや南側に位置する。平面形は円形である。規模は直径68㎝、深さ21㎝である。Ｐ２は東壁中央からやや北側に位置する。平面形は楕円形であ

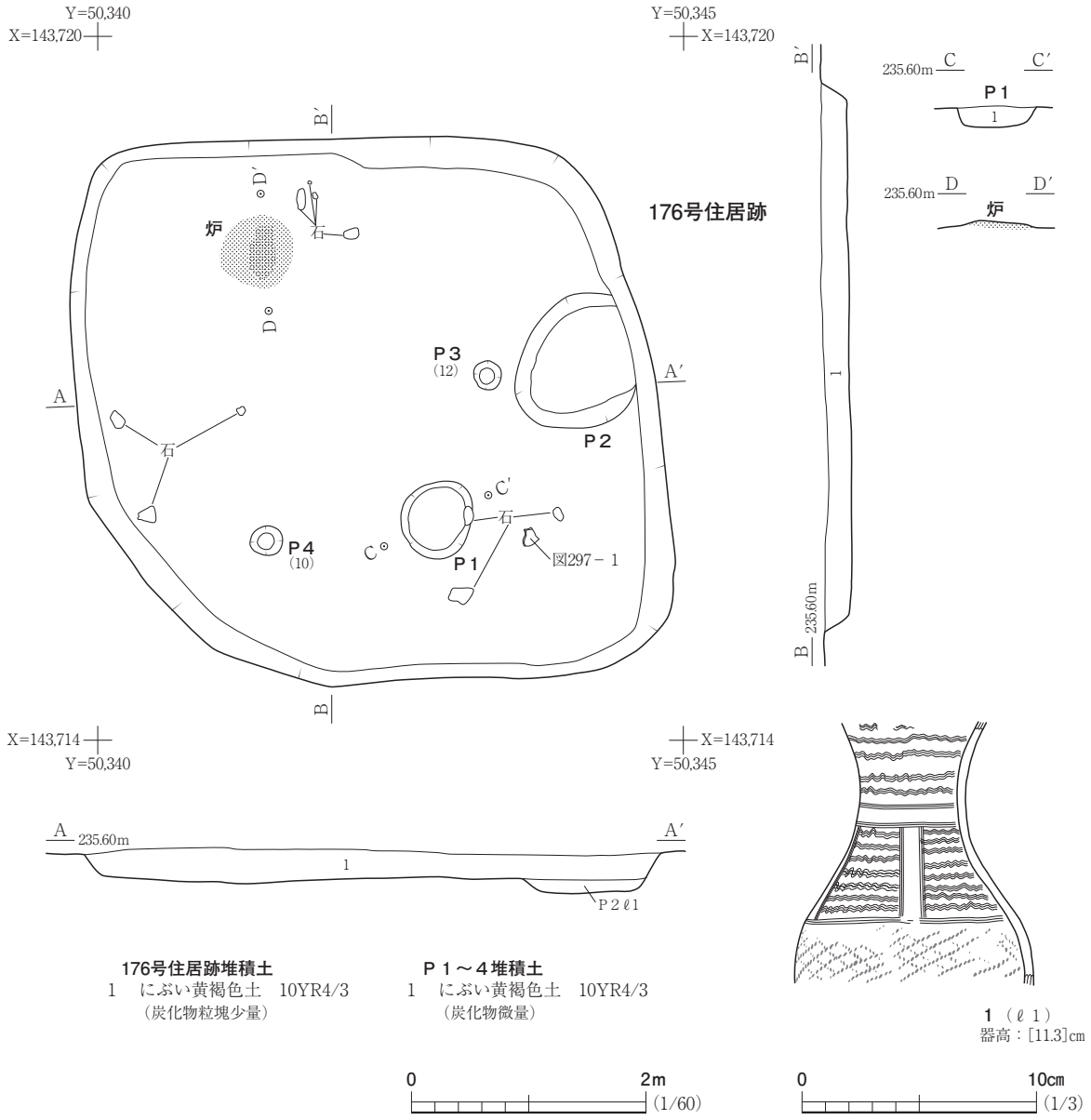


図297　176号住居跡・出土遺物

る。規模は115×103cm、深さ13cmである。Ｐ１とＰ２は底面が平坦に掘り込まれており、いずれも貯蔵穴と考えている。Ｐ３はＰ２のすぐ西側に位置する。Ｐ４は南西隅付近に位置する。いずれも平面形は円形である。規模は直径26～28cm、深さ10～12cmである。機能は明らかにできなかった。ピットの堆積土は、炭化物を微量含むにぶい黄褐色土である。

遺物は、住居跡の南東隅側の住居内堆積土ℓ１下部から、図297－１の弥生土器が出土した。

遺　　物（図297、写真413）

遺物は、弥生土器16点が出土し、１点を図示した。図297－１は小型の広口壺である。口縁部と胴部下半から底部が欠損する。口縁部がやや外反し、頸部が細く括れ、胴部が膨らむ器形である。胎土には白色砂粒と海面状骨針が確認できる。内面は、表面が細かく剥落している。文様は、３条一組の櫛歯状の工具で施文する。口縁部の下側から頸部にかけては、横位の波状文を重層的に施文

する。頸部から胴部上半にかけては、縦位の沈線で３条一組の細長い縦区画を５単位で施文し、区画と区画の間には、横位の波状文を重層的に施文する。胴部下半には、附加縄文が施文される。

ま と め

本遺構は、長軸が5.0ｍの不整方形の竪穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴が検出された。堆積土からは、弥生土器が１点出土した。弥生土器は、茨城県北部に分布する十王台式と考えられる。所属時期は、他遺構との関連や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。　　（中　野）

177号住居跡　ＳＩ177

遺　　構（図298、写真206）

本遺構は、Ⅳ区西部のＦ－13グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。172号住居跡の調査中に南側に炭化物を多く含む不定形な遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、63・172・175・178・180号住居跡である。遺構の新旧関係は、63・172号住居跡より古く、それ以外の遺構より新しい。

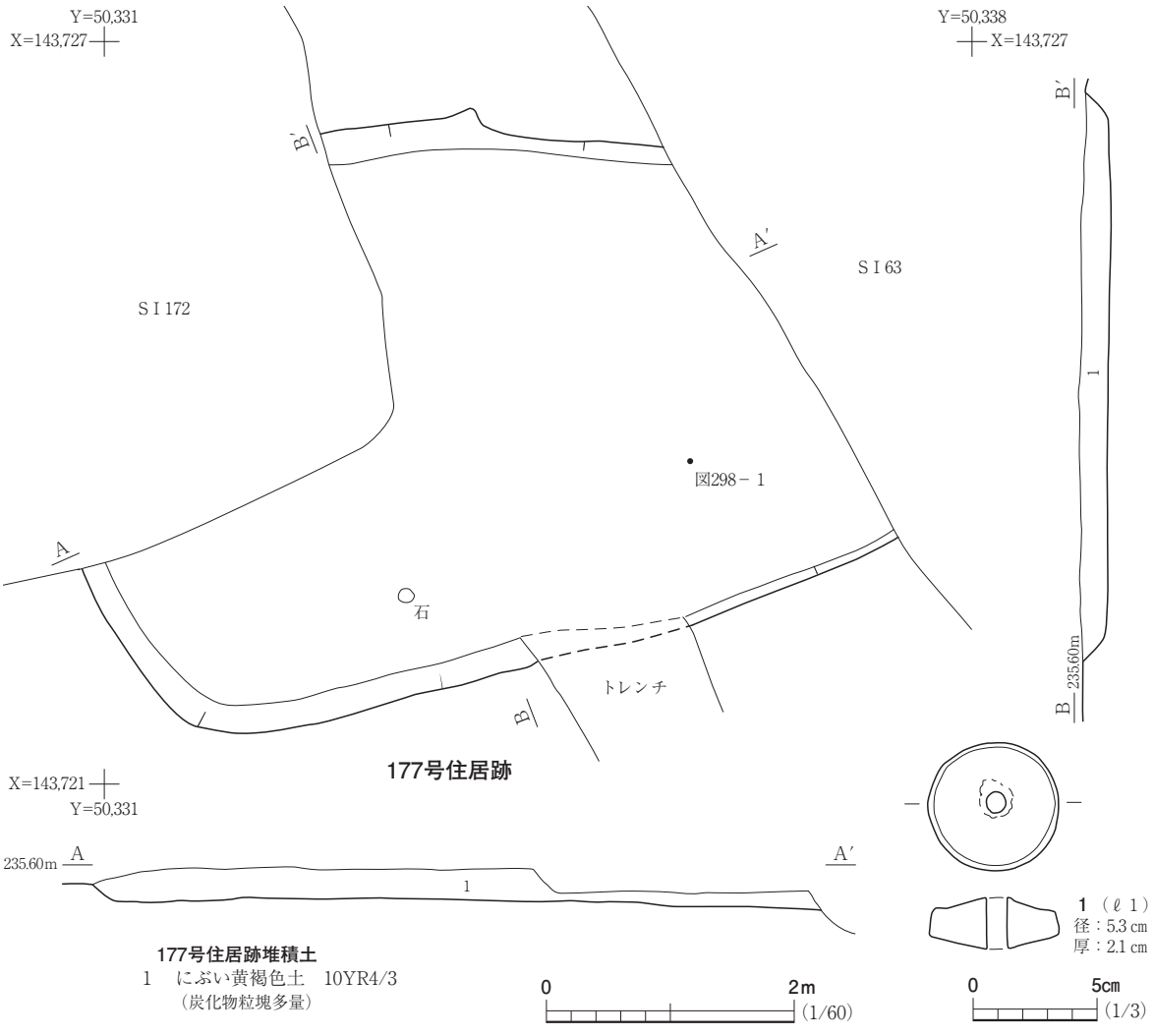


図298　177号住居跡・出土遺物

堆積土は、炭化物粒塊を多く含むにぶい黄褐色土が堆積していた。１層のみで、層厚も薄いことから堆積過程の詳細については不明である。

遺構の平面形は、重複が激しく残りが悪いため、不明確な点が多いが、長方形か楕円形と考えている。規模は、遺存長で東西6.0ｍ、南北4.5ｍである。周壁は、残りの良い南壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で27㎝である。方位は、西壁を基準とするなら北に対して20度西に傾く。床面は、ＬⅣｂをそのまま利用して作られており平坦である。踏み締まりは弱いものの、微細な炭化物粒や焼土粒が散在しており、基盤層との差異は比較的明瞭であった。住居内の施設は一切検出されなかった。遺物は、器面が摩耗した弥生土器の小片や、剥片が堆積土からまばらに出土している。また、小さい自然礫も数点含まれていた。

遺　　物（図298、写真414）

遺物は、弥生土器５点、土製品１点、剥片２点が出土した。いずれも器面が摩耗していたり、非常に細かい破片であることから、図示できたのは土製品１点のみである。

図298－１は、ℓ１下面より出土した紡錘車である。文様や装飾は無く、中央部分が厚みをもつ。

ま と め

本遺構は、遺存長が最大で6.0ｍの竪穴住居跡である。周辺には同じ時期の重複する遺構が多く、不明な点が多い。住居内の施設も判然とせず、遺物も非常にまばらであった。所属時期は、出土遺物や他の遺構との重複関係などから、弥生時代終末期と考えている。　　（中　野）

178号住居跡　ＳＩ178

遺　　構（図299、写真207）

本遺構は、Ⅳ区西部のＦ－13グリッドに位置している。標高235.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。172号住居跡の調査中に床面から炭化物や焼土を多く含む不定形な範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、172・185号住居跡である。遺構の新旧関係は、重複する遺構の中で本遺構がもっとも古い。

堆積土は、２層に区分した。ℓ１は炭化物粒と焼土粒を含むにぶい黄褐色砂質土である。ℓ２は砂を多く含む褐色砂質土である。いずれも自然堆積土と考えている。ℓ２の西側中央では、90×70㎝の焼土の集積が見られた。炉とも考えたが、床面から浮いた状態で堆積することから、住居跡の堆積過程において周囲から投げ込まれた人為堆積土と考えている。

遺構の平面形は、隅丸方形である。規模は、4.8×4.5ｍである。周壁は、残りの良い南壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で20㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して25度東に傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣｂに作られており平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央からやや東側に寄った位置で２箇所確認した。北側に位置するものを炉１、南側に位置するものを炉２とした。炉はいずれも使

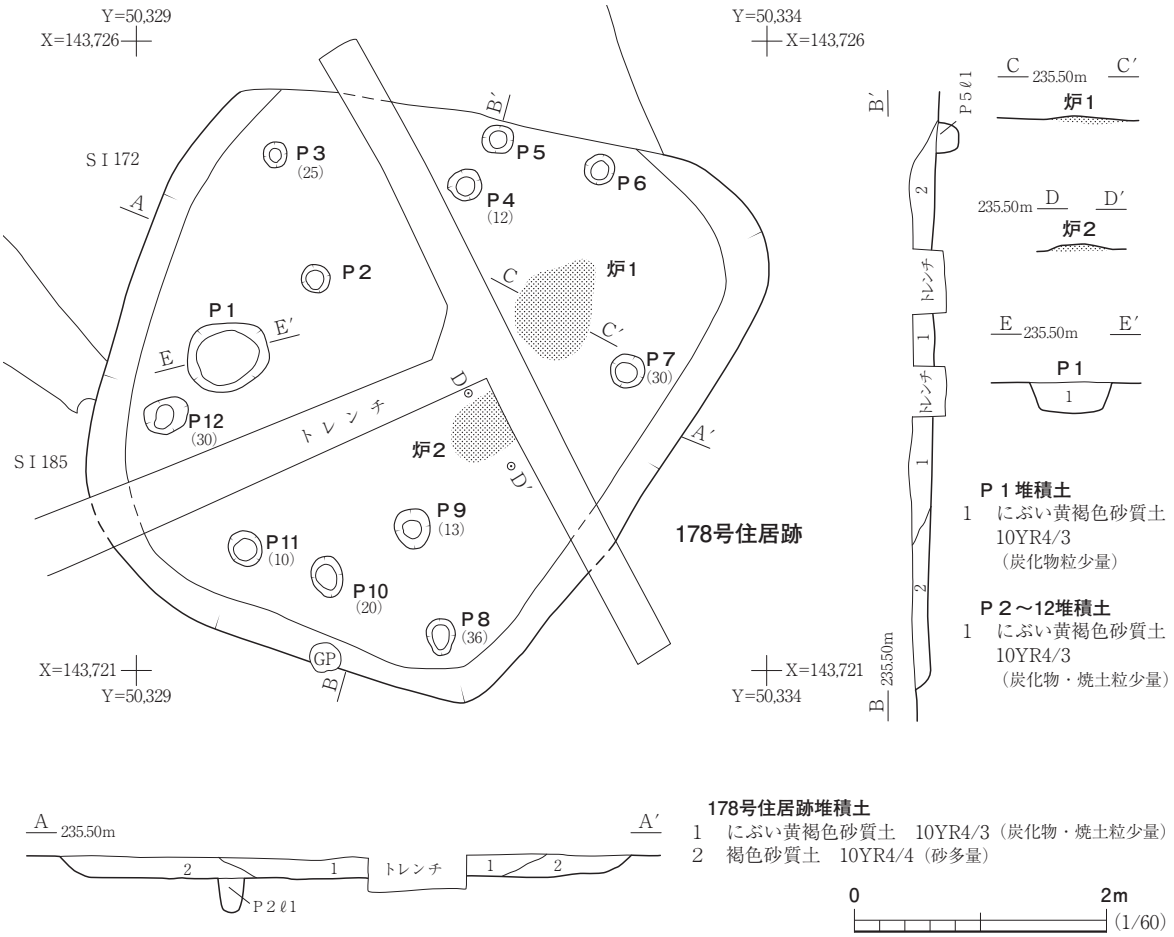


図299　178号住居跡

用面が床面より４cmほど高くなっている。炉１は平面形が不整な楕円形を呈する。規模は、長軸85cm、短軸65cm、炉の使用面は強く焼けており、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは燃焼部底面で３cmである。炉２はトレンチで一部壊れているが、平面形は楕円形で径50cmほどである。炉の使用面は暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した厚さは４cmである。

ピットは、12基検出した。Ｐ１は、平面形が楕円形を呈し、底面は平坦に掘り込まれている。貯蔵穴と考えている。規模は長軸65cm、短軸57cm、深さ25cmである。堆積土は炭化物粒を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。Ｐ２～12は、壁際周辺に位置する小ピットである。平面形はおおむね円形で、断面は円柱状になるものが多い。おそらく柱穴が含まれると考えている。規模は、直径が22～32cm、深さが10～36cmである。堆積土は炭化物粒と焼土粒を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。遺物は堆積土から土器が４点出土したが、細片のため詳細は不明である。

ま と め

本遺構は、4.8ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。地床炉が２箇所と貯蔵穴、ピット検出された。重複する遺構群の中では、もっとも古い遺構である。所属時期を明示する遺物はないが、他の遺構との重複関係などから、弥生時代終末期頃と考えている。　（中　野）

179号住居跡　ＳＩ179

遺　　構（図300、写真208）

本遺構は、Ⅳ区西部のＥ・Ｆ－14グリッドに位置している。標高235.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。175号住居跡の調査中に、西側で炭化物を多く含む不定形な遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、175・178・185号住居跡、２号溝跡である。遺構間の新旧関係は、２号溝跡より古く、その他の遺構よりは新しい。

堆積土は、炭化物を多く含むにぶい黄褐色土の単層であり、自然堆積と考えている。

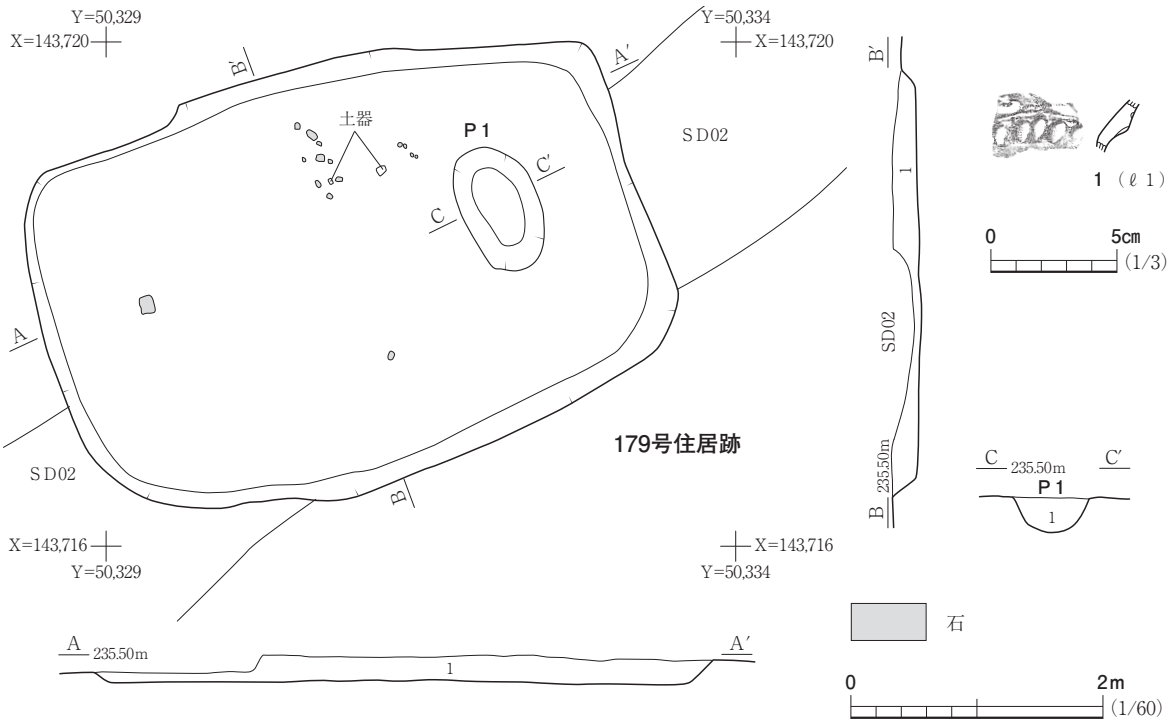
遺構の平面形は、隅丸長方形である。規模は、4.9×3.4ｍである。周壁は、残りの良い南壁側で45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で20㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して10度西に傾く。床面は、ＬⅣｂに作られており平坦で、硬く踏み締まっていた。

住居内の施設はピット１基である。Ｐ１は、床面中央の東側に位置する。平面形が南北に長い楕円形で、底面はすり鉢状に掘り込まれている。位置関係や規模から貯蔵穴と考えている。規模は長軸105㎝、短軸60㎝、深さ28㎝である。堆積土は炭化物粒を含むにぶい黄褐色土の単層である。

遺物は堆積土から出土した。北壁側中央のℓ１下部～床面にかけては、20点ほどの礫の集積が確認できた。礫は５～10㎝ほどで、多くが焼けていた。礫とともに図300－１の土器が出土した。

遺　　物（図300）

遺物は、弥生土器２点が出土したが、いずれも非常に細かい破片で、１点を図示した。図300－



179号住居跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒塊多量）

Ｐ１堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物少量）

図300　179号住居跡・出土遺物

１は弥生土器の頸部片で、横位の段には連続的に指頭圧痕が施される。

ま と め

本遺構は、4.9×3.4ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は貯蔵穴が検出された。重複する弥生時代の遺構群の中では、もっとも新しい遺構である。所属時期は、出土遺物や他の遺構との重複関係などから、弥生時代終末期と考えている。（中　野）

180号住居跡　ＳＩ180

遺　　構（図301、写真209・267）

本遺構は、Ⅳ区西部のＥ・Ｆ－12・13グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。平成27年度調査で63号住居跡を調査した際に、炭化物が混じる土が広がる範囲を確認していた。平成29年度調査において、Ⅳ区の調査を行った際に、周辺を再検出して、住居跡であると判断して調査を行った。重複する遺構は、63・79・177・178・180号住居跡、２号溝跡で、63・79号住居跡、２号溝跡より古く、それ以外の遺構より新しい。

堆積土は３層に区分した。ℓ１はにぶい黄褐色土で、ＬⅢｂに対応する。ℓ２は炭化物粒塊、焼土粒を含む灰黄褐色土で、ℓ３は壁際に堆積する褐色砂質土である。いずれも自然堆積土である。

遺構の平面形は、不整な長楕円形である。規模は、8.0×5.6ｍである。周壁は、残りの良い北壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁側で最大で42㎝である。床面は、ＬⅣｂに作られ平坦かつ水平で、中央東部の4.2×3.8ｍの範囲が硬化していた。

住居内の施設は地床炉とピットである。地床炉は、北壁中央のやや東側で、１箇所検出した。炉は火床面が床面より３㎝ほど高くなっている。平面形が楕円形を呈する。規模は、75×60㎝である。炉の使用面は強く焼けており、25×20㎝の範囲が強く焼土化していた。ピットは10基検出した。ピット検出位置は、Ｐ１が中央に位置し、Ｐ２・４・７・８・11がやや床面壁際より内側に位置する。Ｐ３・５・６・９・10は、壁際に位置する。内側に位置するピットが主柱穴、壁際のものが壁柱穴と考えている。形態は、Ｐ１が円形で底面は平坦に掘り込まれる。機能は貯蔵穴と考えている。規模は、直径50㎝、深さ25㎝である。Ｐ２～11はおおむね円形ないし楕円形である。規模は径20～40㎝、深さ10～22㎝である。堆積土は、Ｐ１のみを図示したが、いずれも炭化物とＬⅣ粒を含む灰黄褐色土であり、堆積過程は同じである。

遺　　物（図301）

遺物は、弥生土器が12点出土している。多くは非常に細かい破片であるが、このうち２点が接合し図示した。図301－１は横位方向に撚糸を施した胴部片である。

ま と め

本遺構は、8.0×5.6ｍの不整な楕円形の竪穴住居跡である。壁際に地床炉、中央に貯蔵穴、不規則な配置の柱穴が検出された。床面には硬化面が形成されていた。所属時期は、他遺構との重複関係や検出面などから弥生時代終末期と考えている。（中　野）

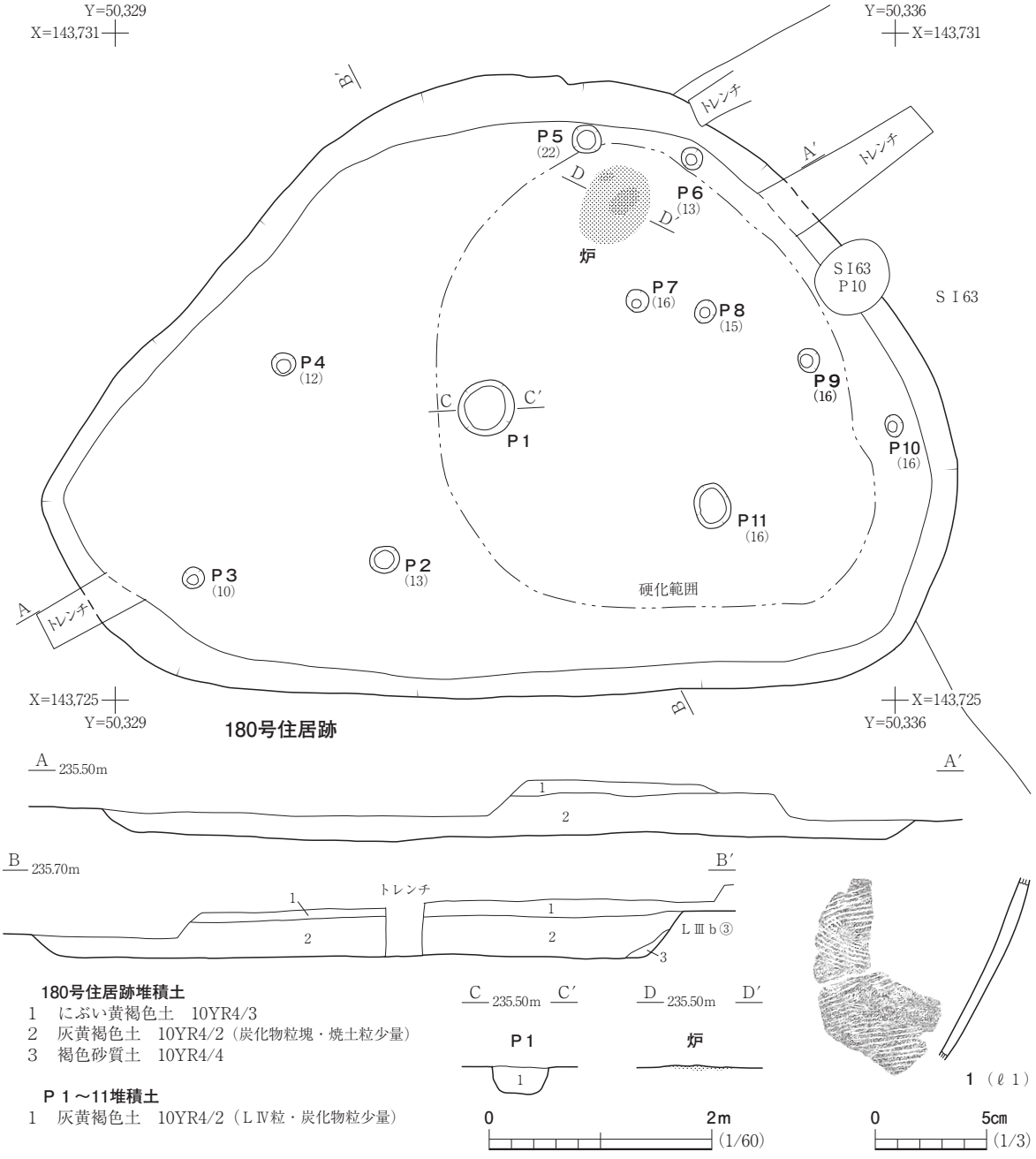


図301　180号住居跡・出土遺物

181住居跡　ＳＩ181

遺　　構（図322、写真210）

Ⅴ区のＮ－24・25グリッドに位置し、標高236.2ｍ付近に位置する。検出面はＬⅣである。上層に位置する173号住居跡の掘形底面において検出した。また下層には186号住居跡が位置する。

平面形は不整形ぎみで、南北に長い長方形である。規模は3.2×2.9ｍである。方位は東壁で北から10度東を示す。周壁は遺存状況の良い所が45㎝で、床面より垂直に立ち上がる。床面は、186号住居跡の堆積土上面及びＬⅣに構築している。踏み締まりによる硬化面は認められなかった。

堆積土は４層に分層した。ℓ１はＬⅢに由来する粘質土、ℓ２～４はＬⅣに由来する砂が混じる土である。いずれも自然堆積土と考えられる。住居内の施設は確認されなかった。

遺物はいずれも堆積土から出土しており、竪穴の埋没過程において廃棄されたものと思われる。

遺　　物（図302、写真414）

本遺構からは、土師器51点、弥生土器２点、石器１点が出土している。このうち土師器と凹石それぞれ１点ずつを図示した。

図302－１は土師器の甕で、外面はナデ、内面はヘラナデで調整されている。口縁部は「く」字

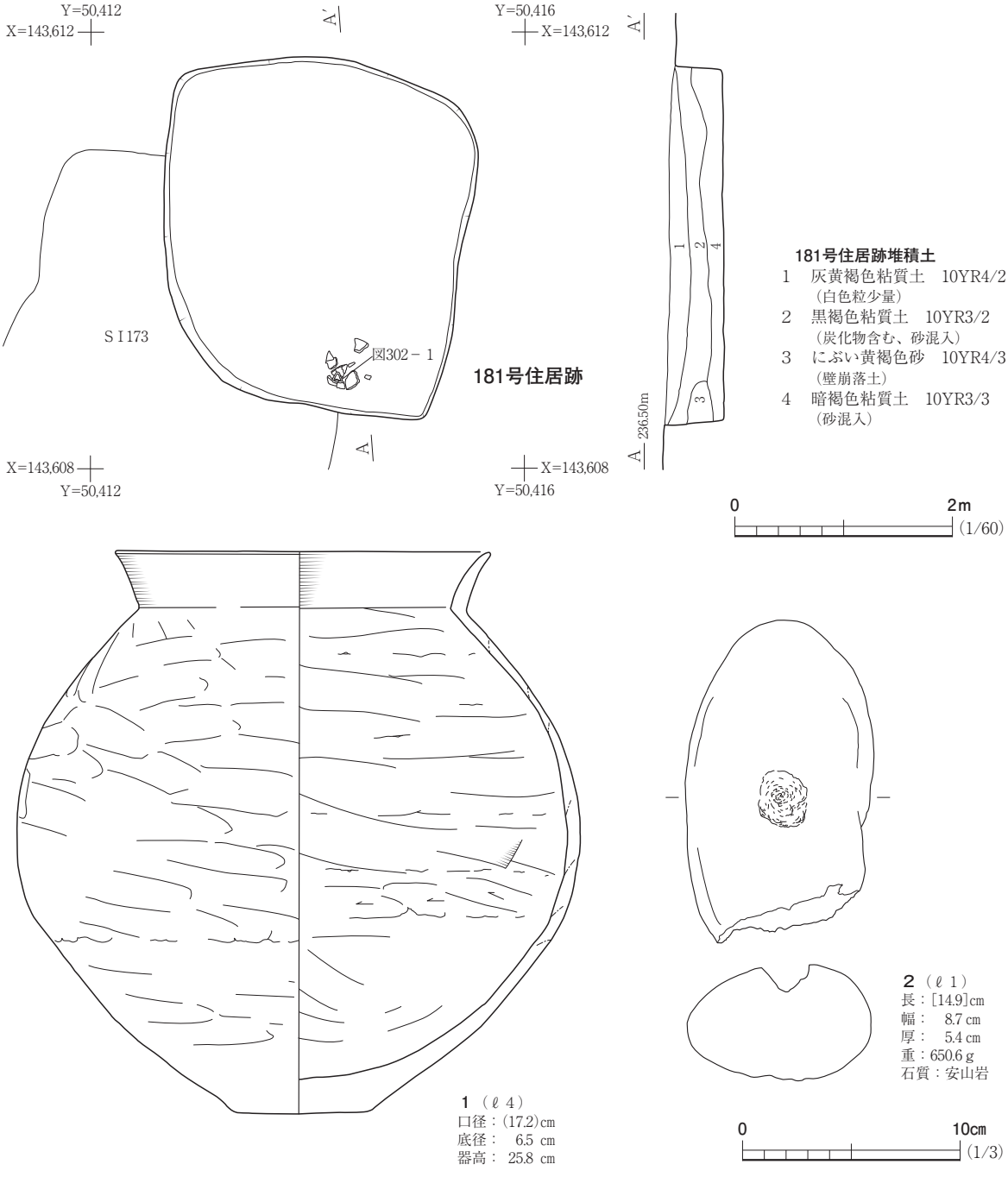


図302　181号住居跡・出土遺物

状に短く外反する。胴部は中位に最大径を有し、底部は平底となっている。２は凹石で、丸みを帯びた長い礫の中央に、２㎝ほどの凹みが認められる。

ま と め

本遺構は、不整形ぎみな長方形の住居跡である。規模は3.2×2.9ｍと小型で、床の踏み締まりや、炉・柱穴といった住居内施設も確認されず、生活感の薄い住居跡である。遺構に伴う遺物は認められず、竪穴の埋没過程において廃棄されたと思われる土師器甕と凹石が出土した。遺物の特徴から古墳時代前期に機能した住居跡と考えている。（神　林）

182号住居跡　ＳＩ182

遺　　構（図303、写真211）

本住居跡は、Ｖ区のＷ・Ｘ－14グリッドのＬⅡｂで検出された。15号溝跡の掘削中、基盤層とは異なる炭化物と焼土を多く含んだ範囲が認められたため、15号溝跡を掘り上げた後に周辺をやや掘り下げたところ、方形に広がる遺構の範囲を確認した。標高235.7～236.0ｍの、北東に向かって下る緩斜面である。15号溝跡より古く、21号溝跡より新しい。

平面形は方形で、規模は3.4×3.6ｍである。西辺は北から24度西に傾く。壁の高さは、残りがもっともよい西壁で高さ40㎝、もっとも残りの悪い東壁で９㎝である。四方の壁とも70度ほどの比較的急な角度で立ち上がる。床はＬⅣを床面として、水平かつ平坦である。

堆積土はレンズ状に自然堆積した２層からなる。上層からℓ１・２とした。ℓ１は炭化物と焼土粒をきわめて多く含む黒褐色土、ℓ２は炭化物と焼土粒を少量含む黒褐色土である。床面からは形を残すほどの炭化材は出土しなかったものの、堆積土に多量の炭化物と焼土が含まれる状況から、廃絶時に火を受けたと考えられる。住居内の施設は検出されなかった。

遺物は、床面から複数出土した。東壁から30㎝ほど離れた位置に２点の土師器の杯が重なって出土した。また、東壁から60㎝ほど離れた位置に１点の土師器杯が正位で出土し、南壁から50㎝ほど離れた位置からは鉄斧が１点出土した。これらの遺物は廃絶時に遺棄されたものと思われる。その他、堆積土中に土器片がまばらに含まれていた。

遺　　物（図303、写真414・448）

本住居跡からは、土師器106点、須恵器２点、弥生土器１点、鉄製品１点が出土した。このうち、土師器４点、弥生土器１点、鉄製品１点を図示した。

図303－１～３は、土師器の杯である。平底で、体部はやや湾曲して立ち上がる。外面にロクロナデののち手持ちヘラケズリを施す。ロクロメの凹凸はほとんどない。１・２の底面には回転ヘラ切り痕がわずかに残る。内面はミガキののち黒色処理を施している。ただし、１・２については、二次被熱によって黒色処理は消え去り、２の上に１がやや斜めに重なって出土した状態が色調の違いとしてそれぞれの器面に焼き付いている。本住居跡が焼失していることを考え合わせると、床面に重ねおかれた状態で火熱を受けた結果、重なり具合が互いに焼き付き、その際に黒色処理もとん

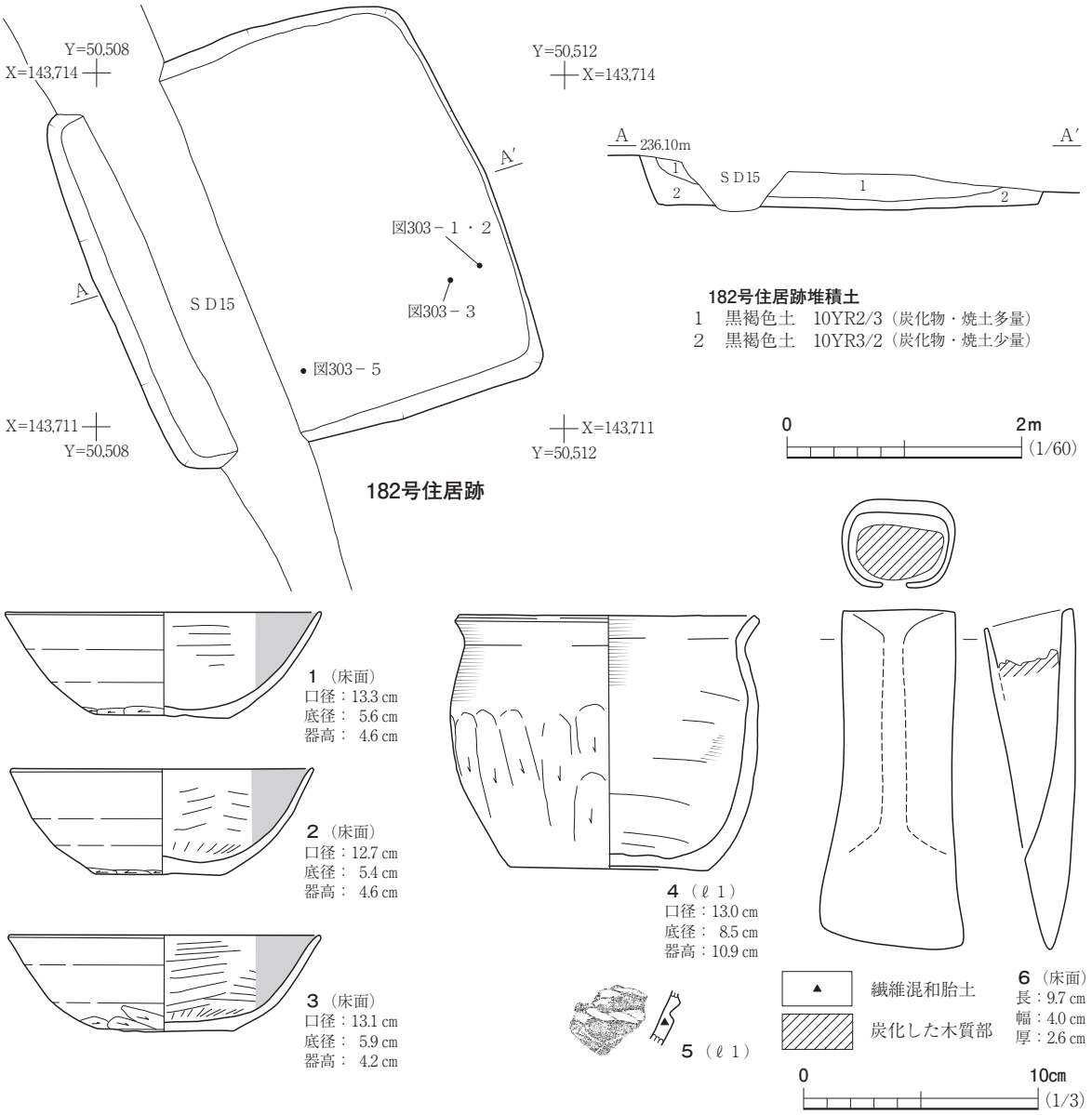


図303　182号住居跡・出土遺物

だと考えられる。

４は、土師器の甕である。平底で、張りのない体部、短く外傾する口縁部をもつ。ヨコナデは口縁部から体部上位に及び、体部下半にはヘラケズリが施される。体部内面にはナデが施される。

５は、弥生土器の小片である。胎土に繊維を混和した痕跡がある。外面に縄の側面圧痕を横位に２条有する。縄の圧痕の幅は最大６㎜である。

６は、鉄斧である。袋状のソケット内に炭化した柄が遺存する。

ま と め

小型の竪穴住居跡で、カマドや柱穴は検出されなかった。廃絶の際に火を受けている。本住居跡の年代は、出土した土器から、平安時代、９世紀に位置づけられる。　（青　山）

183号住居跡　ＳＩ183

遺　　構（図304、写真212）

Ⅴ区西南部のＮ－24・25グリッドに位置し、標高235.6ｍ付近の平坦地に立地する。検出面はＬⅡｂ上面である。173・181号住居跡と重複しており、173号住居跡より古く、181号住居より新しい。

住居の大半が173号住居跡に壊されており、全体の詳細は不明である。完全に遺存していた西壁の長さが2.5ｍであることから、平面形は３ｍ前後の方形または長方形と思われる。方位は西壁で北から10度西に傾く。周壁は遺存状況の良い部分が20㎝ほどで、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。床面には貼床が認められず、基盤層であるＬⅢをそのまま床面としていた。

明確な住居内施設は確認されなかった。住居南壁の一部が住居外に張り出しており、カマドの可能性も考えられたが、火を焚いた痕跡などは認められないことから詳細は不明である。

住居内堆積土は３層に分層した。いずれも周辺より流入するような状況が認められることから、自然堆積土と考えられる。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、大半が173号住居跡に壊されているが、一辺３ｍ前後の小型の住居跡と思われる。貼床は施されず、ＬⅢをそのまま床面としている。明確な住居内の施設は認められなかったが、南壁の張り出す部分がカマドの可能性もある。時期を明示できる遺物が出土してないが、平安時代とみられる173号住居跡に壊されていることから、それ以前に機能した遺構と考えられる。　（神　林）

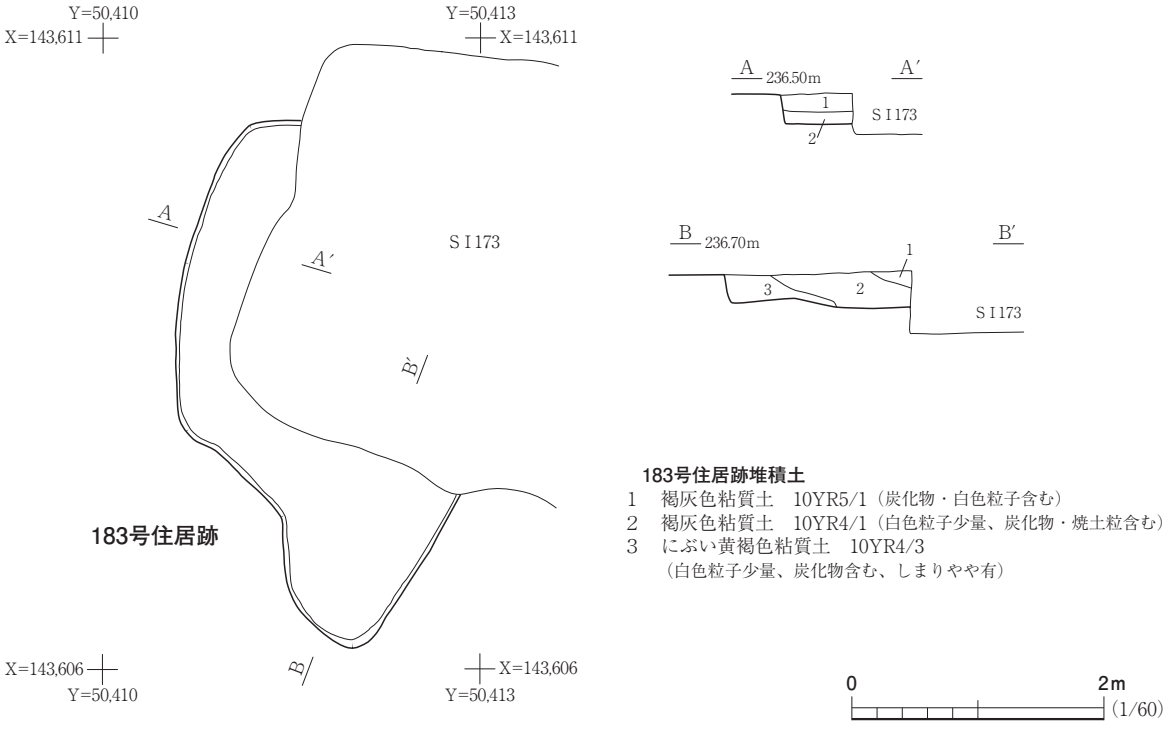


図304　183号住居跡

184号住居跡　ＳＩ184

遺　　構（図305、写真213）

Ⅴ区南西部のＮ－23・24、Ｏ－23・24グリッドにかけて位置し、標高236.4ｍ付近の平坦地に立地する。検出面はＬⅣ上面である。162号住居跡と重複しており本遺構が古い。また確認調査のトレンチによって中央が大きく削平されているため遺存状況はきわめて悪い。

平面形は重複とトレンチによって北半分が遺存していないが、方形または長方形と思われる。規模は南西壁で7.3ｍである。方位は西壁で北から40度西に傾く。周壁は遺存状況の良い部分で25～30㎝で、床面より約80度で立ち上がる。床はＬⅣを床面としており、平坦になっている。

住居内堆積土は２層に分層した。ℓ１は黒褐色の砂層で、わずかに炭が含まれていた。ℓ２は床面を覆う暗褐色砂層である。黒褐色土塊が含まれており、ℓ１に比べるとややしまりが認められた。貼床の可能性も考えられたが、壁際から竪穴内に流入するように堆積していることから自然堆

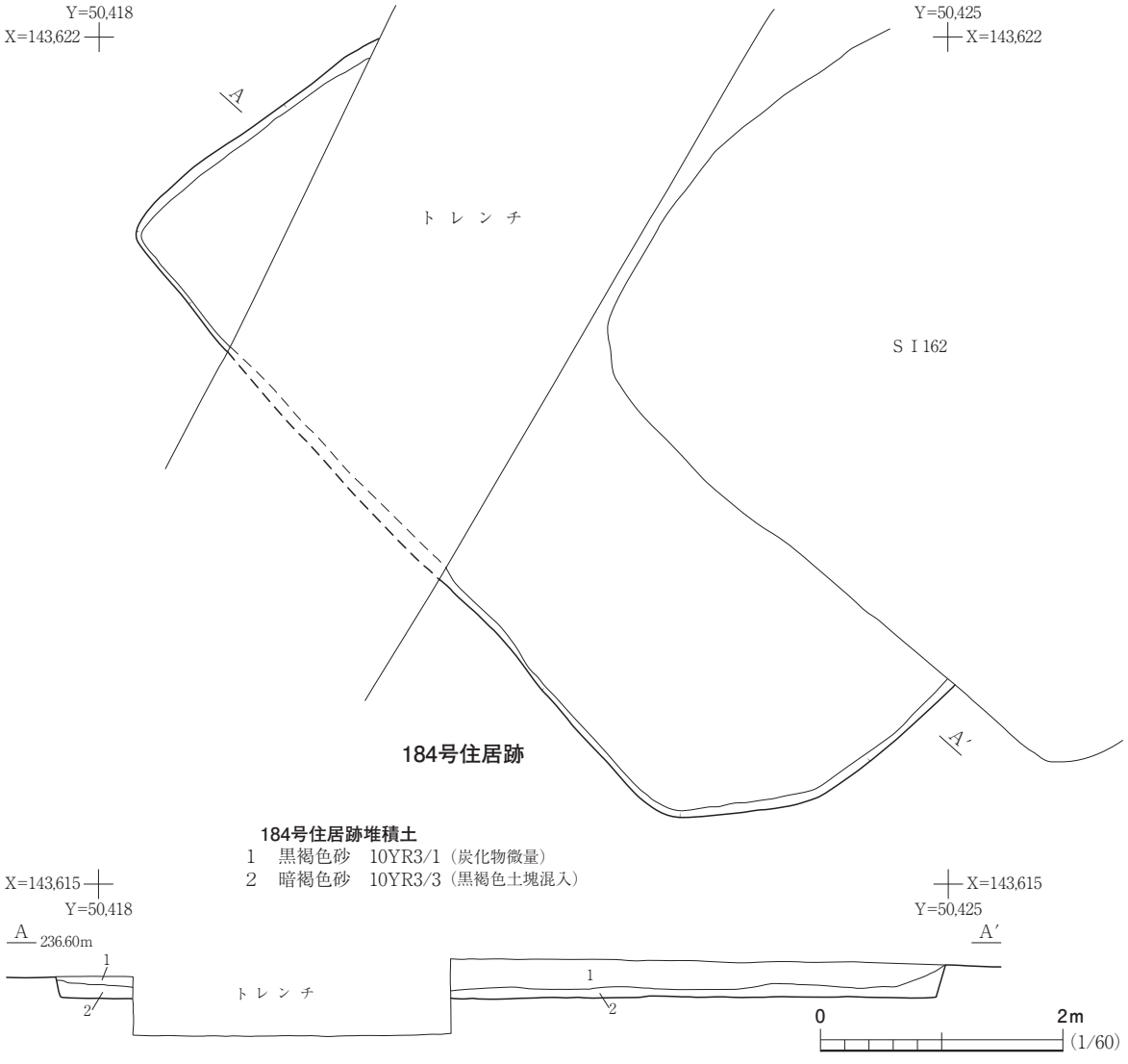


図305　184号住居跡

積土と考えられる。住居内の施設は一切認められなかった。

遺物は土師器が21点出土しているが、いずれも小片で図示できるものはなかった。

ま と め

本遺構は、一辺7.3ｍの方形または長方形の住居跡である。162号住居跡に大半が破壊されるなどしていることから遺存状況はきわめて悪い。床面は貼床を施さずにＬⅣをそのまま床としていた。堆積土からは小片であるが土師器が出土していることから、古墳時代前期に機能した遺構と考えている。（神　林）

185号住居跡　ＳＩ185

遺　　構（図306、写真214）

本遺構は、Ⅳ区西部のＥ－13・14グリッドに位置している。標高235.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣｂである。124号土坑を調査した際に、焼土の集積と方形に広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構は、178・179号住居跡、123・124号土坑である。123・124号土坑より本遺構が古い。178・179号住居跡との新旧関係は、堆積土の切り合い関係が明らかでないため不明である。

堆積土は炭化物粒を多量に含むにぶい黄褐色土である。自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、東側の大半を失っており不明確な点が多いが、２箇所の隅をもつことから、方形ないし長方形と考えている。規模は、北西辺が5.9ｍである。方位は西壁で北から30度東を示す。周壁は、残りの良い北西壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁側で最大12㎝である。床面はＬⅣｂに作られ、平坦で踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、中央からやや西側で１箇所検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は、128×68㎝である。炉の火床面は強く焼けており、赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは６㎝で、床面より５㎝ほど火床面が高くなっている。

ピットは13基検出した。ピット検出位置は、Ｐ１は炉の東側１ｍの地点に位置する。その他のＰ６・７・９・10・13が壁際に位置する。Ｐ２～５・８・11・12は、床面のやや中央寄りに位置する。形態は、Ｐ１が楕円形で底面は平坦に掘り込まれている。機能は貯蔵穴と考えている。Ｐ１の規模は、直径50㎝、深さが25㎝である。Ｐ２～11はおおむね円形ないし楕円形である。規模は20～80㎝、深さが５～24㎝である。Ｐ２～13の機能は明確にできていない。ピットの堆積土は、いずれも炭化物粒を含むにぶい黄褐色砂質土である。遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、北西辺が5.9ｍの方形ないし長方形の竪穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴、ピットが検出された。所属時期は、遺物が出土しておらず判断材料が乏しいが、他遺構との重複関係や検出面などから弥生時代終末期頃と考えている。（中　野）

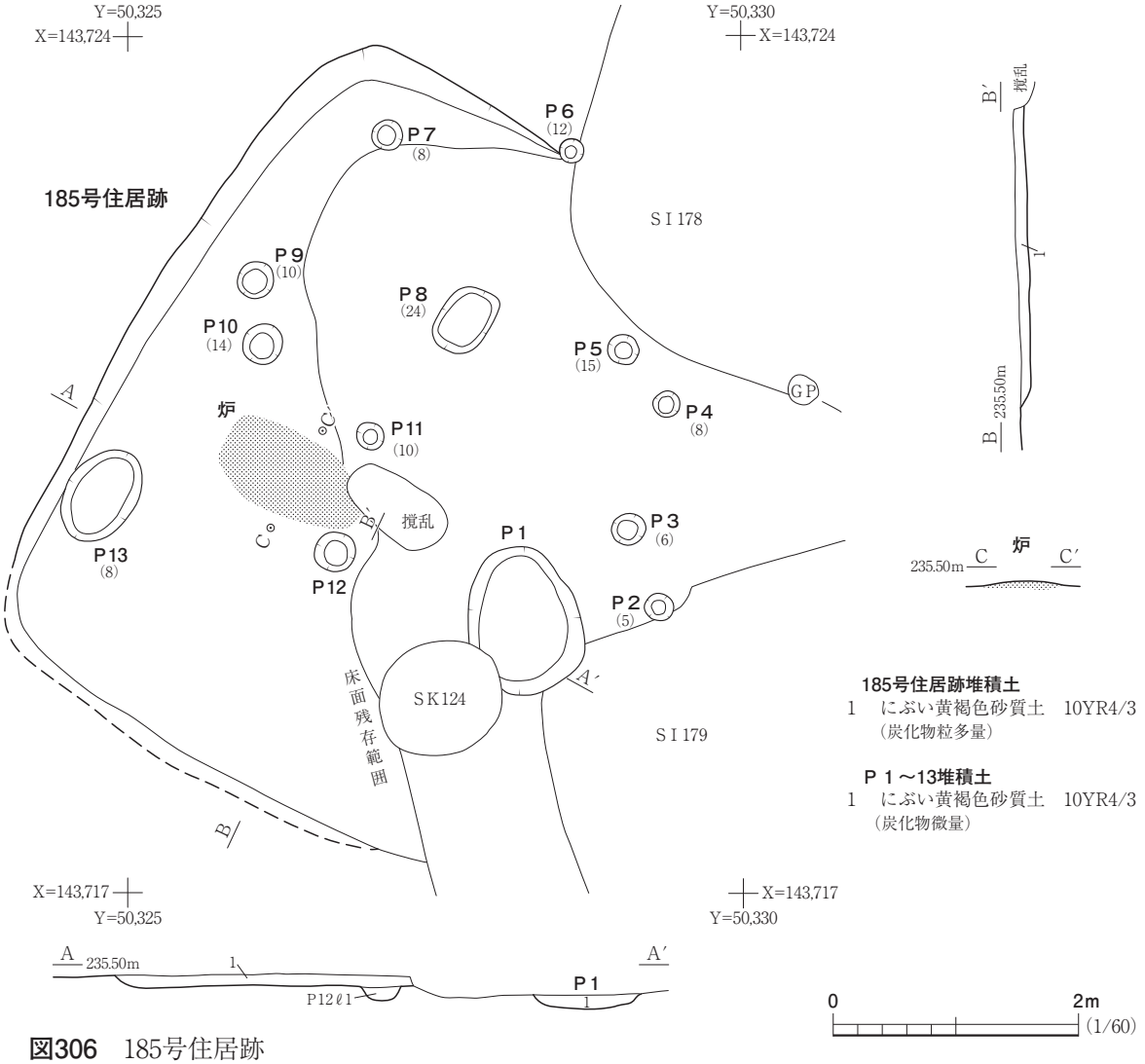


図306　185号住居跡

186号住居跡　ＳＩ186

遺　　構（図307、写真215）

Ｖ区南部Ｎ－24・25グリッドに位置し、標高235.8ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣである。181号住居跡と重複しており、本遺構の方が古い。

平面形は南北に長い長方形で、規模は南北3.1ｍ、東西2.0ｍである。方位は東壁で北から15度西に傾く。周壁は遺存状況の良い部分が45㎝で、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で、掘形底面であるＬⅣをそのまま利用している。

堆積土は４層に分層した。なおℓ１・２・４の上面は181号住居跡の床面として利用されていた。ℓ１は住居中央に見られる暗褐色の砂層である。ℓ２は粘土分が多く、粘性のある砂質土である。ℓ３は洪水砂礫と焼土が含まれる。ℓ４は壁際にみられ、わずかに炭が含まれる。いずれもレンズ状に堆積した様子がうかがえることから、自然堆積土と考えられる。

床面中央にはピットが１基確認された。Ｐ１は南北方向に長い楕円形で、南北60㎝、東西

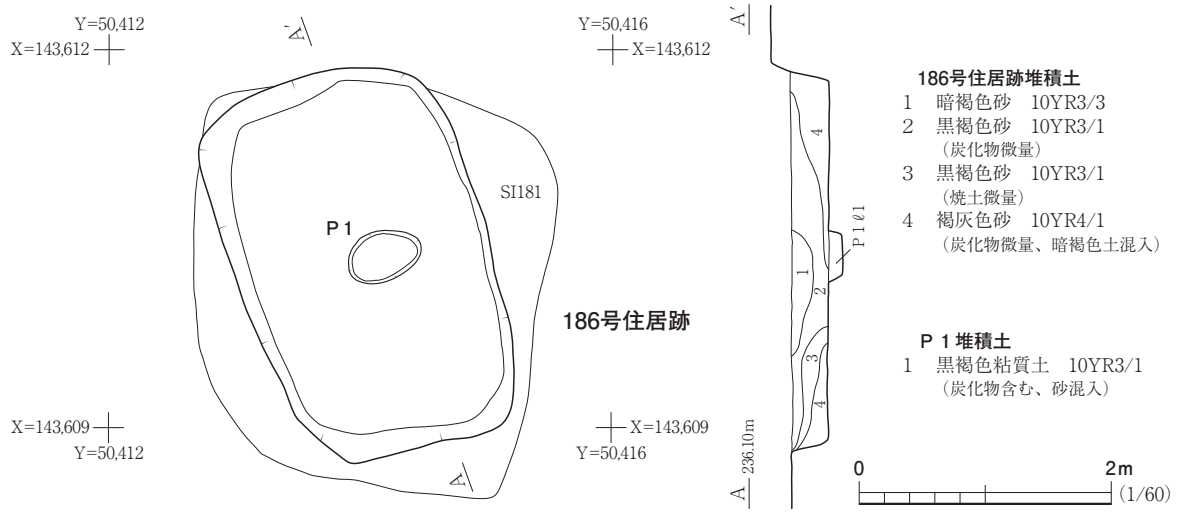


図307　186号住居跡

40㎝、深さ10㎝の規模である。底面は平坦で、周壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は１層で、炭と砂が混じる粘質土が堆積していた。

遺物は床面付近から弥生土器片が１点出土した。北側に位置するＮ－24グリッドおよび、155号住居跡堆積土から出土したものと遺構間接合しており、図481－５として示している。

ま と め

本遺構は、3.1×２ｍの長方形の竪穴住居跡である。床面中央には楕円形のピットが位置している。時期は古墳時代前期の181号住居跡が重複していることや、床面に近い堆積土から弥生土器片が出土していることから、弥生時代終末期と思われる。　（神　林）

187号住居跡　ＳＩ187

遺　　構（図308、写真216）

Ⅴ区南西部のＭ－23グリッドに位置し、標高236.0ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢ上面である。重複している遺構はない。北西側は下層掘削時に削平されており遺存していなかった。

平面形は、遺存している北東壁と南西壁を結んだ長さが5.0ｍであることから、一辺５ｍ前後の方形、または長方形と思われる。方位は東壁で北から34度東に傾く。周壁の高さは遺存状況の良い部分で20㎝ほどである。床面は西に向かって緩やかに傾斜しており、基盤層であるＬⅢおよびＬⅣをそのまま利用している。微量の炭化物が散っている以外は床と基盤層の違いはない。

堆積土は２層に分層した。ℓ１はＬⅢに近い粘質土で、住居中央を中心に堆積し床面を覆っている。ℓ２はＬⅣに近い砂層で、壁際から流れ込むように堆積している。

地床炉や柱穴といった住居内の施設は確認されなかった。

遺　　物（図308、写真414）

遺物は非常に少なく土師器が37点である。図308－１は鉢である。胴部は球胴で、口縁部は短く外傾する。内外面ともにナデ調整され、底面には種子とみられる圧痕が認められる。２は有孔鉢の

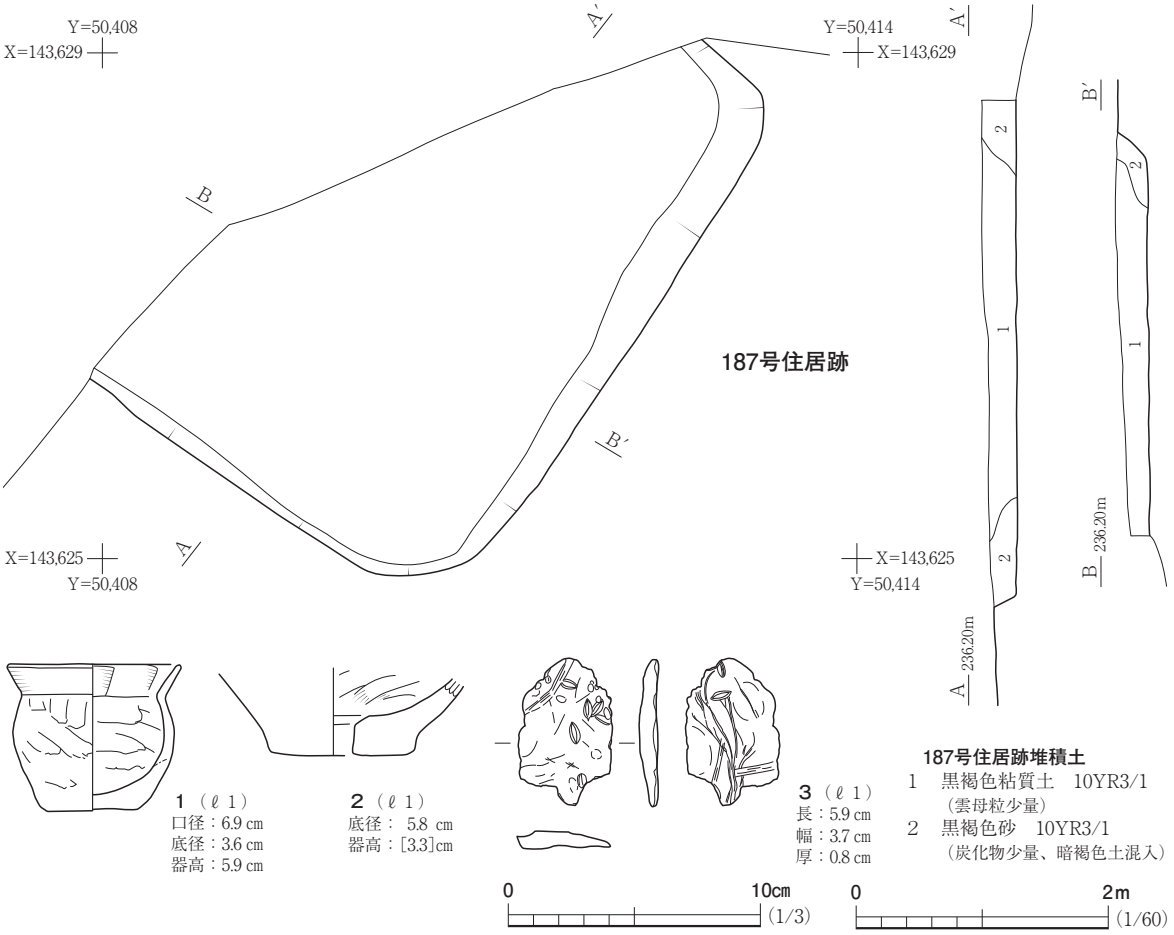


図308　187号住居跡・出土遺物

底部片である。３は厚さ0.2～0.5㎝と非常に薄い焼成粘土塊である。いずれの面にも稲籾がかなり脱落してしまった頴稲の圧痕が認められる。籾痕は粒長１㎝前後、粒幅0.4㎝である。

ま と め

本遺構は、大部分が削平されてしまっているが、一辺５ｍ前後の規模で方形を基調とすると思われる竪穴住居跡である。住居内に伴う施設や床面の踏み締まりは認められず、遺物も非常に少なく、生活感の薄い住居跡である。遺物も小型の鉢や、有孔鉢、植物圧痕のある焼成粘土塊といった特異なものが出土している。時期を明示できる遺物に乏しいが、遺物の特徴や、検出面から古墳時代前期に機能した遺構と考えている。　（神　林）

188号住居跡　ＳＩ188

遺　　構（図309、写真217）

本遺構はⅤ区南部のＰ－23グリッドに位置し、標高236.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣである。遺構上面および北側が大きく削平されており、遺存状態はきわめて悪い。

住居の北側は遺存していないが一辺４ｍ前後の方形と推定される。方位は東壁で北から30度東を示す。周壁は10㎝ほどしか遺存していない。床面はＬⅣ上面を利用しており、水平かつ平坦で

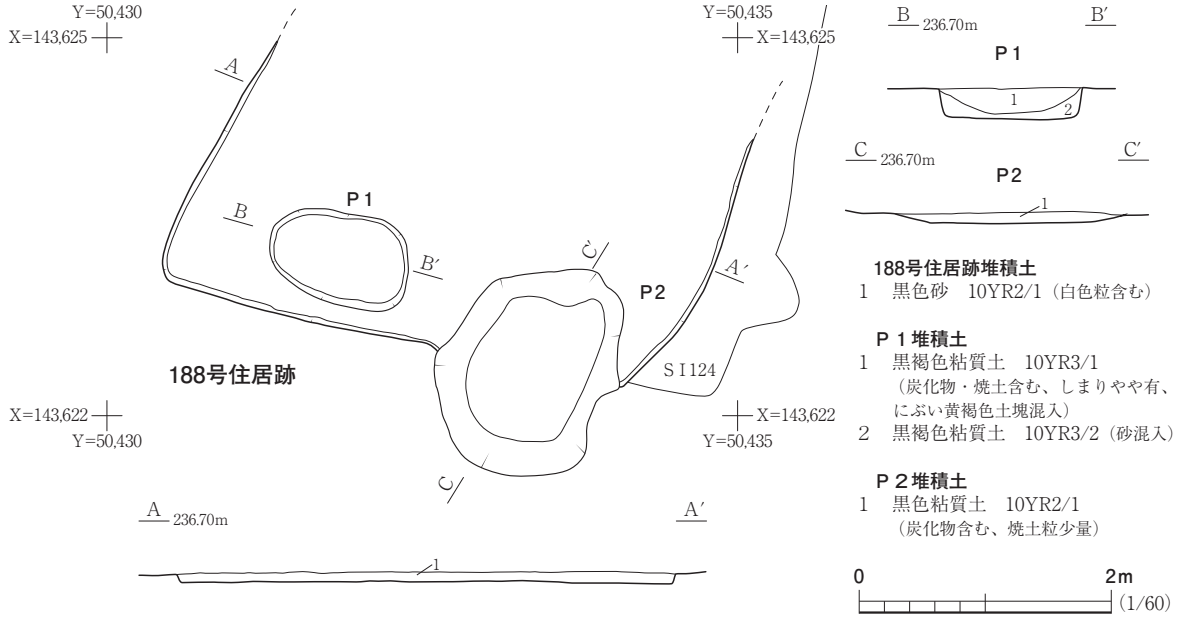


図309　188号住居跡

ある。周辺に比べややしまりが認められたが、硬化面とまでは言えない程度であった。

住居内の施設は、ピットを２基検出した。Ｐ１は貯蔵穴、Ｐ２はカマドの掘形とみられる。

カマドとみられる掘形は、南壁の東端に位置する。焼土化した部分や、袖などの構築材は認められず、堆積土に炭や焼土粒がふくまれ、周壁の一部が住居外に張り出すように立ち上がることから、カマドの掘形と判断した。煙道などの構造は不明である。

貯蔵穴はカマド掘形の東側に位置している。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸110㎝、短軸70㎝、深さ20㎝である。底面はＬⅣに作られ平坦である。周壁は底面より垂直に近い急な角度で立ち上がる。堆積土は２層に分層した。ℓ１は炭化物や焼土を含む黒褐色粘質土で、カマド周辺からの流れ込みと思われる。ℓ２はＬⅣに由来する砂が混じる粘質土である。

遺物はＰ１の堆積土中から、ロクロ調整とみられ、内面に黒色処理が施された土師器の小片が６点出土したが、図示できるものはなかった。

ま と め

本遺構は、遺存状態がきわめて悪いが、カマドをもつ竪穴住居跡とみられる。南東隅にカマドの痕跡とみられる掘形が位置し、その脇には貯蔵穴が備わっている。時期を明示できる遺物はないが、ロクロ調整とみられ、内面に黒色処理が施された土師器片が貯蔵穴の堆積土から出土しており、平安時代頃に機能した遺構と考えている。　（神　林）

189号住居跡　ＳＩ189

遺　　構（図310、写真218）

本遺構は、Ⅳ区西部のＴ・Ｕ－16・17グリッドに位置している。標高236.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣｂである。140号住居跡の全景写真の清掃時に、東側において方形に広がる

遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査を行った。重複する遺構は、108・129・137・140号住居跡、87号土坑である。重複関係はいずれの遺構より本遺構が古い。

堆積土は炭化物粒と焼土粒を含むにぶい黄褐色砂質土である。単層で層厚も薄いが、焼土粒が堆積土全体に入る点などから、人為堆積土と考えている。

遺構の平面形は、北西隅を失っているが、おおむね方形と考えている。規模は、5.1×4.7ｍである。方位は東壁で北から35度西を示す。周壁は、残りの良い東壁側では50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で14㎝である。床面は、ＬⅣｂに作られ平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。住居内の施設は、検出されなかった。

遺物は土師器が３点出土した。甕や鉢の小片である。古墳時代前期の所産である。

ま と め

本遺構は5.1ｍの方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出できなかった。床の踏み締まりも弱く、建物の使用頻度は低かったものと思われる。所属時期は、遺物が少なく判断材料が乏しいが、他遺構との重複関係や検出面などから古墳時代前期と考えている。　　（中　野）

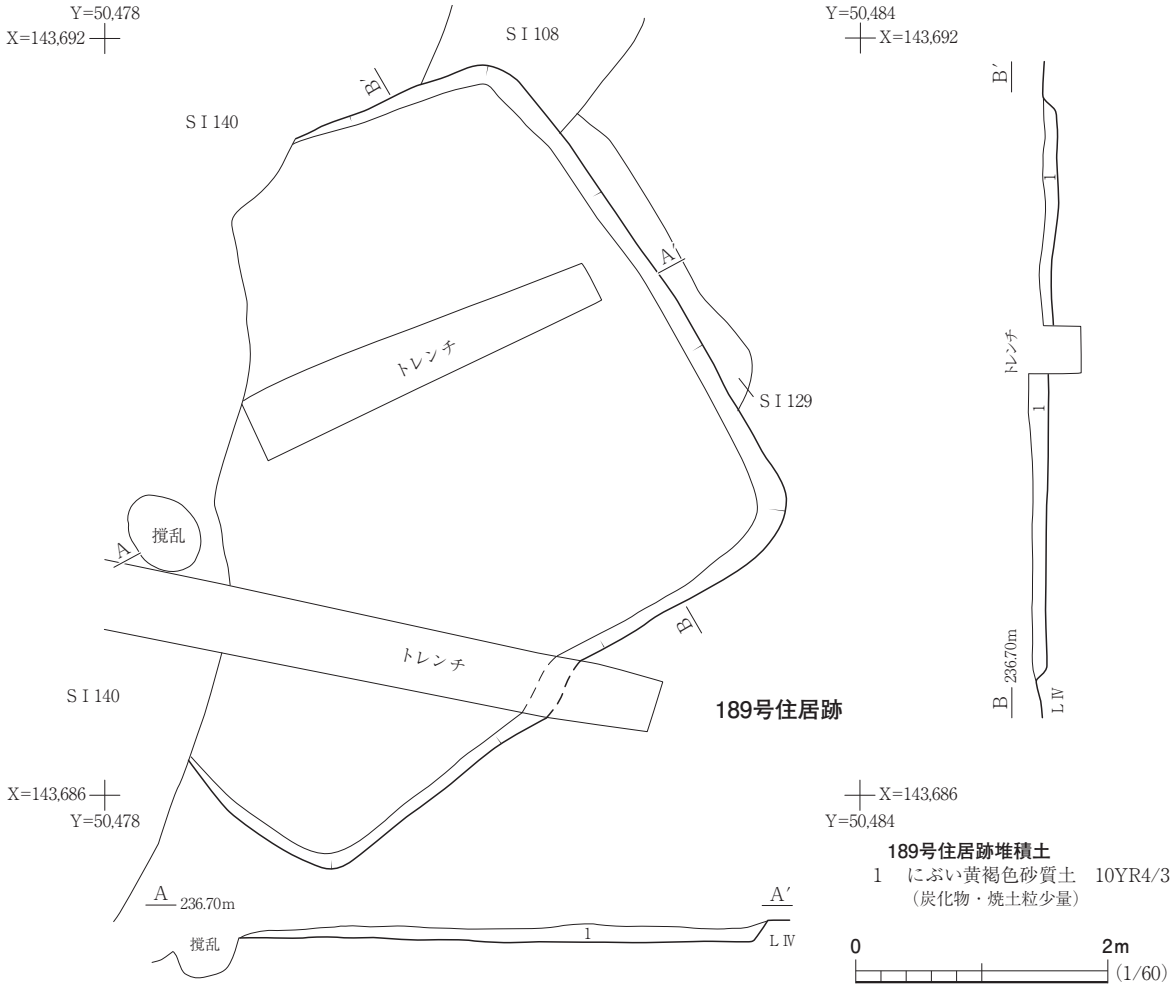
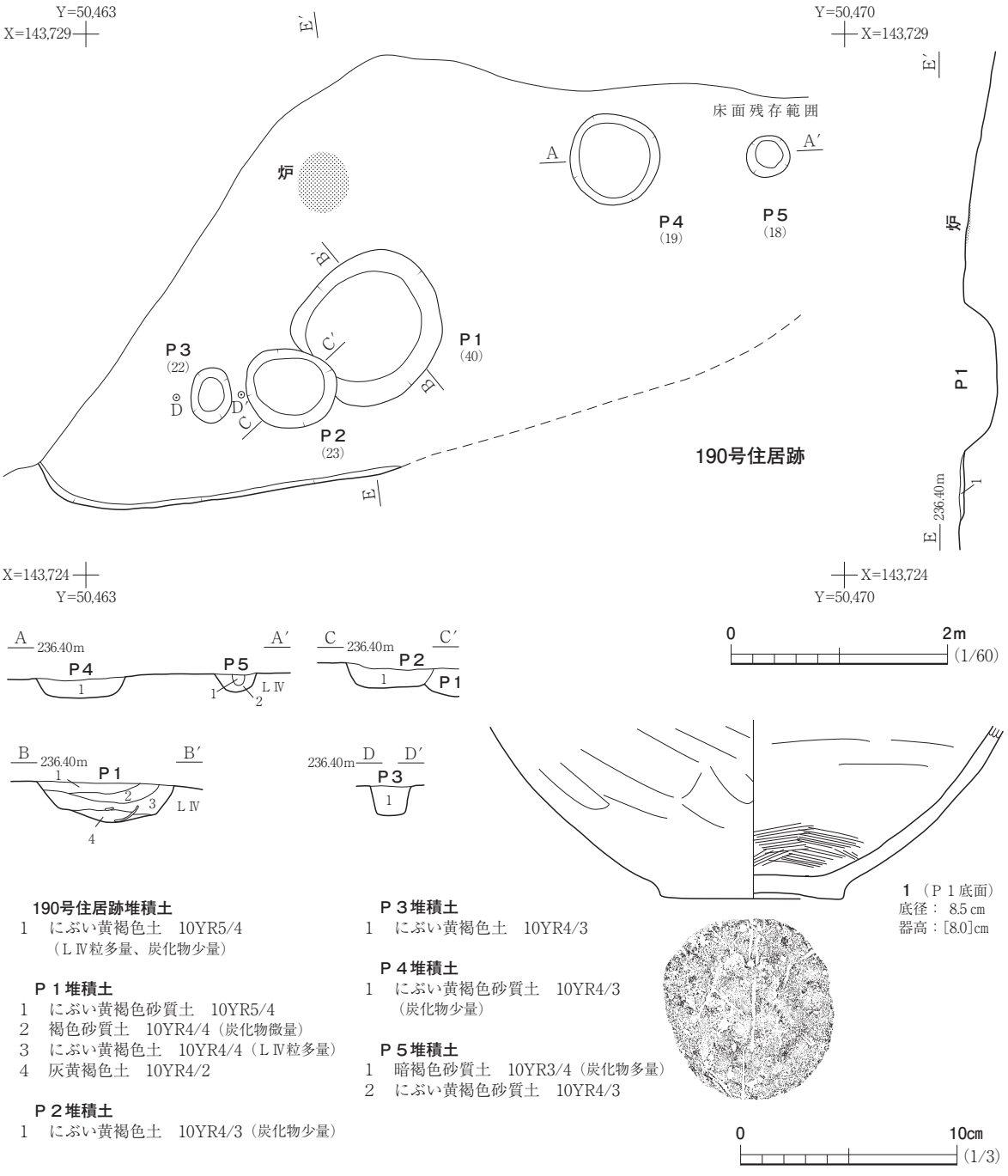


図310　189号住居跡

190号住居跡　ＳＩ190

遺　　構（図311、写真219）

本遺構は、Ⅰ区東部のＳ－13グリッドに位置している。標高236.1ｍ付近の南側から北側に向かって下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣｂである。88号住居跡の周辺を検出した際に、焼土の集積やピットを確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構はない。大半が撹乱により削平されて残りは悪く、南壁の一部と床面の一部のみを検出した。



190号住居跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR5/4
（ＬⅣ粒多量、炭化物少量）

Ｐ１堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/4
2　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/4（ＬⅣ粒多量）
4　灰黄褐色土　10YR4/2

Ｐ２堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物少量）

Ｐ３堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3

Ｐ４堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（炭化物少量）

Ｐ５堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物多量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3

図311　190号住居跡・出土遺物

堆積土は、ＬⅣ粒多く含み、炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色土の１層のみである。堆積過程は層厚が薄いため不明である。

遺構の平面形は、大半を失っており不明確である。規模は、遺存する南西隅から、Ｐ５の長さで推定すると、7.5ｍほどである。周壁は、残りの良い南壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁側で最大で５㎝である。床面は、ＬⅣｂに作られ平坦であるが、踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、南壁から北に2.5ｍの所に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は、長軸55㎝、短軸50㎝である。炉の火床面は強く焼けており、色調は全体が暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは２㎝である。

ピットは５基検出した。検出位置は、Ｐ１～３が炉の南側に位置する。Ｐ４・５は炉の東側に位置する。Ｐ１は楕円形で底面は平坦に掘り込まれている。機能は貯蔵穴と考えている。規模は、長軸140㎝、短軸126㎝、深さ40㎝である。底面から甕の底部片が出土している。堆積土は４層に区分した。ℓ１はにぶい黄褐色砂質土、ℓ２は炭化物を微量含む褐色砂質土、ℓ３はＬⅣ粒を多量に含むにぶい黄褐色砂質土、ℓ４は灰黄褐色砂質土である。色調や混入物の異なる堆積層が交互に堆積することから、いずれも人為堆積土と考えている。Ｐ２～５はおおむね円形ないし楕円形である。規模は40～95㎝、深さが18～23㎝である。Ｐ２～５の機能は明確にできていない。ピットの堆積土は、いずれも炭化物粒を含む暗褐色砂質土やにぶい黄褐色土・砂質土である。

遺　　物（図311）

遺物は、土師器22点が出土し、このうち１点を図示した。図311－１は、球胴形の甕で、底部から胴部下半が遺存している。平底で、底部には木葉痕が確認できる。

ま と め

本遺構は、遺存長が7.5ｍの竪穴住居跡である。遺存状態がきわめて悪く、平面形や堆積状況は不明であったが、地床炉と貯蔵穴、ピットが検出された。床は基盤層をそのまま床面としていた。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代前期頃と考えている。　（中　野）

191号住居跡　ＳＩ191

遺　　構（図312、写真220）

Ⅳ区東部のＩ－13グリッドに位置し、標高235.6ｍ付近の平坦地に立地する。検出面はＬⅢである。南西側に47号住居跡、西側に47・48号畑跡が隣接する。

平面形は東西に長い長方形で、規模は3.5×2.7ｍである。しかし、北東隅は崩落したのかはっきりしなかった。方位は西壁で真北を示す。周壁は遺存状況が良い部分が高さ30㎝で、床面より80度ほどの立ち上がりを示す。床面には貼床が施され平坦となっている。

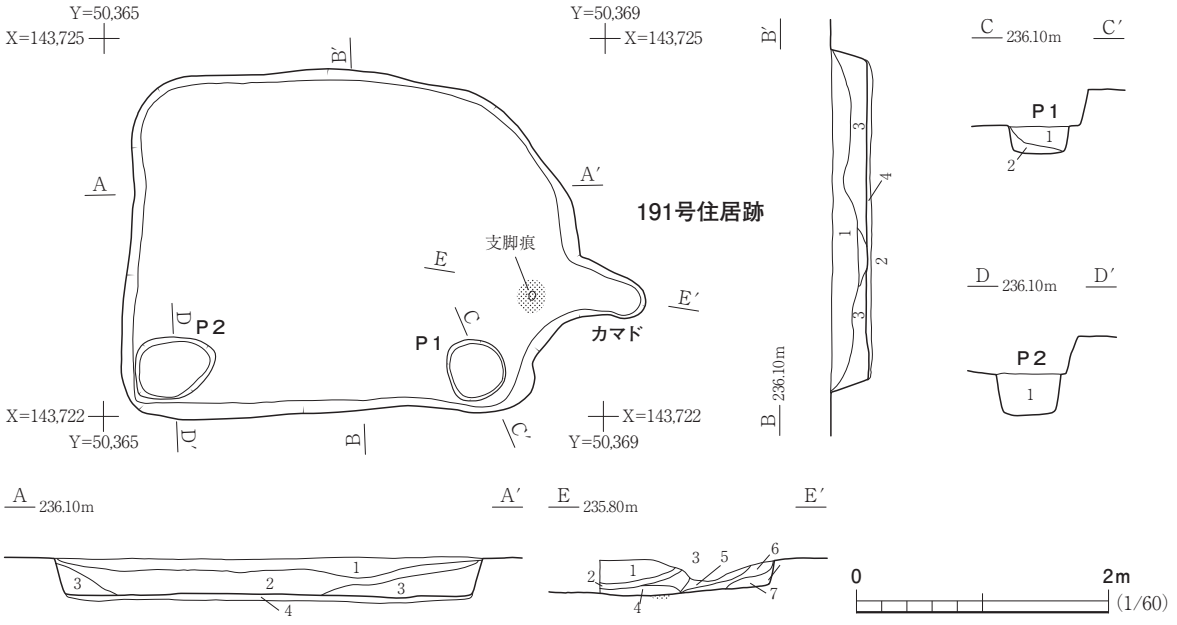
住居内堆積土は４層に分層した。ℓ１は住居上部を覆う褐灰色の粘質土で、榛名山－伊香保テフラ（Hr－FP）とみられる白色粒子が多く含まれる。ℓ２は住居中央、ℓ３は壁際にみられ、いずれ

も堆積状況から自然堆積土と思われる。ℓ４は住居掘形底面を覆っており、貼床構築土と思われる。

住居内の施設は、カマド１基とピット２基を確認した。

カマドは東壁中央に位置する。燃焼部については、袖などは残っておらず、底面が、30×25㎝、厚さ３㎝の範囲で焼土化していた。中央には焼土化程度が弱い硬化面が認めらており、支脚を立てていた痕跡と思われる。煙道は壁から60㎝ほど住居外に延びている。底面はわずかに傾斜し床面より高くなっている。カマド内堆積土は７層に分層した。ℓ１～４は燃焼部に堆積している。ℓ１は住居内堆積土と共通する土である。ℓ２は他の土に比べ粘性が強い土であることから、カマド構築土に由来すると考えられる。ℓ３は住居外からの流入土とみられる。ℓ４は燃焼面を覆う炭化物層で、一部は床面や隣接するＰ１にも流れ込んでいる。ℓ５～７は煙道に堆積する土である。このうちℓ５・７は流入土と考えられる。ℓ６はℓ２に近似した土で、周りの土に比べて粘性が強いことから、煙道天井などのカマド構築土に由来する土の可能性が考えられる。

Ｐ１は南東隅に位置している。平面は楕円形で、規模は直径50㎝、深さ20㎝である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は２層である。ℓ１は基盤層であるＬⅢに由来する土である。ℓ２はカマド側から流れ込むように堆積している。土質もカマド内堆積土ℓ４と共通



191号住居跡堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒多量、細い褐色土塊混入）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色粒多量、炭化物含む、焼土粒少量、細い褐色土塊混入）
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（白色粒少量）
4　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒多量、炭化物・焼土粒含む、黒褐色土塊混入、しまり有、貼床）

Ｐ１堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒少量）
2　黒色炭化物層　10YR1.7/1（炭化物多量）

Ｐ２堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物少量）

カマド堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒多量、細い暗褐色土塊混入）
2　暗褐色粘質土　10YR3/3（白色粒含む、しまりやや有）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色粒含む、焼土粒少量）
4　黒色炭化物　10YR1.7/1（炭化物多量、焼土粒含む、暗褐色土塊混入）
5　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色粒少量、にぶい黄褐色土塊混入）
6　暗褐色粘質土　10YR3/3（白色粒・炭化物・焼土粒少量、しまりやや有）
7　黒色粘質土　10YR2/1（炭化物含む、焼土粒少量）

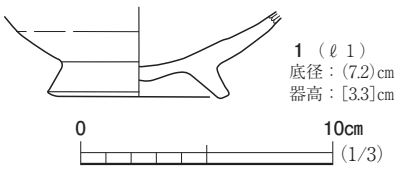


図312　191号住居跡・出土遺物

している。位置や形態から貯蔵穴の可能性が考えられる。Ｐ２は南西隅に位置している。平面は楕円形で、規模は長軸65㎝、短軸50㎝、深さ32㎝である。周壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は１層で、基盤層であるＬⅢに近似した土が堆積している。

遺　　物（図312）

出土した遺物は、土師器片９点、須恵器片２点と非常に少なく、ほとんどが堆積土中から出土しており、遺構に伴うものは認められなかった。またいずれも細片であり、図示できたのは図312－１の高台付杯のみである。赤焼土器とみられ、調整はロクロナデが施される。胎土には非常に多量の雲母粒や砂粒が含まれている。

ま と め

本遺構は平面形が方形の住居跡である。東壁にカマドがつくられ、南東隅と南西隅にＰ１・２が位置する。カマドは燃焼部に焼土化した範囲と、支脚を立てた痕跡が認められた。しかし袖などの痕跡は一切認められなかった。よってカマドの機能が停止した後に燃焼部を壊して、構築材や支脚を持ち出した可能性が考えられる。遺構に伴う遺物は認められないが、ℓ１出土の赤焼土器からおおよそ平安時代の９世紀後半から10世紀頃に機能した遺構と考えている。　（神　林）

193号住居跡　ＳＩ193

遺　　構（図313、写真221）

本遺構は、Ⅴ区北部のＴ－16・17グリッドに位置しており、標高236.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。130号住居跡の床面の断ち割りを行ったところ、焼土粒を含む堆積層を確認した。当初は、130号住居跡の床下とも考えたが、土層観察畦を残しながら精査したところ、炭化材や礫が出土し、130号住居跡より少しずれた、方形に広がる遺構の範囲を確認したため、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、108・115・130・137・140号住居跡、137号土坑である。重複関係は、本遺構が140号住居跡より新しく、それ以外の遺構より古い。

堆積土は、４層に区分した。ℓ１は褐色砂質土である。非常に硬く締まっており、130号住居跡は、この層の上面を床としていた。130号住居跡の貼床構築土の可能性もあるが明らかにできなかった。ℓ２は混入物と質感などでａ～ｄに細分している。いずれも炭化物粒やＬⅣ粒を含むにぶい黄褐色砂質土から褐色砂質土である。締まりが強く、やや水平ぎみに堆積することから、人為的に埋めた堆積土と考えている。ℓ３は炭化物粒塊を多量に含む黒褐色砂質土である。炭化材や礫などを多数含む。炭化材は、住居跡の南西側から中央にかけてのℓ３下面から床面にかけて出土している。Ｐ４の南側などやや集中がみられるが、いずれもランダムに出土しており、梁や垂木など用途のわかる材の配置ではない。最大の炭化材は、住居西部で検出されたもので、長さ40㎝、幅８㎝、厚さ５㎝である。ℓ４は暗褐色砂質土である。ℓ３・４も住居の材を焼却した後に埋めた、人為的な堆積土と考えている。

平面形は、方形である。規模は6.9×6.4ｍである。周壁は、遺存状態の良い南壁側で60度で立

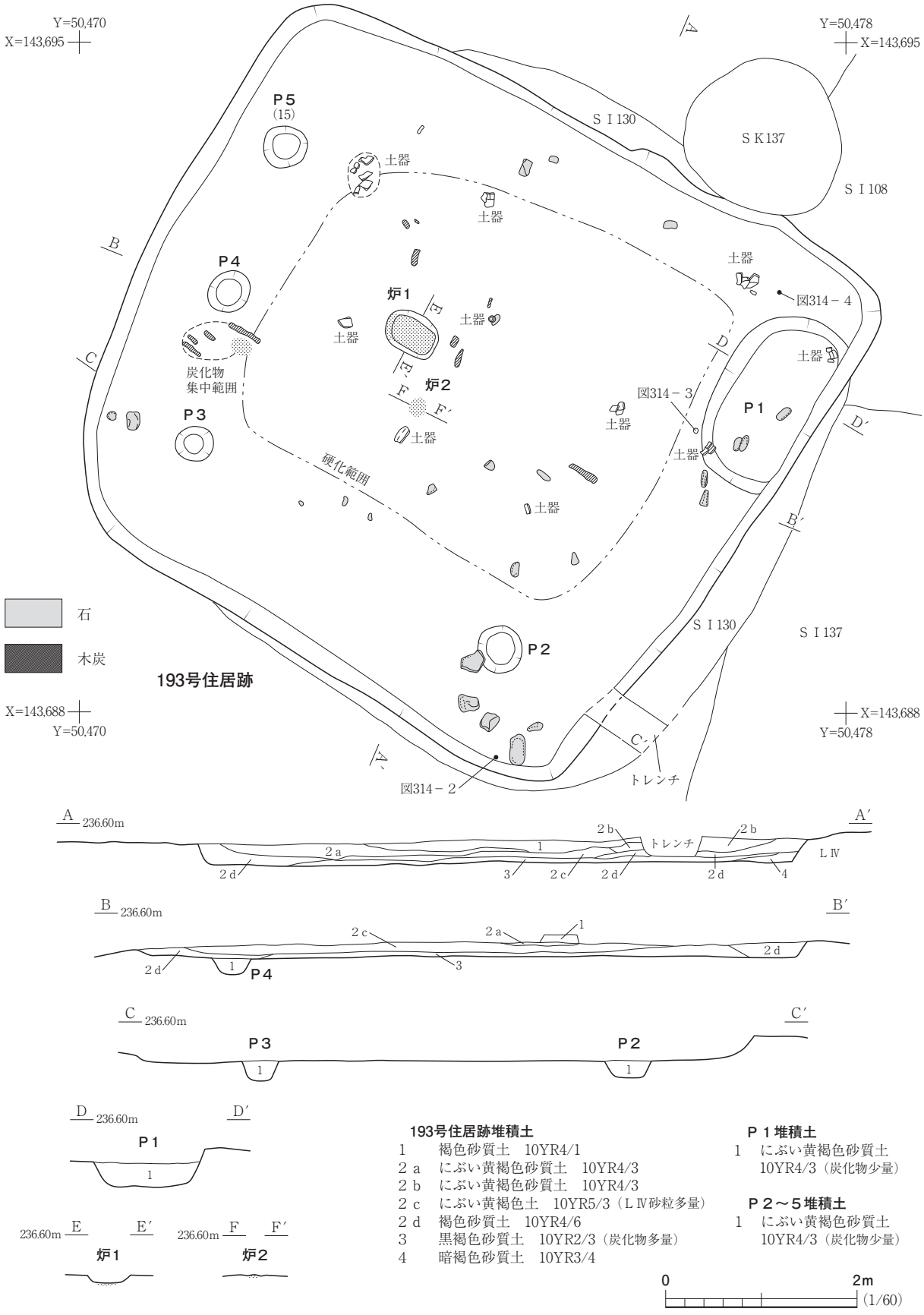


図313　193号住居跡

ち上がる。壁の遺存高は、もっとも残りの良い北壁で25㎝である。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に25度傾く。床面はＬⅣを利用して作られており、中央では、炉を囲むように、4.4×3.7ｍの範囲で踏み締まりによるとみられる硬化面が形成されていた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面のほぼ中央やや西側に１箇所と、その炉の南側50㎝の所にもう１箇所検出した。北側を炉１、南側を炉２とした。炉１は、当初はピットと考え一段下げたところ、火床面が検出された。平面形は楕円形である。規模は長軸57㎝、短軸44㎝である。掘り込みの深さは８㎝である。掘り込みには住居内堆積土のℓ３に対応する土が堆積しており、住居廃絶時には、火床面は露出していたと思われる。炉の火床面は、平坦に掘り整えられており、焼け方は強く、暗赤褐色に焼土化している。焼土化範囲の厚さは、燃焼部底面で２㎝である。炉２は、平面形が円形である。規模は直径が18㎝で掘り込みは持たない。焼け方は強く、暗赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは、１㎝である。

ピットは、５基検出した。Ｐ１は、北東隅からやや南側に寄って位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形が南北に長い楕円形を呈する。底面は平坦に掘り込まれている。規模は194×115㎝、深さ25㎝である。堆積土は炭化物を含むにぶい黄褐色土である。Ｐ２～５は、南壁側から西壁側にかけて「Ｌ」字形に配置されていた。平面形は楕円形ないし円形である。直径は30～50㎝、深さは15～20㎝である。堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土で、柱痕跡などはみられなかった。これらのピットは柱穴の可能性も考えられるが、明確にはできなかった。

遺物は、量は多くないもののℓ３下面から床面にかけて比較的まとまって出土しており、炭化材と同じような出土状況が見てとれる。南東隅の床面からは図314－２の土製品が出土した。３・４はＰ１の西側のℓ２下面より出土した。

遺　　物（図314、写真414）

遺物は、土師器184点、土製品３点、鉄製品２点が出土した。このうち土師器１点、土製品３点、鉄製品２点を図示した。

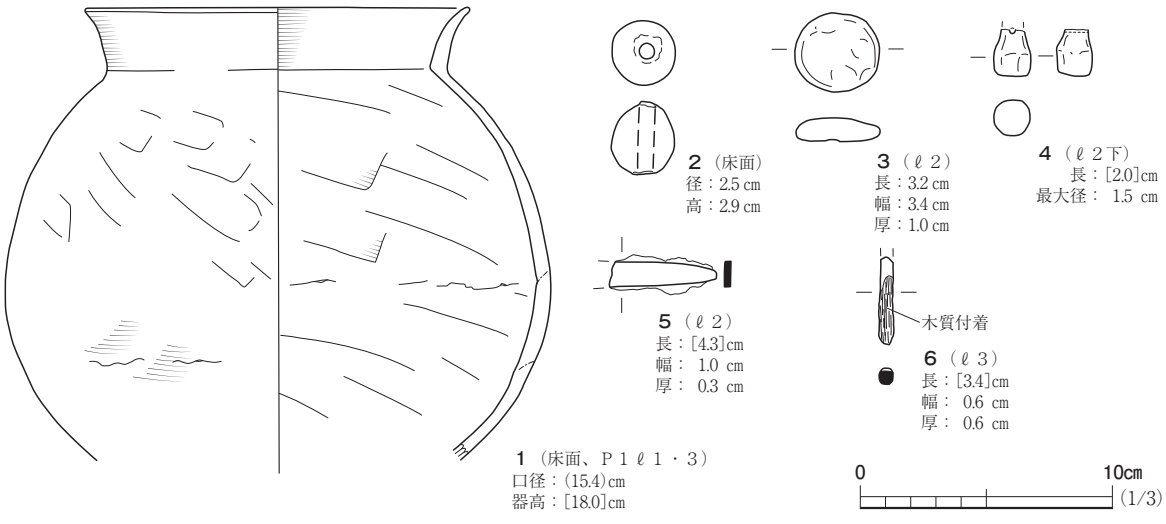


図314　193号住居跡出土遺物

図314－１は、頸部から口縁部にかけて「く」字状に外反する球胴の甕である。２は土玉とみられる球形の土製品である。中央には３㎜ほどの貫通孔が穿たれている。３は平たい円板状の土製品である。４は分銅のような形態の土製品である。上部が欠損している。16号住居跡においても同様な土製品が出土している。上部がつまみ状に成形され、孔が穿たれている。５・６は鉄製品である。具体的な機能は不明だが、いずれも断面が四角になる。６には木質が遺存する。

ま と め

本遺構は、6.9×6.4ｍの方形の竪穴住居跡である。地床炉２箇所と貯蔵穴、ピットが検出された。堆積土からは、炭化材や焼土の集積が確認された。火災住居と考えられ、住居廃絶後に、材を焼いて、埋めているものと考えられる。また、遺物は土製品が３点出土している。所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。（中　野）

194号住居跡　ＳＩ194

遺　　構（図315、写真222）

本遺構は、Ｉ区東部のＱ・Ｒ－12・13グリッドに位置している。標高236.0ｍ付近の平坦面で、南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣａである。49号畑跡を検出中に方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、49号畑跡で、本遺構が古い。

堆積土は炭化物粒を含むにぶい黄褐色土である。単層で層厚も薄いことから、堆積過程の詳細は不明であるが、おおむね自然堆積と考えている。

遺構の平面形は隅丸方形である。規模は4.6×4.5ｍである。方位は東壁で北から15度東を示す。周壁は、西壁側では40度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大12㎝である。床面は、ＬⅣｂに作られ平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、ピット２基である。それぞれ南壁側に位置し、南西側をＰ１、南東側をＰ２とした。規模は、Ｐ１が直径35㎝、深さ７㎝、Ｐ２が直径30㎝、深さ７㎝であるが、位置や平面形からは柱穴の可能性も考えられる。堆積土は住居内堆積土と同じ、炭化物粒を含むにぶい黄褐色土であり、住居廃絶時には開口していたと思われる。機能は明らかにできなかった。

遺　　物（図315）

遺物は、土師器が51点出土し、１点を図示した。

図315－１は複合口縁の壺である。口縁部のみ出土しており、流入したものと思われる。

ま と め

本遺構は、4.6ｍの方形の竪穴住居跡である。住居内の施設はピット２基である。所属時期は、検出面や遺物などから古墳時代前期と考えている。なお本遺構を壊して作られる49号畑跡も古墳時代前期に比定されることから、本住居跡は、古墳時代前期の遺構の中でも比較的古い段階に位置付けられる。（中　野）

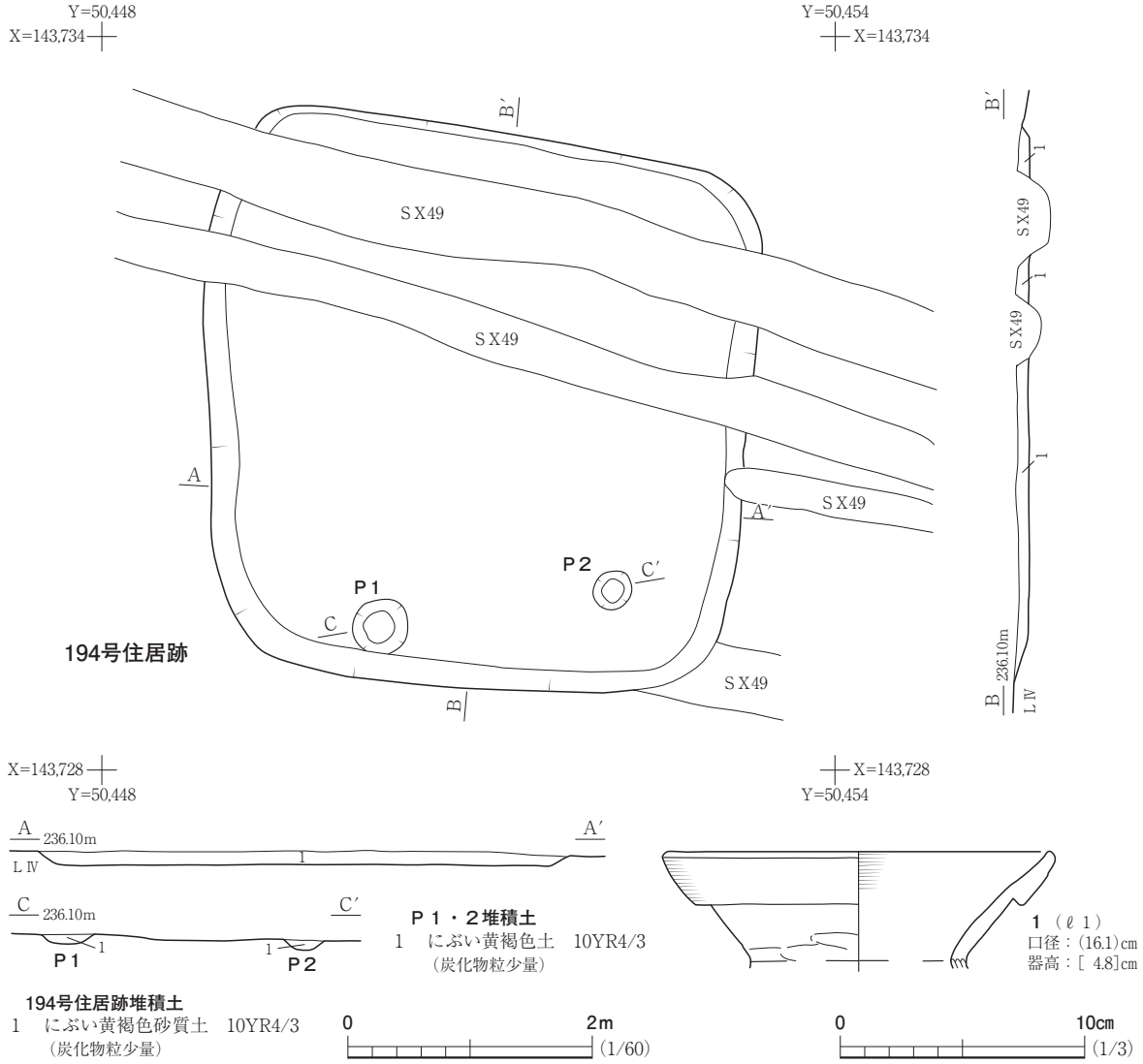


図315　194号住居跡・出土遺物

195号住居跡　ＳＩ195

遺　　構（図316、写真223・267）

本遺構は、Ⅰ区東南部のＰ・Ｑ－13グリッドに位置しており、標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は49号畑跡で、本遺構が新しい。

堆積土は５層に区分した。ℓ１はＬⅡｂ③に対応する褐色砂質土である。ℓ２は炭化物を含む暗褐色土である。ℓ３は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。住居北部中央と地床炉の南側のℓ３下面から床面にかけては、焼土と炭化材が出土している。炭化材や焼土は少ないことから、住居廃絶時に材などを焼いたと考えている。ℓ４は褐色砂質土で壁際に堆積する土層である。堆積土は、おおむね自然堆積土である。ℓ５は、掘形底面を覆う炭化物や焼土粒を含む灰黄褐色土で、貼床の構築土である。

平面形は、隅丸方形である。規模は4.2×4.1ｍである。周壁は遺存状態の良い東壁側では50度

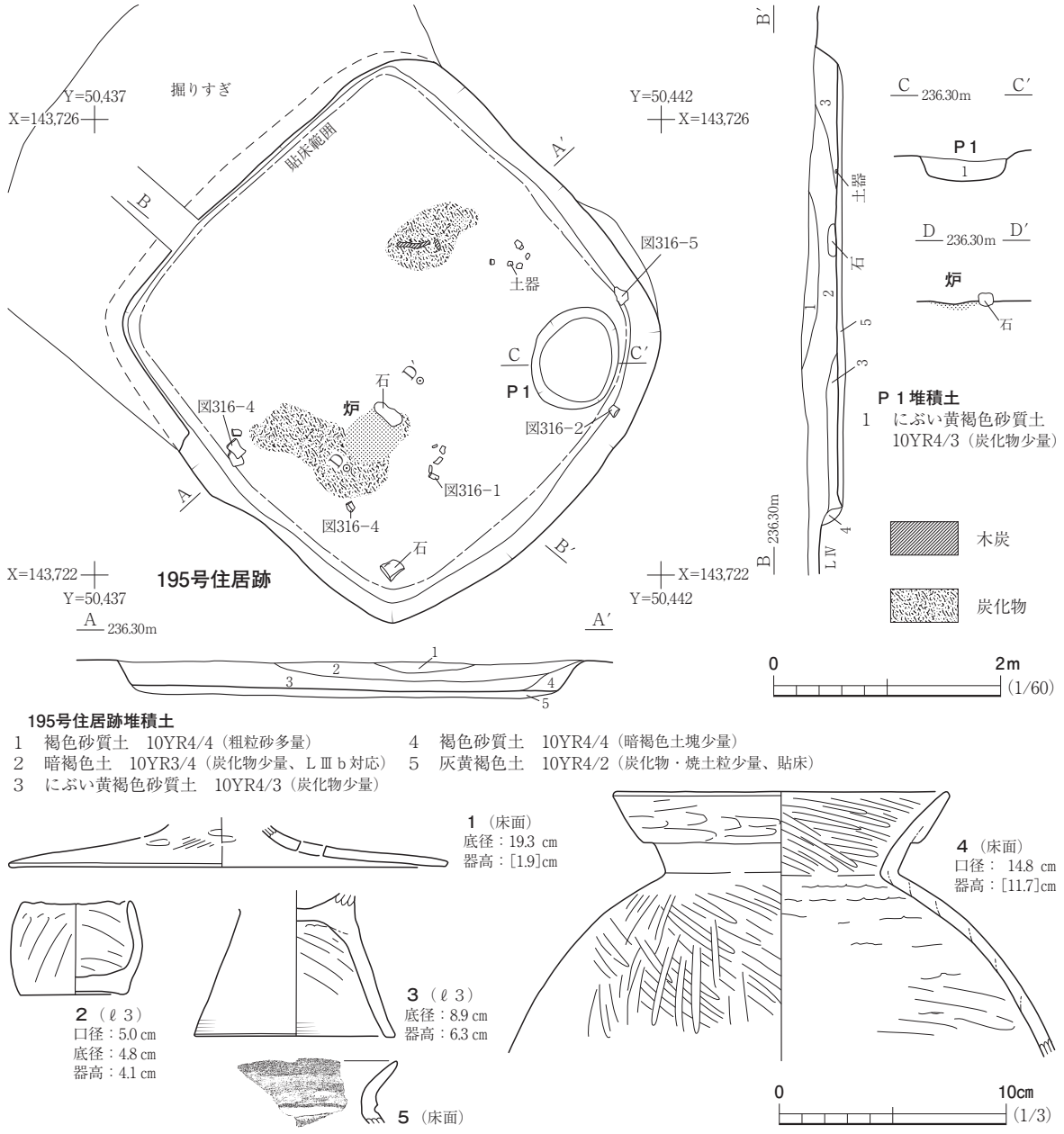


図316　195号住居跡・出土遺物

の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、北壁で25㎝である。方位は、残りの良い東壁を基準とするなら北に対して東に40度傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣ上に貼床を構築しており、おおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は床面中央からやや南東に寄った位置で１箇所検出した。平面形は、楕円形を呈する。炉の北縁側には28×11×13㎝ほどの細長い礫を１個据えている。炉の中央は、やや窪んだ状態である。火床面はよく焼けており､50×42㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは４㎝である。

ピットは北東隅において１基検出した。Ｐ１は貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は90×77㎝、深さ17㎝である。堆積土は炭化物を少量含むにぶい

黄褐色砂質土であり、住居内堆積土ℓ３と共通した土である。

遺物は、住居跡の北部に堆積するℓ３から、図316－２の小型土器が正立して出土している。また、炉の南側から東側の床面にかけて、１や４などの遺物が比較的まとまって出土している。

遺　　物（図316、写真415）

遺物は、土師器74点が出土した。このうち５点を図示した。

図316－１は高杯の脚部である。２は鉢である。３は台付甕の台部片である。４は複合口縁の壺である。５は頸部に隆帯をめぐらしており、器種は鉢と考えられる。

ま と め

本遺構は、4.2ｍほどの方形の竪穴住居跡である。地床炉が１箇所検出された。住居跡は、廃絶後に材を焼いたと考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。49号畑跡を壊して作られていることから、周辺の古墳時代前期の遺構の中では、もっとも新しい遺構の一つである。　（中　野）

196号住居跡　ＳＩ196

遺　　構（図317、写真224）

本遺構は、Ｉ区東南部のＰ－14グリッドに位置しており、標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣｂである。検出後に、周囲がＬⅣｂの砂地であったことから、大雨で壁面と堆積

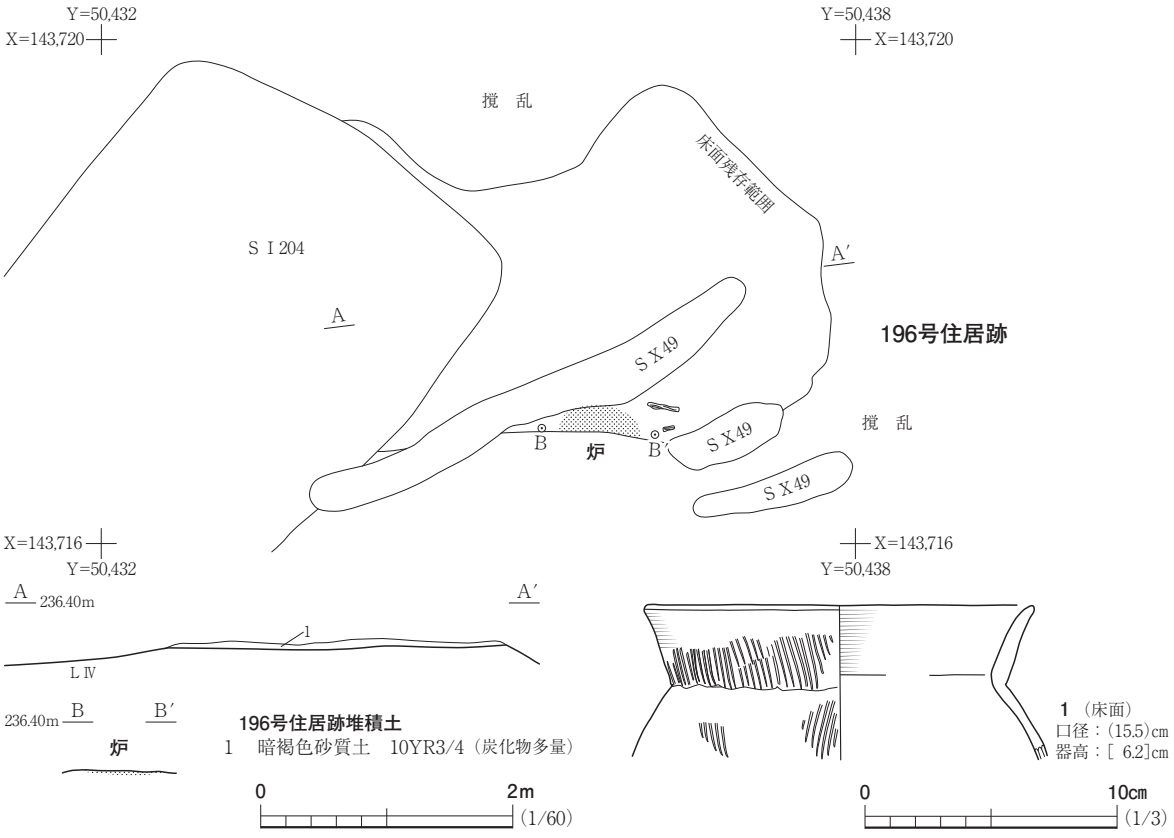


図317　196号住居跡・出土遺物

土の大半が流出してしまい、確認出来たのは床面の一部のみである。重複する遺構は、204号住居跡と49号畑跡である。本遺構が204号住居跡より新しく、49号畑跡より古い。

堆積土は炭化物を多量に含む暗褐色砂質土の単層である。地床炉の東側の床面にかけては、焼土と炭化材が出土している。残りが悪くて不明確だが、火災住居の可能性がある。

平面形は、不明である。規模は床面の残っている範囲で最大4.0ｍである。周壁は検出できなかった。床面は、ＬⅣｂに構築しておりおおむね平坦に作られ、硬く踏み締まっている。

住居内の施設としては、地床炉を南側で１箇所検出した。平面形は、遺存状態が悪いが楕円形と思われ、長軸が64㎝の範囲で赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは２㎝であり、火床面の高さは床面と変わらない。遺物は、床面北側から甕の破片が出土している。

遺　　物（図317）

遺物は、土師器８点が出土し、１点を図示した。

図317－１は球胴形の甕である。外面にはハケメ調整を施す。

ま と め

本遺構は、4.0ｍほどの竪穴住居跡である。地床炉が１箇所検出された。住居跡は、非常に残りが悪く、形態などは不明である。床面に炭化材が出土することから火災住居と考えている。遺構の所属時期は、出土遺物や検出面などから古墳時代前期頃と考えられる。　　（中　野）

197号住居跡　ＳＩ197

遺　　構（図318、写真225・270）

Ⅳ区北部のＧ・Ｈ－５・６グリッドに位置し、標高235.9ｍ付近に位置する。検出面はＬⅣである。重複する遺構はなく、北東側約２ｍに224号住居跡が位置している。

重機による掘削の際に南側の一部を掘り過ぎたが、平面は方形で一辺5.5ｍほどの規模と推定される。方位は東壁で北から50度東に傾く。周壁は遺存状況の良い部分で30㎝ほどである。床面は基盤層ＬⅣをそのまま床面とし、北側に向かってやや傾斜しているが、おおむね平坦である。

堆積土は５層に分層した。ℓ１・２はＬⅣに近似した褐色砂質土で床面東部を覆っている。ℓ３～５は住居西側から流れ込むように堆積している。炭化物や焼土粒が含まれるがいずれも量は多くない。全体的としてレンズ状に堆積した様子がみられることから、自然堆積土と考えられる。

住居内の施設はピットが２基確認された。Ｐ１は東隅の手前に位置する。平面は楕円形で規模は長軸75㎝、短軸60㎝、深さ30㎝である。底面は平坦で、周壁は底面より急斜度で立ち上がる。堆積土は３層に分層した。ℓ１は暗褐色土である。ℓ２・３はそれぞれ暗褐色とにぶい黄褐色の砂質土で、下層ほど荒い砂が含まれる。

Ｐ２は北隅に位置する。平面は東西に長い隅丸長方形である。規模は長軸130㎝、短軸100㎝、深さ10㎝である。底面は平坦で、周壁は底面より緩やかに立ち上がる。堆積土は２層に分層した。いずれも暗褐色の粘質土である。ℓ１は踏み締まりによるとみられる硬化が認められた。よっ

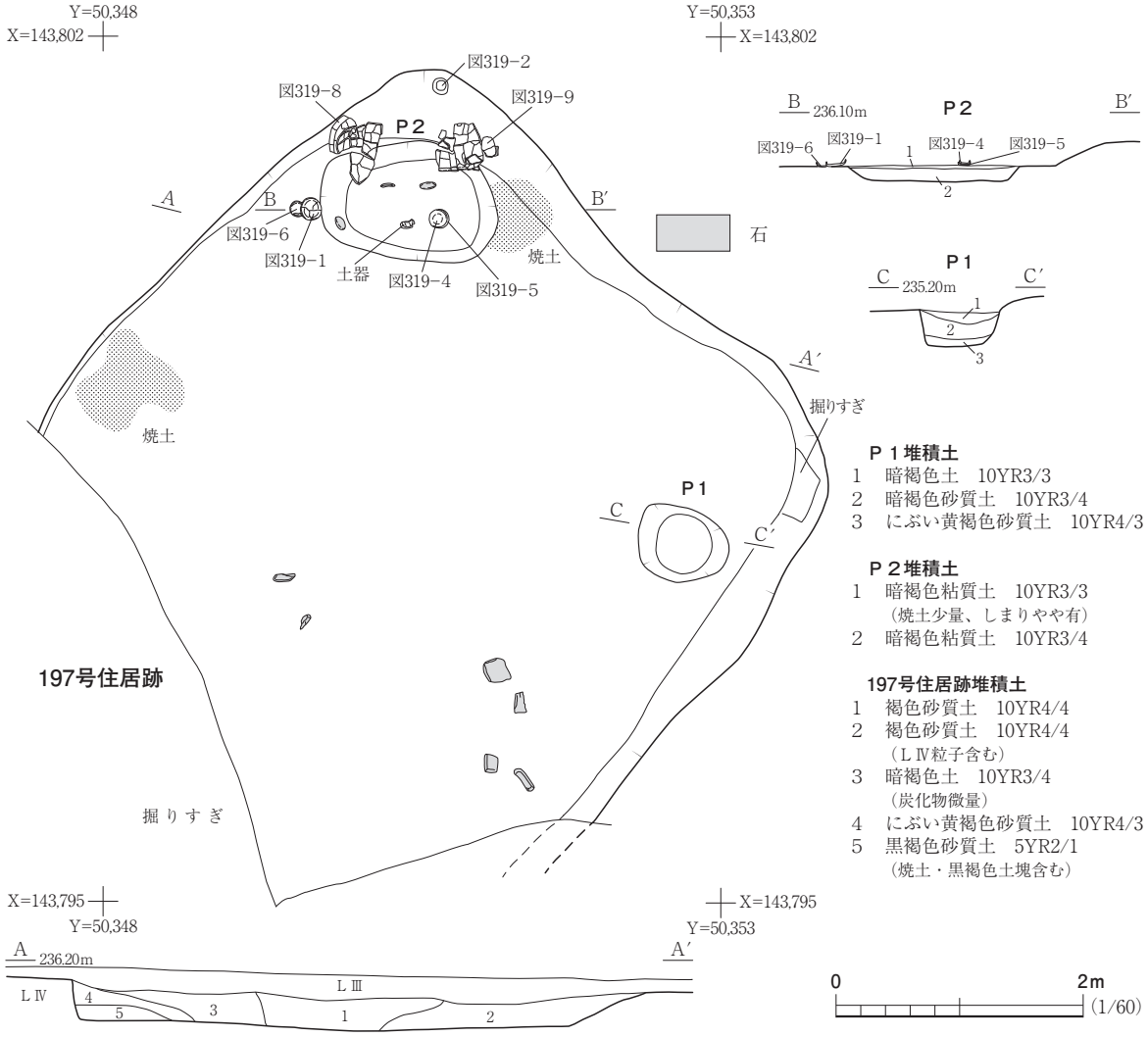


図318　197号住居跡

て、住居機能時にはこのピットは埋没していたと考えられる。

この他に西壁手前の床面と、北隅の壁が一部薄く焼土化していた。位置的にカマドの可能性も考えられたが、焼土が非常に薄く、袖や煙道といった痕跡も認められないことから、カマドとは判断しなかった。これらの焼土の機能や由来は不明である。

遺物は北隅のＰ２上面の堆積土からまとまって出土した。図319－８・９の甕や甑は、壁際で横転して潰れたような状況で出土している。杯は２点重ねで出土したものが２組存在する。図１・６と４・５である。いずれも床面よりやや浮いており、上の個体が下の個体からわずかにずれている。この他に図319－２の杯が壁際において竪穴内に転落するような状態で出土している。このことから杯は竪穴上端部に置かれたものが、埋没過程で竪穴内に流れ込んだ可能性が考えられる。

遺　　物（図319、写真415・416）

本遺構からは土師器269点が出土した。このうち土師器９点と土製品１点を図示した。

図319－１～６は杯である。このうち２・３を除いて内面には黒色処理が施される。１～４は底部から体部かけて内湾ぎみに立ち上がり、内面または内外面に稜をもち、口縁部は外反もしくは外

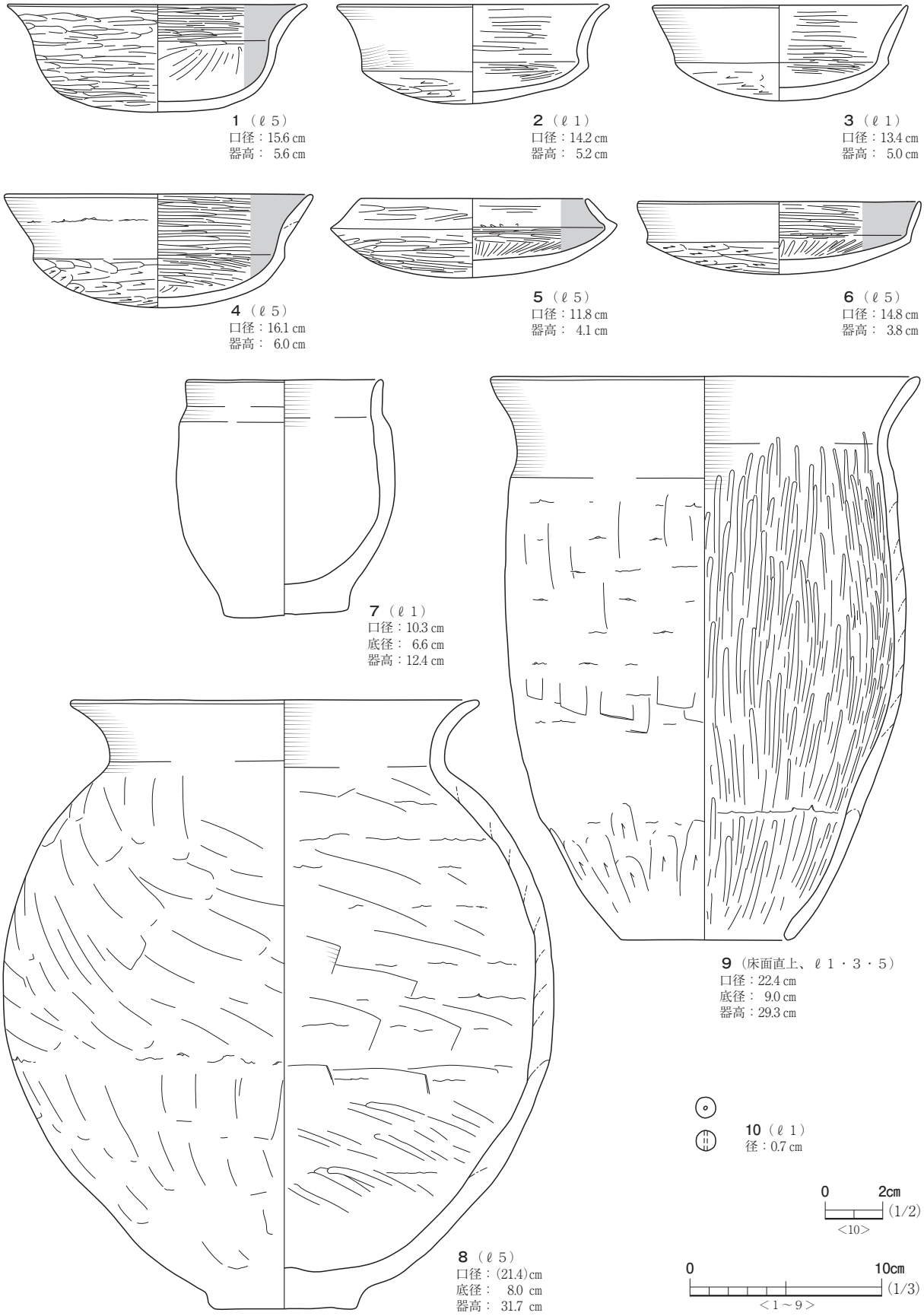


図319　197号住居跡出土遺物

傾して立ち上がる。外面調整は口縁部のナデと体部から底部にかけてのヘラケズリであるが、１のみヘラミガキが施される。５・６は須恵器模倣とみられる。５は口縁部が短く内傾する器形で、内外面ともにヘラミガキで調整される。６は口縁部が外傾する器形で、外面の調整は口縁部がヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリで調整される。内面調整は５・６ともヘラミガキである。

７は小型の甕である。二次的な焼成を受け器壁の劣化が著しい。器形は寸胴で、頸部に段を有し、口縁部は上方に直線的に立ち上がる。８は大型の球胴の甕である。外面にナデ調整、内面にヘラナデ調整が施される。二次的な被熱の痕跡は認められない。９は大型の甑である。外面はナデ調整と体部下部のケズリ、内面は縦方向のヘラミガキで調整されている。内面の上半部には部分的に黒色の付着物が認められる。10は土玉で堆積土中から出土した。

ま と め

本遺構は、一部削平されたが、一辺5.5ｍほどの方形を基調とした竪穴住居跡である。住居内にはピットが２基確認された。この内Ｐ２は上面に踏み締まりが認められたことから、住居機能時には埋められていた可能性が考えられた。遺物はＰ２の上面を中心に出土している。出土状態から甕や甑は壁際の床面に置かれ、杯は竪穴上端部の空間に置かれていた可能性が考えられた。遺構の時期は出土した土器の特徴から古墳時代後期と考えられる。（神　林）

198号住居跡　ＳＩ198

遺　　構（図320、写真226）

本遺構は、Ⅰ区のＰ－13グリッドに位置しており、標高235.7ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣｂである。53号畑跡を検出中に、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、208・217号住居跡、53号畑跡である。本遺構が208住居跡と53号畑跡より古く、217号住居跡より新しい。

堆積土は２層に区分した。ℓ１はＬⅣ粒と炭化物粒を含む灰黄褐色土である。おおむね自然堆積土と考えている。ℓ２はＬⅣ粒を多量に含み、炭化物粒を少量含むにぶい黄褐色土である。ＬⅣ粒の入り方が不自然な点から人為的な堆積土の可能性がある。遺構の平面形は、北西と南西隅を失っているがおおむね長方形である。規模は5.3×4.6ｍである。東壁は北から22度東を示す。周壁は、残りの良い東壁側では70度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大23㎝である。床面は、ＬⅣａに作られ平坦である。踏み締まりはやや強く、微細な炭化物粒が散在していた。住居内の施設は、検出されなかった。

遺物は、住居跡の中央から東側にかけて堆積するℓ１から散在して出土した。遺物の集中する箇所はみられなかった。西壁側からは、10～20㎝ほどの焼礫が６点ほど出土した。

遺　　物（図320、写真416）

遺物は、土師器が103点出土したが、いずれも破片で、図示できたのは３点のみである。

図320－１は高杯の杯部下半から脚部上部片である。高杯としてはかなり小型の部類に属する。

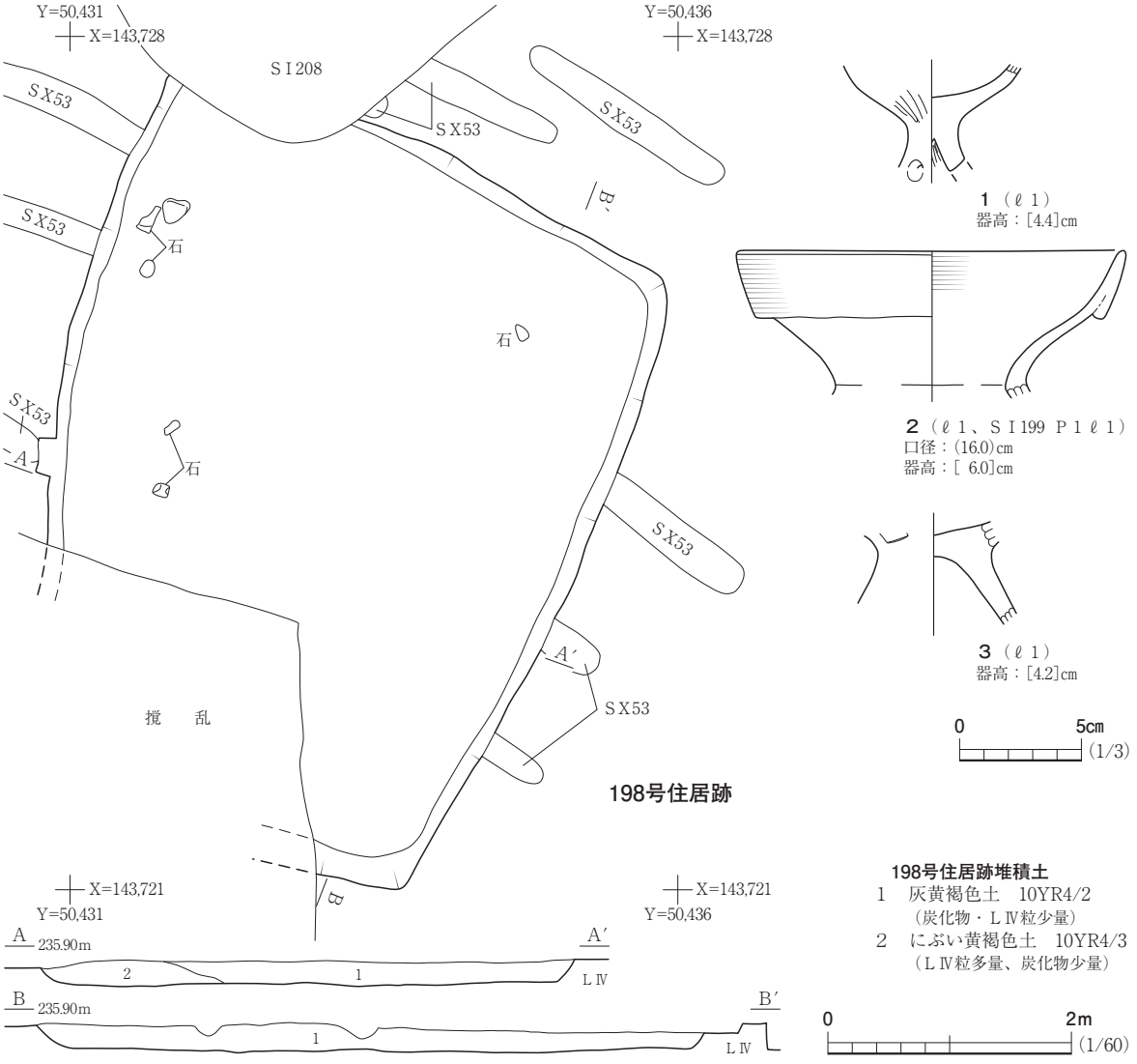


図320　198号住居跡・出土遺物

２は複合口縁の壺の口縁部片である。３は台付甕の台部片とみられる。

ま と め

本遺構は、5.3×4.3ｍの長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出できなかった。所属時期は、検出面や出土遺物などから古墳時代前期と考えている。　（中　野）

199号住居跡　ＳＩ199

遺　　構（図321、写真227）

本遺構は、Ⅰ区南部のＯ・Ｐ－14・15グリッドに位置しており、標高235.7ｍ付近の東側から北西側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣａである。重複する遺構は、202・203・205号住居跡で、本遺構が202・203・205号住居跡より新しい。調査区中央の土層観察用畦の北側のＬⅡｂを掘り下げる際に、壁面の一部を壊してしまった。

堆積土は３層に区分した。ℓ１は炭化物粒塊を多量に含み、焼土粒を少量含む暗褐色土である。

ℓ２は炭化物と焼土粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ３は炭化物を含む暗褐色土である。ℓ１・２は、炭化物や焼土粒の入り方などから、人為堆積土の可能性がある。ℓ３は自然堆積土である。住居南西部のℓ２下面から床面にかけては、焼土と炭化材が出土している。材は最大で長さ20㎝ほどで、それ以外は５～10㎝ほどのものがほとんどである。おそらく、住居廃絶後に材を焼いたものと考えている。

平面形は、残りが悪いが、南西隅や東壁側の状態から、隅丸方形ないし長方形と考えている。規模は東西が4.4ｍである。周壁は遺存状態の良い東壁側では40度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁で18㎝である。方位は、残りの良い南壁を基準とするなら北に対して東に20度傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣａ上に貼床を構築しており、おおむね平坦に作られている。床面の中央では、3.8×3.4ｍの範囲で踏み締まりによるとみられる硬化面が検出された。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は床面中央からやや北西側に寄った位置で１箇所検出した。平面形は、楕円形を呈する。火床面は、63×55㎝の範囲にわたって暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは４㎝であり、床面よりわずかに盛り上がっている。炉を中心とした1.2ｍの範囲では、微細な炭化物の集積がみられる。その部分の床面は非常に強く硬化しており、炉の周辺における活動頻度の高さがうかがえる。

ピットは南東隅からやや中央寄りの位置で、１基検出した。Ｐ１は規模や形態などから貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は90×77㎝、深さ17㎝である。堆積土は４層に区分した。ℓ１は炭化物粒と焼土粒を少量含む暗褐色土である。ℓ２は炭化物を含むにぶい黄褐色土である。ℓ３・４はＬⅣ粒を多量に含む褐色および暗褐色砂質土である。堆積土は、水平に堆積している点や混入物の入り方などから、人為堆積土と考えている。

遺物は、住居跡の北西側床面より高杯の脚部が出土している。それ以外の遺物は、住居内堆積土やピットから散在して出土した。

遺　　物（図321）

遺物は、土師器78点、弥生土器５点、石器３点が出土した。破片がほとんどだが、器形が判明する物が多く、このうち土師器４点と石器１点を図示した。

図321－１は小型土器で、鉢とみられる。２は大型の高杯の杯部破片である。外面下側には稜をもつ。内外面は丁寧にヘラミガキを施す。３は「ハ」字状に開く高杯の脚部片である。４は赤彩を施した器台である。５は敲石である。６面いずれも敲打痕が確認できる。

ま と め

本遺構は、4.6ｍほどの竪穴住居跡である。地床炉が１箇所と貯蔵穴が検出された。これらの施設の周辺では床面が踏み締まりによって硬化しており、生活の中心的空間であったことがうかがえる。床面からは炭化材が出土しており、廃絶後に材を焼いたものと考えられる。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。（中　野）

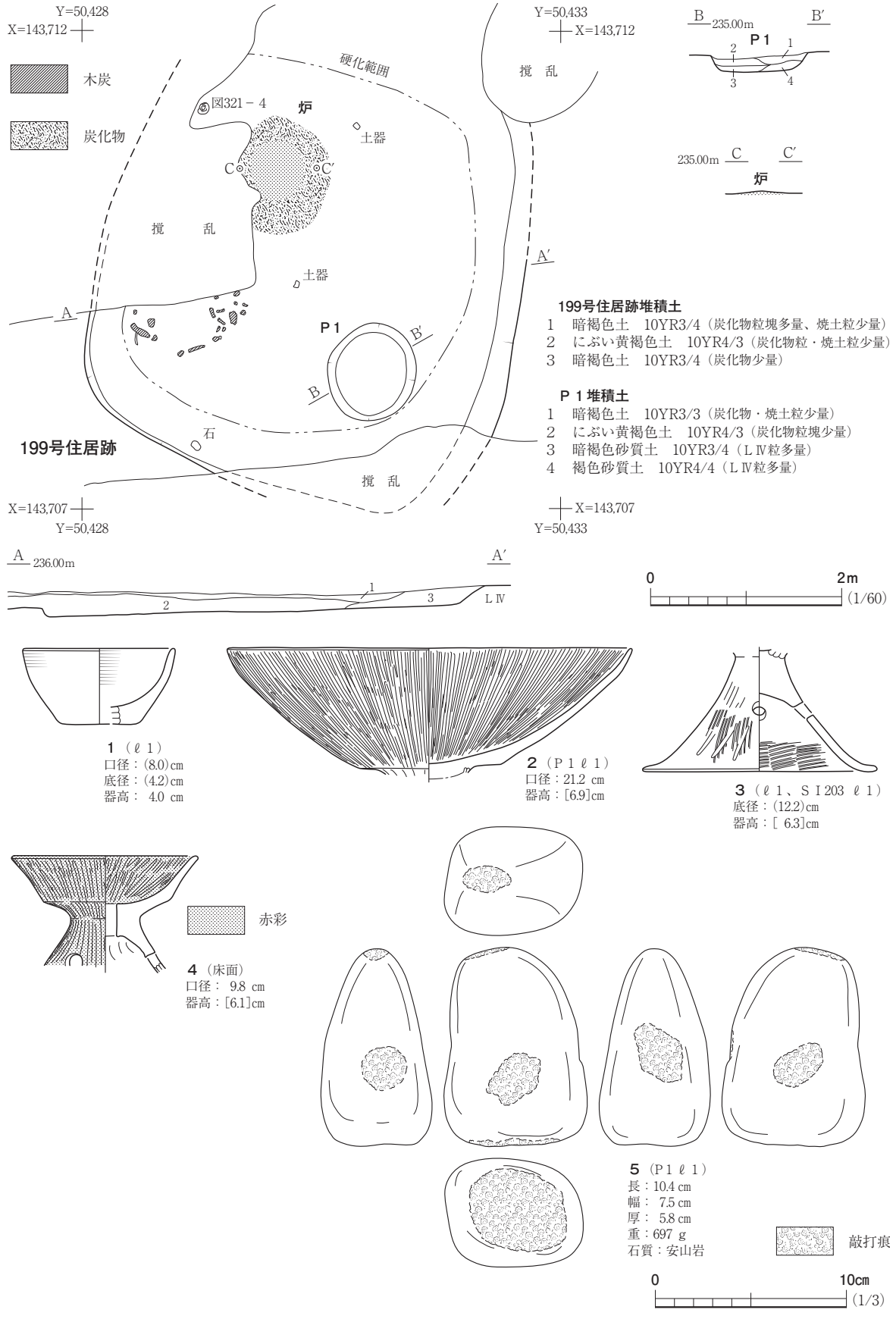


図321　199号住居跡・出土遺物

200号住居跡　ＳＩ200

遺　　構（図322、写真228）

本遺構は、Ⅰ区南部のＱ－15グリッドに位置しており、標高236.6ｍ付近の東側から北西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂである。重複する遺構はないが西側１ｍに201号住居跡が位置する。重機による掘削の際、住居跡の存在に気が付かず、北側と南側をトレンチ状に深く掘り下げてしまい、床面と西壁の一部のみを検出した。

堆積土は３層に区分した。ℓ１は炭化物粒を微量に含む暗褐色土である。ℓ２はＬⅣ粒を多く含む褐色土である。ℓ１・２は周辺から流入するように堆積することから、自然堆積土である。ℓ３はＬⅣ粒を多量に含む褐色砂質土で、貼床の構築土である。貼床の厚さは壁付近で10㎝程度だが、炉の周辺では20㎝と、やや厚くなっている。

平面形は、残りが悪いため不明である。規模は遺存長が最大で3.2ｍである。周壁は遺存状態の良い西壁側では40度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で23㎝である。床面は、貼床を構築しており、おおむね平坦に整えられて、比較的硬く踏み締まっている。

住居内の施設は、地床炉である。地床炉は床面中央で１箇所検出した。平面形は、楕円形を呈する。火床面はよく焼けており、35×24㎝の範囲にわたって暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは２㎝であり、火床面の高さは床面とほぼ同じである。

遺物は、地床炉の周辺の堆積土下部から少量の土師器が散在して出土した。

遺　　物（図322）

遺物は、土師器35点が出土した。いずれも破片で、このうち土師器１点を図示した。図322－１は高杯の杯部の破片である。内外面は丁寧にヘラミガキを施す。

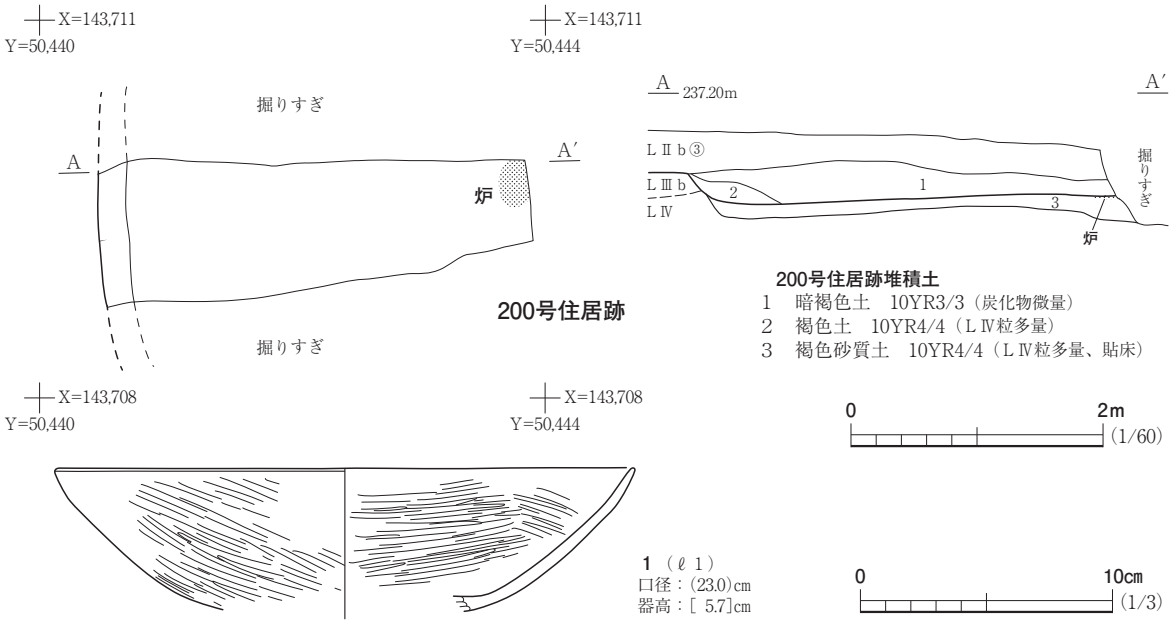


図322　200号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、3.2ｍ以上の竪穴住居跡である。地床炉が１箇所検出された。遺存状態が悪く不明な点が多い。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。　（中　野）

201号住居跡　ＳＩ201

遺　　構（図323、写真229）

本遺構は、Ⅰ区南部のＰ－15グリッドに位置しており、標高236.6ｍ付近の東側から北西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂである。49号畑跡と重複し、本遺構が古い。東側に200号住居跡が、西側に202号住居跡が位置する。重機による掘削の際、遺構の存在に気付かず、北側と南側を深く掘り下げて、床面と東西の壁の一部を検出した。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物粒を微量に含む暗褐色土である。ℓ２はＬⅣ粒を主体とするにぶい黄褐色砂質土である。ℓ１は自然堆積土で、ℓ２は貼床の構築土である。

平面形は、残りが悪いため不明である。長さは東西5.3ｍである。方位は西壁で北から５度西を示す。周壁は遺存状態の良い西壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で30㎝である。床面は、ＬⅣａに貼床を構築している。おおむね平坦で踏み締まりは弱い。

住居内の施設はピット２基である。ピットは床面中央に並列して位置する。平面形は、おおむね円形を呈し、断面はやや円柱状となる。規模は、直径がいずれも40㎝、深さが15～33㎝である。配置や規模などから柱穴の可能性も考えられる。遺物は、堆積土下部から散在して出土した。

遺　　物

遺物は土師器11点が出土した。図示しないが、甕や鉢の小片で古墳時代前期の所産である。

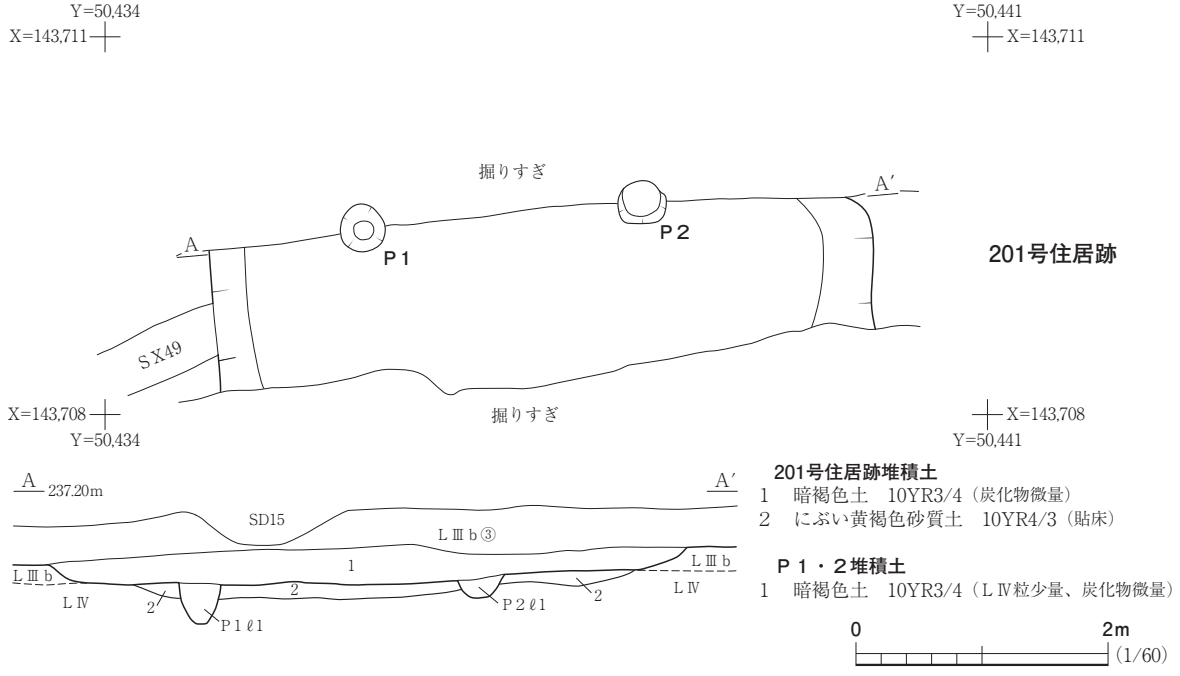


図323　201号住居跡

ま と め

本遺構は、東西5.3ｍの長さを有する竪穴住居跡である。柱穴と考えられるピットが２基検出された。遺存状態が悪いため、平面形など多くの点が不明である。遺構の所属時期は、遺構検出面や出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

202号住居跡　ＳＩ202

遺　　構（図324、写真230）

本遺構は、Ⅰ区南部のＰ－15グリッドに位置しており、標高236.2ｍ付近の東側から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は199号住居跡と49号畑跡で、いずれの遺構よりも本遺構が古い。重機による掘削の際、住居跡の存在に気が付かず、北側と南側をトレンチ状に深く掘り下げてしまい、床面と東壁の一部を検出した。西側は199号住居跡に壊されている。堆積土はＬⅣ粒を多く含むにぶい黄褐色土の単層で、自然堆積土である。

平面形は、残りが悪いため不明である。遺存する規模は、南北が1.8ｍ、東西1.5ｍである。周壁は遺存状態の良い東壁側では30度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で18㎝である。床面は、ＬⅣａに構築しており、平坦で踏み締まりは弱い。住居内の施設は検出できなかった。

遺　　物（図324、写真436・437）

遺物は、堆積土下部から弥生土器６点が出土し、このうち５点を図示した。

図324－１～５は同一個体の破片で小型の広口壺である。いずれも口縁部から頸部にかけてのも

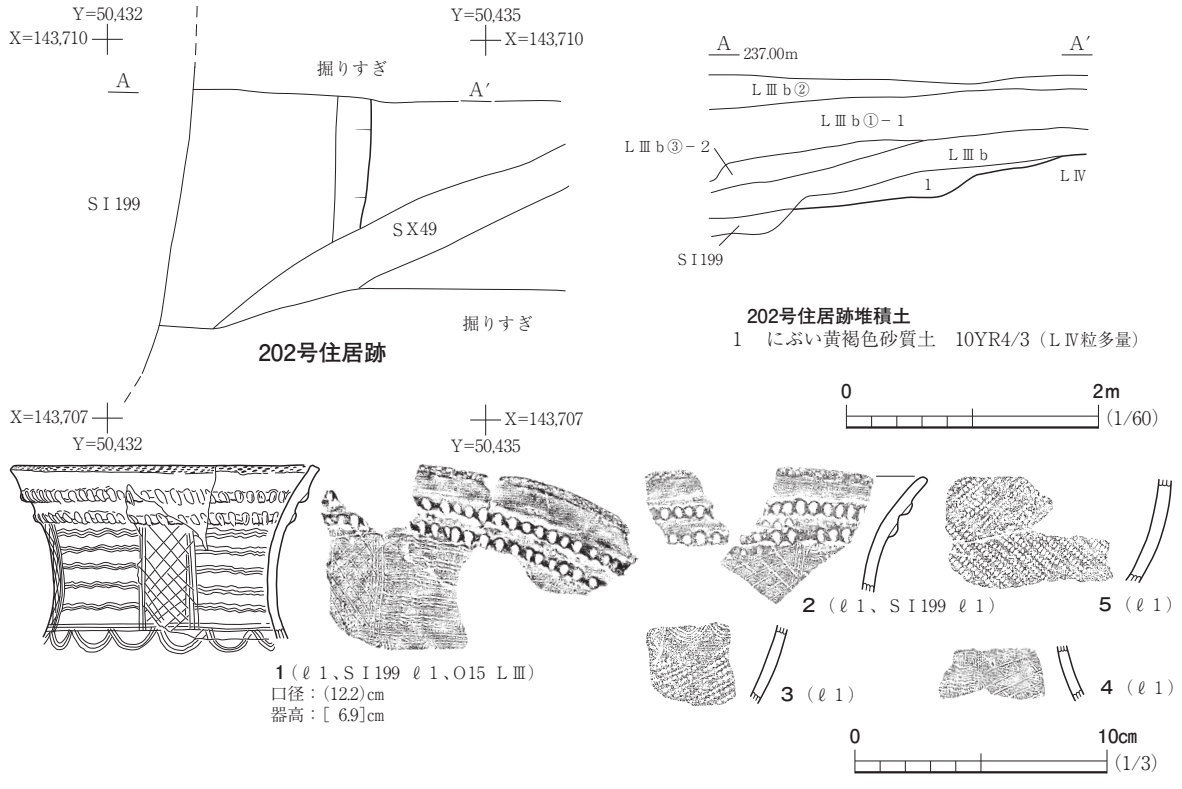


図324　202号住居跡・出土遺物

のである。重複する199号住居内堆積土や遺構外出土の破片と接合しているが、もともとは、本住居跡の遺物と考えている。口縁部が頸部からやや外反し、胴部が膨らむ器形である。胎土には雲母が含まれ、硬く焼き締まっている。口端部は面取りがされ、断面が角張り、撚糸文が施される。口縁部には横位方向に指頭圧痕を施した隆帯が２条貼りつけられている。頸部の文様は、３条一組の櫛歯状の工具で横位に波線文を重層的に施文する。その後、先の尖った工具による縦位の沈線で２条一組の細長い縦区画を描き、区画内には、格子目文を充填施文する。３は、櫛描きの連弧文を施す。５は胴部片で撚糸文を羽状に施す。

ま と め

本遺構は、遺存長が南北1.8ｍ、東西1.5ｍの竪穴住居跡である。遺存状態が悪く不明な点が多い。堆積土から弥生土器が出土している。遺構の堆積土の上にＬⅢｂが堆積していることから、その堆積土を掘り込んでいる遺構群よりは古い。所属時期は、遺構検出面や出土遺物などから、弥生時代終末期に機能したと考えられる。（中　野）

203号住居跡　ＳＩ203

遺　　構（図325、写真231）

本遺構は、Ｉ区南部のＯ－15グリッドに位置しており、標高236.1ｍ付近の東側から西側に緩く下る斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。重複する遺構は、49号畑跡で、本遺構が古い。遺構は、中央の土層観察用畦に位置していたため、床面と東西の壁の一部のみを検出した。

堆積土は５層に区分した。ℓ１は炭化物粒を微量に含む暗褐色土である。ℓ２はＬⅣ粒を多く含む暗褐色土である。ℓ３・４は炭化物粒を少量含む暗褐色土である。ℓ５は暗褐色砂質土である。ℓ１～４は自然堆積土で、ℓ５は貼床の構築土である。

平面形は、残りが悪いため不明である。規模は東西5.2ｍである。方位は西壁で北から10度西を示す。周壁は西壁側で70度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で34㎝である。床面は、東側の一部に貼床を構築し、それ以外はＬⅣａを床面としている。平坦で、踏み締まりは弱い。

住居内の施設はピット１基である。ピットは東壁側に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は、おおむね円形を呈し、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径が70㎝、深さが20㎝である。堆積土は炭化物粒を少量含む暗褐色土である。

遺物は、土師器17点が出土した。出土状況は、堆積土下部から散在して出土した。図示しなかったが、すべて土師器の小片である。甕を主体とし、複合口縁の壺や赤彩を施した鉢の小片もみられる。いずれも古墳時代前期の所産である。

ま と め

本遺構は、東西5.2ｍの竪穴住居跡である。住居内の施設は貯蔵穴が検出された。遺存状態が悪いため、平面形やその他の住居内施設の有無など、多くの点が不明である。遺構の所属時期は、他遺構との重複関係や出土遺物などから古墳時代前期と考えられる。（中　野）

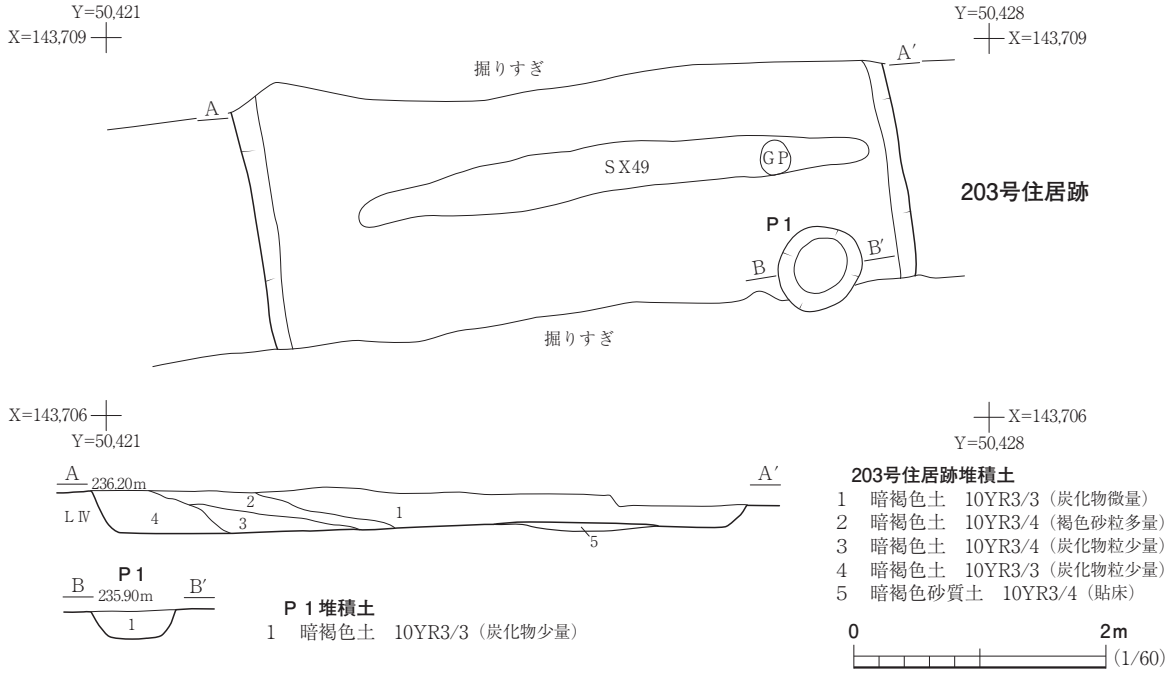


図325　203号住居跡

204号住居跡　ＳＩ204

遺　　構（図326、写真232）

本遺構は、Ⅰ区南部のＰ－14グリッドに位置しており、標高235.9ｍ付近の平坦面から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣａである。196号住居跡を検出中に、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査を行った。重複する遺構は、196・205号住居跡、49号畑跡である。本遺構が196号住居跡と49号畑跡より古く、205号住居跡より新しい。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ２は褐色砂質土である。いずれも自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、隅丸長方形である。規模は4.1×3.1ｍである。方位は東壁で北から50度西を示す。周壁は、残りの良い南東壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で27㎝である。床面は、掘形底面であるＬⅣａに作られ平坦となっている。踏み締まりはやや強く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、ピット１基である。西隅に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、長軸65㎝、短軸60㎝、深さ14㎝である。堆積土は炭化物を含む褐色土である。遺構内からは、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、4.1×3.1ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴を検出した。所属時期は、遺物が出土していないため不明確な点が多いが、遺構の重複関係や検出面などから、弥生時代終末期から古墳時代前期と考えている。　（中　野）

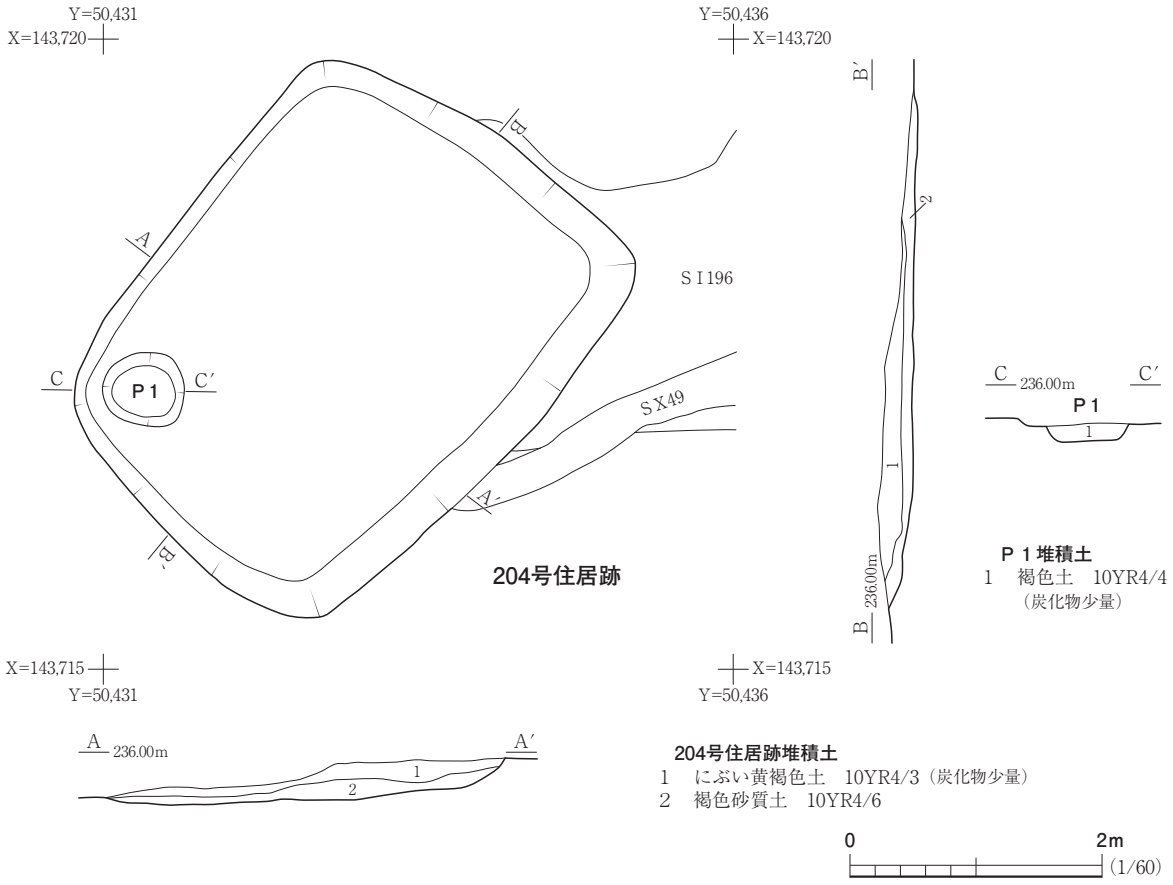


図326　204号住居跡

205号住居跡　ＳＩ205

遺　　構（図327、写真233）

本遺構は、Ｉ区南部のＯ・Ｐ－14グリッドに位置しており、標高235.6ｍ付近の平坦面から東側から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣａである。204号住居跡を検出中に楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、199・204号住居跡である。本遺構が199・204号住居跡より古い。

堆積土は２層に区分した。ℓ１はＬⅣ粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ２はＬⅣ粒を多量に含む褐色砂質土である。いずれの堆積土もおおむね自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、丸みを帯びた隅丸長方形である。規模は４×3.2ｍである。東壁は北から10度東を示す。周壁は、残りの良い東壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で11㎝である。床は、掘形底面であるＬⅣａをそのまま床面としており、平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、ピットと小溝である。ピットは２基確認した。Ｐ１は住居跡の南東隅に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は円形で、底面は平坦である。規模は長軸88㎝、短軸80㎝、深さ23㎝である。Ｐ２は北西部に位置する。平面形は楕円形で底面はすり鉢状を呈する。規模は長軸

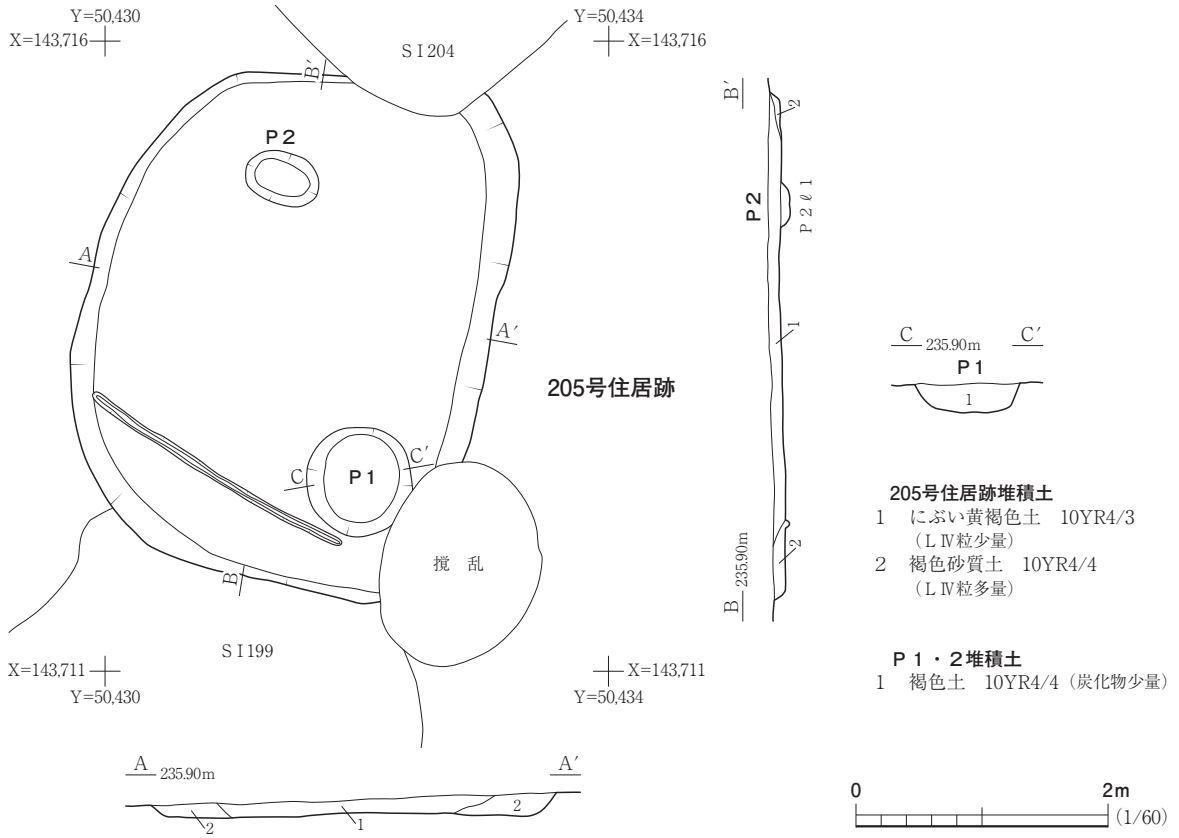


図327　205号住居跡

60㎝、短軸40㎝、深さ８㎝である。ピットの堆積土はいずれも褐色土である。

小溝は、南壁側やや中央寄りの位置に検出している。幅が細く断面形は「Ｖ」字状になっていた。規模は、全長2.3ｍ、最大幅８㎝、深さ５㎝である。機能は明らかでない。

遺物は、弥生土器が１点出土した。図示していないが、無文の小破片である。

ま と め

本遺構は、４×3.2ｍの長方形の竪穴住居跡である。住居内の施設はピットと小溝を検出した。所属時期は、重複する遺構や検出面などから弥生時代終末期頃と考えている。　（中　野）

206号住居跡　Ｓ Ｉ 206

遺　　構（図328、写真234）

本遺構は、Ｉ区南部のＯ－14グリッドに位置しており、標高235.6ｍ付近の平坦面から東側から西側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣａ～ｂである。204号住居跡の西側を検出中に、遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構はないが、上層には11号住居跡が位置していた。堆積土の大半を撹乱によって失っており、床面付近のみ検出された。

堆積土は炭化物を含む灰黄褐色土の単層である。堆積過程は不明である。平面形は、隅丸方形である。規模は3.6×3.3ｍである。方位は西壁で北から10度東を示す。周壁は、残りの良い東壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で８㎝である。床面はＬⅣａ～

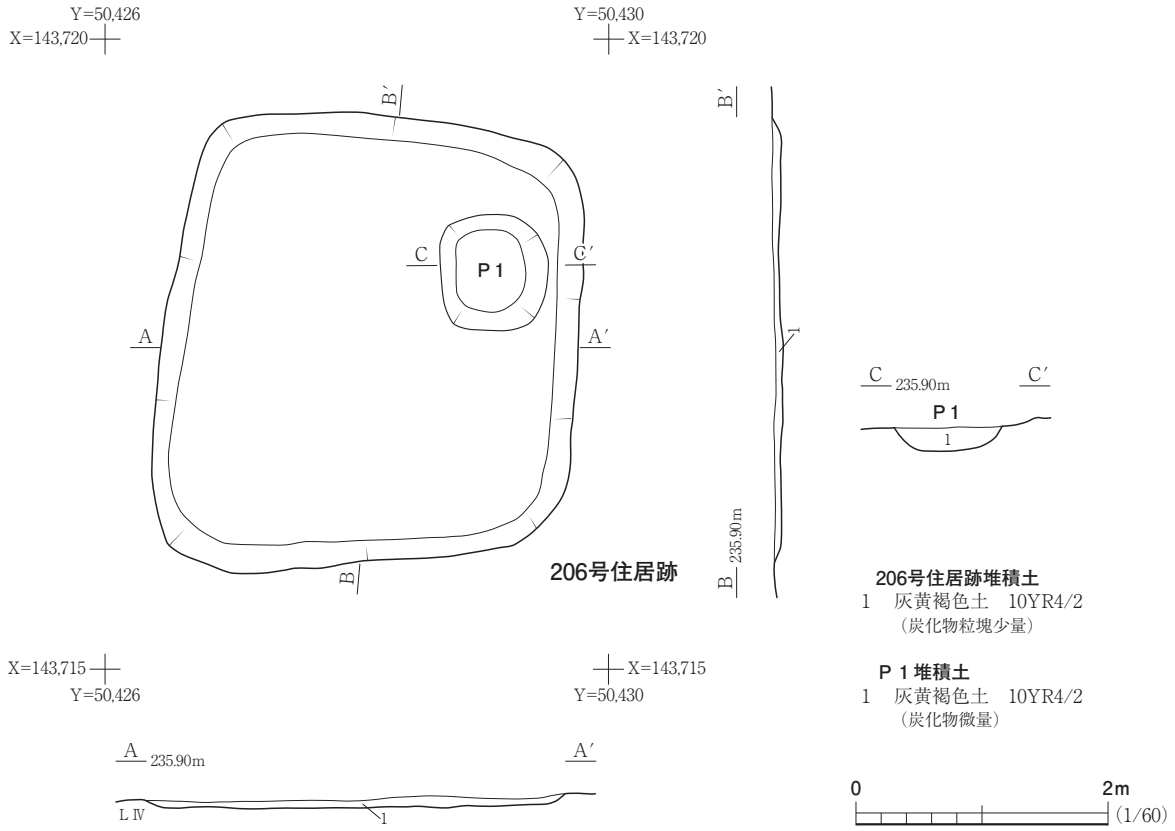


図328　206号住居跡

ｂに作られ、平坦で踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、ピット１基である。北東隅よりやや南に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、長軸93㎝、短軸85㎝、深さ19㎝である。堆積土は炭化物を含む灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、3.6ｍほどの隅丸方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴を検出した。所属時期は、遺物が出土していないため不明確な点が多いが、遺構の検出面などから、弥生時代終末期から古墳時代前期に機能していたと考えている。（中　野）

207号住居跡　ＳＩ207

遺　　構（図329、写真235）

本遺構は、Ⅰ区南部のＯ－13グリッドに位置し、標高235.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。198号住居跡の西側を検出中に、焼土の集積と不定形な遺構範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は217号住居跡と51号畑跡で、本遺構が217号住居跡より新しく、51号畑跡より古い。南側は撹乱で壊されている。

堆積土は炭化物を多量に含む暗褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

平面形は、南側が失われているが、隅丸長方形と考えている。規模は東西が5.0ｍである。方位

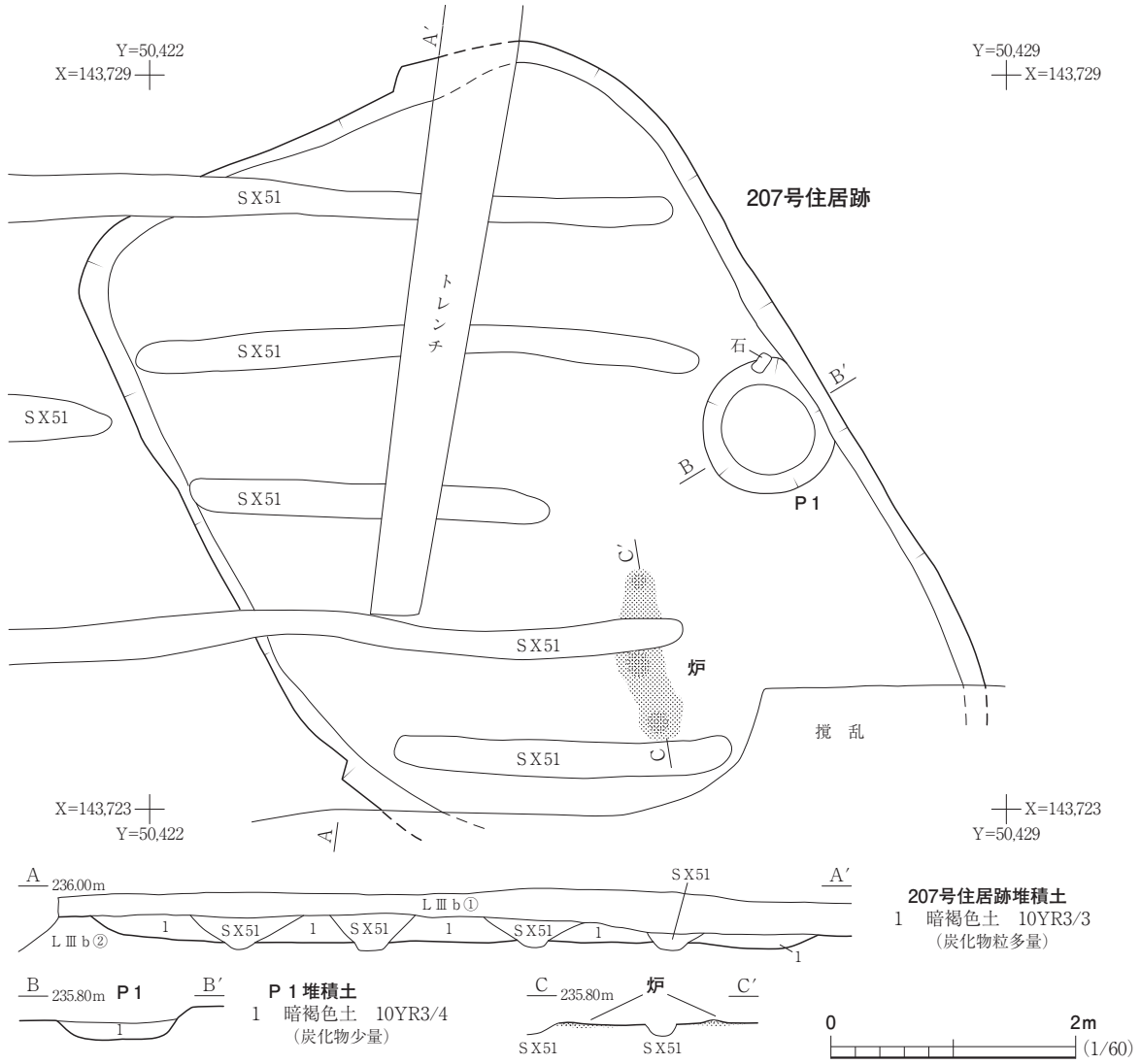


図329　207号住居跡

は東壁で北から32度西を示す。周壁は、残りの良い東壁側では40度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で22㎝である。床面は、ＬⅣａや217号住居跡の堆積土を掘り込んで作られ、平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面中央のやや南側で１箇所検出した。平面形は不整な長楕円形を呈する。規模は長軸150㎝、短軸40㎝である。炉の火床面は、強く焼けている部分が３箇所あり、直径15～25㎝の範囲がさらに強く焼土化していた。色調は全体的に暗赤褐色を呈している。焼土化した部分の厚さは３㎝で、強く焼土化した部分を中心に、盛り上がるように床面より高くなり、凹凸が認められる。

ピットは１基検出した。Ｐ１は東壁側の中央に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径110㎝、深さ12㎝である。堆積土は炭化物を含む暗褐色土で、住居内堆積土とほぼ同質の土であることから、住居廃絶時は開口していたと思われる。

遺物は、土師器が35点出土した。ほとんどが小片であるため、図示していない。ハケメ調整を

施す甕を主体とし、小型土器や赤彩を施したものもみられる。古墳時代前期の所産と考えている。

ま と め

本遺構は、6.0ｍ以上の隅丸長方形の竪穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴を検出した。所属時期は、重複する遺構や出土遺物などから、古墳時代前期と考えている。　（中　野）

208号住居跡　ＳＩ208

遺　　構（図330、写真236）

本遺構は、Ⅰ区東南部のＰ－12・13グリッドに位置しており、標高235.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。198号住居跡の北側を検出中に、方形に広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査を行った。重複する遺構は、198号住居跡と53号畑跡である。重複関係は、53号畑跡より古く、198号住居跡より新しい。

堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層である。堆積過程は不明である。中央からやや北西の位置からは、炭化材と微細な炭化物粒の集積が検出された。位置や平面形から、炉の可能性を考えたが、焼土面などは確認されなかったことから、炉とは判断しなかった。

平面形は、隅丸方形である。規模は4.5×4.1ｍである。方位は北東壁で北から36度西を示す。

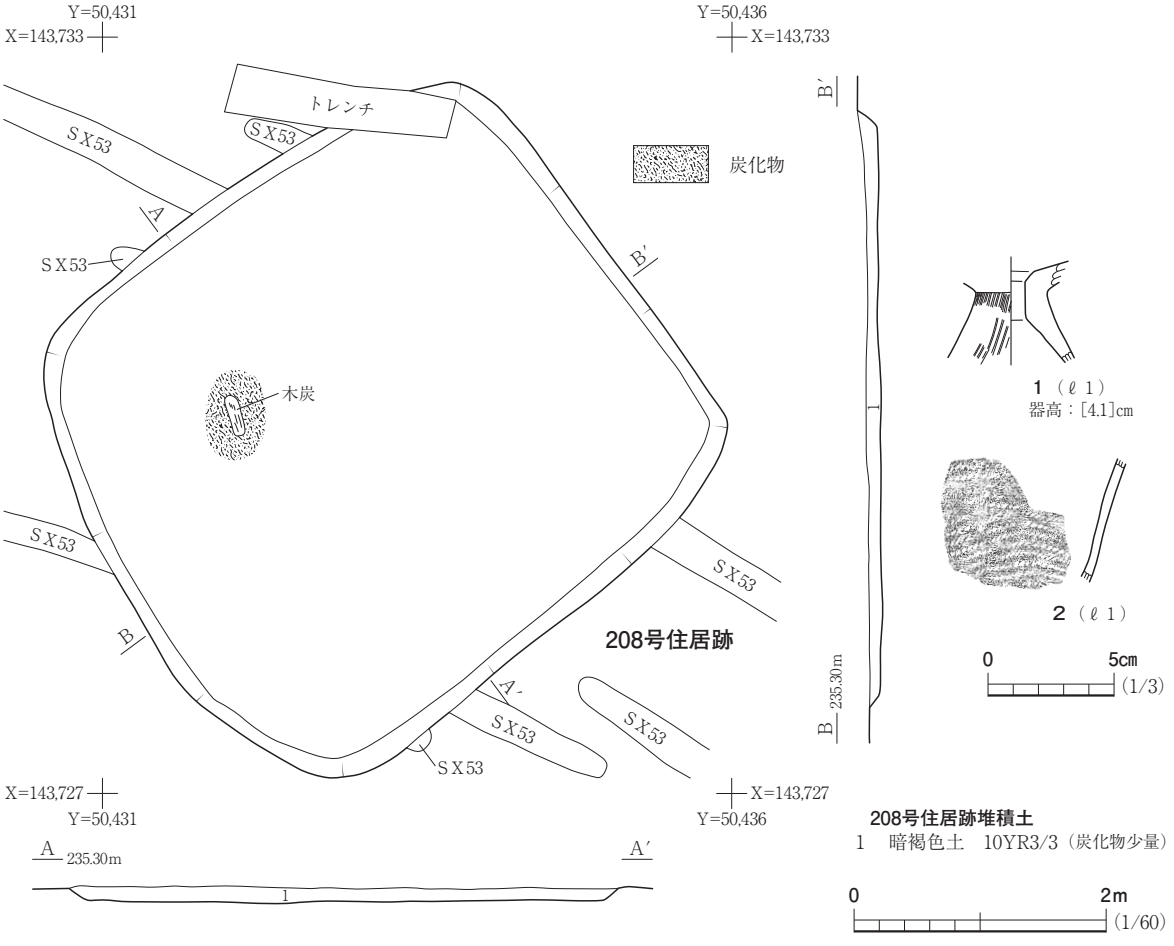


図330　208号住居跡・出土遺物

周壁は、残りの良い東壁側では40度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で13㎝である。床面は、ＬⅣａや217号住居跡の堆積土上に作られ、平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。住居内の施設は、検出されなかった。

遺　　物（図330、写真437）

遺物は、堆積土内から土器の破片が少量出土した。土師器が８点、弥生土器が１点出土し、このうち土師器１点と弥生土器１点を図示した。

図330－１は土師器の器台の脚部片である。２は弥生土器で、地文のみの胴部片である。

ま と め

本遺構は、4.5ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出できなかった。所属時期は、重複する遺構や出土遺物などから、古墳時代前期と考えている。　　（中　野）

209号住居跡　ＳＩ209

遺　　構（図331、写真237）

本遺構は、Ⅰ区南部のＮ・Ｏ－14グリッドに位置しており、標高235.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。51号畑跡を検出中に、不整形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、172号土坑と51号畑跡である。いずれの遺構より、本遺構が古い。直接の重複関係はないが、上層に10号住居跡が位置していた。

堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

平面形は、東部を撹乱により失っているが、不整な隅丸長方形である。規模は4.4×3.7ｍであ

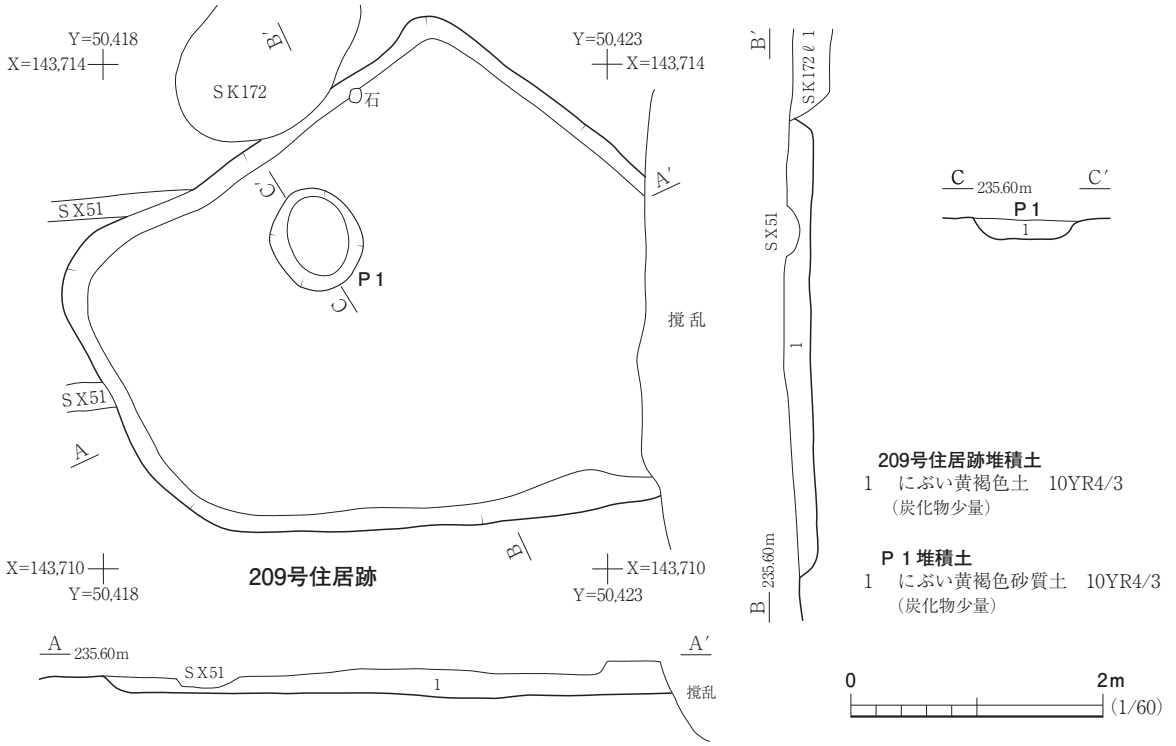


図331　209号住居跡

る。周壁は、残りの良い南壁側で50度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で26㎝である。床面はＬⅣａに作られ平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が散在していた。

住居内の施設は、ピット１基である。北壁側の中央に位置し、貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は85×70㎝、深さ16㎝である。堆積土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。住居内堆積土とは、やや異なる土であることから、住居跡より先に埋まっていたと思われる。

遺物は、土師器が７点出土した。堆積土内から少量出土し、小片のため図示していない。ハケメ調整を施す甕を主体とする。いずれも古墳時代前期の所産と考えている。

ま と め

本遺構は、4.4ｍの不整な隅丸長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。所属時期は、重複する遺構や出土遺物などから、古墳時代前期と考えている。　（中　野）

210号住居跡　ＳＩ210

遺　　構（図332、写真238）

本遺構は、Ｉ区南部のＮ・Ｏ－13・14グリッドに位置しており、標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。51号畑跡を検出中に、撹乱によって東側を壊された遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査を行った。重複する遺構は、51号畑跡で、本遺構が古い。

堆積土は４層に区分した。ℓ１は炭化物粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ２は褐色土である。ℓ３は炭化物を多量に含む暗褐色土である。ℓ４はにぶい黄褐色土である。ℓ１・２は自然堆積土、ℓ３・４は掘形底面を覆う貼床の構築土である。

平面形は、東側の大半を撹乱で失っているが、南西と北西隅の状態などから、隅丸方形ないし長方形と考えている。規模は南北長が6.8ｍである。方位は東壁で北から５度東を示す。周壁は、残りの良い西壁側では45度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で20㎝である。床面は、周壁よりやや内側には貼床が施され、おおむね平坦である。踏み締まりは弱く、微細な炭化物粒が多量に散在していた。住居内の施設は、検出されなかった。

遺物は住居北側の堆積土内から少量出土した。いずれも破片の状態であった。

遺　　物（図332、写真416）

遺物は、土師器が15点、弥生土器が３点出土し、土師器２点を図示した。

図322－１は器台の受部から脚部上半の破片である。２は二重口縁の壺の口縁部破片である。

ま と め

本遺構は、南北が6.8ｍの竪穴住居跡である。東側を撹乱に壊されており残りは良くない。住居内の施設も検出できなかった。遺物は二重口縁壺などが出土したが、いずれも破片である。所属時期は、重複する遺構や出土遺物などから、古墳時代前期と考えている。　（中　野）

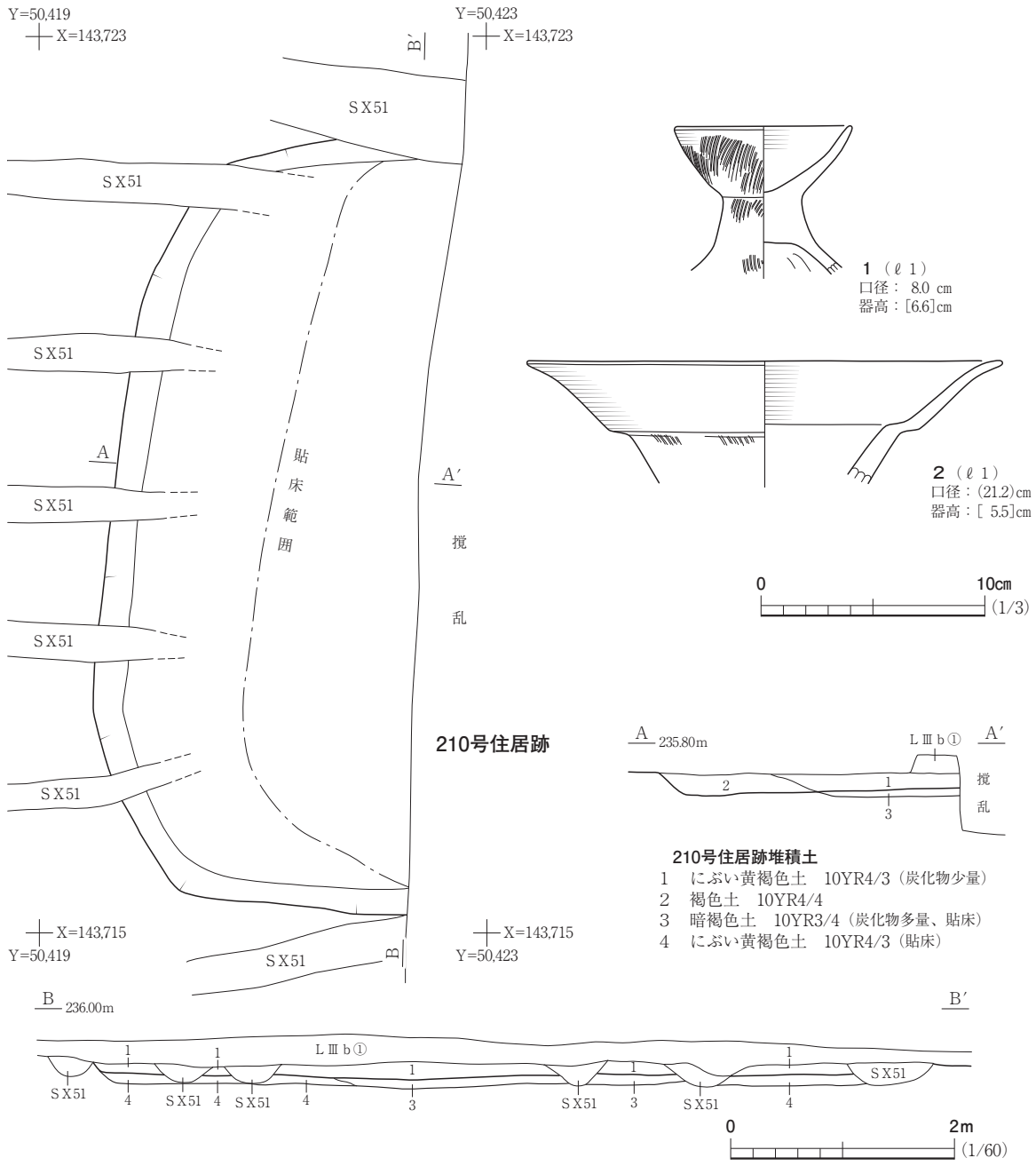


図332　210号住居跡・出土遺物

211号住居跡　ＳＩ211

遺　　構（図333、写真239）

本遺構は、Ⅰ区南部のＬ・Ｍ－14グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣａである。51号畑跡を検出する際に、長方形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。51号畑跡と重複し、これより古い。

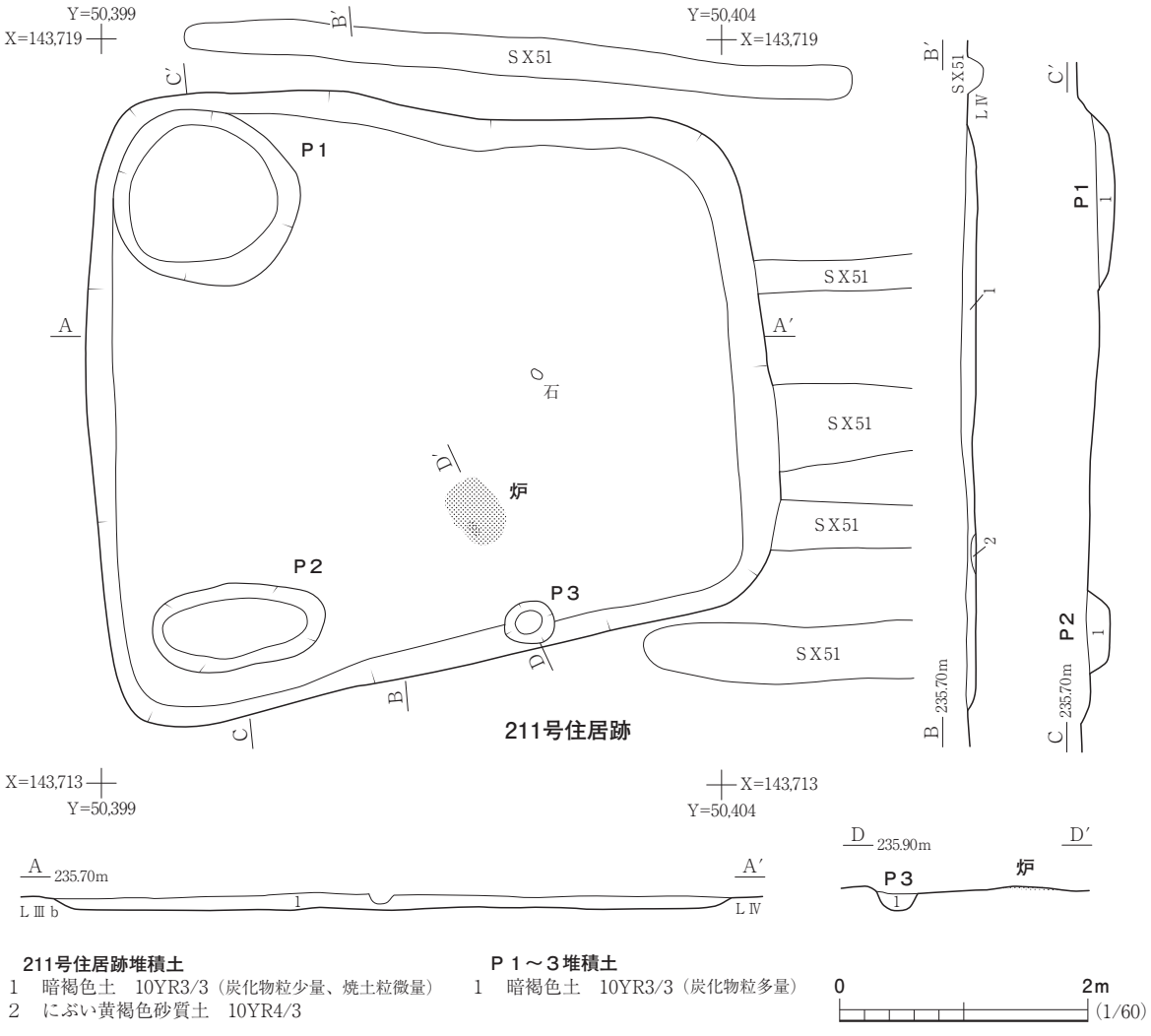
堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物を少量含み、焼土粒を微量に含む暗褐色土である。ℓ２はにぶい黄褐色砂質土である。堆積過程は、層厚が薄く不明な点が多い。ℓ１はおおむね自然堆積

土と考えている。ℓ２は床面上に盛り上がるように堆積している。詳細は不明だが、住居機能時にはすでに堆積していた可能性も考えられる。

遺構の平面形は、西壁側の辺が長い台形を呈する。規模は、5.5×5.0ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では15度の緩い角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で14㎝である。方位は、南壁を基準とするなら北に対して、20度西に傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣａに作られており、凹凸が目立つ。全体的には、締まりは弱いが、地床炉の周囲は硬く踏み締まっており、微細な炭化物粒や焼土粒が散在していた。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、床面の中央から南側へ１ｍほど寄った位置で１箇所確認した。炉の燃焼部は楕円形である。炉の使用面が、床面の高さより２㎝ほど高くなっている。炉の規模は55×40㎝ほどで暗赤褐色に強く熱変化している。特に炉の中央部分では15×８㎝の範囲で強く焼土化していた。焼土化範囲の厚さは最大１㎝である。

ピットは、３基検出した。Ｐ１は北西隅に位置する。平面形は円形で、底面はすり鉢状に掘り込まれている。規模は直径150㎝、深さ12㎝である。Ｐ２は南西隅に位置する。平面形は東西に長



211号住居跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒少量、焼土粒微量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3

Ｐ１～３堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物粒多量）

図333　211号住居跡

い楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は140×70㎝、深さ16㎝である。Ｐ１とＰ２は規模などから、貯蔵穴と考えている。Ｐ３は炉のすぐ南側の壁際に位置する。平面形は円形で、断面はやや円柱状を呈する。規模は直径35㎝、深さ16㎝である。機能は明らかにできなかった。位置的には出入口施設としての梯子穴などの可能性も考えた。しかし、炉との位置関係を考えると、その可能性は低いと思われる。ピットの堆積土は、炭化物を多量に含む暗褐色土である。

遺物は、土師器が３点出土した。ほぼ検出面で少量出土した。いずれも小片のため図示していないが、甕の胴部片で、いずれも古墳時代前期の所産である。

ま と め

本遺構は、西壁側が長い台形の竪穴住居跡である。地床炉と貯蔵穴、ピットが検出された。所属時期は、他遺構との重複関係や出土遺物などから、古墳時代前期頃と考えている。　（中　野）

212号住居跡　ＳＩ212

遺　　構（図334、写真240）

本遺構は、Ⅰ区西部のＪ・Ｋ－12・13グリッドに位置している。標高235.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣだが、本来の掘り込み面はＬⅡｂ③と考えている。上層のＬⅡｂを重機で掘削し、下層の古墳時代前期の面を検出している際に、焼土粒と炭化物を含むにぶい黄褐色土が方形に広がる範囲と、土師器の甑が出土したことから、掘削を止めて周囲の検出を行った。南側は撹乱ですでに失われていたが、半月形の遺構の範囲が遺存していたことから住居跡として調査した。重複する遺構は、35号住居跡で、本遺構が古い。

住居内堆積土は、炭化物と焼土粒を含むにぶい黄褐色土の単層である。遺構の平面形は、南側を失っているが、北西側と北東側の隅の状態から方形ないし長方形と考えている。規模は、東西5.2ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では20度の緩い角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で８㎝である。方位は、北壁を基準とするなら北に対して５度西に傾く。床面は、掘形底面であるＬⅣａに作られており、凹凸が目立ち、締まりは弱い。

住居内の施設は、ピット５基である。ピットは不規則に配置されており、機能などは不明である。平面形はおおむね円形で、底面はすり鉢状に掘り込まれている。規模は直径25～32㎝、深さ７～12㎝である。ピットの堆積土は、炭化物を含むにぶい黄褐色土である。

遺　　物（図334）

遺物は、土師器が２点出土した。すべて検出面から出土している。

図334－１は甕の底部片で、底面に木葉痕が確認できる。２は口縁部を欠損した甑である。

ま と め

本遺構は、残りが悪いが5.2ｍほどの竪穴住居跡である。性格不明のピットが５基検出された。検出面からは、甕と甑が出土している。所属時期は、他遺構との重複関係や出土遺物の特徴などから、古墳時代後期と考えている。　（中　野）

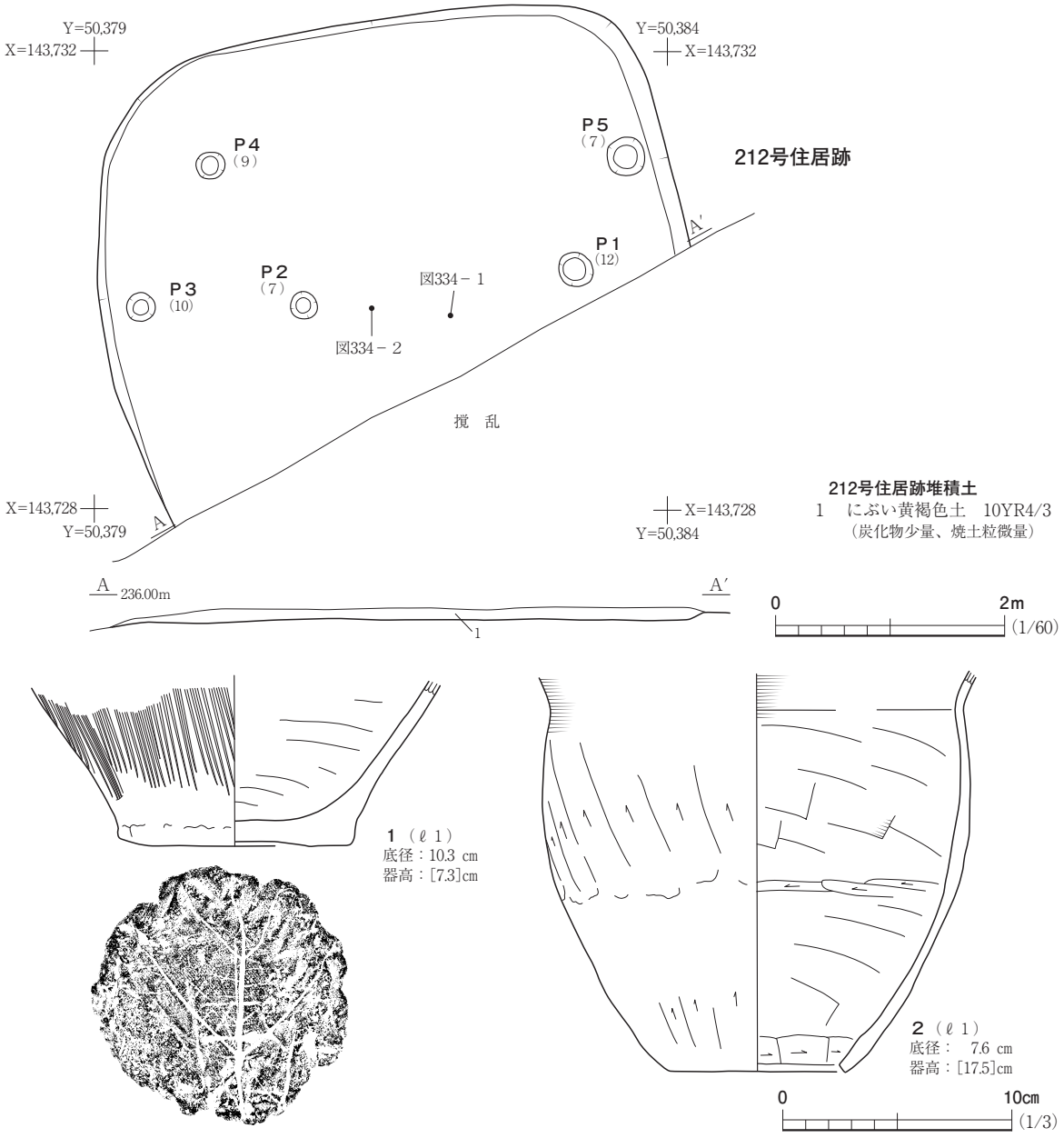


図334　212号住居跡・出土遺物

214号住居跡　ＳＩ214

遺　　構（図335、写真241）

本遺構は、Ⅰ区中央部のＮ－12・13グリッドに位置している。標高235.6ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。51号畑跡を調査している際に、炭化物を含むにぶい黄褐色土の広がりと、51号畑跡に壊されている焼土の集積を遺構の範囲として認識したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、51号畑跡で、本遺構が古い。

堆積土は、炭化物と焼土粒を含むにぶい黄褐色土の単層である。住居跡の北西隅と南東隅において、堆積土下層より焼土の集積を検出した。北西側のものは、長軸40cm、短軸10cm、厚さ５cmの

範囲で堆積している。南東側のものは、長軸30cm、短軸８cm、厚さ５cmで堆積している。いずれも堆積土内に混入していた。堆積の過程や要因は不明である。

遺構の平面形は、北西隅が丸みをおびた、不整な隅丸方形である。規模は、4.8×4.7ｍである。周壁は、残りの良い東壁側では80度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、東壁側で最大で16cmである。方位は、東壁を基準とするなら北に対して10度西に傾く。床面は掘形底面であるＬⅣａをそのまま利用しており、やや凹凸が目立つ。締まりは弱く、硬化面は確認されなかった。表面には微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

住居内の施設は、地床炉である。地床炉は床面中央から北東側に寄った位置で１箇所検出した。平面形は、長楕円形である。使用面はよく焼けており、100×60cmの範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは１cmである。

遺物は、住居南側の床面や堆積土下部より少量出土している。また西側中央の堆積土下部からは15cmほどの焼けた礫が３点出土している。

遺　　物（図335、写真416）

遺物は、弥生土器が23点、土師器が５点出土し、そのうち１点を図示した。

図335－１は小型の弥生土器で、底部から胴部下半が遺存する。地文のみ施したものである。

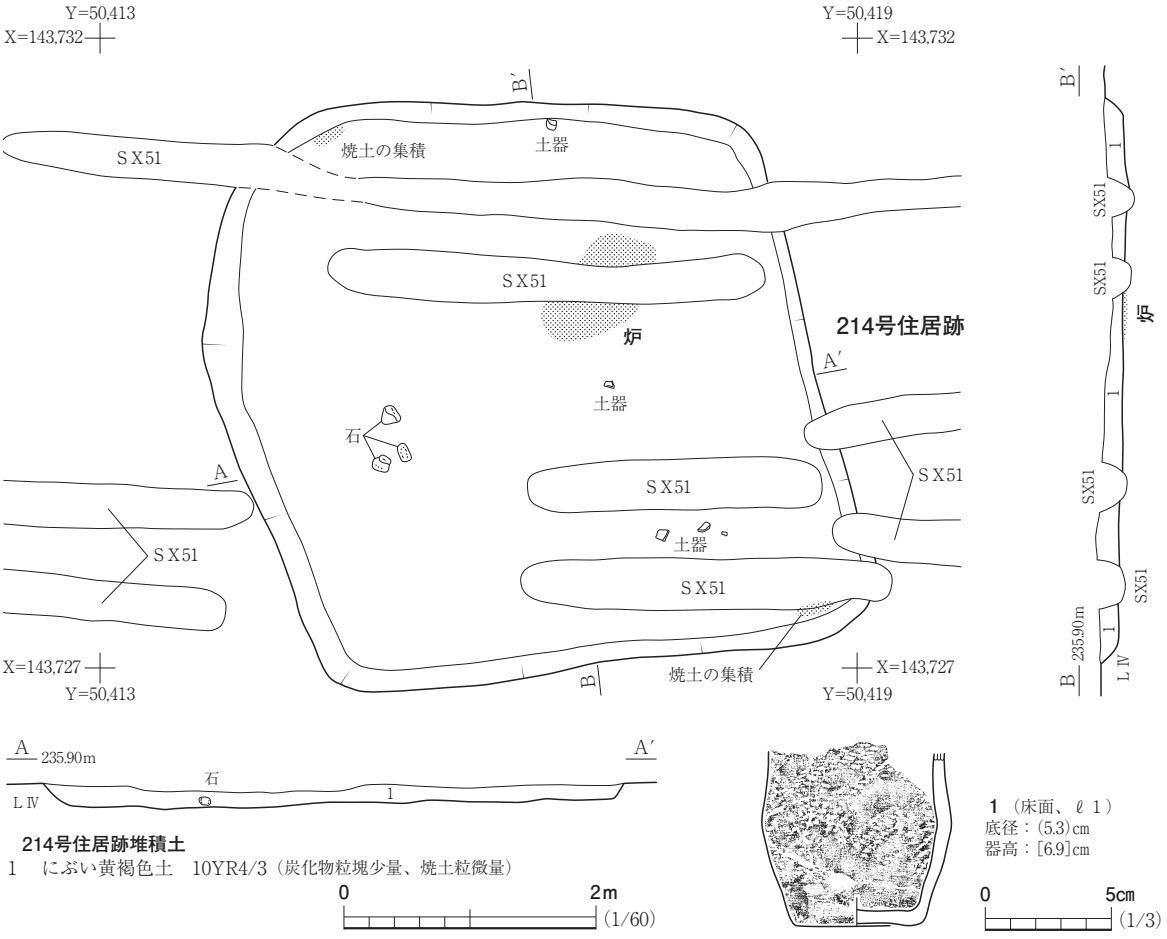


図335　214号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、不整な隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。地床炉が検出された。所属時期は、他遺構との重複関係や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

215号住居跡　ＳＩ215

遺　　構（図336、写真242）

本遺構は、Ⅰ区北部のＭ・Ｎ－12・13グリッドに位置している。標高235.3ｍ付近の平坦面から南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。51号畑跡を調査している際に、炭化物を含むにぶい黄褐色土が広がる範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、51号畑跡で本遺構が古い。

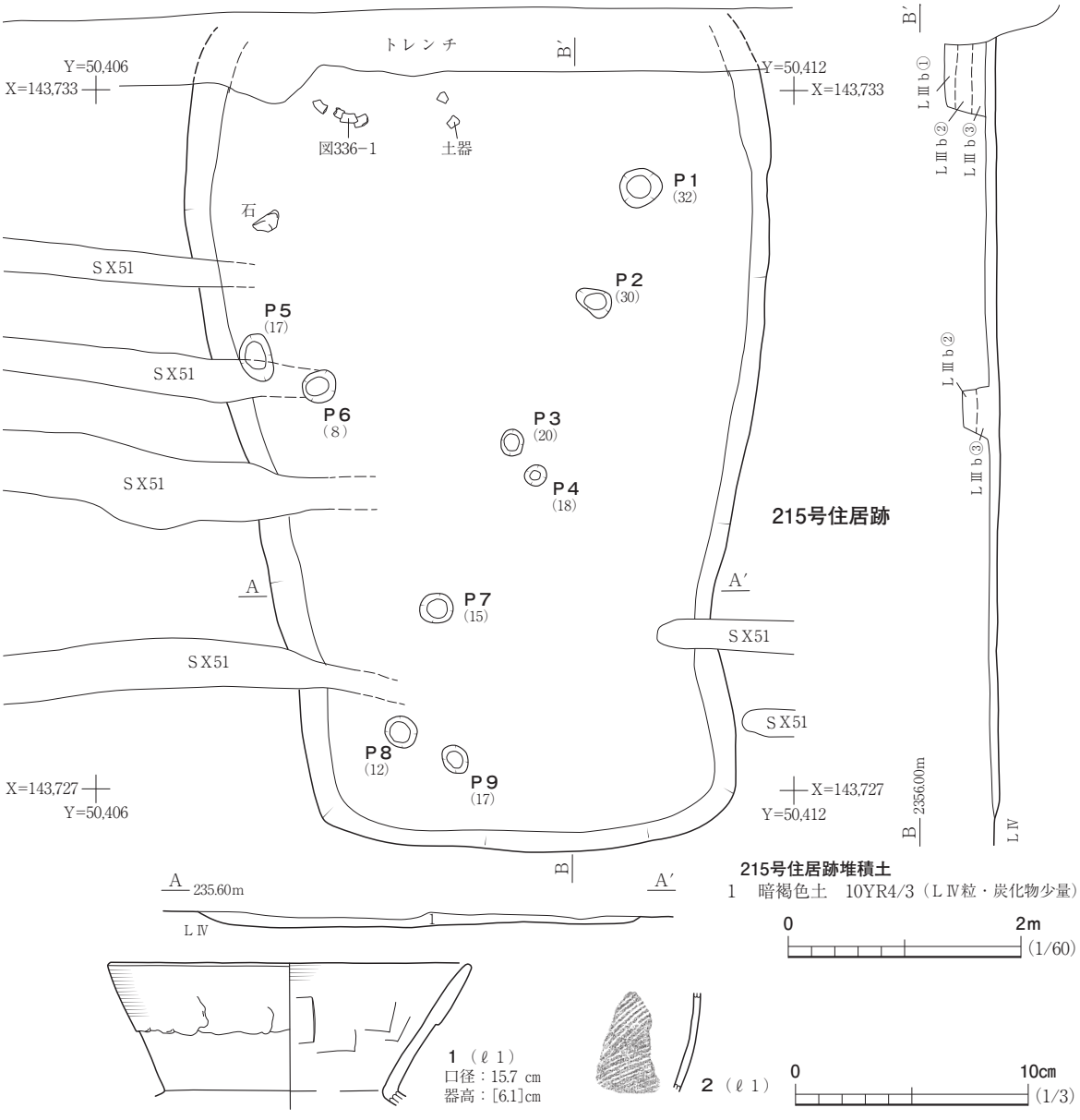


図336　215号住居跡・出土遺物

堆積土は、炭化物とＬⅣ粒を含む暗褐色土の単層である。堆積の過程は不明である。遺構の平面形は、北部を土層観察用トレンチに壊されているが、不整な隅丸長方形と考えている。

規模は、南北の遺存長が6.5ｍ、東西が4.6ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で12㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して、ほぼ真北を指す。床面は掘形底面であるＬⅣａに作られており、やや凹凸が目立つ。比較的締まった状態で、微細な炭化物粒が散在している。

住居内の施設はピットである。ピットは９基検出した。いずれも平面形は、円形ないし楕円形である。断面形は、おおむね円柱状を呈する。ピットの検出位置は、Ｐ１・５・６・８・９が壁際に位置する。Ｐ２～４・７が床面の中央部に位置している。ピットの中には一部柱穴が含まれる可能性があるが、調査では明らかにできなかった。ピット規模は直径20～40㎝、深さが８～32㎝である。堆積土は、住居内堆積土ℓ１と同質な暗褐色土である。

遺物は、住居北西部の堆積土下層から、弥生土器と土師器の破片が一緒に出土している。

遺　　物（図336）

遺物は、土師器６点、弥生土器16点が出土し、このうち２点を図示した。

図336－１は複合口縁壺で、口縁部のみ出土した。２は撚糸を施した弥生土器の胴部片である。

ま と め

本遺構は、不整な隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。ピットが検出された。所属時期は、他遺構との重複関係や出土遺物から、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えている。　（中　野）

216号住居跡　ＳＩ216

遺　　構（図337、写真243）

本遺構は、Ｉ区中央部のＭ・Ｎ－11グリッドに位置している。標高235.3ｍ付近の平坦面から南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。斜面部に土層観察用トレンチを入れた際に、周壁の立ち上がりを確認した。周辺を精査したところ、にぶい黄褐色土が不整な方形に広がる範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構はない。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は褐色砂質土である。自然堆積土で、ＬⅢｂ③に対応する。ℓ２は炭化物を少量含むにぶい黄褐色土で、おおむね自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、北辺側の中央が張り出した不整な隅丸長方形と考えている。規模は、5.3×4.9ｍである。周壁は、残りの良い北壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で18㎝である。方位は、東壁を基準とするなら北に対して40度東に傾く。床面は掘形底面であるＬⅣａに作られており、東側から西側へ緩く傾斜している。表面は比較的締まった状態で、微細な炭化物粒が散在している。

住居内の施設はピットである。２基検出された。Ｐ１は南西隅よりやや北に位置し、貯蔵穴と考えられる。平面形は楕円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は90×80㎝、深さ42㎝であ

る。Ｐ２は床面中央より東に位置し、これも貯蔵穴と考えられる。平面形はおおむね円形で、底面は平坦に掘り込まれている。規模は、直径70cm、深さ20cmである。ピットの堆積土は、いずれも炭化物を含むにぶい黄褐色土であり、住居内堆積土ℓ２に近似している。

遺物は、Ｐ１東側床面より土師器の甕が15cmほどの焼礫とともに横倒しの状態で出土している。

遺　　物（図337、写真416・448）

遺物は、図示した土師器１点、鉄製品１点が出土している。

図337－１はほぼ完形の球胴形の甕である。外面と口縁部内面にはハケメ調整が施され、胴部内

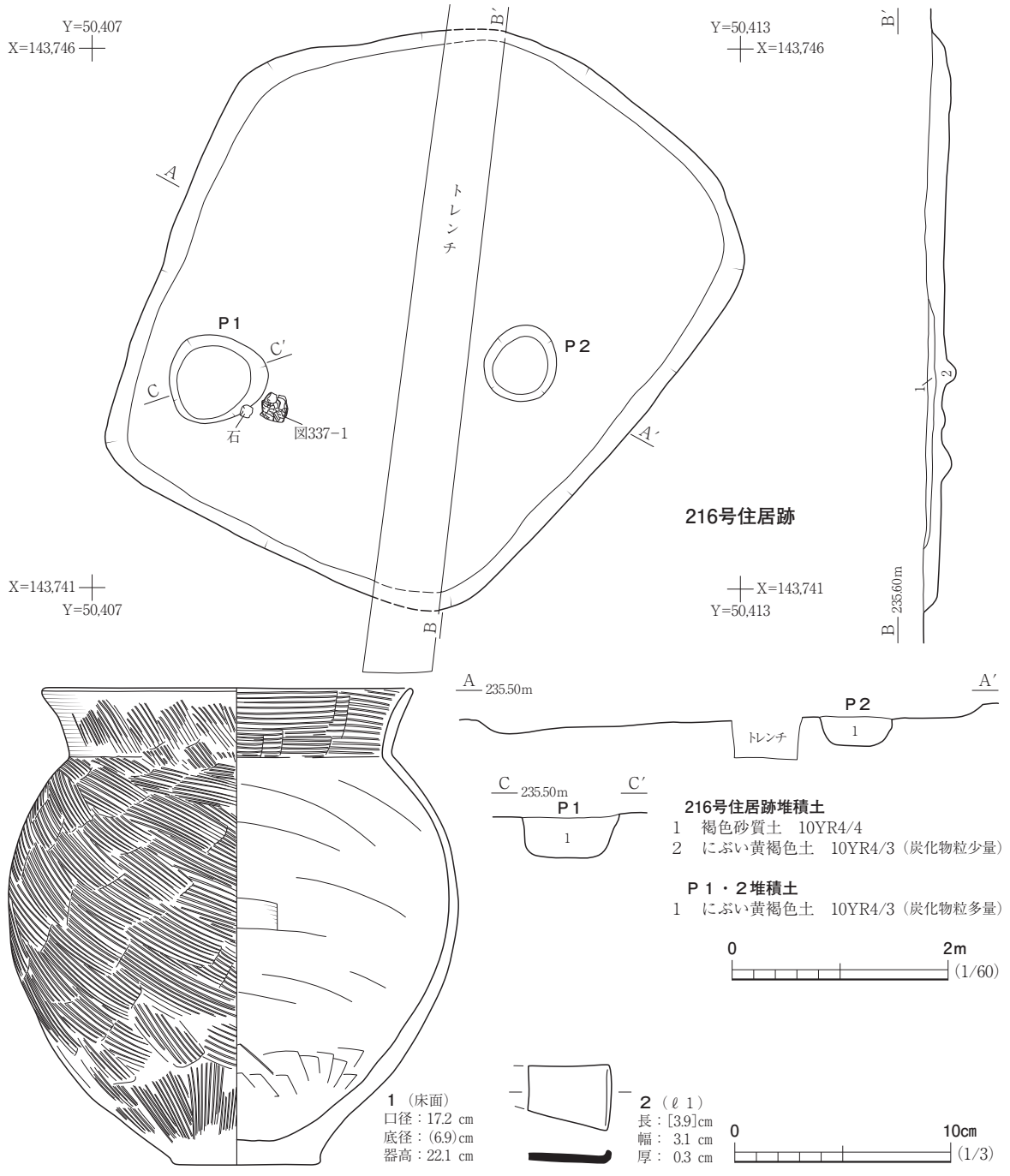


図337　216号住居跡・出土遺物

面にヘラナデが施される。２は鉄製の鎌の破片である。基部が「Ｌ」字状になる。

ま と め

本遺構は、不整な隅丸長方形を呈する竪穴住居跡である。貯蔵穴が検出された。床面からは、完形の甕が１点出土した。時期は、遺物や検出層位から、古墳時代前期と考えている。　（中　野）

217号住居跡　ＳＩ217

遺　　構（図338、写真244）

本遺構は、Ｉ区北部のＯ－13グリッドに位置している。標高235.6ｍ付近の平坦面から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。207号住居跡の調査時に遺構の東側から、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、207号住居跡と51号畑跡である。本遺構がいずれの遺構よりも古い。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物を多量に含むにぶい黄褐色土である。ℓ２は炭化物を少量含むにぶい黄褐色砂質土である。堆積土はおおむね自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、東西に長い不整楕円形である。規模は、7.7×6.2ｍである。周壁は、残りの良い北壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で18㎝である。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して25度西に傾く。床面は掘形底面であるＬⅣａに作られており、おおむね平坦である。比較的締まった状態で、微細な炭化物粒が散在している。

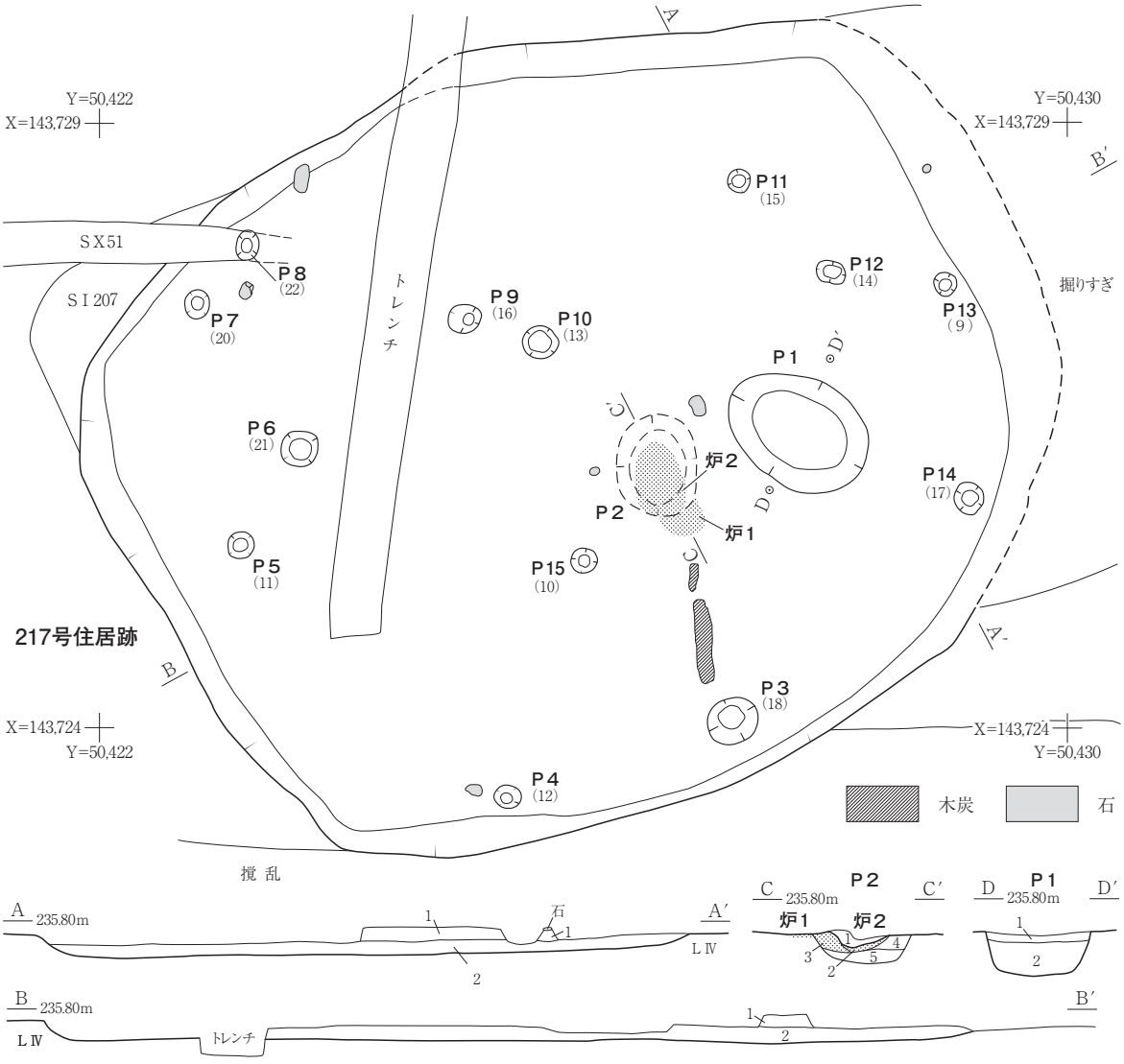
住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は床面中央からやや南東側に２箇所位置する。南側の炉１が、北側の炉２に壊されていることから、炉１が古く、炉２が新しい。炉１の平面形は、円形ないし楕円形と考えている。炉の底面はよく焼けており、長軸37㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは１㎝である。炉２は、当初炉１を壊しているピットと考えＰ２として調査を行った。しかし、掘り下げを行ったところ、焼土面を検出した。断面で確認したところ、炉２はＰ２とした土坑状の掘形をもつことが分かった。掘形の平面形は、楕円形である。規模は85×65㎝、深さ26㎝である。掘形は、堆積土ℓ３・４によって埋められ、さらにℓ２・３の土を貼りつけて炉の火床面を作っていた。炉の底面は、深さが10㎝ほどあり、すり鉢状に掘り窪められていた。炉の火床面は60×43㎝の範囲にわたって赤褐色から暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは11㎝である。

ピットは15基確認した。Ｐ１は炉１・２のすぐ東側に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は楕円形である。規模は123×90㎝、深さ36㎝である。堆積土は２層に区分した。いずれも炭化物やＬⅣ粒を含む暗褐色土である。Ｐ１以外のピットは、規模が20～43㎝、深さ９～22㎝の小規模なものである。平面形は円形で、断面形は円柱状のものが多い。ピットの位置は、Ｐ３～５・７・８・13・14が壁際に位置する。Ｐ６・９・10～12・15は床面の内側に位置している。これらのピットには、おそらく柱穴が含まれるものと考えられるが、柱痕跡などは確認できなかった。Ｐ３～15の堆積土は、いずれも炭化物を多量に含むにぶい黄褐色土である。

遺物は、土師器が23点出土した。いずれも、住居内堆積土ℓ１から散在して出土している。すべて小片で図示していない。いずれも古墳時代前期の所産である。これらの遺物は、遺構外から堆積土上部に流入した遺物と考えられる。

ま と め

本遺構は、東西に長い竪穴住居跡である。地床炉２箇所と貯蔵穴、ピットが検出された。地床炉は、南側の炉１を壊して炉２が作られていた。また、炉２はすり鉢状に掘り窪められた掘形をもつ、本遺跡においては、特殊な形態であった。時期は、重複関係や検出層位から、弥生時代終末期から古墳時代前期頃と考えている。　（中　野）



217号住居跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒多量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物少量）

Ｐ１堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（ＬⅣ粒多量、炭化物少量）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量）

Ｐ２堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物・焼土粒塊多量）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物・焼土粒多量）
3　暗赤褐色土　2.5YR3/3（炭化物少量、炉２ 焼面）
4　暗褐色土　10YR3/3（炭化物少量）
5　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3

図338　217号住居跡

218号住居跡　ＳＩ218

遺　　構（図339、写真245）

本遺構は、Ｉ区中央部のＮ－11・12グリッドに位置している。標高235.7ｍ付近の平坦面から南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣである。56号畑跡を調査中に、焼土の集積と不整形に広がる遺構の範囲を確認したため、住居跡として調査した。遺構は、56号畑跡に壊されており、遺存状態が非常に悪い。重複する遺構は、56号畑跡で、本遺構が古い。

堆積土は炭化物を含むにぶい黄褐色土の単層である。堆積過程は不明である。

遺構の平面形は、残りが悪く不明である。床面の範囲から推定すると、北辺側の中央が丸く張り出した、不整な隅丸長方形、または方形と考えている。

規模は、南壁から地床炉までの長さが3.2ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では45度の角度で立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で14㎝である。方位は、南壁を基準とするなら北に対して20度西に傾く。床面はＬⅣａに作られており、比較的締まった状態であった。表面には微細な炭化物粒が散在している。床面が遺存する範囲は、南北が3.7ｍ、東西が4.0ｍである。

住居内の施設は地床炉である。平面形は楕円形である。炉の火床面は､59×56㎝の範囲にわたって暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは１㎝で、わずかに床面より盛り上がっている。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、地床炉をもつ竪穴住居跡である。残りが悪く、遺物も出土していないことから不明な点が多いが、平面形は隅丸長方形、または方形と思われる。所属時期は、検出面や他遺構との重複関係などから、古墳時代前期頃と考えている。　（中　野）

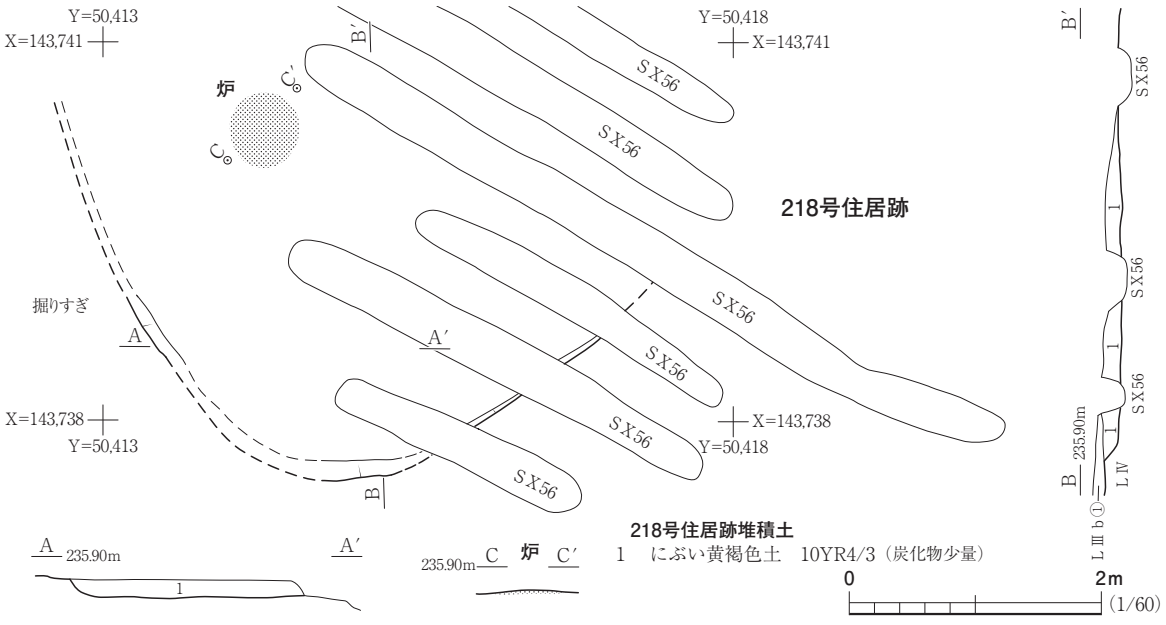


図339　218号住居跡

219号住居跡　ＳＩ219

遺　　構（図340、写真246）

本遺構は、Ｉ区南部のＮ・Ｏ－15グリッドに位置しており、標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅢｂである。重複する遺構はないが東側に203号住居跡が位置する。中央の土層観察用畦に位置していたため、住居跡の存在に気付かず、北側と南側をトレンチ状に深く掘り下げてしまい、床面と東西壁の一部のみを検出した。51号畑跡と重複し、本遺構の方が古い。

堆積土は炭化物粒と焼土粒を含む暗褐色土の単層である。層厚が薄いので詳細は判然としないが、自然堆積土と思われる。

平面形は残りが悪いため不明で、規模は5.5ｍである。周壁は遺存状態の良い西壁側では40度で立ち上がる。壁の遺存高は、西壁で５㎝である。床面は、掘形底面であるＬⅢｂ上を利用しており、硬く踏み締まっている。床は中央から東側に向かって緩く傾斜し、やや凹凸が認められる。

住居内の施設は、地床炉である。地床炉は床面中央より東側に１箇所検出した。平面形は、楕円形を呈する。火床面は、60×50㎝の範囲にわたって暗赤褐色に強く焼土化している。焼土化した部分の厚さは１㎝である。

遺物は、炉の周辺の堆積土下部から、少量の土器片が散在して出土した。

遺　　物（図340）

遺物は土師器８点、弥生土器３点が出土した。このうち弥生土器１点を図示した。

図340－１は撚糸を横位に方向に施文した口縁部片である。

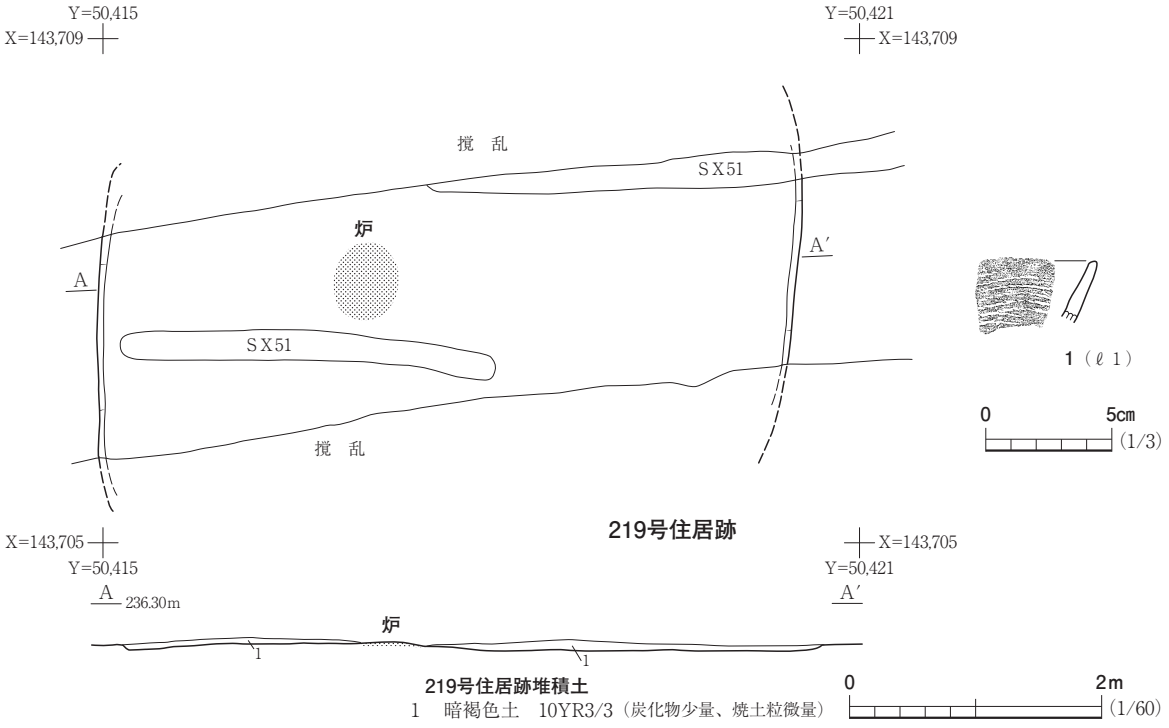


図340　219号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は5.5ｍほどの竪穴住居跡である。地床炉が１箇所検出された。遺存状態が悪く、不明な点が多い。遺構の所属時期は、出土遺物などから古墳時代前期頃と考えられる。　　（中　野）

220号住居跡　ＳＩ220

遺　　構（図341、写真247・267）

本遺構は、Ｉ区北部のＬ－11グリッドに位置しており、標高235.3ｍ付近の西側から東側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は、228・229・236号住居跡である。重複関係は、228号住居跡より古く、229・236号住居跡より新しい。

堆積土は炭化物を多量に含む暗褐色土である。堆積土下層から床面にかけては、炭化材が出土することから火災住居と考えられる。炭化材は、床面西側にかけて検出されているが、いずれもランダムに出土しており、梁や垂木など用途のわかる材の配置ではない。最大の炭化材は、住居南西部で検出されたもので、長さ30㎝、幅７㎝、厚さ５㎝である。

平面形は、東部が失われているが、円形か楕円形と考えている。規模は遺存長が3.8ｍである。周壁は、遺存状態の良い西壁側で80度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で８㎝である。床面は掘形底面であるＬⅣに構築しており、2.7×2.4ｍの範囲で踏み締まりによる硬化面を検出した。平坦だが、西側から東側に緩く下っている。

住居内の施設は、地床炉とピットである。地床炉は、西壁側の中央からやや北側に寄った位置で１箇所確認した。平面形は、楕円形である。規模は65×53㎝で、炉の火床面は、非常に強く焼けており明赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは８㎝である。炉の火床面からは微細

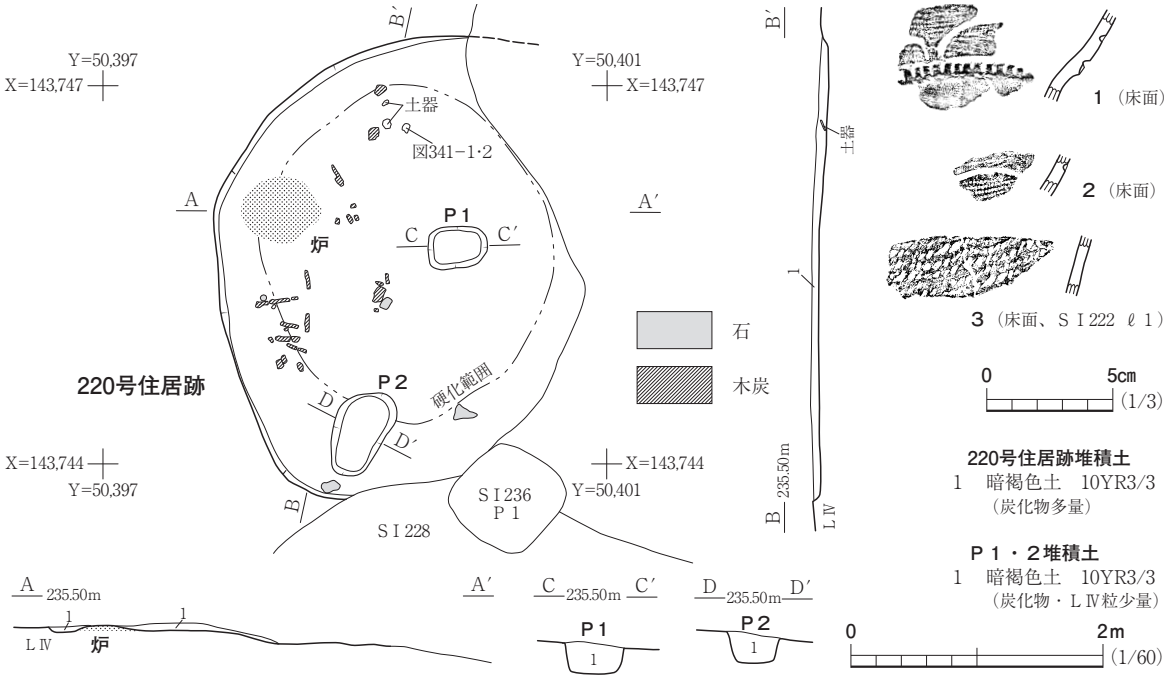


図341　220号住居跡・出土遺物

な焼骨片が出土しており、炉の使用時に混入したものと思われる。

ピットは、２基検出した。Ｐ１は、床面中央に位置する。平面形は隅丸方形である。規模は47×34㎝、深さ23㎝である。Ｐ２は、南壁側中央に位置する。平面形は南北に長い楕円形である。規模は68×45㎝、深さ24㎝である。堆積土はＬⅣ粒と炭化物を含む暗褐色土である。これらのピットの機能は明らかにできなかった。

遺物は、北西側の床面から炭化材などが出土している。

遺　　物（図341、写真436）

遺物は、弥生土器７点が出土した。このうち３点を図示した。図341－１・２は口縁部直下の破片で同一個体である。胎土には雲母が含まれ、硬く焼き締まっている。口縁部には縄文を横位に施し、沈線で弧線を描く。外面に段をもち、連続的に刺突文を施す。頸部は無文部となる。３は222号住居跡から出土した破片と接合した縄文を施す胴部片である。

ま と め

本遺構は、3.8ｍほどの竪穴住居跡である。東部が失われている。西側の壁際に地床炉が１箇所検出された。床面は傾斜しているが、硬化面も確認できた。堆積土からは、炭化材が多く出土し、火災住居と考えられる。遺構の時期は、出土遺物から弥生時代終末期と考えられる。　　（中　野）

221号住居跡　ＳＩ221

遺　　構（図342、写真248）

本遺構は、Ⅰ区北部のＬ・Ｍ－10グリッドに位置しており、標高235.5ｍ付近の西側から東側に下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣ下面である。重複する遺構は、229・235号住居跡である。位置的に重複するが堆積土の切り合い関係は確認できていない。ただし、本遺構が、227号住居跡や228号住居跡の検出面であるＬⅢａ⑥が堆積していることから、周辺に位置する遺構の中ではもっとも古い遺構の一つと考えている。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色砂質土で自然堆積土である。ℓ２は炭化物を多量に含み、焼土粒を微量含むにぶい黄褐色土で、貼床の構築土である。

平面形は、南側が失われているが、西北隅の状態から隅丸方形ないし長方形と考えている。規模は北東壁と南西壁の長さで4.6ｍである。周壁は、遺存状態の良い北西壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北西壁で25㎝である。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して西に40度傾く。床面はＬⅤに作られており、締まりは弱い。

住居内の施設は、地床炉である。床面中央から南側に寄った位置で、１箇所確認した。平面形は、南側を失っているがおおむね楕円形と考えている。規模は長さが100㎝である。炉の火床面は、非常に強く焼けており赤褐色に焼土化している。焼土化した部分の厚さは10㎝である。炉からは微細な焼骨片が出土しており、使用時に混入したと考えられる。

遺物は、炉の東側の堆積土下部より、土器片が少量出土した。

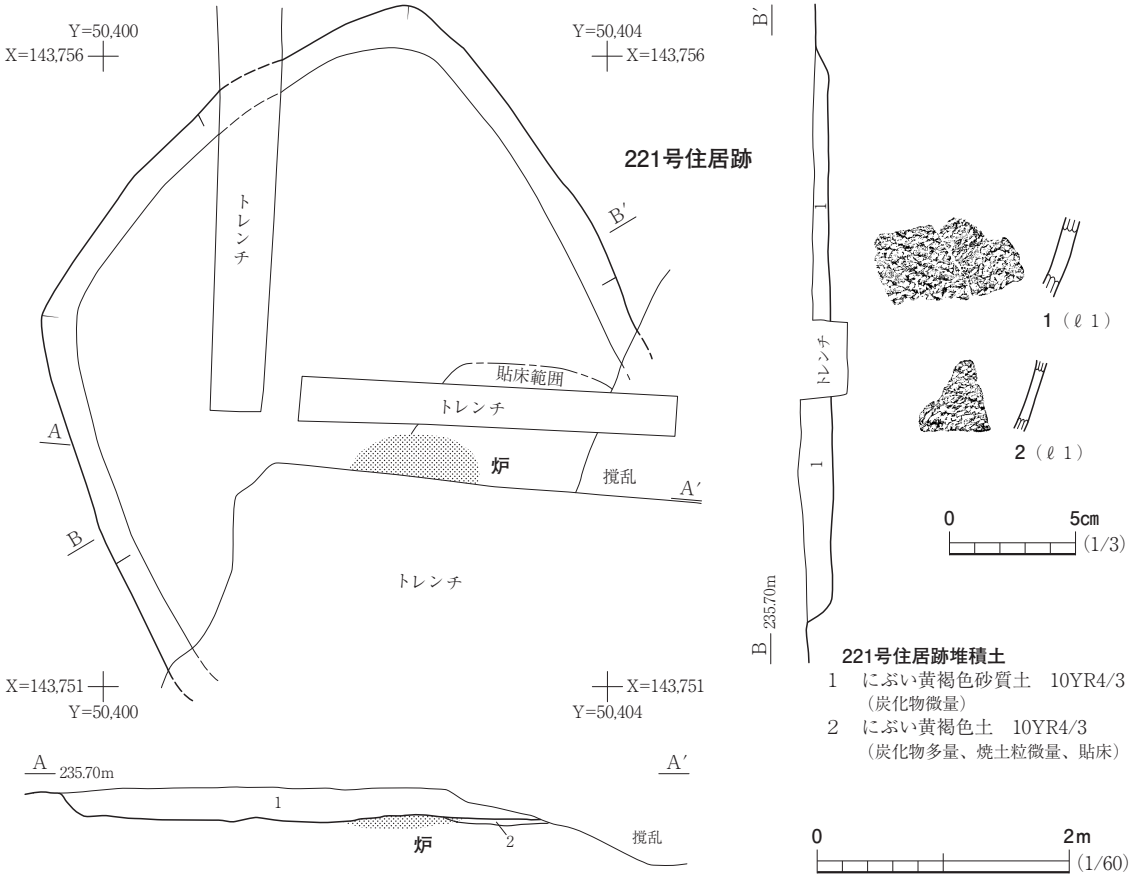


図342　221号住居跡・出土遺物

遺　　物（図342）

遺物は、弥生土器７点が出土した。いずれも破片で、このうち２点を図示した。図342－１・２は、同一個体で、器面に縄文を施した胴部片とみられる。

ま と め

本遺構は、地床炉をもつ長方形の竪穴住居跡である。堆積土の状況から周辺の遺構群の中ではもっとも古い遺構である。時期は、出土遺物などから弥生時代終末期と考えられる。　　（中　野）

222号住居跡　ＳＩ222

遺　　構（図343、写真249）

本遺構は、Ⅰ区西部のＫ－13グリッドに位置しており、標高235.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣ下面である。重複する遺構はない。Ｋ－13グリットの遺構検出の際に、南側を撹乱によって壊された遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。

堆積土はにぶい黄褐色砂質土の単層である。堆積過程は不明である。

平面形は、南側が失われているが、隅丸方形ないし長方形と考えている。規模は東西4.3ｍである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも残りのよい北壁で６㎝である。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して西に20度傾く。床面は掘形底面で

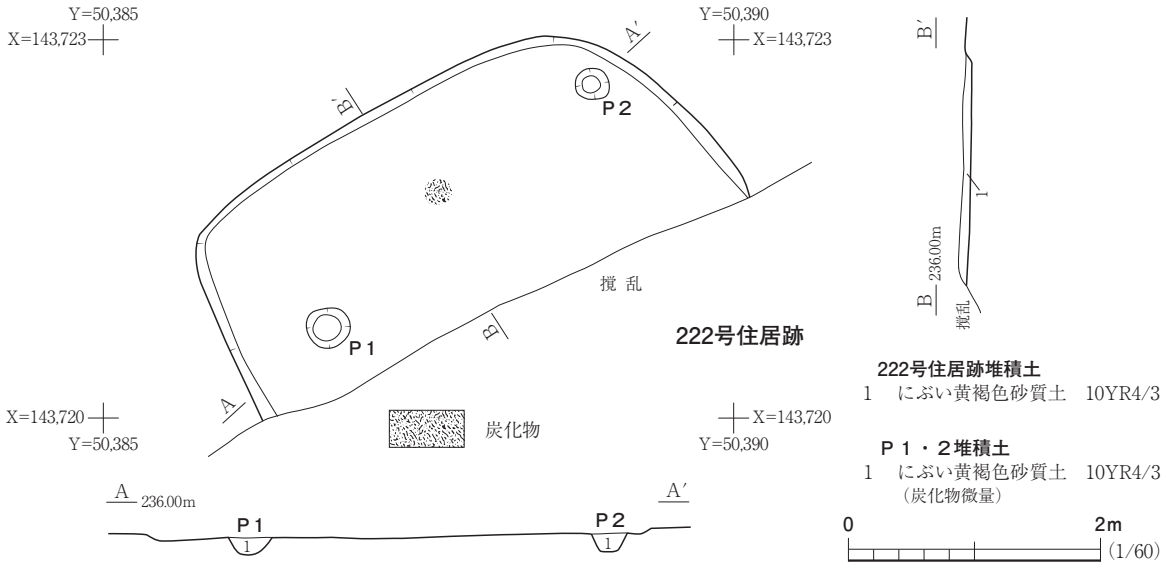


図343　222号住居跡

あるＬⅤに作られており、締まりは弱い。床面中央の北側には、直径25㎝ほどの炭化物の集積が検出された。炉の可能性も考えたが、床面が焼けておらず、性格は明確にできなかった。

住居内の施設は、ピットを２基検出した。Ｐ１は西壁側に、Ｐ２は北東隅に位置する。ピットの規模は、直径30～35㎝、深さ12～14㎝の小型のものである。機能は明らかにできなかった。堆積土は炭化物を微量含むにぶい黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、隅丸方形か長方形の竪穴住居跡である。遺物も出土しておらず不明な点が多い。所属時期は、検出面などから古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

223号住居跡　ＳＩ223

遺　　構（図344、写真250）

Ⅲ区北西部のＫ－16グリッドに位置し、標高235.7ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢである。重複する遺構はなく、北側に177号土坑、南側に175号土坑が隣接する。直接の重複関係にはないが、上層に６号溝跡と３号畑跡が位置していた。

平面形は不整な方形で、規模は一辺3.1ｍである。方位は東壁で北から40度東を示す。周壁は遺存状況の良い部分で15㎝ほどである。床面は貼床が施されており平坦となっている。踏み締まりによるとみられる硬化面が確認された。硬化面は西壁から住居中央に延びるように形成されており、西壁に入口施設が存在した可能性が考えられる。

住居内堆積土は４層に分層した。ℓ１は住居上面を覆う暗褐色粘質土である。ℓ２は焼土粒が含まれる黒褐色粘質土であり、床面中央を覆っている。ℓ３は基盤層ＬⅢに近似する土で、壁際の三角堆積を示している褐灰色粘質土である。ℓ４は掘形を覆う土で、貼床と判断した。部分的に踏み締まりによる硬化面が形成されており、赤茶色に表面が変色している。

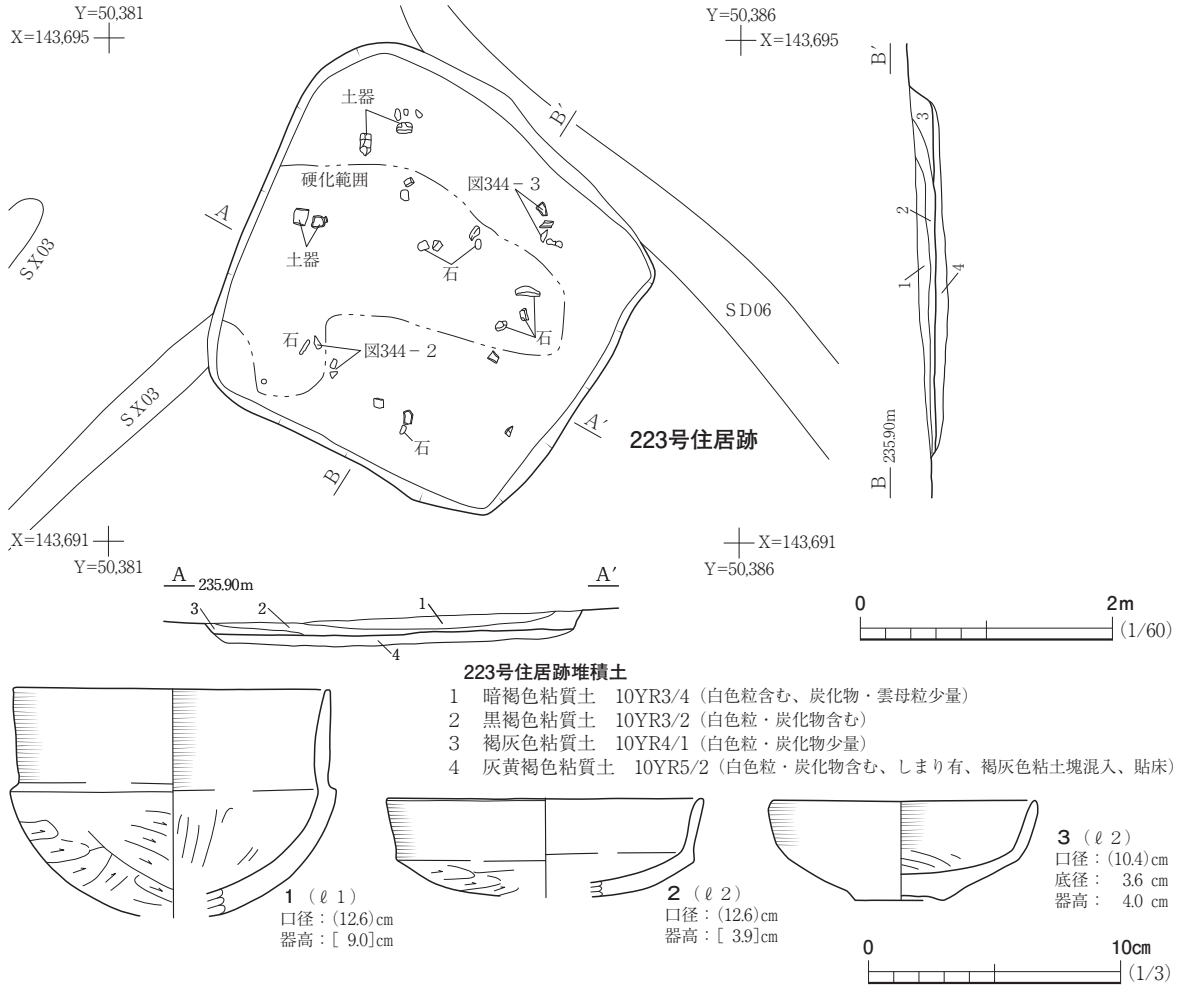


図344　223号住居跡・出土遺物

カマドや柱穴といった住居内の施設は一切確認されなかった。

遺物は住居北部を中心に出土した。いずれも破片で堆積土からの出土である。竪穴埋没過程において廃棄されたものと思われる。また被熱した粘土塊や川原石、メノウの原石が確認された。

遺　　物（図344）

本遺構からは、土師器123点、弥生土器１点が出土した。細かい破片が多く、図示できたのは土師器の杯が３点のみである。

図344－１は丸底とみられる杯で、口縁部は幅広で直立し、身は深めとなっている。口縁部をヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデによって調整される。２は丸底の杯で、口縁部はわずかに外傾する。胎土には非常に多くの砂粒を含む。３は底部が浅く凹んだ平底となる杯で、内外面ともに調整がやや粗雑である。胎土には５㎜ほどの玉髄片が含まれる。

ま と め

本遺構は、一辺3.1ｍの方形の竪穴住居跡である。床面には踏み締まりによるとみられる硬化面が認められ、西壁から住居中央に延びるように形成されていることから、西壁付近に入口施設が存在した可能性が考えられる。カマドや柱穴といった住居内の施設は認められないことから、居住以

外の機能をもっていたとも考えられる。遺物はいずれも堆積土中から出土しており、焼けた粘土塊、川原石やメノウの原石が出土している。周辺に位置する廃棄土坑からも同じようなものが出土していることから、竪穴廃絶後の窪地が捨て場として利用されていたと考えられる。出土した遺物の特徴から、時期は古墳時代後期とみられる。（神　林）

224号住居跡　ＳＩ224

遺　　構（図345、写真251～253）

本遺構は、Ⅳ区のＨ・Ｉ－５グリッドに位置し、標高236.0ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。重複する遺構はなく、南側２ｍほどのところに197号住居跡が位置する。

平面形は5.5×5.3ｍの方形である。方位は東壁で、北から28度東を示す。周壁の高さは遺存状況の良い部分で25㎝である。北西壁と南東壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がるのに対し、北東壁と南西壁はやや緩やかな立ち上がりを示す。床面は住居中央と壁際およびカマド周辺では掘形底面であるＬⅡｂをそのまま床としている。また住居の各壁に平行するように幅50～80㎝で一段深い溝状の掘形が認められ、この範囲には貼床が施されていた。

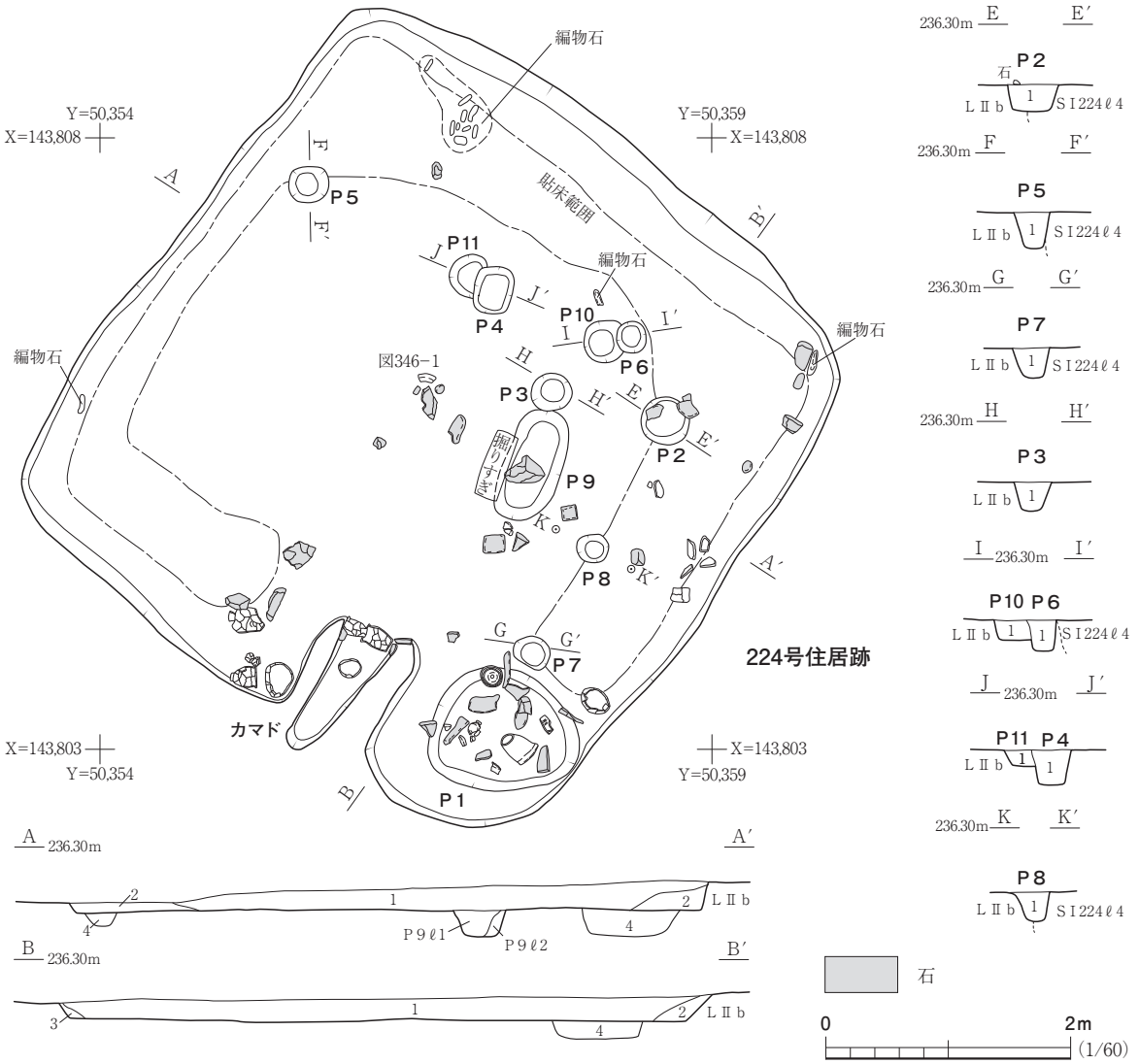
住居内堆積土は４層に分層した。ℓ１は竪穴全体に堆積し、床面も覆う黒褐色の粘質土であり、ＬⅡａに近似している。ℓ２・３は壁際に堆積する砂層である。これらは周辺からの流入土と思われる。ℓ４は、周縁部の掘形を覆う人為的な埋土で、貼床の構築土である。

住居内の施設は、カマド１基、貯蔵穴１基（Ｐ１）、ピット９基（Ｐ２～10）である。

カマドは南西壁中央やや東寄りに位置し、両袖と燃焼部を確認した。左右の両袖は上面がやや削平されているが、砂混じりの粘土で構築され、先端部には袖石が立てられている。袖の規模は左袖が長さ110㎝、幅30㎝、高さ20㎝ほどで、右袖は長さ90㎝、幅25㎝、高さ20㎝ほどである。両袖に挟まれた燃焼部は長さ250㎝、幅100㎝である。焼土面ははっきりしない。中央部には長細い川原石が立てられており、支脚として利用されたと思われる。カマド内堆積土は５層に分層した。ℓ１は住居内堆積土ℓ１に近似する砂質土である。ℓ２は炭を含まないものの、きわめて黒みの強い砂質土である。ℓ３は底面を覆うように堆積して部分的に弱く焼土化しており、焼土面である可能性もある。ℓ４は支脚上の土器内に堆積している。

貯蔵穴（Ｐ１）は、カマドの左脇にあたる、住居南隅に位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.35ｍである。底面はＬⅢの砂層に作られており、平坦で周壁は急角度で立ち上がる。堆積土は３層に分層した。いずれの層もカマドに由来するとみられる焼土粒や炭が含まれ、レンズ状に堆積していった様子が伺えることから、自然堆積土と考えている。ℓ１はＬⅡまたはＬⅢに由来するとみられる暗褐色の粘質土である。ℓ２・３は貯蔵穴が掘り込まれているＬⅢに近似するにぶい黄褐色の砂層である。

Ｐ２～８・10は住居の南東壁と北東壁に平行するように並び、平面形や規模から柱穴と考えられる。平面形は円形から楕円形であり、平面規模は25～40㎝、深さはＰ４・６が10㎝ほどで、そ



224号住居跡堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2
　（白色粒・炭化物含む、しまりやや有）
2　黒褐色砂　10YR3/1（白色粒・炭化物含む）
3　にぶい黄褐色砂　10YR4/3
4　褐灰色粘質土　10YR4/1
　（白色粒含む、しまりやや有、貼床）

カマド堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
2　極暗褐色砂質土　7.5YR2/3（焼土粒含む）
3　暗褐色砂質土　10YR3/3（焼土粒含む）
4　暗褐色砂質土　10YR3/3

P１堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3
　（白色粒含む、炭化物・焼土少量、しまりやや有）
2　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（白色粒・炭化物少量）
3　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（白色粒少量、焼土含む）

P２・10・11堆積土
1　黒褐色粘質土　5YR2/2（焼土粒多量）

P３・４・７・８堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（焼土粒含む）

P５・６堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3

P９堆積土
1　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（焼土塊多量）
2　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（焼土塊少量）

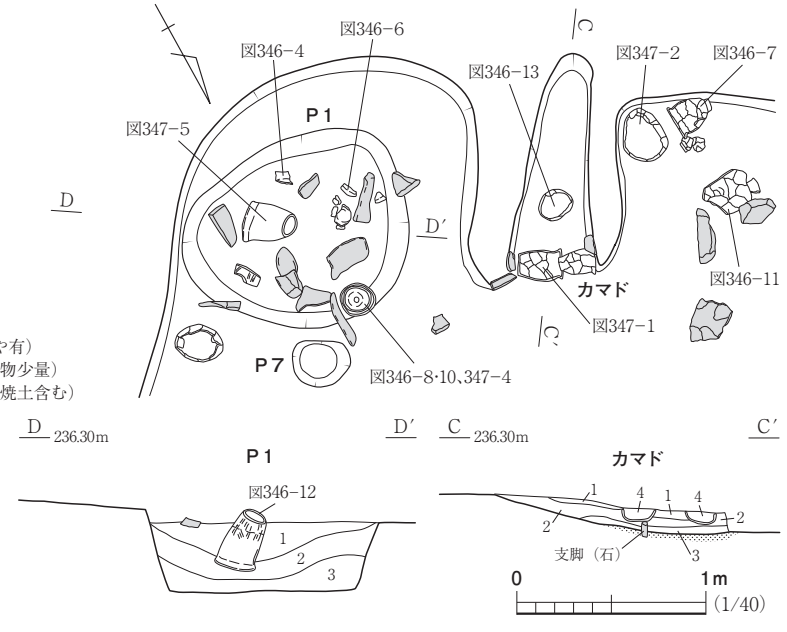


図345　224号住居跡

の他は25㎝と揃えられている。

Ｐ９は住居中央南東寄りに位置し、Ｐ３と接している。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸95㎝、短軸45㎝、深さ20㎝である。堆積土は２層で、焼土塊を多く含んだにぶい黄褐色砂が堆積している。なお、堆積土の上面は踏み締まりによって硬化しており、比較的大きな礫が置かれていた。このことから、住居機能時には既に埋没していたものと思われる。

遺物はカマドを中心に土師器がまとまって位置している他、住居北西壁と北東壁からは編物石と思われる棒状の自然礫がまとまって位置していた。

カマド周辺の遺物は、貯蔵穴周辺と、カマド燃焼部および右袖脇の２箇所に大別される。

貯蔵穴周辺には、図346－４・６の杯、図346－８の鉢、図346－10の壺、図347－４の有孔鉢、図347－５の甑の他に、カマド構築材とみられる被熱した礫が位置する。多くは床面や、図347－５の甑のように貯蔵穴堆積土に転落したような状態で出土している。よってこれらの遺物は竪穴上端部や床面に置かれていたものが埋没過程において、貯蔵穴内に流れ込んだものと思われる。また図346－10の壺は、口縁部を下にした状態で、上に図346－８の鉢と図347－４の有孔鉢が重ねて置かれており、置台として転用されたものと思われる。

カマド燃焼部及び右袖脇からは、主に甕が出土している。燃焼部中央の甕(図346－13)は支脚の上にのっており、このカマドで使用されたものの可能性が高い。両袖の先端部を渡すように土師器の長胴甕が出土しているが、二次的に火熱を受けた痕跡はみられなかった。カマドの左脇に位置する長大な礫には、片面が火熱によって赤変し、もう一方の面にはススが多量に付着しているものがあり、長さも燃焼部先端の袖石に渡せる長さであった。よってこれが本来の焚口天井構築材であったと考えられ、焚口出土の土師器甕は、カマドの機能が停止して焚口天井を壊した後に、意図的に置かれたものと思われる。右袖脇の甕は、いずれも横転またはその場で押しつぶされたような状態で出土しており、ここに置かれていたのであろう。

よって、これらの遺物はすべて本住居跡に伴うものと判断される。

遺　　物（図346・347、写真416～418）

本遺構からは土師器726点、土製品１点、石製品16点と、まとまった量の遺物が出土した。このうち、土師器18点、土製品１点を図示した。

図346－１～６は丸底の杯で、口縁部と体部の境に稜を有する。４を除いて内面黒色処理が認められる。口縁部は、大きく外反するもの(１～３)、緩く外反するもの(４・５)、外傾するもの(６)に分けられる。１・３・５・６は口縁部外面にヘラミガキが施される。５の底部に「×」の線刻が認められる。なお、５は「会津型」と呼ばれるタイプのものと思われる。

図346－７・８は鉢、９は小型の甕である。いずれも二次的な焼成の影響か、外面は赤変し、器壁の劣化が著しい。底面付近にはコゲが付着しており、煮炊きに使用したものと思われる。図346－10は壺の上半部である。内外面ともにヘラミガキが施されている。置台に転用されており、割口および内面の括れ部が摩耗している。

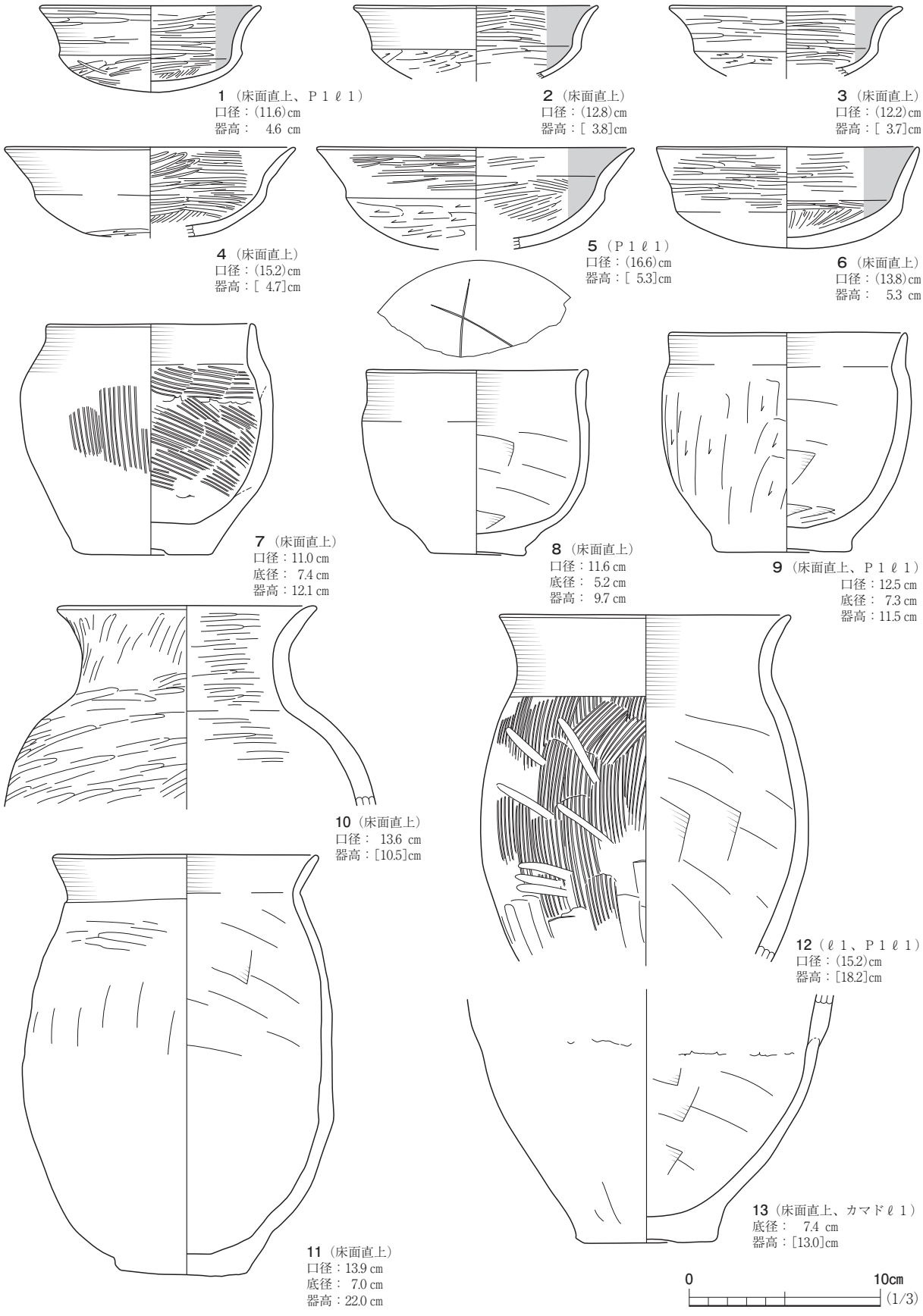


図346　224号住居跡出土遺物（1）

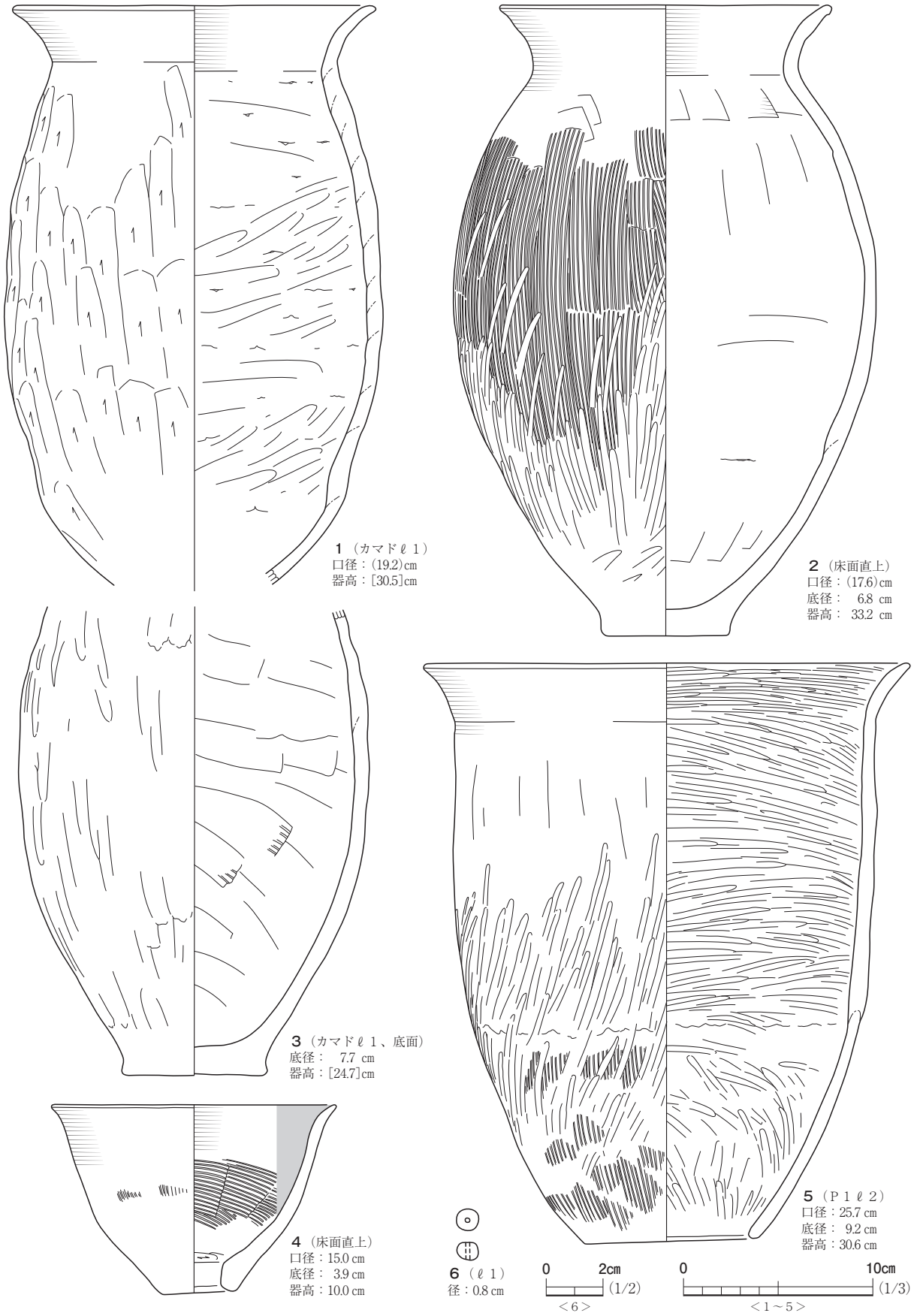


図347　224号住居跡出土遺物（２）

図346－11～13、図347－１～３は甕である。体部は長胴である。外面はナデ調整のもの以外に、縦方向のケズリや、ハケ調整の後にヘラミガキを施すものが認められる。11の内面上半部には薄いコゲが帯状に付着している。４は単孔の有孔鉢である。ヨコナデ・ハケメで調整され、内面には黒色処理が施される。８の鉢と組み合わさって出土しており、甑として用いられたと思われる。

５は大型の甑である。外面は体部下半がハケメのちミガキ、上半は縦方向のヘラミガキおよびナデで調整される。内面は丁寧なヘラミガキが施される。部分的に焼成時の黒斑が認められる。

６は土玉で、住居内堆積土から出土した。径0.8㎝の穴があけられている。

ま と め

本遺構は、5.5×5.3ｍの規模の、方形の竪穴住居跡である。床面は中央部では基盤層であるＬⅡｂをそのまま床面とし、周縁部では貼床が施されていた。住居内の施設にはカマド・貯蔵穴・柱穴とみられるピットが認められる。カマド周辺を中心に、住居に伴うとみられる土器がまとまって出土した。遺物の特徴から古墳時代後期に機能したと考えられる。　（神　林）

225号住居跡　ＳＩ225

遺　　構（図348、写真254）

本遺構は、Ⅰ区西部のＬ－12グリッドに位置している。標高235.1ｍ付近の南側から北側に下る緩斜面に位置する。検出面はＬⅢａ⑥である。重複する遺構は、228号住居跡である。重複関係は、228号住居跡より新しい。直接重複しないが、上層に22・23号住居跡が位置していた。Ｌ－12グリッドの検出の際に、灰黄褐色土が長方形に広がる範囲を確認し、住居跡として調査した。

堆積土は灰黄褐色土の単層である。堆積過程は自然堆積と考えている。

平面形は、不整な隅丸長方形である。規模は3.9×2.9ｍである。周壁は、遺存状態の良い北壁側

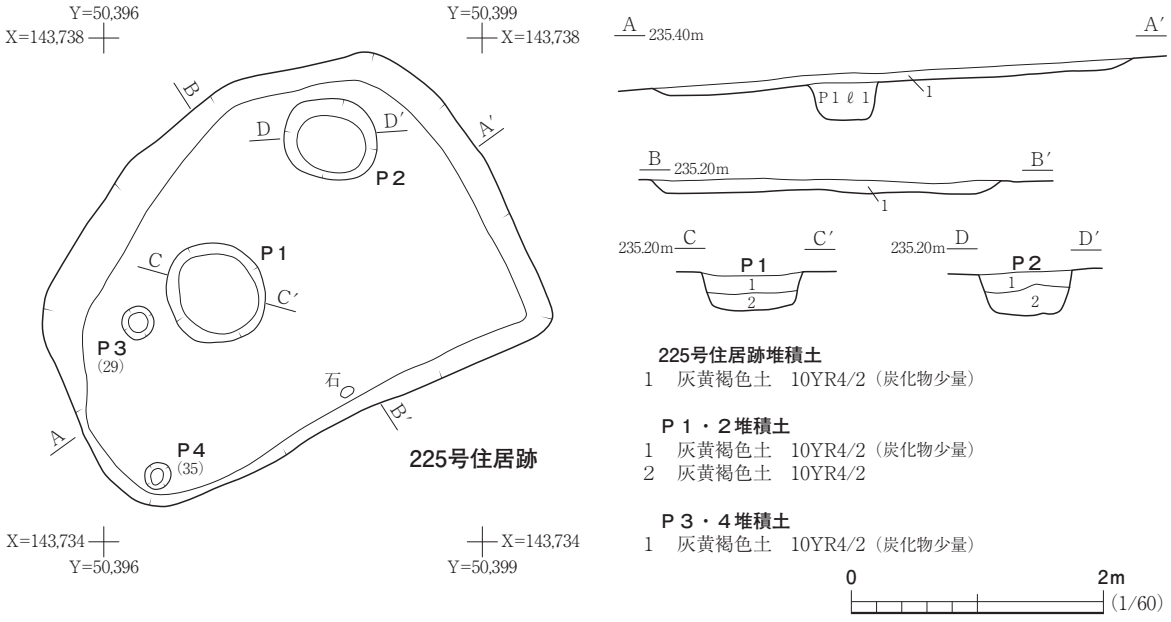


図348　225号住居跡

が30度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している北壁で11㎝である。方位は、西壁を基準とするなら、北に対して西に約20度傾く。床面はＬⅢｂに作られており、踏み締まりは弱い。東側から西側に緩く傾斜している。

住居内の施設は、ピットを４基検出した。Ｐ１は床面中央から、わずかに西側に寄って位置する。平面形は円形である。底面は平坦に掘り込まれている。規模は80×78㎝、深さが27㎝である。Ｐ２は北東隅に位置する。平面形は楕円形である。底面は平坦に掘り込まれている。規模は73×65㎝、深さが34㎝である。Ｐ１・２の堆積土は２層に区分した。いずれも同質な土で、灰黄褐色土である。位置や規模などからＰ１・２は貯蔵穴と考えている。Ｐ３とＰ４は西壁隅付近に位置する。ピットの規模は、直径20～25㎝、深さ29～35㎝の小型のものである。断面は円柱状である。柱穴の可能性もあるが、機能は明らかにできなかった。Ｐ３・４の堆積土は炭化物を含む灰黄褐色土である。いずれのピットの堆積土も、住居内堆積土と同じである。よって、住居の廃絶時には、開口していた可能性が高い。

時期や機能を示す遺物は、一切出土しておらず、自然石が１点出土したのみである。

ま と め

本遺構は、3.9×2.9ｍの隅丸長方形の竪穴住居跡である。貯蔵穴とピットを検出した。遺物も出土しておらず、不明な点が多い。時期は、検出面から古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

226号住居跡　ＳＩ226

遺　　構（図349、写真255）

本遺構は、Ⅰ区中央部のＭ・Ｎ－12グリッドに位置している。標高235.4ｍ付近の南側から北側に下る緩斜面に位置する。検出面はＬⅢｂである。重複する遺構は、215住居跡と位置的に重複するが、堆積土の切り合い関係がみられず新旧関係は不明である。Ｍ－12グリッドの遺構検出の際に、ＬⅢｂ面において、にぶい黄褐色土の範囲を確認したことから住居跡として調査した。

堆積土は２層に分けた。ℓ１は褐色砂質土を多量に含むにぶい黄褐色土である。ℓ２は炭化物を

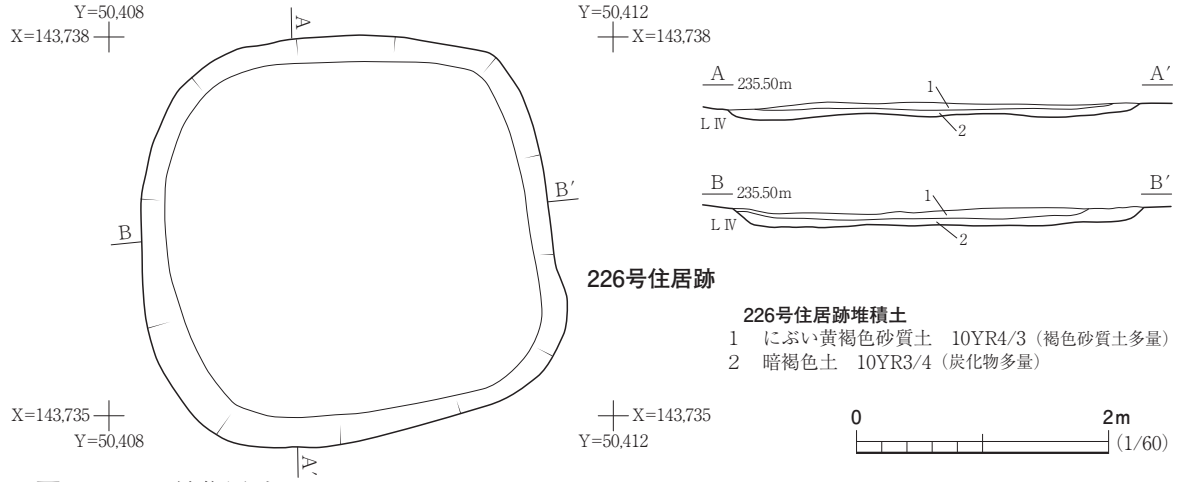


図349　226号住居跡

多量に含む暗褐色土である。堆積過程は自然堆積土と考えている。

平面形は、丸みの強い隅丸方形である。規模は3.3×3.2ｍである。周壁は、遺存状態の良い北壁側で30度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している西壁で16㎝である。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して西に約10度傾く。床面は掘形底面であるＬⅢｂに作られており、締まりは弱い。住居内の施設は、検出されなかった。

遺物は、土師器が２点出土した。いずれも胴部の小片であり、図示していない。いずれも古墳時代前期の所産である。

ま と め

本遺構は、3.3ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。住居内の施設は検出されなかった。所属時期は、検出面などから古墳時代前期頃と考えられる。　（中　野）

227号住居跡　ＳＩ227

遺　　構（図350、写真256）

本遺構は、Ⅰ区西部のＭ－11・12グリッドに位置している。標高235.3ｍ付近の東側から西側に下る緩斜面に位置する。検出面はＬⅢａ⑥である。重複する遺構はない。Ｎ－11・12グリッドの遺構検出の際に、ＬⅢｂの暗褐色土の面で、にぶい黄褐色土が方形に広がる範囲を確認したことから、住居跡として調査した。

堆積土は４層に区分した。ℓ１は炭化物と砂粒を多く含む暗褐色土である。ℓ２はにぶい黄褐色土である。ℓ３は灰黄褐色土である。ℓ４は炭化物を少量含む暗褐色土である。ℓ１～３は、住居

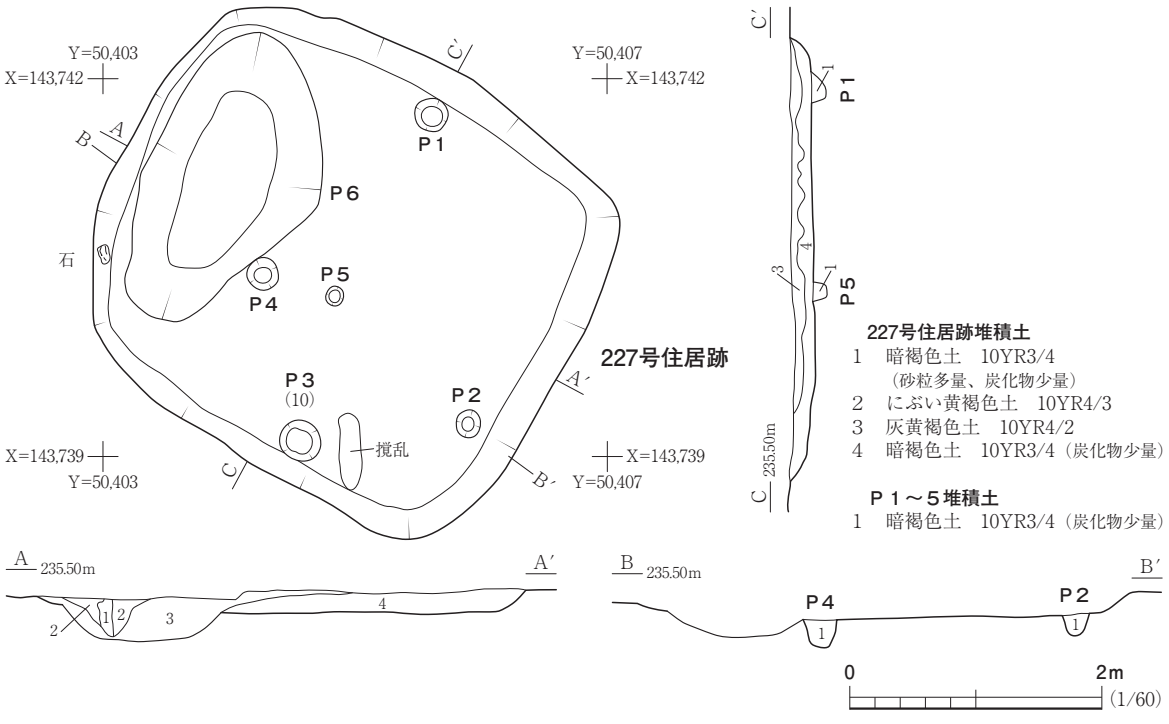


図350　227号住居跡

跡の西部にあるＰ６に入り込んでいる。堆積土の状況から別遺構の可能性も考えられたが、調査時には明らかにできなかった。堆積過程は、いずれも自然堆積と考えている。

平面形は、隅丸方形である。規模は3.9×3.5ｍである。周壁は、遺存状態の良い東壁側で45度で立ち上がる。壁の遺存高は、もっとも遺存している東壁で15㎝である。方位は、東壁を基準とするなら、北に対して東に約30度傾く。床面はＬⅢｂに作られており、締まりは弱い。

住居内の施設はピットを６基検出した。Ｐ１～３は壁際に位置し、Ｐ４・５は中央部に位置する。いずれも平面形が円形で、断面形が円柱状を呈する。ピットは柱穴の可能性がある。規模は、直径が15～34㎝、深さが８～20㎝である。堆積土は炭化物を含む暗褐色土である。Ｐ６は住居跡の西壁側に位置する楕円形のピットである。底面形は凹凸があるがおおむねすり鉢状を呈する。規模は240×135㎝、深さ23㎝である。住居内堆積土ℓ３が入り込んでいることから、ℓ４堆積後に掘り込まれた別遺構の可能性があるが、明らかにできなかった。

時期や機能を示す遺物は出土しておらず、壁付近から自然石１点が出土した。

ま と め

本遺構は、3.9×3.5ｍの隅丸方形の竪穴住居跡である。柱穴と考えられるピットを検出した。所属時期は、検出面などから古墳時代前期頃と考えられる。（中　野）

228号住居跡　ＳＩ228

遺　　構（図351、写真257・270）

本遺構は、Ⅰ区北西部のＬ・Ｍ－11・12グリッドに位置している。標高235.2ｍ付近の平坦面から南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。225号住居跡の北側の遺構検出時に、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、220・225・236号住居跡、194号土坑である。本遺構が225号住居跡より古く、それ以外の遺構より新しい。

堆積土は４層に区分した。ℓ１は炭化物を少量含む灰黄褐色土で、基本土層のＬⅢａ⑥に対応する土層である。ℓ２は炭化物を多量に含む暗褐色土である。ℓ３は炭化物を少量含む暗褐色土である。ℓ４は西壁側に三角状に堆積した炭化物を微量に含む灰黄褐色土である。堆積土はおおむね自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、南北に長い不整な楕円形である。規模は、6.6×5.2ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高はもっとも残りのよい西壁側で24㎝である。方位は、住居跡の西壁を基準とするなら北に対して約20度東に傾く。床面はＬⅤに作られており、表面にはやや凹凸もみられ、南から北側に緩く傾斜している。比較的締まった状態で、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

床面南西部では、焼土粒の集積と炭化材がまとまって出土している。焼土は炭化材や炭化物粒とともに長軸135㎝、短軸105㎝の範囲で検出した。焼土は床面から５㎝ほど堆積していた。炭化材

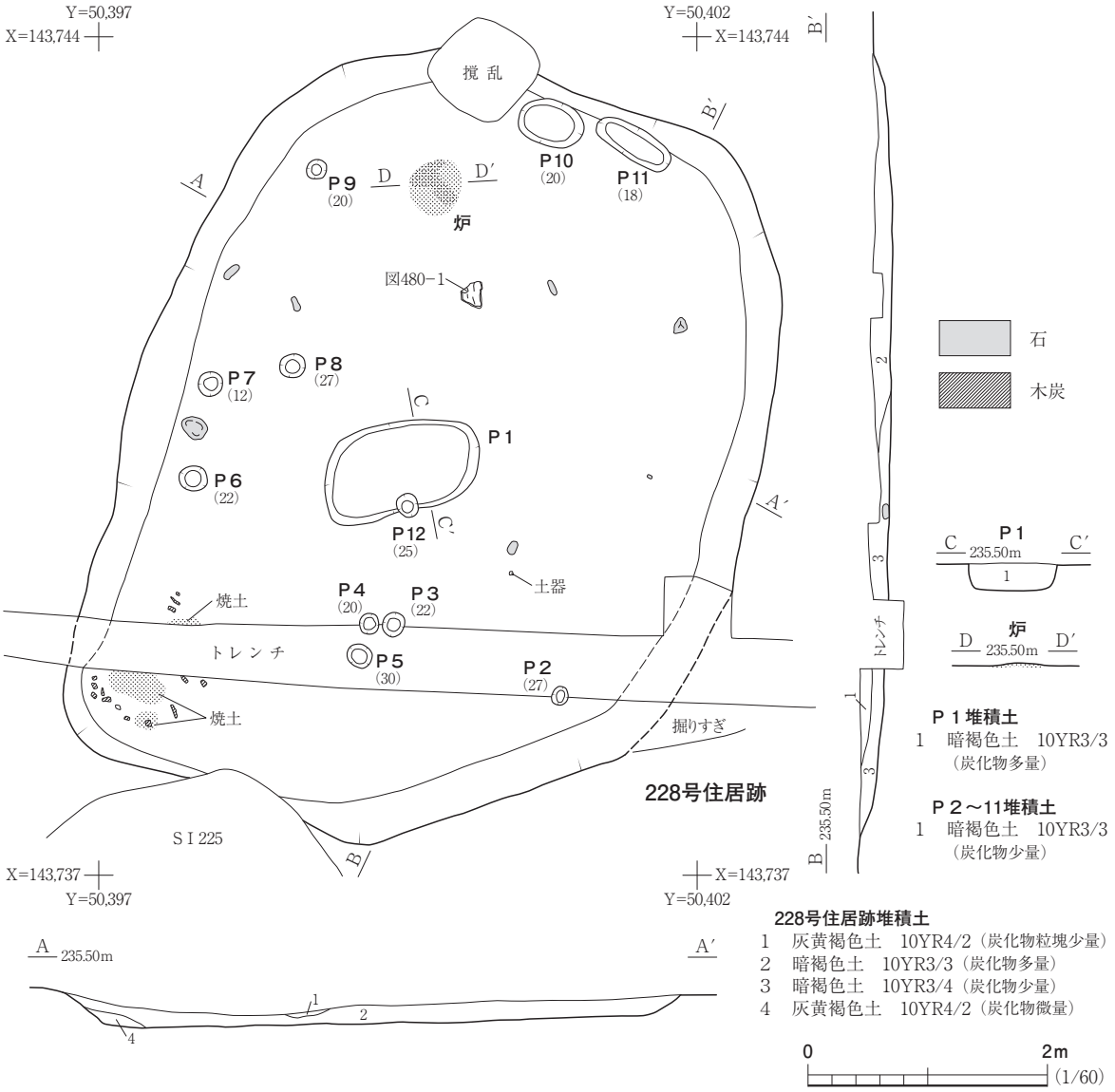


図351　228号住居跡

は、最大で10×5㎝ほどで、住居の部材が特定できるものは出土していない。

住居内の施設は、地床炉とピットである。炉は床面北側の壁から80㎝ほどの場所に位置している。平面形は楕円形である。炉床は、長軸48㎝、短軸43㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。特に炉の中央から西側にかけては強く焼けている。焼土化した部分の厚さは2㎝で、床面よりわずかに盛り上がっている。

ピットは15基確認した。P1は床面の中央に位置し貯蔵穴と考えている。平面形は東西に長い楕円形である。規模は長軸135㎝、短軸76㎝、深さ20㎝である。堆積土は炭化物を多量に含む暗褐色土である。P2〜11は、長軸の規模が20〜43㎝、深さが9〜22㎝の小規模なものである。平面形は楕円形から円形で、断面形は円柱状のものが多い。ピットの位置は、P2・6〜11が壁際に位置する。P3〜5・12は床面中央に位置している。これらのピットには、おそらく柱穴が含まれるものと考えられるが、柱痕跡などは確認できなかった。P2〜12の堆積土は、いずれも

炭化物を少量含む暗褐色土である。住居内堆積土ℓ２に近似していることから、住居廃絶時にこれらのピットは開口していたこととなる。

遺物は、弥生土器４点、土師器２点が出土した。ℓ１からは土師器の小片が１点出土している。それ以外は、ℓ２から床面にかけて少量出土している。本住居跡から出土した弥生土器は他の遺構や遺構外から広範囲にわたって接合したため、遺構間接合遺物として図480－１に図示した。

ま と め

本遺構は、南北に長い楕円形を呈する竪穴住居跡である。地床炉１箇所と貯蔵穴、柱穴が検出された。床面南西部からは、炭化材や焼土の集積が検出され、住居廃絶後に材を焼いたと考えられる。所属時期は、他の遺構との重複関係や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。なお出土した弥生土器は、他の遺構から出土した遺物との接合関係が認められた。　（中　野）

229号住居跡　ＳＩ229

遺　　構（図352、写真258）

本遺構は、Ｉ区北部Ｍ－10・11グリッドに位置している。標高235.1ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅢｂ～ＬⅣである。228号住居跡北側の遺構検出時に、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、220・235・236号住居跡である。本遺構が220号住居跡より古く、235・236号住居跡より新しい。

堆積土は４層に区分した。ℓ１は灰黄褐色土で、基本土層のＬⅢａ⑥に対応する土層である。住居北西部では直径20㎝ほどの焼土の集積がみられた。ℓ２は炭化物を少量含む黒褐色土である。ℓ３は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色土である。ℓ４はＬⅣ粒を多量と炭化物を少量含む周溝に堆積した黒褐色土である。堆積土はおおむね自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、不整な楕円形である。規模は、7.5×4.5ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で26㎝である。遺構の方位は、住居跡の東壁を基準とするなら北に対して約40度東に傾く。床面はＬⅤに作られており、表面にはやや凹凸もみられ、南側から北側に緩く傾斜している。上面は比較的締まった状態で、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

住居内の施設は、ピットと周溝である。ピットは９基確認した。検出位置は、Ｐ１～５が住居北東部、Ｐ６・７が床面中央部、Ｐ８・９が床面南西部に位置する。ピットの特徴は、土坑状のものと柱穴状のものに分かれる。土坑状のものは、Ｐ１～３・８・９である。平面形は円形ないし楕円形で、底面はすり鉢状に掘り込まれている。長軸の規模は48～95㎝、深さは12～18㎝である。おそらく貯蔵穴の機能をはたしたものと考えている。柱穴状のものは、Ｐ４～７である。平面形が円形で断面形は円柱状である。規模は直径23～45㎝、深さは11～22㎝である。ピットの堆積土は、Ｐ１～８がＬⅣ粒と炭化物を含む黒褐色土である。Ｐ９の堆積土は、ＬⅣ粒と炭化物を多く含む黒褐色土である。

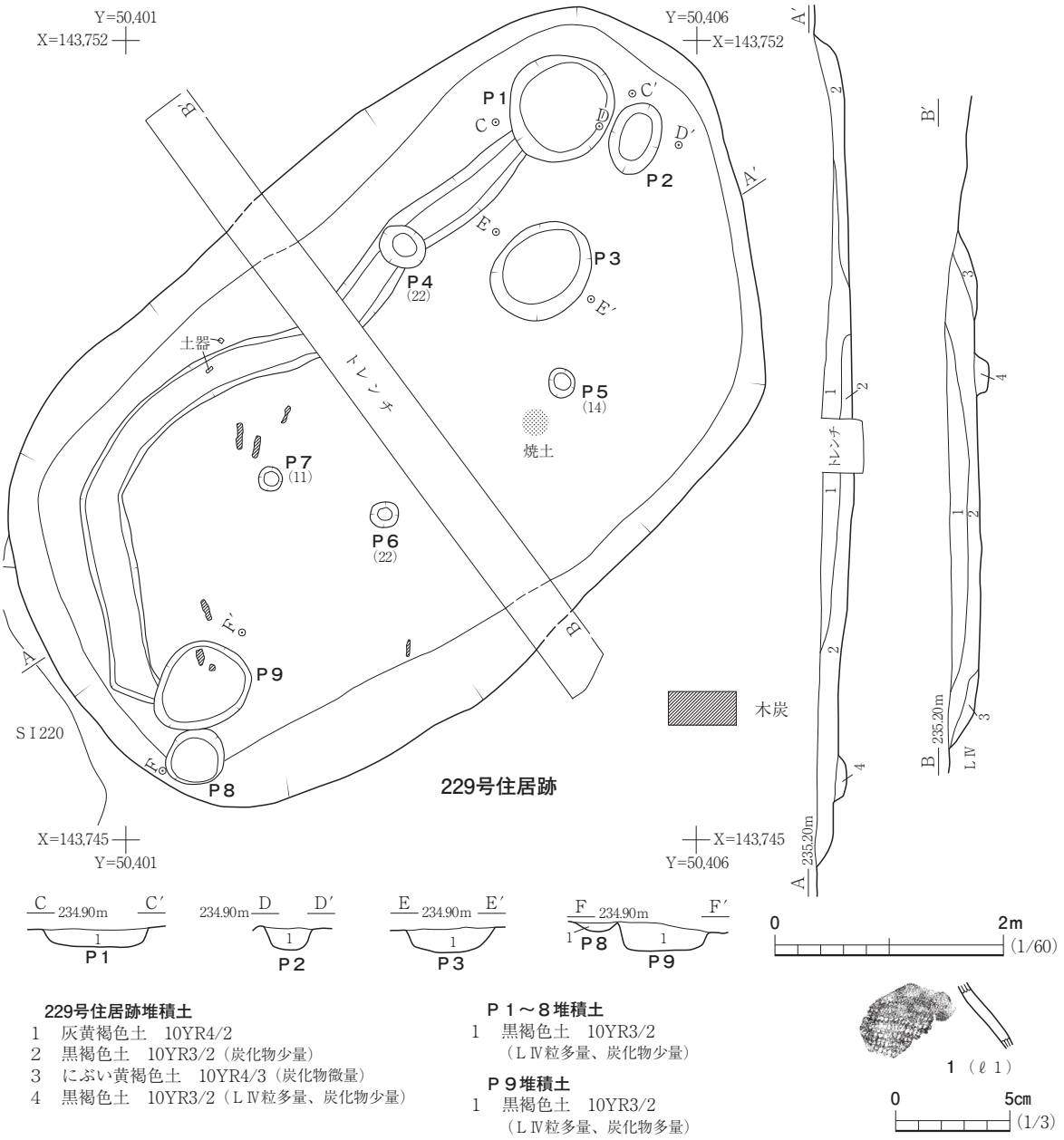


図352　229号住居跡・出土遺物

周溝は、西壁から南壁側で不整な「L」字状に検出した。途中で屈曲もみられるが、壁に沿うように掘り込まれている。断面は緩い「U」字状である。規模は、西壁側で長さ500㎝、幅40㎝である。南壁側は、長さ180㎝、幅45㎝である。深さは、最大で15㎝である。周溝の端部には、北側にP1、中央部にはP4、南東側にP9が掘り込まれている。堆積土はP1～8と共通している。また、住居内堆積土ℓ2に近似しており、廃絶時には開口していた可能性が高い。

遺　　物（図352）

遺物は、弥生土器4点が出土した。出土状況は、床面や堆積土から少量出土している。いずれも砕片で摩耗しており、図示できたのはこのうち1点である。

図352－1は弥生土器で、縄文を施した胴部の破片である。

ま と め

本遺構は、平面形が楕円形を呈する竪穴住居跡である。住居跡の北西部と南西部から貯蔵穴が検出され、中央からは柱穴の可能性のあるピットを４基検出した。西壁際から南壁際には周溝が検出されたが、その機能や性格については不明である。所属時期は、他の遺構との重複関係や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

230号住居跡　ＳＩ230

遺　　構（図353、写真259）

Ⅳ区南西部のＤ－14グリッドに位置し、標高235.6ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂ上面である。南側の大部分が２号溝跡と重複しており、遺存状態は悪い。

平面形は南側の大部分が遺存していないため詳細は不明である。すべて検出された北壁の長さが2.5ｍで、深さは20㎝ほどであることから、３ｍ以下の小型の規模と思われる。

方位は東壁で北から35度東を示す。床面は基盤層であるＬⅡｂをそのまま床面としており、貼床などは認められなかった。床面は水平かつ平坦となっており、やや硬化していた。

堆積土は１層で、白色粒子を多く含む黒褐色粘質土が堆積していた。

住居内の施設は確認されなかった。なお堆積土および床面に、焼土粒や炭化物の散らばりが見られないことから、カマドや炉が存在した可能性は低いと思われる。

遺物は、堆積土中から土師器とみられる小片が５点出土している。内面に黒色処理が施された土器片や甑の底部片が含まれることから、古墳時代後期のものと考えられる。

ま と め

本遺構は、２号溝跡によって南側の大半が破壊されている竪穴住居跡である。住居内施設は認められず、２号溝跡によってすでに破壊されている可能性も考えられる。しかし規模が３ｍ以下と小型であることや、貼床が施されないなど、居住を目的とした竪穴住居跡ではない可能性も考えられる。時期を明示できる遺物は少ないが、古墳時代後期の竪穴住居跡と考えている。　（神　林）

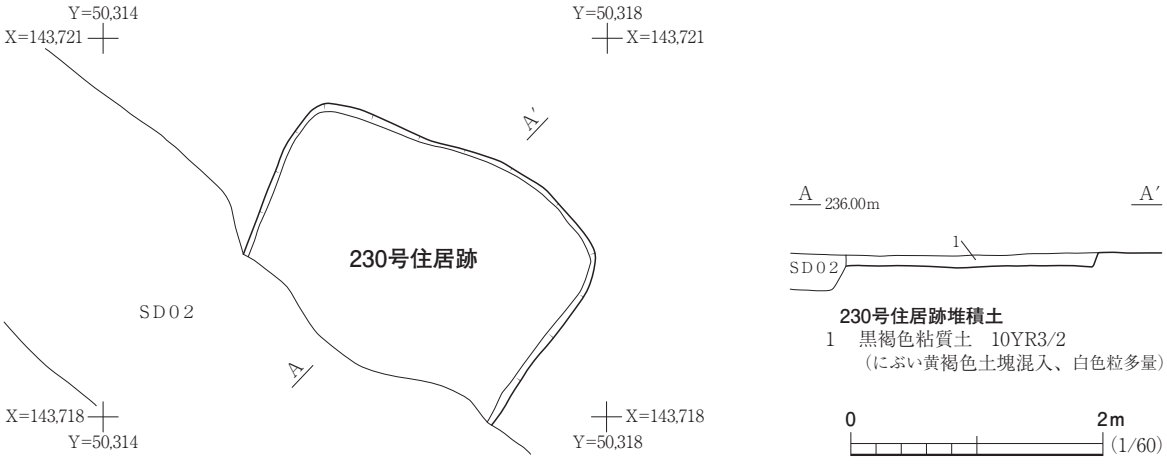


図353　230号住居跡

231号住居跡　ＳＩ231

遺　　構（図354、写真260）

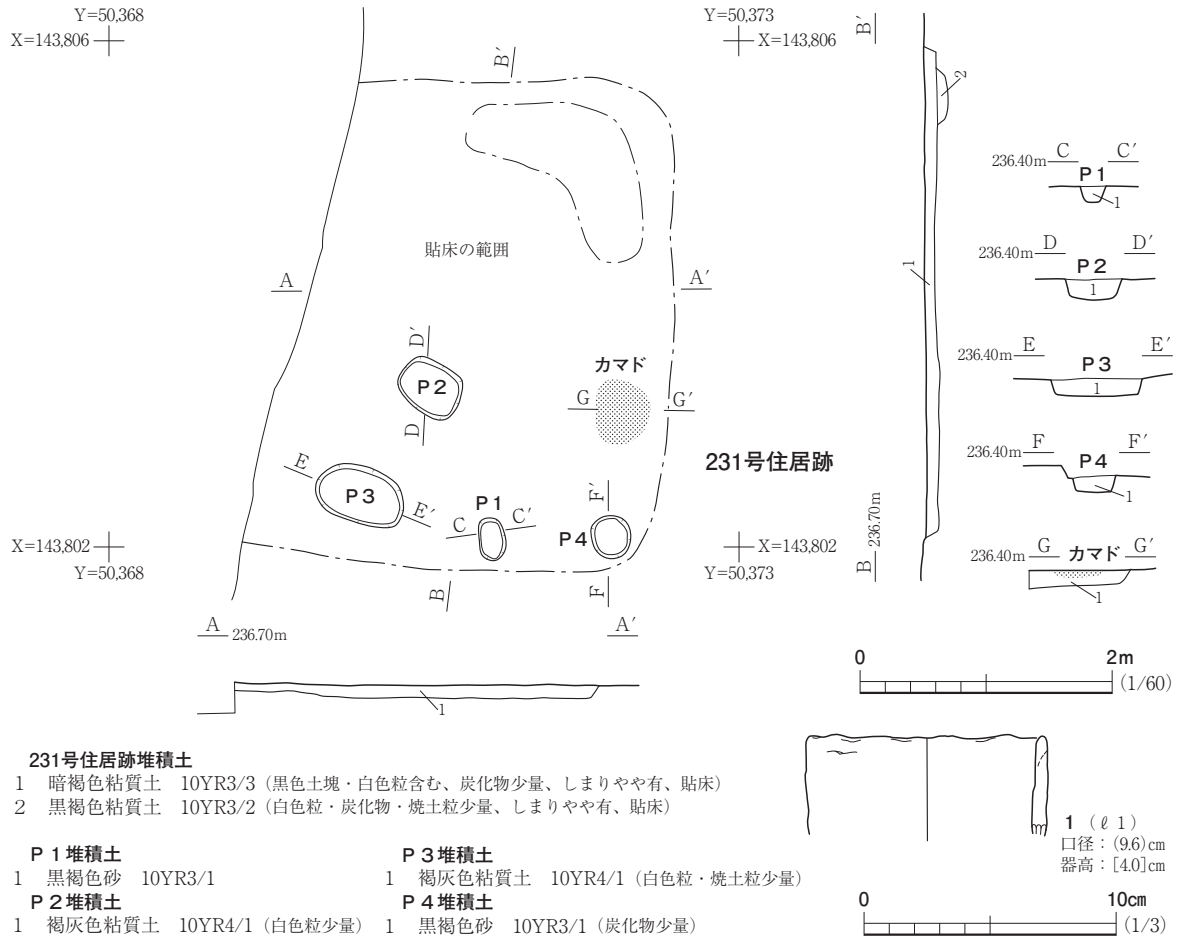
本遺構は、Ⅳ区南西部にあたるⅠ・Ｊ－５グリッドに位置し、標高236.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。南側には232号住居跡が位置する。本遺構の直上には現代の盛土が厚く堆積しており、遺構自体も大きく削平されていた。検出段階ですでに床面が露出しており、周壁は遺存していなかった。床面の範囲で、かろうじて遺構と判断できた。

平面形は西側が削平されているが、南北で3.9ｍを測ることから、一辺４ｍ前後の方形と推定される。方位は貼床東端を基準とするとほぼ真北となっている。

堆積土として図示したのは、黒色土塊や白色粒子、炭化物を含む暗褐色粘質土で、比較的硬く締まっていることから貼床であると判断した。

住居内の施設はカマド１基と床下ピット４基である。カマドは住居東壁やや南寄りに位置する。煙道や袖などは削平され遺存しておらず、床面が焼土化した範囲のみ確認した。焼土化した範囲は楕円形で50×40㎝の規模である。

床下ピットは貼床を除去した段階で検出した。いずれも住居南側に位置する。堆積土の様相か



231号住居跡堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（黒色土塊・白色粒含む、炭化物少量、しまりやや有、貼床）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色粒・炭化物・焼土粒少量、しまりやや有、貼床）

Ｐ１堆積土
1　黒褐色砂　10YR3/1

Ｐ２堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒少量）

Ｐ３堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（白色粒・焼土粒少量）

Ｐ４堆積土
1　黒褐色砂　10YR3/1（炭化物少量）

図354　231号住居跡・出土遺物

ら褐灰色の粘質土が堆積するＰ２・３と、黒褐色の砂が堆積するＰ１・４に分けられる。Ｐ１は南北に長い楕円形で、規模は長軸45㎝、短軸20㎝、深さ10㎝である。Ｐ２は東西に長い隅丸長方形で、規模は長軸50㎝、短軸40㎝、深さ15㎝である。Ｐ３は東西に長い楕円形で、規模は長軸70㎝、短軸45㎝、深さ25㎝である。Ｐ４は南北に長い楕円形で、規模は長軸35㎝、短軸30㎝、深さ10㎝である。これらの性格は明らかでない。

なお住居北東隅にも掘り込みが確認されたが、貼床に近似した土が堆積しており、非常に硬く締まっていたことから、掘形の一部と判断した。

遺物は、検出時に土師器の細片が10点出土しているのみである。ロクロナデが施された甕の破片が含まれることから、平安時代に位置づけられる。

ま と め

本遺構は、一辺４ｍ前後で方形と推定される竪穴住居跡である。しかし遺構西側及び上面を大きく削平されており、床面とカマドの痕跡および床下ピットしか遺存していなかった。出土した遺物は少ないが、平安時代に機能した遺構と思われる。（神　林）

232号住居跡　ＳＩ232

遺　　構（図355、写真261）

本遺構はⅣ区南西部のＩ・Ｊ－６に位置し、標高236.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。北側に231号住居跡が位置する。本遺構の上には現代の盛土が厚く堆積していて、遺構自体も大きく削平されており、床面の範囲でかろうじて遺構と判断できた。

平面形は方形で、南北3.6ｍ、東西3.5ｍである。検出段階で既に床面が露出しており、周壁は遺存していなかった。方位は貼床東端を基準とすると北から５度東を示す。

堆積土は貼床である黒褐色粘質土１層のみで、比較的硬く締まっている。

住居内の施設は、床下ピットを４基確認した。床下ピットはいずれも貼床を除去した段階で検出した。Ｐ１は北西隅に位置し平面形は南北にやや長い不整な楕円形である。規模は長軸50㎝、短軸45㎝、深さ20㎝で、褐灰色と灰黄褐色の粘質土が堆積している。Ｐ２は南西隅に位置し、平面形は不整な円形である。規模は直径45㎝、深さ10㎝で、黒褐色の粘質土が堆積している。Ｐ３は東西にやや長い楕円形である。規模は長軸50㎝、短軸40㎝、深さ10㎝で、黒褐色の粘質土が堆積している。Ｐ４は東西にやや長い楕円形である。規模は長軸50㎝、短軸45㎝、深さ15㎝で、にぶい黄褐色の砂が堆積している。これらの性格は明らかでない。

遺　　物（図355、写真418）

遺物は床面およびＰ１堆積土から土師器が20点出土しているが、多くは細片で図示できたのは１点のみである。

図355－１はロクロ成形の土師器杯である。器形はわずかに湾曲しながら外傾する。底部から体部中位にかけて回転ヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。

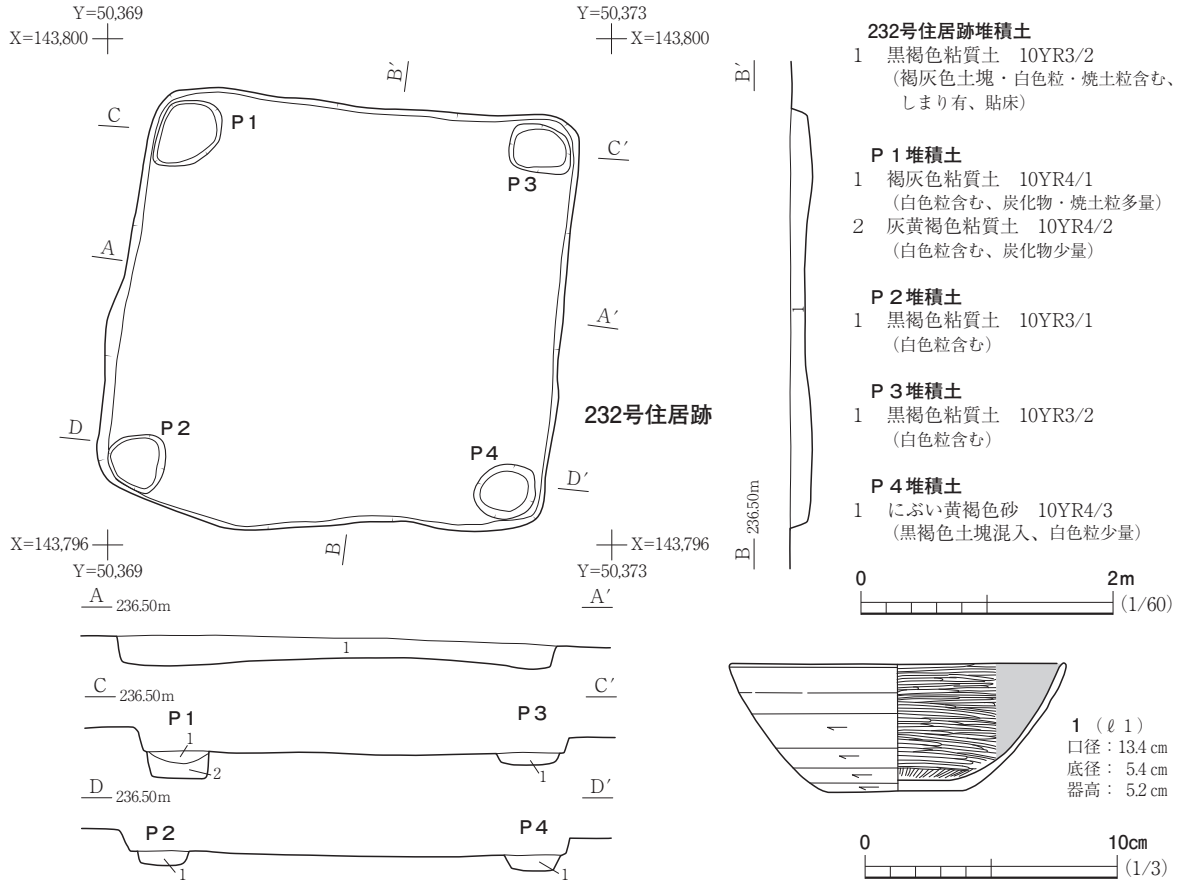


図355　232号住居跡・出土遺物

ま と め

本遺構は、3.6×3.5ｍの方形の竪穴住居跡である。しかし遺構上面が大きく削平されており、床面と床下ピットのみ遺存していた。時期を明示する遺物は少ないが、堆積土より出土した遺物の特徴から平安時代、９世紀に機能した竪穴住居跡と考えている。　（神　林）

234号住居跡　ＳＩ234

遺　　構（図234、写真262・267）

本遺構は、Ⅰ区北西部Ｌ－10・11グリッドに位置している。標高235.1ｍ付近の西側から東側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣ～ＬⅤである。236号住居跡の北側を検出した際に焼土の集積と、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、228・236号住居跡である。本遺構がいずれの遺構よりも古い。

堆積土は炭化物を含む灰黄褐色粘質土である。堆積土は自然堆積土と考えている。

遺構の平面形は、残りが悪いが楕円形と考えている。規模は、遺存長が2.7ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で20㎝である。遺構の方位は不明である。床面はＬⅤに作られており、表面にはやや凹凸もみられる。西側から東側に緩く傾斜している。締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

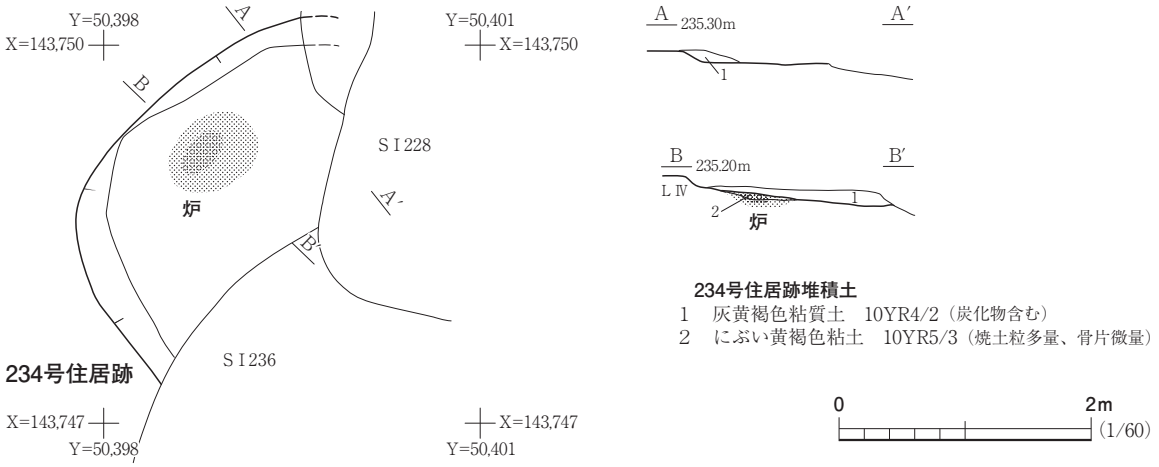


図356　234号住居跡

住居内の施設は、炉である。炉は床面北側の壁から30㎝ほどの場所に位置している。平面形は楕円形である。炉の底面は、長軸75㎝、短軸55㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。火床面には、直径55㎝、厚さ５㎝ほどの粘土が貼られていた。粘土床炉と呼称される構造とみられる。焼けた粘土の表面には、微細な骨片がみられた。

本遺構からは獣骨以外の遺物は、出土しなかった。

ま と め

本遺構は、楕円形を呈する竪穴住居跡である。北壁側に表面に粘土を貼りつけた粘土床炉が検出された。遺構の重複関係から、本遺構が周辺遺構の中ではもっとも古い遺構の一つである。所属時期は、他の遺構との重複関係から、弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

235号住居跡　ＳＩ235

遺　　構（図357、写真263・267）

本遺構は、Ⅰ区北部Ｍ－10・11グリッドに位置している。標高234.8ｍ付近の北西から南東へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣ～ＬⅤである。229号住居跡の北側から焼土の集積と、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。

重複する遺構は、229号住居跡で、本遺構が古い。

堆積土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土である。堆積過程は自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、残りが悪いが楕円形と考えている。規模は、遺存長が3.5ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では20～30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁で最大で12㎝である。方位は北壁側を基準とするなら北に対して約50度東に傾く。床面はＬⅤに作られており、表面にはやや凹凸もみられる。締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

住居内の施設は、炉である。炉は床面北部の壁から30㎝ほどの場所に位置している。平面形は円形である。火床の底面はよく焼けており、直径55㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。火床面には、直径30㎝、厚さ５㎝ほど粘土が貼られていた。粘土床炉と呼称される構造と

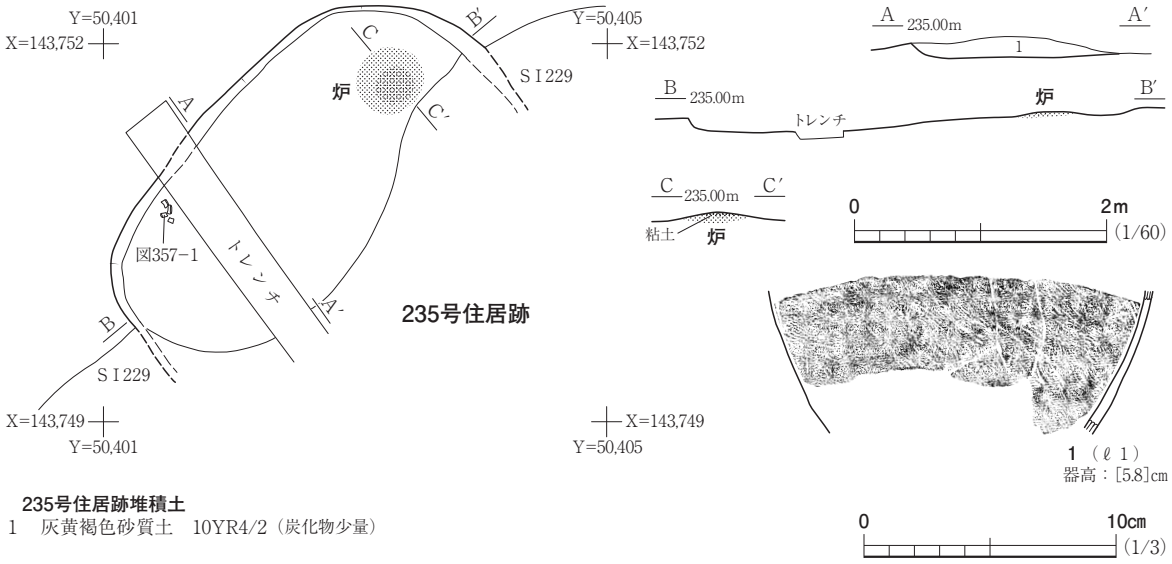


図357　235号住居跡・出土土器

みられる。焼土化範囲の厚さは８㎝で、床面よりわずかに盛り上がる。

遺　　物（図357）

遺物は、弥生土器が１点、ℓ１の下面から出土している。

１は附加縄文を施した胴部片で、器種は甕もしくは壺とみられる。

ま と め

本遺構は、楕円形を呈する竪穴住居跡である。火床に粘土を貼りつけた粘土床炉が検出された。南東部の多くを壊されており不明な点が多い。所属時期は、他の遺構との重複関係や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。（中　野）

236号住居跡　ＳＩ236

遺　　構（図358、写真264）

本遺構は、Ｉ区北西部のＬ・Ｍ−11グリッドに位置している。標高235.1ｍ付近の南西側から北東側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣ〜ＬⅤである。220号住居跡の東側で、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから、住居跡として調査した。重複する遺構は、220・228・229号住居跡である。いずれの遺構よりも本遺構が古い。

堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物を含む暗褐色土である。ℓ２は炭化物を微量に含むにぶい黄褐色土である。堆積土はおおむね自然堆積と考えている。

遺構の平面形は、残りが悪いが円形ないし楕円形と考えている。規模は遺存長で5.4ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では20〜30度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で16㎝である。遺構の方位は不明である。床面は掘形底面であるＬＶに作られており、表面にはやや凹凸もみられる。西側と東側が高くなり、床面の中央側に緩く傾斜している。締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

住居内の施設は地床炉とピットである。地床炉は床面中央からやや東側で２箇所検出した。西側を炉１、東側を炉２とした。炉１・２ともに平面形は不整な円形である。炉の底面はあまり焼けていない。炉の規模は、炉１が直径33㎝、焼土化した部分の厚さは１㎝、炉２が直径35㎝、焼土化範囲の厚さは１㎝であり、床面よりわずかに盛り上がっている。

ピットは５基確認した。Ｐ１は南壁中央に位置する。平面形が楕円形で底面は平坦に掘り込まれている。規模は長軸130㎝、短軸93㎝、深さ18㎝である。堆積土は炭化物を多量に含むにぶい黄褐色土である。Ｐ２は東壁際中央に位置する円形のピットである。直径24㎝、深さ13㎝である。Ｐ３～５は床面中央から西側に位置する。いずれもおおむね円形である。断面形は、Ｐ３・４はすり鉢状、Ｐ５が円柱状を呈する。規模は直径45～50㎝、深さ10～30㎝である。機能は特定できなかった。いずれの堆積土も、住居内堆積土ℓ２に近似している。

遺構内から木炭や礫以外に遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、楕円形を呈する竪穴住居跡である。地床炉２箇所と貯蔵穴、ピットが検出された。所属時期は、他の遺構との重複関係や出土遺物などから、弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

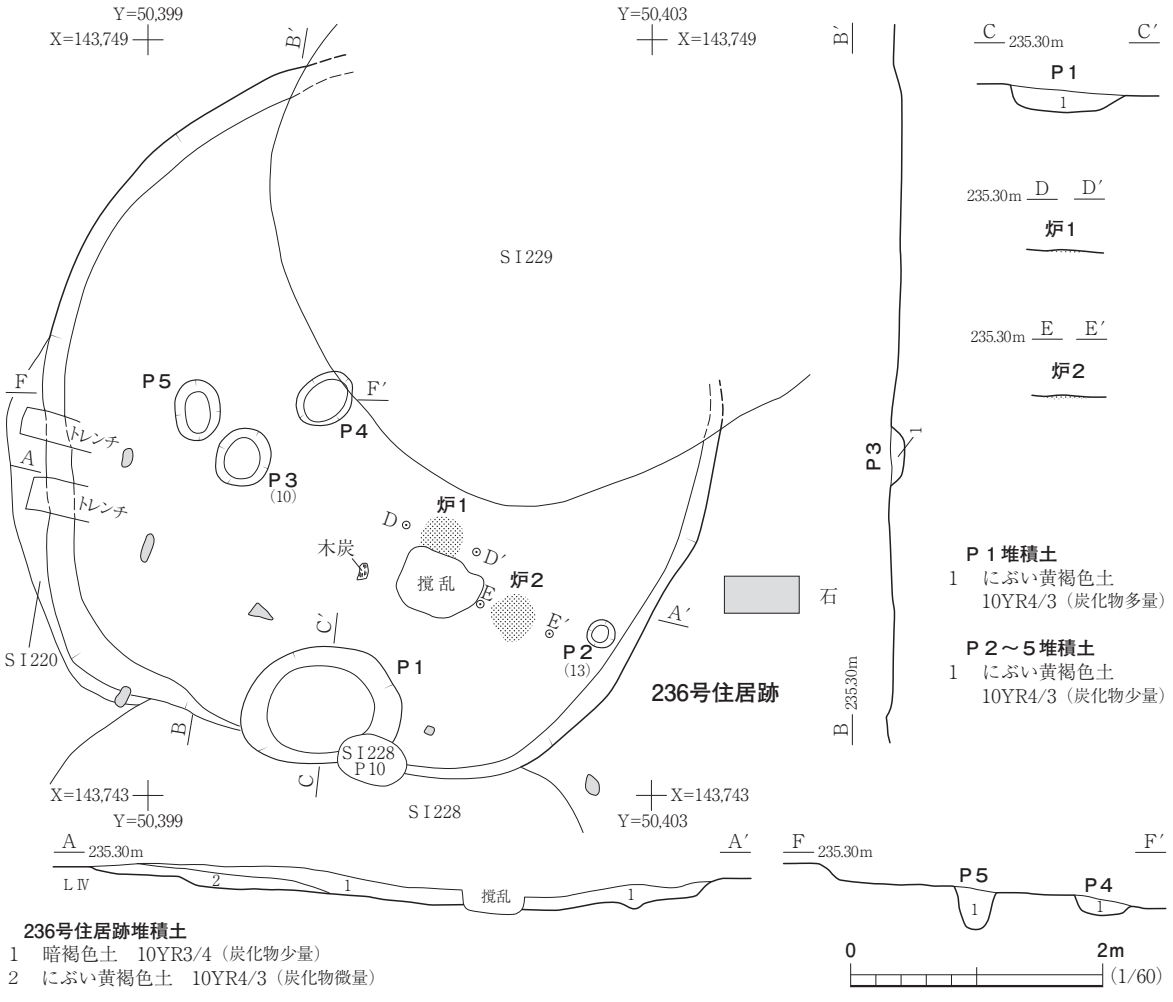


図358　236号住居跡

237号住居跡　ＳＩ237

遺　　構（図359、写真265）

本遺構は、Ｉ区西部のＬ－12グリッドに位置している。標高235.5ｍ付近の西から東へ向かって下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅣ下部～ＬＶである。基本土層の最終確認のためトレンチを掘削した際に地床炉を検出し、その西側において、楕円形に広がる遺構の範囲を確認したことから住居跡として調査した。重複する遺構は、２号焼土遺構で、本遺構が新しい。直接重複はしないが、上層に23 号住居跡が位置している。

堆積土は炉も含めて６層に区分した。ℓ１はにぶい黄褐色土である。ℓ２は炭化物を含む暗褐色土である。ℓ３は炭化物・焼土粒を含むにぶい黄褐色土である。ℓ１～３は自然堆積土である。ℓ４～６は貼床土である。このうちℓ４の一部が炉として使用され、焼土化している。

遺構の平面形は、南側がトレンチで壊されており、残りが悪く平面形は不明である。規模は、遺存長が2.7ｍである。周壁は、残りの良い西壁側では20度の角度で緩く立ち上がる。壁の遺存高は西壁側で最大で16㎝である。遺構の方位は不明である。床面はＬＶ上に貼床が施され、表面にはやや凹凸もみられる。西側から東側に傾斜している。貼床上は、締まりは弱く、微細な炭化物粒や焼土粒が散在している。

住居内の施設は、地床炉である。炉は床面北側の壁から1.3ｍほどの場所に位置している。平面形は南側を壊されているが円形である。地床炉の火床面は、径55㎝の範囲にわたって赤褐色に強く焼土化している。焼土化範囲の厚さは６㎝である。

本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、地床炉をもつ竪穴住居跡である。検出面から周辺遺構の中ではもっとも古い遺構の一つである。所属時期は、検出面から、弥生時代終末期と考えている。　（中　野）

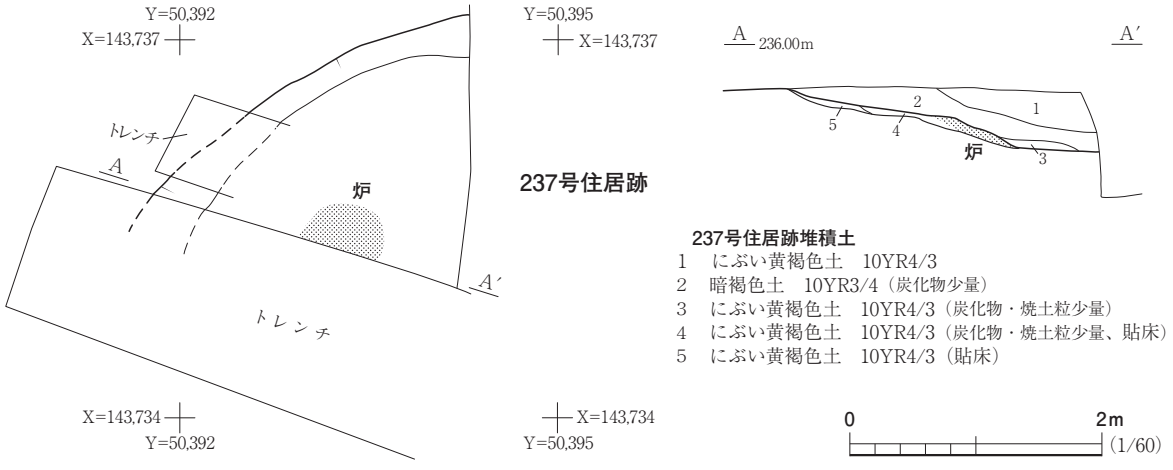


図359　237号住居跡

第４節　建　物　跡

１号建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図360、写真272）

本遺構は、Ⅰ区中央部のＭ－13グリッドに位置する。標高236.6ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ上面である。検出時に方形に並ぶ柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構はない。

建物跡は９基の柱穴で構成される。構造は南北桁行２間、東西梁行２間で、平面形は方形である。方位は、東柱列を基準とするなら北に対して東に13度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、東西がＰ１～３の芯々間で3.8ｍ、南北がＰ３～５の芯々間で4.0ｍである。Ｐ４とＰ９は東柱列を結んだ線から内側と外側に外れて位置する。推定面積は、15.2㎡である。各柱穴の芯々間は、Ｐ１・２が1.9ｍで6.3尺、Ｐ２・３が1.8ｍでおおよそ6.0尺である。Ｐ３・４が1.65ｍで5.5尺、Ｐ４・５が2.25ｍで7.5尺である。Ｐ５・６が1.85ｍで6.1

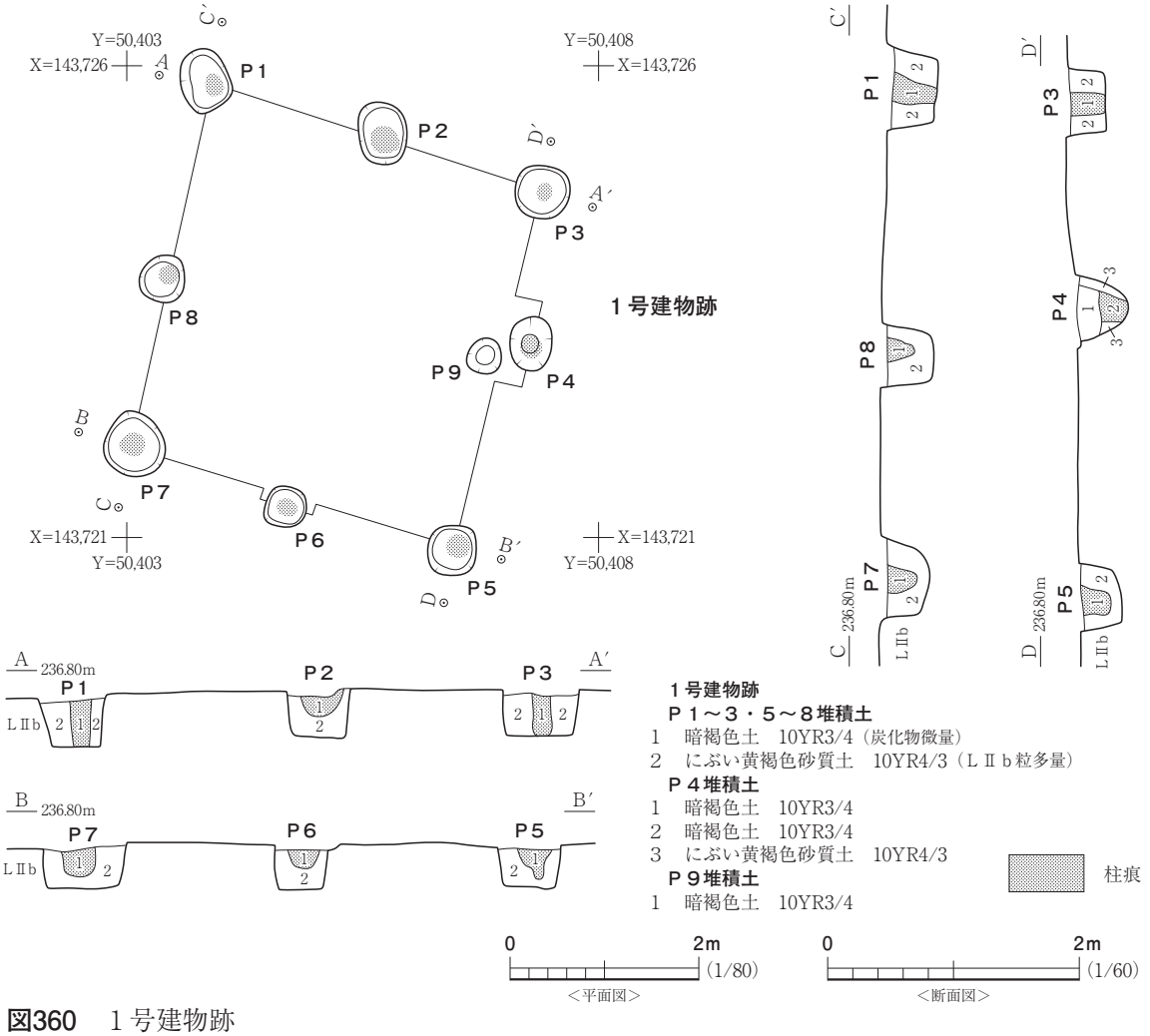


図360　１号建物跡

尺、Ｐ６・７が1.8ｍで6.0尺である。Ｐ７・８が1.83ｍで6.1尺、Ｐ８・１が2.0ｍで6.6尺である。芯々間の平均値は1.89ｍで、6.3尺である。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ７が、直径70㎝、深さ40㎝である。最小のＰ９が、直径40㎝、深さ20㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。Ｐ９以外の柱穴からは柱痕跡が確認できた。規模は直径が17～35㎝である。

柱穴の堆積土は、Ｐ１～３・Ｐ５～８は２層に区分した。ℓ１は炭化物を含む暗褐色土で、柱痕跡である。ℓ２はＬⅡｂを主体とするにぶい黄褐色砂質土で、掘形の埋土である。

Ｐ４堆積土は３層に区分した。ℓ１は暗褐色土である。柱痕跡とは別の堆積土で、人為堆積土である。ℓ２は炭化物を含む暗褐色土の堆積土で、柱痕跡である。ℓ３はＬⅡｂを主体とするにぶい黄褐色砂質土で、柱の埋土である。堆積土の状況から柱を切って取り除いた後にℓ１で埋めているものと考えている。Ｐ９堆積土は暗褐色土の単層である。

遺物は土師器が16点出土している。遺物の多くは、ロクロ成形の内面黒色処理を施した杯の小片やロクロナデの甕で、小片のため図示していない。いずれも平安時代のものである。

ま と め

本遺構は、南北２間×東西２間構造の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、15.2㎡である。Ｐ４は柱を取り除いて埋めた痕跡がみられることから、おそらくＰ４からＰ９へ柱を取り換えているものと推測している。また、遺構周辺は、平安時代の住居跡が検出されていない30×20ｍほどの広場の中央に位置することから、村落の中でも特殊な建物と考えられる。所属時期は、検出面や出土遺物などから平安時代、９世紀頃の年代を推定している。（中　野）

２号建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図361、写真273・306）

本遺構は、Ⅱ区のⅠ－21・22、Ｊ－21・22・23、Ｋ－22グリッドにわたって位置する。標高235.4ｍ付近に立地している。検出面はＬⅢ上面である。西側に６号建物跡が隣接している。

本遺構は27基の柱穴と１基の礎石で構成される。桁行５間×梁行１間の身舎に、桁行５間×梁行３間の廂が四方に付く、四面廂付建物跡であると判断した。方位は東辺で北から30 度東を示す。

身舎は桁行である南側・北側の柱列ともに10.6ｍ、梁行である西側・東側柱列ともに4.7ｍで、身舎内の平面積は49.82㎡である。桁行の柱間距離は1.5～1.8ｍであるが、北側のＰ９とＰ10の間は、南側と対応する柱穴が１基分認められず4.0ｍと離れている。

廂は桁行である南側・北側ともに12.7ｍ、梁行である西側・東側柱列ともに6.7ｍである。柱間距離は、桁行・梁行ともに1.6～2.1ｍが基本であるが、身舎の隅柱に対応する柱穴が４基とも確認されなかったため、その部分の柱間については３ｍ前後と長くなっている。

柱穴の平面形は、楕円形もしくは隅丸方形である。身舎の柱穴は、直径20～50㎝、深さ10～40㎝である。廂の柱穴は直径20～40㎝、深さ10～30㎝であり、身舎に比べ規模が小さい。柱痕

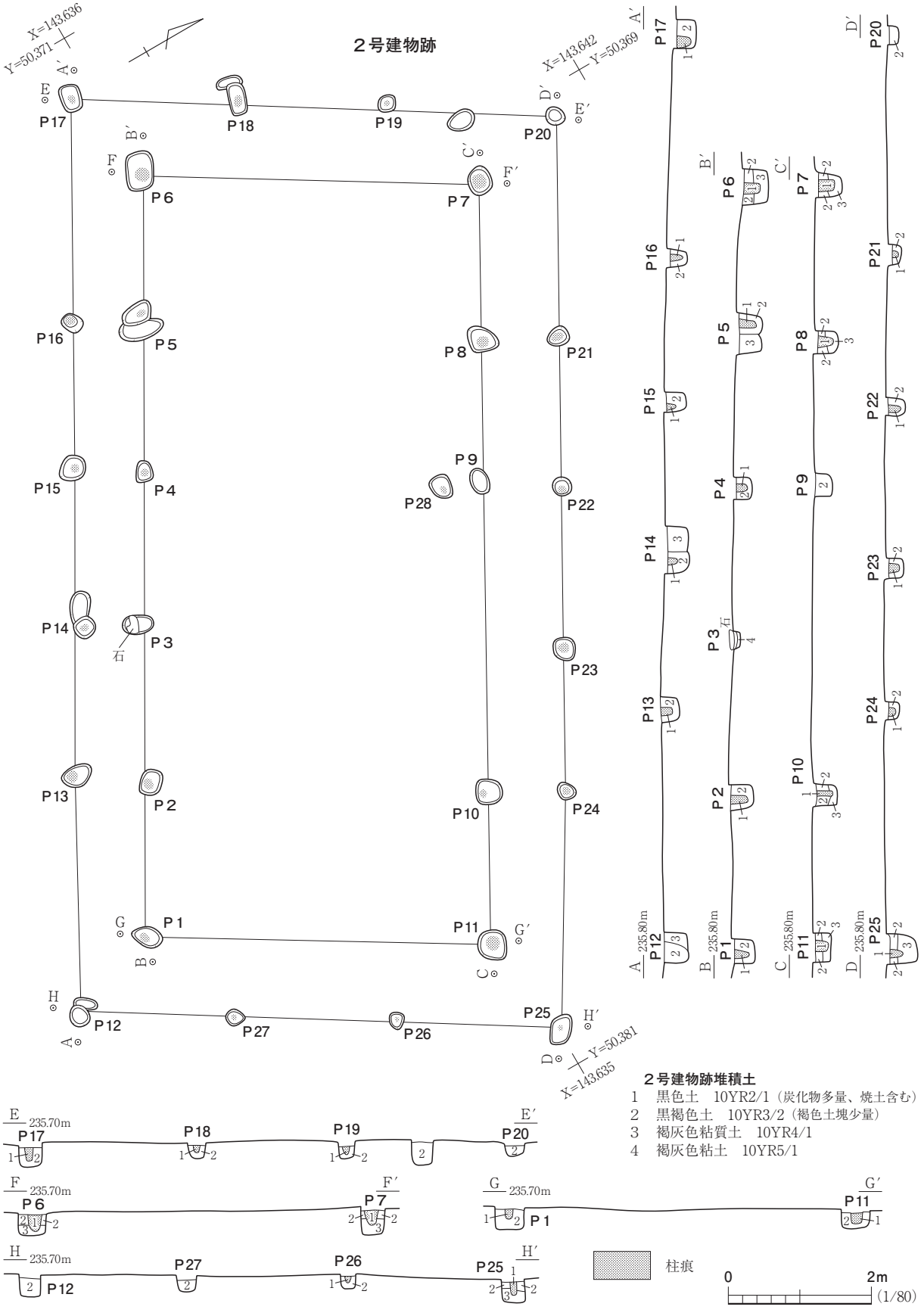

２号建物跡
X=143,636
Y=50,371
X=143,642
Y=50,369
Y=50,381
X=143,635
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
石
235.70m
235.80m
２号建物跡堆積土
1　黒色土　10YR2/1（炭化物多量、焼土含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（褐色土塊少量）
3　褐灰色粘質土　10YR4/1
4　褐灰色粘土　10YR5/1
柱痕
0
2m
(1/80)

図361　２号建物跡

跡は直径10～20㎝の円形であり、Ｐ３・９・12・20を除くほとんどの柱穴で確認できた。

身舎南側のＰ３は礎石据付穴と礎石である。ピットは長軸42㎝の平面楕円形で、深さが10㎝ほどの浅い掘り込みである。礎石は上面が平坦な自然石で、検出面から10㎝程度高く位置するように据え付けられていた。

柱穴の堆積土は４層に分層した。ℓ１は柱痕跡の黒色土層である。焼土を含むことから、火災による焼失の可能性も考えられる。ℓ２・３は柱穴の埋土である。基本土層のＬⅡａ・ＬⅢに相当する土色をしており、柱穴を掘り上げた土を利用して埋めていると考えられる。ℓ４はＰ３のみに認められる褐灰色で固く締まる粘質土であり、礎石の固定のために突き固めたものと考えられる。

遺構に伴う遺物は出土しなかった。検出時には周辺から陶器などの小片が出土している。

ま と め

本遺構は27基の柱穴と１基の礎石で構成される建物跡である。桁行５間×梁行１間の身舎に、桁行５間×梁行３間の廂が四方に付く、四面廂付建物跡であると判断した。西側に隣接する６号建物跡との位置関係や、柱穴や堆積土の特徴が近似しており、同時期に存在した建物跡である可能性がある。遺構に伴う遺物は確認されなかったが、検出時に陶器の小片が出土していることから、中世に機能した建物跡と考えている。（神　林）

３号建物跡　ＳＢ03

遺　　構（図362、写真274）

本遺構は、Ⅱ区中央部のＭ－19、Ｎ－19・20グリッドにわたって位置する。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅢｂ上面で、検出中に長方形に並ぶ柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構は163・164号住居跡で、本遺構が新しい。

建物跡は21基の柱穴で構成される。構造は桁行３間×梁行２間の身舎の、北西・北東・南東側に廂の付く、三面廂建物跡と考えられる。調査段階では南側にも廂がある可能性を考え、柱穴の検出を執念深く行ったが検出されなかった。方位は北東列を基準とするなら北から東に40度傾く。

身舎の柱穴の配置は、長方形に配列されている。各隅柱を基準とした建物の規模は、身舎が北東辺がＰ17～20の芯々間で8.3ｍ、北西辺がＰ13～17の芯々間で4.5ｍである。身舎の推定床面積は、37.4㎡である。廂の規模は、北東辺がＰ１～６の芯々間で11.0ｍ、北西辺がＰ１～14の芯々間で5.7ｍである。推定面積は62.2㎡である。

各柱穴の芯々間は、身舎で、Ｐ10・11が、2.6ｍで8.7尺、Ｐ11・12が、3.0ｍで10.0尺である。Ｐ12・13が、2.85ｍで9.5尺、Ｐ13・22が、2.25ｍで7.0尺である。Ｐ22・17が2.25ｍで7.0尺で、Ｐ17・18が2.75ｍで9.2尺である。Ｐ18・19が3.15ｍで10.5尺で、Ｐ19・20が2.5ｍで8.3尺である。Ｐ20・21が2.25ｍで7.0尺で、Ｐ21・10が2.25ｍで7.0尺である。芯々間の平均値は2.6ｍで、8.7尺である。廂は、Ｐ１・２が、1.3ｍで4.3尺、Ｐ２・３が、2.75ｍで9.2尺である。Ｐ３・４が、3.15ｍで10.5尺、Ｐ４・５が2.5ｍで、8.3尺である。Ｐ５・６が1.3ｍで4.3尺で、Ｐ６・７が1.3ｍ

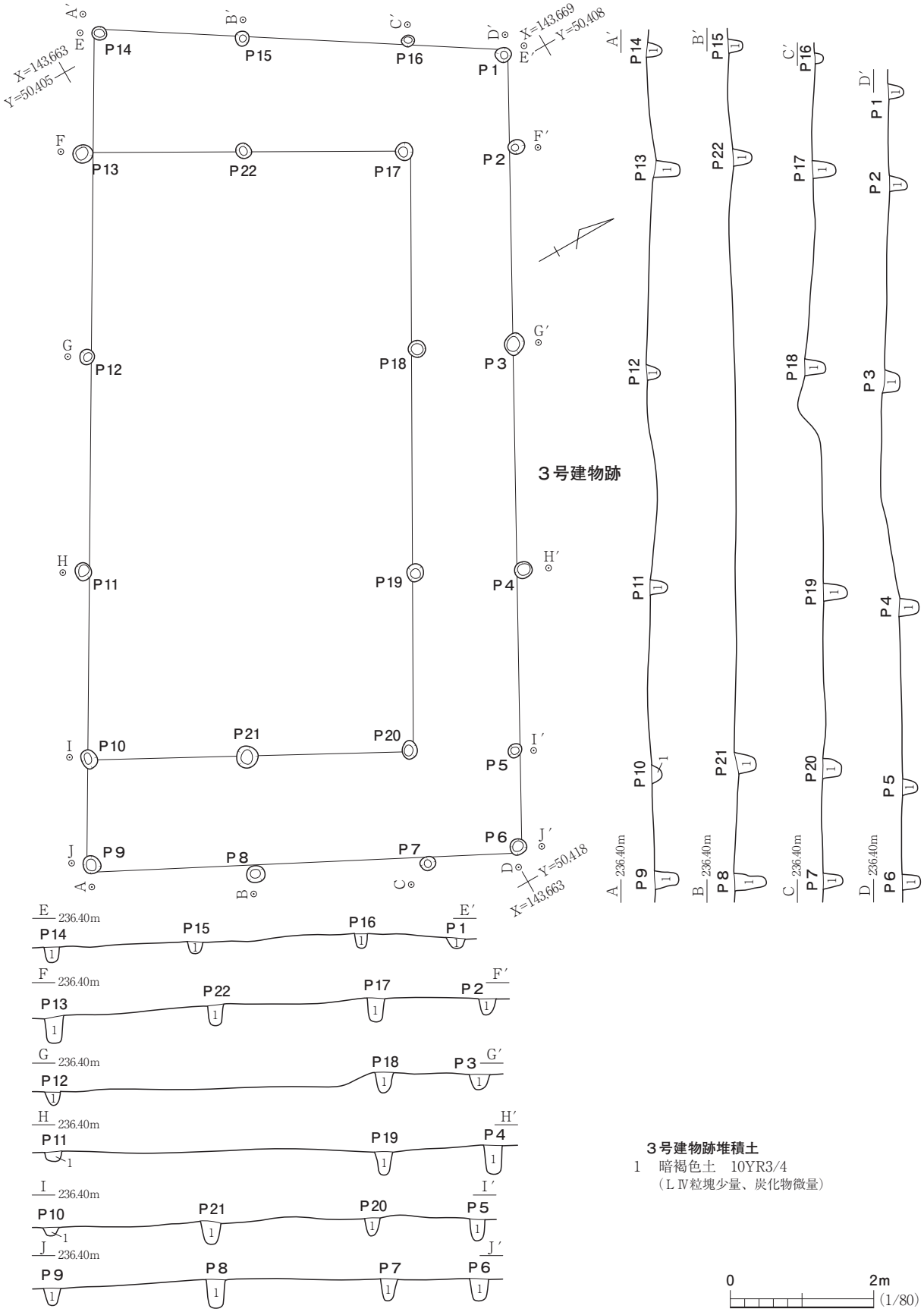


図362　３号建物跡

で4.3尺である。Ｐ７・８が2.4ｍで8.0尺で、Ｐ８・９が2.3ｍで7.7尺である。芯々間の平均値は2.13ｍで、7.1尺である。

各柱穴の平面形は、おおむね円形である。身舎の各柱穴の規模は、最大のＰ21が、直径25㎝、深さ30㎝である。最小のＰ11が、直径20㎝、深さ10㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。いずれの柱穴からも柱痕跡は確認できていない。

廂の柱穴は、直径が16～23㎝、深さが16～20㎝である。柱穴の堆積土は、炭化物とＬⅣ粒を少量を含む暗褐色土の単層である。いずれも柱を抜いた後に堆積した自然流入土である。

遺構内から遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は，桁行３間×梁行２間の身舎の、北西・北東・南東側の３面に廂の付く構造の掘立柱建物と考えられる。柱穴間は、身舎で平均が2.6ｍ、8.7尺である。身舎部の推定床面積は、37.4㎡で、廂の部分を含めると62.2㎡である。廂の配置からは、北を正面とする建物跡と考えられる。所属時期は、遺物が出土しておらず、時期決定の材料が乏しいが、構造や柱穴間の間尺などから中世頃の年代を推定している。（中　野）

４号建物跡　ＳＢ04

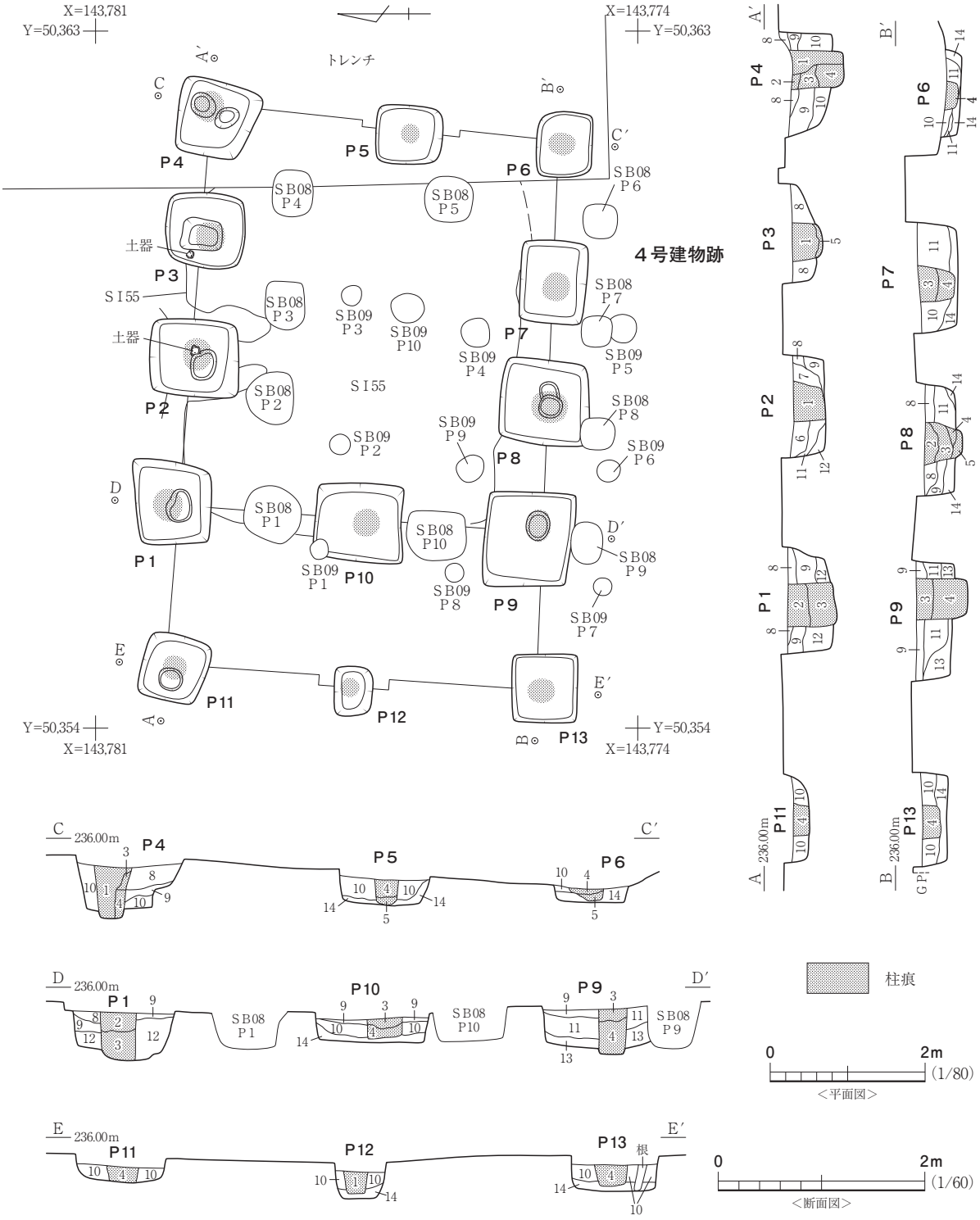
遺　　構（図363、写真275・276・277・306）

本遺構は、Ⅳ区北部のＨ－７・８、Ｉ－８グリッドに位置する。標高235.9ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ②である。遺構が検出された周辺は、遺構の重複が激しい地点で、遺構間の土層を確認しながら調査を行っていた。その際に、確認調査のトレンチ内で一辺1.0ｍほどの方形の柱穴が３基並んで検出したことから、大型の掘立柱建物跡として調査を行った。重複する遺構は、55・56・68・70号住居跡、８・９号建物跡である。本遺構が、56・68・70号住居跡より新しく、55号住居跡、８・９号建物跡より古い。

建物跡は13基の柱穴で構成される。身舎の柱穴の配置は、長方形に配列されている。構造は桁行３間、梁行２間で、西側に２×１間分の廂が付く構造と考えられる。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に５度傾く。

各隅を基準とした建物の規模は、身舎が、東辺のＰ４～６の芯々間が4.7ｍ、南辺のＰ６～９の芯々間が5.2ｍである。身舎部の推定床面積は、24.4㎡である。廂は、Ｐ11～13の芯々間が4.8ｍ、Ｐ１・11の芯々間が2.1ｍである。身舎と庇を加えた推定面積は、34㎡である。

各柱穴の芯々間は、身舎の部分で、東西列のＰ１～４が、1.6～2.0ｍである。平均すると1.8ｍで６尺である。Ｐ６～９は、1.6～1.9ｍである。平均すると1.7ｍで5.7尺となる。南北列は、Ｐ１・10・９が2.25～2.5ｍである。平均すると2.4ｍで８尺となる。Ｐ４～６は、2.0～2.65ｍである。平均すると2.3ｍで7.7尺となる。廂の部分の南北列は、Ｐ11～13が2.35～2.45ｍである。平均すると2.4ｍで８尺となる。



４号建物跡堆積土

1　黒褐色粘質土　10YR2/3（ＬⅡｂ③粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅡｂ③粒少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
4　黒褐色粘質土　10YR2/3
5　褐色土　10YR4/4（ＬⅡｂ③粒少量）
6　暗褐色粘質土　10YR3/2
7　黒褐色粘質土　10YR2/3
8　暗褐色土　10YR3/3
9　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黒色土多量）
10　黒褐色粘質土　10YR2/3
11　黒褐色粘質土　10YR2/3
12　暗褐色土　10YR3/3（砂多量）
13　黒褐色粘質土　10YR2/3
14　褐色砂質土　10YR4/4

図363　４号建物跡

柱穴の平面形は、おおむね方形である。身舎の柱穴の規模は、最大のＰ９が、120×115㎝、深さ55㎝である。最小のＰ６が、80×70㎝、深さ15㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦であるが、Ｐ１～４・８・９の底面では、柱の位置に一段深くなった掘り込みをもつ。柱穴からは柱痕跡が確認された。最大のものはＰ１で、直径43㎝である。廂の柱穴は、最小のＰ12が、64×50㎝、深さ33㎝である。最大のＰ６が、85×85㎝、深さ28㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。身舎同様にすべての柱穴から柱痕跡が確認された。最大のものはＰ13で、直径35㎝である。柱穴内堆積土は、14層に区分した。ℓ１～５は柱痕跡である。６・７は柱の抜き取り痕と考えている。ℓ８～14は掘形の埋土である。

遺　　物（図399）

遺物は土師器が48点出土し、２点を図示した。

図399－１・２は、ロクロナデを施す甕である。２は口縁部から胴部上半の破片である。１は底部の破片で、回転糸切り痕が確認できる。

ま と め

本遺構は桁行３間×梁行２間の身舎で、西側の１面に廂の付く掘立柱建物跡と考えられる。身舎の推定床面積は24.4㎡で、廂を含めると34.4㎡である。廂の配置が特徴的で、西を正面とする建物跡と考えられる。時期は遺構の重複関係や遺物から平安時代、９世紀と考えている。　　（中　野）

５号建物跡　ＳＢ05

遺　　構（図364、写真278）

本遺構はⅣ区西部のＦ－10・11、Ｇ－10グリッドにわたって位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ上面である。64号住居跡の西側のＬⅡｂ上面を検出中に、方形に並ぶ柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構は、32号土坑だが、直接的な堆積土の切り合い関係がないため新旧関係は不明である。

建物跡は９基の柱穴で構成される。構造は、桁行２間×梁行２間の総柱建物跡である。平面形はおおむね方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に16度傾く。

各隅柱を基準とした建物の規模は、北辺がＰ１～３の芯々間が5.2ｍ、東辺がＰ３～５の芯々間が5.5ｍである。Ｐ２とＰ４は、北列及び東列の柱穴を結んだ線から内側と外側に外れて位置する。推定床面積は、29㎡である。

各柱穴の芯々間は、Ｐ１・２が2.5ｍで8.3尺、Ｐ２・３が2.8ｍでおおよそ9.3尺である。Ｐ３・４が、2.7ｍで9.0尺、Ｐ４・５が3.1ｍで10.3尺である。Ｐ５・６が1.8ｍで６尺、Ｐ６・７が2.85ｍで9.5尺である。Ｐ７・８が2.95ｍで9.8尺、Ｐ８・１が2.6ｍで8.7尺である。Ｐ８・９は2.4ｍで8.0尺である。Ｐ９・４は2.7ｍで9.0尺である。芯々間の平均値は2.65ｍで、8.8尺である。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ４が、直径35㎝、深さ20㎝、最小のＰ５が、直径20㎝、深さ15㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形

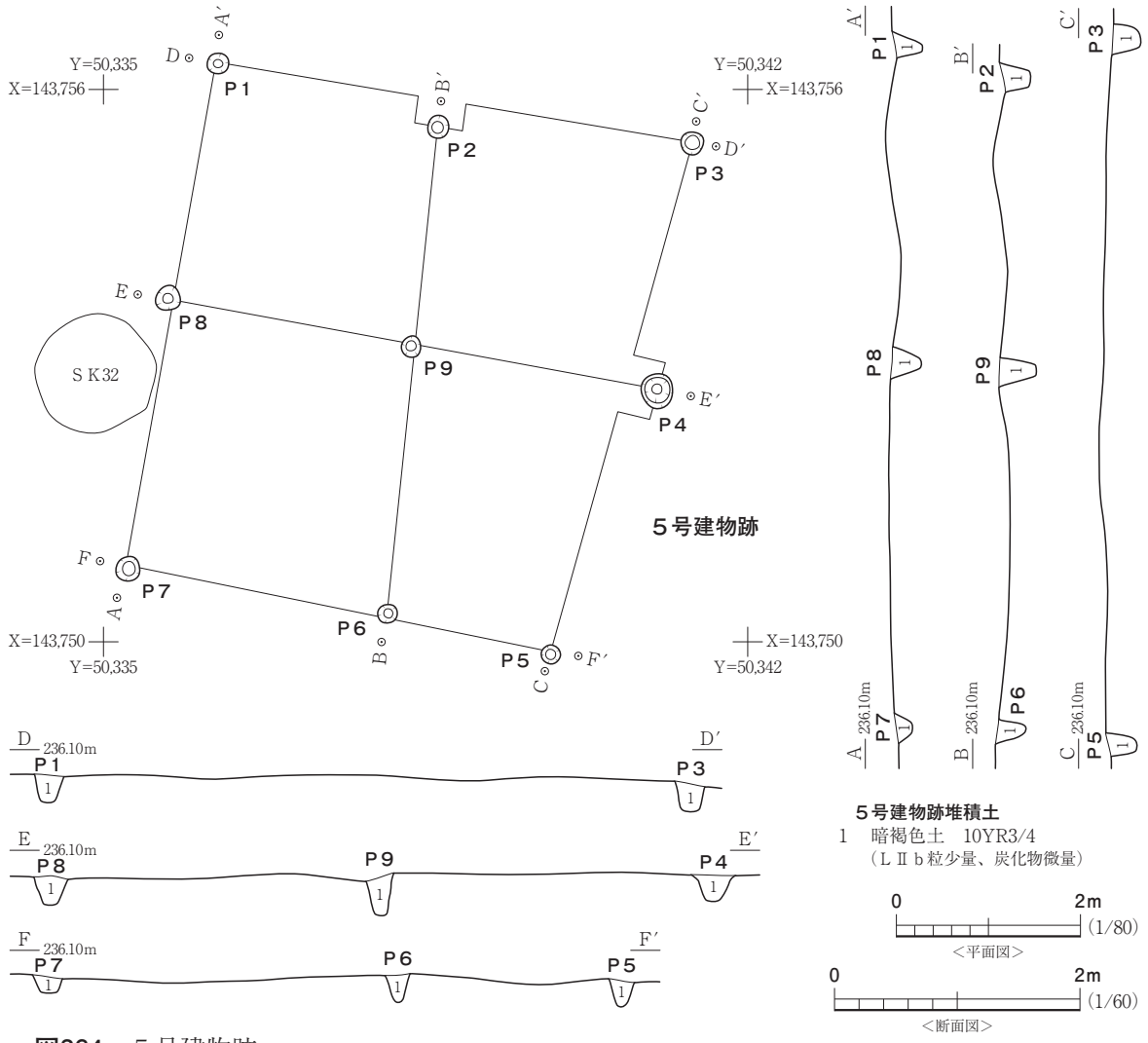


図364　５号建物跡

は平坦である。柱痕跡は確認できなかった。堆積土は、炭化物を微量含む暗褐色土の単層である。

遺構内からは土師器片２点が出土した。

ま と め

本遺構は桁行２間×梁行２間の総柱建物跡で、推定床面積は29㎡である。芯々間の平均値は2.65ｍで8.8尺である。所属時期は間尺の長さや検出面から中世頃の年代を推定している。（中　野）

６号建物跡　ＳＢ06

遺　　構（図365、写真279）

本遺構は、Ⅱ区西部のＨ・Ｉ－22グリッドに位置する。標高235.2ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢ上面である。東側に２号建物跡が隣接している。

本遺構は８基の柱穴で構成され、桁行３間×梁行１間の建物跡である。方位は東の柱列が北から30度東を示す。

規模は、桁行である東辺が7.4ｍ、西辺が7.2ｍである。梁行である北辺が4.6ｍ、南辺で4.5ｍ

である。柱穴で囲まれた範囲の面積は約34㎡である。柱間距離は、桁行の東側・西側柱列は1.6～2.6ｍと幅がある。しかしＰ１・２とＰ７・８が1.6ｍ、Ｐ２・３とＰ６・７が2.0ｍ、Ｐ３・４とＰ５・６が2.6ｍと柱間距離が対応する。一方桁行は約4.0ｍとほぼ同距離である。

柱穴の平面形は、楕円形もしくは隅丸方形である。直径30～70㎝、深さ20～35㎝の規模である。柱痕跡は２基で確認され、いずれも平面形は円形である。

柱穴の堆積土は２層に分層した。ℓ１は柱痕跡で、西側柱列Ｐ５・７に認められた。ℓ２は掘形埋土で、黒褐色を基調とし、ＬⅢ由来の小土塊を含む。

本遺構から遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は８基の柱穴で構成される、桁行３間×梁行１間の建物跡である。位置や柱穴、堆積土の

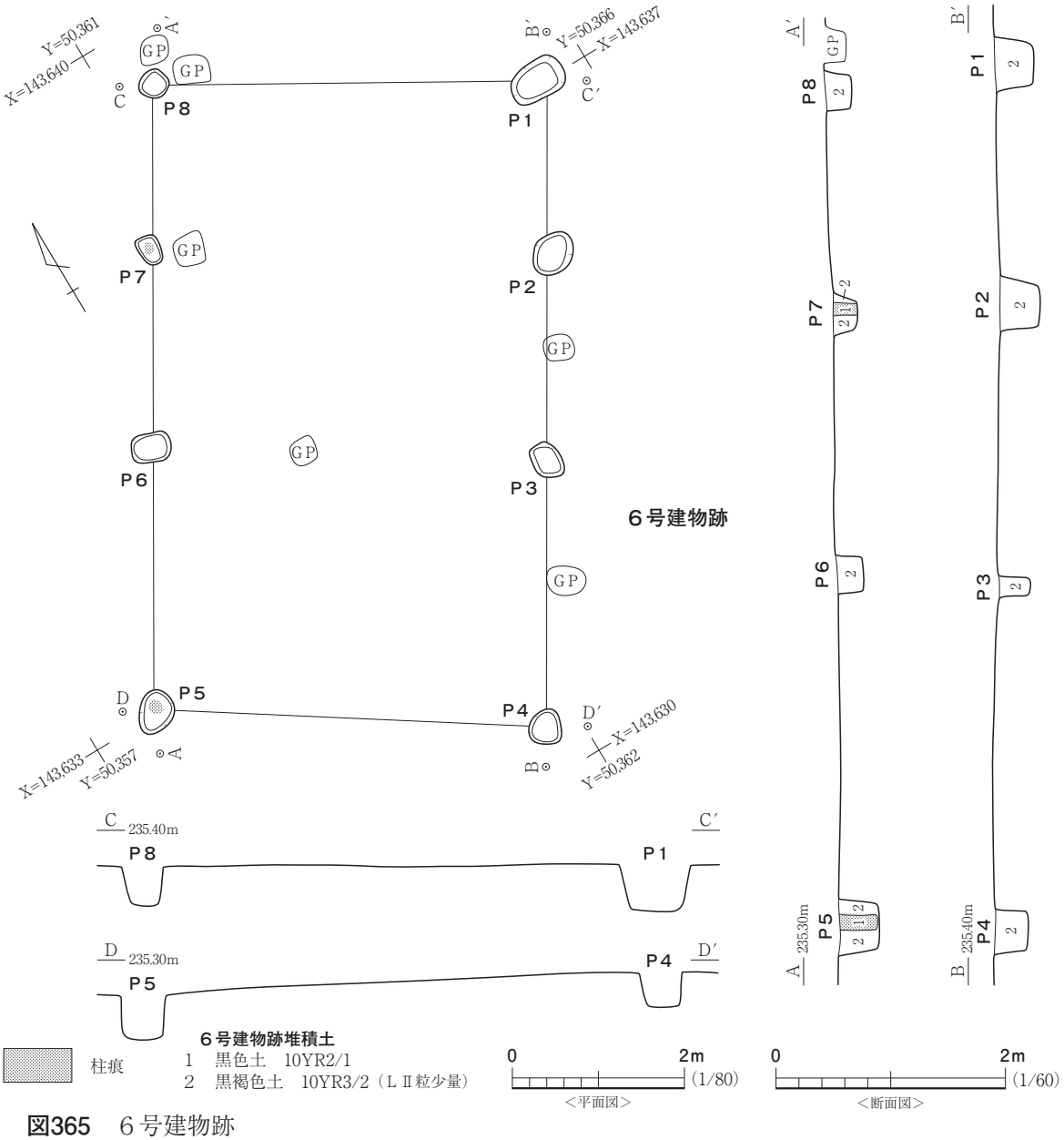


図365　６号建物跡

特徴は西側に隣接する２号建物跡と近似しており、一連の建物跡の可能性が考えられる。遺構に伴う遺物は認められなかったが、検出時に陶器の小片が出土していることから、中世に機能した建物跡と考えている。　（神　林）

７号建物跡　ＳＢ07

遺　　構（図366、写真280）

本遺構は、Ⅳ区中央部のＧ－９、Ｈ－９・10グリッドにわたって位置する。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ上面である。58号住居跡の南側のＬⅡｂ上面を検出中に方形に並ぶ柱穴群を確認したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構は、62号住居跡で、本遺構が新しい。

建物跡は６基の柱穴で構成される。構造は、南北桁行２間、東西梁行１間で、平面形はおおむね

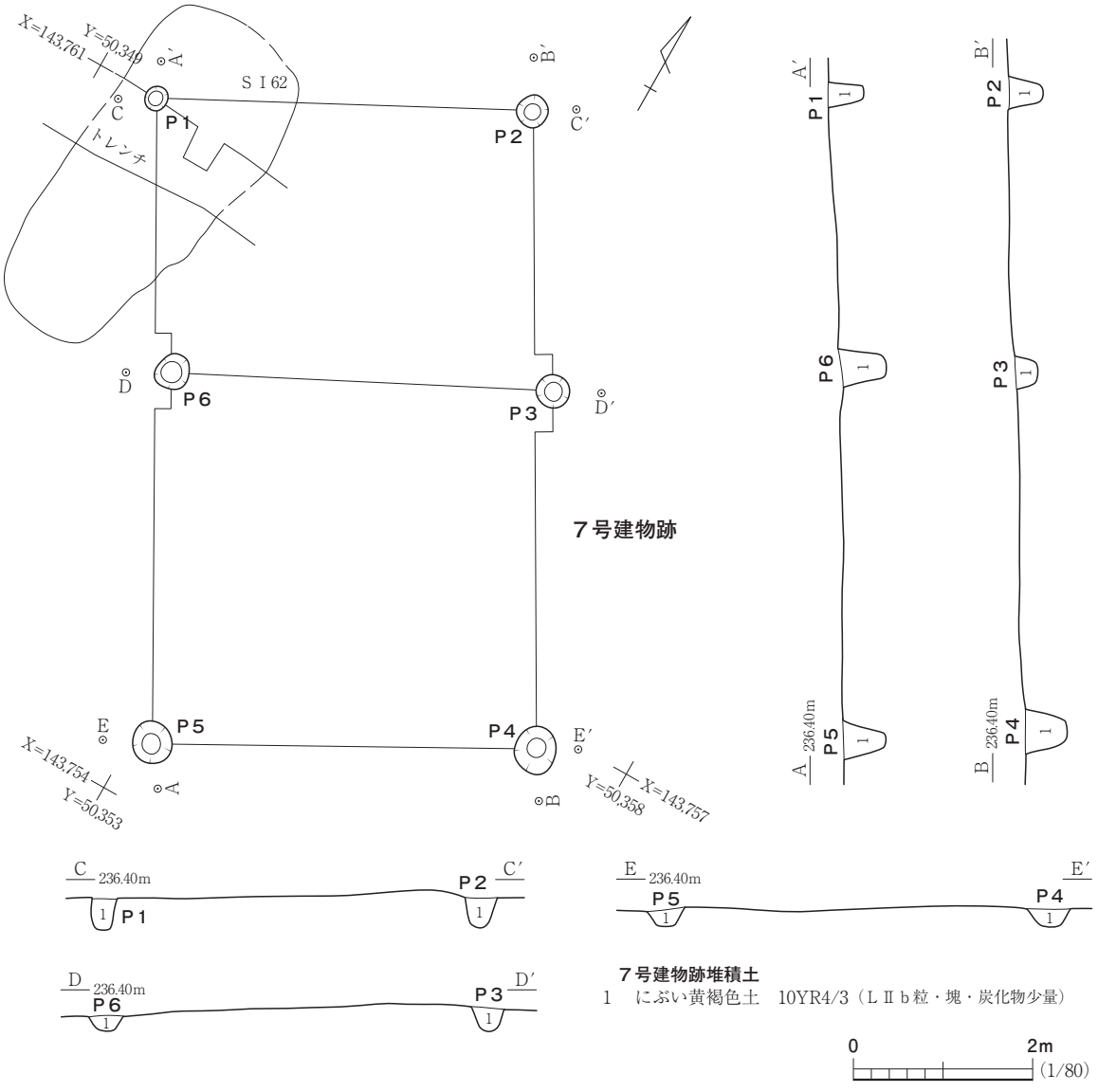


図366　７号建物跡

長方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して西に30度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北西辺がＰ１・２で4.2ｍ、北東辺がＰ２～４で7.2ｍである。Ｐ６とＰ３は西辺及び東辺の柱列から内側と外側に位置する。推定床面積は、30.2㎡である。

各柱穴の芯々間は、Ｐ２・３が3.5ｍでおおよそ11.7尺である。Ｐ３・４が4.0ｍで13.3尺、Ｐ４・５が4.3ｍで14.3尺である。Ｐ５・６が4.0ｍで13.3尺、Ｐ６・１が3.1ｍで10.1尺である。芯々間の平均値は3.8ｍで12.7尺である。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ４・５が直径40㎝、深さ25㎝である。最小のＰ１が直径25㎝、深さ40㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡は確認できなかった。堆積土は、ＬⅡｂ粒や炭化物を少量含むにぶい黄褐色土の単層で自然堆積と思われる。

遺構内から遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は、南北２間×東西１間の掘立柱建物跡である。推定床面積は、30.2㎡である。芯々間の平均値は3.8ｍで、12.7尺である。所属時期は、検出面や遺構の重複関係などから平安時代から中世頃の年代を推定している。（中　野）

８号建物跡　ＳＢ08

遺　　構（図367、写真281）

本遺構は、Ⅳ区北部のＨ・Ｉ－８グリッドに位置する。標高235.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ②である。55号住居を調査している際に、住居跡と重複する方形に並ぶ柱穴群を検出したことから掘立柱建物跡として調査を行った。重複する遺構は、55号住居跡、４・９号建物跡である。本遺構が、55号住居跡、４号建物跡より新しく、９号建物跡より古い。

建物跡は10基の柱穴で構成される。構造は、桁行３間、梁行２間で、平面形は長方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に５度傾く。

各隅柱を基準とした建物の規模は、北辺がＰ１～４の芯々間で4.2ｍ、東辺がＰ４～６の芯々間で4.0ｍである。推定床面積は、16.8㎡である。

各柱穴の芯々間は、北側東西列のＰ１～４が1.25～1.5ｍである。平均すると1.42ｍで4.7尺である。東側南北列のＰ４～６は、2.0ｍで6.7尺となる。南側東西列のＰ６～９が、1.3～1.5ｍである。平均すると1.43ｍで4.8尺である。西側南北列のＰ９・10・１が、2.0～2.2ｍである。平均すると2.1ｍで6.7尺である。

柱穴の平面形は、おおむね方形である。各柱穴の規模は、最大のＰ10が76×65㎝、深さ40㎝である。最小のＰ７が40×40㎝、深さ20㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡は、Ｐ７以外のピットから確認できた。最大のものはＰ10のもので、直径が33㎝である。

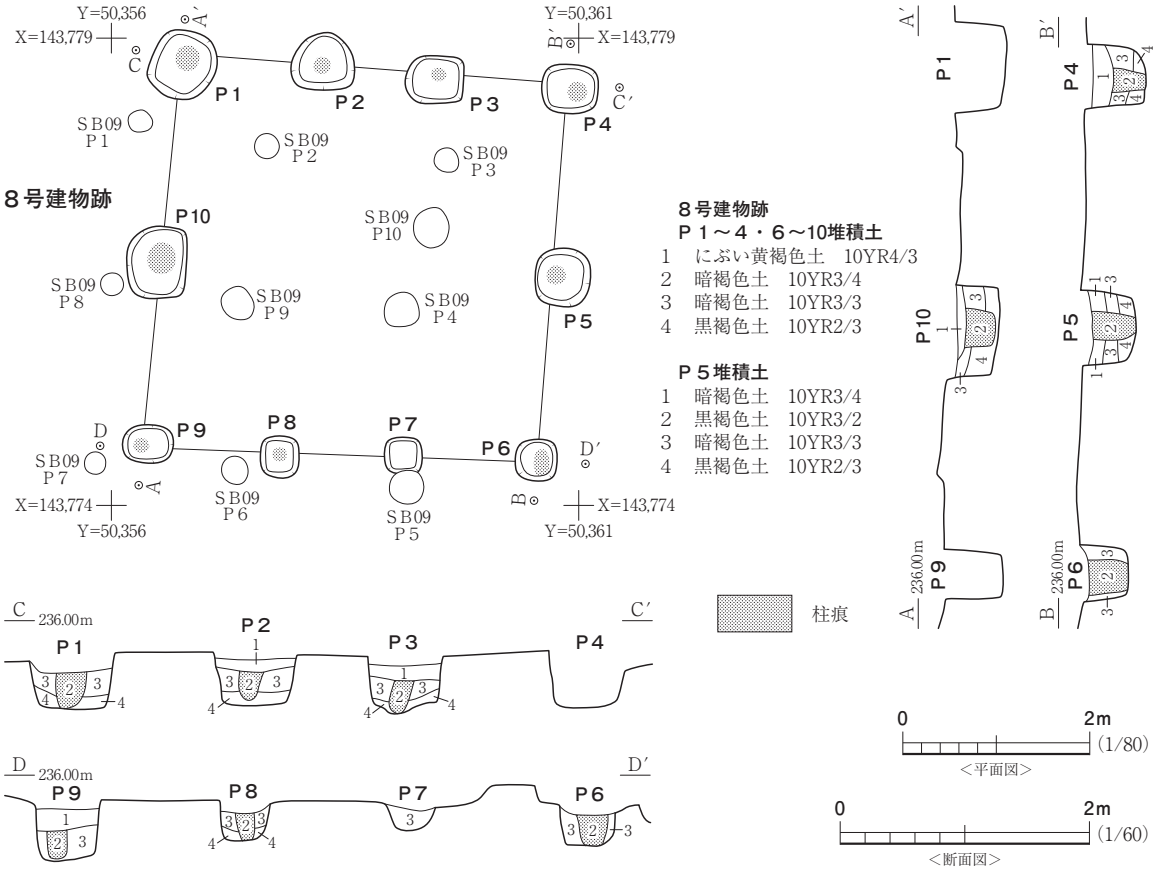


図367　８号建物跡

柱穴の堆積土は、４層に区分した。ℓ１は建物を壊した後に柱穴を埋めた人為堆積土である。この堆積土下には、柱痕跡と掘形埋土が遺存することから、建物を壊す際に、柱材を切り離した後、埋めたと考えられる。２は柱痕跡である。ℓ３～５は掘形の埋土である。

遺物は土師器が26点出土した。いずれもロクロナデを施した甕や内面黒色処理を施した杯などの小片のため図示していない。これらの遺物は平安時代の所産と考えている。

ま と め

本遺構は、桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、16.8㎡である。重複状況や方位と構造などが４号建物跡と共通することから、建て替えの可能性も考えられる。所属時期は、遺構の重複関係や遺物から平安時代、９世紀と考えている。　（中　野）

９号建物跡　ＳＢ09

遺　　構（図368、写真281）

本遺構は、Ⅳ区北部のＨ－８グリッドに位置する。標高235.7ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ②である。検出段階で８号建物跡の柱穴を壊している一回り小さい柱穴群を検出したため本遺構として調査を行った。重複する遺構は、55号住居跡、４・８号建物跡である。いずれの遺構より本遺構が新しい。

建物跡は10基の柱穴で構成される。構造は、桁行２間、梁行２間の総柱建物跡である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に５度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺がＰ１～３の芯々間で3.3ｍ、東辺がＰ３～５の芯々間で3.5ｍである。推定床面積は、11.6㎡である。柱の位置関係では、Ｐ４が東列から内側に外れて位置し、Ｐ３とＰ４の間にはＰ10が位置する。

各柱穴の芯々間は、北側東西列のＰ１～３が、1.35～1.95ｍである。平均すると1.65ｍで、5.5尺である。東側南北列のＰ３～５は、1.7～1.9ｍである。平均すると1.8ｍで、6.0尺となる。南側東西列のＰ５～７が、1.5～1.9ｍである。平均すると1.7ｍで、5.6尺である。西側南北列のＰ７・８・１が、1.75～1.9ｍである。平均すると1.82ｍで、6.1尺である。中央の東西列のＰ８・９・４が、1.35～1.75ｍである。平均すると1.53ｍで、5.2尺である。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ10が、直径43㎝、深さ28㎝である。最小のＰ１が、直径26㎝、深さ26㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ10で確認された。直径は14㎝である。

柱穴内堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。ℓ２は掘形の埋土もしくは、柱の抜き取り後の堆積土である。

遺構内から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、２間×２間の総柱建物跡と考えられる。推定床面積は、11.6㎡である。本遺構は、方位などを８号建物跡を意識して建て替えており、構造を総柱建物に変えて、規模を縮小したものと考えられる。所属時期は、重複関係から平安時代と考えている。　（中　野）

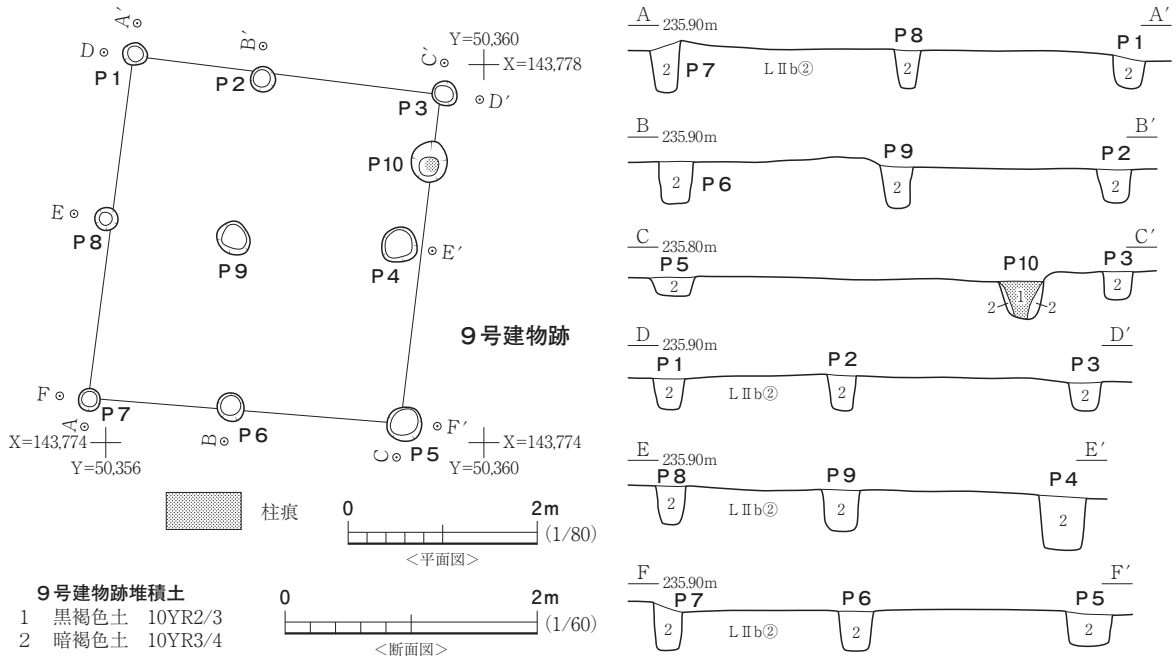


図368　９号建物跡

10号建物跡　ＳＢ10

遺　　構（図369、写真282）

本遺構は、Ⅳ区北西部のＨ－８・９グリッドに位置する。標高236.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ上面である。58号住居跡の北西側のＬⅡｂ上面を検出中に、長方形に並ぶ柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構はない。

建物跡は16基の柱穴で構成される。構造は、南北桁行３間、東西梁行２間である。Ｐ３・５・15・16は、柱穴列から外れて位置するが、堆積土が共通することから本遺構に含めている。

平面形はおおむね長方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して西に５度傾く。

各隅柱を基準とした柱穴間の距離は、北辺がＰ１～４の芯々間で3.5ｍ、東辺がＰ４～８の芯々間で5.1ｍである。推定床面積は、15.8㎡である。

各柱穴の芯々間は、柱筋の通った部分で計測すると、東西列はＰ１・２が1.5ｍ、Ｐ２・４が1.5ｍである。Ｐ９・10が1.75ｍ、Ｐ10・11が1.7ｍである。南北列はＰ１・12が1.2ｍ、Ｐ２・13が1.3ｍである。Ｐ13・14は1.8ｍ、Ｐ14・10は1.75ｍである。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ13が直径45㎝、深さ44㎝、最小のＰ９が直径25㎝、深さ35㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦で

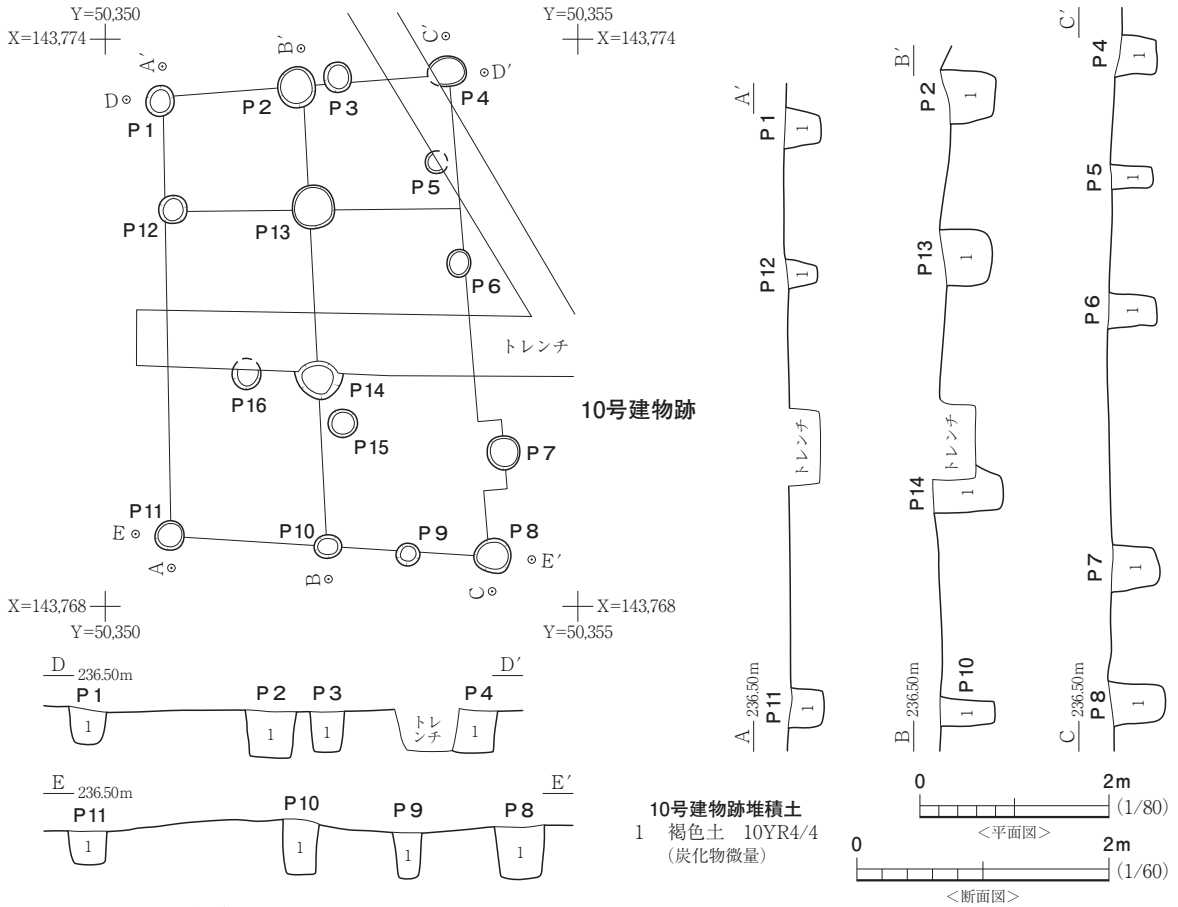


図369　10号建物跡

ある。柱痕跡は確認できなかった。堆積土は、ＬⅡｂ粒や炭化物を微量含む褐色土の単層である。

遺物は土師器が27点出土した。いずれも古墳時代後期から平安時代のもので、小片のため図示していない。遺構に伴う資料ではなく、重複する遺構や周辺からの流れ込みの遺物と考えている。

ま と め

本遺構は、桁行３間×梁行２間の掘立柱建物跡である。推定床面積は、15.8㎡である。柱筋の通らない柱穴が多く、何らかの用途で建てられた簡易的な建物の可能性も考えられる。所属時期は、検出面や遺構の重複関係から、平安時代から中世の年代を推定している。　（中　野）

11号建物跡　ＳＢ11

遺　　構（図370、写真283）

本遺構は、Ⅳ区北部のＩ・Ｊ－７グリッドに位置する。標高236.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ②である。遺構が検出された周辺は、遺構の重複が激しい北側に位置する。37号住居跡の北側を検出した際に、長方形に配列する柱穴群を検出したため、掘立柱建物跡として調査を行った。重複する遺構はない。

建物跡は10基の柱穴で構成される。構造は、桁行３間、梁行1間である。各隅の柱穴は、一回り大きく掘り込まれており、それぞれの間の東西列に小型の柱穴が並ぶように配列される。Ｐ６は柱筋から外れ、内側に位置する。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に５度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺がＰ１・２の芯々間で5.9ｍ、東辺がＰ２・３の芯々

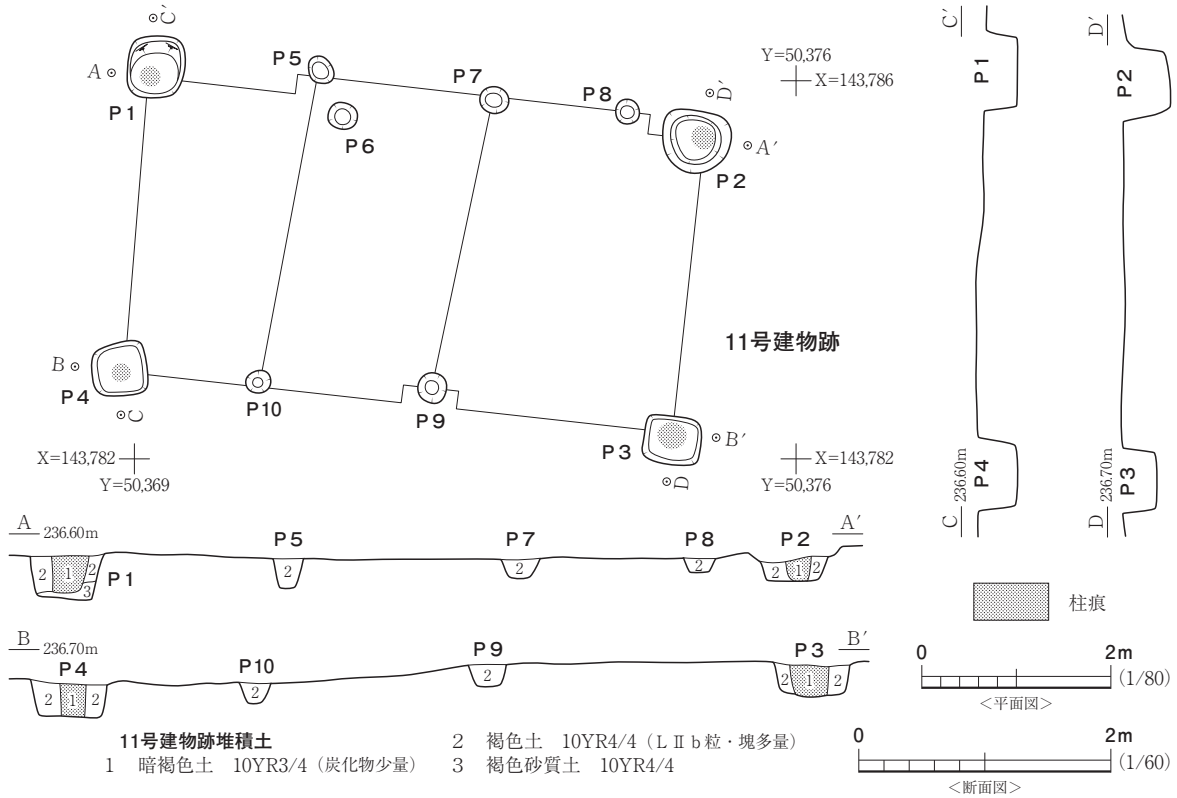


図370　11号建物跡

間で3.2ｍである。推定床面積は、18.3㎡である。

各柱穴の芯々間は、北辺東西列のＰ１・５が1.8ｍ、Ｐ５・７が1.85ｍ、Ｐ７・２が2.25ｍである。南辺東西列のＰ４・10が1.45ｍ、Ｐ10・９が1.85ｍ、Ｐ９・３が2.6ｍである。

柱穴の平面形は、Ｐ１～４が隅丸方形や楕円形で、それ以外はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ２が75×65㎝、深さ35㎝である。最小のＰ７が28×25㎝、深さ10㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面は平坦である。Ｐ１～４からは柱痕跡が確認された。最大のものはＰ３で、直径が30㎝である。

柱穴の堆積土は、３層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。ℓ２・３は掘形の埋土もしくは柱を抜き取った後の堆積土である。

遺物は、柱穴より土師器が１点出土した。ロクロ成形の甕の胴部小片のため図示していない。おおむね平安時代の所産と考えている。

ま と め

本遺構は、桁行３間×梁行１間の長方形の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、18.3㎡である。四隅の柱穴が方形や楕円形に大きく掘り込まれているのが特徴的である。主軸方位が４号建物跡と共通することから、関連が考えられる。所属時期は検出面や遺物などから、平安時代、９世紀頃と考えている。（中　野）

12号建物跡　ＳＢ12

遺　　構（図371、写真284・306・321）

本遺構は、Ⅲ区南部のＣ・Ｄ・Ｅ－23・24グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。周辺は、古墳時代後期から中世の遺構が集中する。平成27年度調査では、多数の柱穴群とともに、柱穴の直径が70㎝に及ぶ大型の柱穴列が東西に並ぶように検出された。このため大型の掘立柱建物跡として調査を開始した。しかし、冬季の調査であったことから、作業は霜や雪に苛まれ、検出が困難をきわめ、すべての柱穴が検出できないまま、調査は中断した。平成28年度調査に入ってからは、周辺の再検出を試み、大型の掘立柱建物跡であることが明らかになった。重複する遺構は、96号住居跡、13・28・31号建物跡、25号畑跡、19号溝跡である。本遺構が、96号住居跡、21号畑跡より新しく、13・28・31号建物跡より古い。

なお、隣接する27・32号建物跡は、位置関係から本遺構と一連の建物跡と考えられる。

建物跡は32基の柱穴で構成される。本遺構の構造は、東西桁行６間、南北梁行２間の身舎に、東西７間、南北４間の廂が西側、北側、南側に付く、三面廂付の大型建物跡と判断した。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約20度傾く。

身舎・廂ともに柱穴の配置は、長方形に整然と配列され、身舎と廂の柱穴は、柱筋の通りが良く建てられている。身舎の北側の東西列のＰ３とＰ４の間には、本来なら柱穴が１基あると考えられるが、その部分からは検出できなかった。なんらかの理由で、意図的にその部分には柱を建てな

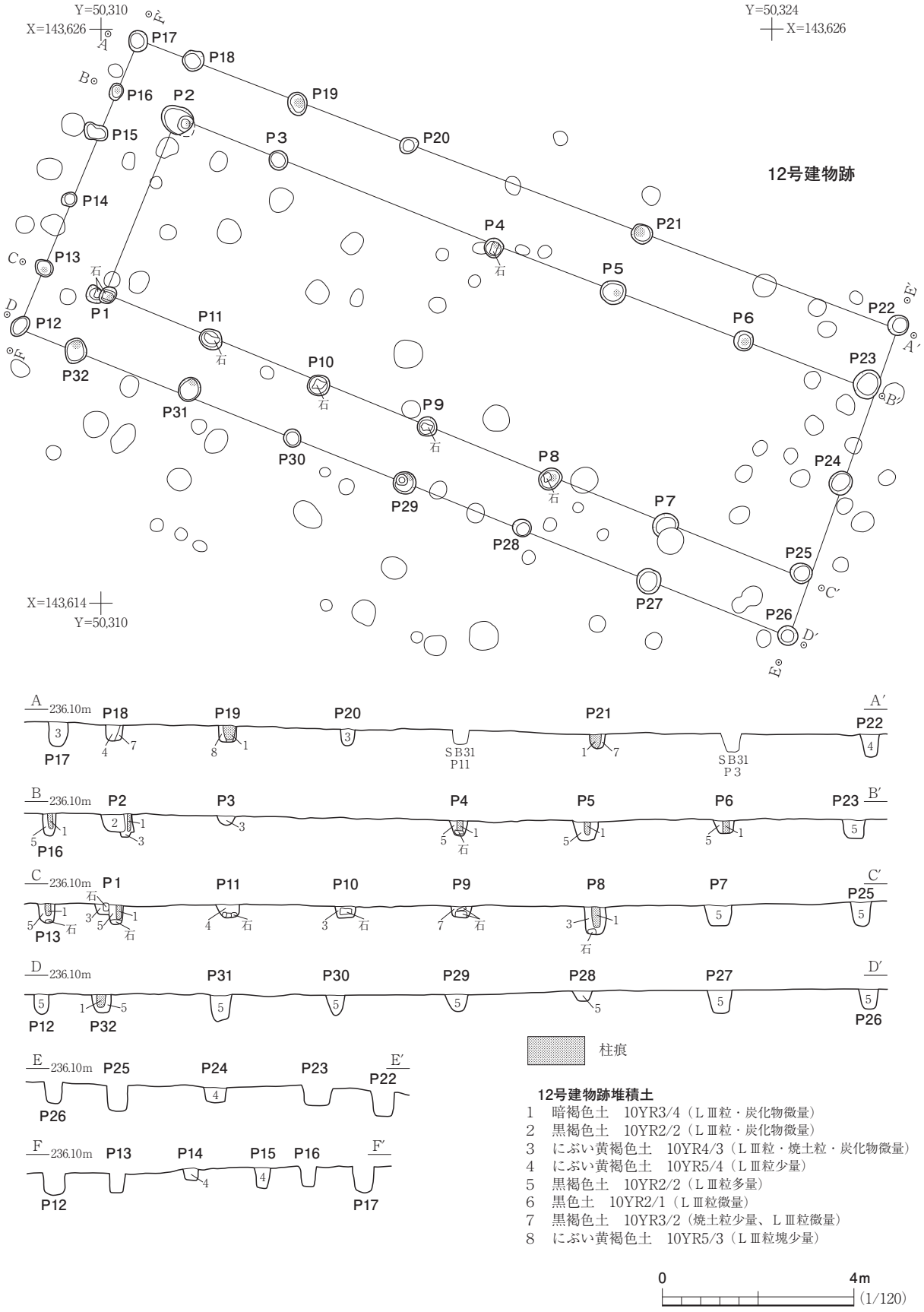

Y=50,310
X=143,626
Y=50,324
X=143,626
X=143,614
Y=50,310
12号建物跡
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
236.10m
SB31 P11
SB31 P3
石
柱痕
12号建物跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（Ⅼ Ⅲ粒・炭化物微量）
2　黒褐色土　10YR2/2（Ⅼ Ⅲ粒・炭化物微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（Ⅼ Ⅲ粒・焼土粒・炭化物微量）
4　にぶい黄褐色土　10YR5/4（Ⅼ Ⅲ粒少量）
5　黒褐色土　10YR2/2（Ⅼ Ⅲ粒多量）
6　黒色土　10YR2/1（Ⅼ Ⅲ粒微量）
7　黒褐色土　10YR3/2（焼土粒少量、Ⅼ Ⅲ粒微量）
8　にぶい黄褐色土　10YR5/3（Ⅼ Ⅲ粒塊少量）
0
4m
(1/120)

図371　12号建物跡

かったものと考えている。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎で、北辺のＰ２～23が芯々間で12.8ｍ、東辺がＰ23～25の芯々間で4.2ｍである。身舎の推定面積は、53.8㎡である。庇は、北辺の東西列のＰ17～22で17.3ｍ、南北のＰ22～Ｐ26が6.9ｍである。身舎と廂を加えた推定面積は、119.4㎡である。

各柱穴の芯々間は、身舎で、北辺東西列のＰ２・３・４～６・23が、2.1～2.9ｍである。平均すると2.6ｍで、8.7尺である。南辺東西列のＰ25・７～11・１が、2.3～3.0ｍである。平均すると2.6ｍで、8.7尺である。廂の北辺にあたる東西列は、西側のＰ17・18は間が狭く1.2ｍである。それ以外のＰ18～22までは2.3～2.9ｍである。平均すると2.6ｍで、8.7尺となる。南辺の東西列は、西側のＰ12・32間が狭く1.25ｍである。それ以外のＰ26～32までは2.4～3.2ｍである。平均すると2.7ｍで、9.1尺となる。

柱穴の平面形は、おおむね円形である。身舎・廂ともに大きさに差はみられない。規模は、最大のＰ２が、直径70㎝、深さ46㎝である。最小のＰ９が直径43㎝、深さ23㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。Ｐ１・４・８～11の底面からは、石が出土した。石は底面ないし堆積土中に据えられている。石の規模は、最大がＰ11のもので、35×15×８㎝である。石はいずれも被熱を受けており、赤色に熱変化している。柱痕跡は、Ｐ１・２・４～６・８・13・16・19・21・29・31・32で確認された。最大のものはＰ21で、直径が20㎝である。

柱穴内堆積土は、８層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。２～８は掘形の埋土、および、柱の抜き取り後に堆積した土と考えている。

遺　　物（図399、写真448）

遺物は鉄製品が１点出土した。図399－４は、Ｐ21のℓ７から出土した銭貨である。元豊通宝（1078年初鋳）と読めることから宋銭と考えられる。

ま と め

本遺構は、東西桁行６間、南北梁行２間の身舎に、東西７間、南北４間の廂が三方に付く、三面廂付の大型建物跡である。身舎の推定床面積は、53.8㎡で、廂の部分を含めると119㎡である。柱穴間は広く、平均で2.6～2.7ｍを測り、尺に直すと8.7～9.1尺である。柱穴には、石が据えられたものがある。本遺構は柱筋の通りも良く、おそらく主屋として機能したものと考えられる。近隣の27・32号建物跡を含む３棟が一つの建物群を形成していたものと推測している。所属時期は、出土した宋銭や重複関係などから中世初頭、12世紀末から13世紀頃と考えている。　　（中　野）

13号建物跡　ＳＢ13

遺　　構（図372、写真285・321）

本遺構は、Ⅲ区南部のＣ・Ｄ・Ｅ－23・24グリッドに位置する。標高237.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。遺構周辺は、中世の遺構が集中している。12号建物跡の南側に重複する、大型の柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構

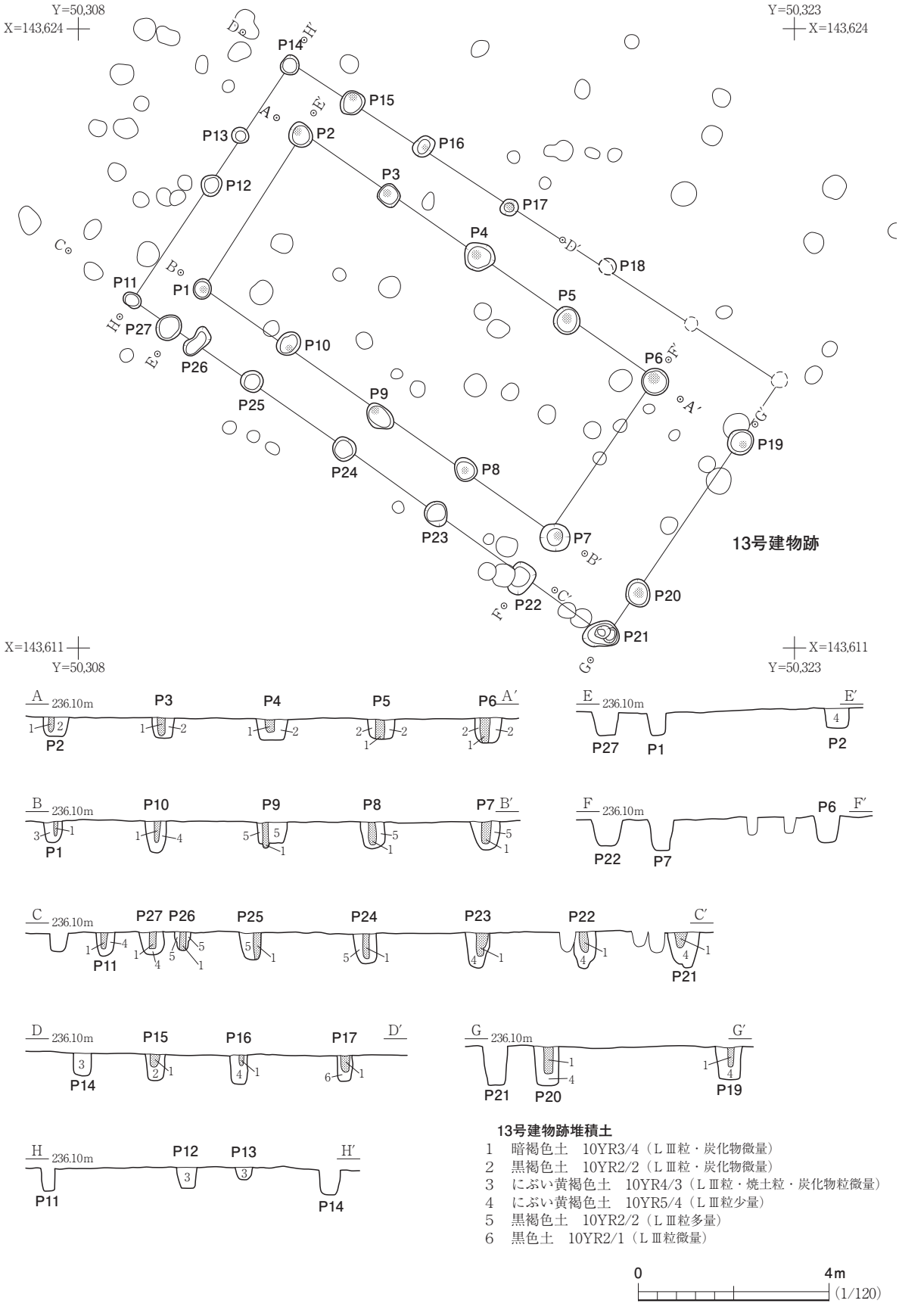

Y=50,308
X=143,624
Y=50,323
X=143,624
P14
P15
P16
P17
P18
P13
P2
P3
P4
P5
P12
P1
P11
P27
P26
P10
P6
P25
P9
P24
P8
P19
P23
P7
P22
P20
P21
13号建物跡
X=143,611
Y=50,308
X=143,611
Y=50,323
A 236.10m
P3
P4
P5
P6
A′
P2
E 236.10m
E′
P27
P1
P2
B 236.10m
P10
P9
P8
P7
B′
P1
F 236.10m
P6
F′
P22
P7
C 236.10m
P27 P26
P25
P24
P23
P22
C′
P11
P21
D 236.10m
P15
P16
P17
D′
P14
G 236.10m
G′
P21
P20
P19
H 236.10m
P12
P13
H′
P11
P14
13号建物跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（Ⅼ Ⅲ粒・炭化物微量）
2　黒褐色土　10YR2/2（Ⅼ Ⅲ粒・炭化物微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（Ⅼ Ⅲ粒・焼土粒・炭化物粒微量）
4　にぶい黄褐色土　10YR5/4（Ⅼ Ⅲ粒少量）
5　黒褐色土　10YR2/2（Ⅼ Ⅲ粒多量）
6　黒色土　10YR2/1（Ⅼ Ⅲ粒微量）
0
4m
(1/120)

図372　13号建物跡

は、96号住居跡、12・28号建物跡、25号畑跡である。本遺構が、96号住居跡、12号建物跡、25号畑跡より新しく、28号建物跡より古い。12号建物跡とは構造などの共通点が多く、方位と位置をわずかに変えて、建て替えを行っているものと考えられる。29・31号建物跡とは、きわめて近い時期、もしくは同時期につくられた建物跡と考えられる。

北東側など一部失われたものもあると考えられるが、建物跡は27基の柱穴で構成される。建物の構造は、東西桁行４間、南北梁行１間の身舎に、東西６間、南北４間の廂が建物の四方に付く、四面廂付の大型建物跡と判断した。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約35度傾く。

身舎・廂ともに柱穴の配置は、12号建物跡と同様に長方形に整然と配列され、身舎の柱穴と庇の柱穴は柱筋の通りが良く建てられている。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎で、北辺がＰ２～６の芯々間で9.1ｍ、東辺がＰ６・７の芯々間で4.0ｍである。身舎の推定床面積は、36.2㎡である。廂の長さは、南辺がＰ11～21の芯々間で12.2ｍである。西辺のＰ11～14は6.0ｍである。身舎と廂を加えた推定面積は、73.2㎡である。

各柱穴の芯々間は身舎の北側東西列のＰ２～６が2.2～2.3ｍである。平均すると2.27ｍで7.6尺である。南側東西列のＰ１～７が2.2～2.4ｍである。平均すると2.28ｍで7.6尺である。庇の部分で残りの良い南側東西列のＰ11～21が1.5～2.4ｍである。平均すると2.1ｍで6.9尺である。

柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ４が直径65㎝、深さ46㎝、最小のＰ１が直径38㎝、深さ42㎝である。柱穴の周壁は垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡は身舎にあたるＰ１～10、廂にあたるＰ15～17・19・20において確認された。最大のものはＰ６で直径が26㎝である。柱穴内堆積土は６層に区分した。ℓ１は柱痕跡で、ℓ２～６は掘形の埋土および柱の抜き取り後に堆積したと考えている。遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西桁行４間×南北梁行１間の身舎に、東西６間×南北３間の廂が四方に付く、四面廂付の大型建物跡である。身舎の推定床面積は36.2㎡で、廂を含めると73.2㎡である。本遺構は、12号建物跡の後に、規模を縮小して主屋として建て替えられたと考えられる。近隣の29・31号建物跡と、方位を同じくすることから、３棟が一つの建物群を形成していたものと推測している。所属時期は、周囲の遺構との関係などから中世初頭の13～14世紀頃と考えている。　（中　野）

15号建物跡　ＳＢ15

遺　　構（図373、写真286）

本遺構は、Ⅱ区のⅠ－20・21グリッドに位置し、標高235.7ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。東隅が16号建物跡のＰ４と重複しており、柱穴の大きさなどから、本遺構の方が古いと判断した。北側には33号住居跡が位置する。

本遺構は7基の柱穴で構成され、東西桁行２間×南北梁行２間の方形の建物跡である。方位は東

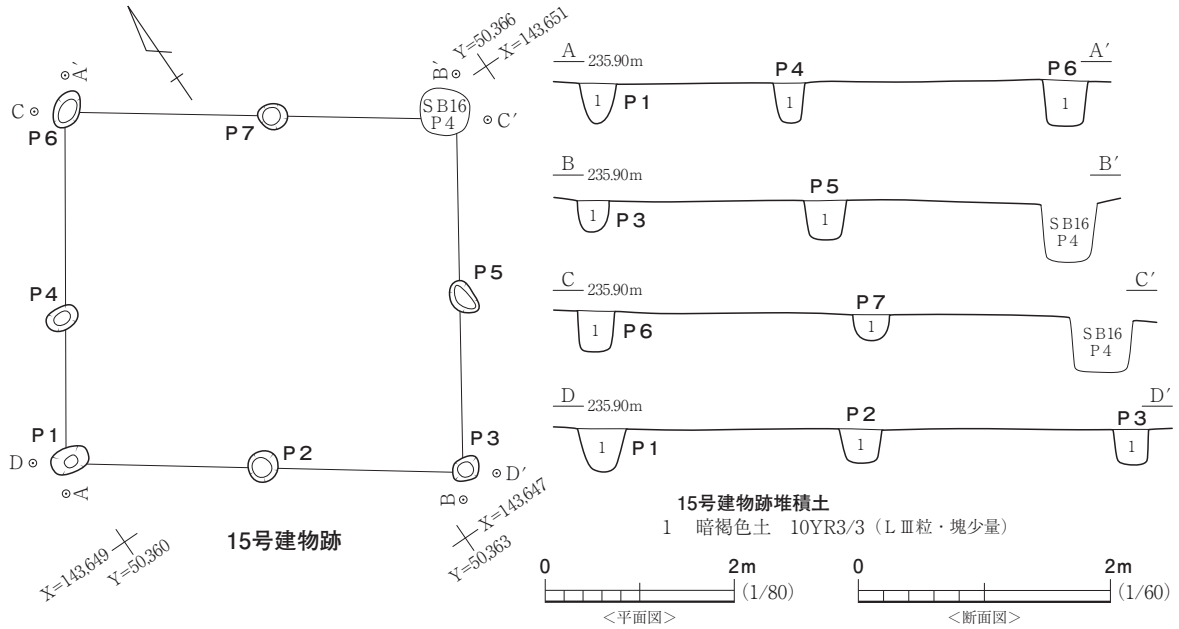


図373　15号建物跡

側の柱列を結んだ線が北から30度東を示す。

規模は、北西辺のＰ１・６の芯々間が3.8ｍ、南西辺のＰ１・３の芯々間が4.2ｍで、柱穴で囲まれた範囲の面積は15.9㎡である。柱間距離は、Ｐ１・２が1.9ｍ、Ｐ１・４が1.2ｍ、Ｐ２・３が1.5ｍ、Ｐ３・５とＰ４・６が1.8ｍ、Ｐ６・７が1.6ｍと、ばらつきがある。

柱穴の掘形は円形もしくは楕円形である。直径28～40㎝、深さは33～47㎝と、比較的規模が小さい。底面は平坦でＬⅣとみられる砂層に作られている。

堆積土は柱穴掘形堆積土のみであり、いずれも暗褐色土にＬⅢ由来に由来するとみられる小土塊が混入していた。遺構に伴うとみられる遺物は確認されなかった。検出段階では土器の細片がわずかに認められたが、本遺構と関連するかは不明である。

ま と め

本遺構は７基の柱穴で構成され、南北２間×東西２間の掘立柱建物跡である。一辺４ｍ前後と小型で、柱穴も小振りなものが多い。時期を明示する遺物は認められないが、検出面や堆積土の様相、近接する遺構との関係から奈良時代の建物跡と考えている。　（神　林）

16号建物跡　ＳＢ16

遺　　構（図374、写真286）

本遺構は、Ⅱ区Ⅰ－20・21、Ⅰ－20グリッドに位置し、標高235.8ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。北西隅のＰ４が15号建物跡と重複しているが、本遺構の方が新しいと判断した。また北側には33号住居跡が隣接する。

本遺構は６基の柱穴で構成され、構造は南北桁行２間×東西梁行１間である。平面形は方形で、方位は桁行である東側柱列を結んだ線が、北から５度東を示す。

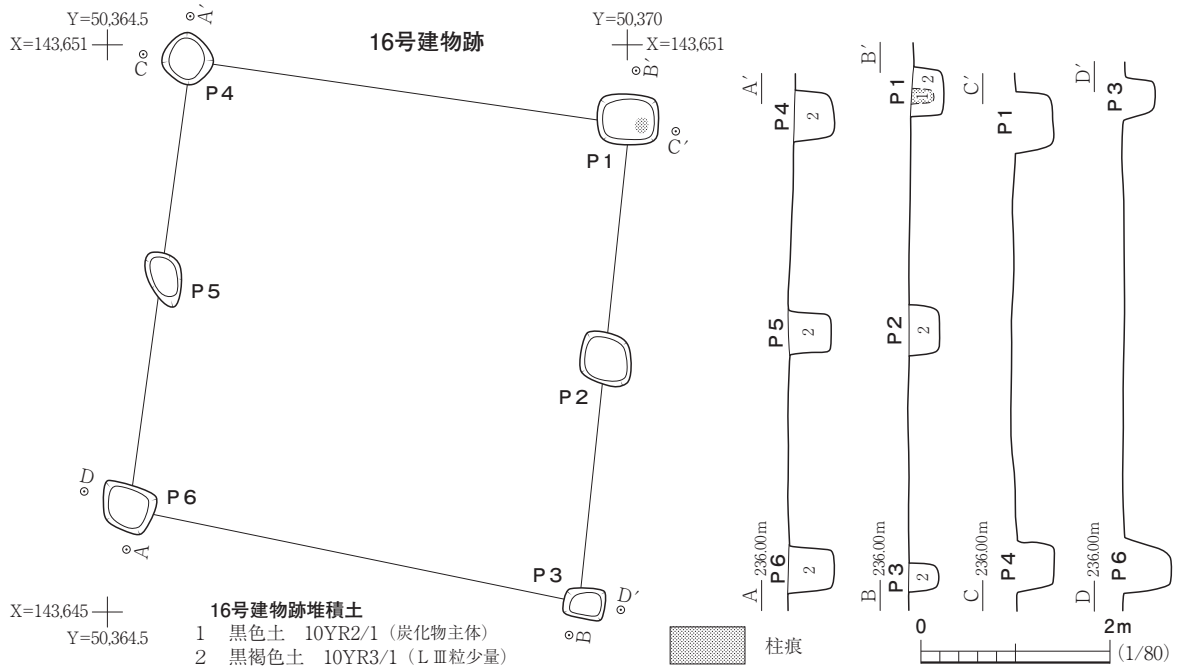


図374　16号建物跡

規模は桁行である南北方向で5.0ｍ、梁行である東西方向で4.8ｍである。柱穴で囲まれた範囲の平面積は24㎡である。柱間距離は、梁行であるＰ１・４が4.2ｍ、Ｐ３・６が4.4ｍ、桁行であるＰ１・２、Ｐ２・３、Ｐ５・６がそれぞれ2.0ｍ、Ｐ４・５が1.8ｍである。

柱穴の掘形は、楕円形もしくは隅丸方形である。直径30～64㎝、深さ20～37㎝である。柱痕跡はＰ１にのみ確認された。

堆積土は２層に分層した。ℓ１はＰ１のみに認められる炭化物主体の黒色土層で、直径20㎝ほどの柱痕跡である。Ｐ２は掘形埋土とみられる黒褐色土である。

検出時に土器の細片が出土したが、本遺構に伴うものかは不明である。

ま と め

本遺構は６基の柱穴で構成され、桁行２間×梁行１間の掘立柱建物跡である。一辺５ｍ前後と、重複する15号建物跡よりひとまわり規模が大きい。時期を明示する遺物は確認されなかったが、検出面や堆積土の様相、近接する遺構との関係から奈良時代の建物跡と考えている。　（神　林）

17号建物跡　ＳＢ17

遺　　構（図375、写真287）

本遺構は、Ⅴ区東部のＶ・Ｗ－18・19グリッドに位置する。標高236.6ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。81号住居跡の西側のＬⅡａ③～ＬⅡｂ①を検出中に南北に並ぶ複数の柱穴列を検出した。このため検出範囲を南側に広げながら進めたところ、複数の建物跡が重複していることが判明した。北側のもっとも規模の大きい建物跡を本遺構として調査した。重複する遺構は、85号住居跡、18号建物跡、52号土坑である。いずれの遺構より本遺構が新しい。隣接

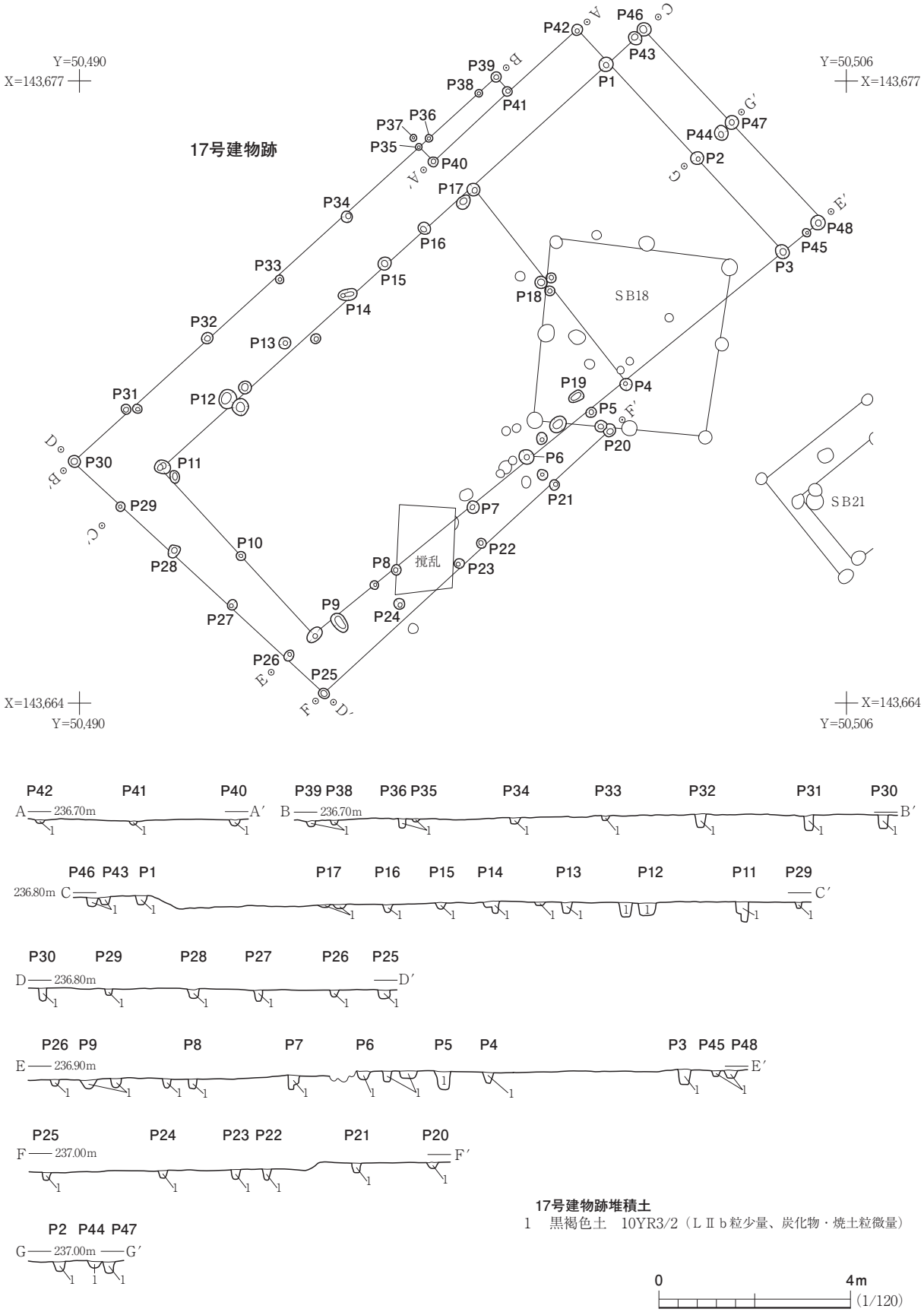

17号建物跡
Y=50,490
X=143,677
Y=50,506
X=143,677
X=143,664
Y=50,490
X=143,664
Y=50,506
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
P33
P34
P35
P36
P37
P38
P39
P40
P41
P42
P43
P44
P45
P46
P47
P48
SB18
SB21
撹乱
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
236.70m
236.80m
236.90m
237.00m
17号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒少量、炭化物・焼土粒微量）
0
4m
(1/120)

図375　17号建物跡

する20・21号建物跡と２号柱列跡とは、建物の構造が類似し、方位を同じくすることから、きわめて近い時期もしくは同時期につくられた建物跡と考えられる。

本建物跡は48基の柱穴で構成される。建物の構造は桁行６間×梁行２間の身舎の四方向に廂が付く、四面廂付の大型建物跡と判断した。方位は、南東列を基準とするなら北から東に43度傾く。

身舎の柱穴の配置は、長方形に配列されている。身舎はＰ17・18・４に間仕切りがあるものと考えられ、大きく二つの間取りに区切られる。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北東辺のＰ１～３が芯々間で5.4ｍ、北西辺のＰ１～11の柱列が芯々間で12.5ｍである。身舎の推定床面積は、66.9㎡である。廂部分は、構造が変則的である。北東側と北西側においては、身舎の柱に対して柱筋を揃えて整然と作られているのに対して、南側の柱列は身舎に並行せずに作られている。また、東側においては、柱筋も不明瞭で、Ｐ20～25で途切れてしまい、そこから北側では、廂の柱穴は検出できていない。このため、南東側においては一部廂がないものと判断した。北西側の廂には、Ｐ35～41により0.4×2.1ｍほどの長方形の区画が設けられている。玄関などの施設であろうか。廂の規模は北東側が5.4×1.1ｍである。北西側は、1.3×13.9ｍである。南西側は7.0×0.7～1.3ｍである。南東側は0.7～1.1×8.0ｍである。身舎側に廂部分を加えた面積はおおよそ100㎡になる。

柱穴の平面形は、おおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ12が、直径38㎝、深さ22㎝である。最小のＰ10が直径18㎝、深さ10㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡は検出されなかった。堆積土は、焼土粒や炭化物を含む黒褐色の単層で、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺　　物（図399）

遺物は土師器１点、陶器１点が出土し、陶器を１点図示した。本資料は撹乱を掘削した際に、柱穴も一緒に掘り下げてしまい、その際に柱穴から出土したものである。

図399－３は、常滑焼の大甕の胴部片で、輪積み痕に沿ってタタキメを残している。

ま と め

本遺構は、桁行６間×梁行２間の身舎に、変則的に四面廂が付く大型掘立柱建物跡である。身舎の推定床面積は66.9㎡で、廂を含めるとおおよそ100㎡である。近隣の20・21号建物跡と方位を同じくすることから、３棟が一つの建物群を形成していたものと推測している。所属時期は、間取りなどから中世～近世初頭頃と考えている。（中　野）

18号建物跡　ＳＢ18

遺　　構（図376、写真288）

本遺構は、Ⅴ区東部のⅤ・Ｗ－18・19グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①である。17号建物跡を検出中に、堆積土に白色粒を多く含む柱穴群を検出したため、掘立柱建物跡として調査した。17号建物跡と位置が重なるが、柱穴同士の直接の重

複関係はなく、新旧関係は不明である。

建物跡は９基の柱穴で構成される。構造は、東西２間、南北２間で、平面形は方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に６度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、東辺のＰ１～３が芯々間で3.6ｍ、南辺のＰ３～５が芯々間で3.6ｍである。Ｐ６とＰ８は北列および西列から内側と外側に外れて位置する。推定床面積は、13㎡である。

各柱穴の芯々間は、東西列のＰ３～５とＰ１・７・８が、1.65～1.95ｍで平均値は1.85ｍで、6.2尺である。南北列は、Ｐ１～３とＰ５～７が1.65～2.0ｍで平均値は1.82ｍで、6.1尺である。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ１が直径38㎝、深さ35㎝、最小のＰ８が直径27㎝、深さ18㎝である。柱穴の周壁は垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。Ｐ８以外の柱穴からは柱痕跡が確認された。柱痕跡の規模は最大でＰ１が直径14㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は炭化物を含む暗褐色土で、柱痕跡である。ℓ２はＬⅡｂ①を主体とするにぶい黄褐色土で、掘形の埋土である。

柱穴からは遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は、東西２間×南北２間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は13㎡である。

所属時期は、検出面などから奈良時代頃と推定している。　（中　野）

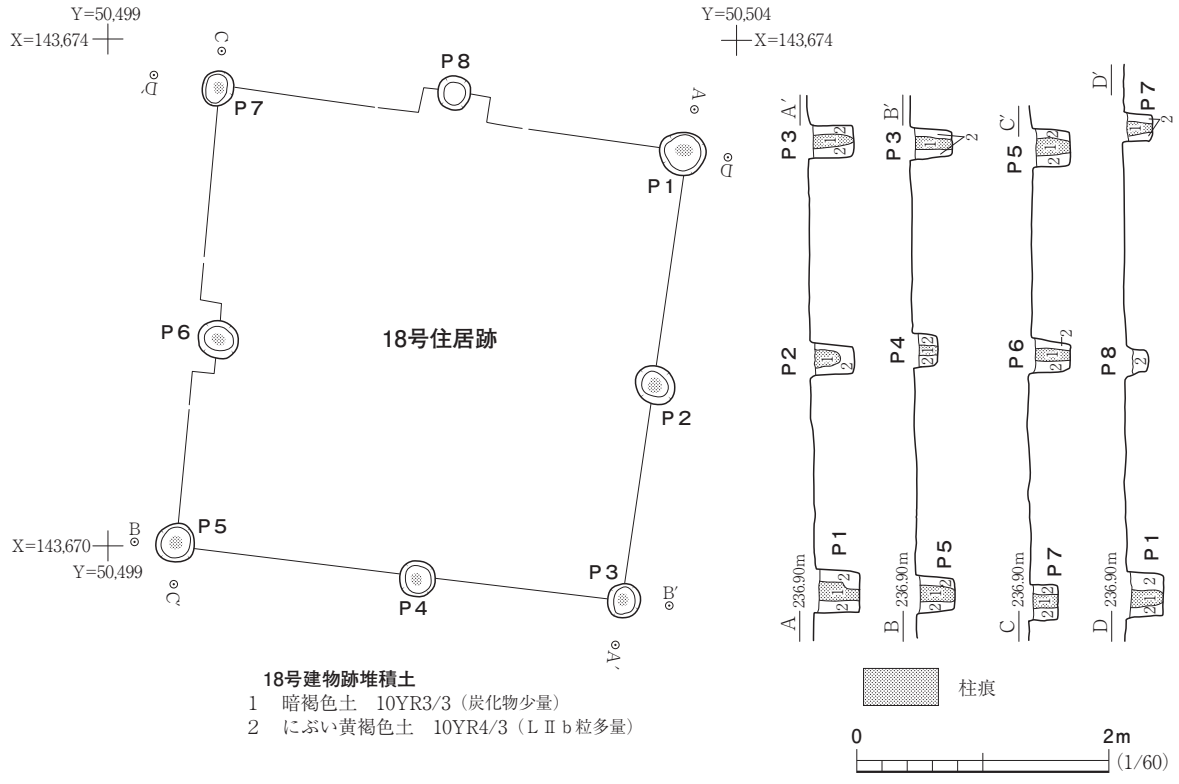


図376　18号建物跡

19号建物跡　ＳＢ19

遺　　構（図377、写真289）

本建物跡は、Ⅴ区東部、Ⅴ－21グリッドのＬⅡｂで検出された。標高236.7ｍの平坦面に位置する。他の遺構との重複はない。西に87号住居跡と17号溝跡が、北東に22号建物跡が位置する。

ＬⅡｂ上面で、方形に配置された９基の柱穴を確認し、掘立柱建物跡として調査した。北西隅の柱穴をＰ１とし、以下、時計回りにＰ２～９とした。

南北に長い長方形に柱穴を配置した２間×２間の掘立柱建物跡で、東辺は３間であることから、東側にこの建物の入り口があったと考えられる。規模は、東西がＰ６～９の芯々間で3.5ｍ、南北がＰ３～６の芯々間で4.4ｍである。西辺は北から16度東に傾く。

各柱穴の平面形はいずれも隅丸方形で、四隅のＰ１・３・６・８の平面規模が一回り大きい他、南辺中央のＰ７が四隅の柱と同大で一辺35～45㎝、四隅以外の柱穴は一辺18～25㎝である。検出面からの深さは22～32㎝で、いずれの壁も垂直に近い急な角度で立ち上がる。Ｐ２を除いて柱

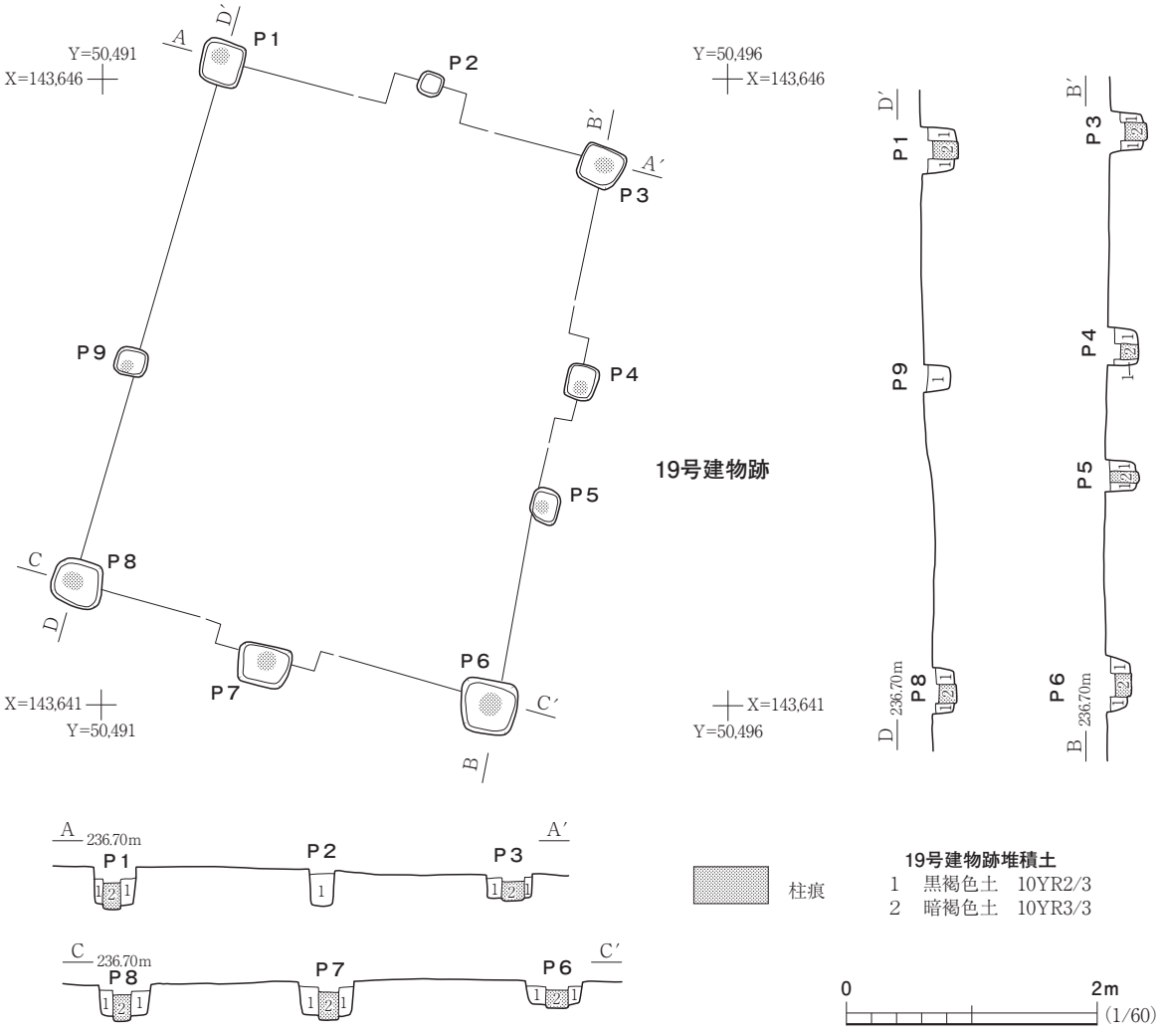


図377　19号建物跡

痕跡が確認された。掘形の堆積土は黒褐色土で、柱痕跡は暗褐色土である。

遺物は、柱穴内や周辺から出土しなかった。

ま と め

平面形が南北に長い２間×２間の掘立柱建物跡で、東辺が３間あることから東側に入り口のあったことが想定される。出土遺物はないものの、西側に位置する87号住居跡と検出面を同じくすることや、建物の方位がほぼそろっていることなど、これと関係の深い建物跡である。このように考えてよければ、本建物跡は奈良時代、８世紀に位置づけられる。（青　山）

20号建物跡　ＳＢ20

遺　　構（図378、写真290）

本遺構はⅤ区東部のＵ・Ｗ－19・20グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。17号建物跡の南東側のＬⅡａ③～ＬⅡｂ①を検出中に複数の柱穴列を検出した。これを２棟並ぶ建物跡と判断し、南西側を本遺構とし、北東側を21号建物跡として調査した。重複する遺構はない。本建物跡の北東に２号柱列跡が位置する。

建物跡は26基の柱穴で構成される。建物の構造は、東西桁行３間×南北梁行２間の身舎の、南西と北東に廂の付く、二面廂付の掘立柱建物跡と判断した。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約50度傾く。

身舎の柱穴の配置は、長方形に配列されている。身舎はＰ12・13・４に間仕切りがあるものと考えられ、南西と北東に大きく二つの間取りに区切られる。各隅柱を基準とした建物跡の規模は、Ｐ１～３が芯々間で3.9ｍ、Ｐ１～８が芯々間で5.0ｍである。身舎の推定床面積は19.5㎡である。

庇部分は、構造が変則的である。北西側においては、身舎の柱に対して柱筋を揃えて整然とつくられているのに対して、南東側は身舎に並行せずにつくられている。廂は北側が東西5.5ｍ、南北0.8ｍである。西側は、やや列にばらつきが目立つが、東西5.6ｍ、南北0.6～0.8ｍである。身舎に廂を加えた面積はおおよそ31㎡になる。

柱穴の平面形は、円形ないし長楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ３が、直径68㎝、深さ12㎝である。最小のＰ10が、直径15㎝、深さ16㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡は、検出されなかった。堆積土は、焼土粒や炭化物を含む黒褐色土の単層で、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺物は、柱穴内や周辺から出土しなかった。

ま と め

本遺構は、東西３間、南北２間の身舎の、南西と北東二面に廂が付く掘立柱建物跡である。身舎の推定床面積は、19.5㎡で、庇を含めるとおおよそ31㎡である。近隣の17・21号建物跡、２号柱列跡と方位を同じくすることから、３棟が一つの建物群を形成していたものと推測している。時期は、間取りなどから中世～近世初頭頃と考えている。（中　野）

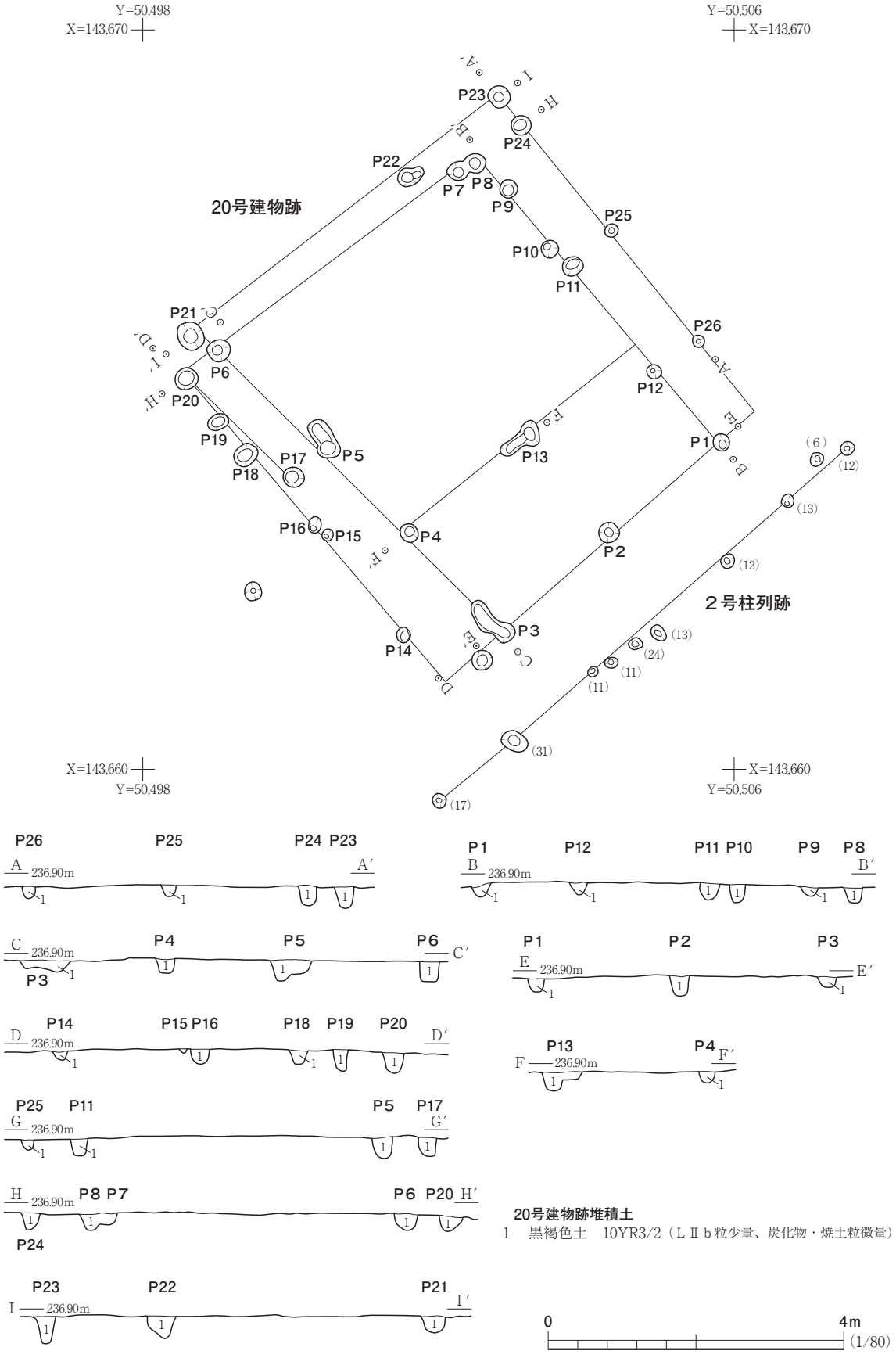


図378　20号建物跡・２号柱列跡

21号建物跡　ＳＢ21

遺　　構（図379、写真291）

本遺構は、Ⅴ区東部のＷ－18・19グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。重複する遺構はない。

建物跡は11基の柱穴で構成される。建物の構造は、南北１間×東西１間の身舎の三方に廂の付く三面廂付建物跡と判断した。方位は、北西列を基準とするなら北に対して東に40度傾く。

身舎の柱穴の配置は、方形に配列されている。各隅柱を基準とした建物跡の規模は、南東辺のＰ１・２が芯々間で1.95ｍ、Ｐ１・５が芯々間で1.75ｍである。身舎部の推定床面積は、3.4㎡である。西側の廂の規模は、東西が0.7ｍ、南北が2.75ｍである。

柱穴の平面形は、円形ないし長楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ５が、直径30㎝、深さ25㎝である。最小のＰ７が直径19㎝、深さ８㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ４で検出され、直径は10㎝である。

堆積土は、２層に分層した。ℓ１は焼土粒や炭化物を含む黒褐色土で、柱痕跡である。ℓ２はにぶい黄褐色土である。掘形埋土、または柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺構内から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西１間、南北１間の身舎に、三面の廂が付く掘立建物跡である。身舎の推定床面積は3.4㎡で、廂を含めるとおおよそ6.75㎡である。近隣の17・20号建物跡、２号柱列跡と方位が同じことから、一連の建物群を形成してたものと推測している。所属時期は、間取りなどから中世～近世初頭頃と考えている。　（中　野）

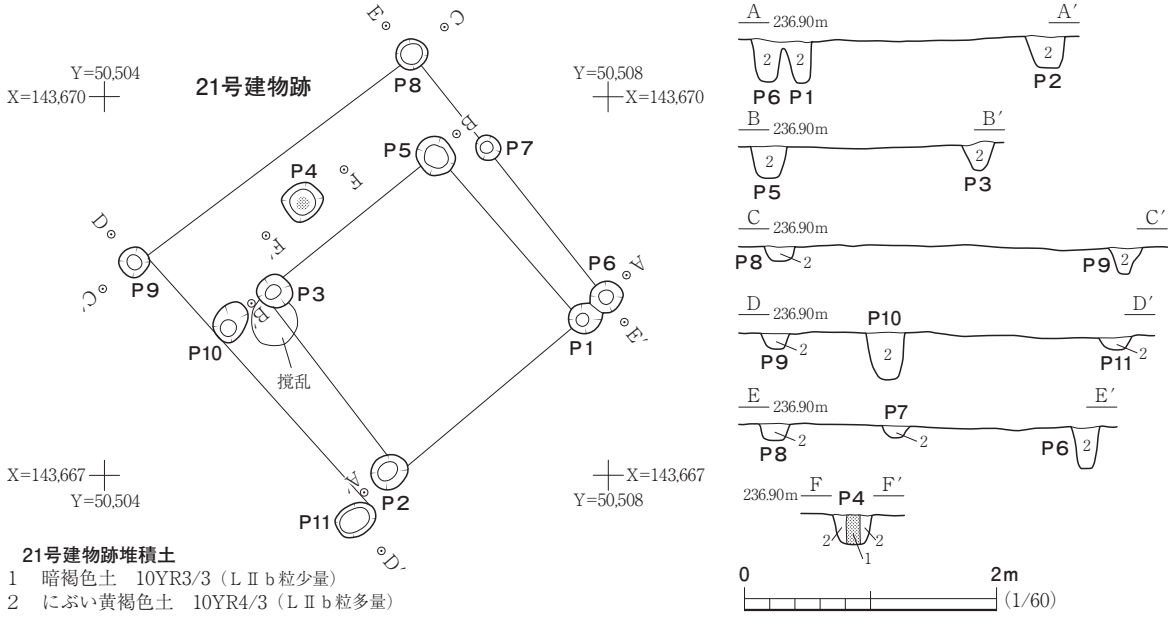


図379　21号建物跡

22号建物跡　ＳＢ22

遺　　構（図380、写真292）

本遺構は、Ⅴ区東部のＷ－20・21グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①である。Ｗ－20グリッドで撹乱の断面を利用して土層を観察していた際に柱穴を検出した。柱痕跡の残る比較的規模の大きな柱穴であることから、周辺を精査したところ、同規模の柱穴が４基方形に配列していることが明らかになったため、本遺構として調査した。

重複する遺構はないが、南西約５ｍに19号建物跡が位置する。

建物跡は５基の柱穴で構成される。構造は南北２間、東西１間で、平面形は東西に長い長方形である。方位は東列を基準とするなら北に対して東に８度傾く。

各隅柱を基準とした規模は、北辺のＰ１・２が芯々間で5.0ｍ、東辺のＰ２・３が芯々間で4.0ｍである。東側南北列では、Ｐ２とＰ３の間に１基柱穴があるはずだが、検出できなかった。推定床

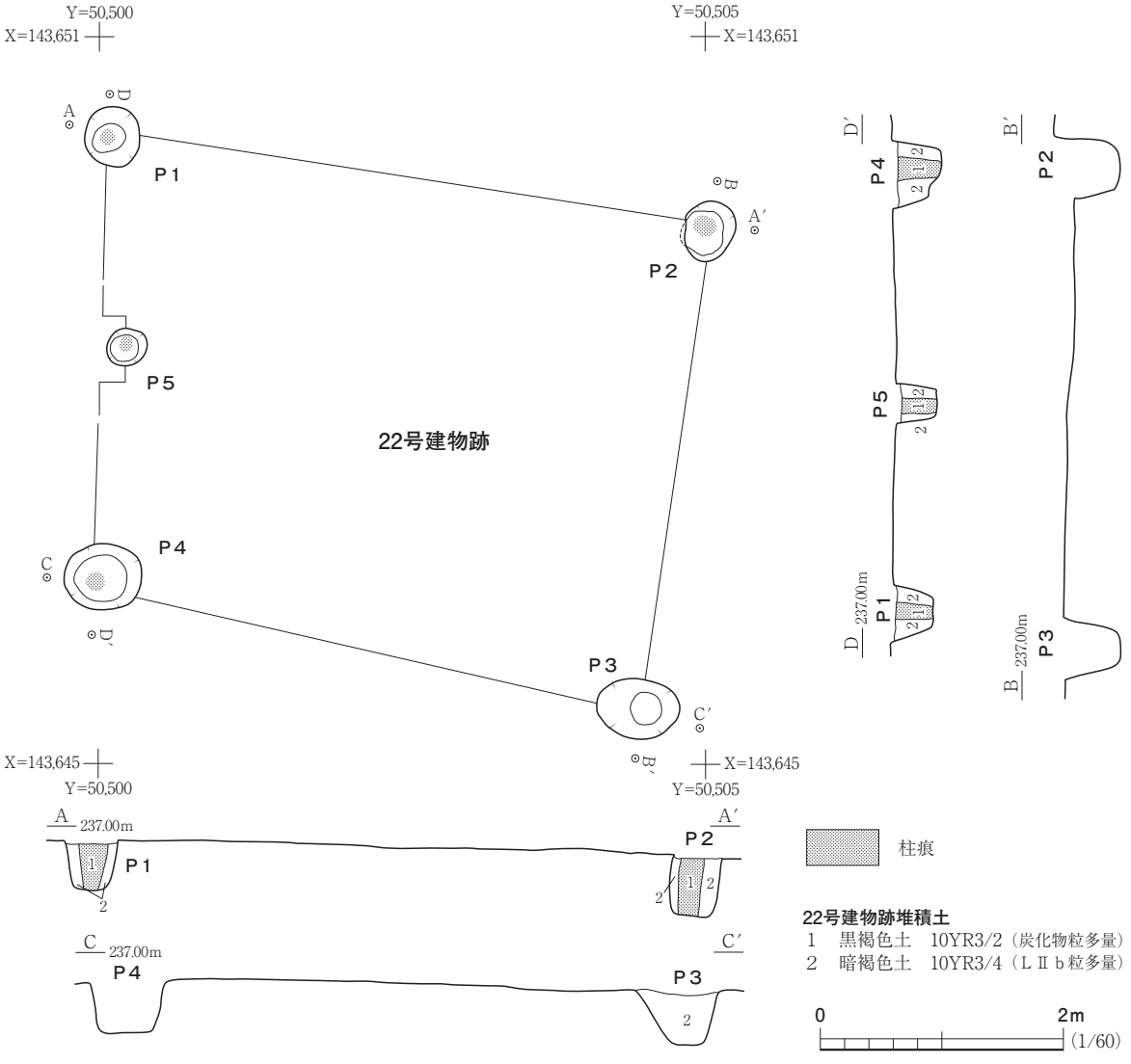


図380　22号建物跡

面積は20㎡である。

各柱穴の平面形は円形か楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ３が70×50㎝、深さ40㎝である。最小のＰ５が、直径30㎝、深さ33㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。Ｐ３以外の柱穴では柱痕跡が確認された。柱痕跡の規模は、最大のＰ２が直径18㎝である。

柱穴内の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は炭化物を多量に含む黒褐色土で、柱痕跡である。ℓ２はＬⅡｂ粒を多く含む暗褐色土で柱の埋土、もしくは抜き取り後に堆積した土である。

遺物は柱穴内や周辺から出土しなかった。

ま と め

本遺構は、南北２間、東西１間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、20㎡である。

所属時期は、検出面や出土遺物などから奈良時代頃と推定している。　（中　野）

23号建物跡　ＳＢ23

遺　　構（図381、写真293）

本遺構は、Ⅴ区のＵ－18・19グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①・②である。Ｕ－18の検出中に南北に並ぶ柱穴を３基検出したことから、周辺を精査したところ、西側で同規模の柱穴を５基検出したため、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構はないが、南西側約７ｍに65号住居跡が位置する。

建物跡は７基の柱穴で構成される。構造は東西２間、南北２間で、平面形は方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に11度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１～３が芯々間で4.8ｍ、東辺のＰ３～５が芯々間で4.8ｍである。西側南北列では、Ｐ１とＰ７の間に柱穴が１基あるはずだが、撹乱のため検出できなかった。南側の東西列は柱穴が一つ多く３間になっており、Ｐ６・８の間に入り口があったものと推定している。推定床面積は、23㎡である。

柱穴の平面形は円形もしくは楕円形である。規模は、最大のＰ４が、78×63㎝、深さ65㎝である。最小のＰ８が、直径35㎝、深さ30㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。Ｐ８以外の柱穴からは、柱痕跡が確認された。柱痕跡の規模は、最大Ｐ２が直径32㎝である。

柱穴の堆積土は、３層に区分した。ℓ１は暗褐色土で、柱痕跡である。ℓ２・３はＬⅡｂ粒を含む暗褐色砂質土で柱穴の掘形埋土、もしくは抜き取り後に堆積した土である。

遺物は土師器片が２点出土した。小片のため図示していないが、甕の胴部片で、奈良時代から平安時代のものと考えている。

ま と め

本遺構は、南北２間×東西２間の掘立柱建物跡と考えられる。南側東西列に入口があったものと

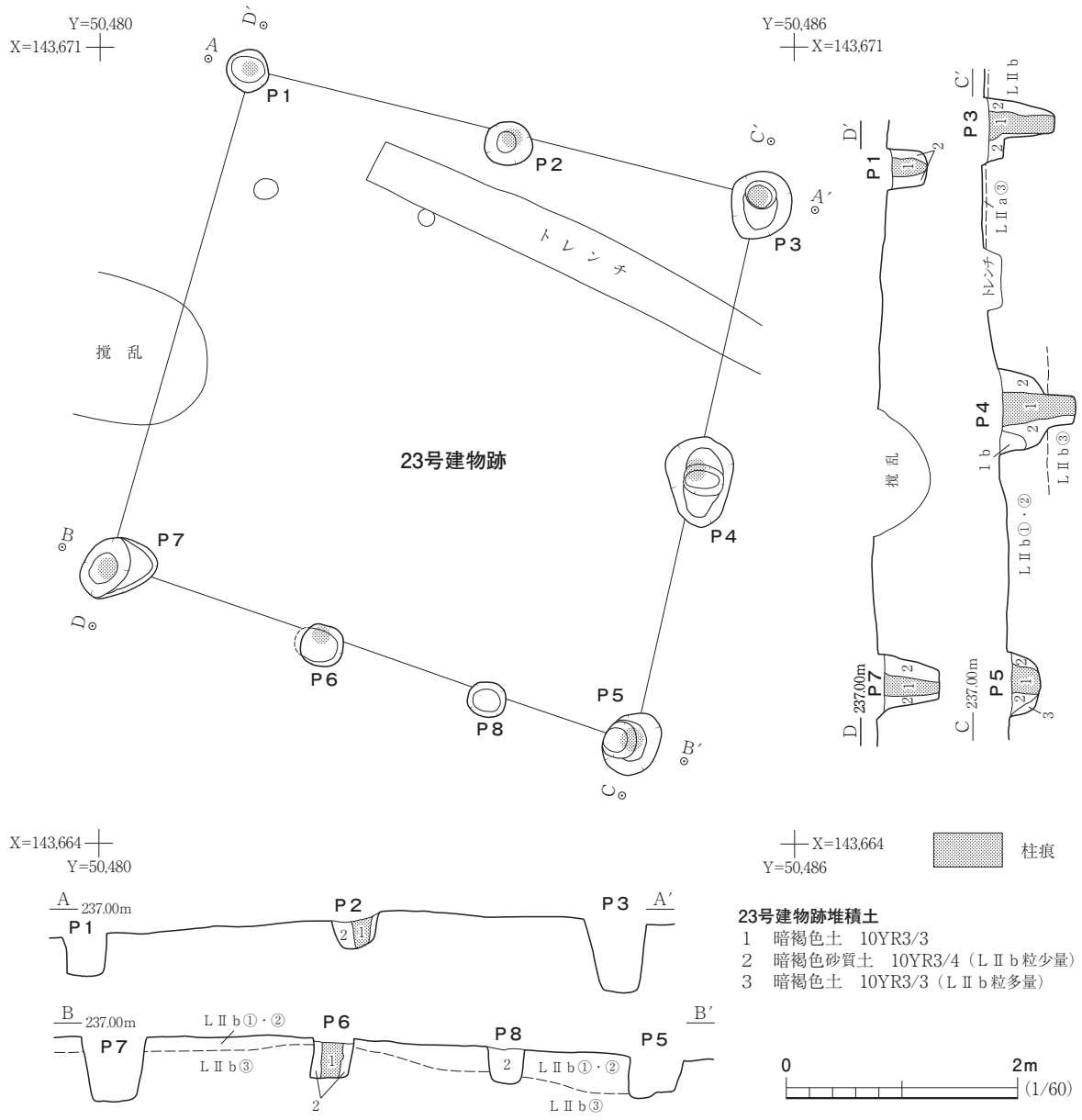


図381　23号建物跡

推測している。推定床面積は、23㎡である。所属時期は、周辺遺構との関係や出土遺物などから奈良時代と推定している。（中　野）

24号建物跡　ＳＢ24

遺　　構（図382、写真294）

本遺構は、Ⅴ区東部のＷ－19グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①・②である。Ｗ－19の検出中に、周辺の柱穴群とは堆積土の異なる方形に並ぶ柱穴を４基検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構はない。

建物跡は４基の柱穴で構成される。構造は南北１間、東西１間で、平面形は方形である。方位は、東列を基準とするなら真北を示す。各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１・２が

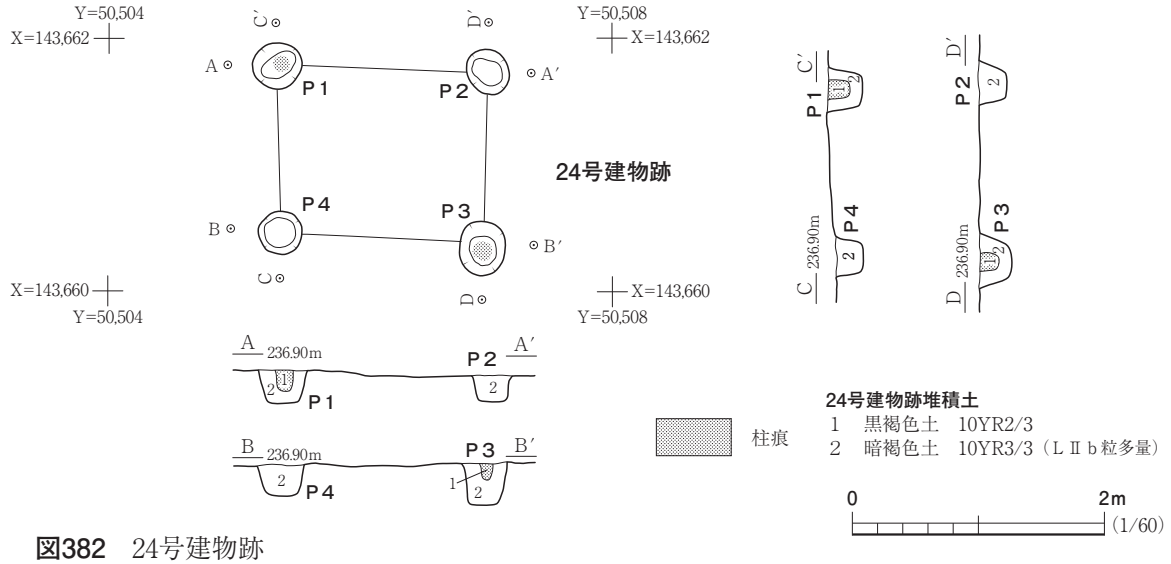


図382　24号建物跡

芯々間で1.7ｍ、東辺のＰ２・３が芯々間で1.5ｍである。推定床面積は約2.4㎡である。

柱穴の平面形は円形である。規模は、最大のＰ３が、直径43㎝、深さ33㎝である。最小のＰ８が、直径33㎝、深さ24㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。Ｐ１・３からは柱痕跡が確認された。柱痕跡の規模は、最大のＰ１が直径14㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は黒褐色土で、柱痕跡である。ℓ２・３はＬⅡｂ粒を含む暗褐色土で柱穴の掘形埋土、もしくは抜き取り後に堆積した土である。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北１間×東西１間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、約2.4㎡である。今回の調査で検出したものの中では、もっとも小型の建物跡である。機能は特定できていない。所属時期は、周辺遺構との関係などから奈良時代頃と推定している。　（中　野）

25号建物跡　ＳＢ25

遺　　構（図383、写真295）

本遺構は、Ⅲ区南部のＧ・Ｈ－25・26グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。Ｈ－25グリッドの検出中に多数の柱穴群を検出した。柱穴群は西側へ広がり、東西方向に主軸をもつ柱穴列であることを確認したことから、本遺構として調査した。重複する遺構はないが柱穴群の範囲に位置する。

建物跡は21基の柱穴で構成される。構造は、南北桁行３間×東西梁行２間の身舎を、東西４間×南北３間の柱列が囲っている。調査段階においては、一棟の四面廂の付く掘立柱建物跡として扱ったが、身舎の主軸が北に対して45度西に傾くのに対して、廂部分は50度西に傾くことから、若干のズレが存在する。このため、身舎、廂がそれぞれが別の掘立柱建物跡の可能性も否定できない。しかし、直接的な切り合い関係もなく、重複する根拠も乏しいことから、四方に廂が付く四面

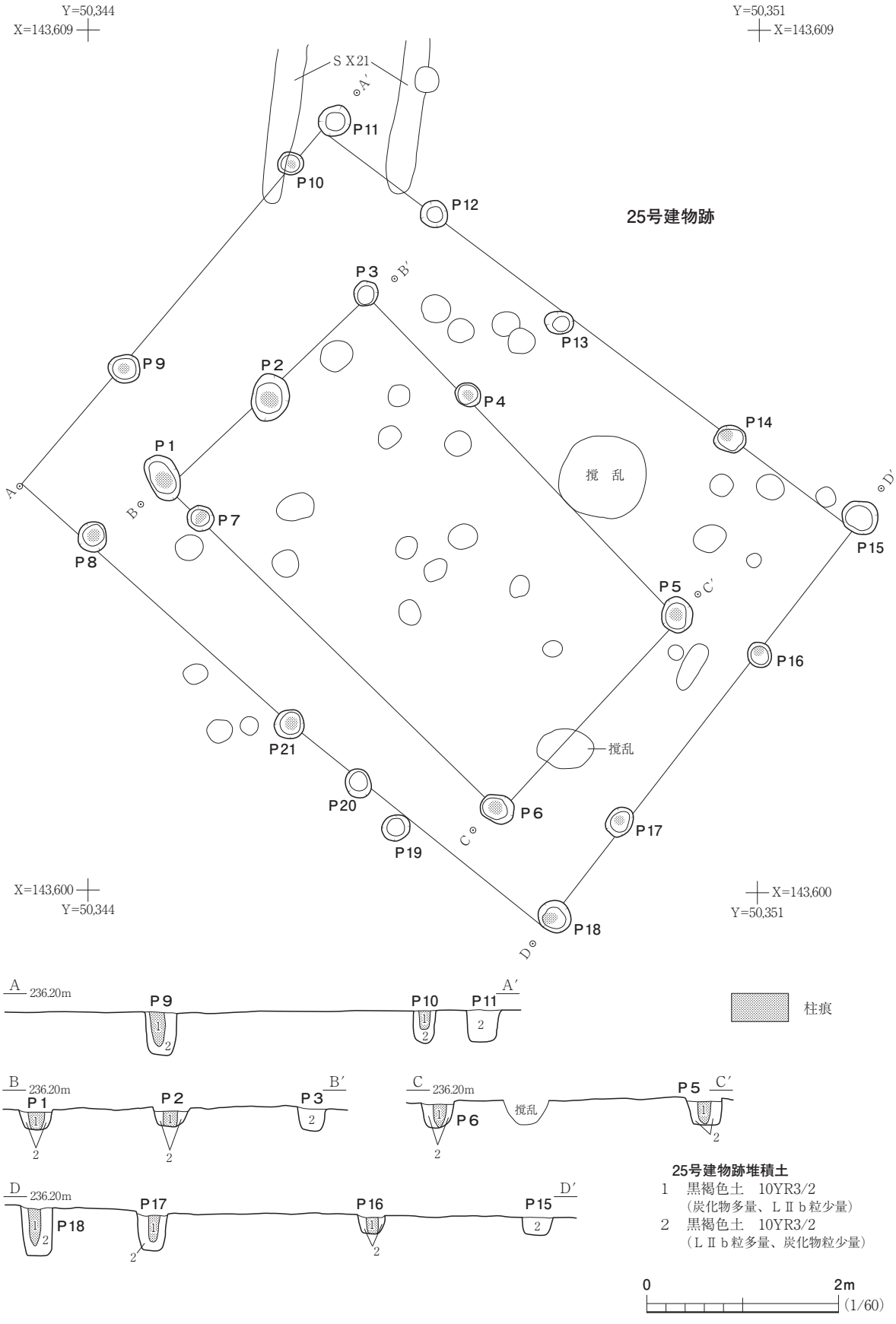

Y=50,344
X=143,609
Y=50,351
X=143,609
S X21
A′
P11
P10
P12
25号建物跡
P3
B′
P13
P9
P2
P4
P14
P1
搅　乱
D′
A
B
P7
P15
P8
P5
C′
P16
P21
搅乱
P20
P6
P17
P19
C
D
P18
X=143,600
Y=50,344
X=143,600
Y=50,351
A
236.20m
A′
B
B′
C
C′
D
D′
柱痕
25号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（炭化物多量、ＬⅡｂ粒少量）
2　黒褐色土　10YR3/2
（ＬⅡｂ粒多量、炭化物粒少量）
0
2m
(1/60)

図383　25号建物跡

廂建物跡として取り扱った。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎の北西辺のＰ１～３が芯々間で2.9ｍ、南西辺のＰ１～６が芯々間で5.0ｍである。推定床面積は、14.5㎡である。廂のＰ11～15の柱間が6.9ｍ、Ｐ15～18の柱間が4.8ｍである。廂の推定面積は、33㎡である。

柱穴の平面形は、円形ないし楕円形である。柱穴の規模は、最大のＰ２が、50×35㎝、深さ16㎝である。最小のＰ10が、直径25㎝、深さ34㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。ほとんどの柱穴から柱痕跡が確認された。柱痕跡の規模は、最大のＰ１が直径16㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は炭化物を多く含む黒褐色土で、柱痕跡である。ℓ２はＬⅡｂ粒を多く含む黒褐色土で、柱穴の掘形埋土もしくは抜き取り後に堆積した土である。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、南北３間、東西２間の身舎を、東西４間、南北３間の廂が囲っている構造である。調査段階においては、四面廂の建物跡として扱ったが、身舎の主軸が北に対して45度西に傾くのに対して、廂部分は50度西に傾くことから、若干のズレが存在する。このため、身舎、廂がそれぞれが別の掘立柱建物跡の可能性も否定できない。所属時期は、周辺遺構との関係や出土遺物などから中世初頭の12世紀末から13世紀頃と推定している。（中　野）

26号建物跡　ＳＢ26

遺　　構（図384、写真296）

本遺構は、Ⅲ区南部のＥ・Ｆ－24・25グリッドに位置する。標高236.1ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。遺構周辺は、中世の遺構の集中区にあたる。重複する遺構は、74号住居跡、27・30号建物跡である。本遺構が、74号住居跡より新しく、27号建物跡より古い。30ａ・ｂ号建物跡とは、東側が一部重なることから、きわめて近い時期につくられた建物跡と考えられる。

本建物跡は24基の柱穴で構成される。構造は、東西桁行３間、南北梁行１間の身舎の四方に廂の付く四面廂付の建物跡と判断した。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約40度傾く。

身舎・廂ともに柱穴の配置は、長方形に配列される。廂の柱穴列は、間隔や柱筋にばらつきが目立つ。東側柱列は身舎と並行せず、ややいびつになっている。この部分は30号建物跡と接することから、意識して、柱をずらしているものと考えられる。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎で、北西辺のＰ１・２が芯々間で3.9ｍ、北東辺のＰ２～５が芯々間で6.9ｍである。身舎の推定床面積は、26.9㎡である。廂は、北西辺のＰ９～12で5.6ｍ、北東辺のＰ12～18が9.0ｍである。身舎と廂を加えた推定面積は、50.4㎡である。各柱穴の芯々間は、身舎の部分で、Ｐ１・２が、3.9ｍで、13尺である。南側東西列のＰ６～８・１が、2.1～

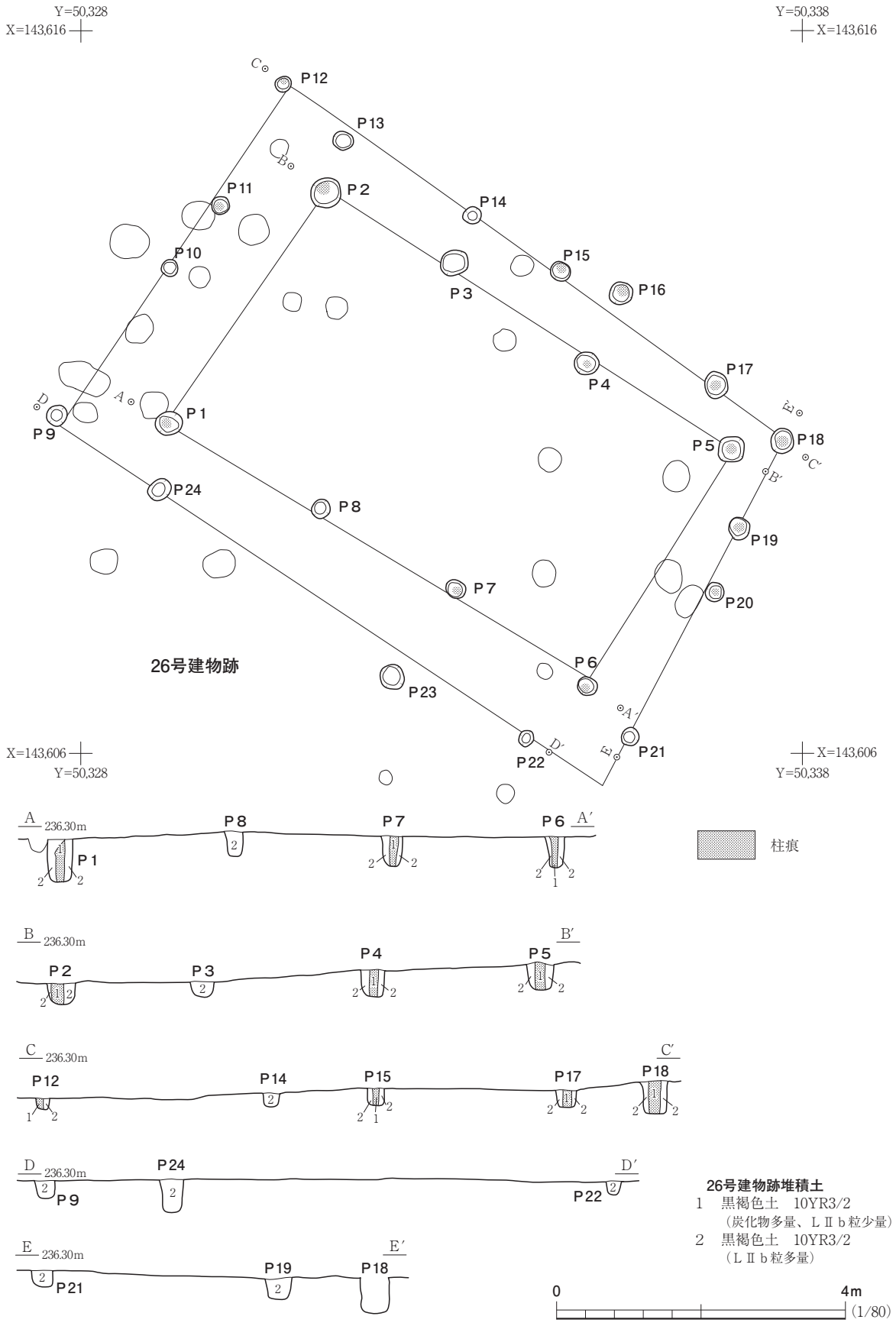

Y=50,328
X=143,616
Y=50,338
X=143,616
P12
P13
P11
P2
P14
P10
P15
P16
P3
P17
P4
P1
P18
P9
P5
P24
P8
P19
P7
P20
26号建物跡
P6
P23
P21
P22
X=143,606
Y=50,328
X=143,606
Y=50,338
A 236.30m
P8
P7
P6
A′
P1
B 236.30m
B′
P2
P3
P4
P5
C 236.30m
C′
P12
P14
P15
P17
P18
D 236.30m
P24
D′
P9
P22
E 236.30m
E′
P19
P18
P21
柱痕
26号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（炭化物多量、ＬⅡｂ粒少量）
2　黒褐色土　10YR3/2
（ＬⅡｂ粒多量）
0
4m
(1/80)

図384　26号建物跡

2.45ｍである。平均すると2.25ｍで7.5尺である。

柱穴の平面形は、おおむね円形である。身舎・廂ともに大きさに差はみられない。柱穴の規模は、最大のＰ２が、直径44㎝、深さ46㎝である。最小のＰ22が、直径22㎝、深さ13㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ１・２・４～７・11・12・15～20で確認された。柱痕跡は最大のものがＰ22で、直径が18㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は黒褐色土で柱痕跡である。ℓ２は黒褐色土で、掘形の埋土および柱の抜き取り痕と考えている。本遺構から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、東西３間、南北１間の身舎の四方に廂の付く、四面廂付の建物跡である。身舎の推定床面積は、26.9㎡で、廂を含めると50.4㎡である。柱穴間は、身舎で平均2.25ｍで、尺に直すと7.5尺である。主屋として機能したものと考えられる。近隣の30号建物跡と接することから、これらの２棟で一つの建物群を形成していたものと推測している。時期は、重複関係などから中世初頭の13世紀頃と考えている。（中　野）

27号建物跡　ＳＢ27

遺　　構（図385、写真297・306）

本遺構は、Ⅲ区南部のＥ－24・25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。周辺は、古墳時代後期から中世の遺構の集中区にあたる。重複する遺構は、96号住居跡、12・26・28号建物跡、43号土坑である。本遺構が、96号住居跡、26号建物跡より新しく、28号建物跡より古い。43号土坑は直接の切り合いが無く不明である。42号土坑については後述するが、本遺構に伴う施設と考えている。12号建物跡とは、東側の遺構範囲が一部接することから、きわめて近い時期に作られた建物跡と考えられる。

建物跡は15基の柱穴で構成される。構造は東西桁行４間、南北梁行２間で身舎東側に廂が付く一面廂付の建物跡である。方位は、東列を基準とするなら北から東に15度傾く。

身舎・廂ともに柱穴の配置は、長方形に整然と配列され、身舎と廂の柱穴は柱筋を揃えて対応するように建てられている。各隅柱を基準とした建物跡の規模は身舎で、北辺のＰ１・２が芯々間で4.0ｍ、東辺のＰ２～６が芯々間で8.7ｍである。身舎部の推定床面積は、34.8㎡である。廂の長さは、東辺の南北列のＰ12～15で6.2ｍ、Ｐ３～12が1.1ｍである。身舎と庇を加えた推定面積は、41.6㎡である。

柱穴の芯々間は、身舎で、東側南北列のＰ２～６が、2.0～2.3ｍである。平均すると2.19ｍで、7.3尺である。西側南北列のＰ８～11・１が、2.1～2.3ｍである。平均すると2.18ｍで、7.25尺である。廂は北側の東西列は、Ｐ３・12間が1.1ｍである。それ以外のＰ12～15までは1.9～2.25ｍである。平均すると2.05ｍで6.8尺となる。

柱穴の平面形は円形が多いが、Ｐ４だけが東西に長い楕円形である。身舎の柱穴に比べ、廂の方

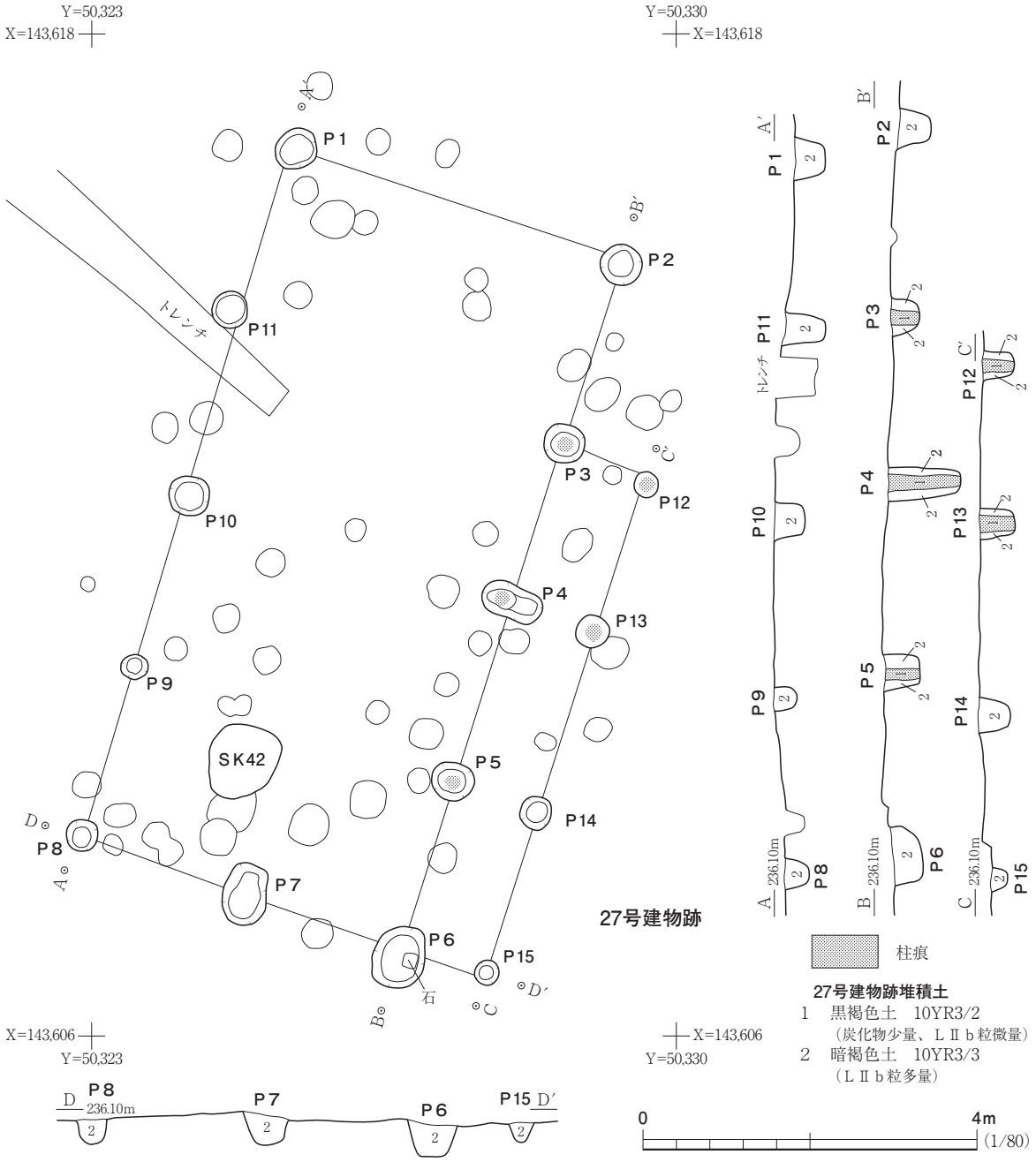


図385　27号建物跡

がやや小ぶりな印象を受ける。各柱穴の規模は、最大のＰ６が直径76㎝、深さ36㎝である。最小のＰ15が直径22㎝、深さ19㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ３～５・12・13で確認された。最大のものはＰ３で、直径18㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。ℓ２は掘形の埋土および、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

本遺構の身舎内部にあたる位置に42号土坑が存在する。この土坑は浅い掘り込みで、堆積土には焼土塊・炭化物・礫が多量に含まれている。焼土化した範囲も認められることから、火を焚く行為が行われたことが想定され、本遺構に伴う火処と考えている。

遺物は南側に位置するＰ１・２から、それぞれ銭貨が１点出土した。

遺　　物（図399、写真448）

銭貨２点を、図399に示した。図399－５は、Ｐ１から出土した皇宋通宝（1039年初鋳）である。６はＰ２から出土した治平元宝（1064年初鋳）である。

ま と め

本遺構は、東西桁行４間、南北梁行２間の身舎の、東側に廂の付く一面廂付建物跡である。身舎の推定床面積は34.8㎡で、廂を含めると41.6㎡である。柱穴間は、身舎が平均2.18ｍで、尺に直すと7.3尺である。12号建物跡を主屋と考えるなら、それに付属する副屋としての機能が考えられる。また身舎内部に位置する42号土坑は、本遺構に伴う施設の可能性が高い。所属時期は、出土した銭貨と重複関係などから中世初頭の12世紀末～13世紀頃と考えている。　（中　野）

28ａ・ｂ号建物跡　ＳＢ28ａ・ｂ

遺　　構（図386・387、写真298）

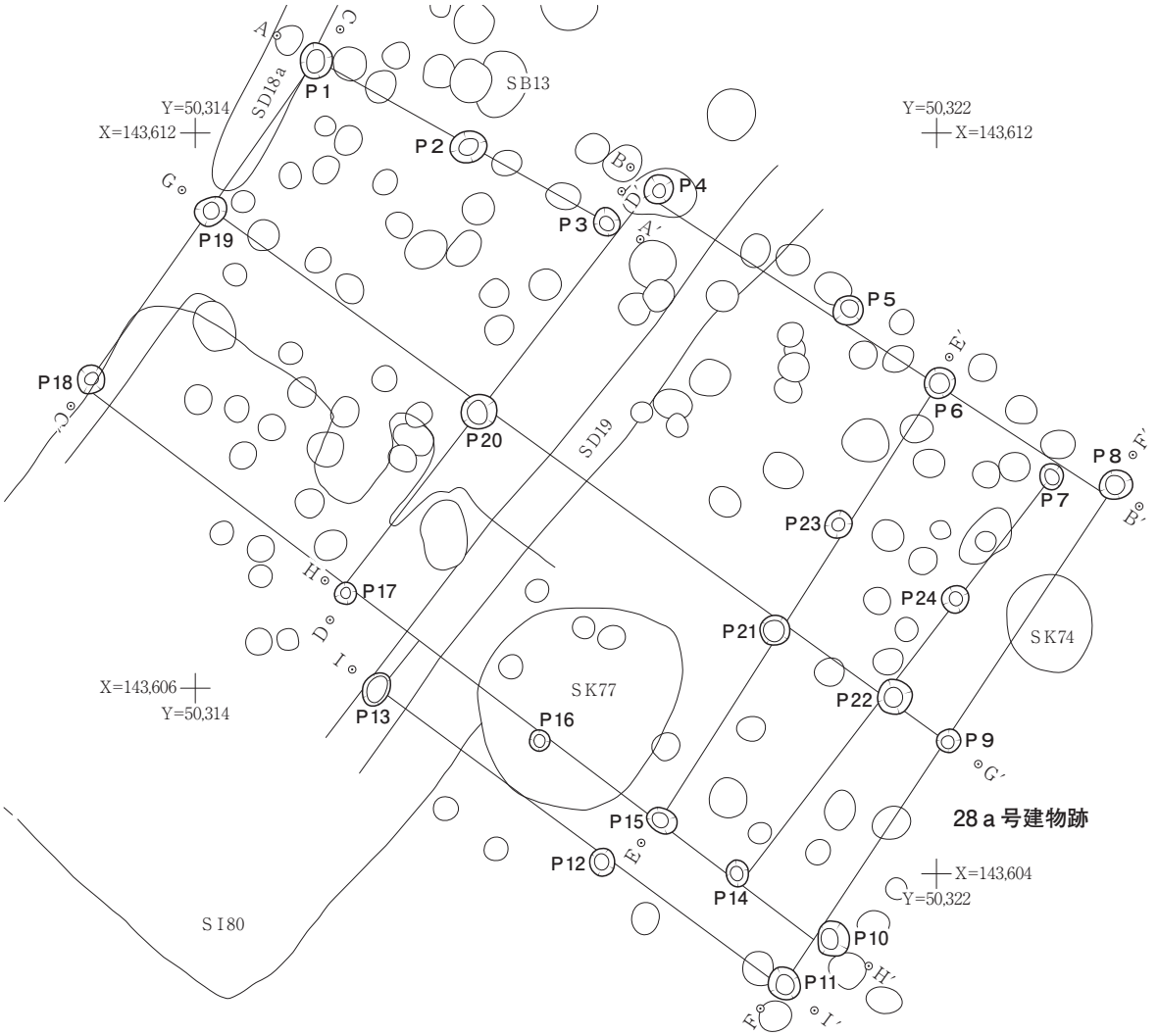
本遺構は、Ⅲ区東部のＤ・Ｅ－24・25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。Ｄ・Ｅ－24・25の検出時に多数の柱穴群を検出した。柱穴群はすべて12号建物跡などの中世と考えられる建物群とは異なる土質であることから、時期の異なる柱穴群として扱った。柱穴の数から複数の柱穴列や建物跡が含まれるものと考えられるが、２棟の建物跡を復元した。３間×２間の大型のものを28ａ号建物跡とし、やや主軸をずらして作られている１間×２間のものを28ｂ号建物跡とした。重複する遺構は80号住居跡、13・27号建物跡、18・19号溝跡、74・77号土坑である。重複関係は、74号土坑を除くすべての遺構を本遺構が壊していることから、いずれの遺構より新しいと考えられる。

28ａ号建物跡は、24基の柱穴で構成され、方位は北に対して30度西に傾く。構造は東西桁行５間、南北梁行２間の総柱の建物跡に、狭い廂が南面に１間×２間、東面に１間×２間で取り付く構造と考えられる。身舎はＰ３～17とＰ６～15を結ぶ南北とＰ19～22を結ぶ東西に間仕切りがあるものと考えられ、６つの区画に区切られるものと考えている。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎が、西辺のＰ１～18が芯々間で4.3ｍ、東辺のＰ８～10が芯々間で6.5ｍである。南辺のＰ14～18が芯々間で8.8ｍである。身舎の推定床面積は、52.8㎡である。南側の廂の規模は、Ｐ11～13の東西の柱間が5.4ｍ、Ｐ10・11の柱間が0.7ｍである。東側の廂の規模は、Ｐ８～10の南北の柱間が5.8ｍ、Ｐ10・14の東西の柱間が1.2ｍである。身舎と廂の面積を合わせると66㎡である。

柱穴の平面形は円形である。規模は、最大のＰ20が直径40㎝、深さ30㎝である。最小のＰ16が、直径21㎝、深さ20㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡は確認できなかった。

柱穴の堆積土は、炭化物を微量に含む、きめの細かいにぶい黄褐色土である。28号建物跡の周



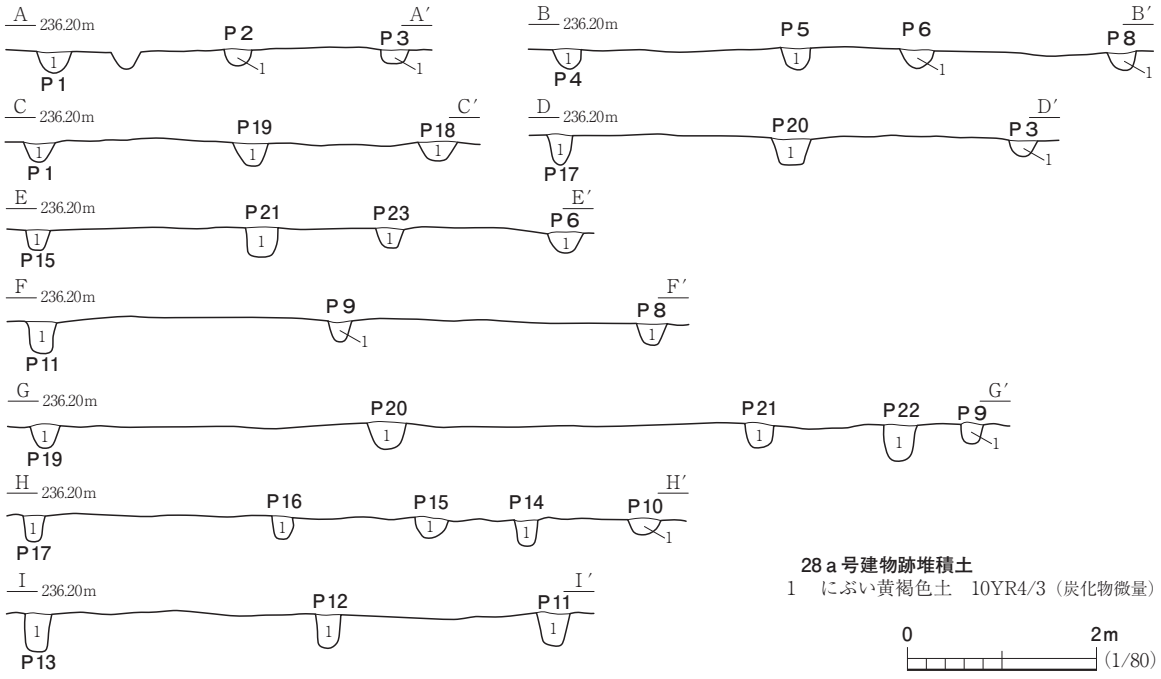


図386　28ａ号建物跡

辺柱穴群は同様な堆積土であり、近い時期につくられたものと考えている。

遺物は出土していない。

28ｂ号建物跡は、７基の柱穴で構成され、方位は北東辺が北に対して40度西に傾く。構造は東西桁行２間、南北梁行１間である。周囲の柱穴群の中にはこれ以外にも柱穴が含まる可能性があるが、明確なもののみ記載した。

各隅柱を基準とした規模は、北西辺のＰ１・７が芯々間で3.8ｍ、南東辺のＰ３・４が芯々間で3.3ｍである。北東辺のＰ１～３が芯々間で7.1ｍ、南西辺のＰ４～７が芯々間で7.5ｍである。推

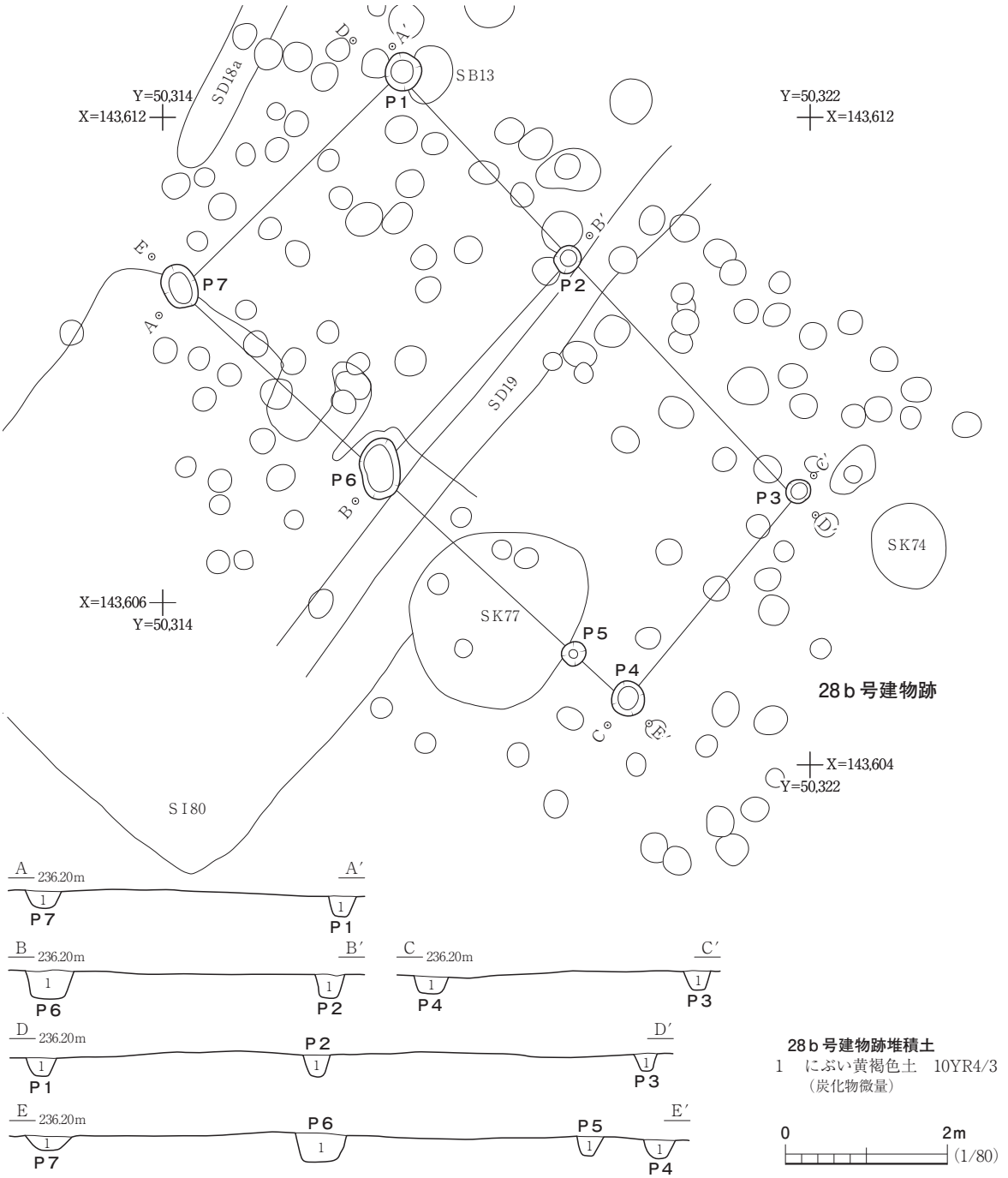


図387　28ｂ号建物跡

定面積は、27.8㎡である。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形である。柱穴の規模は、最大のＰ６が70×50㎝、深さ32㎝である。最小のＰ３が、直径30㎝、深さ20㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱穴から柱痕跡は確認されなかった。

柱穴の堆積土は、炭化物を微量に含むきめの細かいにぶい黄褐色土で、28ａ号と共通している。

遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、28号建物跡として扱っているが、２棟以上の掘立柱建物跡が重複した遺構群と考えられる。その中でも比較的明確に遺構の範囲を捉えた２棟を28ａ・ｂ号建物跡として扱った。28ａ号建物跡は、東西５間×南北２間の身舎に、２面の廂が付く建物跡と考えられる。間仕切りがあり小部屋に分かれるものと推測している。28ｂ号建物跡は、東西２間×南北１間の掘立柱建物跡である。所属時期は、周辺遺構との重複関係から、周辺遺構の中ではもっとも新しいことがわかっている。建物の構造などからもおそらくは中世以降の年代のものと推定している。　　（中　野）

29号建物跡　ＳＢ29

遺　　構（図389、写真299）

本遺構は、Ⅲ区南部のＣ・Ｄ－23・24グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。遺構周辺は、古墳時代後期から中世の遺構の集中区にあたる。重複する遺構は、12・13・32号建物跡、63～68・70号土坑である。本遺構が、12号建物跡、63～68・70号土坑より新しい。13号建物跡とは、遺構の範囲が一部近接しており、きわめて近い時期につくられた建物跡と考えられる。32号建物跡とは直接的な切り合い関係がないため不明である。

建物跡は15基の柱穴で構成される。構造は南北桁行５間、東西梁行２間の身舎の西側に廂の付く、一面庇付の建物跡である。平面形は南北に長い長方形で、方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約30度傾く。

身舎・庇ともに柱穴の配置は、長方形に整然と配列され、身舎の柱穴と廂の柱穴は柱筋を揃えて対応するように建てられている。身舎はＰ８・16・４に間仕切りがあるものと考えられ、南北に大きく二つの間取りに区切られる。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、身舎は北東辺のＰ１・２が芯々間で3.1ｍ、南西辺のＰ５・６が芯々間で3.9ｍである。南東辺のＰ２～５が芯々間で9.2ｍである。身舎の推定床面積は、28.5㎡である。廂は、西側の南北列のＰ11～15で7.4ｍ、東西のＰ10・15が0.8ｍである。身舎と廂を加えた推定面積は、34.4㎡である。

柱穴の芯々間は、身舎で、西側南北列のＰ６～10・１が1.6～1.9ｍである。平均すると1.78ｍで、5.9尺である。廂にあたる西側の南北列は、Ｐ11～15の間が1.7～1.9ｍである。平均すると

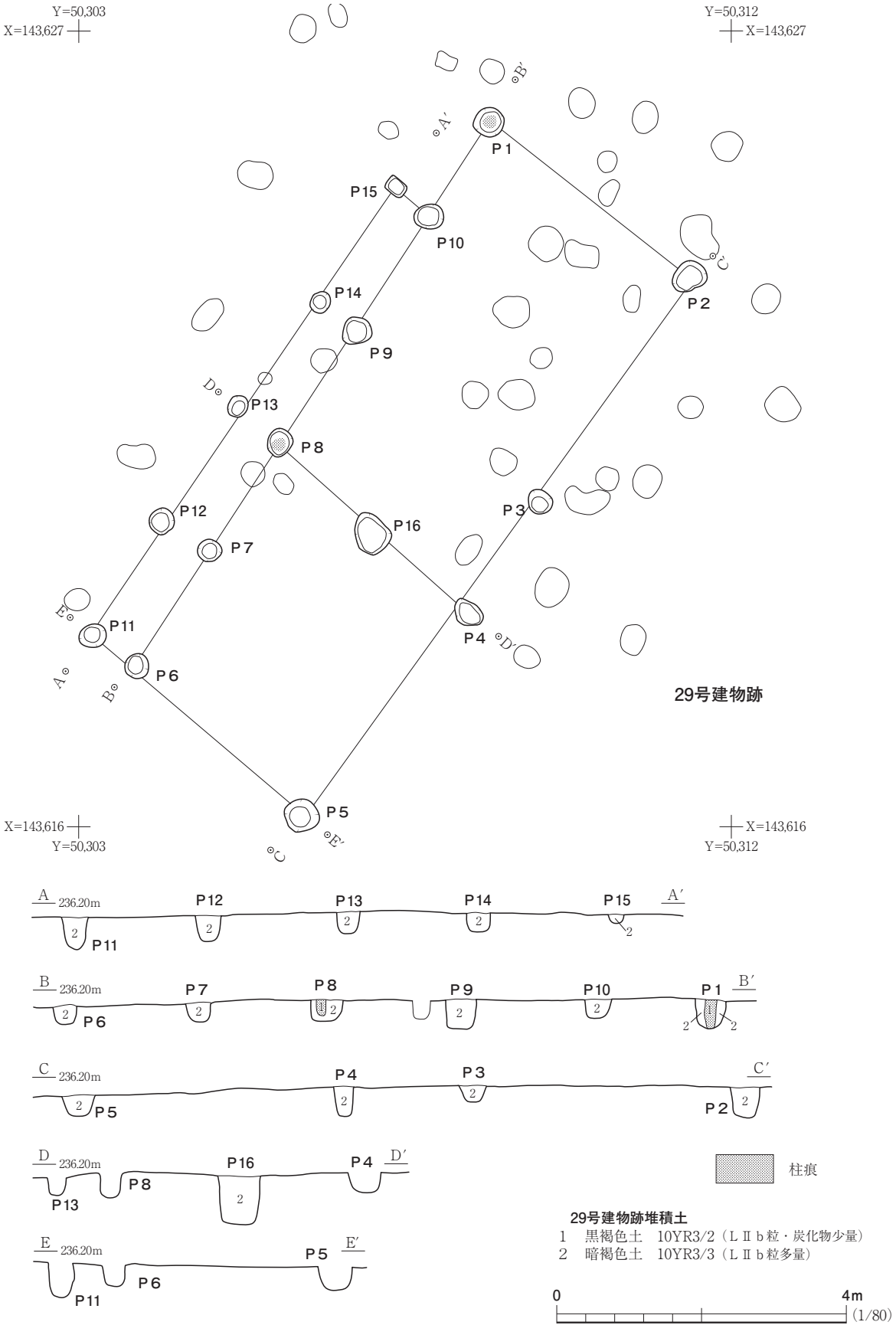

Y=50,303
X=143,627
Y=50,312
X=143,627
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
29号建物跡
X=143,616
Y=50,303
X=143,616
Y=50,312
236.20m
柱痕
29号建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒・炭化物少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅡｂ粒多量）
0
4m
(1/80)

図389　29号建物跡

1.81ｍで、6.0尺である。

柱穴の平面形は、円形や楕円形が多いが、Ｐ15だけが東西に長い長方形である。柱穴の規模は、最大のＰ16が、直径59×48㎝、深さ64㎝である。最小のＰ14が直径34㎝、深さ25㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ１・８で確認された。最大のものはＰ１で、直径が20㎝である。

柱穴内堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。２は掘形の埋土および柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

ま と め

本遺構は、南北５間、東西２間の身舎の西側に廂の付く、一面廂付建物跡である。身舎の推定床面積は、28.5㎡で、廂を含めると34.4㎡である。柱穴間は、平均で1.8ｍで、尺に直すと6.0尺である。13号建物跡を主屋と考えるなら、その付属する副屋の機能が考えられる。所属時期は、重複関係などから中世初頭の13世紀頃と考えている　（中　野）

30ａ・ｂ号建物跡　ＳＢ30ａ・ｂ

遺　　構（図390・391、写真300）

本遺構は、Ⅱ・Ⅲ区南部のＦ・Ｇ－25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。26号建物跡の東側のＦ・Ｇ－25の検出時に２間×２間ほどの建物跡として検出していた。しかし図面上で検討した結果、周辺の柱穴群も本遺構に含まれることが判明した。遺構は南北方向に長い長方形の２棟の建物跡が重複していることが明らかになった。新旧関係で新しいものを30ａ号建物跡とし、それより古いものを30ｂ号建物跡とした。重複する遺構は74号住居跡、26号建物跡、62号土坑である。重複関係は、本遺構が74号住居跡より新しい。62号土坑は直接の切り合い関係がないため不明である。26号建物跡とは西側の遺構範囲が一部重なることから、きわめて近い時期につくられた建物跡と考えられる。

30ａ号建物跡は、南北桁行５間、東西梁行２間の建物跡である。本遺構のＰ９が30ｂ号建物跡のＰ７を壊していることから、30ｂ号建物跡から30ａ号建物跡へ拡張して建て替えているものと考えられる。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に30度傾く。

柱穴は15基で構成される。柱穴の配置は、柱筋を通さずに違え違いになるように配列されているのが大きな特徴である。各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１・２が芯々間で4.45ｍ、南辺のＰ７・９が芯々間で3.8ｍである。東辺のＰ２～７が芯々間で7.8ｍである。推定床面積は、35㎡である。

柱穴の芯々間は、東側南北列のＰ２～４が、やや狭く1.2～1.3ｍである。Ｐ４～Ｐ７が1.45～2.1ｍである。尺に直すとおおよそ4.0～7.0尺である。

柱穴の平面形は円形や楕円形である。柱穴の規模は、最大のＰ12が、48×34㎝、深さ18㎝である。最小のＰ２が直径26㎝、深さ27㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面は

平坦である。柱痕跡はＰ１・11・13以外で確認された。最大のものはＰ12で、直径23㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡である。２は掘形の埋土および、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

30ｂ号建物跡は、南北桁行３間、東西梁行２間の建物跡である。柱穴は12基で構成される。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に30度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１・２が芯々間で3.2ｍ、南辺のＰ５・７が芯々間で3.9ｍである。東辺のＰ２～５が芯々間で6.2ｍである。推定床面積は、24.1㎡である。

各柱穴の芯々間は、東側南北列のＰ２～４が、2.25・2.5ｍである。Ｐ４・５がやや狭く1.4ｍである。尺に直すと最長で7.5尺である。

柱穴の平面形は、円形や楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ12が、径42×32㎝、深さ38㎝である。最小のＰ２が直径25㎝、深さ15㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡は、Ｐ４・６以外の柱穴で確認された。最大はＰ12で直径18㎝である。

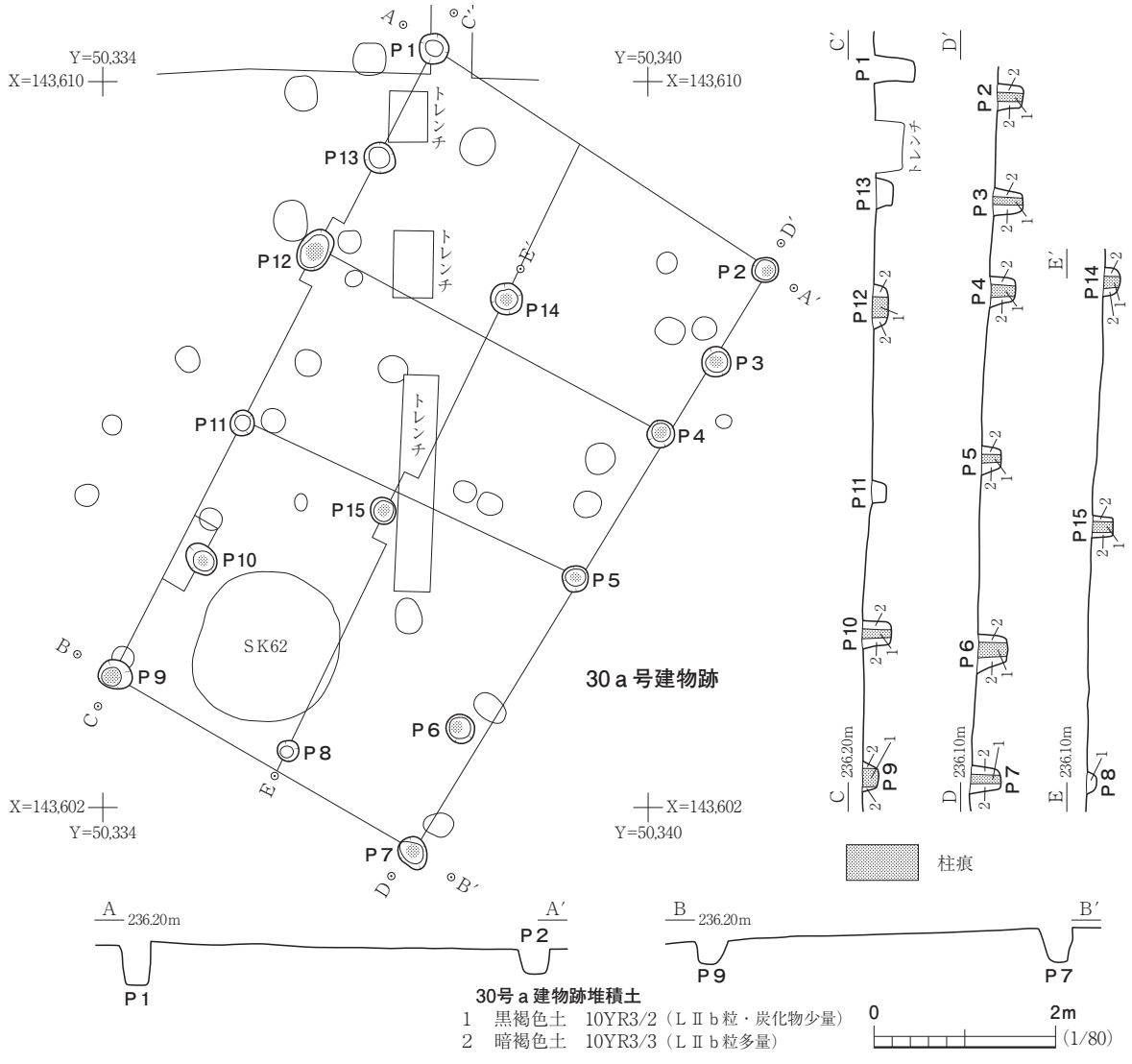


図390　30ａ号建物跡

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡の黒褐色土である。２は掘形の埋土および、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

ａ・ｂ号とも、柱穴内や周辺から遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、２棟が重複した建物跡である。30ｂ号建物跡から30ａ号建物跡へ拡張して建て替えているものと考えられる。30ａ号建物跡は、南北５間、東西２間の掘立柱建物跡である。柱穴の配置が柱筋を通さずにたがえ違いになるように配列されているのが大きな特徴である。30ｂ号建物跡は、南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。２棟の建物跡は、近隣の26号建物跡と一部遺構の範囲が重なり、主軸を同じくすることから、一つの建物群を形成していたものと推測される。時期は、重複関係から、中世初頭の13世紀頃と推定している。　（中　野）

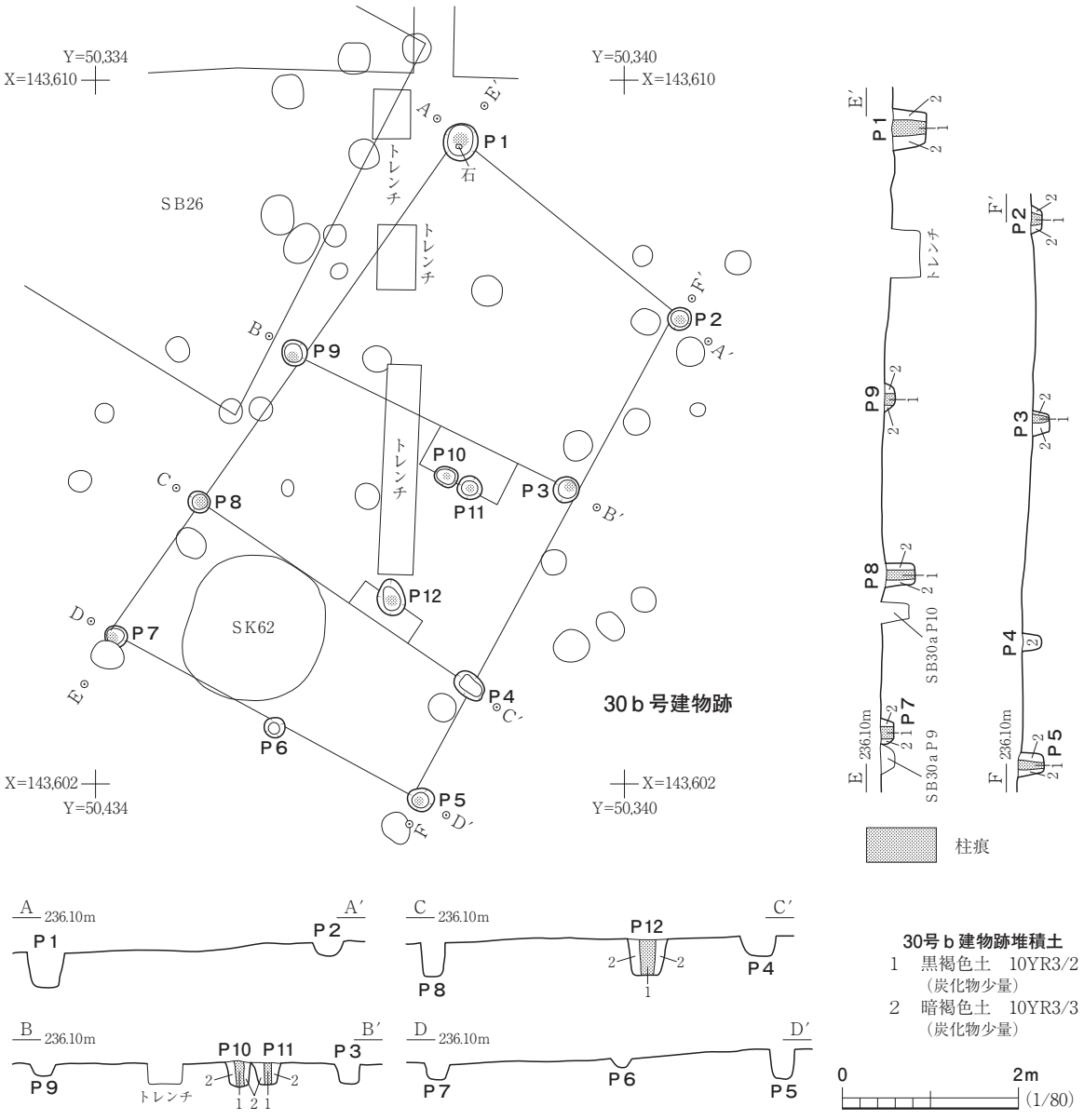


図391　30ｂ号建物跡

31号建物跡　ＳＢ31

遺　　構（図392）

本遺構は、Ⅲ区南部のＤ・Ｅ－23・24グリッドに位置する。標高235.8ｍ付近の南側から北西側に下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。12号建物跡の図面整理段階で、重複するピット群が長方形に配列することから本遺構として扱った。重複する遺構は、96号住居跡、12号建物跡、25号畑跡である。本遺構がいずれの遺構よりも新しい。

建物跡は10基の柱穴で構成される。構造は南北桁行３間×東西梁行２間である。平面形は南西側の柱列が長く台形状である。方位は、東列を基準とするなら北に対して西に約40度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北西辺のＰ１～11が芯々間で3.5ｍ、北東辺のＰ１～４が芯々間で6.8ｍ、南西辺のＰ７～10が芯々間で7.8ｍである。推定床面積は、25.5㎡である。

各柱穴の平面形はおおむね円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ４が、直径35㎝、深さ25㎝である。最小のＰ９が、直径30㎝、深さ25㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡はＰ８で確認できた。直径８㎝である。

堆積土は、２層に区分した。ℓ１は柱痕跡の黒褐色土である。ℓ２は掘形の埋土および、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺物は柱穴や検出面から出土していない。

ま と め

本遺構は、南北３間×東西２間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、25.5㎡である。重複関係や周辺の建物跡との関係から、13号建物跡を中心とした建物群のひとつと思われる。所属時期は、遺構間の重複関係や間尺の長さなどから中世初頭の13世紀頃と推定している。　（中　野）

32号建物跡　ＳＢ32

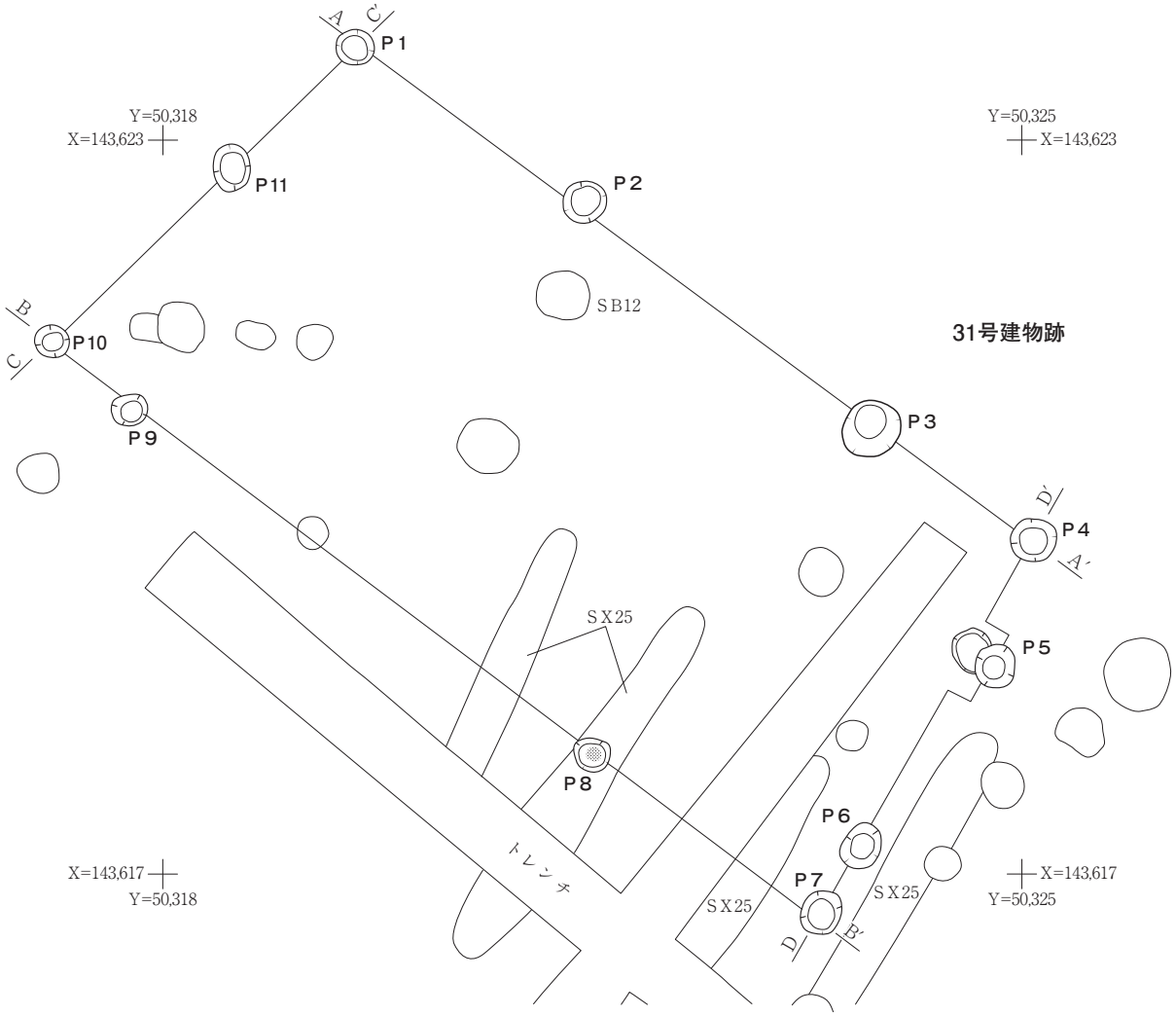
遺　　構（図393）

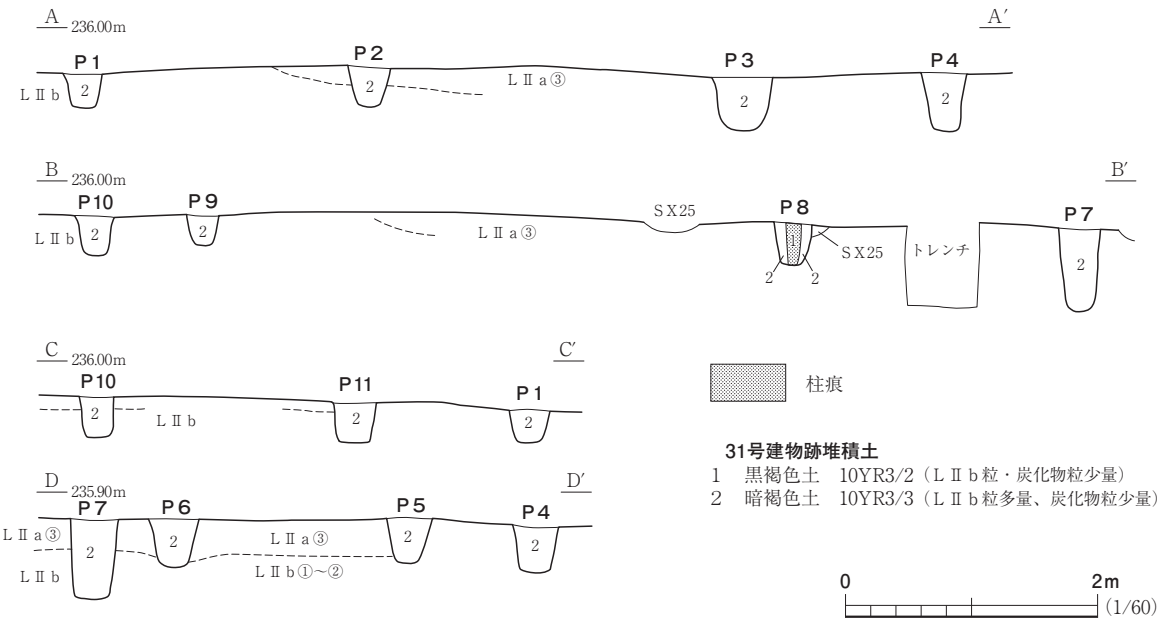
本遺構は、Ⅲ区南部のＣ－23グリッドに位置する。標高235.9ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。遺構周辺は、古墳時代後期から中世の遺構の集中域である。重複する遺構は、29号建物跡、67～70号土坑である。本遺構が67～70号土坑より新しい。29号建物跡とは直接的な切り合い関係がないため新旧関係は不明である。13号建物跡とは近接する。やや主軸にずれがあるものの、関連する建物跡の可能性がある。

建物跡は８基の柱穴で構成される。柱穴は、東西２間、南北２間で、平面形は方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に約20度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１～３が芯々間で3.85ｍ、東辺のＰ３～５が芯々間で4.3ｍである。Ｐ４とＰ６は東・南の柱列から外側に位置する。推定床面積は、16.4㎡である。

各柱穴の芯々間は、西側南北列のＰ１・８が2.15ｍ、Ｐ７・８が2.1ｍである。東側南北列のＰ





柱痕

31号建物跡堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒・炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅡｂ粒多量、炭化物粒少量）

0　2m
(1/60)

図392　31号建物跡

３・４は2.05ｍ、Ｐ４・５が2.3ｍである。平均すると2.15ｍである。北側東西列は、Ｐ１・２が2.7ｍ、Ｐ２・３が1.3ｍである。南側東西列は、Ｐ６・７が1.75ｍ、Ｐ５・６が2.1ｍである。東西列の平均は1.96ｍである。

柱穴の平面形はおおむね円形ないし楕円形である。柱穴の規模は、最大のＰ８が径50×40㎝、深さ43㎝である。最小のＰ２が、直径34㎝、深さ53㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。Ｐ４の柱穴からは柱痕跡が確認できた。柱痕跡の規模は、直径19㎝である。

柱穴の堆積土は、２層に区分した。ℓ１は炭化物を微量含む暗褐色土で、柱痕跡である。ℓ２・３はＬⅡｂ①を多く含むにぶい黄褐色土や黒褐色土で、柱穴の埋土および、柱の抜き取り後に堆積した土と思われる。

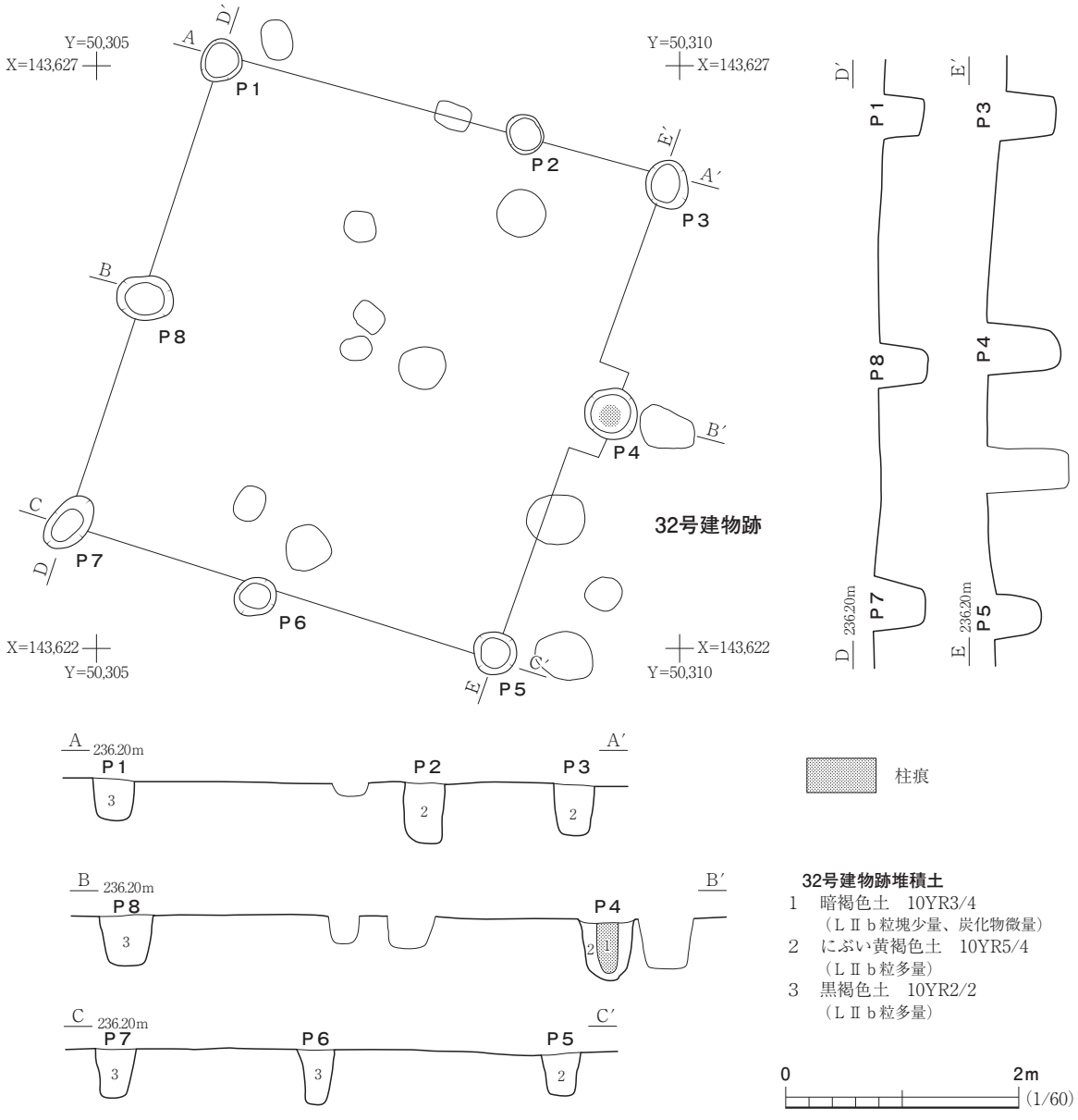


図393　32号建物跡

遺物は柱穴や検出面から一切出土しなかった。

ま と め

本遺構は、南北２間×東西２間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、16.4㎡である。

12号建物跡に近接し、関連のある建物跡の可能性がある。所属時期は、周辺遺構との関係などから中世頃と推定している。（中　野）

33号建物跡　ＳＢ33

遺　　構（図394）

本遺構は、Ⅲ区南東部のＦ・Ｇ－24グリッドに位置する。標高235.8ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。24号畑跡を検出中に長方形に配列する４基の柱穴を確認したことから本遺構として調査した。重複する遺構は24号畑跡で、本遺構が新しい。

建物跡は４基の柱穴で構成される。構造は南北１間、東西１間で、平面形は南北に長軸をもつ長方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して３度東に傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北辺のＰ１・２が芯々間で2.4ｍ、東辺のＰ２・３が芯々間で1.5ｍである。推定床面積は、3.6㎡である。

各柱穴の平面形は円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ４が径42×35㎝、深さ21㎝である。最小のＰ２が径38×33㎝、深さ31㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡は確認できなかった。

柱穴の堆積土は暗褐色土の単層で、柱の抜き取り後に堆積した土である。

遺物は柱穴内や周辺から出土しなかった。

ま と め

本遺構は、南北１間×東西１間の掘立柱建物跡と考えられる。推定床面積は、3.6㎡で、小型の建物跡である。居住は不可能と思われるが、機能は特定できていない。所属時期は、重複関係などから中世頃と推定している。（中　野）

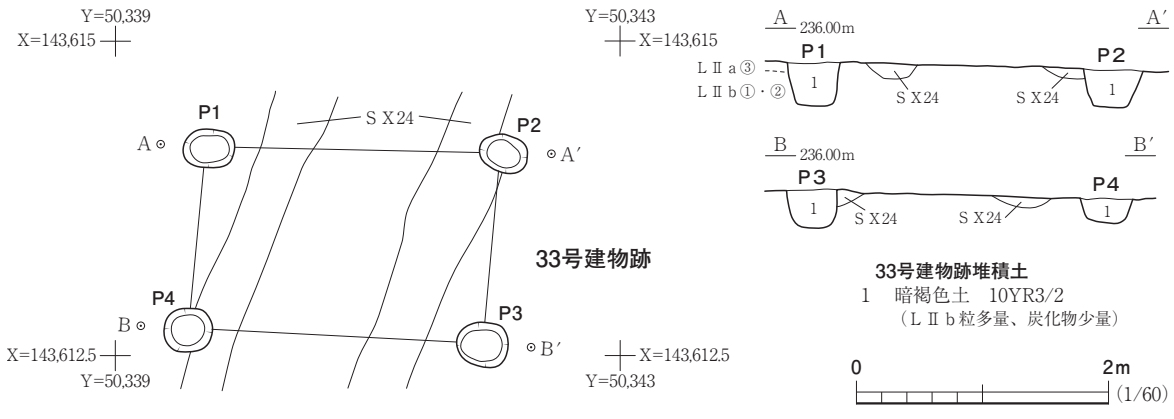


図394　33号建物跡

35号建物跡　ＳＢ36

遺　　構（図395、写真301・302）

本遺構は、Ⅴ区南部のＱ・Ｒ－25グリッドに位置する。標高236.2ｍ付近の、西側から東側へ下る緩斜面地に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。重複する遺構は151号住居跡だが、下層に位置し、直接の重複関係にはない。よって本遺構が新しい。

本遺構は15基の柱穴で構成される。構造は南北桁行３間、東西梁行２間で、平面形は南北にやや長い長方形である。なお、北東隅柱にあたるＰ７が西側に寄って位置しており、その部分はややいびつな形となっている。方位は、Ｐ９～12の西側南北列を基準とするなら、北に対して東に35度傾く。Ｐ11からＰ４を結ぶ位置には間仕切りがあるものと考えられ、中心線上にＰ２が位置する。おそらく南北で大きく二つの間取りに区切られるものと考えている。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、西辺のＰ９～12が芯々間で5.2ｍ、Ｐ５～10を結んだ線のの東西柱間が5.3ｍである。身舎の推定床面積は、柱穴で結ばれた線の内側で約27.5㎡である。

柱穴の平面形は円形ないし楕円形である。柱穴の規模は、最大のＰ２が、直径68㎝、深さ60㎝である。最小のＰ12が直径20㎝、深さ16㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡はＰ２・５・10・11・14・15で検出された。規模は直径15㎝前後である。深さはＰ２・10・11では柱穴底面に達しているが、それ以外は10㎝ほどと浅くなっている。

堆積土は、３層に分層した。ℓ１は炭化物を含む暗褐色土で、柱痕跡である。ℓ２は柱穴掘形埋土、または抜き取り後の堆積土とみられる。ℓ３はＰ３のみに堆積している。炭化物を多量に含む暗褐色土で、他の柱穴と柱の抜き取り時期が異なるとみられる。

遺物は柱穴内や検出面から出土していない。

ま と め

本遺構は南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。推定床面積は、27.5㎡ある。Ｐ11からＰ４を結ぶ線には間仕切りがあるものと考えられ、おそらく南北で、大きく二つの間取りに区切られるものと考えている。20号建物跡の間取りと共通する。所属時期は、検出面や間取りなどから中世末～近世初頭頃と考えている。（中　野）

36号建物跡 ＳＢ36

遺　　構（図396、写真303）

本遺構は、Ⅳ区南西部のＤ・Ｅ－14・15グリッドに位置する。標高235.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。重複する遺構は、38号畑跡、22号溝跡で、本遺構が新しい。直接の重複関係にはないが、上層に12号畑跡が位置する。

建物跡は12基の柱穴で構成される。建物の構造は、南北３間、東西２間で、平面形は東西にやや長い長方形である。方位は、Ｐ３～６の東側南北列を基準とするなら、北に対して東に30度傾

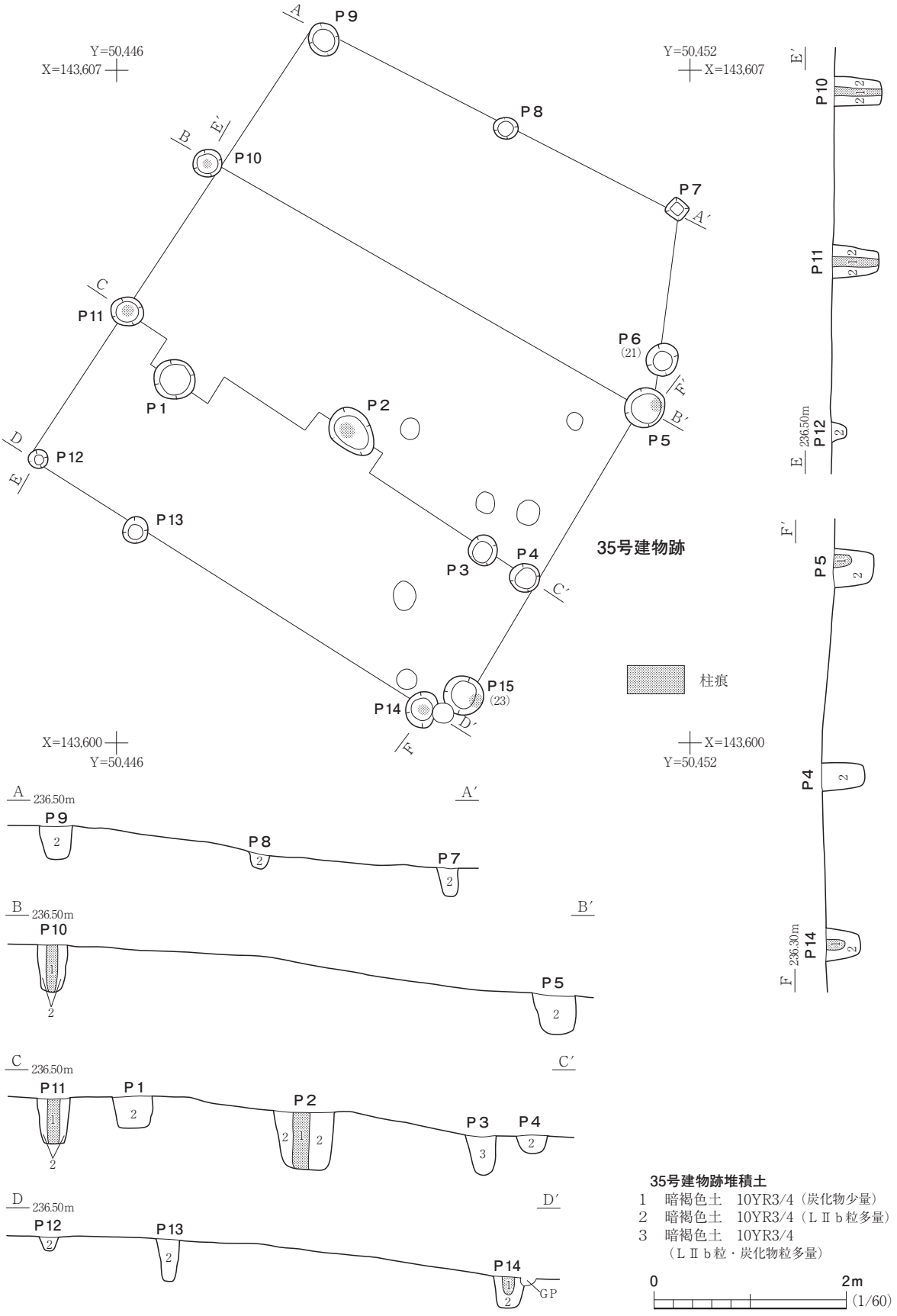

Y=50,446
X=143,607
Y=50,452
X=143,607
X=143,600
Y=50,446
X=143,600
Y=50,452
P9
P8
P7
P10
P11
P6
(21)
P1
P2
P5
P12
P13
P4
P3
P15
(23)
P14
35号建物跡
柱痕
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
236.50m
236.30m
35号建物跡堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量）
2　暗褐色土　10YR3/4（ＬⅡｂ粒多量）
3　暗褐色土　10YR3/4
（ＬⅡｂ粒・炭化物粒多量）
GP
0
2m
(1/60)

図395　35号建物跡

く。なお柱筋は通りは良くなく、たがい違いに柱穴が掘り込まれている。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、南辺のＰ６～８が芯々間で6.3ｍ、東辺のＰ３～６が芯々間で5.6ｍである。推定床面積は、35.3㎡である。

柱穴の平面形は、おおむね円形である。柱穴の規模は、径20～38㎝、深さが10～25㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は平坦である。柱痕跡は検出されなかった。

堆積土は、炭化物やＬⅡｂ粒を含む褐色土の単層で、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺物は柱穴や検出面から一切出土しなかった。

ま と め

本遺構は南北３間、東西２間の掘立柱建物跡である。推定床面積は、35.3㎡である。柱筋は通らず、たがい違いに柱穴が位置する。時期は、間取りから中世末～近世頃と考えている。　（中　野）

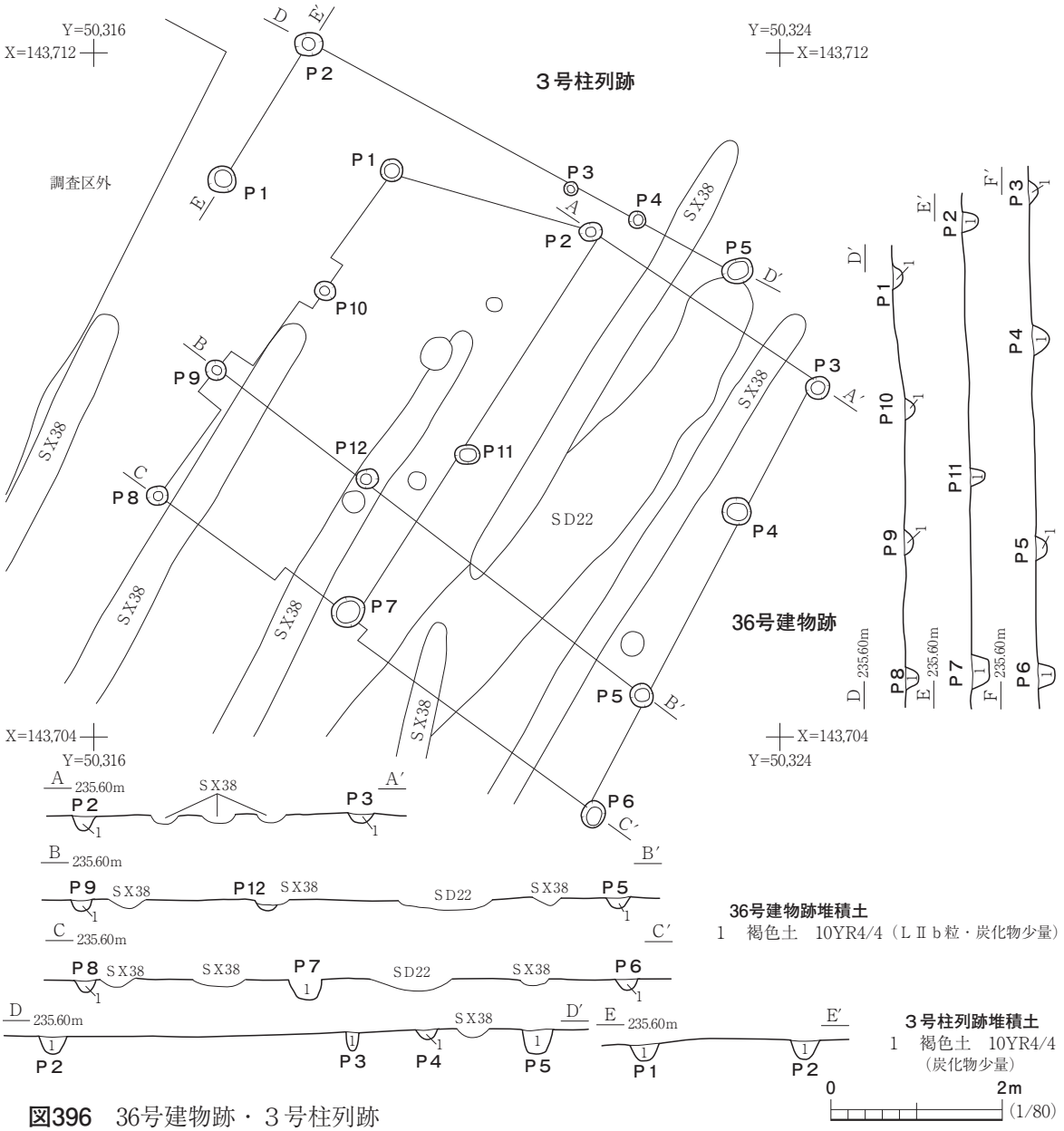


図396　36号建物跡・３号柱列跡

37号建物跡　ＳＢ37

遺　　構（図397、写真304）

本遺構はⅣ区南西部のＥ－15・16グリッドに位置する。標高235.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。38号畑跡を検出中に長方形に並ぶ柱穴群を検出したことから、掘立柱建物跡として調査した。重複する遺構は、38号畑跡で本遺構が新しい。

建物跡は７基の柱穴で構成される。構造は、南北桁行２間、東西梁行１間で、平面形はおおむね長方形である。方位は、東列を基準とするなら北に対して東に50度傾く。

各隅柱を基準とした建物跡の規模は、北東辺のＰ１・２が芯々間で1.7ｍ、南東辺のＰ２～４が芯々間で5.5ｍである。Ｐ３とＰ６は西辺及び東辺の柱穴を結んだ線から外側に外れて位置する。推定床面積は、9.35㎡である。

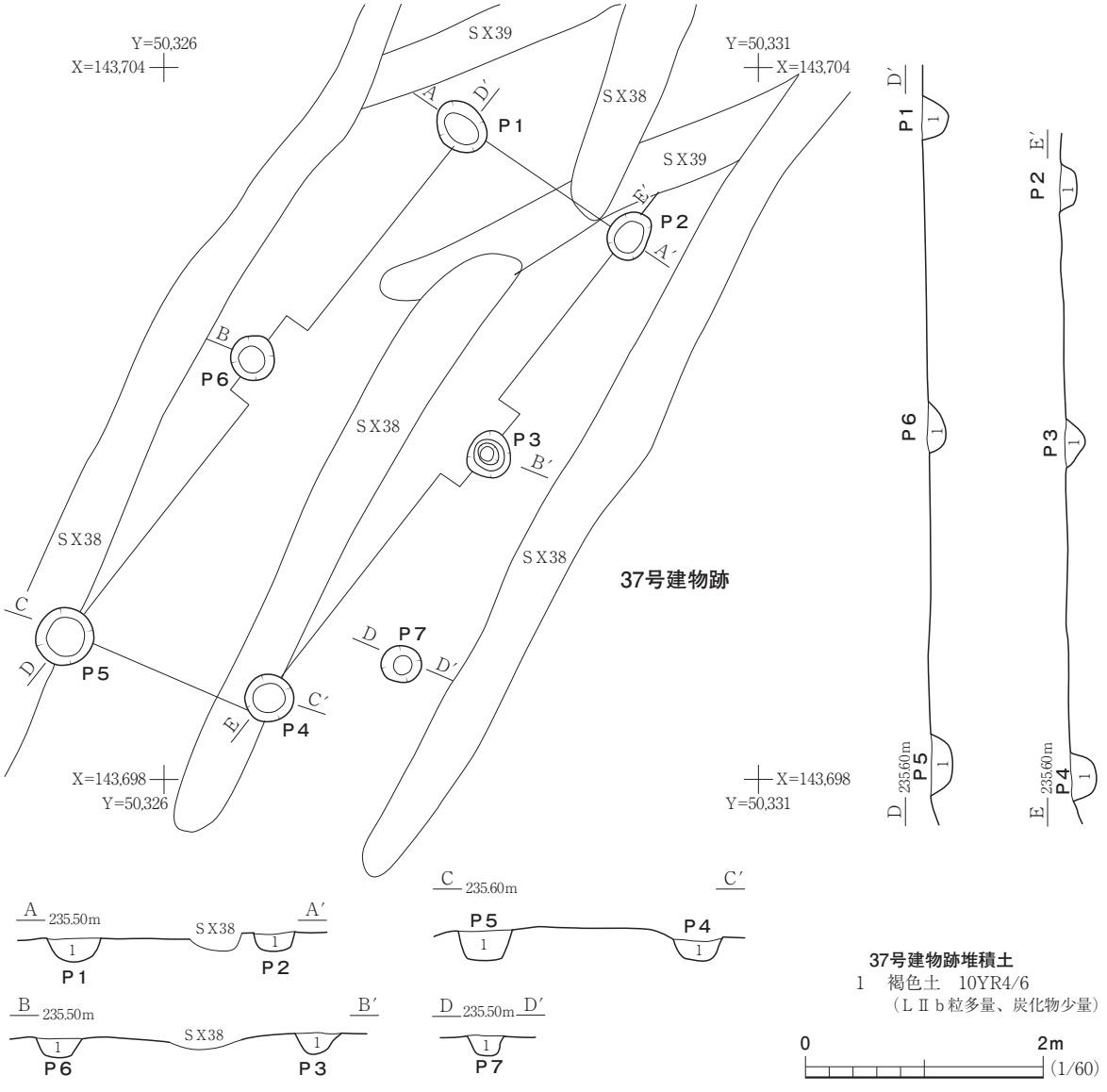


図397　37号建物跡

各柱穴の芯々間距離は、Ｐ２・３が2.1ｍ、Ｐ３・４が2.8ｍ、Ｐ５・６が2.9ｍ、Ｐ１・６が2.7ｍである。Ｐ２・３間以外は比較的長さが揃っている。

柱穴の平面形はおおむね円形である。柱穴の規模は、直径38～47㎝、深さは15～25㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり底面形は平坦である。柱痕跡は確認できなかった。

柱穴の堆積土は、ＬⅡｂ粒を多く含み炭化物を少量含む褐色土の単層である。

遺物は土師器１点が出土した。小片のため図示していないが、胴部外面に段をもつ杯で、内面黒色処理を施す。古墳時代後期の所産であるが、流れ込みと思われる。

ま と め

本遺構は、２間×１間の掘立柱建物跡である。推定床面積は、9.35㎡である。所属時期は、不明な点が多いが、古墳時代後期の畑跡を壊しているため、それ以降の建物跡と考えている。（中　野）

39号建物跡　ＳＢ39

遺　　構（図398、写真305）

本遺構は、Ⅳ区西部のＦ－11グリッドに位置し、標高は235.7ｍに立地する。検出面は、ＬⅡｂ上面である。重複する遺構はなく、周辺には土坑が数基位置する。

本遺構は６基の柱穴で構成され、東西２間、南北２間の掘立柱建物跡である。規模は東西が3.4ｍ、南北3.2ｍである。なお検出されなかったが本来は北東隅にも柱穴が存在したものと思われ、平面形は方形を基調とするものと推定される。

柱間の距離は不揃いでＰ２・３間が1.7ｍ、Ｐ３・４間が1.7ｍ、Ｐ４・５間が0.8ｍ、Ｐ５・６

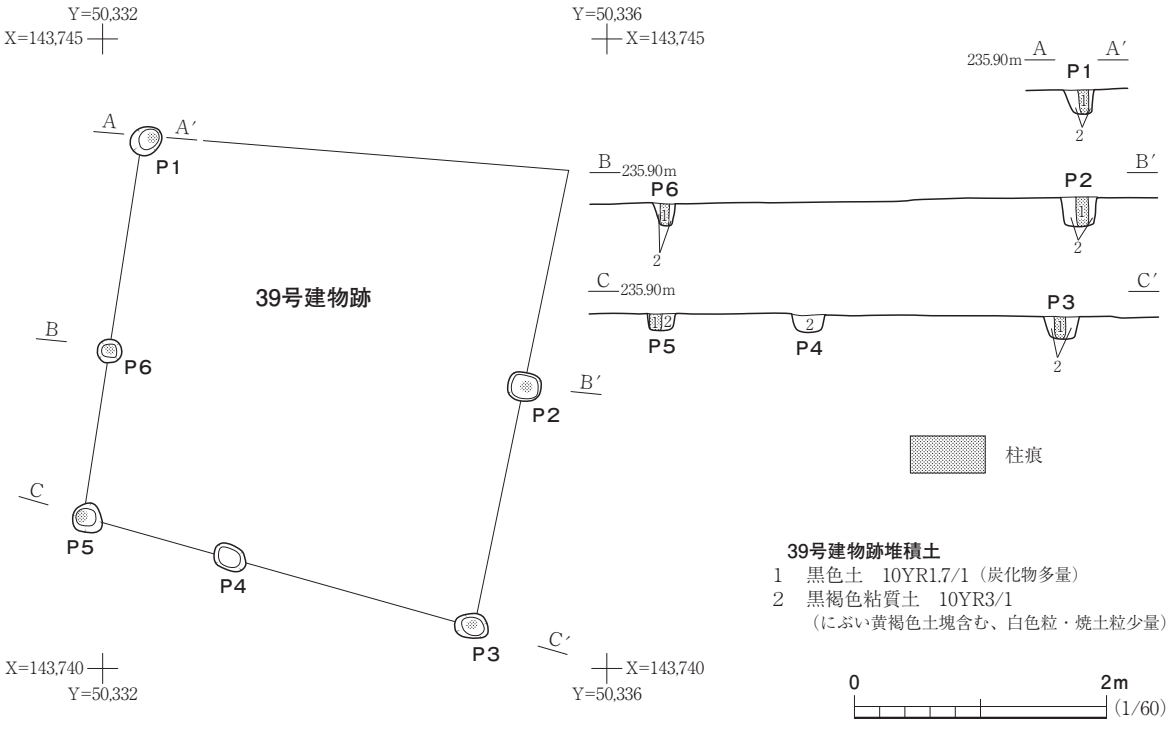


図398　39号建物跡

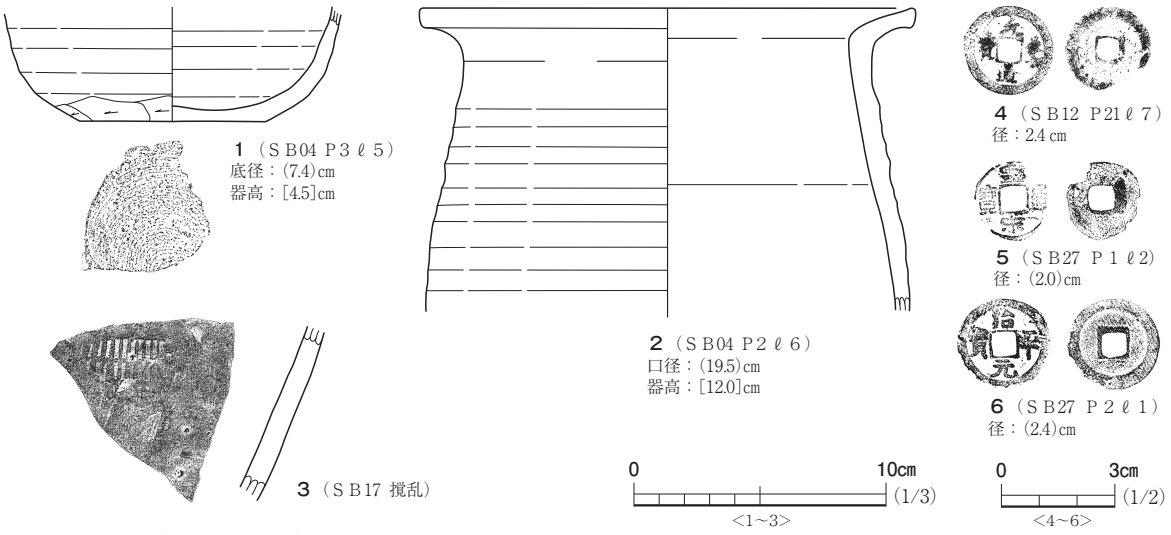


図399　建物跡出土遺物

間が1.2ｍ、Ｐ６・１間が1.4ｍである。

柱穴の規模は径20～30㎝の楕円形で、深さは15～25㎝である。柱穴底面はＬⅡｂ層中に形成され、平坦となっている。Ｐ１～３・５・６からは柱痕跡が確認された。

柱穴の堆積土は２層に分層した。ℓ１は炭化物を多く含む黒色土層で、柱痕跡である。ℓ２は黒褐色の粘質土で、柱穴掘形の埋土とみられる。

時期や機能を示すような遺物は出土しなかった。

ま と め

本遺構は東西２間、南北２間の方形の建物跡である。建物全体の規模や柱穴が小型であることや、柱間距離が不揃いで、ややいびつな平面形となることから、簡素な作りの建物であったと考えられる。遺物が出土しなかったことから、詳細な時期は不明である。しかし検出面や堆積土の様相から、古代以降に機能した建物跡と思われる。　（神　林）

第５節　柱　列　跡

１号柱列跡　ＳＡ01

遺　　構（図400、写真307）

本遺構は、Ⅳ区のＨ・Ｉ－11グリッドに位置する。標高235.0ｍ付近の緩斜面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①である。50号住居跡南側のＬⅡａ③～ＬⅡｂ①を検出中に東西に並ぶ柱穴列を検出し、柱列として調査した。重複する遺構は50号住居跡で、本遺構が新しい。

東西軸で、直線的に並ぶ20基の柱穴で構成される。方位は、北に対して東に85度傾く。規模は全長が東西5.0ｍである。

柱穴の平面形は、円形ないし長楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ11が直径22㎝、深さ31㎝である。最小のＰ14が直径７㎝、深さ10㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上が

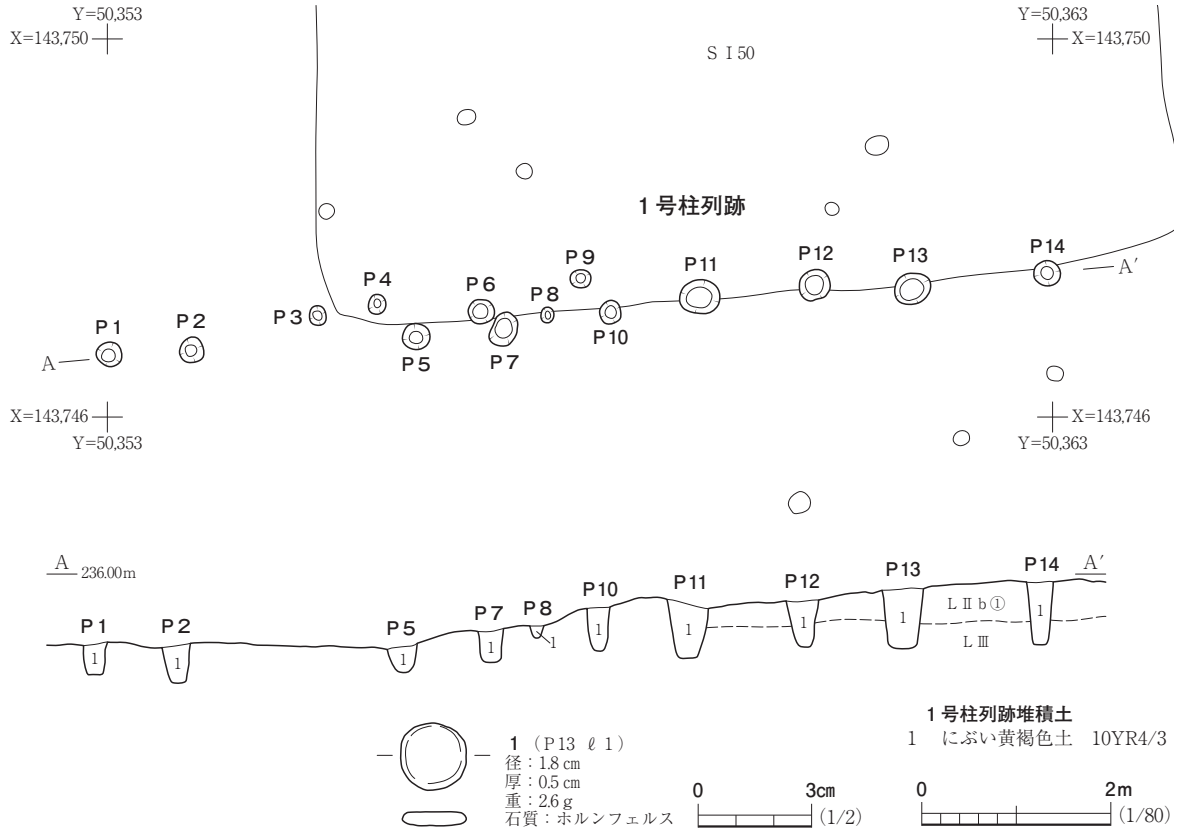


図400　1号柱列跡・出土遺物

り、底面形は平坦である。柱痕跡は検出されなかった。

堆積土は、にぶい黄褐色の単層で、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。

遺物は石製品がＰ13の堆積土から1点出土している。図400－1は、黒色の碁石である。材質はホルンフェルス製で、入念に研磨されている。

所属時期は、不明確な点が多いが、出土遺物や検出面などから中世頃と考えている。　（中　野）

2号柱列跡　ＳＡ02

遺　　構（図378、写真290）

本遺構は、Ⅴ区東部のＷ－19グリッドに位置する。標高236.8ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。20号建物跡の東側のＬⅡａ③～ＬⅡｂ①を検出中に、東西に並ぶ柱穴列を検出したことから、遺構として調査した。重複する遺構はない。

本遺構は20号建物跡の北東辺に並行する10基の柱穴で構成される。方位は、東に約40度傾く。柱穴の平面形は、円形ないし長楕円形である。各柱穴の規模は、最大のＰ９が34×27㎝、深さ31㎝である。最小のＰ８が直径10㎝、深さ15㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形はすり鉢状のものや平坦なものがあり、ばらつきがある。柱痕跡は検出されなかった。

堆積土は、焼土粒や炭化物を含む黒褐色の単層で、柱の抜き取り後の堆積土と考えている。遺構内および検出面から遺物は出土していない。

本遺構は、隣接する20号建物跡に並列して位置することから、一連の遺構である可能性が高い。所属時期は、遺物が出土していないため不明確な点が多いが、検出面や周辺遺構との関連から中世～近世初頭頃に機能したと考えている。（中　野）

３号柱列跡　ＳＡ03

遺　　構（図396、写真303）

本遺構は、Ⅳ区南西部のＤ・Ｅ－14・15グリッドに位置する。標高235.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③～ＬⅡｂ①である。36号建物跡の北側のＬⅡａ③～ＬⅡｂ①を検出中に「Ｌ」字状に並ぶ柱穴列を検出したことから、遺構として調査した。重複する遺構は38号畑跡、22号溝跡で、本遺構がもっとも新しい。

本遺構は「Ｌ」字状に並ぶ５基の柱穴で構成される。短辺であるＰ１・２の柱間の長さが1.9ｍである。長辺であるＰ２～５の全長が5.7ｍである。

柱穴の平面形は、円形ないし長楕円形である。各柱穴の規模は、直径13～28㎝、深さ11～28㎝である。柱穴の周壁は、垂直ぎみに立ち上がり、底面形は尖底のものから平坦なものまであり、ばらつきがある。柱痕跡は検出されなかった。

堆積土は、炭化物を含む褐色土の単層で、柱の抜き取り後に堆積した土と考えている。

遺構内および検出面から遺物は出土していない。

本遺構は、隣接する近隣の36号建物跡に並列して位置することから、一連の遺構である可能性が高い。所属時期は、遺物が出土していないため不明確な点が多いが、検出面や周辺遺構との関連から中世末～近世頃に機能したと考えている。（中　野）

６号柱列跡　ＳＡ06

遺　　構（図401、写真308）

本遺構は、Ⅴ区南東部のＳ～Ｕ－22グリッドに位置する。検出面はＬⅡｂである。標高236.3ｍの平坦な場所に立地する。他の遺構との重複関係はない。北に87号住居跡と17号溝跡、北東に19号建物跡、南に53号土坑と22号畑跡が位置する。直接の切り合い関係にはないが、下層には古墳時代前期の23号畑跡が位置する。

ＬⅡｂ上面で、東西に並ぶ17基の柱穴が検出されたことから、柱列跡として調査した。西端のものをＰ１とし、以下、Ｐ２～17とした。

17基の柱穴は直線的にならび、長さは芯々間で19.5ｍである。Ｐ１・17を結ぶ線は北から74度西に傾く。柱穴の間隔には長短があって、一定ではない。もっとも広いもので1.8ｍ、もっとも狭いもので0.6ｍ、平均すると約1.2ｍである。概して、西端部のＰ２～６では、柱穴同士の間隔が非常に狭く、柱穴の規模も小さい。

柱穴の平面形はいずれも円形で、規模はもっとも大きいＰ11で41㎝、もっとも小さいＰ16で

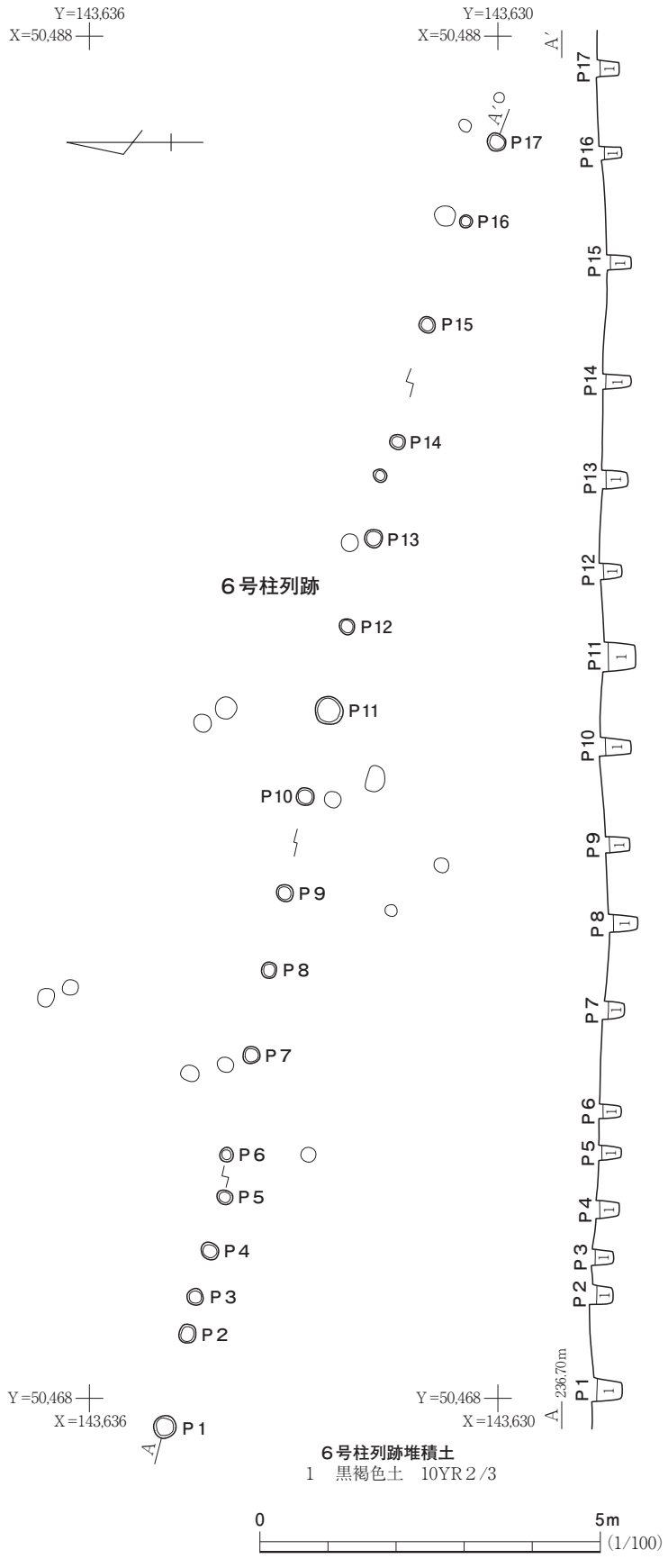


図401　6号柱列跡

19cm、検出面からの深さは32～47cmである。いずれの柱穴からも柱痕跡は確認されなかった。

その他、周囲にいくつかの柱穴が検出された。いずれも同一の検出面で、ピットの平面形や規模が本柱列跡の柱穴と似ており、本遺構と関連するものの可能性も考えられる。

本柱列跡を構成する柱穴から遺物は出土しなかったものの、東端周辺にある柱穴の一つから、内面黒色処理を施した非ロクロの土師器杯の小片が出土した。

ま と め

おおむね東西に直線的に延びる長さ19.5m、17基の柱穴からなる柱列跡である。

この柱列跡の北側には奈良時代の87号住居跡、19号建物跡、南側には時期は不詳であるものの同じＬⅡｂを検出面とする22号畑跡が位置し、本柱列跡はそのほぼ中間に位置している。柱列の向きも、上述のいずれの遺構とほぼ一致する。以上のことから、本柱列跡はこれらの遺構と同時に併存していた一連の遺構である可能性が考えられる。

本遺構からは年代を積極的に決めることのできる遺物は出土していないが、上述の遺構と同時期と考えてよければ、奈良時代、８世紀のものと考えられる。（青　山）

第６節　畑　跡

高木遺跡では、55箇所の畑跡が検出された。ここで畑跡としたのは、小規模な複数の溝跡が一定の方向を向いて並ぶ遺構である。溝跡はいずれもほぼ並行しており、畝間溝の跡と考えられる。

本遺跡における畑跡には、いくつかの畑跡が集まって群をなすものと、単独で位置するものがある。群をなすものについては、互いに隣接して重複せず、畝の方向をおおむねそろえ、あるいは直角方向に向きをちがえていることなどから、あるいは畝の作り変えなどの変遷を経ながらも同時に併存していたと考えられるものである。これらを、Ａ～Ｈ群にまとめた。

この節では、まず群ごとに事実記載を行い、次に群をなさない畑跡について述べることにする。

畑跡Ａ群　ＳＸ01～03・26・27・29（図402、写真309・313～317）

１～３・26・27・29号畑跡からなる一群である。調査区のⅡ区とⅤ区にまたがって、６箇所の畑跡が南北に連なって並ぶ。Ⅱ区、Ｊ～Ｍ－16～26グリッド、ＬⅡｂで検出された。３号畑跡と39号住居跡が重複し、３号畑跡が新しい。

６箇所の畑は、東西約40ｍ、南北約104ｍの範囲に広がり、北から、３・２・１・26・27号畑跡の順で並び、26・27号畑跡の東に29号畑跡が位置する。このうち、２・３号畑跡はおおむね南北に畝が延び、１・26・27・29号畑跡はおおむね東西方向に畝が延びる。29号畑跡は攪乱によって西側が削平を受けている。

１号畑跡は、東西24ｍ、南北29ｍの範囲に、21列に並ぶ36条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝の方向は、北から約70度西に傾く。畝間溝の長さは最大で15.5ｍ、深さは最大で15㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.0～1.9ｍである。

２号畑跡は、東西29ｍ、南北27ｍの範囲に、20列に並ぶ25条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝の方向は北から10～15度東に傾く。畝間溝の長さは最大で18.6ｍ、深さは最大で34㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.1～3.4ｍである。

３号畑跡は、東西18ｍ、南北11ｍの範囲に、12条の畝間溝跡が並ぶ。このうち11条は北から25～37度東に傾く。南部に位置する１条のみ方向を違えて北から65度西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で9.0ｍ、深さは最大で30㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.0～1.5ｍである。

26号畑跡は、東西南北とも５ｍの範囲に、７列に並ぶ８条の畝間溝跡からなる。畝間溝の方向は北から約15度西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.8ｍ、深さは最大で６㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.7～1.5ｍである。

27号畑跡は、南北14ｍ、東西12ｍの範囲に、９列に並ぶ10条の畝間溝跡からなる。畝間溝の方向は北から50～61度西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.9ｍ、深さは最大で10㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.2～1.7ｍである。

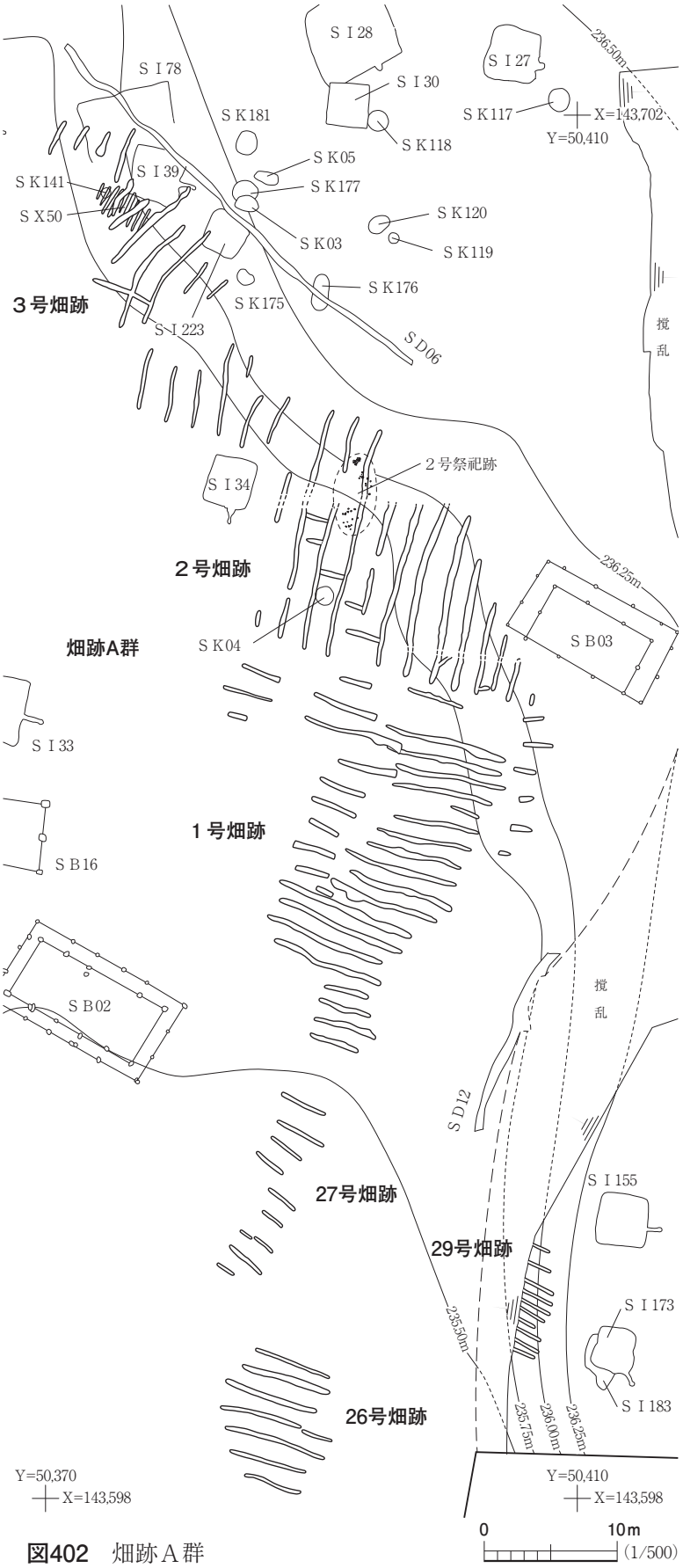


図402　畑跡Ａ群

なお、26・27号畑跡については、一部のみで掘削を終了している。

29号畑跡は、南北8.7ｍ、東西は最大2.9ｍが遺存する。前述のように西側が攪乱で失われている。10列に並ぶ10条の畝間溝跡からなる。畝間溝の方向は北から65度前後西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で2.5ｍが遺存し、深さは最大で13㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.6～1.3ｍである。

各畑跡の畝間溝跡からは、ごく少量の土師器小片が出土しているが、いずれも畑跡に伴うとは判断できないものである。

これらの畑跡の畝間溝には、基本土層ＬⅡａ②に近似する褐色土塊を多く含んだ粘質の暗褐色土が堆積していた。

畑跡Ａ群の年代については、３号畑跡が39号住居跡と重複しこれより新しいことから、39号住居跡の年代である平安時代より新しく位置づけられる。堆積土はＬⅡａ②に近似した土が堆積している。これは周辺に位置する奈良時代の堆積土に近似している。

このようなことから、Ａ群としてまとめた中にも多少の時間差が存在することも考えられる。周辺遺構との関連からは奈

良時代～中世の時間幅の中に位置づけることができる。

なお、３号畑跡の堆積土について自然科学分析を実施したが、植物栽培の痕跡を示すような根拠は得られていない。（青山・神林）

畑跡Ｂ群　ＳＸ04～13・18・47・48（図403、写真310・311・317～319）

４～13・18・47・48号畑跡からなる一群である。調査区北西部、Ⅲ・Ⅳ区に、これら13箇所の畑跡がゆるやかなまとまりをもって分布する。Ｄ～Ｊ－７～17グリッドに位置し、検出面はＬⅡａ③、ＬⅡｂ①である。Ｃ群とした38～40号畑跡と重複し、これらよりも新しい。

本群13箇所の畑は、東西約62ｍ、南北約94ｍの範囲にやや散漫に広がり、この中でさらに南北２つのグループに大別できる。両者の間には幅６ｍほどの空閑地がある。この他、北側の離れた位置に18号畑跡が位置する。検出面が同じであることから本群に含めた。

北部のグループは４～７・18・47・48号畑跡からなる。４～７号畑跡がまとまり、18号畑跡が北に離れて位置する。

南部のグループは８～13号畑跡からなる。北部に８号、西端部に12号、そこから東に向かって11号、10号、９号の順で並び、南東端には13号の畑跡が位置する。畝は、５・11・13号畑跡がおおむね東西に、４・６～10・12号畑跡がおおむね南北に延びる。

４号畑跡は、東西12ｍ、南北７ｍの範囲に並ぶ５列５条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は北から15度前後東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.9ｍ、深さは最大で10㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.2～1.7ｍである。39・42・43号住居跡と重複し、42号住居跡（９世紀）、本畑跡、43号住居跡（10世紀）の順に変遷する。

５号畑跡は、東西18ｍ、南北24ｍの範囲に並ぶ11列13条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は北端の１条のみが北から８度ほど東に傾く他は、北から70～90度ほど西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で8.4ｍ、深さは最大14㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.7～3.5ｍである。71号住居跡、２・４号溝跡と重複し、71号住居跡（平安時代）、本遺構、２・４号溝跡（中世頃）の順に変遷する。

６号畑跡は、東西５ｍ、南北10ｍの範囲に並ぶ４列４条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は、北から23度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で6.7ｍ、深さは最大で16㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.3～1.5ｍである。他の遺構との重複はない。

７号畑跡は、東西７ｍ、南北10ｍの範囲に並ぶ４列４条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は、北から３～７度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で8.7ｍ、深さは最大で５㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.2～1.9ｍである。２号溝跡（中世頃）と重複し、これよりも古い。

８号畑跡は、東西12ｍ、南北９ｍの範囲に並ぶ５列５条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は北から12～24度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.1ｍ、深さは最大で13㎝、畝間溝跡の間隔は1.3～3.4ｍである。他の遺構との重複はない。

９号畑跡は、東西13ｍ、南北６ｍの範囲に並ぶ７列７条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向

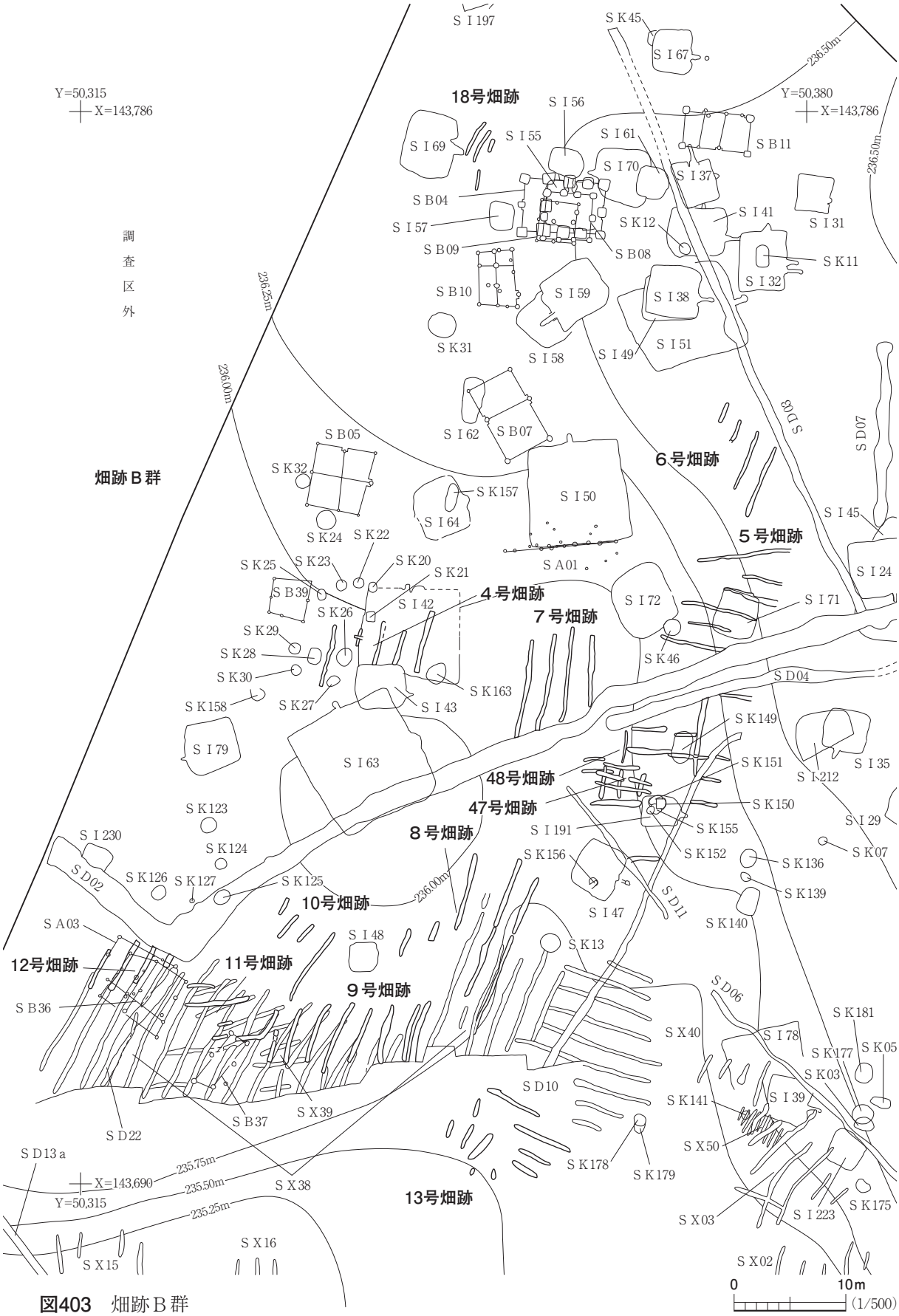

Y=50,315
X=143,786
Y=50,380
X=143,786
調査区外
畑跡B群
18号畑跡
6号畑跡
5号畑跡
4号畑跡
7号畑跡
48号畑跡
47号畑跡
8号畑跡
10号畑跡
12号畑跡
11号畑跡
9号畑跡
13号畑跡
SI197
SK45
SI67
SI56
SI55
SI61
SB11
SI69
SI70
SI37
SB04
SI41
SI31
SI57
SK12
SB09
SB08
SK11
SB10
SI59
SI38
SI32
SK31
SI58
SI49
SI51
SI62
SB07
SD08
SD07
SB05
SK32
SK157
SI50
SI64
SK24
SK22
SI45
SK25
SK23
SK20
SK21
SA01
SB39
SI42
SI72
SI71
SI24
SK26
SK46
SK29
SK28
SK30
SK163
SD04
SK158
SK27
SI43
SK149
SI79
SI63
SK151
SI35
SI-212
SK123
SK150
SI29
SI230
SK124
SI191
SK155
SK07
SD02
SK126
SK127
SK125
SK156
SK152
SK136
SK139
SD11
SI47
SK140
SA03
SI48
SK13
SD06
SB36
SK181
SX40
SI78
SK177
SK05
SK03
SD10
SI39
SK141
SB37
SX39
SD22
SX50
SK178
SK179
SD13a
X=143,690
Y=50,315
235.75m
235.50m
235.25m
SX38
SX03
SI223
SK175
SX16
SX15
SX02
236.50m
236.25m
236.00m
0
10m
(1/500)

図403　畑跡B群

は北から12～22度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で6.8ｍ、深さは最大で８㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.9～1.8ｍである。他の遺構との重複はない。

10号畑跡は、東西５ｍ、南北９ｍの範囲に並ぶ４列４条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は北から25～42度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.3ｍ、深さ最大で８㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.0～1.8ｍである。他の遺構との重複はない。

11号畑跡は、東西８ｍ、南北７ｍの範囲に並ぶ５列６条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向はおおむね東西に延びるものの、南から２番目に位置する１条のみは東半が大きく北へ曲がる。この部分が北から28度東に傾く他は、北から85～90度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で5.8ｍ、深さ最大で11㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.8～1.5ｍである。他の遺構との重複はない。

12号畑跡は、東西８ｍ、南北５ｍの範囲に並ぶ４列４条の畝間溝跡からなる。２号溝跡と重複し、これよりも古い。畝間溝跡の方向は北から27度ほど東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で5.0ｍが遺存する。深さは最大で12㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.1～1.5ｍである。

13号畑跡は東西11ｍ、南北８ｍの範囲に並ぶ10条の畝間溝跡からなる。本畑跡は畝間溝跡の延びる方向によって東西に大きく二分される。本畑跡の東半部は畝間溝跡がおおむね東西方向に延びる４列４条、西半部はおおむね南北方向に延びる４列６条からなる。畝間溝跡の延びる方向は、東半部が北から55～65度西に、西半部が北から20～42度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で5.5ｍ、深さは最大で10㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.8～1.4ｍである。

北側にやや離れて位置する18号畑跡は、東西２ｍ、南北６ｍの範囲に並ぶ４条の畝間溝跡からなる。重複する遺構はない。畝間溝跡の方向は北から５～40度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.4ｍである。深さは最大で12㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.8～1.0ｍである。

47号畑跡は、東西６ｍ、南北４ｍの範囲に並ぶ４列７条の畝間溝からなる。48号畑跡より新しい。畝間溝はほぼ東西方向に延び、畝間溝の長さは最大５ｍ、深さは最大で約10㎝、畝間溝どうしの間隔は0.7～1.5ｍである。

48号畑跡は、東西４ｍ、南北３ｍの範囲に並ぶ３条の畝間溝からなる。47号畑跡より古い。畝間溝はほぼ南北方向から最大10度東に傾く。畝間溝の長さは最大３ｍ、深さ10㎝ほど、畝間溝どうしの間隔は1.4～2.0ｍである。

堆積土はＬⅡａ①・②に近似した暗褐色土が堆積している。なおＬⅡａ②は奈良時代の遺構に堆積がみられ、Ｂ群畑跡の中には、この土が堆積するものとしないものがあることから、これらの畑跡には若干の時間差がある可能性も考えられる。

遺物は、７号畑跡から12点の土師器片が出土したが、遺構に伴うとは判断できないものである。

畑跡Ｂ群の年代については、４・５号畑跡が９世紀の住居跡である42・71号住居跡よりも新しいことからそれ以降、さらに４号畑跡については10世紀の住居跡である43号住居跡よりも古いことから、少なくともこれについては10世紀以前に廃絶していたものと考えられる。７・12号畑跡は中世頃に位置づけられる２号溝跡よりも古い。

以上のような切り合い関係から、年代は平安時代、9世紀に位置づけられる。周囲には平安時代の住居跡群が位置し、これらと同時に存在したものと考えられる。（青山・神林）

畑跡C群　SX38～40（図404、写真319）

38～40号畑跡からなる一群である。調査区西部、Ⅳ区の南部からⅢ区の北東部に位置する。D～I－14～16グリッド、LⅡb②・③で検出された。畑跡B群のうち8・9・11・12号畑跡と重複し、これらよりも古い。この他、38号畑跡が、36・37号建物跡（中近世）、22号溝跡（古墳時代後期）、12号畑跡（平安時代）と重複し、22号溝跡より新しく、37号建物跡と12号畑跡より古い。36号建物跡とは直接の切り合い関係がない。40号畑跡が10号溝跡（中世）と重複し、これより古い。

本群3箇所の畑は、東西約56m、南北約21mの範囲に広がる。西部から中央部では38号畑跡が畝間溝をおおむね南北方向に向けて位置する。東部では40号畑跡が38号畑跡に切られ、畝間溝をおおむね南北方向に向けて位置する。中央部では、39号畑跡が、38号畑跡に切られ、畝間溝をおおむね南北方向に向けて位置する。

38号畑跡は、東西46m、南北19mの範囲に並ぶ22列25条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は西端が北から60～70度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で14m、深さは10cm前後、畝間溝跡どうしの間隔は1.0～2.8mである。

39号畑跡は、東西14m、南北15mの範囲に並ぶ9条の畝間溝跡からなる。37号建物跡と重複するが、直接の切り合い関係にはない。畝間溝跡の方向は北から70～80度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で12m、深さは10cm前後、畝間溝跡どうしの間隔は1.0～2.7mである。

40号畑跡は、東西14m、南北10mの範囲に並ぶ7列8条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は65～75度西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で13m、深さは10cm前後、畝間溝跡どうしの間隔は1.4～2.0mである。

これらの畑の畝間溝には粘質の褐色土が堆積しており、LⅡb③に近似している。

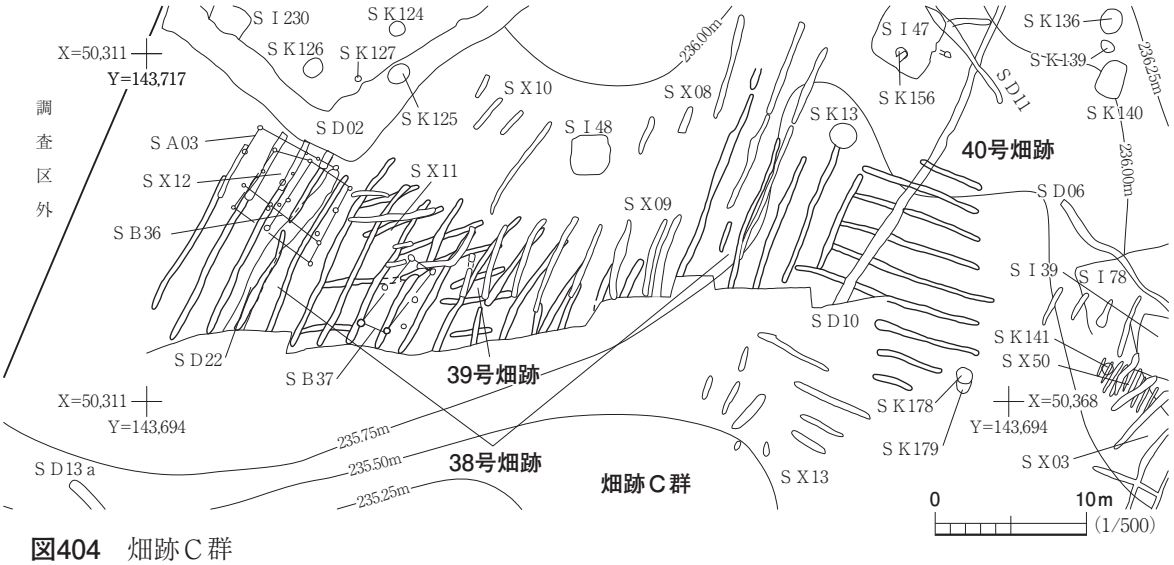


図404　畑跡C群

遺物は、38・39号畑跡から土師器の小片がそれぞれ36点と15点出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。

本畑跡群の年代は、古墳時代後期の遺物が出土した22号溝跡より新しく、平安時代の12号畑跡より古いことから、古墳時代後期以降、平安時代以前の時間幅の中にあり、周辺に位置する遺構との関係から古墳時代後期のものである可能性が高い。（青　山）

畑跡Ｄ群　ＳＸ15～17（図405、写真312）

15～17号畑跡からなる一群である。調査区西部にこれら３箇所の畑跡がまとまって分布している。Ⅲ区、Ｃ～Ｇ－18～21グリッド、ＬⅡｂで検出された。

これら３箇所の畑跡は、東西42ｍ、南北32ｍの範囲に広がり、西から17・16・15号畑跡の順に並ぶ。畝間溝跡の方向はいずれもおおむね南北方向に延びる。これら３箇所の畑跡は互いに境界がはっきりしているわけではないものの、おおむね３箇所の畑跡とした。

15号畑跡は、東西19ｍ、南北30ｍの範囲に並ぶ14列25条の畝間溝跡からなる。13号溝跡、１号方形区画遺構と重複し、いずれよりも古い。畝間溝跡の方向は北から１～18度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で15.1ｍ、深さは最大で８㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.2～2.1ｍである。

16号畑跡は、東西13ｍ、南北23ｍの範囲に並ぶ７列９条の畝間溝跡からなるが、中央部分には畝間溝跡が検出されず空閑地となっている。13号溝跡と重複し、これより古い。畝間溝跡の方向

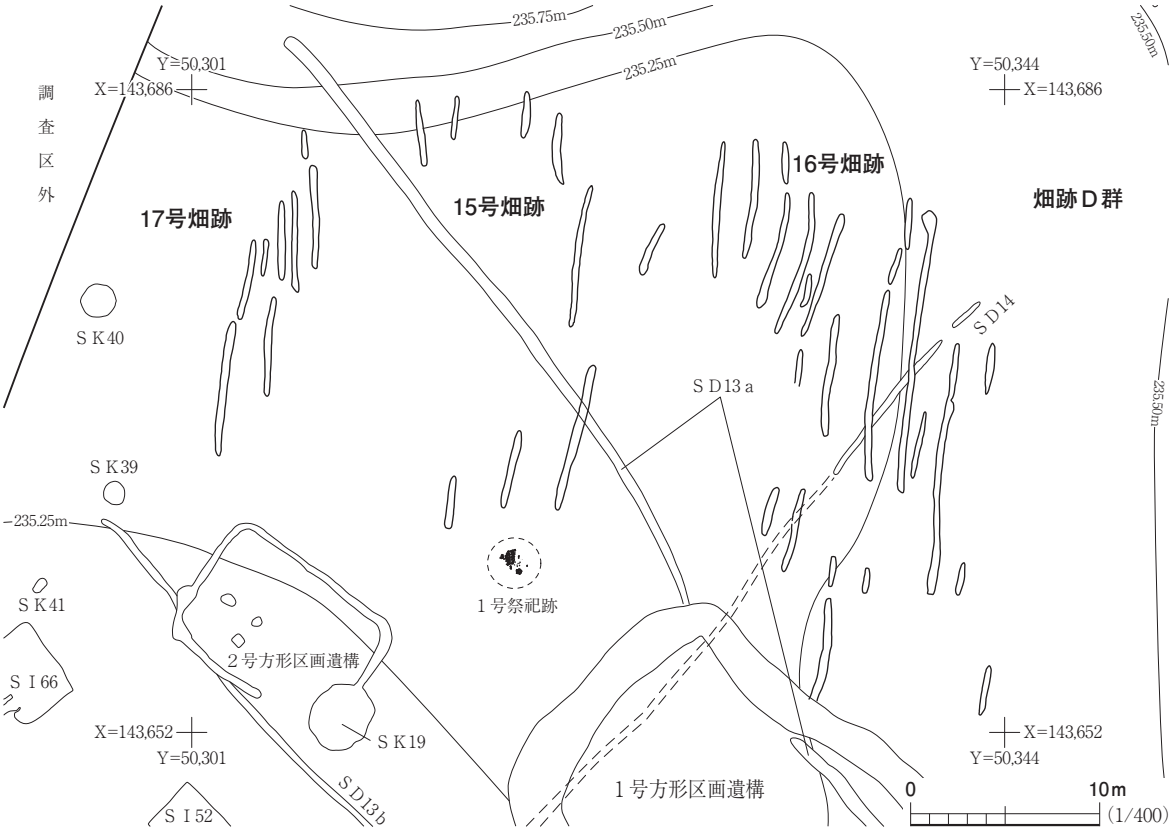


図405　畑跡Ｄ群

は西端が北から５度西、東端が北から23度東にそれぞれ傾き、その間については徐々に西から東へ傾きを変える。畝間溝跡の長さは最大で7.9ｍ、深さは最大で12㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.3～3.4ｍである。

17号畑跡は、東西６ｍ、南北17ｍの範囲に並ぶ５列８条の畝間溝からなる。他の遺構との重複はない。畝間溝跡の方向は、北から０～10度東に傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.2ｍ、深さは最大で10㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～0.8ｍで、他の畑跡に比して間隔が狭い。

畝間溝にはＬⅡａに近似する暗褐色土が堆積していた。遺物はいっさい出土しなかった。中世の遺構である１号方形区画遺構に15号畑跡が切られていることから、それ以前の年代と思われ、周辺の遺構の年代や堆積土を考慮すると平安時代の可能性が高いと考えている。　（青　山）

畑跡Ｅ群　ＳＸ20・21・24・25（図406）

20・21・24・25号畑跡からなる一群である。調査区南西部において、これら４箇所の畑跡がやや散漫に分布する。Ⅲ区、Ｄ～Ｇ－25～27グリッド、ＬⅡｂで検出された。

これら４箇所の畑跡は、東西31ｍ、南北21ｍの範囲に広がり、北西部に25号、北東部に24号、南西部に20号、南東部に21号畑跡が位置する。周囲には、古墳時代後期、平安時代、中世の遺構が数多く位置する。

20号畑跡は、東西５ｍ、南北４ｍの範囲に並ぶ３列３条の畝間溝跡からなる。古墳時代後期の

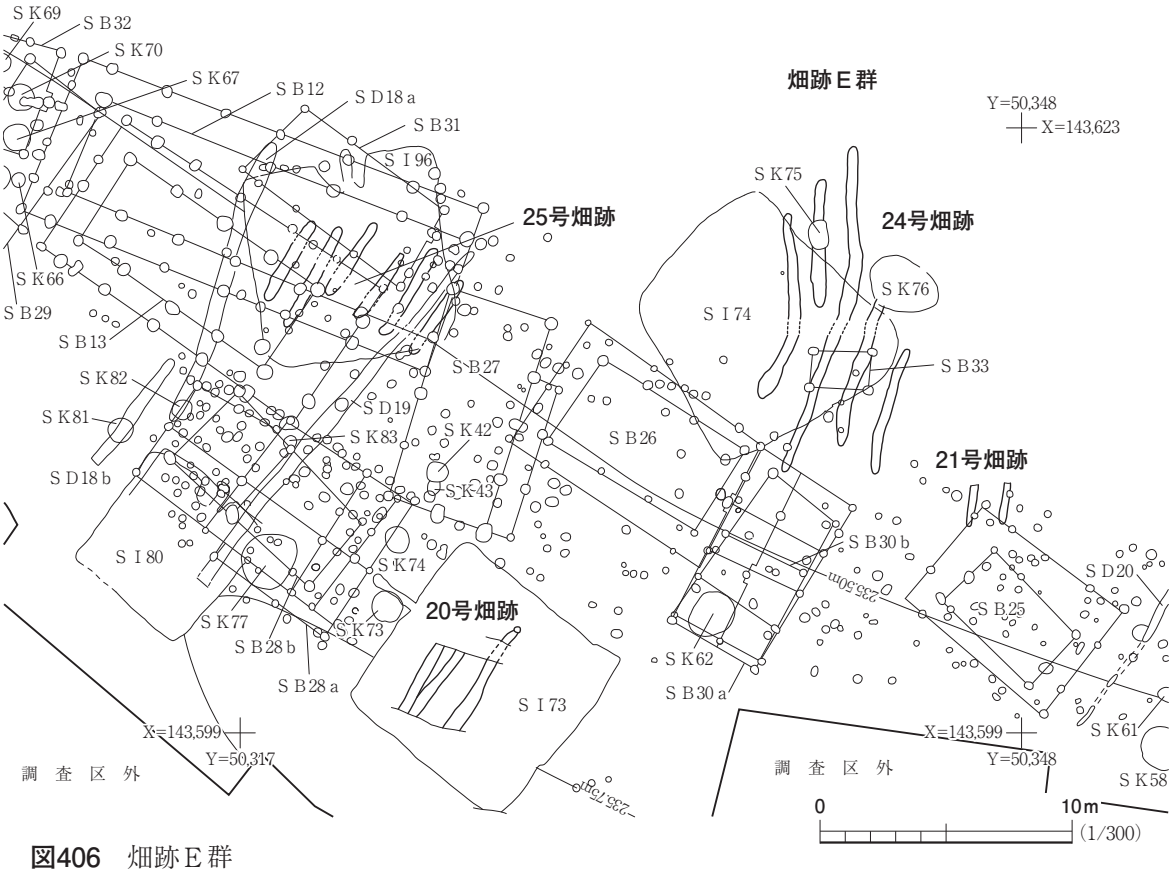


図406　畑跡Ｅ群

73号住居跡と重複し、これより新しい。南部は攪乱によって壊されていた。畝間溝の方向は北から25～40度東に傾く。畝間溝跡の長さは、最大で4.7ｍが遺存していた。深さは最大で19㎝、畝間溝跡どうしの間隔は０～1.1ｍである。

21号畑跡は、東西1.7ｍ、南北1.7ｍの範囲に並ぶ２列２条の畝間溝跡からなる。中世の25号建物跡と重複し、これより古い。南部は削平されている。畝間溝跡の方向は、北から８度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で1.7ｍが遺存していた。深さは最大で10㎝、畝間溝跡どうしの間隔は1.0ｍである。

24号畑跡は、東西６ｍ、南北13ｍの範囲に並ぶ５列５条の畝間溝跡からなる。古墳時代後期の74号住居跡と切り合い、これよりも新しい。また、33号建物跡、75・76号土坑と切り合い、これよりも古い。76号土坑は中世に位置づけられる遺構である。畝間溝跡の方向は、北半がおおむね南北方向に延びているものの、中央部で西へ曲がり、南半は北から22～25度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で13ｍ、深さは最大で16㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.5～1.2ｍである。

25号畑跡は、東西８ｍ、南北５ｍの範囲に並ぶ７列７条の畝間溝跡からなる。中世の13号建物跡と重複し、これより古い。畝間溝跡の方向は、北から30～42度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で4.5ｍ、深さは最大で14㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.4～1.1ｍである。

これらの畑跡の畝間溝には、ＬⅡａに近似する暗褐色土が堆積していた。

これらの畑跡の年代は、遺構の切り合いからは古墳時代後期以降、中世以前の年代幅にあり、周辺の遺構との関連や堆積土から、平安時代の可能性が高い。（青　山）

畑跡Ｆ群　ＳＸ30・49・51・53・56・57（図407、写真317・320）

30・49・51・53・56・57号畑跡からなる一群である。調査区北部のⅠ・Ⅱ区、Ｍ～Ｒ－11～19グリッド、ＬⅣで検出された。

これら８箇所の畑跡は、東西55ｍ、南北77ｍの範囲に広がり、周囲を古墳時代前期の遺構に取り囲まれている。88・154・160・164・167・171・194・198・201～204・207～211・214・215・217～219号の各住居跡などと重複し、そのいずれよりも新しい。

30号畑跡は、東西13ｍ、南北37ｍの範囲にいくつかの小群に分かれて散漫に畝間溝跡が分布する。東側が攪乱によって失われている。小群は南北に並ぶ３箇所からなり、いずれも畝間溝が東西方向に延びる。北部の小群は10条、中央部の小群は11条、南部の小群は３条の、あわせて24条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の長さは最大で5.8ｍ、深さは最大で15㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.6～1.6ｍである。

49・51・53号畑跡は、調査の時点ではそれぞれをまとまりとして把握していたが、各畑跡の境が明瞭でなく、一つの畑であったと思われる。東西55ｍ、南北26ｍの範囲に90条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、西部の51号畑跡がほぼ東西方向に延び、中央部の53号畑跡でやや南へ向きを変え、東部の49号畑跡では、東から15～30度南へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で13ｍ、畝間

溝跡どうしの間隔は最大で1.8ｍである。

56号畑跡は、東西９ｍ、南北９ｍの範囲に15条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、南端がほぼ東西方向に延び、北に向かうにしたがってしだいに方向を変え、北端では東から約22度南へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で6.4ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～0.6ｍである。

57号畑跡は、東西５ｍ、南北６ｍの範囲に９条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、ほぼ東西方向で、一部に東から約５度南へ傾くものがある。畝間溝跡の長さは最大で4.2ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は最大で1.4ｍである。

本畑跡群からは、30・49号畑跡でそれぞれ20点と９点の土師器片が出土している。遺構に伴う

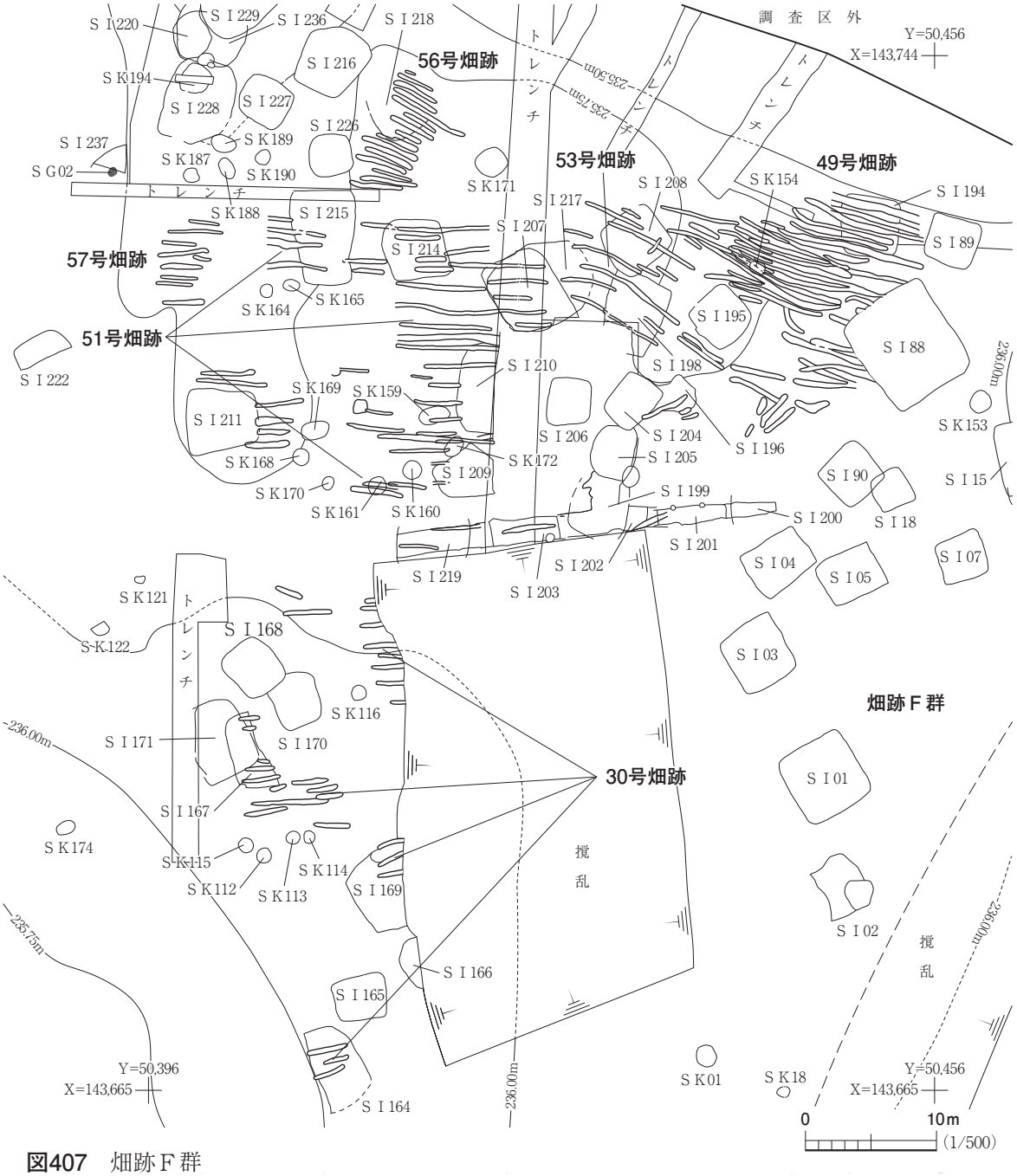


図407　畑跡Ｆ群

ものではないが、いずれも古墳時代前期のものである。このうち１点を図示した。

図407－５は、有孔鉢で、底部と体部下半が遺存し、底部には焼成前に一孔が穿たれている。

本畑跡群の年代は、検出面が古墳時代前期の遺構と同じＬⅣであることから、およそ古墳時代前期に位置づけられる。切り合い関係からは、古墳時代前期の住居跡より本畑跡群が新しい。このことは、本畑跡群が、住居跡群の各住居跡が廃絶したのち、その空閑地に作られたことを示している。本畑跡群から出土した土器の年代とも矛盾しない。（青　山）

畑跡Ｇ群　ＳＸ23・31～37（図408・410、写真317・318）

23・31～37号畑跡からなる一群である。調査区東部のＶ区、Ｓ～Ｗ－15～23グリッド、ＬⅢａ③で検出した。この面を覆うＬⅢａ②は耕作土と思われる。

これら８箇所の畑跡は、東西15ｍ、南北93ｍの範囲に広がる。北東から南西に向かって緩やかに標高を下げる谷地形の西側斜面にこれら８箇所の畑跡が並ぶ。畑跡はいずれも斜面に位置し、谷底からはまったく検出されなかった。重複する遺構はないが、西側の平坦面には住居跡群が、32号畑跡の西側と北側には４基の土器埋設遺構が、34号畑跡の南東の上層には１号土器集中地点が位置する。下層には畑跡Ｈ群が位置する。いずれも古墳時代前期の遺構である。

23号畑跡は、東西14ｍ、南北27ｍの範囲に39条の畝間溝跡が並ぶ。本群ではもっとも規模の大きい畑跡である。本畑跡のやや下層に31号畑跡が検出された。畝間溝跡の方向は、北から55～70度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で8.9ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.5～1.7ｍである。

31号畑跡は、東西12ｍ、南北８ｍの範囲に21条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から35度前後西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.7ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.4～0.7ｍである。

32号畑跡は、東西７ｍ、南北７ｍの範囲に10条の畝間溝跡が並ぶ。南部の畝間溝跡にはやや方向の異なるものが重複している。畝間溝跡の方向は、北から60度前後西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で6.4ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.4～1.2ｍで、南半部が狭く北半部が広い。

33号畑跡は、東西８ｍ、南北16ｍの範囲に23条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から39度前後度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で5.9ｍで、概して北部に位置するものが長い。畝間溝跡どうしの間隔は0.5～1.4ｍである。

34号畑跡は、東西７ｍ、南北５ｍの範囲に12条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から40～55度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.2ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～1.1ｍである。

35号畑跡は、東西10ｍ、南北７ｍの範囲に11条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から56度前後西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で4.9ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.6～1.3ｍである。

36号畑跡は、東西３ｍ、南北４ｍの範囲に８条の畝間溝跡が並ぶ。本群ではもっとも規模が小さい。畝間溝跡の方向は、北から45～50度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.1ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.5～0.8ｍである。

37号畑跡は、東西６ｍ、南北11ｍの範囲に９条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の配置から南２つ

37号畑跡
35号畑跡
36号畑跡
34号畑跡
33号畑跡
32号畑跡
23号畑跡
31号畑跡
畑跡G群
43号畑跡
42号畑跡
45号畑跡
46号畑跡
41号畑跡
44号畑跡
畑跡H群
1号土器集中地点
掘りすぎ
トレンチ
調査区外
Y=50,506
X=143,705
Y=50,525
X=143,692
X=143,615
Y=50,472
0
10m
(1/500)

図408　畑跡G・H群

の小群に分けることができる。畝間溝跡の方向は、北から60～70度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で3.6ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は北部が広く1.2～1.6ｍ、南部が狭く0.5～0.9ｍである。

これらの畑跡が掘り込まれる基盤層には、部分的に多量の炭化材や焼土が含まれる部分が認められた。基本土層の断面観察では、掘形などは認められず、畑の部分にのみ集中して含まれていた。具体的性格については不明であるが、畑跡と何らかの関連を持つものと考えられる。

前述したように、本畑跡群の上層と下層はそれぞれ遺物包含層が形成され、畝間溝跡からは比較的多くの土器が出土した。いずれも古墳時代前期の土師器片で、各畑跡から出土した土器を集計すると97点である。31号畑跡の周辺では、遺物がまとまって出土しており、これらを図412―１～４に示した。遺物は、正位で置かれた１に覆いかぶせるように２が逆位で出土した。３も出土状況から流れ込みなどではなく、その場に正位で置かれたと判断された。このように遺物包含層の遺物と異なり、意図的に畑の傍らに遺棄したような出土状態を示している。

図412－１・２は、鉢である。いずれも平底で口縁部を欠失し、１は体部外面に赤彩を、２はハケメののちミガキを施す。３は、壺である。頸部を欠失する。平底でややつぶれた球形の体部と二重口縁をもつ。磨滅のため調整は不明であるものの、外面と口縁部内面に赤彩が施されている。体部には小孔が２箇所穿たれている。一つは径６㎜で外面から内面に向けて焼成後に、もう一つは径５㎜で外面から内面に向けて焼成前に穿孔されている。４は、甕である。球胴で「く」字口縁をもつ。外面にナデ、内面にヘラナデ調整を施す。

本畑跡群の上下層がいずれも古墳時代前期の遺物包含層であることから、本畑跡群の年代は古墳時代前期に位置づけられる。（青山・神林）

畑跡Ｈ群　ＳＸ41～46・54（図408・411、写真319）

41～46・54号畑跡からなる一群である。調査区東部のＶ区、Ｒ～Ｘ－15～23グリッドで検出された。畑跡Ｇ群の調査を終えてＬⅢａ③・④を除去したところ、ＬⅢａ⑤の上面で検出された。本遺構を覆っていたＬⅢａ④は暗褐色砂質土で本畑跡群の耕作土と思われ、古墳時代前期の遺物包含層にもなっていた。

本畑跡群は、東西18ｍ、南北90ｍの範囲に広がる。上層のＧ群と同様、北東から南西に向かって緩やかに下る谷地形の西側斜面に、北から43・42・45・46・41・44号畑跡の順に並ぶ。畑跡はいずれも斜面に位置し、傾斜が緩やかな北部では畑跡の幅が18ｍほどと広いものの、傾斜が比較的急な南部では７ｍほどに狭まる。54号畑跡のみは東にやや離れた位置にある。重複する遺構はない。西側の平坦面には古墳時代前期の住居跡群が位置する。

41・44号畑跡は、それぞれ別の畑跡として調査したが、畝間溝跡の向きがそろい、両者間に間隙がないことなどから一連の畑跡と考えられる。東西８ｍ、南北38ｍの範囲に64条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から37～55度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で4.4ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～1.5ｍである。

42号畑跡は、東西８ｍ、南北５ｍの範囲に10条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から46～57度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.8ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～1.2ｍである。

43号畑跡は、東西７ｍ、南北15ｍの範囲に25条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北部から南部に行くにしたがい角度を変え、北端では31度、南端では59度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で5.0ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～1.7ｍである。

45号畑跡は、東西４ｍ、南北13ｍの範囲に９条の畝間溝跡が並ぶ。畝間溝跡の方向は、北から48～55度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で4.0ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.3～3.0ｍである。

46号畑跡は、東西15ｍ、南北18ｍの範囲に27条の畝間溝跡が並ぶ。本畑跡群の中ではもっとも規模が大きい畑跡である。畝間溝跡の方向は、北から51～65度西へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で14.6ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.4～1.7ｍである。

54号畑跡は、東西が遺存値で1.2ｍ、南北2.3ｍの範囲に３条の畝間溝跡が並ぶ。土層観察用畦の上面で検出された。北側に広がっていたものと思われる。畝間溝跡の方向は、北から22度東へ傾く。本畑跡群の中の他の畑跡と畝間溝跡の方向を90度違える。中央の畝間溝跡の南端部は西へ曲がる。畝間溝跡の長さは最大で2.4ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.5ｍである。

なお、上層のＧ群同様に、畑跡が掘り込まれる基盤層には、部分的に多量の炭化材や焼土が含まれる部分が認められた。中には長さ50㎝を超えるような炭化材が含まれている部分も認められた。基本土層の断面観察では、掘形などは認められず、畑がつくられている部分にのみ集中して含まれていた。具体的性格については不明であるが、畑跡と何らかの関連を持つものと考えられる。

前述したように、本畑跡群は遺物包含層に覆われていることもあり、畝間溝跡からは比較的多くの土器が出土した。いずれも古墳時代前期の土師器片で、各畑跡から出土した土器を合わせると86点であるが、畑跡に伴うといえるものではない。

本畑跡が埋没した理由を明らかにできる所見は得られなかったが、本畑跡群が谷筋に位置することを勘案すれば、増水によって運ばれてきた土砂によって埋没したことが考えられる。本畑跡群を覆うＬⅢａ③・④に含まれる土器がいずれも古墳時代前期のものであり、さらにその上面に古墳時代前期の畑跡群であるＧ群が本畑跡群とほぼ同じ場所に、畝間溝跡の向きをほぼ同じ方向に向けて作られていることは、本畑跡群を覆った土砂の上面に畝間溝の痕跡が凹凸として残っていて、それを踏襲した結果ではないかと考えられる。

本畑跡群の年代は、上述のような解釈から、古墳時代前期に位置づけられる。　（青山・神林）

22号畑跡　ＳＸ22（図409、写真317）

本畑跡は、Ⅴ区、Ｒ～Ｕ－23～25グリッド、ＬⅡｂで検出された。

東西29ｍ、南北19ｍの範囲に並ぶ23条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡はいずれもおおむね東西方向に延びるという他は、畝間溝跡の長さ、間隔が不規則である。他の遺構との重複はない。畝間溝跡の方向は、北から62～75度西に傾く。畝間溝跡の長さは最大で7.0ｍ、深さは最大で７㎝、畝

間溝跡どうしの間隔は0.4～3.0ｍである。遺物は、まったく出土しなかった。

年代は検出面から古墳時代後期～中世までの時間幅が考えられ、本畑跡の北約20ｍにある87号住居跡が最寄りの遺構で、これと同時期とすれば奈良時代に位置づけられる。　（青　山）

28号畑跡　ＳＸ28（図409、写真317）

本畑跡は、Ⅴ区、Ｑ・Ｒ－20～22グリッド、ＬⅣで検出された。

東西11ｍ、南北23ｍの範囲に並ぶ９条の畝間溝跡からなる。122号住居跡と切り合うものの、

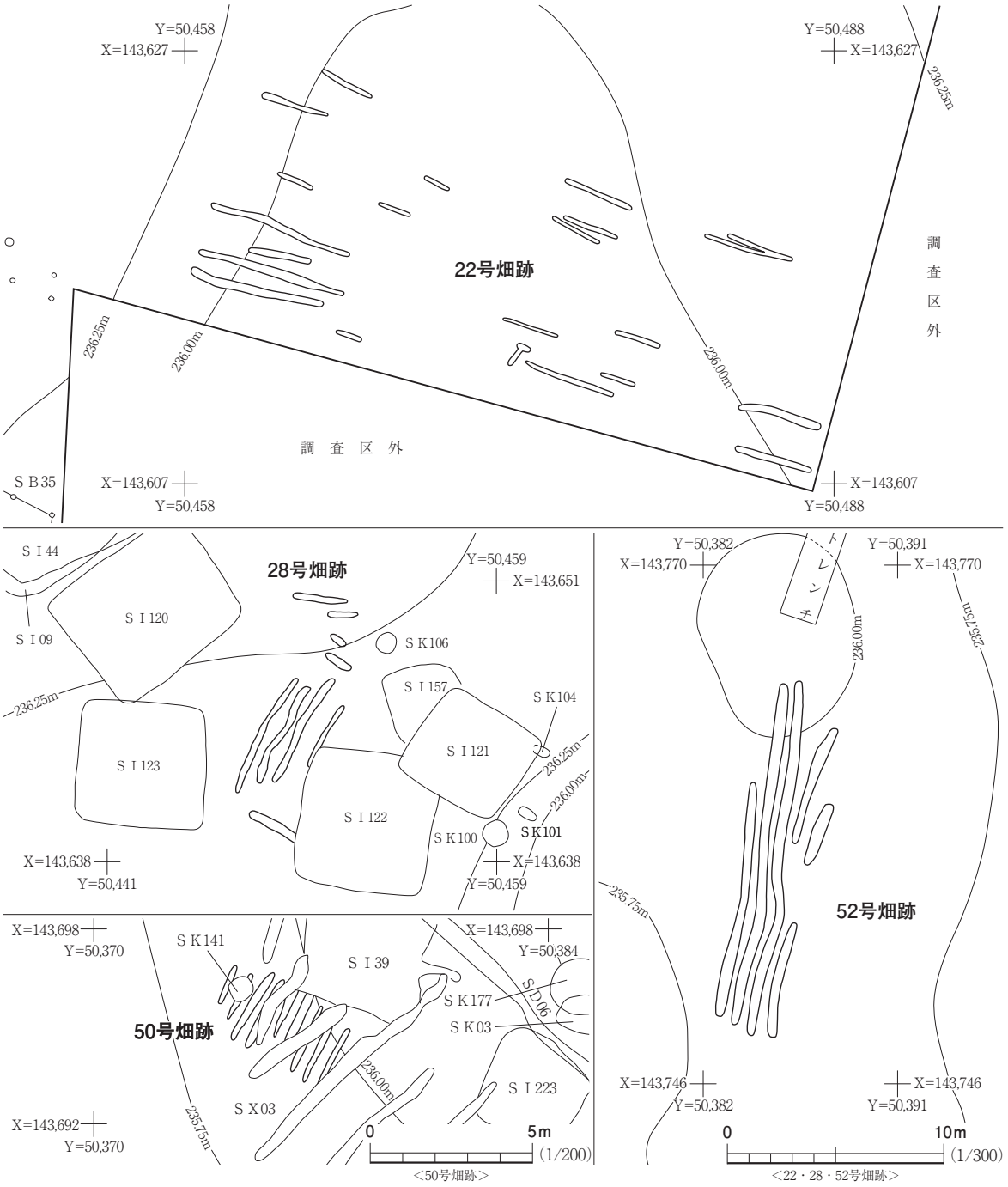


図409　22・28・50・52畑跡

先後関係不明のまま122号住居跡を先に掘り込んだ。本畑跡の畝間溝跡の方向は延びる方向が大きく二分される。一つはおおむね東西方向に延びるもので、本畑跡の北部に４条と南部に１条がある。もう一つはおおむね南北方向に延びるもので、本畑跡の中央部に４条ある。畝間溝跡の延びる方向は、前者が北から55～80度西へ、後者が北から25～35度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で6.0ｍ、深さは最大で９㎝、畝間溝跡どうしの間隔は0.1～1.2ｍである。遺物は出土しなかった。

本畑跡の年代は、検出面から、古墳時代前期に位置づけられる。（青　山）

50号畑跡　ＳＸ50（図409、写真320）

本畑跡は、Ⅱ区のＪ－16グリッド、ＬⅡｂで検出された。３号畑跡と重複し、これよりやや掘り下げたところで検出された。また平安時代の39号住居跡と141号土坑と重複し、本畑跡が古い。

東西４ｍ、南北３ｍの範囲に並ぶ９条の畝間溝跡からなる。畝間溝跡の方向は、北から25度前後東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大で2.4ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.5～0.6ｍである。畝間溝には榛名－伊香保テフラ(Hr－FP)とみられる白色粒を含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は、土師器片が24点出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。

本畑跡の年代は、平安時代から中世に位置づけられる３号畑跡や、北側のやや離れた位置の同じ面で検出された奈良時代の78号住居跡よりもやや下層で検出されたことや、細片だが稜をもつ丸底の土師器杯が堆積土から出土していることから、古墳時代後期頃のものと考えられる。（神　林）

52号畑跡　ＳＸ52（図409、写真320）

本畑跡は、Ⅰ区のＫ－９～11グリッド、ＬⅣで検出された。重複する遺構はない。

東西４ｍ、南北17ｍの範囲に畝間溝跡が６条並ぶ。方向は、北から５～20度東へ傾く。畝間溝跡の長さは最大16.5ｍ、畝間溝跡どうしの間隔は0.7～1.2ｍである。遺物は出土しなかった。

本畑跡の年代は、検出面から古墳時代前期に位置づけられる。（青　山）

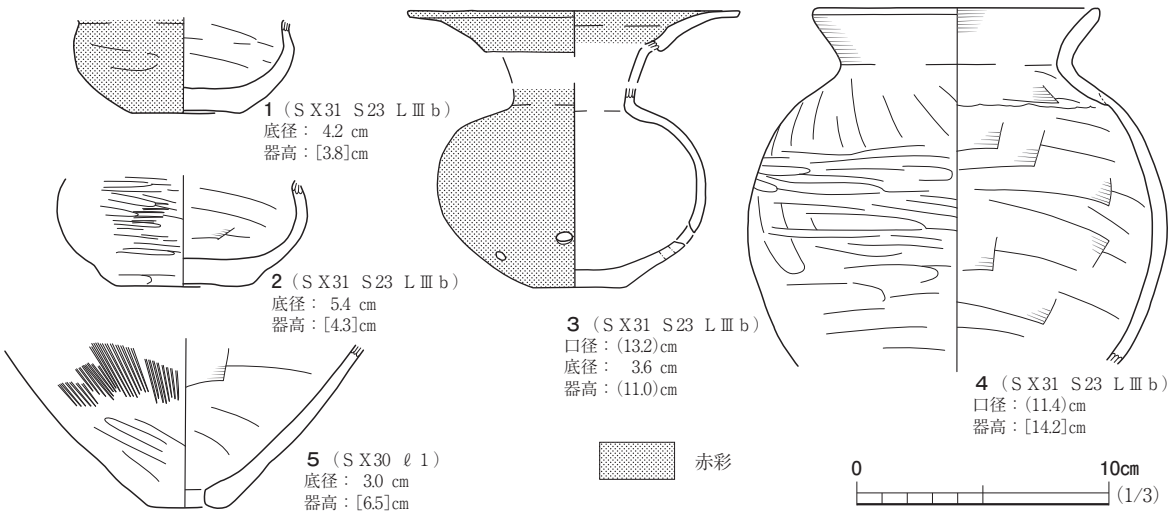


図410　畑跡出土遺物

第７節　方形区画遺構

１号方形区画遺構

遺　　構（図411～414、 写真321～324）

本遺構は長方形に巡る溝と、それによって区画された内側の方台部及び、区画の内外を結ぶ土橋状の通路で構成される大型遺構である。

調査区南東部にあたるⅢ区の、Ｄ－20・21、Ｅ－20～22、Ｆ－20～22、Ｇ－21・22グリッドにわたって位置する。南から北に向かって緩やかに傾斜する地点であり、もっとも高い所で標高235.6ｍ、低い所で標高235.0ｍである。検出面はＬⅡｂおよびＬⅢ上面である。南側の一部に確認調査のトレンチが掛かっており、このトレンチを精査した際に検出した。13ａ・14号溝跡および、16号畑跡が重複しており、13ａ号溝跡と16号畑跡より新しく、14号溝跡より古い。なお本遺構の北西約10ｍの位置には、近似した構造をもつ２号方形区画遺構が存在する。

平面形は長方形である。方位は北辺溝の上端線で北から50度西を示す。遺構全体の規模は、溝の外側上端部分を基点とすると最大で東西24.5ｍ、南北16.2ｍである。溝によって区画された内側の方台部は、溝内側上端部分を基点とすると最大で東西17.0ｍ、南北10.5ｍである。

溝は南辺・西辺・北辺で上端幅1.8ｍ～3.7ｍ、深さ0.5ｍ～１ｍである。北東隅で分岐し、東辺は２条の溝が巡る。東辺の溝は内側が幅２～４ｍ、深さ0.7ｍで、外側が幅1.5ｍ、深さ0.8ｍである。溝と溝の間は0.5～1.5ｍの幅で土手状に掘り残されている。

なお検出の段階では判然としなかったが、土層断面の観察と溝底面の高低差から、掘り直しが行われたことが明らかとなった。当初の掘削後に２度の掘り直しが行われており、新しい時期からａ→ｂ→ｃとした(図412)。いずれも溝が埋没もしくは埋めた後に、新たな溝を掘削している。東辺の２条の溝のうち、内側では２回の掘削が行われ、外側の溝には掘り直しの痕跡が認められなかった。よって東辺の２条の溝は、内側がｂ・ｃ、外側がａに対応すると判断した。

溝の堆積土は10箇所で観察し、このうち５箇所を断面図として図示した。ａに対応するのがＣ－Ｃ′のℓ１～11、Ｄ－Ｄ′のℓ１～12、Ｅ－Ｅ′のℓ１～８、Ｆ－Ｆ′のℓ１～６、Ｇ－Ｇ′のℓ１～９である。ｂに対応するのはＣ－Ｃ′のℓ 12～17、Ｄ－Ｄ′のℓ 13～18、Ｅ－Ｅ′のℓ ９～10、Ｆ－Ｆ′のℓ ７～10、Ｇ－Ｇ′のℓ 10～18である。ｃに対応するのはＣ－Ｃ′のℓ 19～21、Ｄ－Ｄ′のℓ 19～20、Ｆ－Ｆ′のℓ 11・12、Ｇ－Ｇ′のℓ 18～20である。

堆積土の様相は大きく３つに分けることができる。１つめは黒褐色及び暗褐色を呈する粘質土で、白色粒子を含むなどＬⅢに近似している。自然流入土も一部に認められるが、ＬⅣに由来する灰黄褐色土や褐灰色土の塊が多く混入しており、多くは人為的に埋めたと考えている。２つめは灰黄褐色及び褐灰色の粘質土及び粘土層である。これらは溝が掘りこまれているＬⅣと同じ土であり、基盤層に含まれる雲母粒や酸化鉄も認められる。これらの層も、ブロック状の堆積を示すもの

や、暗褐色や黒褐色土が混入することから、人為堆積と考えている。3つめはグライ化した粘土層である。この層は底面に接する位置に堆積しており、基盤層由来の灰黄褐色土塊の混入がほとんど認められないことから、溝が機能していた際の自然堆積土と考えている。なお、東辺の一部では人為的に埋めた痕跡が認められず、自然堆積と判断される状況が認められるなど、場所によって堆積要因が異なる可能性もある。また西辺では洪水堆積とみられる荒い砂層も確認された。a・b・cそれぞれの溝の堆積土の様相には、大きな差異は認められなかった。これらの溝がどの程度の期間存続していたかを示す所見は得られていない。ちなみに平成27年度調査で本遺構を完掘し、その

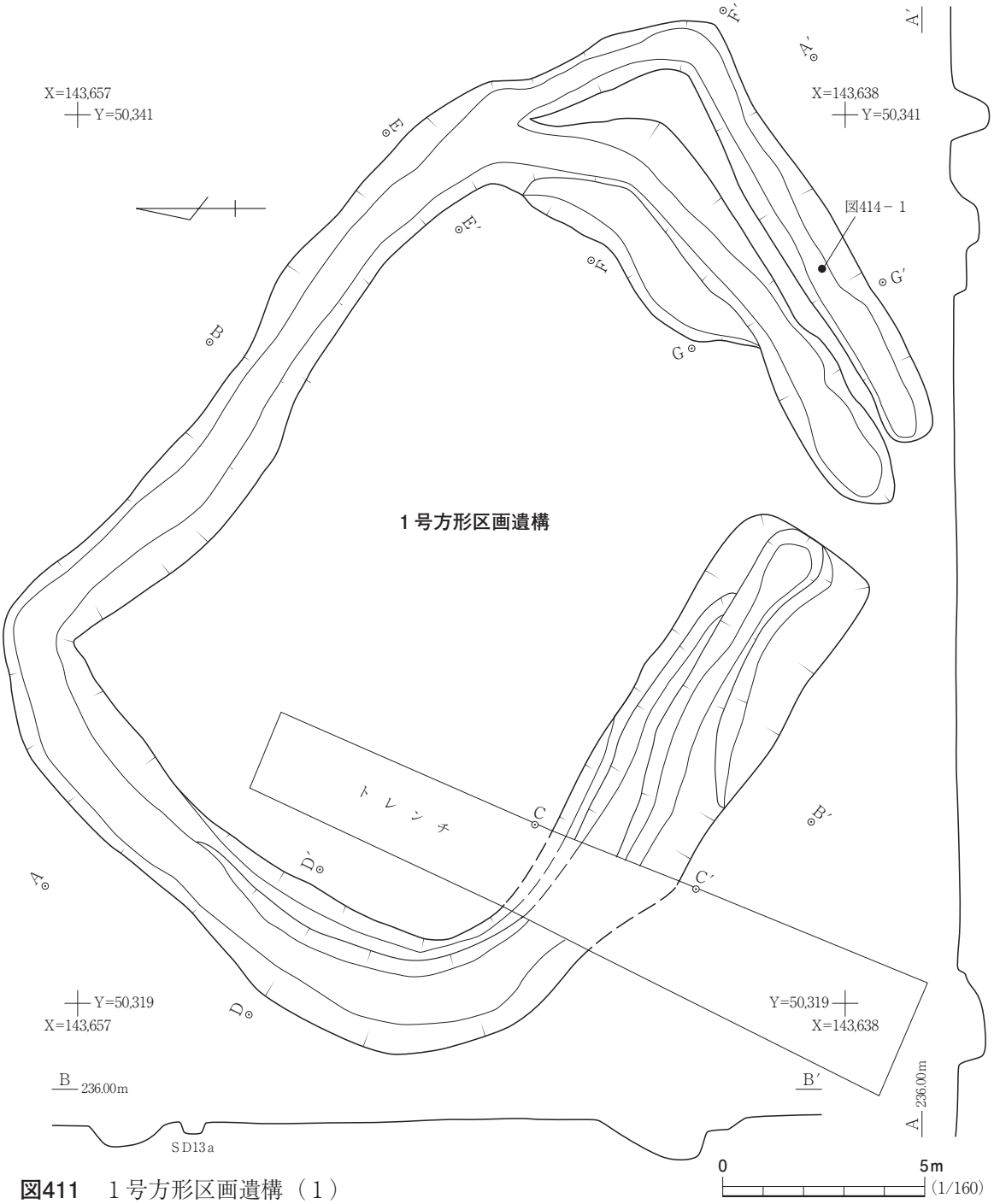


図411　1号方形区画遺構（1）

後の平成29年度調査終了までの約２年間養生せずに放置していたが、溝の壁面は大きくは崩落せず、しっかりと現状を保っていた。このことから溝は比較的長期間機能していたものと考えている。南東隅は掘り残されて土橋状の通路となっている。完掘状態で幅１ｍほどの規模であるが、時期によって幅は前後するものと思われる。他の位置に同様の施設は認められなかったことから、一貫してこの部分が区画内部への入口とされていたと考えられる。そして、入口の向きから、南側を意識した構造の遺構であることが伺える。

区画内側の方台部は、北側に向かってわずかに傾斜するが平坦である。溝が掘り直されるにつれて、区画内部の面積は拡大している。区画内部からは柱穴などは確認されず、建物やそれにともなう施設が存在したかについては不明である。土層の観察からは、内部に墳丘や盛土が存在した可能性はないと考えている。本遺構に直接伴うかは不明であるが、溝の堆積土中に掘立柱建物跡で確認される礎石や根石に使われるような、大きめの礫が含まれていた。一つの可能性として区画内部には、小型の礎石立ちや土台をもった構造物が存在したとも推察される。

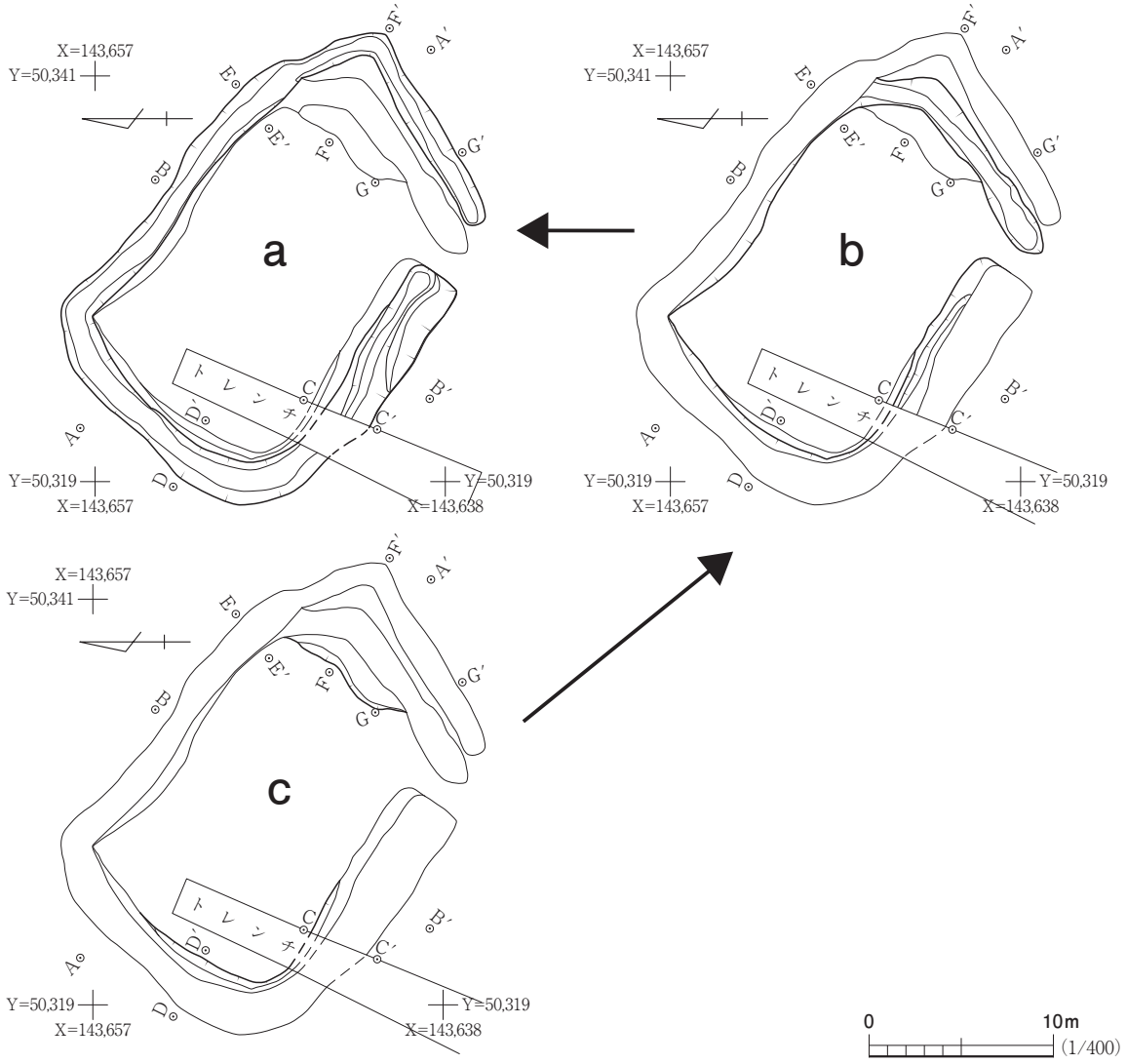
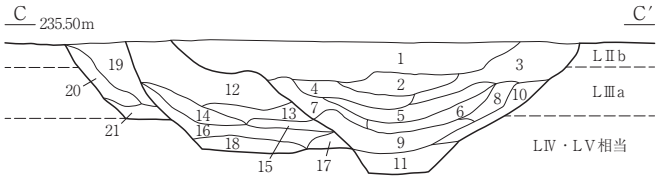
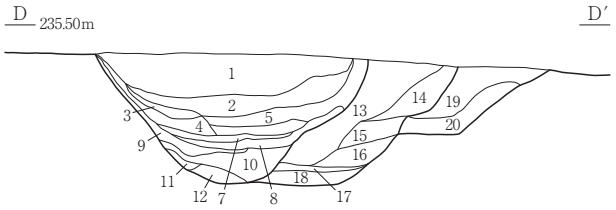


図412　１号方形区画遺構（２）



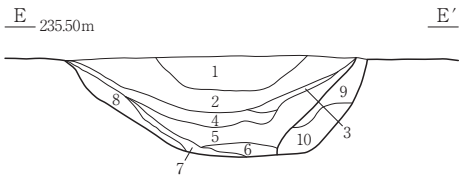
1号方形区画C－C′遺構堆積土

1　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（暗褐色土塊・白色粒含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊・白色粒含む）
3　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊多量、白色粒含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（白色粒含む）
5　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄多量）
6　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・白色粒少量）
7　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色粒少量、炭化物微量）
8　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄含む、炭化物・焼土粒微量）
9　黒褐色粘質土　10YR3/1
（灰黄褐色土塊含む、炭化物・焼土粒微量）
10　黒褐色粘質土　10YR3/1
（褐灰色粘土・酸化鉄含む、白色粒少量）
11　黒褐色粘土　10YR3/1（酸化鉄多量、白色粒少量）
12　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土塊・白色粒含む）
13　黒褐色粘質土　10YR2/3（酸化鉄少量、白色粒極多量）
14　褐灰色粘土　10YR4/1（灰黄褐色土小塊少量）
15　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄多量）
16　灰白色粘土　10YR7/1（酸化鉄多量）
17　黒色粘土　10YR2/1（酸化鉄含む）
18　褐灰色粘土　10YR5/1（酸化鉄多量）
19　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（褐灰色土塊含む、白色粒少量）
20　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土塊含む）
21　黒褐色粘土　10YR3/1（灰黄褐色土塊含む、白色粒少量）



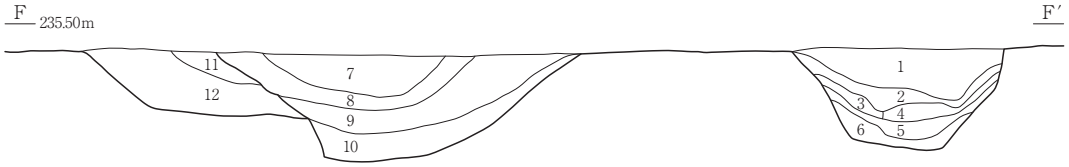
1号方形区画D－D′遺構堆積土

1　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土・白色粒含む）
2　灰黄褐色粘質土　10YR5/2
（暗褐色土塊・白色粒含む、炭化物微量）
3　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄多量）
4　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊多量、白色粒含む）
5　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄・白色粒含む）
6　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄・砂含む）
7　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・白色粒少量）
8　褐灰色砂　10YR4/1（細かい礫含む）
9　黒褐色粘質土　10YR3/1
（酸化鉄含む、白色粒少量、炭化物微量）
10　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土含む、炭化物・焼土微量）
11　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・褐灰色粘土塊含む、白色粒少量）
12　暗褐色粘土　10YR3/1（酸化鉄多量、白色粒少量）
13　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土大塊・白色粒含む）
14　褐灰色粘土　10YR4/1（灰黄褐色土小塊含む）
15　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄多量）
16　褐灰色粘土　10YR5/1（酸化鉄多量）
17　灰白色粘土　10YR7/1（酸化鉄・砂多量）
18　褐灰色砂　10YR5/1（酸化鉄多量）
19　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土塊含む）
20　黒褐色粘土　10YR3/1（灰黄褐色土塊含む、白色粒少量）



1号方形区画E－E′遺構堆積土

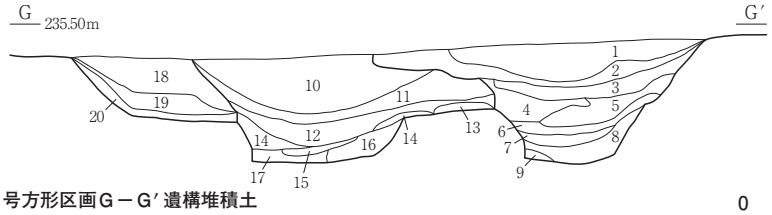
1　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（暗褐色土・白色粒含む、炭化物微量）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土・白色粒含む）
3　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄・白色粒含む）
4　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊・白色粒含む）
5　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄含む、炭化物・焼土微量）
6　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・褐灰色粘土含む、白色粒少量）
7　黒褐色粘土　10YR3/1（酸化鉄含む、白色粒少量）
8　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄多量）
9　黒褐色粘質土　10YR2/3　（酸化鉄少量）
10　褐灰色粘土　10YR5/1　（酸化鉄多量、雲母粒含む）



1号方形区画F－F′遺構堆積土

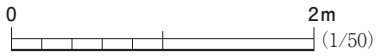
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土・白色粒含む）
2　灰黄褐色粘質土　10YR5/2
（暗褐色土・白色粒含む、炭化物微量）
3　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊多量、白色粒含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄・白色粒含む）
5　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・白色粒少量）
6　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄含む、炭化物・焼土微量）
7　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土大塊含む）
8　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土大塊含む、白色粒極多量）
9　黒褐色粘質土　10YR2/3（酸化鉄少量）
10　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄多量）
11　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（褐灰色土塊含む、白色粒少量）
12　黒褐色粘土　10YR3/1（灰黄褐色土塊含む、白色粒少量）

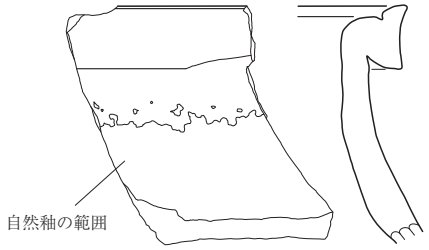
図413　1号方形区画遺構（3）



１号方形区画Ｇ－Ｇ′遺構堆積土

1　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土塊・白色粒含む）
2　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（暗褐色土・白色粒含む、炭化物微量）
3　黒褐色粘質土　10YR3/1（灰黄褐色土多量、白色粒含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄含む）
5　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄・白色粒少量）
6　黒褐色粘質土　10YR3/1（酸化鉄含む、白色粒少量、炭化物微量）
7　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（酸化鉄多量）
8　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄含む、炭化物・焼土粒微量）
9　灰黄褐色粘土　10YR6/2（酸化鉄多量）
10　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土大塊・白色粒含む）
11　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土大塊・白色粒極多量）
12　黒褐色粘質土　10YR2/3（酸化鉄少量、白色粒含む）
13　褐灰色粘土　10YR4/1（灰黄褐色土小塊少量）
14　褐灰色粘土　10YR4/1（酸化鉄多量）
15　灰白色粘土　10YR7/1（酸化鉄含む）
16　黒色粘土　10YR2/1（酸化鉄含む）
17　褐灰色粘土　10YR5/1（酸化鉄多量）
18　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（褐灰色土塊含む、白色粒少量）
19　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰黄褐色土塊含む）
20　黒褐色粘土　10YR3/1（灰黄褐色土塊含む、白色粒少量）





1（G12 ℓ 8）

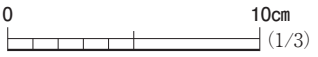


図414　１号方形区画遺構（４）

遺　　物（図414、写真419）

遺物は土師器７点、須恵器１点、陶器２点が出土した。大半が溝堆積土の上層や、検出時に出土した小片で、遺構に伴うものではないと思われる。唯一本遺構の時期を判断できる遺物は、東辺外側のａに対応する溝底面付近から出土した常滑焼の口縁部片である（図414－１）。出土状態は、溝底面に堆積する自然堆積の粘土層中から単独で出土しており、溝が機能時に流入したものと考えられる。本遺構の南側のＧ－23グリッドから常滑焼の甕が出土しており、同一個体の可能性が高い。

10㎝ほどの大きさで、表面には自然釉が付着し、内面には粘土紐の輪積み痕が認められる。口縁部は折り返し口縁となっており、断面の形状は「N」字状を呈している。生産地編年では13世紀後半から14世紀後半の時期に属する資料と考えられる。

ま と め

本遺構は長方形に巡る溝と、それによって区画された内側の方台部からなる大型の遺構である。区画の溝は、断面の観察から２回の掘り直しが行われ、区画内部が徐々に拡大していった様子がうかがえた。区画内部からは建物跡などの痕跡は確認されなかった。しかし南東隅に入口と考えられる通路があることや、複数回にわたって溝を掘り直していることから、内部に何らかの施設が存在した可能性が考えられる。また、区画内や溝の堆積土から遺物がほとんど出土しないなど、非常に生活感が薄く、区画の外とは異なる認識の空間であったと考えられる。本遺構の南側にはやや離れて大型の掘立柱建物跡（12号建物跡）が位置しており、入口の向きからも関連性が伺える。

時期は出土した遺物の特徴と溝の状況から、13～14世紀前後を中心に、比較的長い期間にわたって機能した遺構と考えられる。（神　林）

２号方形区画遺構

遺　　構（図415・416、写真321・322・325・326）

本遺構は大型土坑(19号土坑)とそこから長方形に巡る溝、それによって区画された内側の方台部及び、区画の内外を結ぶ土橋状の通路で構成される遺構である。

調査区南西部にあたるⅢ区のＣ－19・20、Ｄ－20グリッドにわたって位置し、標高235.5ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂおよびＬⅢである。当初は大型土坑(19号土坑)と溝を別の遺構と判断して掘り下げたが、堆積土の状況から一連の遺構であると判断し、２号方形区画遺構として報告する。南側では東西に延びる13号溝跡と重複しており本遺構の方が新しい。また南東側には構造が近似した１号方形区画遺構が位置している。

全体の平面形は長方形である。遺構全体の規模は、溝外側上端部を基点とすると最大で東西10.5ｍ、南北7.5ｍである。溝は南東部に位置する大型土坑から延び、断面形は東辺と北辺でＶ字状になり、西辺と南辺で「U」字状となっている。規模は、幅40～60㎝、深さ20～44㎝で東辺→北辺→西辺→南辺と徐々に浅くなり、南東隅付近で緩く立ち上がる。南東隅は、溝と大型土坑との間が、2.8ｍの幅で掘り残されて、区画内外を結ぶ通路となっている。

区画内部の方台部は平坦である。ピットがいくつか存在したが、表土に近似した土やコンクリート塊が埋め込まれていたものもあり、本遺構に伴うものではない。

溝の堆積土は５層に分層した。東辺に堆積する土層は、荒い粒子の砂・ＬⅢに由来の褐色灰色土塊などが含まれている。これらは後述する大型土坑の堆積土と共通しており、両者の埋没時期はほぼ同時であったと判断した。北・西・南辺ではＬⅢ由来の小土塊が、少量混じる土が堆積しており、自然堆積と考えられる。

大型土坑(19号土坑)は南東隅に位置している。平面形は南北方向に長い楕円形である。規模は長軸3.7ｍ、短軸3.2ｍ、深さ1.3ｍ以上である。堆積土の状況からはさらに掘り下げることが可能であったが、湧水が確認され周壁が崩落する恐れがあり、これ以上の掘り下げを中止した。ピンポールを刺した感触では粘土層と砂層が交互に堆積していることが想定された。周壁は凹凸が著しく、立ち上がりは垂直またはオーバーハングする部分や、段を有し外傾する部分が認められた。

堆積土は掘り下げられた部分までで18層に分層した。ℓ１～４は溝の東辺部分と共通している。粒子の荒い砂や・ＬⅢに由来するにぶい黄褐土塊などが含まれており、レンズ状に堆積する状況から自然堆積土と考えている。ℓ５は焼土粒や炭化物が多く含まれる褐灰色土である。この層からは円板状の土製品が出土している。ℓ６～18は層位の乱れが著しいブロック状堆積をしている。壁際付近では基盤層であるＬⅢの塊が崩落している様子も確認された。よってこれらの層は土坑の埋め戻しに伴う人為的な埋土や崩落土である可能性が高いと考えている。

遺　　物（図416、写真419）

遺物は溝および大型土坑の堆積土より、土師質土器や陶磁器の小片が出土している。図示したの

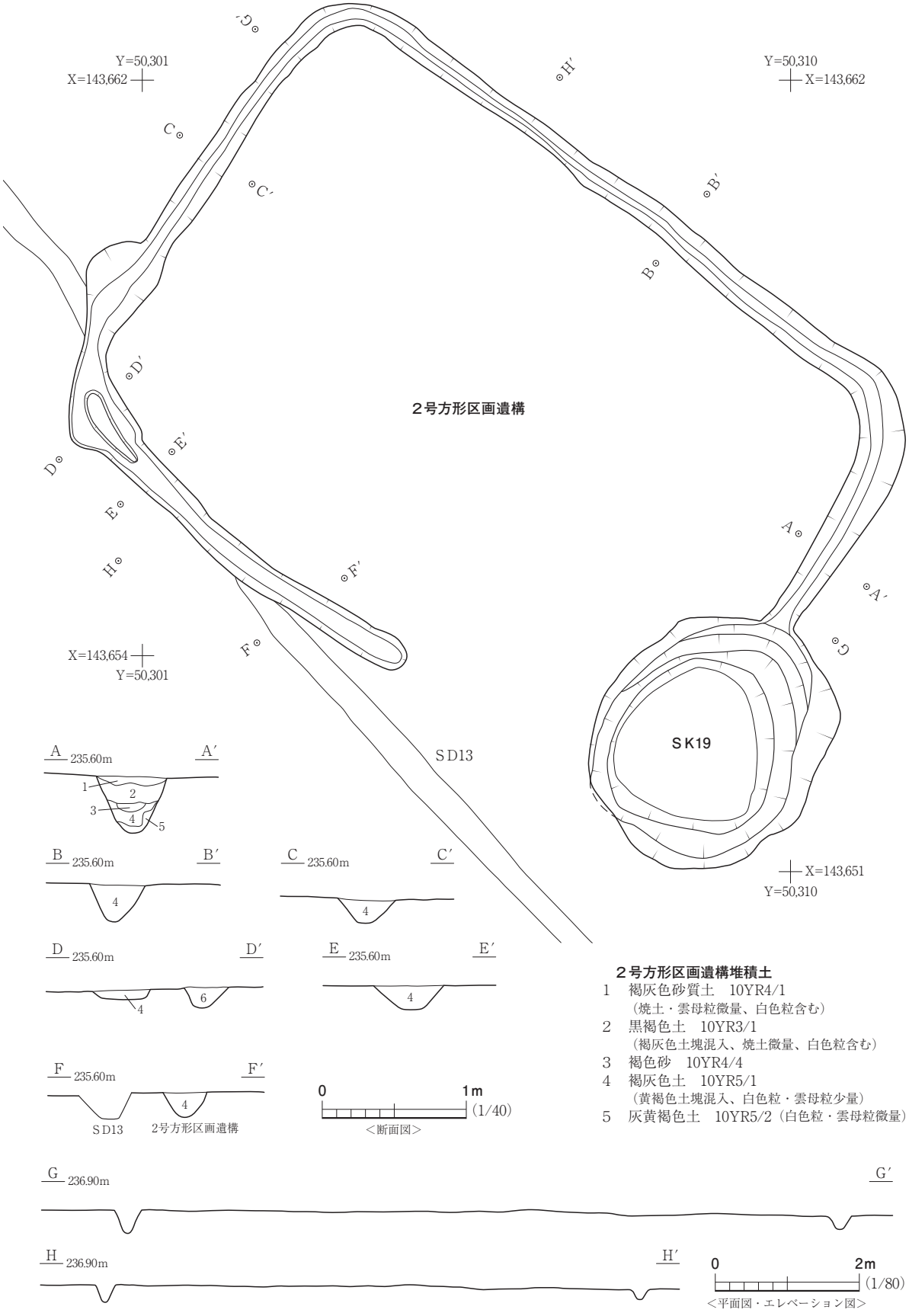
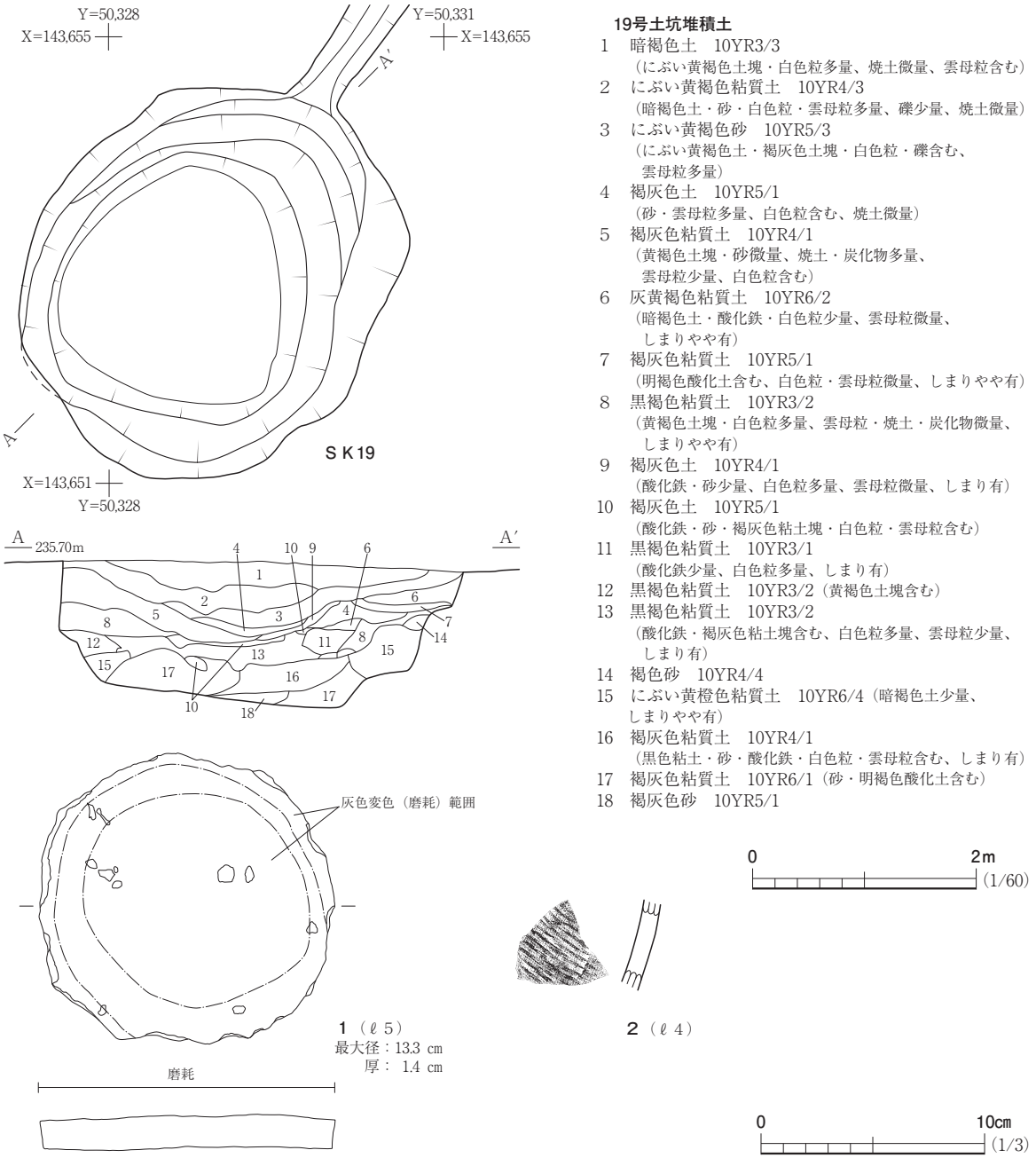


図415　2号方形区画遺構（1）



19号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3
（にぶい黄褐色土塊・白色粒多量、焼土微量、雲母粒含む）
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（暗褐色土・砂・白色粒・雲母粒多量、礫少量、焼土微量）
3　にぶい黄褐色砂　10YR5/3
（にぶい黄褐色土・褐灰色土塊・白色粒・礫含む、雲母粒多量）
4　褐灰色土　10YR5/1
（砂・雲母粒多量、白色粒含む、焼土微量）
5　褐灰色粘質土　10YR4/1
（黄褐色土塊・砂微量、焼土・炭化物多量、雲母粒少量、白色粒含む）
6　灰黄褐色粘質土　10YR6/2
（暗褐色土・酸化鉄・白色粒少量、雲母粒微量、しまりやや有）
7　褐灰色粘質土　10YR5/1
（明褐色酸化土含む、白色粒・雲母粒微量、しまりやや有）
8　黒褐色粘質土　10YR3/2
（黄褐色土塊・白色粒多量、雲母粒・焼土・炭化物微量、しまりやや有）
9　褐灰色土　10YR4/1
（酸化鉄・砂少量、白色粒多量、雲母粒微量、しまり有）
10　褐灰色土　10YR5/1
（酸化鉄・砂・褐灰色粘土塊・白色粒・雲母粒含む）
11　黒褐色粘質土　10YR3/1
（酸化鉄少量、白色粒多量、しまり有）
12　黒褐色粘質土　10YR3/2（黄褐色土塊含む）
13　黒褐色粘質土　10YR3/2
（酸化鉄・褐灰色粘土塊含む、白色粒多量、雲母粒少量、しまり有）
14　褐色砂　10YR4/4
15　にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4（暗褐色土少量、しまりやや有）
16　褐灰色粘質土　10YR4/1
（黒色粘土・砂・酸化鉄・白色粒・雲母粒含む、しまり有）
17　褐灰色粘質土　10YR6/1（砂・明褐色酸化土含む）
18　褐灰色砂　10YR5/1

図416　２号方形区画遺構（２）・出土遺物

は、大型土坑より出土した陶器の小片と円板状の転用土製品である。土製品は人為堆積土とみられるℓ５から出土し、土坑の中央付近に位置していた。片面に摩耗痕が認められ、縁片の欠損部が摩耗部を切っていることから、捏ね鉢の底部を打ち欠いて円板状に整えたものと思われる。詳細は不明であるが、何らかの意図をもって再加工し、埋めたものと思われる。

ま と め

本遺構は大型土坑と、そこから延びて長方形に巡る溝、それによって区画された内側の方台部及び内外を結ぶ通路で構成される遺構である。

区画内部から建物跡などの施設は確認されなかった。しかし南東隅に入口とみられる通路がある

ことから、内部に何らかの施設が存在し、区画の外とは異なる認識の空間であったことが考えられる。同様の構造は、南東側に位置する１号方形区画遺構と共通している。規模は半分以下であるが、同様の性格を持ち、時期もさほど離れていない遺構と考えている。大型土坑についても、詳細な性格は不明とせざるを得ないが、非常に深い掘り込みと、湧水が認められたことから、本来井戸として掘られた土坑が壊され、転用土製品とともに埋めたものと思われる。時期を明示しうる遺物は出土していないが、周辺の遺構との関連から中世に機能した遺構と考えている。　（神　林）

第８節　溝　跡

１号溝跡　ＳＤ01（図417、写真327）

本遺構は、Ⅰ・Ⅱ区にまたがって、Ｐ－14・15、Ｑ－13・14グリッドに位置する。標高約236.7ｍの平坦面に位置する。検出面はＬⅡｂ上面である。重複する遺構はないが、24号溝跡の南側に分岐する部分があり、途中で途切れているが、本遺構とつながる可能性が高い。南側の下層にあたる面には３・４号住居跡が位置している。

遺構は、北東側から南西側へ延びる。規模は、全長14.5ｍ、最大幅が1.35ｍである。検出面からの深さが最大で28㎝である。断面形は、北側においては、傾斜の緩い「Ｕ」字状を呈する。南側においては、底面が一段下がるように掘り込まれている。底面は北側から南側へ緩く傾斜している。

堆積土は、ℓ１が黒褐色土、ℓ２が褐色土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は土師器が９点出土している。いずれも小片のため図示していないが、ロクロ調整や内面黒色処理が見られることから、平安時代頃の所産と考えている。

本遺構は、北東側から南西側へ延びる溝跡である。24号溝跡から分岐する溝と接続する一連のものである可能性がある。所属時期の判断が難しいが、24号溝跡との関連や、検出面などから、平安時代以降に機能したと推定している。　（中　野）

２号溝跡　ＳＤ02（図418、写真327・328）

本遺構は、Ⅰ・Ⅳ区にまたがって、Ｄ～Ｎ－10～14グリッドに位置する。標高約235.5～236.5ｍの平坦面から緩斜面に立地する。検出面はＬⅡｂ上面である。重複する遺構は、24・63・175・179・230号住居跡、３・４・７～９・24号溝跡、５・７・38・47号畑跡である。いずれの遺構より本遺構が新しい。４号溝跡とは一部並行することから近い時期に掘り込まれている可能性がある。また、24号溝跡は、トレンチで壊され接続する地点が確認できないものの、堆積土の状況や構造などから一連の遺構の可能性がある。また、直接は重複しないが、下層に220・229・236号住居跡が位置する。

遺構の主軸は、南西側から北東側へ延び、Ｅ－14グリッドで、北西側へ屈曲する。規模は、調査区内で検出された範囲で全長99ｍ、最大幅2.8ｍである。検出面からの深さが最大で50㎝であ

る。断面形は、おおむね「U」字状を呈するが、地点ごとに異なり、南西側D～E－13～14グリッドにおいては、溝が二股に分かれ「W」字状を呈するなど、底面の凹凸が目立つ。

底面は、北東側を高所とし、南西側へ緩く傾斜して下っている。水などが流れた痕跡は確認できなかった。

堆積土は、ℓ１が黒褐色土、ℓ２が黒褐色の粘質土で、いずれも自然堆積土である。

遺物は土師器が48点、須恵器が１点出土している。いずれも小片のため図示していないが、古墳時代後期から平安時代頃のものと考えている。

本遺構は、南西側から北東側へ延び、途中から北西側へ屈曲する溝跡である。堆積土の関係や構造の共通点から、明確な接点は検出できなかったが、24号溝跡と接続する可能性がある。所属時期の判断が難しいが、24号溝跡との関連や検出面などから中世頃と推定している。　（中　野）

３号溝跡　ＳＤ03（図417、写真329）

本遺構は、Ⅰ・Ⅳ区のＩ～Ｋ－６～11グリッドに位置する。標高約236.4～237.4ｍの平坦面から緩斜面に立地する。検出面はＬⅡｂ上面である。重複する遺構は、24・37・41・51・61号住居跡、２号溝跡である。２号溝跡より古く、その他の遺構より本遺構が新しい。

遺構は、北西側から南東側へ直線的に延びる。Ｊ－９グリッド付近では長さ2.0ｍにわたって、50㎝ほどの張り出し部があり、その部分は底面が硬化している。

規模は、全長57.0ｍ、最大幅が0.8ｍである。検出面からの深さが最大で15㎝である。断面形は、浅い「U」字状を呈する。底面は、おおむね平坦である。

堆積土は、締まりのある黒褐色土で、人為堆積土の可能性がある。

遺物は土師器が19点出土している。いずれも小片のため図示していないが、ロクロ調整とみられる痕跡があり平安時代頃の所産と考えている。

本遺構は、北西側から南東側へ延びる溝跡である。堆積土は人為的に埋められており硬く締まっていた。掘り込みをして区画するというよりは、土壌を強化している印象である。張り出し部が検出され、一部堆積土が硬化している点などから、集落内の通路などを考えている。所属時期の判断が難しいが、他遺構との関連や検出面などから平安時代頃と推定している。　（中　野）

４号溝跡　ＳＤ04（図418、写真329）

本遺構は、調査Ⅰ・Ⅳ区のＩ～Ｌ－11・12グリッドに位置する。標高約236.0～236.5ｍの平坦面から緩斜面に立地する。検出面はＬⅡｂ上面である。重複する遺構は、２号溝跡、５号畑跡である。５号畑跡より本遺構が新しく、２号溝跡より古い。２号溝跡とは一部並行することから近い時期に掘り込まれている可能性がある。

遺構の主軸は、２号溝跡に沿うように、南西側から北東側へ延びる。規模は、全長37.0ｍ、最大幅1.4ｍである。検出面からの深さが最大で15㎝である。断面形は、おおむね浅い「U」字状を呈

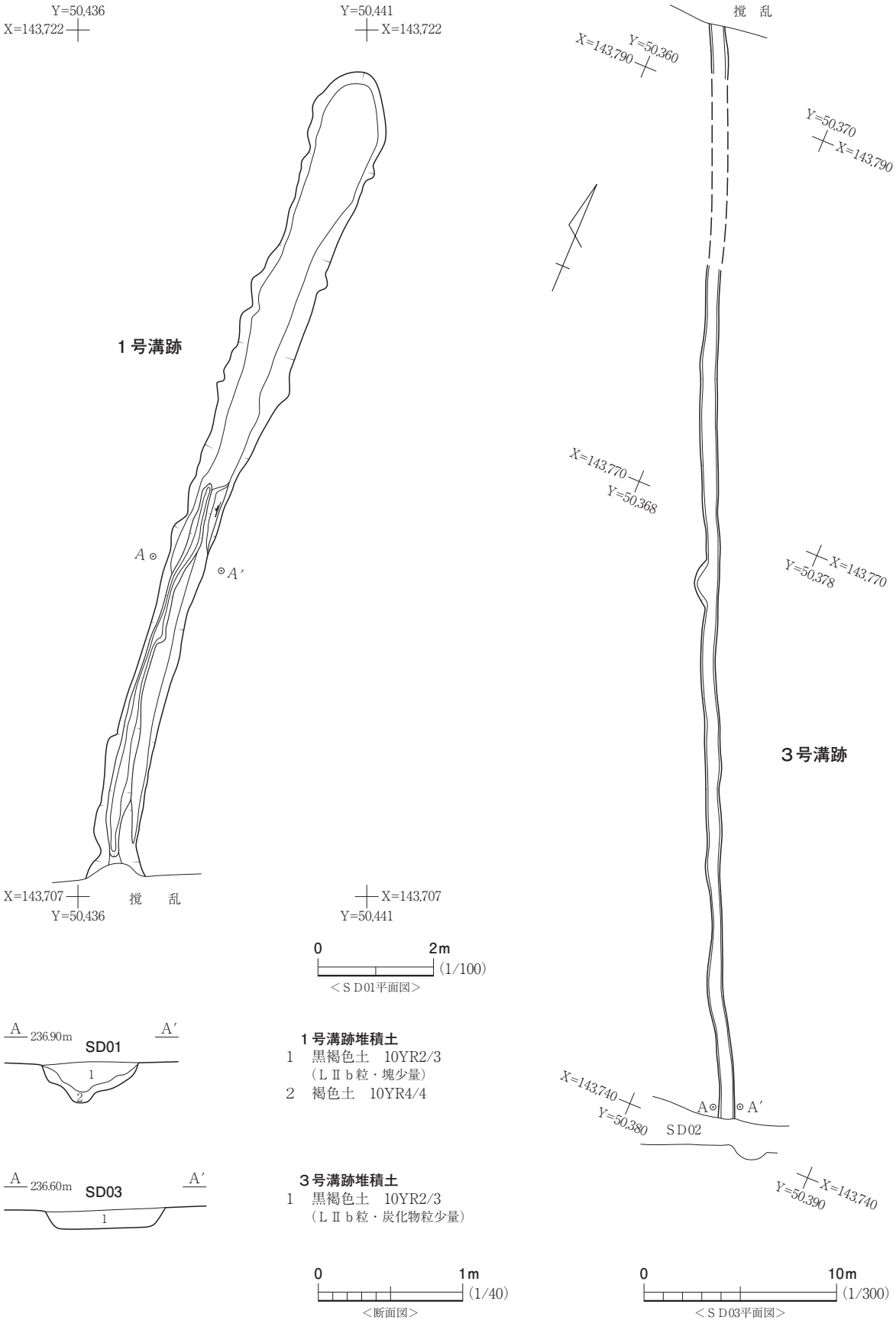

Y=50,436
X=143,722
Y=50,441
X=143,722
１号溝跡
A
A′
X=143,707
Y=50,436
撹　乱
X=143,707
Y=50,441
0　2m
(1/100)
＜ＳＤ01平面図＞
A　236.90m　A′
SD01
1
2
１号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（ＬⅡｂ粒・塊少量）
2　褐色土　10YR4/4
A　236.60m　A′
SD03
1
３号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（ＬⅡｂ粒・炭化物粒少量）
0　1m
(1/40)
＜断面図＞
撹　乱
X=143,790
Y=50,360
Y=50,370
X=143,790
X=143,770
Y=50,368
X=143,770
Y=50,378
３号溝跡
X=143,740
Y=50,380
A
A′
SD02
Y=50,390
X=143,740
0　10m
(1/300)
＜ＳＤ03平面図＞

図417　１・３号溝跡

する。底面は、北東側を高所とし、南西側へ緩く傾斜して下っている。

堆積土は、黒褐色土の自然堆積土である。遺物は出土していない。

本遺構は、南西側から北東側へ延びる溝跡である。２号溝跡とは、重複するが、一部並列することから関連が考えられる。遺物が出土しておらず所属時期の判断が難しいが、２号溝跡との関連や検出面などから中世頃と推定している。（中　野）

６号溝跡　ＳＤ06（図419）

本遺構は調査区南東部のＪ～Ｌ－15～17グリッドに位置する。南西側に下る緩斜面の標高236.0ｍの等高線にほぼ沿うように延びる。検出層位はＬⅡｂである。39・78号住居跡と重複し、新旧関係はいずれも本溝跡が新しい。直接重複はしないが、下層に223号住居跡、143・145・

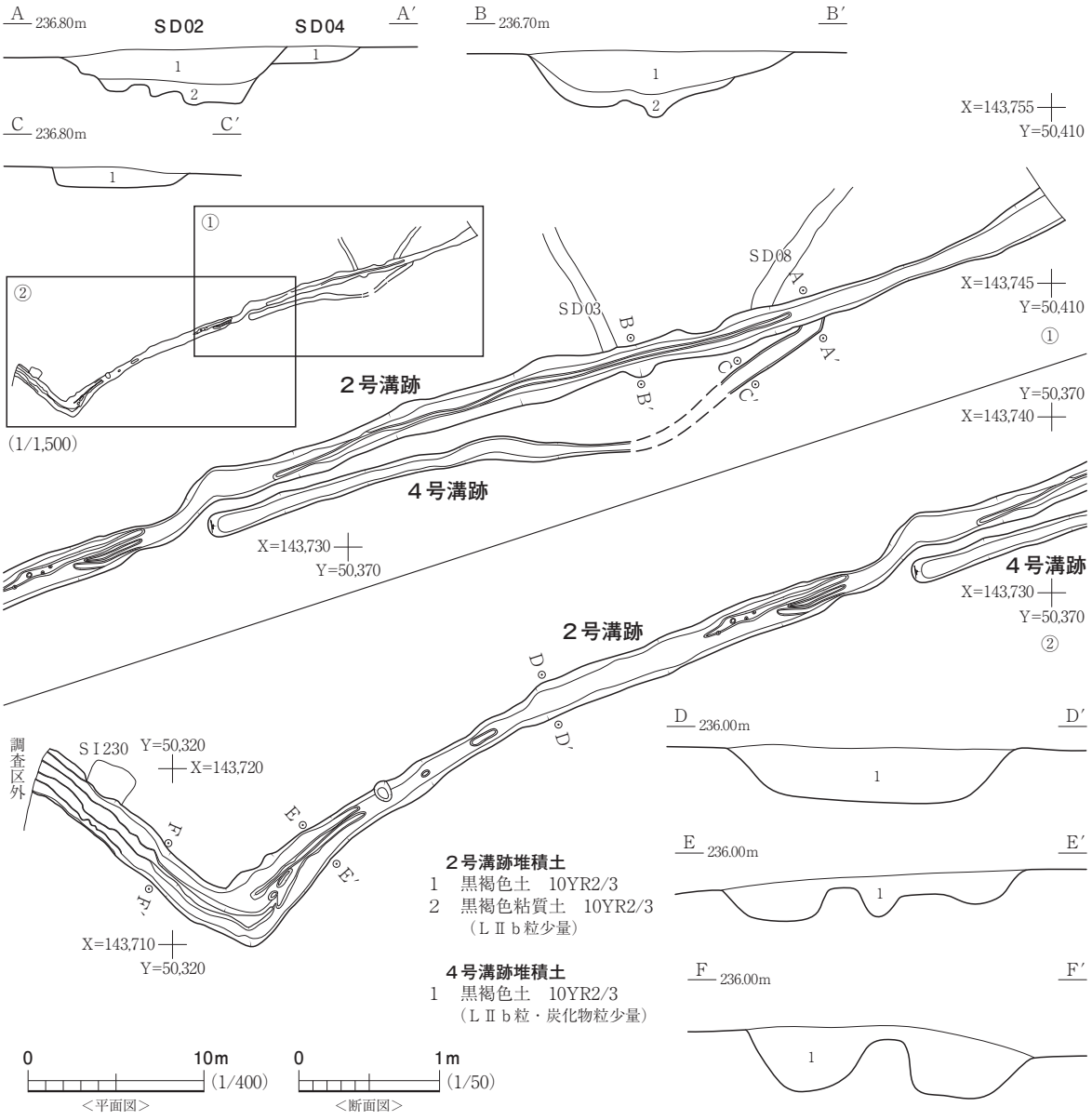


図418　２・４号溝跡

146・176号土坑が位置する。また、北西方向の延長線上に位置する11号溝跡は、延びる方向と幅や深さがよく似ていることから、同一の溝跡の可能性がある。

本溝跡は北西から南東方向に延びている。平面形では西半分では僅かに蛇行する部分があるが、東半分はほぼ直線ぎみとなっている。壁は急角度で立ち上り、底面はほぼ平坦である。

堆積土は黒褐色土の単層で、自然流入土によって埋没した可能性が高い。

本溝跡からは土師器が14点、須恵器が２点出土したがいずれも小片である。

本溝跡の堆積土や底面の状態から流水や滞水などの痕跡はみられないので、地境などの区画溝と考えている。時期は出土土器が細片のため明確ではないが、39・78号住居跡との新旧関係から中世から近世頃の所産と考えている。（吉　野）

７号溝跡　ＳＤ07（図419、写真329）

本遺構は、Ⅰ区北西部のＫ－９～11グリッドに位置する。標高約236.4ｍの平坦面から緩斜面にかけて立地する。検出面はＬⅡｂ②である。重複する遺構は、45号住居跡で、本遺構が新しい。直接重複はしないが、下層に52号畑跡が位置する。

遺構の主軸は、南北方向に延びる。規模は、全長15.5ｍ、最大幅が1.8ｍである。検出面からの深さが最大で15㎝である。断面形は、浅い「Ｕ」字状を呈する。底面は、おおむね平坦である。堆積土は単層で、にぶい黄褐色砂質土の自然堆積土である。遺物は出土していない。

本遺構は、南北に延びる溝跡である。遺物が出土しておらず所属時期の判断が難しいが、重複関係や検出面などから古墳時代後期頃と推定している。（中　野）

８号溝跡　ＳＤ08（図419、写真329）

本遺構は、Ⅰ区のＬ・Ｍ－10、Ｌ－11グリッドに位置する。標高約236.2～236.6ｍの南から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡｂ②である。重複する遺構は、２・９号溝跡である。本遺構が２号溝跡より古く、９号溝跡より新しい。

遺構の主軸は、南西側から北東側へ緩やかに曲がりながら延びる。規模は、全長18.0ｍ、最大幅が1.3ｍである。検出面からの深さが最大で20㎝である。断面形は、浅い「Ｕ」字状を呈する。底面は、南東側から北西側へ緩く下っている。堆積土は、暗褐色砂質土の自然堆積土で、ＬⅡｂ①に対応する堆積土である。遺物は出土していない。本遺構は、南西から北東へ延びる溝跡である。所属時期の判断が難しいが、重複関係や検出面などから古墳時代後期頃と推定している。（中　野）

９号溝跡　ＳＤ09（図419、写真329）

本遺構は、Ⅰ区北部のＭ－10・11、Ｎ－11グリッドに位置する。標高約236.2ｍの南側から北側へ下る緩斜面に等高線に沿うように立地する。検出面はＬⅡｂ②である。重複する遺構は、２・８号溝跡である。本遺構がもっとも古い。

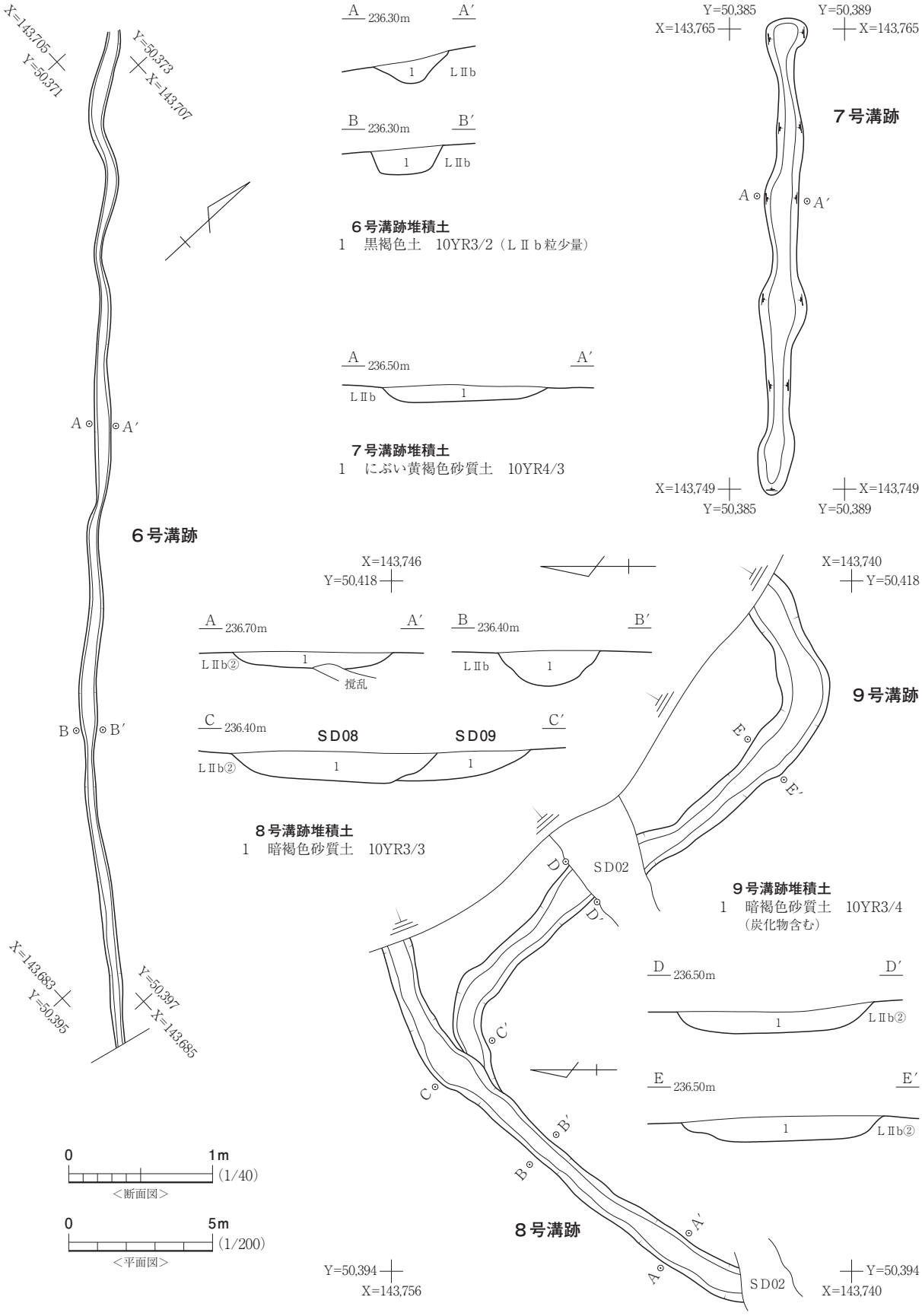

X=143,705
Y=50,371
Y=50,373
X=143,707
A
A′
6号溝跡
B
B′
X=143,683
Y=50,395
Y=50,397
X=143,685
A 236.30m A′
1 LⅡb
B 236.30m B′
1 LⅡb
6号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（LⅡb粒少量）
A 236.50m A′
LⅡb 1
7号溝跡堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
Y=50,385
X=143,765
Y=50,389
X=143,765
7号溝跡
A
A′
X=143,749
Y=50,385
Y=50,389
X=143,749
X=143,746
Y=50,418
A 236.70m A′
LⅡb② 1 撹乱
B 236.40m B′
LⅡb 1
C 236.40m C′
SD08
SD09
LⅡb② 1 1
8号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3
X=143,740
Y=50,418
9号溝跡
E
E′
SD02
D
D′
9号溝跡堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
（炭化物含む）
D 236.50m D′
1 LⅡb②
E 236.50m E′
1 LⅡb②
C
C′
B
B′
A
A′
8号溝跡
SD02
Y=50,394
X=143,756
Y=50,394
X=143,740
0 1m (1/40)
＜断面図＞
0 5m (1/200)
＜平面図＞

図419　6～9号溝跡

遺構の主軸は、西側が、南西から北東へ延びるが、南西側へ屈曲する。そして再び北東へ屈曲する。規模は、全長が東西17.5ｍ、西側の南北長が4.0ｍ、東側の南北長が5.0ｍである。最大幅が1.6ｍである。検出面からの深さが最大で18㎝である。断面形は傾斜の緩い浅い「Ｕ」字状を呈する。底面は検出された範囲ではほぼ水平である。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色砂質土の自然堆積土でＬⅡｂ①に対応する土である。

遺物は遺構内および検出面のいずれからも出土していない。

本遺構は、西から東へ屈曲しながら延びる溝跡である。所属時期の判断が難しいが、重複関係や検出面などから古墳時代後期頃と推定している。（中　野）

10号溝跡　ＳＤ10（図420、写真329）

本遺構は、Ⅰ・Ⅳ区にまたがるＨ～Ｊ－12～15グリッドに位置する。標高235.0～235.9ｍの北東から南西側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ②～ＬⅡｂ①である。重複する遺構は、11号溝跡、５・40号畑跡である。本遺構が、５・40号畑跡より新しく、11号溝跡より古い。また溝跡が途切れる北西端を延長した位置に、14号溝跡が位置しており、一連の溝跡の可能性もある。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色土の自然堆積土で、ＬⅡａ①に対応する土と考えている。遺構は、南西から北東へ延びる。規模は、全長が東西28.5ｍである。最大幅は0.6ｍである。深さは最大で30㎝である。断面形は「Ｕ」字状を呈する。底面は北東側から南西側へ緩く下る。

遺物は、土師器が５点出土している。いずれも小片で図示しなかったが、平安時代の所産で、周辺からの流れこみと考えられる。

本遺構は、南西から北東へ延びる溝跡である。所属時期の判断が難しいが、重複関係や検出面から中世以前と推定している。（中　野）

11号溝跡　ＳＤ11（図420、写真329）

本遺構は、Ⅳ区南東部のＨ－13、Ⅰ－13・14グリッドに位置する。標高約235.8ｍの北東から南西側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ②～ＬⅡｂ①である。重複する遺構は、47号住居跡、10号溝跡、47号畑跡である。本遺構が、いずれの遺構よりも新しい。

堆積土は、ℓ１がＬⅡｂ粒を多量に含む暗褐色土、ℓ２が褐灰色粘質土である。ℓ１のＬⅡｂ粒の入り方が不自然であることから、人為的に埋めた堆積土と考えている。遺構は、南東から北西へ延びる。規模は、全長が東西11.0ｍである。最大幅が50㎝である。検出面からの深さが最大で20㎝である。断面形は「Ｕ」字状を呈する。底面は平坦である。

遺物は、青磁片が１点、土師器片２点が出土している。このうち青磁片１点を図427－１に示した。鉢の胴部下半片で、蓮弁文を施した中型の鉢で、13世紀頃のものと考えられる。

本遺構は、北西から南東へ延びる溝跡である。龍泉窯青磁が出土している。所属時期は、遺物や検出面などから中世頃と推定している。（中　野）

12号溝跡　ＳＤ12（図420、写真329）

本遺構はＶ区南西部のＭ－22・23グリッドに位置する。南東側に下る緩斜面の標高235.8ｍで、検出層位はＬⅢである。本溝跡の西側には60号住居跡が位置する。

本溝跡は南北方向にほぼ直線ぎみに延びている。規模は遺存長14.5ｍ、幅が0.4～1.4ｍ、深さが0.3～0.7ｍでる。壁は外傾ぎみに立ち上り、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層に区分されたが、いずれも流入土と考えている。遺物は土師器が８点出土した。いずれも細片であり、遺構に伴わない周囲からの流れ込みと考えられる。

本溝跡の堆積土や底面の状態から流水や滞水などの痕跡はみられないので、地境などの区画溝と

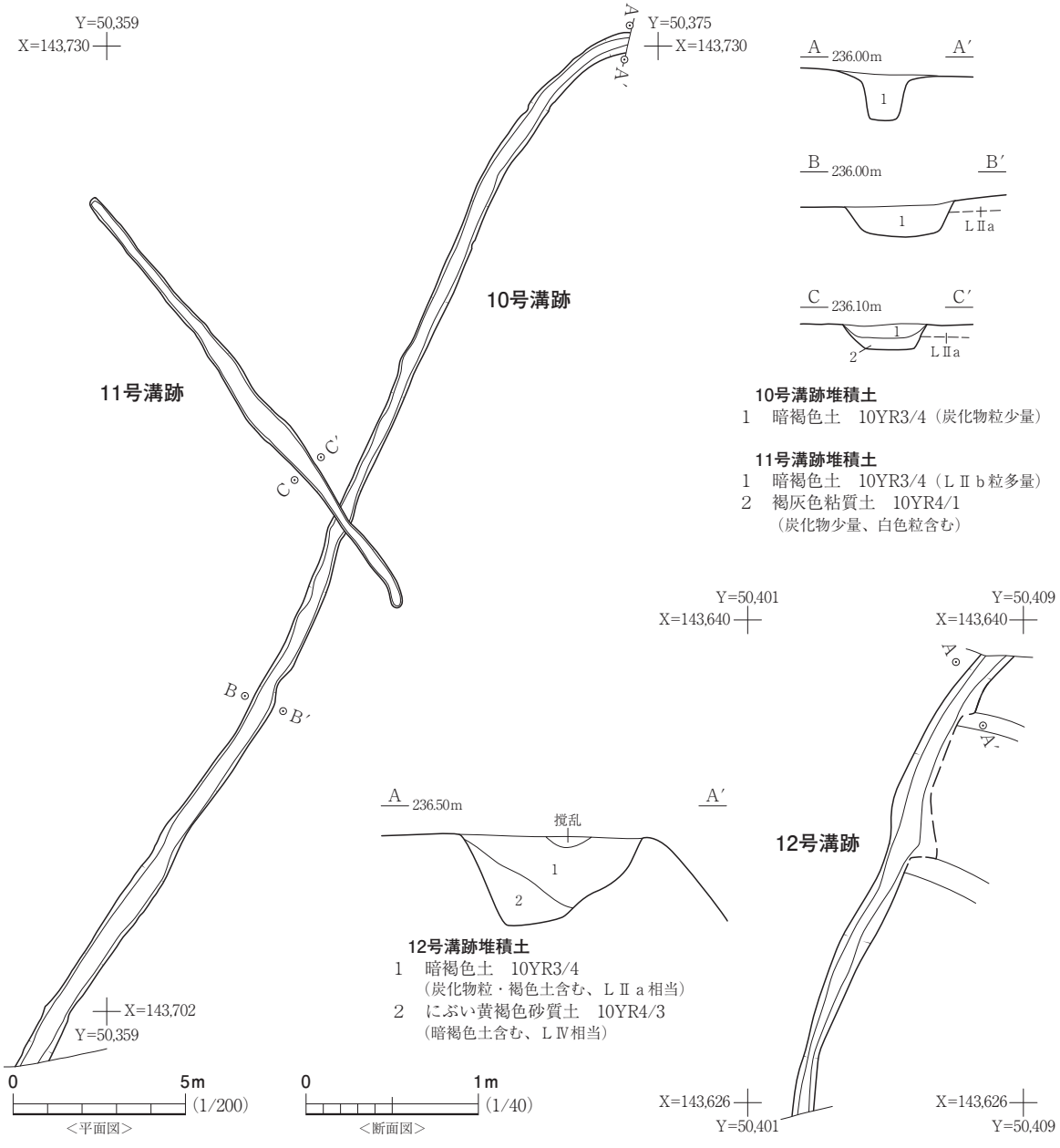


図420　10～12号溝跡

考えている。時期は出土土器が少なく明確ではないが、中世以降と考えている。（吉　野）

13ａ・ｂ号溝跡（図421、写真321・329）

調査区南西部にあたるⅢ区に位置し、標高235.0～235.8ｍ付近に立地する。このうちａ号溝はＣ－17、Ｄ－17・18、Ｅ－18～20、Ｆ－20・21に位置し、ｂ号溝はＢ－19・20、Ｃ－20・21、Ｄ－21に位置する。検出面はＬⅡｂおよびＬⅢである。ａ号溝跡が15号畑跡および１号方形区画遺構と重複しており、ｂ号溝跡が２号方形区画遺構および14号溝跡と重複している。いずれの遺構よりも本遺構のほうが古い。

本遺構はいずれも北西側から南東側にかけて直線的に延びている。北側に位置するのがａ号溝跡、南側に位置するのがｂ号溝跡である。ａ号溝跡は確認された部分で全長54ｍ、幅80㎝前後、深さ10～20㎝ほどである。ｂ号溝はやや短く、全長28ｍ、幅50㎝前後、深さ10～20㎝ほどである。底面は平坦で、側壁は底面から緩やかに立ち上がる。

堆積土は１層で、いずれもにぶい黄褐色土が堆積しており、自然堆積土と思われる。遺物は土師器の小片３点が堆積土から出土しており、周辺より流れ込んだものと思われる。

本遺構は直線的に伸びる２条の溝で、本来は一連の溝であった可能性も考えられる。時期を推定できる遺物は出土していないが、中世の遺構である。１・２号方形区画遺構と14号溝跡によって壊されていることから、それ以前の遺構と考えられる。（神　林）

14号溝跡　ＳＤ14（図421、写真321・329）

調査区南西部にあたるⅢ区のＢ－23、Ｃ－22～23、Ｄ－21～22、Ｅ－20、Ｆ－18～20、Ｇ－18グリッドにかけて位置し、標高235.0～235.8ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂおよびＬⅢである。１号方形区画遺構、13ａ・ｂ号溝跡、16号畑跡と一部が重複しており、13ａ・ｂ号溝跡より新しく、16号畑跡より古い。１号方形区画遺構との関係は、調査段階では本遺構が古いとして掘り下げた。しかし、両遺構が重複する付近では、溝跡の掘り込みが非常に浅く、堆積土も近似していたことから、はっきりとは認識できなかった。その後の整理段階において、複数の検出写真を精査した結果、本遺構が新しいと判断された。なお、本溝跡が途切れた部分を北東方向に延長すると、10号溝跡と繋がることから、一連の溝跡である可能性が高い。

本遺構は北東から南西にかけて直線的に延びている。検出できた範囲で全長6.8ｍ、幅50㎝前後、深さ10㎝である。底面は平坦で側壁は緩やかに立ち上がっている。Ｃ－23グリッドでは２ｍほどの幅で、溝が掘り残されている。この部分の南東側には中世の掘立柱建物群が位置しており、溝を境として反対の北西側には遺構が認められない。よってこの掘り残しは南東側の掘立柱建物群に関連する通路の可能性も考えられる。堆積土は暗褐色土が１層堆積しており、自然堆積土と思われる。土師器片が１点出土している以外は、遺物は認められなかった。

本遺構は直線的に延びる溝跡で、調査区南端の掘立柱建物跡群を意識するように、掘り残しの通

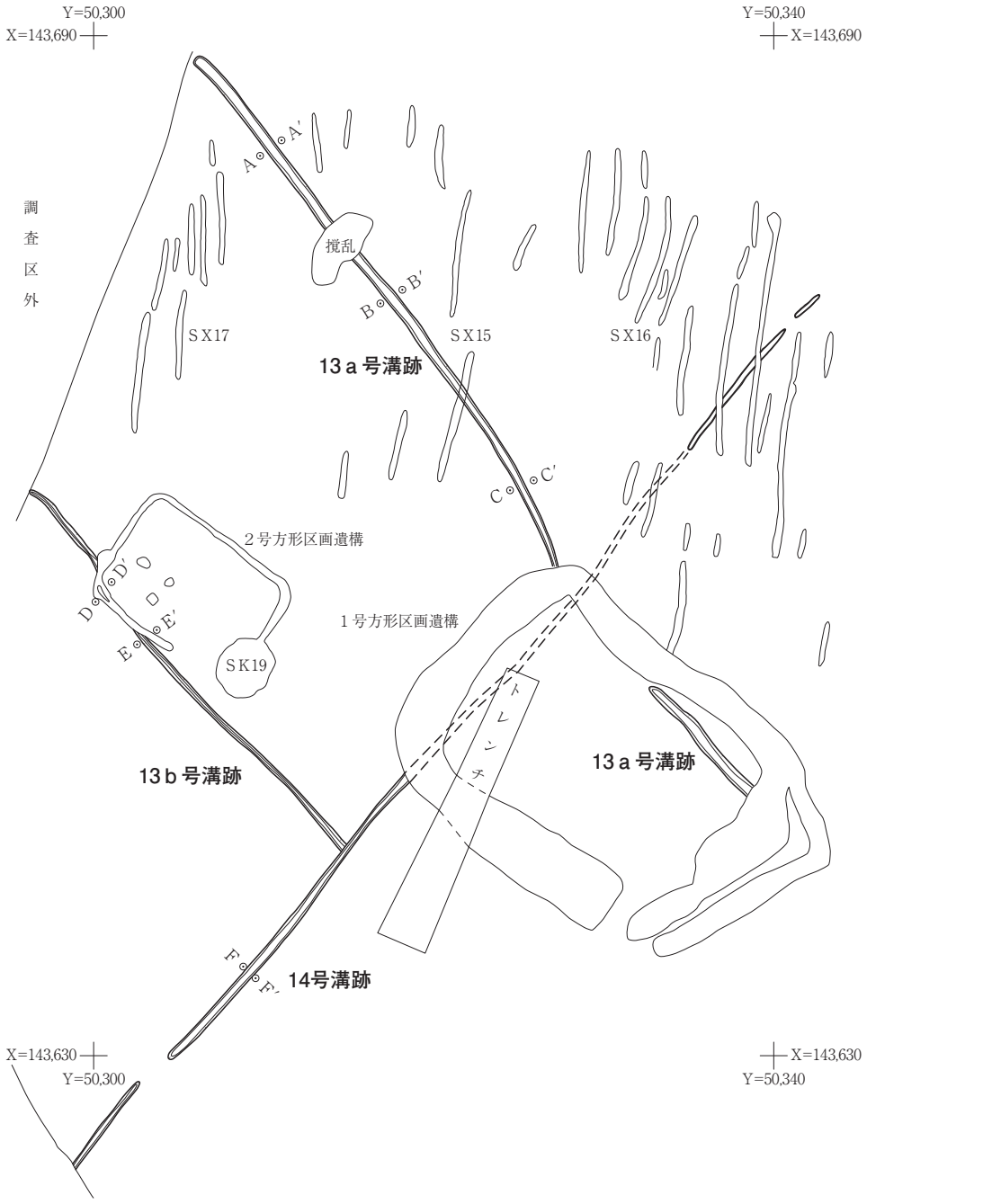


図421　13a・b、14号溝跡

路が存在することから、同時期に機能した遺構の可能性が高い。溝の時期を明示する遺物は出土していないが、掘立柱建物跡群との関連から中世に機能した遺構と考えている。（神　林）

15号溝跡　ＳＤ15（図422、写真330）

本遺構は、Ｖ区北東部のＷ・Ｘ－13～17グリッドに位置する。標高235.9～236.4ｍの北西から南東側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ②である。北側と東側はすでに削平され、失われている。重複する遺構は、84・182号住居跡、21号溝跡、51号土坑である。本遺構が、51号土坑より古く、それ以外の遺構より新しい。16号溝跡とは、６ｍほど間隔をあけて並行することから関連が伺われる。また、21号溝跡は方位をそろえてほぼ真下に位置する。

堆積土は５層に区分した。いずれの土層もレンズ状に堆積する自然堆積土と考えられる。

遺構の主軸は、南東から北西へ延びる。規模は、全長が東西37.0ｍである。最大幅が2.0ｍである。検出面からの深さが最大で75㎝である。断面形は、逆台形状に掘り込まれており、壁の傾斜角度も70度と急である。底面は北西側を高所に南東側に緩く傾斜している。水が流れた痕跡は確認できないことから、水路ではないと思われる。

遺物は、土師器30点、須恵器が１点、陶器が１点出土している。陶器以外の遺物はいずれも平安時代のもので、流れ込みと考えられる。

図示しなかったが、陶器は常滑焼の大甕の胴部下半片である。自然釉の付着が認められる。

本遺構は、北西から南東へ延びる溝跡である。断面が逆台形状に掘り込まれている。水を流した痕跡は確認できないことから、区画や境界などの溝跡と考えられる。下層で検出された21号溝跡のほぼ真下に位置しており、あるいは本溝跡は21号溝跡のわずかな窪みを再び掘り上げたものかもしれない。堆積土からは、常滑焼の大甕片が出土しており、13～14世紀頃のものと考えられる。所属時期は、遺物や検出面などから中世頃と推定している。（中　野）

16号溝跡　ＳＤ16（図422、写真330）

本遺構は、Ｖ区北東部のＸ－16・17グリッドに位置する。標高約236.7ｍの南西から北東側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ②である。東側はすでに削平され失われている。重複する遺構は、83号住居跡で本遺構が新しい。

堆積土は、暗褐色土の単層で、自然堆積土と考えられる。遺構の主軸は、南東から北西へ延びる。規模は遺存長が東西15.0ｍである。最大幅が80㎝である。検出面からの深さが最大で15㎝である。断面形は、「Ｕ」字状に掘り込まれている。底面は北西側を高所に南東側に緩く傾斜している。遺物は土師器が４点出土したが、いずれも流れ込みと考えられる。

本遺構は、北西から南東へ延びる溝跡である。15号溝跡に並行することから関連する溝跡と考えている。所属時期は、周辺遺構や検出面などから中世頃と推定している。（中　野）

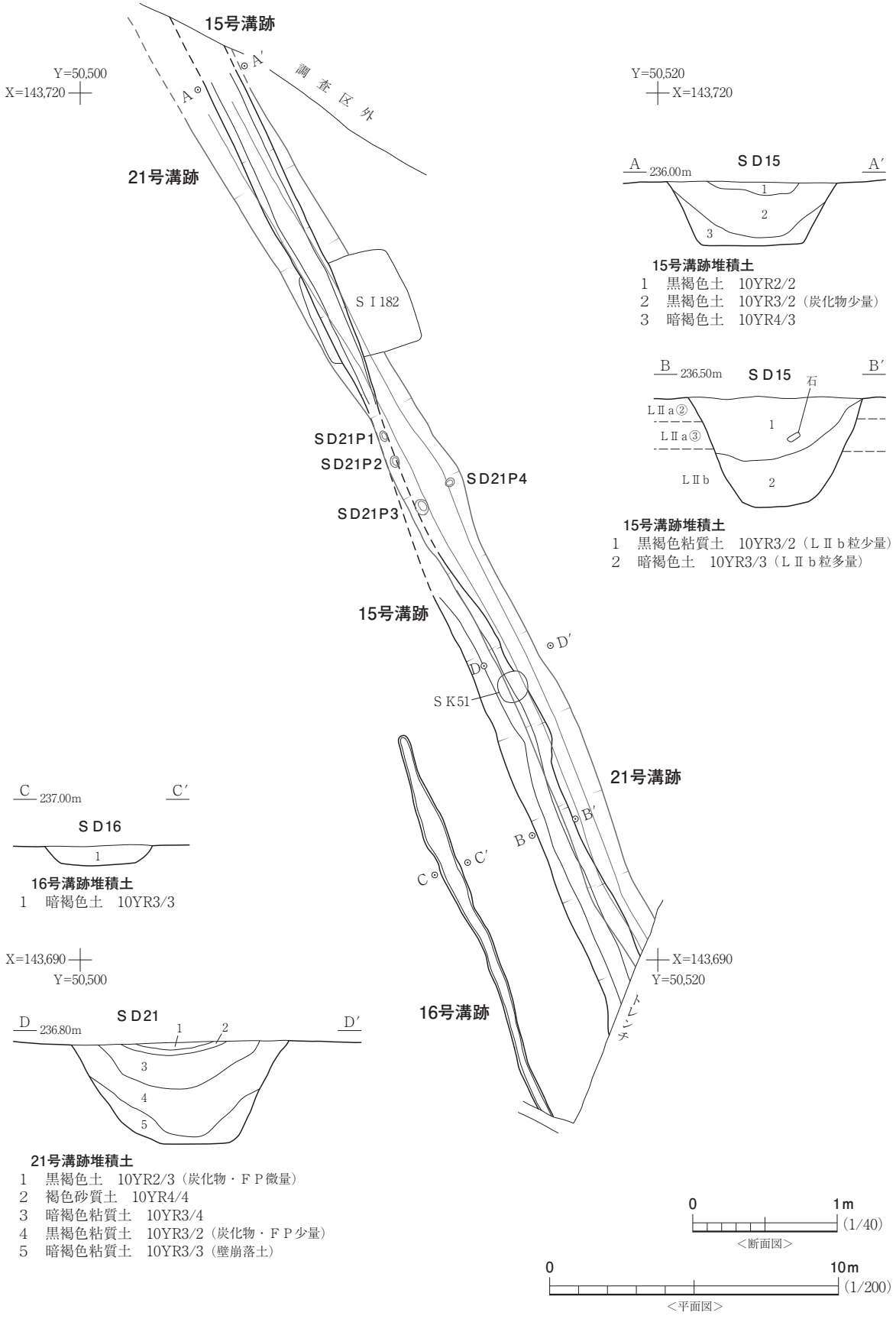


図422　15・16・21号溝跡

17号溝跡　ＳＤ17（図423、写真330）

本遺構は、Ｖ区東部のＵ－21・22グリッド、ＬⅡｂで検出された。標高約236.5ｍのほぼ平坦な場所である。重複する遺構はない。北西に87号住居跡、北東に19号建物跡が位置する。

堆積土は、レンズ状に堆積する上下の２層からなる。ℓ１は黒褐色土、ℓ２は暗褐色土で、自然堆積土と考えられる。溝跡は、北東から南西に向かってほぼ直線を描いて延び、方位は北から約43度東を示す。長さは10.7ｍ、幅は最大で0.5ｍ、検出面からの深さは12㎝前後である。

遺物は土師器片が８点出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。

本溝跡の年代は、出土土器がいずれも小片のため遺物からは判断できないものの、周辺に位置する87号住居跡などの遺構がいずれも奈良時代のものであり、その他の時期の遺構が周辺には確認されていない。また、これらの遺構と同じ面で検出されていることを勘案すると、奈良時代の遺構である可能性が高い。（青　山）

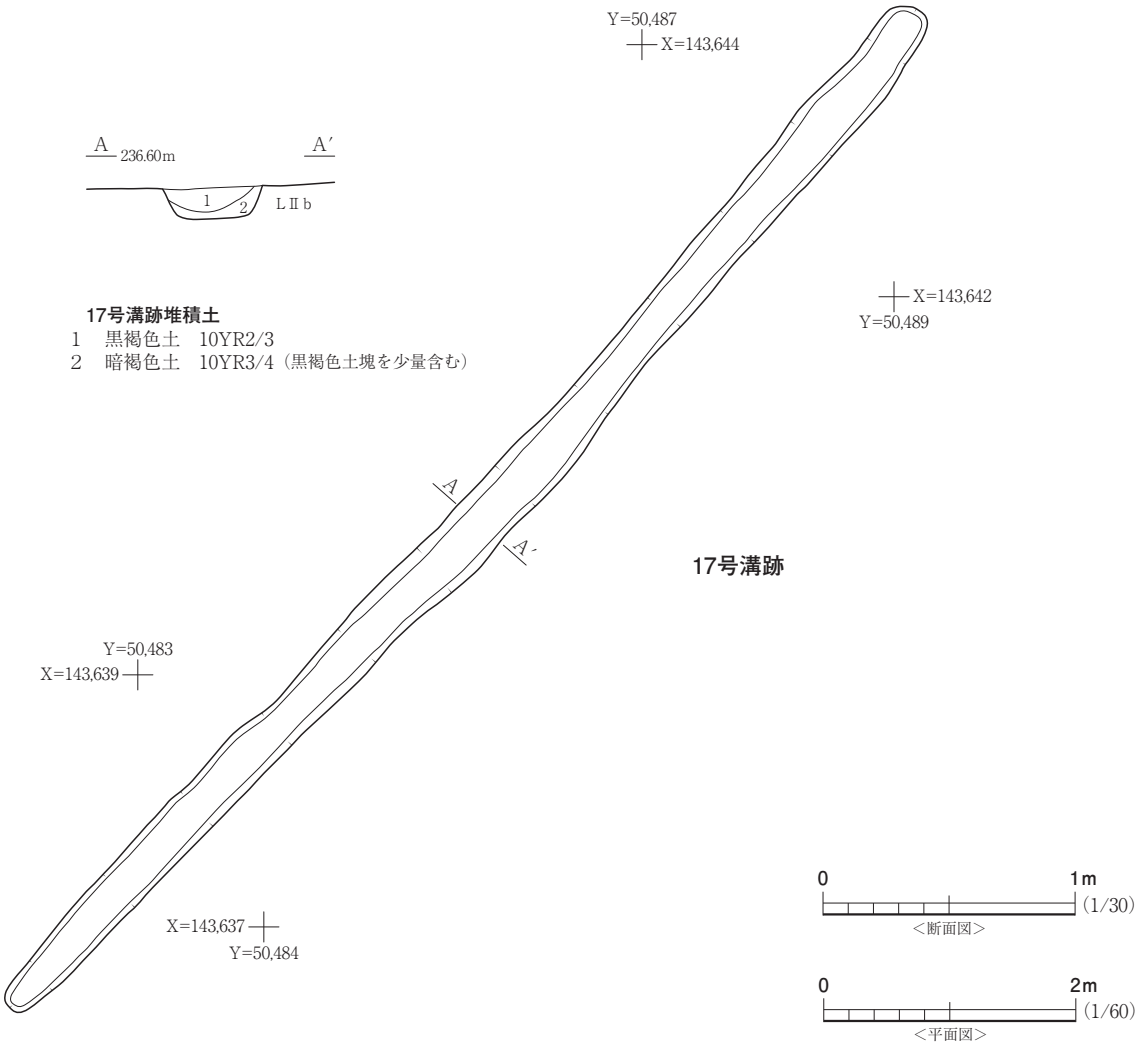


図423　17号溝跡

18ａ・ｂ号溝跡　ＳＤ18ａ・ｂ（図424）

本遺構は、Ⅲ区南部のＤ－23・24グリッドに位置する。標高約236.0ｍの南から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。南側はすでに削平され失われている。重複する遺構は、96号住居跡、12・13・28ａ号建物跡で、96号住居跡より新しく、12・13・28ａ号建物跡より古い。

堆積土は、暗褐色土の単層で、自然堆積土と考えられる。

遺構の主軸は、南西から北東へ延びる。検出の際に１条の溝跡と考えていたが、北側の溝跡は途中で途切れ、１ｍほど西側に並行するようにもう１条の溝が存在することがわかった。北側を18ａ号溝跡、南側を18ｂ号溝跡とした。規模は、18ａ号溝跡が全長11.6ｍである。最大幅が80㎝である。検出面からの深さが最大で16㎝である。18ｂ号溝跡が全長5.0ｍである。最大幅が50㎝である。検出面からの深さが最大で15㎝である。断面形は、いずれも「Ｕ」字状に掘り込まれている。底面は南側を高所に北側に緩く傾斜している。遺物は出土していない。

本遺構は南西から北東へ延びる溝跡である。当初には１条の溝と考えていたが、２条の溝跡と判明した。所属時期は、重複関係や検出面などから平安時代頃と推定している。（中　野）

19号溝跡　ＳＤ19（図424）

本遺構は、Ⅲ区のＤ－24・25、Ｅ－24グリッドに位置する。標高約236.2ｍの南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。南側はすでに削平され失われている。重複する遺構は、80・96号住居跡、29号建物跡、25号畑跡で、80・96号住居跡より新しく、12・13・28ａ・28ｂ・29号建物跡より古い。25号畑跡との重複関係は不明である。

堆積土は、暗褐色土の単層で、自然堆積土と考えられる。遺構の主軸は、南西から北東へ延びる。規模は、全長17.0ｍである。最大幅が80㎝である。検出面からの深さが最大で23㎝である。断面形は、いずれも「Ｕ」字状に掘り込まれている。底面は南側を高所に北側に緩く傾斜している。

遺物は出土していないが所属時期は平安時代頃と推定している。（中　野）

20号溝跡　ＳＤ20（図424）

本遺構は、Ⅱ区南部のＨ－25・26グリッドに位置する。標高約236.6ｍの南から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。南側は削平され失われている。重複する遺構はない。

堆積土は、暗褐色土の単層で、ＬⅡａ①に対応する自然堆積土と考えられる。

遺構の主軸は、南西から北東へ延びる。規模は、全長が10.0ｍで、最大幅が40㎝である。検出面からの深さが最大で13㎝である。断面形は、いずれも「Ｕ」字状に掘り込まれている。底面は南側を高所に北側に向かって緩く傾斜している。遺物は出土していない。

本遺構は、南西から北東へ延びる溝跡である。所属時期は、遺物が出土していないため不明確だが、周辺遺構や検出面などから中世頃と推定している。（中　野）

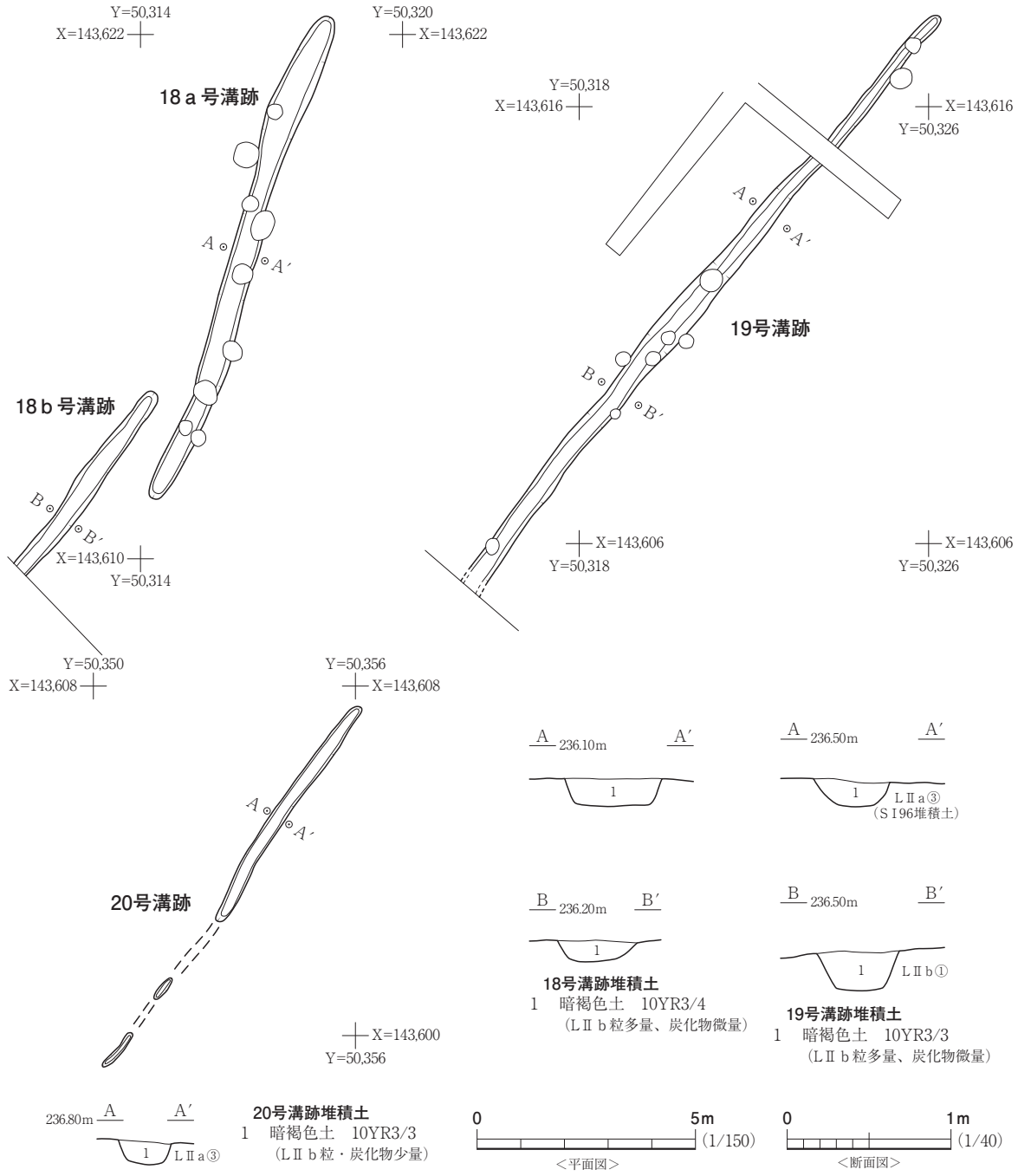


図424　18・19・20号溝跡

21号溝跡　ＳＤ21（図422、写真330）

本遺構は、Ⅴ区東部のＷ・Ｘ－13～17グリッド、ＬⅡｂで検出された。標高約236.7ｍの北西側から南東側へ下る緩斜面に立地する。調査区東側の土層断面に本溝跡の断面がみえており、15号溝跡を調査後にＬⅡｂを掘り下げたところ、ほぼ真下からほぼ同じ方向に延びる本遺構が検出された。182号住居跡、15号溝跡と重複し、本溝跡がもっとも古い。

堆積土は自然堆積する５層からなる。ℓ１は黒褐色土、ℓ２は褐色砂質土、ℓ３は暗褐色粘質

土、ℓ４は黒褐色粘質土、ℓ５は暗褐色粘質土で、ℓ１・４は榛名－伊香保テフラ(Hr－FP)を含む。堆積土の様相からは、水が流れた様相はない。溝跡は北西から南東に向かってほぼ直線を描いて延び、方位は北から33度前後西を示す。長さは35.7ｍ、幅は最大で2.5ｍ、深さは最大1.05ｍである。断面形はほぼ台形で、底面の標高は北西に向かって緩やかに下る。調査区内での高低差は12㎝である。遺物は土師器片が12点出土した。いずれも遺構に伴うものではなく流れ込みではあるが、年代の判明するものは古墳時代後期と思われるものである。

本溝跡の年代は、本溝跡が平安時代の182号住居跡によって切られていること、検出面がＬⅡｂであることと、出土した遺物の様相から古墳時代後期と考えられる。（青　山）

22号溝跡　ＳＤ22（図426、写真330）

本遺構は、Ⅳ区南西部のＤ・Ｅ－15・16グリッドに位置する。標高約235.4ｍの北側から南側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡｂ①である。南側はすでに削平され失われている。重複する遺構は、36号建物跡、38号畑跡で、いずれの遺構よりも本遺構が古い。

堆積土は、炭化物と白色粒を多量に含む暗褐色土の単層である。ＬⅡａ③に対応するとみられ、堆積状況から自然堆積土と考えられる。

遺構の主軸は、南西から北東へ延びる。規模は、全長13.0ｍである。最大幅が1.0mである。検出面からの深さが最大で40㎝である。断面形は、いずれも「Ｕ」字状に掘り込まれている。底面は

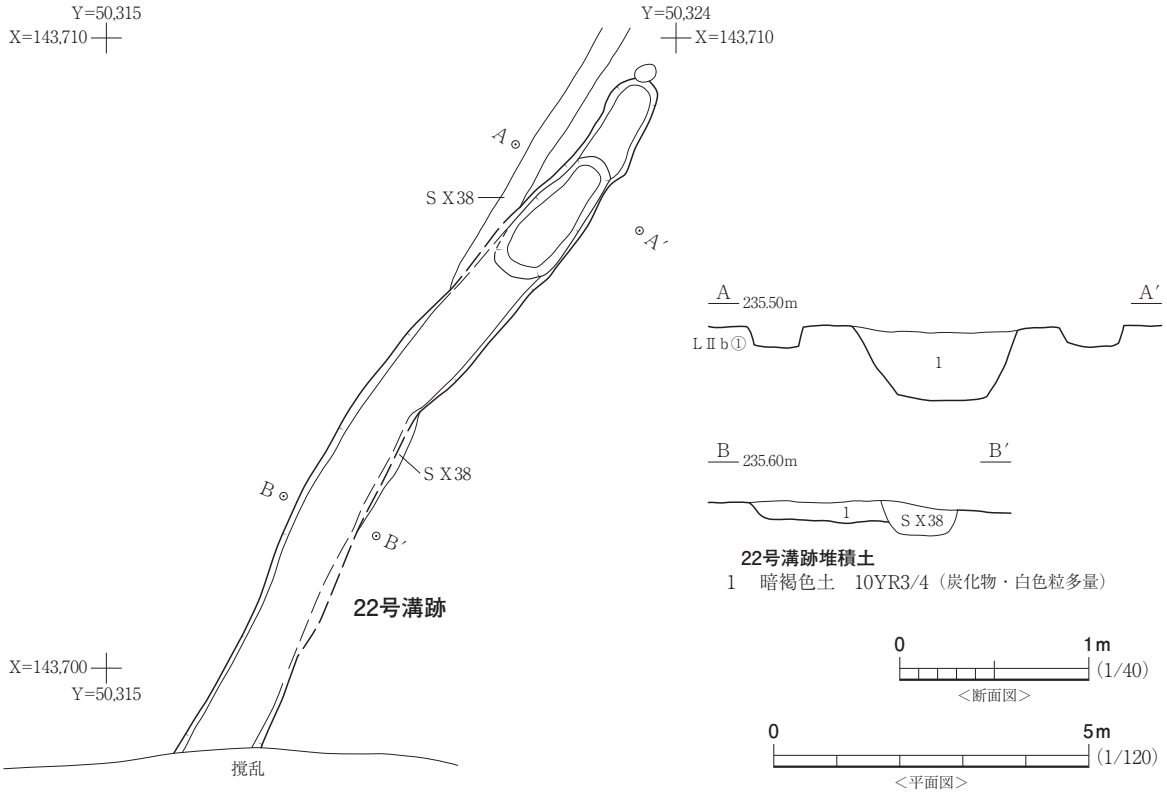


図425　22号溝跡

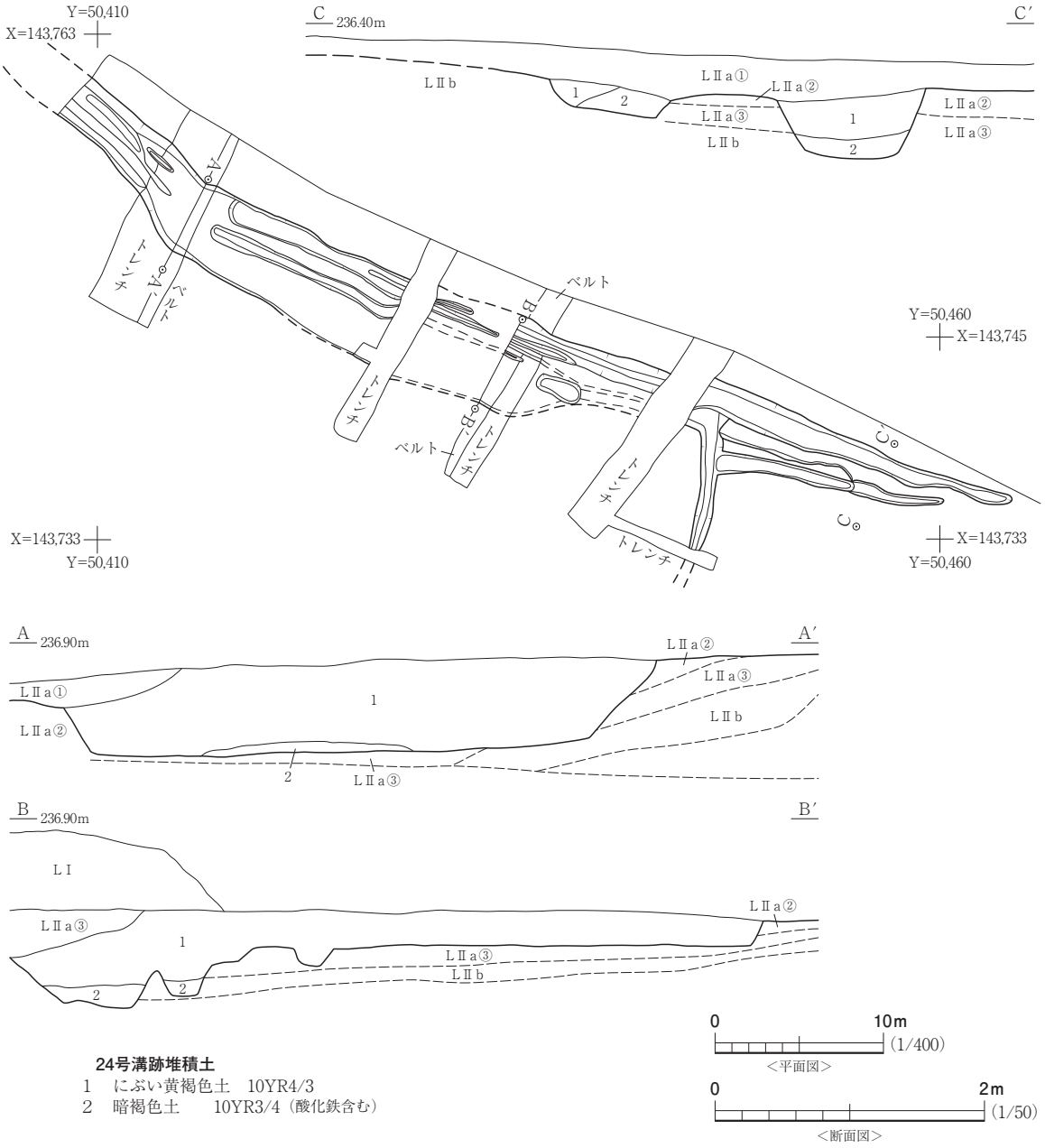
北側を高所に南側に緩く傾斜している。北側においては一段深くなる部分がある。

遺物は、土師器片が３点出土している。図示していないが、古墳時代後期の所産である。

本遺構は、南西から北東へ延びる溝跡である。所属時期は、検出面や遺物などから古墳時代後期頃と推定している。（中　野）

24号溝跡　ＳＤ24（図425、写真330）

本遺構は、Ⅰ区北部のＭ～Ｓ－９～12グリッドに位置する。標高約235.9～237.8ｍの緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ②である。重複する遺構は、２・８号溝跡である。２号溝跡とは、重複



24号溝跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
2　暗褐色土　10YR3/4（酸化鉄含む）

図426　24号溝跡

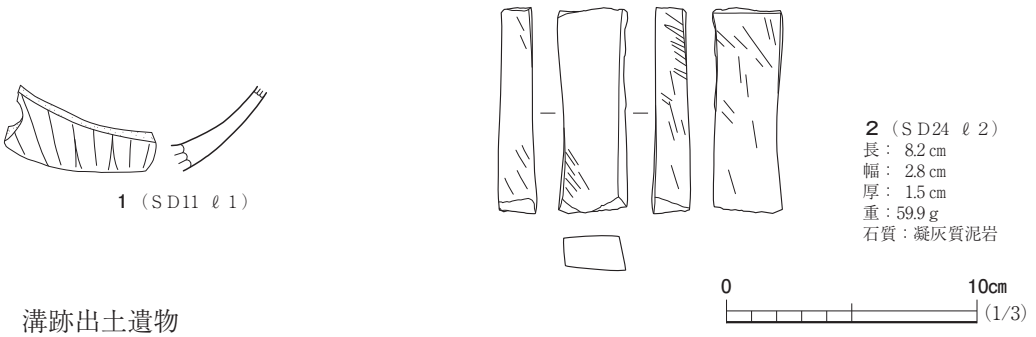


図427　溝跡出土遺物

する地点が確認できないが、堆積土の状況や構造などから一連の遺構の可能性がある。

堆積土は、ℓ１がにぶい黄褐色土、ℓ２が暗褐色土で、いずれも自然堆積土である。

遺構の主軸は、北西から南東へ延びる。規模は、東西方向が全長61.0ｍ、最大幅が5.6ｍである。検出面からの深さが最大で60㎝である。断面形は、おおむね「Ｕ」字状を呈するが、地点ごとに異なり、南西側Ｍ～Ｏ－９～11においては、溝が二股に分かれるなど、底面の凹凸が目立つ。２号溝跡と同様に修繕などの掘り返しを行った結果と考えている。底面は、南東側を高所とし、北西側へ緩く傾斜している。水などが流れた痕跡は確認できなかった。

遺物は土師器片３点、青磁片１点、砥石１点が出土している。このうち砥石は図427－２に図示した。青磁は鉢の胴部片であるが小片のため図示できなかった。

本遺構は、西北西から東南東へ延びる溝跡である。堆積土の関係や構造の共通点から、明確な接点は検出できなかったが、２号溝跡と関連のある溝跡と考えられる。所属時期の判断が難しいが、遺物などから中世頃と推定している。（中　野）

第９節　祭祀遺構・土器集中地点

１号祭祀跡

遺　　構（図428、写真331）

本遺構は、Ⅲ区のＤ－19グリッドに位置する。標高235.4ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。重機による表土掘削の際に、南北に1.5m、東西に1.0ｍの範囲において、遺物の集中箇所を検出した。検出当初は、住居跡に伴う遺物と考え、周辺を精査したが、住居跡の範囲や壁の立ち上がりも認められず、薄い堆積土の上に壺や杯などが複数点まとまっていることから、遺物の集中地点と考えた。調査を進めるにつれて、土師器とともに滑石製の臼玉も出土することから、何らかの祭祀に関する痕跡であることが判明した。

遺物は、大小の壺と杯で構成され、いずれの個体も破砕され、入り混じるように出土している。

堆積土は、炭化物を含む暗褐色砂質土の単層である。遺物は層厚が５㎝ほどの堆積土の直上から出土している。なお、堆積土は、微細遺物が混入している可能性を考え、遺物とともに持ち帰り、水洗洗浄を行った。堆積土からは臼玉７点とともに、鍛冶滓とみられる細かな滓が61.8ｇと、

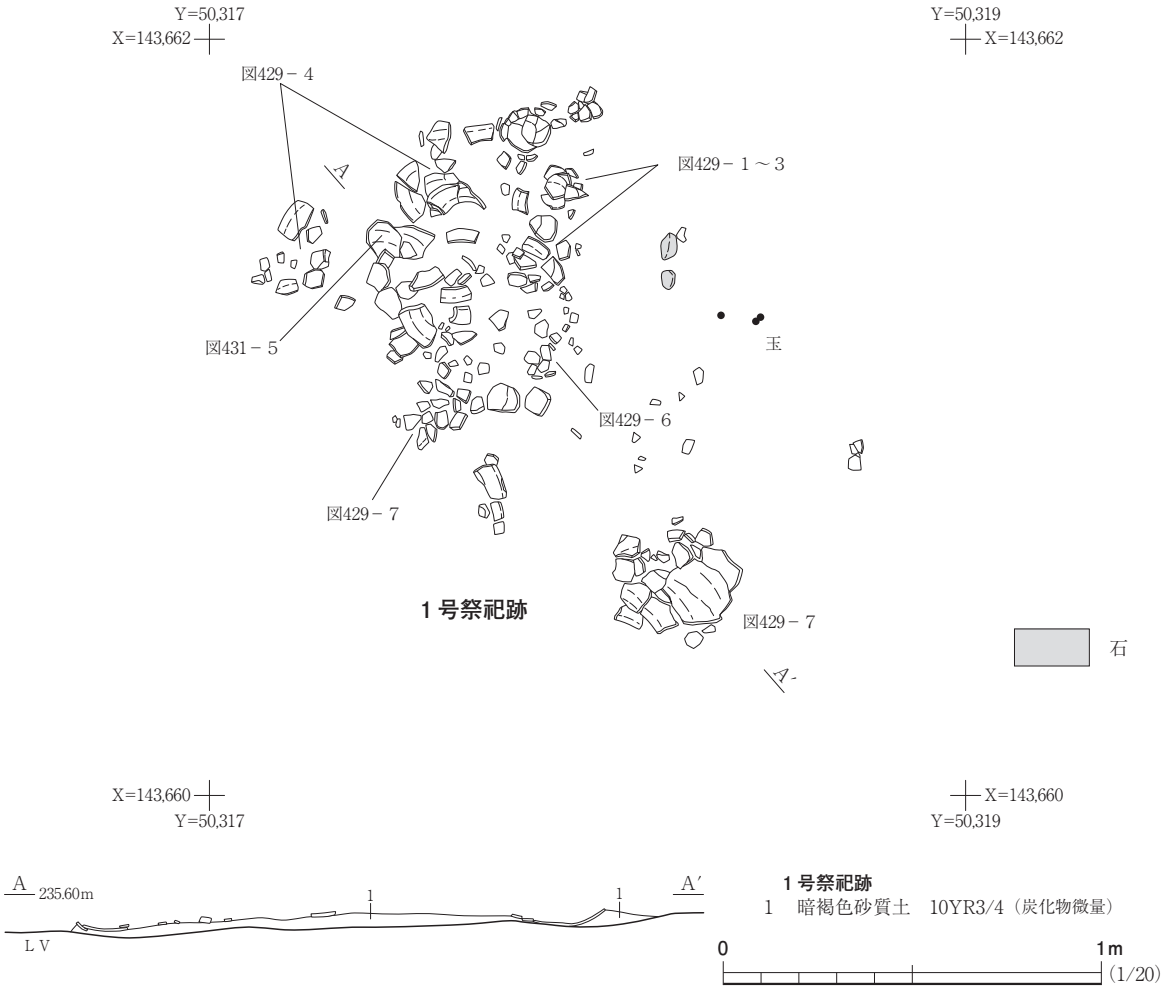


図428　１号祭祀跡

骨片が出土した。周辺は、古墳時代後期の遺構の空白地帯に位置することから、集落から離れた緩斜面を選んで祭祀に使用した道具をまとめて遺棄したものと推測される。

遺　　物（図429、写真419・445～447）

遺物は土師器390点、石製品７点、鍛冶滓61.8ｇ、骨片0.1ｇが出土した。このうち土師器７点、石製品７点を図示し、鍛冶滓については写真図版(写真445～447)に示した。

図429－１～３は杯である。１・２は口縁部が外反し胴部に段もしくは稜をもち、底部が丸底の器形である。３の胴部の稜はやや丸みを帯びている。いずれも内面には、ヘラミガキ調整をしてから黒色処理を施す。２・３は口縁部外面にもヘラミガキを施す。

４から７は壺である。いずれも器面はナデ調整が施されている。完形のものは認められなかったが、打ち欠きなどの痕跡は認められなかった。法量では小型から大型のものまで揃っている。４は球胴の壺である。５は口縁部と底部を欠損した壺である。６は小型の壺である。７はややナデ肩で、胴部の下半が膨らむ器形である。

８～14は石製の臼玉である。いずれも滑石製で、表面には製作時の線条痕が認められる。

滓は肉眼観察で、二種類に分類した。1つはガラス質滓(写真445)で、高温によって溶けた粘土

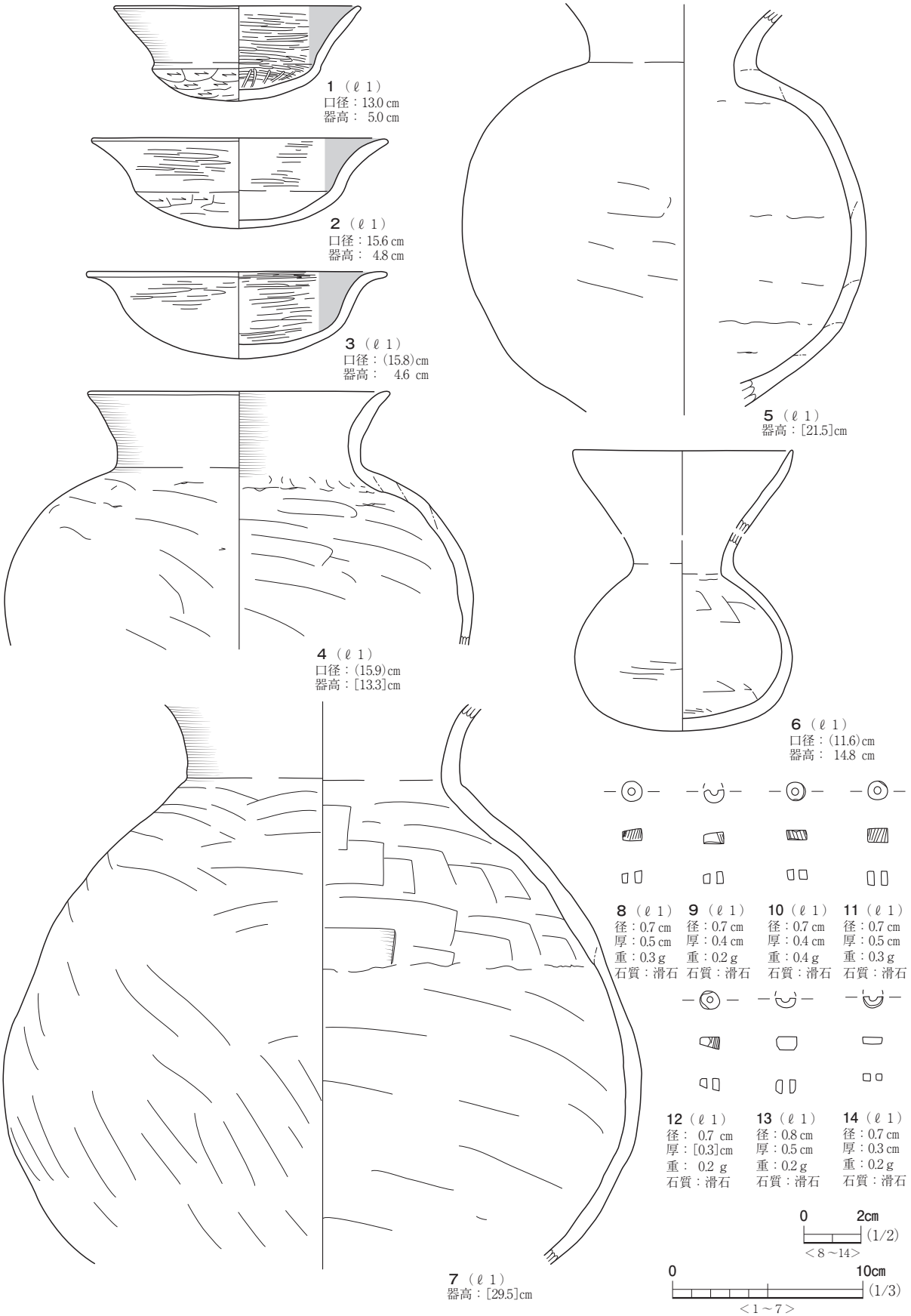


図429　1号祭祀跡出土遺物

などと考えられる。２つめは茶褐色を呈する滓を一括した。詳細に観察すると、鍛造剥片とみられる薄いもの(写真446)や、いわゆる高師小僧が焼き固まったようなものが確認される(写真447)。

なお、本遺構の周辺および、調査区内からは鍛冶に関連する遺構は確認されていない。おそらく別の場所で行われた鍛冶によって出た残滓を、祭祀終了後の遺物とともに廃棄した可能性も考えられる。

ま と め

本遺構は、1.5×1.0ｍの狭い範囲から土師器の壺や杯とともに臼玉や鉄滓、骨片などがまとまって出土した。遺物は薄い堆積土の上から破砕された状態で、複数の個体の土師器が入り混じった状態で出土した。整然と並べられた様子がみられないことから、祭祀後に一箇所に廃棄した可能性が考えられる。土師器のうち壺は同時期の住居跡からはほとんど出土していないことから、祭祀のために作られたものの可能性がある。堆積土からは、鍛冶滓が出土しており、鍛冶の際に出た残滓を祭祀の際に収めた、もしくは臼玉など祭祀にかかわる道具とともに遺棄したとも考えられる。所属時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。なお、遺構が検出された周辺は、古墳時代後期の住居跡が検出されていない空白地帯であることから、居住域や耕作域から離れた地点を選んで、これらの遺物を廃棄したものと思われる。（中　野）

２号祭祀跡

遺　　構（図430、写真331）

本遺構はⅡ区の調査区南東部のＬ－18グリッドに位置する。標高236ｍ付近の南東側に下る緩斜面に位置し、検出層位はＬⅢである。２号畑跡と重複するが、新旧関係は明確ではない。しかし２号畑跡の堆積土の様相や、本遺構の土器の破片が２号畑跡の畝間溝から出土していることから、本遺構が古いと判断した。

本遺構からは多くの土師器がまとまって出土した。その範囲は東西が2.3ｍ、南北が5.6ｍである。その範囲をみると３箇所に分かれる。北側の範囲は完形に近い土師器が集積し、甕が正立状態で置かれていたが、東側と南側は土師器の破片が散布している状況であった。

遺　　物（図431・432、写真419・420）

本遺構からは土師器416点が出土した。その大半が壺で、その他、杯と鉢が１点ずつ出土している。このうち８点を図示した。

図431－１は杯である。有稜丸底で、口縁部は外反する。調整は、外面口縁部がヨコナデ、体部から底部がヘラケズリ、内面はヘラミガキののち黒色処理が施されている。

２は鉢である。丸底で、やや偏平な体部、短く外傾する広口の口縁部をもつ。

３～６、図432－１・２は壺である。３・４は、平底で、球形の胴部に外反する素口縁をもつ。いずれも口縁端部を欠損する。３の胴下部には焼成後の穿孔が１箇所認められる。５・６は大型の素口縁壺である。５は、体部内外面にヘラナデ、６は、体部外面のヘラナデとミガキ、体部内面に

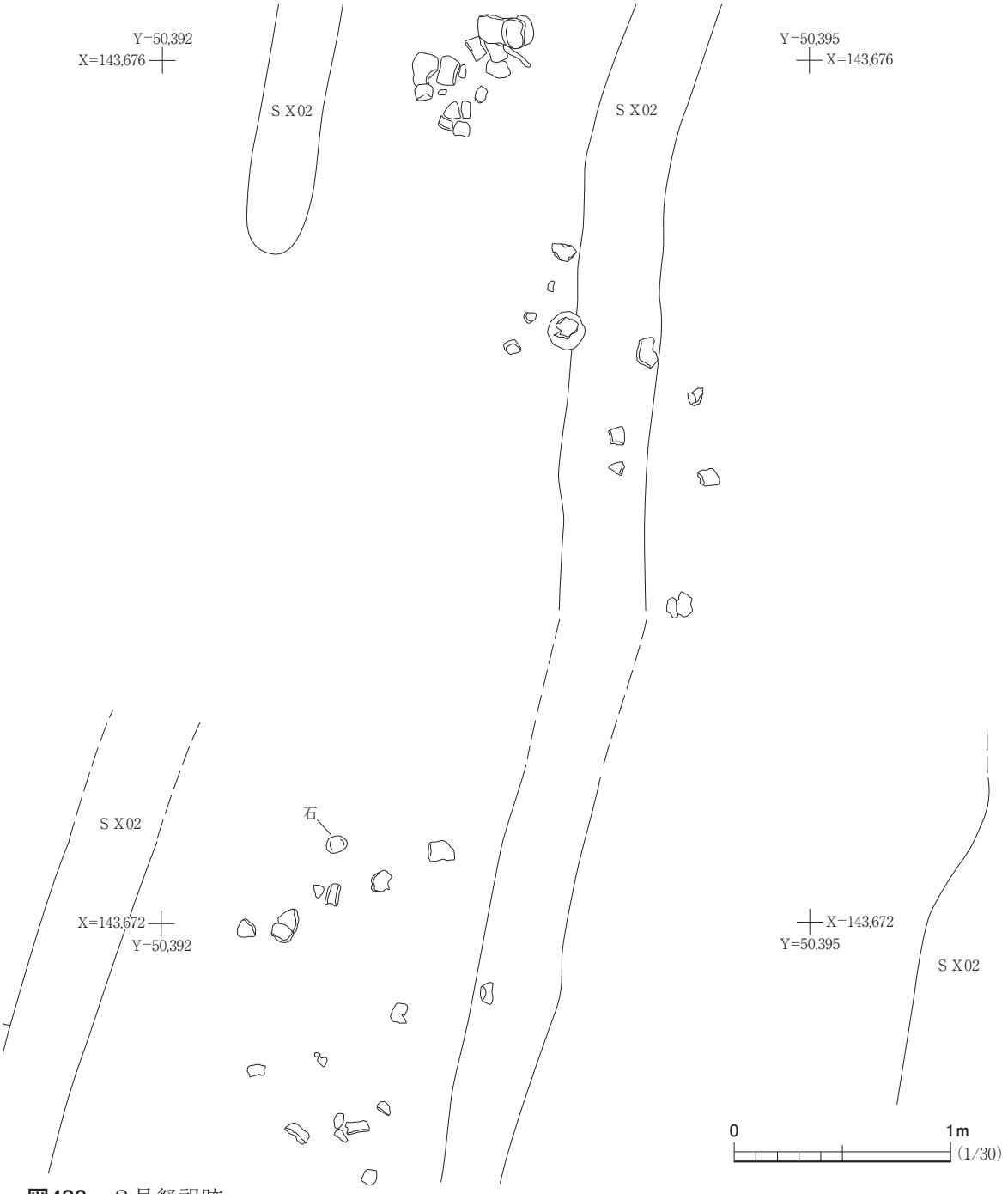


図430　2号祭祀跡

ヘラナデを施す。図432－1は体部上半と口縁部を欠失する平底の壺である。2は、素口縁、平底で胴部のやや上部に最大径をもつ大型の壺で、調整は口縁部の内外面にヨコナデ、胴部内外面にハケメを施す。

ま と め

本遺構は土器を集積しているものである。壺が大半を占めること、出土した壺のうち1点に打ち欠きによる穿孔がみられることなど、何らかの祭祀の跡と考えられる。時期は出土土器から古墳時代後期と考えている。　（吉　野）

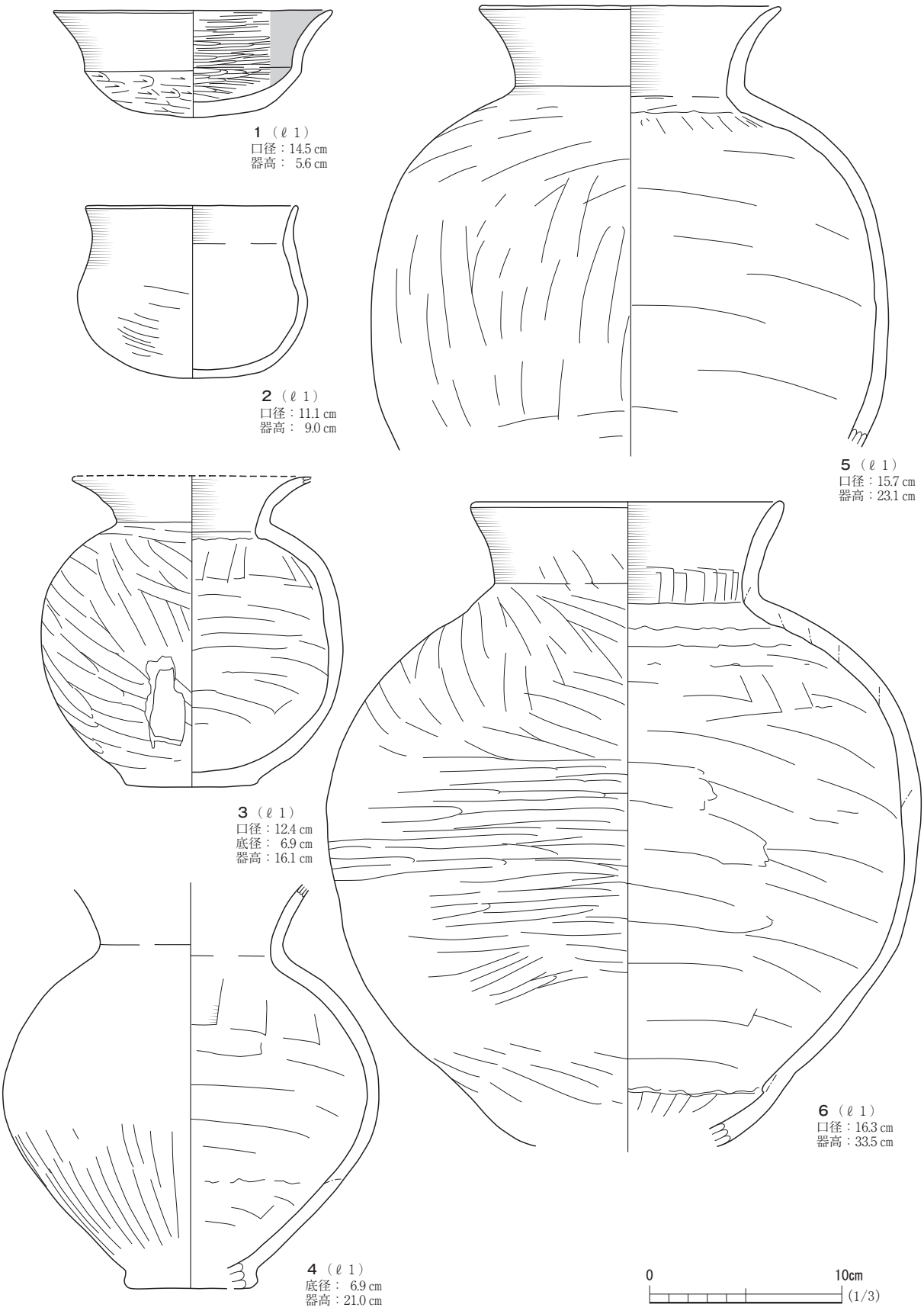


図431　２号祭祀跡出土遺物（１）

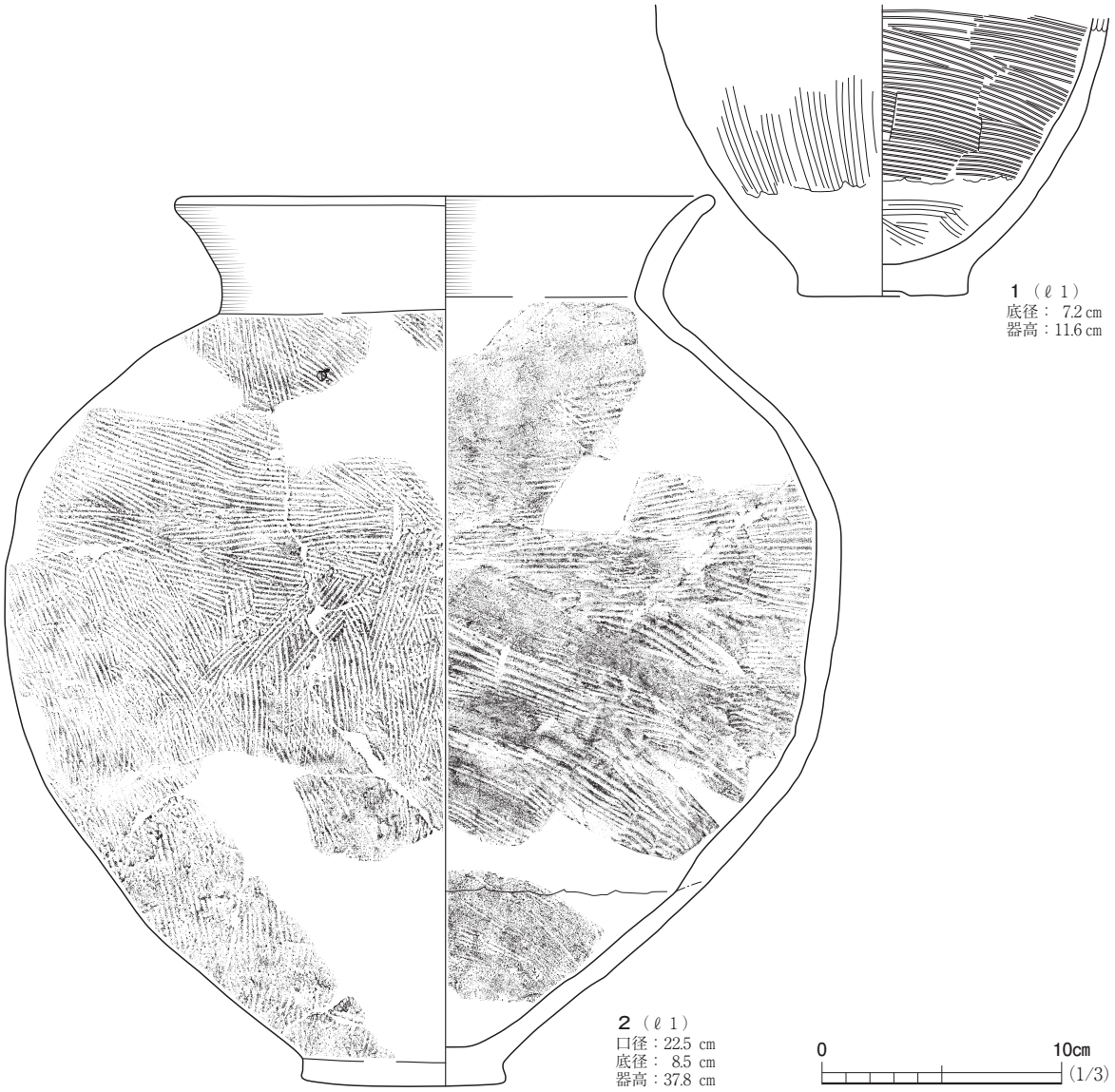


図432　2号祭祀跡出土遺物（2）

1号土器集中地点

遺　　構（図433、写真332）

本遺構は、Ⅴ区のⅤ・Ｗ－19グリッドのＬⅢで検出された。標高236.0～236.2ｍの東から西へ向かってきわめて緩やかに下る斜面に立地している。

ＬⅡｂの調査後、古墳時代前期の面までの掘削中に、完形に近い複数の土器が集中している状態で検出した。土器はいずれも古墳時代前期のもので、当初は住居跡を想定し周辺を精査したが、住居跡やその他の遺構は検出されず、土器が旧地表面にまとめおかれた状態であると判断した。

重複する遺構はないが、本土器集中地点の調査後さらに重機で掘り下げたところ、本遺構の北西で古墳時代前期の畑跡群がさらに２面、約20㎝と30㎝下で検出された。

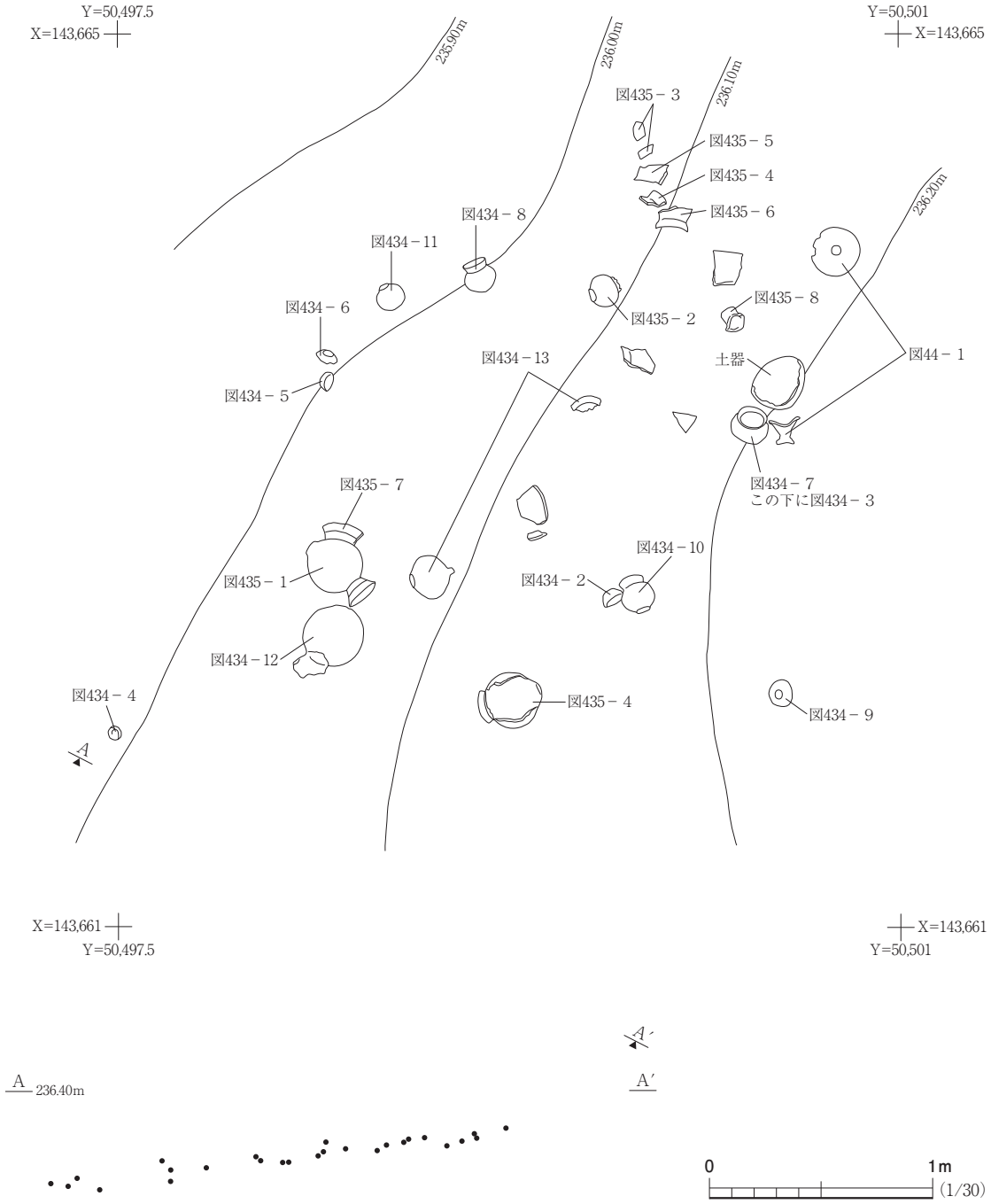


図433　１号土器集中地点

土器が出土した範囲は、東西3.4ｍ、南北2.8ｍで、ほぼ半径1.5ｍの円内に収まる。この範囲に、図示できたものだけで、高杯１、鉢８、壺６、甕(台付甕含む)６、あわせて21点の土師器が出土した。完形の土器はなく、一部を欠損した状態、もしくは大きな破片の状態の土器が混在して散らばっていた。完形に近いものはいずれも横倒しの状態であった。

本土器集中地点を覆っていた層はＬⅢのにぶい黄褐色の砂質土である。また、本土器集中地点の土器が置かれていた層もこれを覆っていた層の土質と大差のないものであった。

遺　　物（図434・435、写真421・422）

本土器集中地点からは、63点の土師器が出土した。また、周辺の同じ層から出土した土器と接合したものがある。このうち、21点を図示した。

図434－1は高杯である。杯部径が脚部径を大きく凌駕する。杯部はきわめて緩やかに湾曲しながら外傾し、脚部は「八」字に開く。杯部内面の底部付近が剥離によって失われている。外面と杯部内面にミガキが施される。口縁部の一部が打ち欠かれたように欠損しているが、人為的なものかどうか判断が難しい。

２～５は、無頸の鉢である。２は、平底と無頸で内湾する口縁部をもつ。口縁端部は面取りされる。外面はナデ、内面はヘラナデが施される。３～５は、いずれも輪台状の平底をもつ浅い椀形の杯で、外面にナデ、内面にヘラナデが施される。

６は、平底でややつぶれた球形の体部をもつ。外面にミガキ、内面にヘラナデを施す。

７・８は、鉢である。いずれも、平底でややつぶれた球形の体部、「く」字口縁をもつ。外面は口縁部下半から体部上半にハケメを施したのち体部下半にケズリを、内面は、口縁部にハケメ、体部上半にヘラナデ、中位にケズリを施す。７については、底部から体部下半の一部を欠失するが、打ち欠きによる穿孔の可能性がある。

９は、平底で、ややつぶれた体部、短く外傾する口縁部をもつ。頸部に輪積み痕を残して段を作る。外面と口縁部内面にハケメ、体部内面はヘラナデを施す。

10～12は素口縁の壺である。10は、輪台状の平底、ややつぶれた球形の体部、「く」字口縁をもつ。外面の口縁部下半から体部と口縁部内面にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。口縁部の一部を欠損するが、人為的な打ち欠きによるものかの判断は難しい。11は、中央部がくぼむ平底にややつぶれた体部、緩やかに外反するやや長い口縁部をもつ。口径は体部最大径とほぼ同じである。底面を含む外面全体と口縁部内面にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。12は、平底で、球形の体部、「く」字に外傾する口縁部をもつ。口縁部の内外面にハケメ、体部外面にハケメののちミガキ、同内面にヘラナデののちミガキを施す。底面は剥離により欠失する。

13は、複合口縁の壺である。平底とややつぶれた体部、外面上半を外側に肥厚させる外傾する口縁部をもつ。外面は、頸部から体部にハケメを施したのち下部にケズリを、内面は、口縁部にナデ、体部にヘラナデを施す。

図435－1は、二重口縁壺である。平底と球形の体部、外傾する頸部、外面を肥厚させ内面に段を巡らせる口縁部をもつ。口縁部の内外面にミガキ、内面にヘラナデを施す。

２は、壺である。口縁部を欠失する。平底になで肩の体部、やや外傾する頸部をもつ。体部外面にミガキ、同内面にナデを施し、外面と頸部内面に赤彩を施す。

３～７は、甕である。いずれも「く」字口縁である。３は、口縁部と体部の一部のみが遺存する。口縁部の内外面にハケメ、体部内面にナデを施す。４～６は、体部外面にナデ、同内面にヘラナデ、ナデを施す。４は底部付近を欠失し、５・６は口縁部の一部が遺存する。７は、頸部に輪積

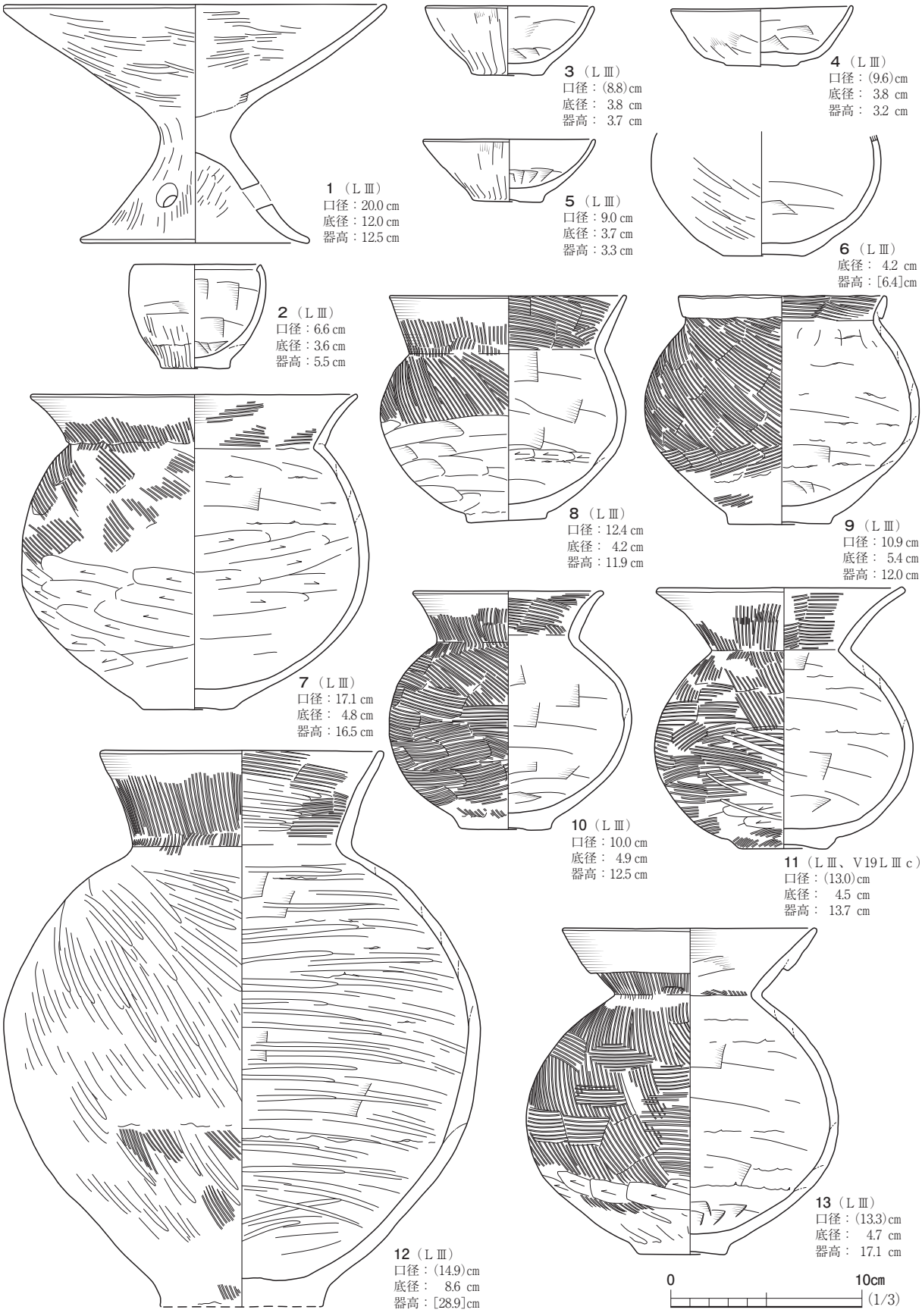


図434　１号土器集中地点出土遺物（１）

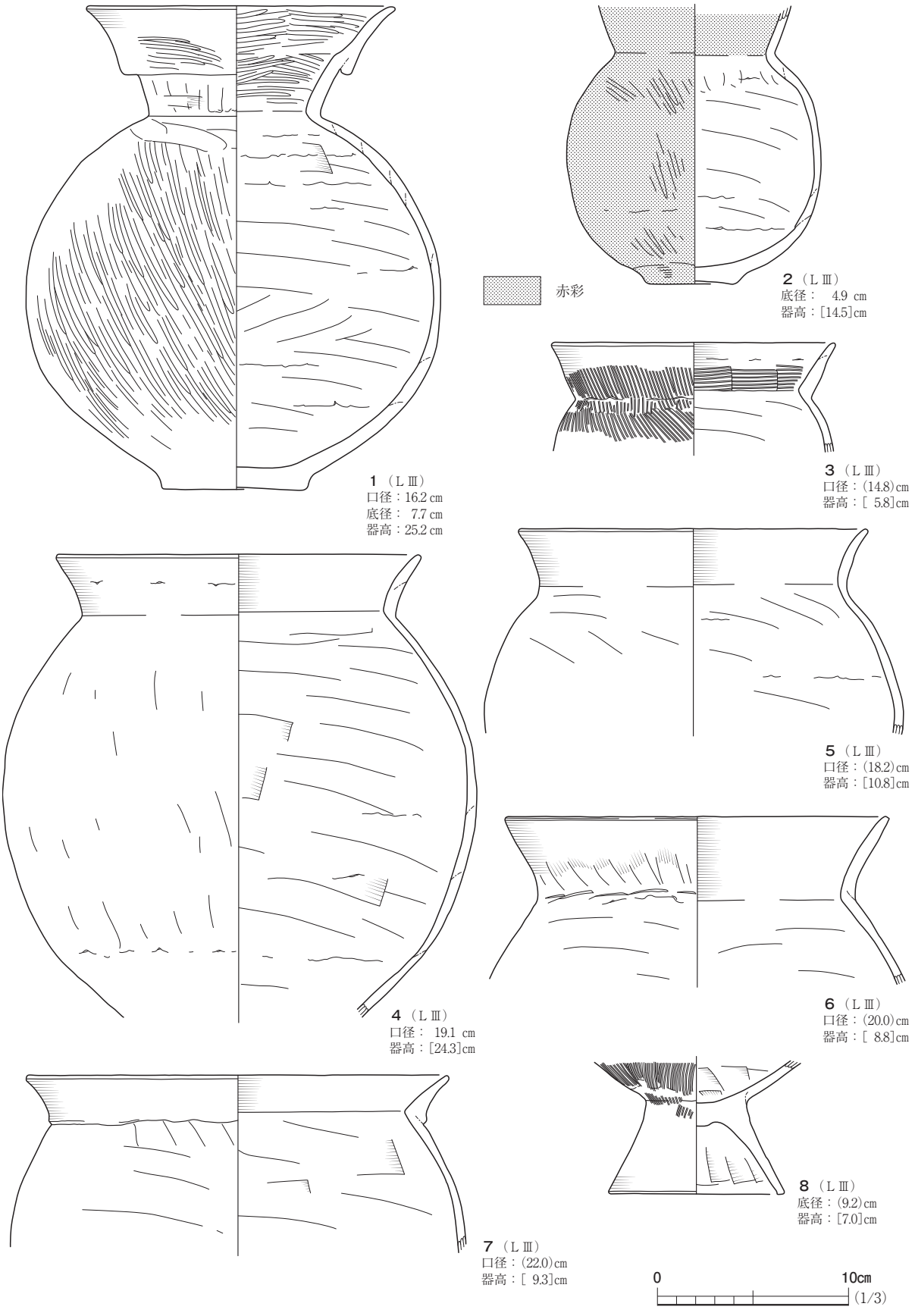


図435　1号土器集中地点出土遺物（2）

み痕を残して段を作る。外面にナデ、内面にヘラナデを施す。

８は、台付甕である。台部と体部の一部が遺存する。体部外面にハケメ、内面にヘラナデを施す。体部外面に炭化物が付着する。

ま と め

古墳時代前期の土器集中地点である。ＬⅢの中で検出され、本土器集中地点の西側の下層からは古墳時代前期の畑跡がさらに２面検出された。下層の２面の畑がそれぞれ埋没したのち、その傍らに本土器集中地点ができたことになる。

本土器集中地点の土器の一部に口縁部や底部への人為的な打ち欠きの可能性が指摘できることから、単なる廃棄ではなく何らかの祭祀の残滓ではないかと思われる。（青　山）

第10節　土　坑

本遺跡では、170基の土坑が検出された。弥生時代終末期、古墳時代前期、同後期、奈良時代、平安時代、中世のもので、その他については出土遺物がなく、検出面などからおおよその年代が推し量れるもののみである。土坑の性格についても、多くは不明とせざるを得ない。

ここでは、すべての土坑について逐一述べることをせず、位置、検出面、標高、規模、出土遺物、推定される年代を表１～３にまとめ、その他所見のあるものについて記載した。

４号土坑　ＳＫ04（図436、写真333）

本遺構は、Ⅱ区のＬ－19グリッド、標高235.5ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂである。重複する遺構は２号畑跡である。直接的な切り合い関係はないが、本遺構が新しいと考えている。堆積土は９層に区分した。ℓ１～５は黒褐色を主体とした自然堆積土で、ＬⅡａ①に対応する土層である。ℓ８・９は人為的に埋めた堆積土である。ℓ８の上面には自然礫が６点ほどまとまって出土した。おそらく土坑の南西方向からℓ６・７の堆積土とともに投棄されたものと判断している。平面形は、おおむね円形である。規模は、最大1.4ｍである。周壁は、検出面から60㎝ほどに段を持ち、そこから傾斜が急になる。上部の傾斜は、60度、下部は80度で立ち上がる。壁高は、95㎝である。底面は平坦に作られている。遺物は出土していない。堆積土の状況から、３号建物跡に関連する遺構の可能性がある。所属時期は中世頃と考えられる。（中野・菅野）

11号土坑　ＳＫ11（図437、写真333）

本遺構は、Ⅳ区のＪ－８グリッド、標高236.4ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅡｂと考えられるが、32号住居跡の堆積土を掘り込んでおり、主軸方位も揃うことから、両遺構は関連があるものと考えている。重複する遺構は32号住居跡で、本遺構が新しい。堆積土は３層に区分した。ℓ１・２は炭化物・焼土粒を含む暗褐色土で、人為堆積土である。ℓ３は炭化材を主体とした

表2　土坑一覧(1)

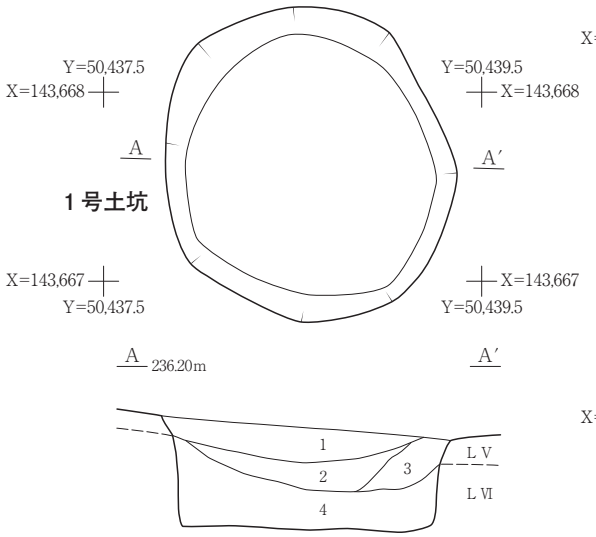
遺構名	地区	グリッド	検出面	標高（m）	重複	規模		出土遺物	年代
						平面（m）	深さ（cm）		
SK01	Ⅱ	P19	Ⅳ	235.8		1.7×1.5	60	なし	～古墳前期
SK02	Ⅱ	P20	Ⅳ	236.0		2.1×1.9	114	なし	～古墳前期
SK03	Ⅱ	K16	Ⅱb	236.2		1.8×1.2	22	土師器甕	平安
SK04	Ⅱ	L19	Ⅱb	235.6		1.4×1.3	95	なし	中世
SK05	Ⅱ	K16	Ⅱb	236.4		1.8×0.9	18	土師器杯甕	平安
SK06	Ⅰ	M12	Ⅱb	236.5		1.33×0.98	20	土師器甕	平安
SK07	Ⅳ	K13	Ⅱb	236.3		0.77×0.68	24	なし	平安
SK11	Ⅳ	J8	Ⅱb	236.4	SI32→SK11	1.95×1.15	36	なし	平安
SK12	Ⅳ	I8	LⅡa③	235.3	SK41→SK12	0.93×1.1			平安
SK13	Ⅳ	H14	Ⅱb	235.8	SX38→SK13	1.7×1.55	98	土師器杯	中世
SK14	Ⅳ	C21	Ⅱb	235.6		1.8×1.1	30	なし	平安
SK18	Ⅱ	Q19	LⅣ	236.0		1 ×0.8	70		古墳前期
SK19	Ⅲ	C・D20	Ⅱb		2号方形区画と一連				中世
SK20	Ⅳ	G11	Ⅱb①	235.9	SI42→SK20	0.9×0.75	17	土師器甕　杯	平安
SK21	Ⅳ	G11	Ⅱb①	235.9	SI42→SK21	0.88×0.78	8	土師器甕	平安
SK22	Ⅳ	F・G11	Ⅱb①	235.8		0.95×0.88	10		平安
SK23	Ⅳ	F11	Ⅱb①	235.8		1.02×0.95	10	土師器甕	平安
SK24	Ⅳ	F10・11	Ⅱb①	235.9		1.77×1.69	18		平安
SK25	Ⅳ	F11	Ⅱb①	235.9	GP	0.98×0.77	7	土師器甕	平安
SK26	Ⅳ	F12	Ⅱb①	236.1		1.61×1.37	21		平安
SK27	Ⅳ	F12	Ⅱb①	236.1		1.2×0.8	5	土師器甕	平安
SK28	Ⅳ	F12	Ⅱb①	236.0		1.45×1.13	43	土師器甕　須恵器甕	平安
SK29	Ⅳ	F12	Ⅱb①	236.0		1.11×0.97	38	土師器甕　杯	平安
SK30	Ⅳ	F12	Ⅱb①	236.0		0.97×0.88	12	土師器甕	平安
SK31	Ⅳ	G9	Ⅱb①	236.2		2.5×2.15	12	土師器甕	平安
SK32	Ⅳ	F10	Ⅱb①	236.0	SB05	1.32×1.28	54		古墳後期
SK34	Ⅰ	S14	Ⅳ	236.5		0.7×0.68	13		古墳前期
SK36	Ⅴ	T19	Ⅳ	236.8	SI39→SK36	1.03×0.69	23	土師器	古墳前期
SK37	Ⅴ	T19	Ⅱb	236.8		0.94×0.74	44		平安
SK39	Ⅲ	B19	Ⅲ	235.7		1.25×1.1	90	木製品	中世
SK40	Ⅲ	B18	Ⅲ	235.3		1.9×1.8	130	井戸枠	中世　井戸
SK41	Ⅲ	B20	Ⅱb	235.4		0.9×0.48	10		平安～中世
SK42	Ⅲ	E25	Ⅱb	240.1	SK43→SK42	0.9×0.8	14	銭貨　青磁	中世　SB27施設
SK43	Ⅲ	E25	Ⅱb	240.1	SK43→SK42	0.5以上×0.5	12		中世
SK45	Ⅳ	I6	Ⅱb③	236.3	SK45→SI67	長軸1.33	30	土師器鉢	古墳後期
SK46	Ⅳ	I12・13	Ⅱa③	235.8	SI72→SX5→SK46	1.5×1.5	108		中世
SK47	Ⅱ	J15	Ⅳ	236.0	SK47→SI78	1.65×0.8	15	弥生土器	弥生終末期
SK48	Ⅳ	H9	Ⅱb	235.7	SK48→SI58	2.7×1.2	26		弥生終～古墳前
SK51	Ⅴ	X16	Ⅱb②	236.4	SD15→SK51	1.05×1.05	35		中世～近世
SK52	Ⅴ	V19	Ⅱb①②	236.6	SI85→SK52→SB17	1.95×1.75	22		奈良
SK53	Ⅴ	U22	Ⅱb	236.0		1.9×1.48	10		奈良
SK54	Ⅴ	W16・17	Ⅱb③	236.7		1.82×1.2	25	炭化材	奈良～平安
SK55	Ⅱ	H25	Ⅱa③	236.0		1.93×1.7	113		中世　井戸
SK56	Ⅱ	H26	Ⅱb①	236.0		0.93×0.85	10	石製品	中世
SK57	Ⅱ	H25	Ⅱb①	236.0		1.08×0.45	17		中世
SK58	Ⅱ	H26	Ⅱb①	236.2	SK58→ピット群	1.72×1.58	100	陶器	中世　井戸
SK60	Ⅱ	H・I25	LⅡa③	236.0		2.3×2.05	148		中世　井戸
SK61	Ⅱ	H25・26	Ⅱb①	236.1		1.7×0.62	20		中世
SK62	Ⅲ	F25	LⅡa③	236.0		1.97×1.65	165		中世
SK63	Ⅲ	C23	LⅡb①	235.9		1.32×1.24	37		古墳後期
SK64	Ⅲ	C23・24	Ⅱb②	235.9		0.92×0.8	42		古墳後期
SK65	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9		1.08×1.08	35	土師器杯　甕	古墳後期
SK66	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9		0.58×0.55	39		古墳後期
SK67	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9		1.13×1.08	33		古墳後期
SK68	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9	GP→SK68	1.24×0.97	29		古墳後期
SK69	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9		0.9×0.78	30		古墳後期
SK70	Ⅲ	C23	Ⅱb①②	235.9		1.17×1.08	35		古墳後期

表３　土坑一覧（２）

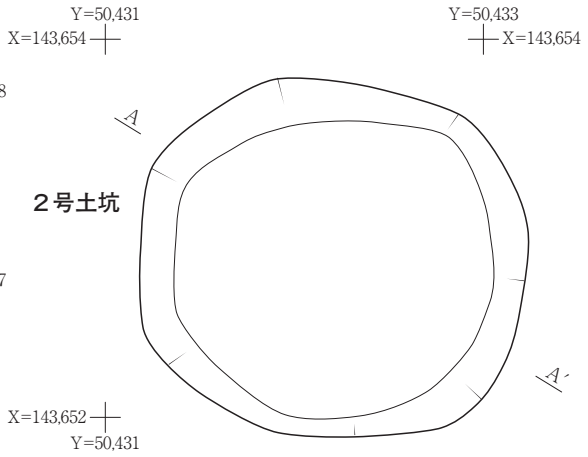
遺構名	地区	グリッド	検出面	標高（m）	重複	規模		出土遺物	年代
						平面（m）	深さ（cm）		
SK71	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9		1.53×0.51	16		古墳後期
SK72	Ⅲ	C23	Ⅱb②	235.9	SK72→GP	1.23×1.2	30	石製品　土師器	古墳後期
SK73	Ⅲ	E25	Ⅱb③	236.0		1.23×1.2	24		古墳後期
SK74	Ⅲ	E25	Ⅱb③	236.1		1.06×0.95	28		古墳後期
SK75	Ⅲ	F・G24	Ⅱa③	235.6	SX24→SK75	1.14×0.77	41		中世
SK76	Ⅲ	G24	Ⅱa③	235.6	SX24→SK76	2.93×2.13	150	木製品	中世　井戸？
SK77	Ⅲ	D25	Ⅱb②	236.0	SI80→SK77→GP	2.2×1.8	158		中世　井戸
SK78	Ⅲ	I26	Ⅱb②	236.0		1.4× 1	14		中世？
SK79	Ⅲ	I26	Ⅱb②	235.9		1.06×0.9	26		中世？
SK80	Ⅲ	H26	Ⅱb②	236.0		1.18×0.96	50		中世？
SK81	Ⅲ	D24	Ⅱb②	235.7		1.05×0.98	18		古墳後期
SK82	Ⅲ	D24	Ⅱb②	235.7		0.8×0.78	16		古墳後期
SK83	Ⅲ	D24	Ⅱb②	235.8		0.55×0.5	23		古墳後期
SK85	Ⅴ	U14	LⅣ	236.7		0.76×0.75	48		古墳前期
SK87	Ⅴ	U17	LⅣ	236.5	SI189→SK87	1.28×1.25	16	土師器甕	古墳前期
SK90	Ⅴ	Q25	Ⅳ	236.0		1.8×1.75	10		中～近世
SK91	Ⅴ	Q26	Ⅳ	236.0	SB36→SK91	1.73×1.07	12		中～近世
SK92	Ⅴ	Q26	Ⅳ	235.8	SB36→SK92	1.6×1.46	10		中～近世
SK93	Ⅴ	Q26	Ⅳ	235.5	SB36→SK93	0.95×0.88	13		中～近世
SK94	Ⅴ	P24	Ⅳ	236.2		1.65×1.25	70		古墳前期
SK95	Ⅴ	Q24	Ⅳ	236.3		0.7×0.68	8		古墳前期
SK96	Ⅴ	Q24	Ⅳ	236.2		1.14×1.1	48		古墳前期
SK97	Ⅴ	Q・R24	Ⅳ	236.3		1.38×1.24	16		古墳前期
SK98	Ⅴ	P22	Ⅳ	236.6		1 ×0.9	30		古墳前期
SK99	Ⅴ	P19	Ⅳ	236.6		1.02×0.93	33	土師器	古墳前期
SK100	Ⅴ	R22	Ⅳ	235.4		1.25×1.25	38		古墳前期
SK101	Ⅴ	S21・22	Ⅳ	235.4		0.9×0.46	34		古墳前期
SK102	Ⅴ	R22	Ⅳ	235.4		1.29×1.15	31		古墳前期
SK103	Ⅴ	R22	Ⅳ	235.4		1.48×1.13	17		古墳前期
SK104	Ⅴ	S21	Ⅳ	235.3		(0.65) ×0.45	18		古墳前期
SK105	Ⅴ	S21	Ⅳ	235.1		0.87×0.87	20		古墳前期
SK106	Ⅱ	R21	Ⅳ	236.0		0.98×0.93	20		古墳前期
SK107	Ⅴ	Q23	Ⅳ	236.3		1.33×1.23	20		古墳前期
SK108	Ⅱ	N20	Ⅳ	235.8		1.1×0.9	26		古墳前期
SK109	Ⅱ	N19	Ⅳ	235.7		1.34×1.32	21		古墳前期
SK110	Ⅴ	P24	Ⅱb	236.5		0.8×0.6	30		平安
SK111	Ⅴ	P25	Ⅱb	236.6		1.7×1.2	30		平安
SK112	Ⅱ	M17	Ⅳ	236.0		1.12×1.08	30		古墳前期
SK113	Ⅱ	M17	Ⅳ	236.1		1.07×0.98	24		古墳前期
SK114	Ⅱ	M17	Ⅳ	236.1		0.97×0.83	17		古墳前期
SK115	Ⅱ	M17	Ⅳ	236.1		1.15×1.15	14	土師器甕	古墳前期
SK116	Ⅱ	N16	Ⅳ	235.7		1.15×1.13	23		古墳前期
SK117	Ⅱ	M15	Ⅳ	235.7		1.73×1.65	55	土師器	古墳後期
SK118	Ⅱ	L15	Ⅱb②	235.7		1.6×1.55	38	土師器甕　杯	古墳後期
SK119	Ⅱ	L16	LⅡb②	235.7		0.83×0.8	15	土師器甕	古墳後期
SK120	Ⅱ	L16	LⅡb②	235.7		1.69×1.2	12	土師器甕	古墳後期
SK121	Ⅱ	L15	Ⅲb	235.6		0.8×0.5	25	土師器甕	古墳前期
SK122	Ⅱ	L15・16	Ⅳ	235.9		1.16×(0.9)	20		古墳前期
SK123	Ⅳ	E13	Ⅳ	235.5	SI185→SK123	1.45×1.3	12		古墳後期
SK124	Ⅳ	E14	Ⅳ	235.3		1.05×0.98	10		古墳後期
SK125	Ⅳ	E14	Ⅳ	235.2	SK125→SD02	1.53×1.2	18	土師器杯　甕	古墳後期
SK126	Ⅳ	E14	Ⅳ	235.3		1.4×1.13	18	土師器杯　甕	古墳後期
SK127	Ⅳ	E14	Ⅳ	235.2		0.42×0.38	11		古墳後期
SK128	Ⅴ	T19	Ⅳ	235.6		0.84×0.8	20		古墳前期
SK129	Ⅱ	N22・23	Ⅳ	235.8		1.8×1.4	50		古墳前期
SK130	Ⅱ	N22	Ⅳ	235.8		0.8×0.7	20		古墳前期
SK131	Ⅴ	N24	Ⅳ	235.9		1.1×0.8	20		古墳前期

表4　土坑一覧（3）

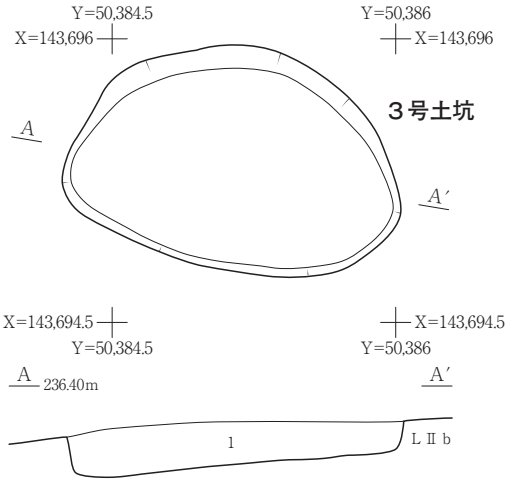
遺構名	地区	グリッド	検出面	標高（m）	重複	規模		出土遺物	年代
						平面（m）	深さ（cm）		
SK132	Ⅴ	O23	Ⅳ	235.9		1.5×1.2	20		古墳前期
SK133	Ⅴ	X16	Ⅳ	235.9		1.13×0.82	16		古墳前期
SK134	Ⅴ	U19	Ⅳ	236.3		1 ×0.92	14		古墳前期
SK135	Ⅴ	U19	Ⅳ	236.1		1.14×1.1	20		古墳前期
SK136	Ⅱ	J14	Ⅱb	236.2		1.7×1.3	20		平安
SK137	Ⅴ	T16	Ⅳ	236.5	SI130→SK137	1.75×1.55	32		古墳前期
SK138	Ⅴ	T16	Ⅳ	236.5	SI108→SK138	1.63×1.43	22		古墳前期
SK139	Ⅱ	J14	Ⅱb	236.2		1 ×0.7	18		平安
SK140	Ⅱ	J14	Ⅱb	236.2		2.5×1.9	18		平安
SK141	Ⅱ	J16	Ⅱb	236.1		0.8×0.8	18		平安
SK142	Ⅱ	T14	Ⅳ	236.3		1.3×1.08	27		古墳前期
SK143	Ⅱ	J15・16	Ⅳ	235.6	SK143→SK145	2.9×2.4	20	石鏃　弥生土器	弥生終末期
SK144	Ⅱ	J16	Ⅳ	235.5		2.5×1.4	20		弥生終末期
SK145	Ⅱ	J15・16	Ⅳ	235.4	SK143・146→SK145	2 ×1.7	26		古墳前期
SK146	Ⅱ	J15・16　K16	Ⅳ	235.4	SK146→SK145	2.5×2.3	16		弥生終末期
SK149	Ⅳ	I13　12	Ⅱ	235.8		2.9×1.7	30		平安
SK150	Ⅳ	I13	Ⅲ	235.4		1.6×（1.1）	20		平安
SK151	Ⅳ	I13	Ⅲ	235.4		1.2×（0.7）	38		平安
SK152	Ⅳ	I13	Ⅲ	235.4		0.78×0.66	30		平安
SK153	Ⅰ	R・S14	Ⅳ	236.2		1.67×1.57	67	柱痕跡	古墳前期
SK154	Ⅳ	Q13	Ⅳ	235.9	SX49→SK154	1.23×0.95	16		古墳前期
SK155	Ⅳ	I13	Ⅲ	235.9		0.92	30		平安
SK156	Ⅳ	I14	Ⅲ	234.9		0.8×0.7	10		平安
SK157	Ⅳ	G10	Ⅱb	235.6	SI64→SK157	2.5× 1	12		平安
SK158	Ⅲ	F12	Ⅱb	235.8		1.38×1.1	27		平安
SK159	Ⅰ	N14	Ⅳ	235.5	SX53→SK159	2.4×1.26	14		古墳前期
SK160	Ⅰ	N14	Ⅳ	235.5		1.45×1.43	18		古墳前期
SK161	Ⅰ	N14	Ⅳ	235.4	SX53→SK161	1.4×1.37	53		古墳前期
SK163	Ⅳ	G12	Ⅲ	235.6		2 ×1.6	20	炭化材	古墳後期
SK164	Ⅰ	M13	Ⅲb	235.6		1.03×0.93	13	土師器甕	古墳前期
SK165	Ⅰ	M13	Ⅲb	235.6		1.27×0.88	1.2		古墳前期
SK168	Ⅰ	M14	Ⅳ	235.3		1.3×1.23	27	炭化材	古墳前期
SK169	Ⅰ	M14	Ⅳ	235.3		2.17×1.35	25		古墳前期
SK170	Ⅰ	M・N14	Ⅳ	235.8		1.05×0.87	18		古墳前期
SK171	Ⅰ	O12	Ⅲb	235.4		2.25×2.21	11		古墳前期
SK172	Ⅰ	N14	Ⅲb	235.0	SI209→SK72→SX51	1.71×1.12	28		古墳前期
SK173	Ⅱ	N21	Ⅳ	235.7		1.3×1.1	20		古墳前期
SK174	Ⅱ	K・L17	Ⅳ	235.5		1.5× 1	20		古墳前期
SK175	Ⅱ	K16・17	Ⅲ	235.6		1.3× 1	20		古墳後期
SK176	Ⅱ	L16・17	Ⅲ	235.7		2.7×1.2	20		古墳後期
SK177	Ⅱ	K16	Ⅲ	236.9		2 ×1.7	60		古墳後期
SK178	Ⅱ	I 16	Ⅲ	235.5		1.1× 1	10		平安
SK179	Ⅱ	I 16	Ⅲ	235.5		（0.6） ×0.9	10		平安
SK180	Ⅳ	I・J15	Ⅳ	235.8		1.2×0.8	20		古墳前期
SK181	Ⅱ	K15・16	Ⅲ	235.3		1.8×1.6	20		古墳後期
SK182	Ⅰ	K13	Ⅳ	235.7		1.28×1.03	35		古墳前期
SK183	Ⅳ	J14・15	Ⅳ	235.8		2.8×1.3	30		弥生終末期
SK184	Ⅰ	J15	Ⅳ	235.8		1.9× 1	26		弥生終末期
SK185	Ⅳ	J14	Ⅳ	235.6		2.1×1.1	14		弥生終末期
SK186	Ⅳ	J6	Ⅱb	236.2		（1.6） ×1.3	14		平安
SK187	Ⅰ	L12	Ⅲa⑥	235.4		1.25×1.13	18		古墳前期
SK188	Ⅰ	M12	Ⅲa⑥	235.3		1.68×1.05	20		古墳前期
SK189	Ⅰ	M12	Ⅲa⑥	235.2		1.9×1.29	26	土師器器台	古墳前期
SK190	Ⅰ	M12	Ⅲa⑥	235.4		1.2×1.1	21		古墳前期
SK191	Ⅱ	I・J15	Ⅳ	235.6		1.7×1.2	20	弥生土器	弥生終末期
SK194	Ⅰ	L・M11	Ⅴ	234.8	SI228→SK194	2.5×2.25	18	弥生土器	弥生終末期



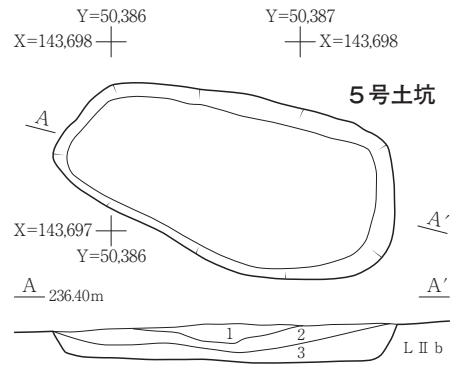
1号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒少量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒多量、にぶい黄褐色砂質土含む）
3　にぶい黄橙色砂質土　10YR6/4
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3（にぶい黄橙色砂質土含む）



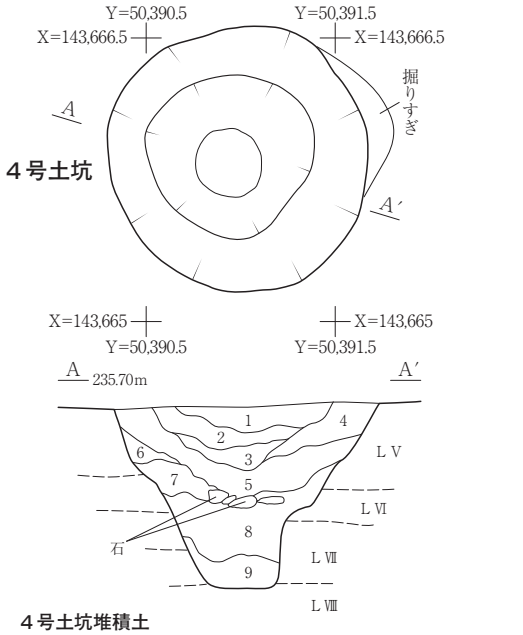
2号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（酸化鉄層含む）
2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2（小礫・炭化物粒・灰黄褐色粘土質塊含む）
3　にぶい黄褐色砂　10YR4/3（小礫・炭化物粒・灰黄褐色粘土質塊含む）



3号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（褐色土塊含む）



5号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（焼土粒含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色土含む）
3　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3



4号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色粒多量）
2　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色粒少量、黄褐色塊微量）
3　黒褐色粘質土　10YR2/2（黄褐色土多量）
4　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色粒多量）
5　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色粒・黄褐色土・赤褐色土少量）
6　暗褐色土　10YR3/4（褐色土塊多量）
7　灰色粘質土　7.5Y4/1（白色粒微量、酸化鉄斑状に含む）
8　灰色粘質土　10Y4/1（明褐色土多量）
9　褐色粘質土　7.5YR4/3（明褐色土多量）

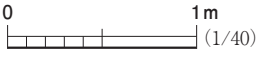


図436　土坑（1）

土層で、底面に炭を敷設したものと考えている。炭化材は10㎝未満のものが多いが、面を揃えるように丁寧に敷設されている。平面形は楕円形で、規模は長径190㎝、短径115㎝である。周壁は60～75度で立ち上がる。壁高は上半を32号住居跡の堆積土として取り去っており、遺存長36㎝であるが、本来は60㎝前後と考えている。底面は平坦に作られている。遺物は土師器が18点、須恵器１点が出土している。いずれもロクロ成形の杯や甕の小片で平安時代の所産である。

本遺構は、埋められた32号住居跡を意識しながら掘り込まれている。底面に丁寧に炭化材を敷き詰めた後に、人為的に埋められていた。機能は、炭化材の敷設状況から墓を想定しており、住居の廃絶後に堆積土を掘り込んで、埋葬が行われた可能性も考えられる。所属時期は重複関係などから９世紀頃と考えられる。（中　野）

12号土坑　ＳＫ12（図437・462、写真334・423）

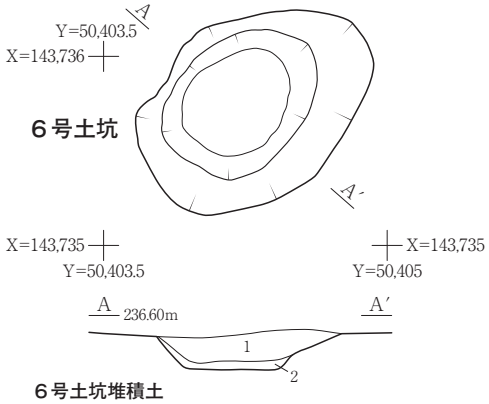
本遺構はⅣ区のＪ－８グリッドに位置する。標高236.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はⅡａ③と考えられるが、41号住居跡の堆積土を掘り込んでおり、不明確である。重複する遺構は41号住居跡で、本遺構が新しい。堆積土は４層に区分した。ℓ１・２は水平に堆積しており人為堆積土である。ℓ３・４はレンズ状に堆積しており自然堆積である。平面形は楕円形である。規模は、長径110㎝、短径93㎝である。周壁は、75度で立ち上がる。壁高は、上半を41号住居跡の堆積土として取り去ってしまっているため、遺存長30㎝である。底面は平坦に作られている。遺物は土師器が63点出土し、１点を図示した。図462－５はロクロ成形の杯である。内面はヘラミガキ後内面黒色処理を施す。外面には墨書が認められ「仁」と読める。所属時期は重複関係や出土遺物などから平安時代の９世紀頃と考えられる。（中　野）

31号土坑　ＳＫ31（図439・462、写真335）

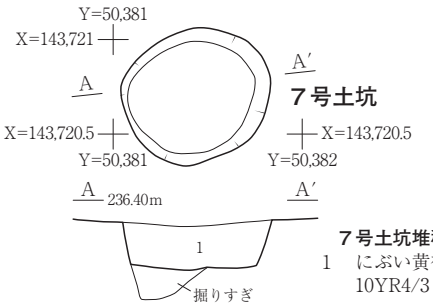
本遺構はⅣ区のＧ－９グリッドに位置する。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はⅡｂ①である。重複する遺構はない。堆積土は炭化物や焼土粒を多く含む暗褐色の単層で、土師器片が多く出土した。平面形は楕円形である。規模は、長径250㎝、短径215㎝である。周壁は40度で立ち上がる。壁高は12㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物は土師器96点が出土し、１点を図示した。図462－10は非ロクロ成形の甕である。口縁部から胴部上半が復元できた。胴部外面には粘土が付着しており、カマドに据え付けられていたものかもしれない。本遺構は、堆積土から比較的多くの土師器片が出土していることから、不用品などを捨てた廃棄土坑と考えられる。所属時期は、検出面や出土遺物などから平安時代の９世紀頃と考えられる。（中　野）

36号土坑　ＳＫ36（図439・461、写真336・423）

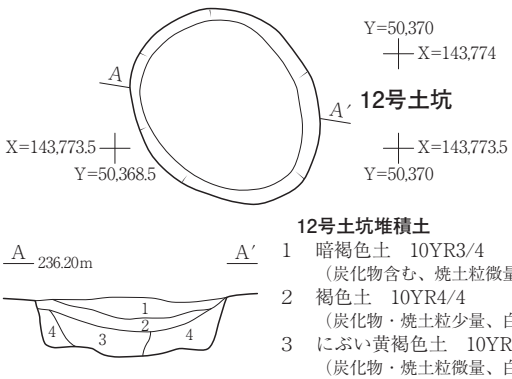
本遺構は、Ⅴ区のＴ－19グリッド、ＬⅣで検出された。標高236.8ｍの平坦面である。139号住居跡と重複し、本遺構が新しい。平面形は楕円形で、規模は長径103㎝、短径69㎝である。暗褐色



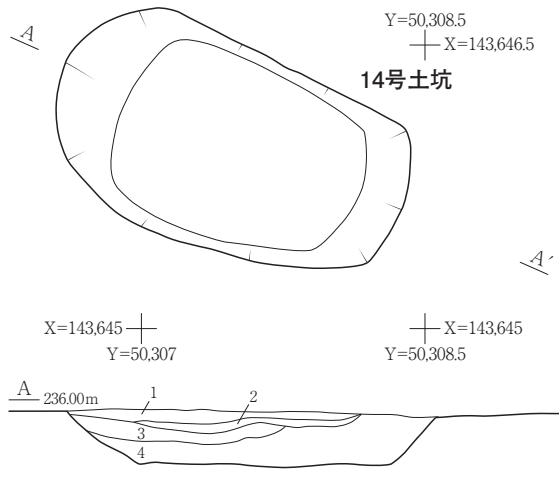
6号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（白色粒多量）
2　褐色土　10YR4/4

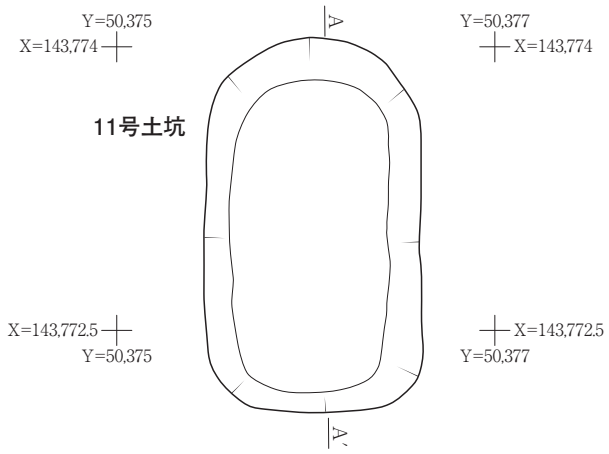


7号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土
10YR4/3（白色粒少量）

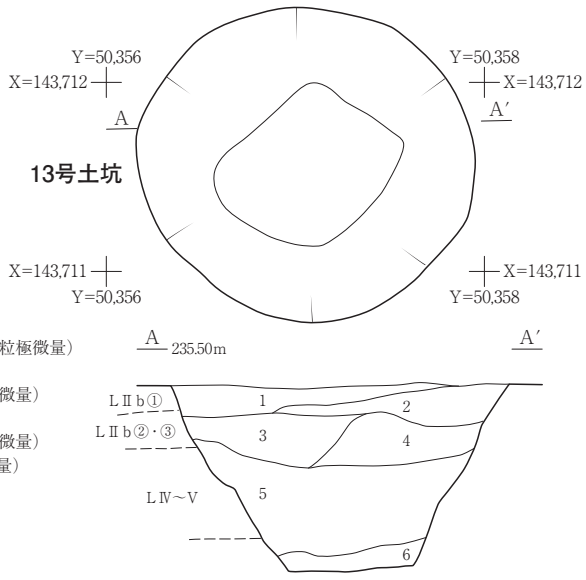


12号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（炭化物含む、焼土粒微量、白色粒極微量）
2　褐色土　10YR4/4
（炭化物・焼土粒少量、白色粒極微量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（炭化物・焼土粒微量、白色粒極微量）
4　褐色土　10YR4/6（白色粒極微量）





11号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物・焼土粒微量、白色粒子極微量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物・焼土粒少量）
3　黒色土　10YR1.7/1（炭化物極多量）



13号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅡb粒多量）
2　暗褐色粘質土　10YR3/3（LV粒多量）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3（LV粒少量）
4　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
5　褐灰色粘質土　10YR4/1
6　黒褐色粘質土　10YR3/1

14号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物・焼土含む）
2　にぶい暗褐色粘質土　10YR4/3
（炭化物極多量、焼土少量、白色粒含む）
3　黄褐色粘質土　10YR5/6（炭化物・焼土含む、白色粒少量）
4　黄褐色土　10YR5/6
（暗褐色塊混入粘質土、炭化物・焼土少量、白色粒含む）

0　1m
(1/40)

図437　土坑（2）

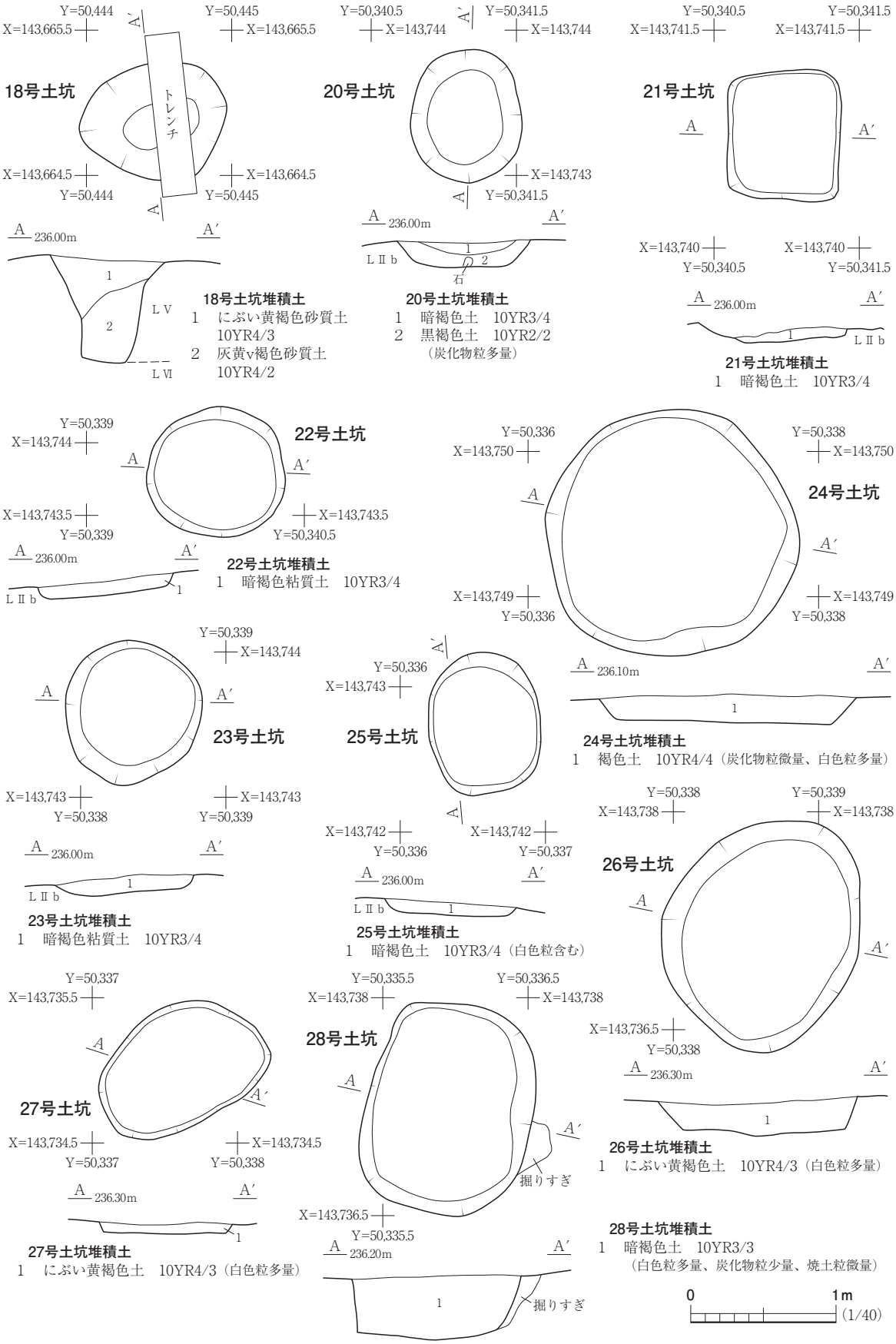

18号土坑
Y=50,444
X=143,665.5
Y=50,445
X=143,665.5
トレンチ
X=143,664.5
Y=50,444
X=143,664.5
Y=50,445
A
A′
236.00m
1
2
LV
LVI
18号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土
10YR4/3
2　灰黄v褐色砂質土
10YR4/2
20号土坑
Y=50,340.5
X=143,744
Y=50,341.5
X=143,744
X=143,743
Y=50,341.5
236.00m
LⅡb
20号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
2　黒褐色土　10YR2/2
（炭化物粒多量）
21号土坑
Y=50,340.5
X=143,741.5
Y=50,341.5
X=143,741.5
X=143,740
Y=50,340.5
X=143,740
Y=50,341.5
236.00m
LⅡb
21号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
22号土坑
Y=50,339
X=143,744
X=143,743.5
Y=50,339
X=143,743.5
Y=50,340.5
236.00m
LⅡb
22号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
24号土坑
Y=50,336
X=143,750
Y=50,338
X=143,750
X=143,749
Y=50,336
X=143,749
Y=50,338
236.10m
24号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（炭化物粒微量、白色粒多量）
23号土坑
Y=50,339
X=143,744
X=143,743
Y=50,338
X=143,743
Y=50,339
236.00m
LⅡb
23号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
25号土坑
Y=50,336
X=143,743
X=143,742
Y=50,336
X=143,742
Y=50,337
236.00m
LⅡb
25号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（白色粒含む）
26号土坑
Y=50,338
X=143,738
Y=50,339
X=143,738
X=143,736.5
Y=50,338
236.30m
26号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（白色粒多量）
27号土坑
Y=50,337
X=143,735.5
X=143,734.5
Y=50,337
X=143,734.5
Y=50,338
236.30m
27号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（白色粒多量）
28号土坑
Y=50,335.5
X=143,738
Y=50,336.5
X=143,738
掘りすぎ
X=143,736.5
Y=50,335.5
236.20m
掘りすぎ
28号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
（白色粒多量、炭化物粒少量、焼土粒微量）
0
1m
（1/40）

図438　土坑（3）

粘質土が堆積し、底面からやや浮いて土師器の壺が正位で出土した。本土坑は上層の除去中に重機の爪が土器に当たったことにより検出されたが、回収した破片を接合しても口縁部の破片が見当たらないことから、口縁部は当初から打ち欠かれていた可能性が高い。図461－２は出土した土師器の壺である。木葉痕を付した平底で、体部は球形である。体部下位の外面に、粘土紐の下端を残した段を巡らせ、この段より上方の外面に赤彩を施す。調整は、外面がハケメ、内面がヘラナデである。体部の下位、段のやや下に、内面から外面に向けた焼成後の穿孔が１箇所みられる。

本土坑は、口縁部を打ち欠き、体部に打ち欠き穿孔を施した壺を埋設した土坑である。本遺構は土坑として調査されたが、東側に位置する４基の土器埋設遺構との共通点が多いことから、これらを合わせて同様の性格を有した遺構群と考えられる。（青　山）

37号土坑　ＳＫ37（図439・462、写真336・423）

本遺構は、Ｖ区のＴ－19グリッド、ＬⅡｂで検出された。標高236.8ｍの平坦面である。重複する遺構はない。平面形は楕円形で、規模は長径93㎝、短径73㎝である。黒褐色土を斑状に含む暗褐色粘質土が堆積し、堆積土中から土師器の杯が４点出土した。図462－６～９はいずれもロクロ成形で、６は回転ヘラケズリ、７～９は手持ちヘラケズリで再調整され、９の底面には回転糸切り痕が残る。７の外面には「富」の墨書がみられる。本土坑の年代は、出土した遺物から平安時代、９世紀頃と考えられる。（青　山）

39号土坑　ＳＫ39（図439・463、写真337・424）

調査区南西部にあたるⅢ区のＢ－19グリッドに位置し、標高235.7ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢである。重複する遺構はなく北側に40号土坑が位置する。

平面は楕円形で、長径125㎝、短径110㎝、深さ95㎝の規模である。底面はＬⅣに相当する砂層上につくられており、水平かつ平坦となっている。湧水は確認されなかった。周壁の立ち上がりはわずかにオーバーハングする部分があるが、ほぼ垂直となっている。

堆積土は12層に分けられた。ℓ１～５は本遺構が掘り込まれているＬⅢに近似した土である。土塊や焼土を顕著に含み、ブロック状に堆積していることから、人為的な堆積土の可能性が考えられる。ℓ６～11はレンズ状に近い堆積状況を示しており、土塊の含有が上層ほど顕著でないことから自然堆積土と判断される。このうちℓ６～10の黒色系の土はＬⅡｂ、ℓ11はＬⅢに由来すると思われる。ℓ12は底面を覆う黒色粘土層である。底面付近では植物片が含まれていた。

遺物は土坑底面から木製品が出土した。図463－１～５は曲物の底板である。全長の判明する１・２・４・５はいずれも直径17㎝ほどで、同じ大きさのものがまとまって出土している。

時期や性格を明示する遺物が出土していないことから、詳細は不明であるが、堆積土や遺物の特徴から中世に機能した土坑と考えられる。また湧水は認められなかったが、付近には井戸跡の可能性が高い土坑が位置していることから、井戸跡であった可能性も考えられる。（神　林）

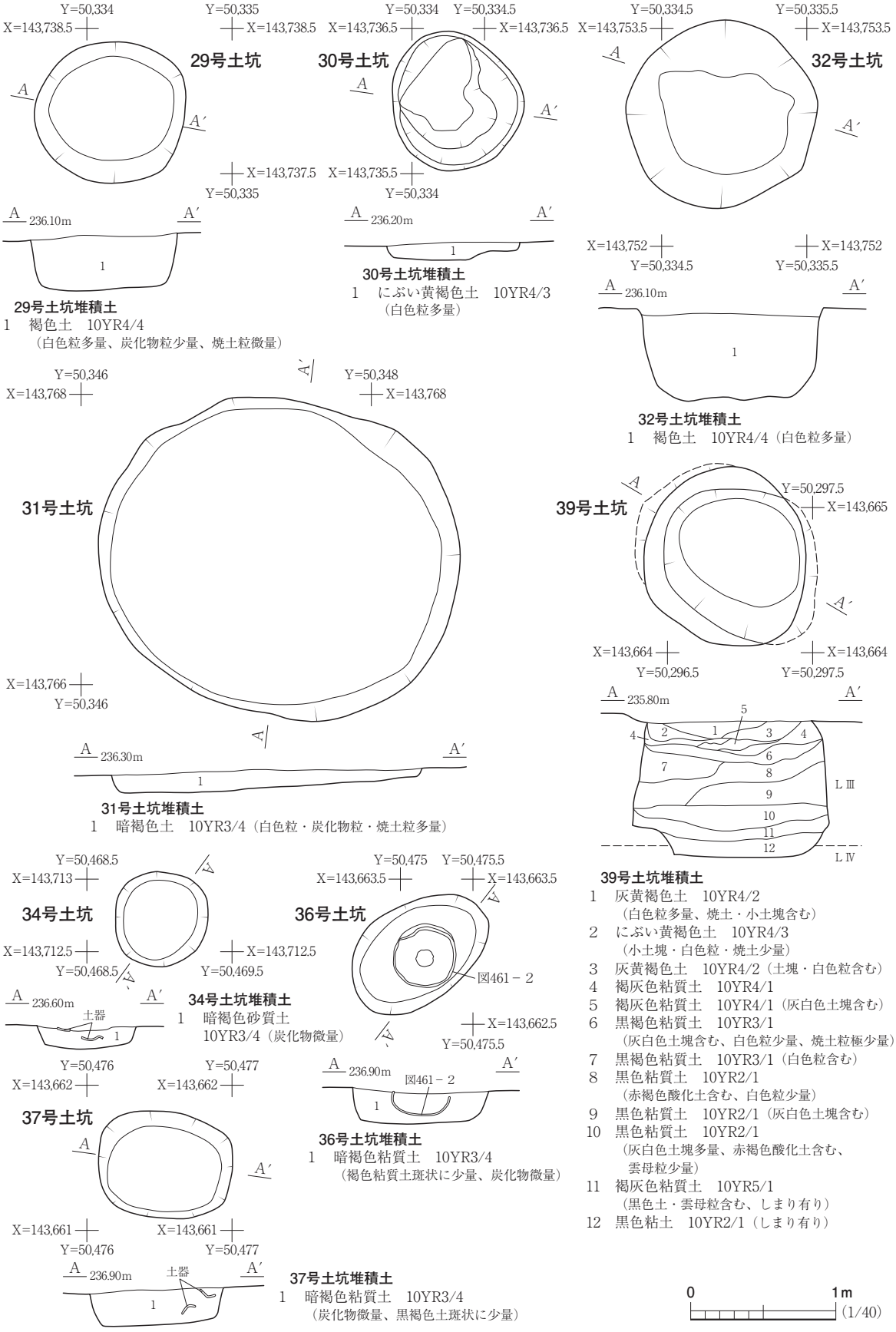

29号土坑
Y=50,334
X=143,738.5
Y=50,335
X=143,738.5
X=143,737.5
Y=50,335
A
A′
236.10m
1
29号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4
（白色粒多量、炭化物粒少量、焼土粒微量）
30号土坑
Y=50,334
Y=50,334.5
X=143,736.5
X=143,736.5
X=143,735.5
Y=50,334
236.20m
30号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（白色粒多量）
32号土坑
Y=50,334.5
Y=50,335.5
X=143,753.5
X=143,753.5
X=143,752
X=143,752
Y=50,334.5
Y=50,335.5
236.10m
32号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（白色粒多量）
31号土坑
Y=50,346
Y=50,348
X=143,768
X=143,768
X=143,766
Y=50,346
236.30m
31号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（白色粒・炭化物粒・焼土粒多量）
39号土坑
Y=50,297.5
X=143,665
X=143,664
X=143,664
Y=50,296.5
Y=50,297.5
235.80m
LⅢ
LⅣ
39号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
（白色粒多量、焼土・小土塊含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（小土塊・白色粒・焼土少量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（土塊・白色粒含む）
4　褐灰色粘質土　10YR4/1
5　褐灰色粘質土　10YR4/1（灰白色土塊含む）
6　黒褐色粘質土　10YR3/1
（灰白色土塊含む、白色粒少量、焼土粒極少量）
7　黒褐色粘質土　10YR3/1（白色粒含む）
8　黒色粘質土　10YR2/1
（赤褐色酸化土含む、白色粒少量）
9　黒色粘質土　10YR2/1（灰白色土塊含む）
10　黒色粘質土　10YR2/1
（灰白色土塊多量、赤褐色酸化土含む、
雲母粒少量）
11　褐灰色粘質土　10YR5/1
（黒色土・雲母粒含む、しまり有り）
12　黒色粘土　10YR2/1（しまり有り）
34号土坑
Y=50,468.5
X=143,713
X=143,712.5
Y=50,468.5
X=143,712.5
Y=50,469.5
236.60m
土器
34号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土
10YR3/4（炭化物微量）
36号土坑
Y=50,475
Y=50,475.5
X=143,663.5
X=143,663.5
図461－2
X=143,662.5
Y=50,475.5
236.90m
図461－2
36号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
（褐色粘質土斑状に少量、炭化物微量）
37号土坑
Y=50,476
Y=50,477
X=143,662
X=143,662
X=143,661
X=143,661
Y=50,476
Y=50,477
236.90m
土器
37号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
（炭化物微量、黒褐色土斑状に少量）
0
1m
(1/40)

図439　土坑（4）

40号土坑　ＳＫ40（図440・463・464、写真338・339・424・425）

本遺構は、Ⅲ区のＢ－18グリッドに位置し、標高235.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢ上面である。当初大型の土坑として検出したが、90㎝掘り下げた段階で井戸枠が検出されたことから井戸跡と判明した。

掘形の平面形は楕円形で、東西190㎝、南北180㎝、検出面から底面までの深さは130㎝である。周壁の立ち上がりは、深さ50㎝までは急外傾し、深さ90㎝で大きくオーバーハングし、底面に向かって緩く外傾する。底面はＬⅣまたはＬⅤとみられる砂礫層上面に形成され平坦である。底面を形成する砂礫層中に含まれる礫には、大小さまざまな大きさが認められたが、井戸枠底面では５㎝前後に揃っており、井戸を造る過程で選別したものと思われる。

井戸枠は検出面からの深さ90㎝掘り下げた段階で検出された。井戸枠の構造は、四隅に太い杭をたて、その間に細い竹を立て並べたものであり、掘形底面の中央に設置されている。平面形は一辺100㎝ほどの正方形である。なお周辺からの土圧で北西辺は大きく歪み、全体的に南東方向に傾いている。方位は北東辺で北から30度西を示す。杭の間に立て並べられた竹は直径１～2.5㎝ほどで、一辺につき30本前後が並び、杭の臍穴に設置された横桟で倒れないようにおさえられている。横桟は底面から30㎝ほどの位置に組まれていた。なお断面の観察から井戸枠が遺存していなかった上層部で、井戸枠に対応するような酸化鉄の集積部分が確認された。これは井戸枠が腐食した痕跡とみられ、廃絶時に井戸枠はそのまま埋められたものと思われる。

堆積土は11層に分層したが、井戸内堆積土と掘形埋土に大別される。ℓ１～７が井戸内堆積土、ℓ８～11が掘形埋土である。井戸内堆積土は堆積状況および混入物から、人為的に埋めた土が大半と思われる。ℓ３～７は人頭大の礫が含まれており、中でもℓ３～４の層理面では礫が井戸内を塞ぐような状態で確認された。掘形埋土であるℓ８～11はいずれも粘質土で礫は含まれていない。ℓ11の井戸枠に接する部分ではスサ状の植物遺体が多く認められ、井戸枠の裏込め材の一部と思われる。

遺物は図示した井戸枠構築材の他に、羽口の小片が井戸枠内堆積土から出土している。図463－６～10は井戸枠に使用された竹で上部は腐食している。６・７は表面に立て並べられたもので、いずれも１方向から斜めに加工されている。８・９は竹列に挟まり出土した板材片で、裏込め材として詰められていたと思われる。図464－１～４は井戸枠に使用された杭である。太い丸太材を使用し、先端をナタ状の工具で２～３方向から加工している。臍穴部分から上部が腐食しており、構造ははっきりしないが、臍穴は縦10㎝、横７㎝ほどであり、２方向から開けられている。５は井戸枠の横桟である。断面形は四角形となっている。腐食が著しく加工痕などは不明瞭である。

本土坑は井戸跡であり、井戸枠は丸太材と竹を横桟で組む構造である。井戸を塞ぐように多くの礫が入れられ、廃絶時には井戸枠をそのままにして内部を埋めたものと思われる。時期を明示できる遺物は出土していないが、検出面と堆積土の状況から中世の井戸跡と考えている。（植松・神林）

42号土坑　ＳＫ42（図440・462、写真340・448）

本遺構はⅢ区のＥ－25グリッドに位置し、標高240ｍ付近に立地する。検出面はＬⅡｂである。43号土坑と重複しており本遺構のほうが新しい。また27号建物跡を構成する柱穴に囲まれている。

平面形は楕円形であり、規模は長径90㎝、短径80㎝、深さ14㎝ほどの浅い掘り込みである。底面は中央に向かってやや窪むが、比較的平坦である。周壁は底面から急斜度で立ち上がり、部分的に焼土化していた。堆積土は５層に分層した。ℓ１・２・４はＬⅡａに近似する黒褐色土であるが、焼土塊や炭化物が多く含まれている。ℓ３は多量の焼土塊や凝灰岩からなる層である。ℓ５は43号土坑の堆積土に近似しており、周辺からの流入土と考えられる。

遺物は堆積土上面から青磁の細片と、図462－16に示した銭貨が出土している。出土状況からは意図的に遺棄されたと思われる。表面の文字は「熙寧元寶」と判読されることから宋銭と思われる。

遺構の時期は出土遺物から中世と考えられる。遺構の明確な性格は不明であるが、一部焼土化した部分や堆積土の様相から、火を焚く行為が行われていた可能性が高い。本遺構と同一地点に位置する27号建物跡との関係に注目すると、身舎の梁行方向中心付近に位置することや廃絶後に宋銭を遺棄するなど、関連性が伺える。よって本土坑は27号建物跡に伴う施設と考えている。（神　林）

45号土坑　ＳＫ45（図440・462、写真340・423）

本遺構は、Ⅳ区のＩ－６グリッドに位置する。標高236.3ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ③である。重複する遺構は67号住居跡で、本遺構が古い。堆積土は２層に区分した。ℓ１は炭化物粒を多く含む暗褐色土で、人為堆積土と考えられる。ℓ２は褐色砂質土で、これも人為的な堆積土と考えている。

平面形は東側を67号住居跡に壊されているが、おおむね楕円形と考えている。規模は、長軸が133㎝である。周壁は、45度で立ち上がる。壁高は26㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物はℓ２の直上から土師器の鉢が１点正立した状態で出土している。図462－１は鉢である。完形個体で、口縁部が内湾する器形である。外面にはヘラミガキを施す。所属時期は遺物や堆積土の様相などから古墳時代後期と考えられる。（荒木・中野）

47号土坑　ＳＫ47（図440・460、写真340・359・423）

本土坑はＩ区南西部のＪ－15グリッドに位置する。検出層位はＬⅣ上面で、標高は236.0ｍである。78号住居跡と重複し、本土坑が古い。本土坑の平面形は、その大半が78号住居跡により掘り込まれているが隅丸長方形と考えている。その規模は長軸が165㎝、短軸が80㎝、深さが15㎝である。壁は緩やかに外傾しながら立ち上り、底面はやや北側に向かって傾斜する。堆積土はにぶい黄褐色土の単層で、基盤層と土色・土質がほとんど変わらないことから、比較的短期間のうちに埋められた人為堆積土と考えている。出土遺物は弥生土器の完形品１点で、底面からやや浮いた横倒し

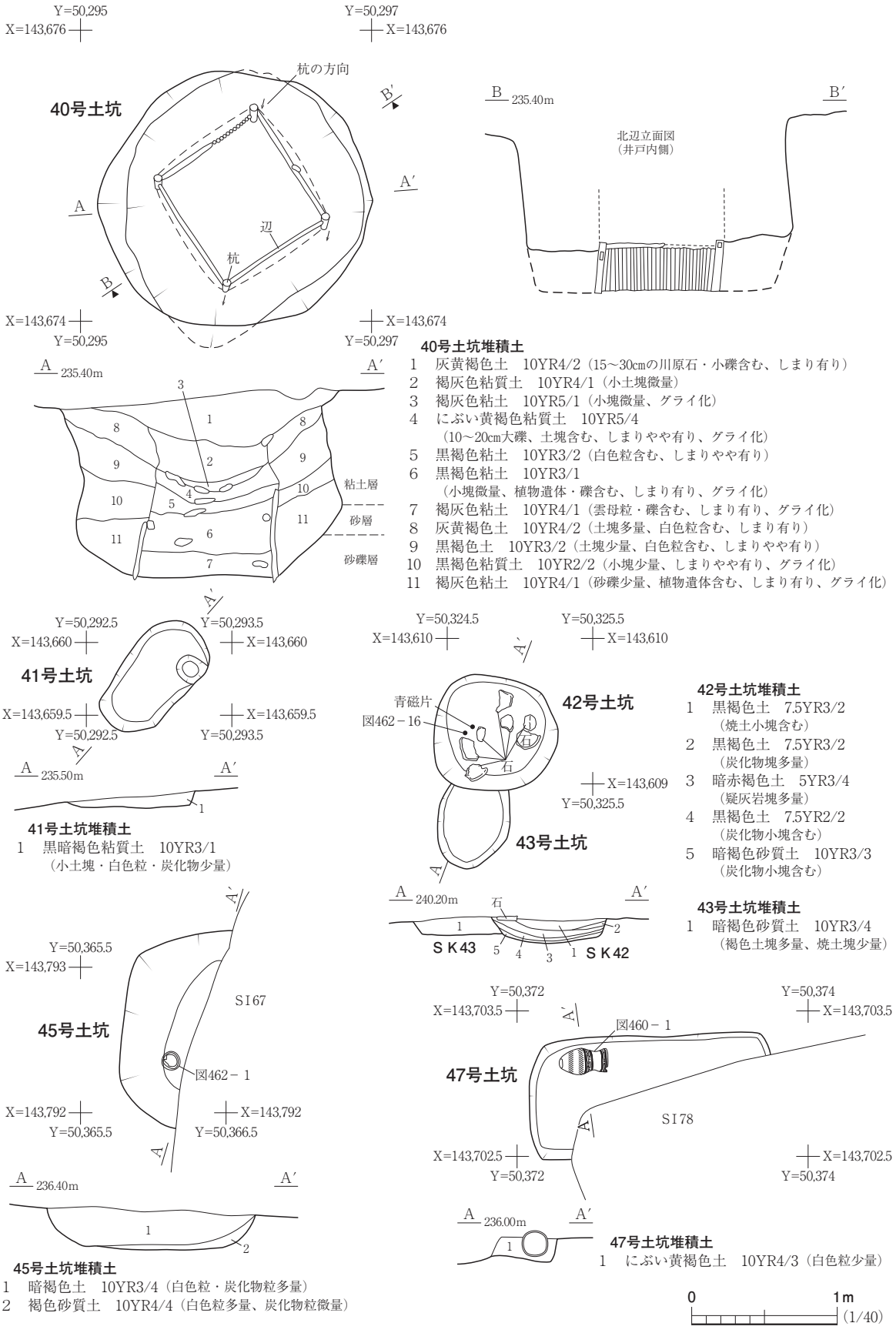

Y=50,295
X=143,676
Y=50,297
X=143,676
40号土坑
杭の方向
辺
杭
B
B′
A
A′
北辺立面図
（井戸内側）
235.40m
X=143,674
Y=50,295
X=143,674
Y=50,297
粘土層
砂層
砂礫層
40号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（15～30㎝の川原石・小礫含む、しまり有り）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（小土塊微量）
3　褐灰色粘土　10YR5/1（小塊微量、グライ化）
4　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4
（10～20㎝大礫、土塊含む、しまりやや有り、グライ化）
5　黒褐色粘土　10YR3/2（白色粒含む、しまりやや有り）
6　黒褐色粘土　10YR3/1
（小塊微量、植物遺体・礫含む、しまり有り、グライ化）
7　褐灰色粘土　10YR4/1（雲母粒・礫含む、しまり有り、グライ化）
8　灰黄褐色土　10YR4/2（土塊多量、白色粒含む、しまり有り）
9　黒褐色土　10YR3/2（土塊少量、白色粒含む、しまりやや有り）
10　黒褐色粘質土　10YR2/2（小塊少量、しまりやや有り、グライ化）
11　褐灰色粘土　10YR4/1（砂礫少量、植物遺体含む、しまり有り、グライ化）
Y=50,292.5
X=143,660
Y=50,293.5
X=143,660
41号土坑
X=143,659.5
Y=50,292.5
X=143,659.5
Y=50,293.5
235.50m
41号土坑堆積土
1　黒暗褐色粘質土　10YR3/1
（小土塊・白色粒・炭化物少量）
Y=50,324.5
X=143,610
Y=50,325.5
X=143,610
青磁片
図462－16
42号土坑
石
X=143,609
Y=50,325.5
43号土坑
240.20m
SK43
SK42
42号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/2
（焼土小塊含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/2
（炭化物塊多量）
3　暗赤褐色土　5YR3/4
（凝灰岩塊多量）
4　黒褐色土　7.5YR2/2
（炭化物小塊含む）
5　暗褐色砂質土　10YR3/3
（炭化物小塊含む）
43号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
（褐色土塊多量、焼土塊少量）
Y=50,365.5
X=143,793
SI67
45号土坑
図462－1
X=143,792
Y=50,365.5
X=143,792
Y=50,366.5
236.40m
45号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（白色粒・炭化物粒多量）
2　褐色砂質土　10YR4/4（白色粒多量、炭化物粒微量）
Y=50,372
X=143,703.5
Y=50,374
X=143,703.5
図460－1
47号土坑
SI78
X=143,702.5
Y=50,372
X=143,702.5
Y=50,374
236.00m
47号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（白色粒少量）
0
1m
(1/40)

図440　土坑（5）

の状態で出土し、人為的に置かれたものと判断した。

図460－1は壺である。口縁部は直線的に外方に開き、頸部は内傾ぎみに立ち上がる。頸部は外面の連続刺突文と沈線により区画された無文帯である。胴部最大径は上半に有する。底部内面の中央部はわずかに隆起している。器厚は底部を除き4㎜ほどの均一な仕上げとなり、胎土には石英が含まれている。外面の文様は、地文がＬＲ単節斜縄文で、頸部は磨り消されている。文様帯は口縁部と胴部上半に巡る。平行沈線により直線文・弧文が描かれ、それらの文様内に半裁竹管による連続刺突文が加わる。弧文の連結点には刺突円文が配置される。口唇部はキザミである。口縁部文様帯の下段には交互刺突文が認められるが、途中で連続刺突文となっている。内面はケズリ・ナデである。なお、内外ともに炭化物が帯状に巡っており、煮炊きの痕跡とみられる。

本土坑の機能については、完形品の土器が人為的に置かれた状態で出土していることから、土坑墓と考えている。時期については出土土器から弥生時代終末期と考えている。　（吉　野）

55号土坑　ＳＫ55（図442、写真343）

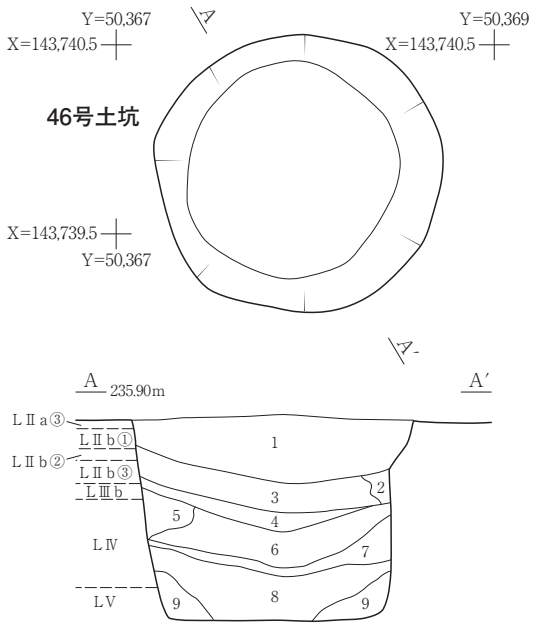
本遺構は、Ⅱ区のＨ－25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。重複する遺構はない。堆積土は6層に区分した。堆積土はいずれも基本土層のＬⅡａ①を主体とする土層で構成される。堆積状況は、黒褐色土や暗褐色、灰褐色土などの色調や混入物の違う堆積土が交互に、しかも水平状に堆積することから、廃絶時に埋められたものと考えている。平面形は楕円形である。規模は、長径193㎝、短径170㎝である。周壁は上部の傾斜はやや緩く60度で立ち上がり、底面付近では80度で立ち上がる。壁高は113㎝である。底面は平坦に掘り込まれていた。底面付近では湧水していたようで、鉄分が固まり硬化していた。鉄分の硬化範囲には円形の痕跡が見られ、何らかの枠のような施設が設置されていたものと考えられる。下側を断ち割ってみたがそれ以上の痕跡は確認できなかった。遺物は出土しなかった。

本遺構は、平面形が楕円形の土坑である。廃絶時に埋められたものと考えられる。底面では円形の痕跡が確認され、井戸枠などが設置されていた可能性がある。底面付近は、工事の関係で地下水位が下がり、調査時は湧水していなかったが、鉄分の状態などから、以前は水が湧いていたと推測され、おそらく井戸として使われたものと考えている。

所属時期は、堆積土の状況や周辺の遺構との関係から、中世頃と考えている。　（中　野）

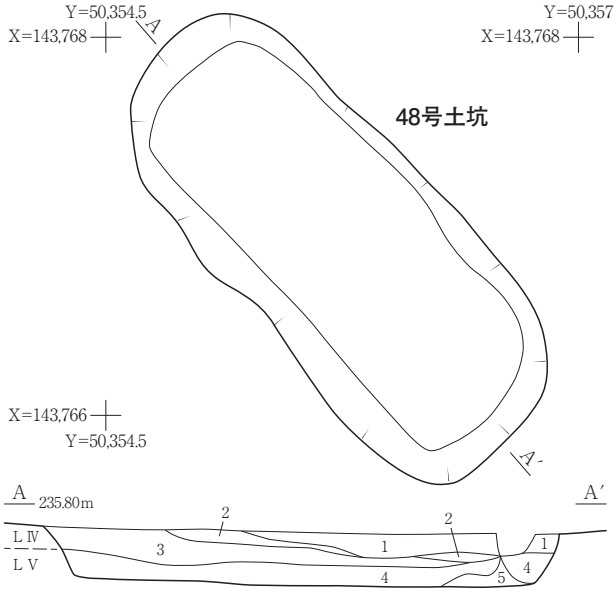
56号土坑　ＳＫ56（図441・462、写真343）

本遺構は、Ⅱ区のＨ－26グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①であるが、本来はＬⅡａ③と考えられる。重複する遺構はない。堆積土は4層に区分した。堆積土は、基本土層のＬⅡｂ①の粒塊を主体とする土層で構成される。堆積状況は、混入物の異なる堆積土が交互に堆積することから、廃絶時に東側より埋められたものと考えている。平面形は楕円形である。規模は、長径93㎝、短径85㎝である。周壁は西側がオーバーハングする。深



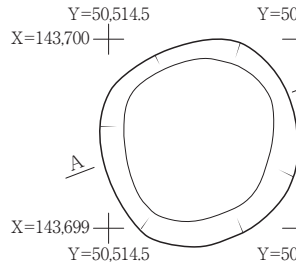
46号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊多量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（LⅣ塊多量）
4　灰黄褐色土　10YR4/2（LⅣ粒少量）
5　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊多量）
6　灰黄褐色土　10YR4/2
7　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊多量）
8　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅣ塊少量）
9　褐色土　10YR4/4（LⅣ塊多量）



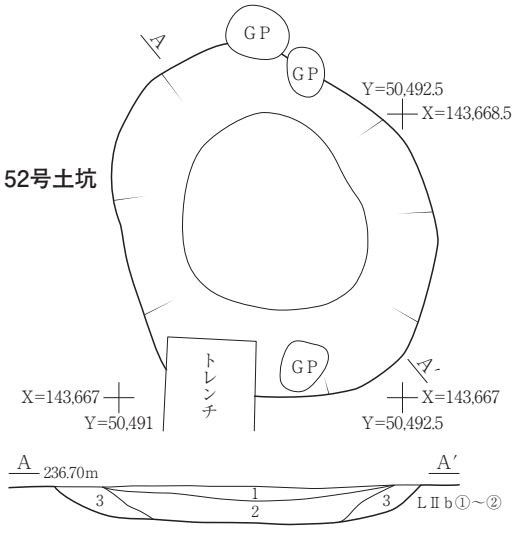
48号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR5/4（炭化物少量）
2　褐色土　10YR4/6（焼土粒微量）
3　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物微量）
4　暗褐色土　10YR3/4（炭化物・焼土多量）
5　褐色砂質土　10YR4/4（金雲母含む）



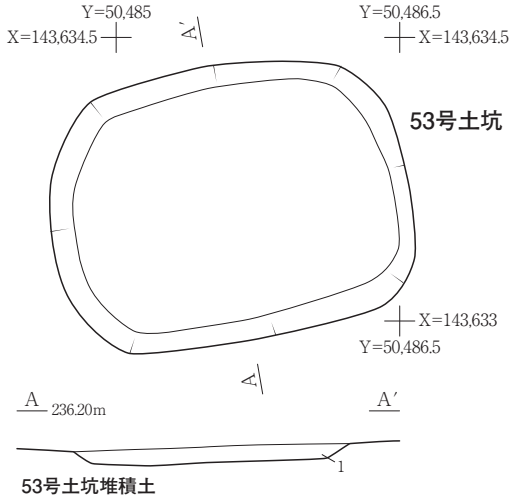
51号土坑堆積土

1　暗褐色土　10YR3/4（土粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（土粒塊少量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（土粒塊多量）



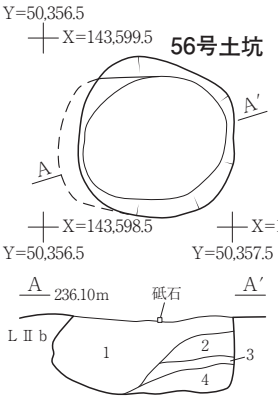
52号土坑堆積土

1　黒褐色砂質土　10YR2/3
2　暗褐色土　10YR3/3（LⅢa粒多量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（LⅢa粒塊多量）



53号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR2/3



56号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅡb粒多量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
3　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物少量）
4　にぶい黄褐色土　10YR4/3

0　1m
(1/40)

図441　土坑（6）

さは50㎝である。遺物は、石製品が１点出土した。図462－14は砥石である。四面とも使用痕が明確に残る。所属時期は、堆積土の状況や周辺の遺構との関係から、中世頃と考えている。（中　野）

58号土坑　ＳＫ58（図442・462、写真344・434）

本遺構は、Ⅱ区のＨ－26グリッドに位置する。標高236.2ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡｂ①であるが、本来はＬⅡａ③と考えられる。重複する遺構はピット群で、本遺構が古い。堆積土は７層に区分した。ＬⅡａ①に対応する黒褐色土を主体としている。ℓ１・２・４～７は黒褐色土から褐灰色土で、人為的な堆積土と考えている。ℓ５は中層に礫や陶器が廃棄されている。礫はいずれも焼けており、規模は10～25㎝ほどの角礫が多い。ℓ３は壁面崩落土である。平面形は楕円形である。規模は、長径108㎝、短径45㎝である。周壁は崩落によって部分的にオーバーハングする。それ以外の周壁は60～70度で立ち上がる。壁高は、100㎝である。底面形は、やや凹凸が目立ち、東側がすり鉢状に深くなっている。

遺物は、陶器が９点出土した。そのうち３点を図示した。図462－11～13は、陶器の壺の破片ですべて同一個体である。ℓ５の中層より礫や焼土などとともに出土した。11が口縁部直下から胴部上半、12が胴部下半片、13が底部片である。復元を試みたが接合はしなかった。表面にはハケによる釉が塗られている。胴部下半には横位に沈線が施文されている。胎土は焼成が悪く、部分的には質感が土師器のようになっている。遺物の特徴から渥美焼と考えている。

土坑の機能は、規模などから井戸跡の可能性も考えられるが、明確にできなかった。所属時期は、出土遺物などから、中世頃と考えられ、12世紀末から13世紀前半頃と考えられる。（中　野）

60号土坑　ＳＫ60（図442、写真344）

本遺構は、Ⅱ区のＨ・Ｉ－26グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面は、ＬⅡａ③である。重複する遺構はないが、北側20㎝の所にピットが１基、南側30㎝の所にピットが１基位置する。ピットは直径が25～30㎝、深さが15～20㎝である。これらのピットは本土坑に関連するピットと考えている。土坑内の堆積土は６層に区分した。堆積土はＬⅡａ①に対応する黒褐色土を主体としている。堆積土は黒褐色土と暗褐色土の質感の異なる土が交互に堆積していることから、人為的な堆積土と考えている。ℓ４は鉄錆が固まったような状態である。このことから、現在は工事の影響で湧水しなかったが、以前はこの高さまで地下水位があったものと考えている。平面形はおおむね円形である。規模は、長径230㎝、短径205㎝である。周壁は崩落によって部分的にオーバーハングする。壁高は、148㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物は出土しなかった。

本遺構は、平面形が円形の大型の土坑である。堆積土の状況から人為的に埋められたものと考えられる。土坑の機能は、規模や堆積土の状況から井戸跡と考えている。所属時期は、周辺遺構との関係や検出面などから中世頃と考えられる。（中　野）

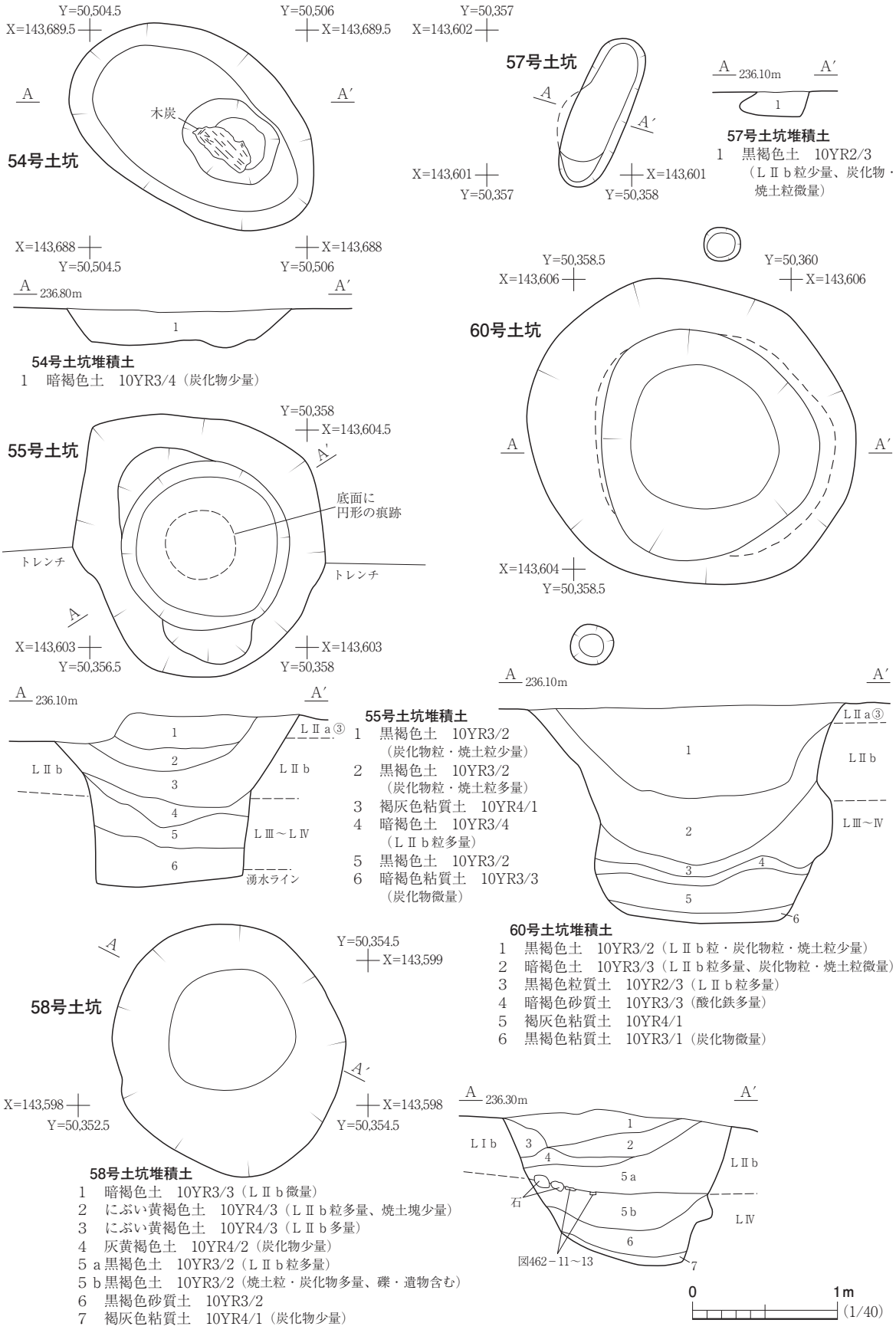

Y=50,504.5
X=143,689.5
Y=50,506
X=143,689.5
A
A′
木炭
54号土坑
X=143,688
Y=50,504.5
X=143,688
Y=50,506
A 236.80m
A′
1
54号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量）
Y=50,357
X=143,602
57号土坑
A
A′
X=143,601
Y=50,357
X=143,601
Y=50,358
A 236.10m
A′
1
57号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（ＬⅡｂ粒少量、炭化物・焼土粒微量）
Y=50,358.5
X=143,606
Y=50,360
X=143,606
60号土坑
A
A′
X=143,604
Y=50,358.5
Y=50,358
X=143,604.5
55号土坑
A′
底面に
円形の痕跡
トレンチ
トレンチ
A
X=143,603
Y=50,356.5
X=143,603
Y=50,358
A 236.10m
A′
1
2
3
4
5
6
ＬⅡａ③
ＬⅡｂ
ＬⅡｂ
ＬⅢ～ＬⅣ
湧水ライン
55号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（炭化物粒・焼土粒少量）
2　黒褐色土　10YR3/2
（炭化物粒・焼土粒多量）
3　褐灰色粘質土　10YR4/1
4　暗褐色土　10YR3/4
（ＬⅡｂ粒多量）
5　黒褐色土　10YR3/2
6　暗褐色粘質土　10YR3/3
（炭化物微量）
A 236.10m
A′
1
2
3
4
5
6
ＬⅡａ③
ＬⅡｂ
ＬⅢ～Ⅳ
60号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒・炭化物粒・焼土粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅡｂ粒多量、炭化物粒・焼土粒微量）
3　黒褐色粒質土　10YR2/3（ＬⅡｂ粒多量）
4　暗褐色砂質土　10YR3/3（酸化鉄多量）
5　褐灰色粘質土　10YR4/1
6　黒褐色粘質土　10YR3/1（炭化物微量）
A
A′
Y=50,354.5
X=143,599
58号土坑
X=143,598
Y=50,352.5
X=143,598
Y=50,354.5
58号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（ＬⅡｂ微量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅡｂ粒多量、焼土塊少量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅡｂ多量）
4　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物少量）
5ａ黒褐色土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒多量）
5ｂ黒褐色土　10YR3/2（焼土粒・炭化物多量、礫・遺物含む）
6　黒褐色砂質土　10YR3/2
7　褐灰色粘質土　10YR4/1（炭化物少量）
A 236.30m
A′
1
2
3
4
5a
5b
6
7
ＬⅠｂ
ＬⅡｂ
ＬⅣ
石
図462－11～13
0
1m
(1/40)

図442　土坑（７）

62号土坑　ＳＫ62（図443、写真344）

本遺構は、Ⅲ区のＦ－25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。重複する遺構はないが土坑の周囲にはピットが５基位置する。調査時は明確にできなかったが、関連のあるピットかもしれない。堆積土は、いずれもＬⅡｂ粒やＬⅡｂに由来する大きめの塊が多量に混入する土層で、水平に堆積していることから、人為的な堆積土と考えている。平面形は長楕円形である。規模は、長径197㎝、短径165㎝である。周壁は65～80度で立ち上がる。壁高は、165㎝である。検出面からの深さ140㎝で湧水した。底面は平坦に掘り込まれている。

遺構内から遺物は出土しなかった。

本遺構は、平面形が長楕円形の土坑である。堆積土の状況から人為的に埋めたものと考えられる。土坑の機能は井戸跡と考えている。所属時期は、周辺遺構との関係などから、中世頃と考えられる。（中　野）

76号土坑　ＳＫ76（図445・463、写真346・426）

本遺構は、Ⅲ区のＧ－24グリッドに位置する。標高235.6ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅡａ③である。重複する遺構は24号畑跡で、本遺構が新しい。堆積土は５層に区分した。ℓ１～３は炭化物や焼土粒を含む黒褐色土、ℓ４はＬⅣ粒を多量に含む褐灰色土、ℓ５は植物遺体を多く含む粘性の強い黒褐色土である。調査時は籾のにおいがしていた。堆積土はいずれも人為的な堆積土である。平面形は検出面では楕円形である。中段より下側は隅丸方形を呈する。規模は、検出面では293×213㎝である。中段の規模は、長径150㎝、短径143㎝である。周壁は、上段までは50度で立ち上がり、中段より下側は80度前後となる。周壁の東側においてはオーバーハングする。壁高は、150㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。底面からは、礫が５点敷設するように置かれていた。石の規模は最大で35×15×７㎝、最小で20×８×６㎝である。遺物はℓ５より植物遺体に混じって性格不明の木製品が出土しており、１点を図示した（図463－10）。

本遺構は平面形が楕円形の土坑である。堆積土の最下層から植物遺体や木製品が出土した。土坑は底面に平たい石を５つ敷設している。機能は不明であるが、最終的には廃棄土坑として使用されたと考えている。所属時期は、堆積土や周辺遺構との関係などから中世頃と考えられる。（中　野）

77号土坑　ＳＫ77（図445、写真346）

本遺構は、Ⅲ区のＦ・Ｇ－25グリッドに位置する。標高236.0ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅡｂ②である。重複する遺構は80号住居跡とピット群で、本遺構がもっとも新しい。堆積土は６層に区分した。ＬⅡｂ粒塊を多く含む暗褐色土やにぶい黄褐色土の土層が交互に堆積することからいずれも人為的な堆積土である。平面形は上面が楕円形となっている。一部三日月状に張り出す部分があるが、崩落によるものと考えている。規模は、検出面では長径220㎝、短径180㎝

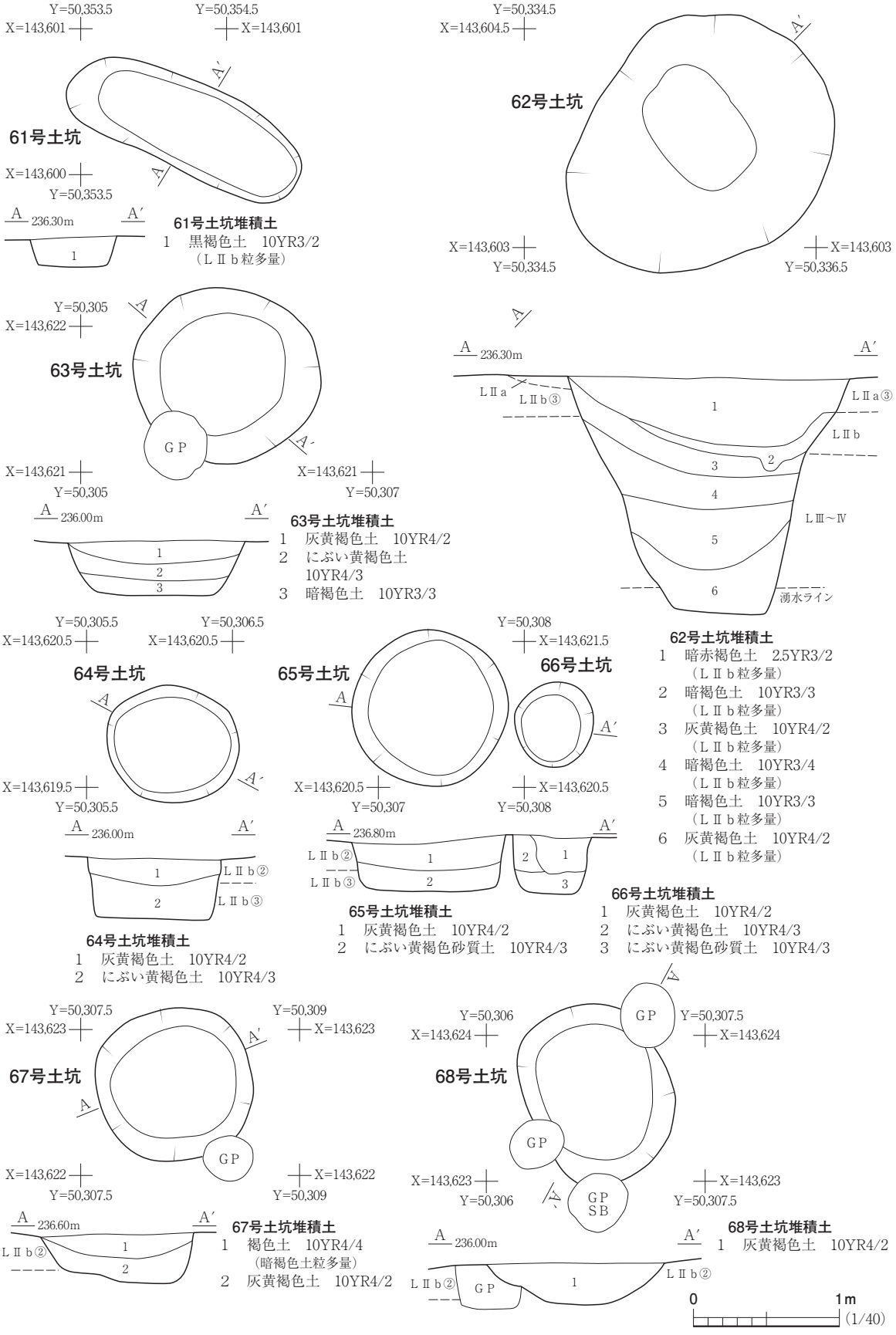

Y=50,353.5
X=143,601
Y=50,354.5
X=143,601
61号土坑
X=143,600
Y=50,353.5
A 236.30m A′
1
61号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（ＬⅡｂ粒多量）
Y=50,334.5
X=143,604.5
62号土坑
X=143,603
Y=50,334.5
X=143,603
Y=50,336.5
Y=50,305
X=143,622
63号土坑
GP
X=143,621
Y=50,305
X=143,621
Y=50,307
A 236.00m A′
1
2
3
63号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　にぶい黄褐色土
10YR4/3
3　暗褐色土　10YR3/3
A 236.30m A′
ＬⅡａ
ＬⅡｂ③
ＬⅡａ③
ＬⅡｂ
ＬⅢ～Ⅳ
湧水ライン
62号土坑堆積土
1　暗赤褐色土　2.5YR3/2
（ＬⅡｂ粒多量）
2　暗褐色土　10YR3/3
（ＬⅡｂ粒多量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2
（ＬⅡｂ粒多量）
4　暗褐色土　10YR3/4
（ＬⅡｂ粒多量）
5　暗褐色土　10YR3/3
（ＬⅡｂ粒多量）
6　灰黄褐色土　10YR4/2
（ＬⅡｂ粒多量）
Y=50,305.5
X=143,620.5
Y=50,306.5
X=143,620.5
64号土坑
X=143,619.5
Y=50,305.5
A 236.00m A′
1
2
ＬⅡｂ②
ＬⅡｂ③
64号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
Y=50,308
X=143,621.5
65号土坑
66号土坑
X=143,620.5
Y=50,307
X=143,620.5
Y=50,308
A 236.80m A′
ＬⅡｂ②
ＬⅡｂ③
1
2
1
2
3
65号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
66号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
3　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
Y=50,307.5
X=143,623
Y=50,309
X=143,623
67号土坑
X=143,622
Y=50,307.5
X=143,622
Y=50,309
A 236.60m A′
ＬⅡｂ②
1
2
67号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4
（暗褐色土粒多量）
2　灰黄褐色土　10YR4/2
Y=50,306
X=143,624
GP
Y=50,307.5
X=143,624
68号土坑
GP
X=143,623
Y=50,306
GP
SB
X=143,623
Y=50,307.5
A 236.00m A′
ＬⅡｂ②
GP
1
ＬⅡｂ②
68号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
0　1m
(1/40)

図443　土坑（8）

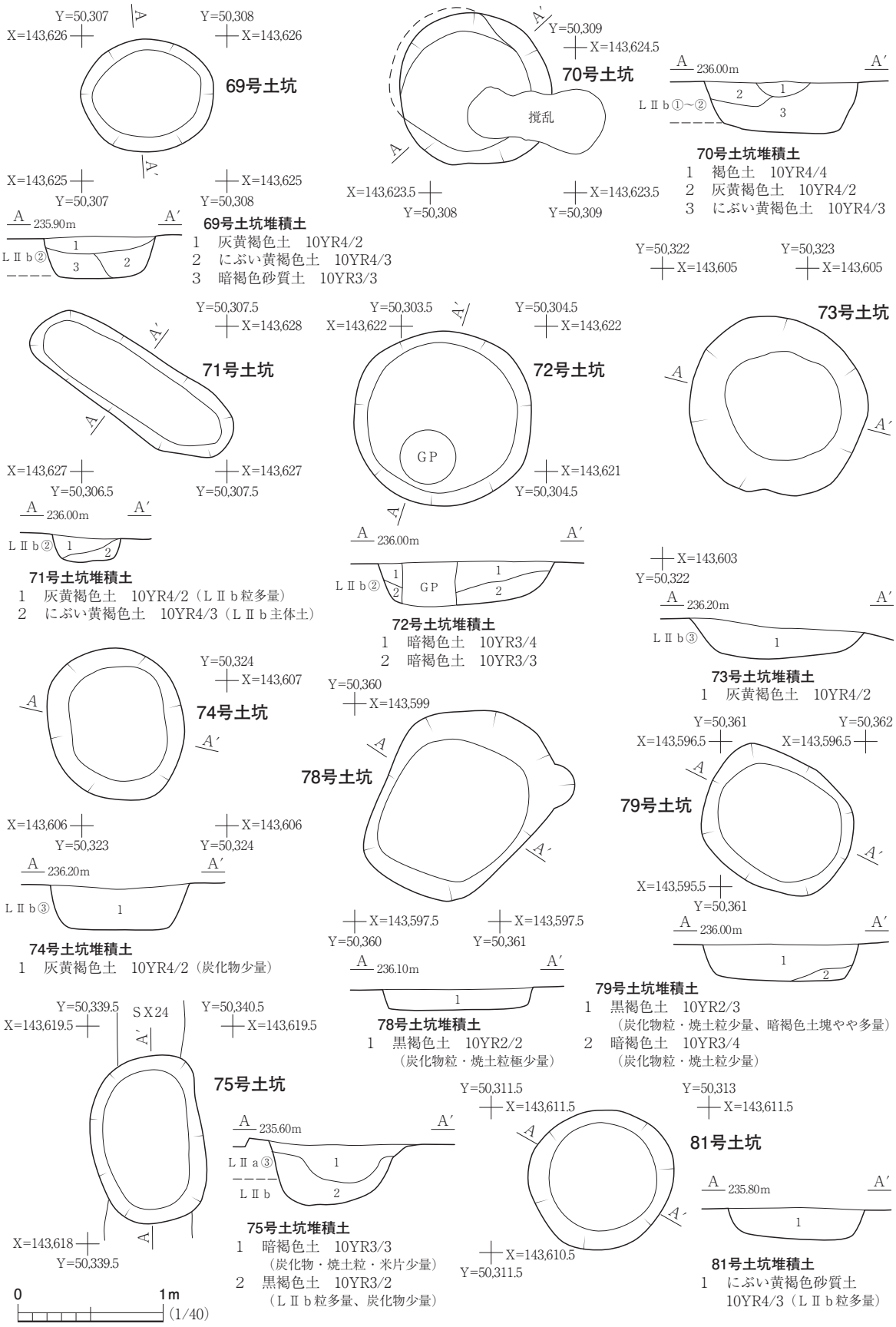

69号土坑
Y=50,307
X=143,626
Y=50,308
X=143,626
X=143,625
Y=50,307
X=143,625
Y=50,308
A 235.90m A′
LⅡb②
69号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
3　暗褐色砂質土　10YR3/3
70号土坑
Y=50,309
X=143,624.5
攪乱
X=143,623.5
Y=50,308
X=143,623.5
Y=50,309
A 236.00m A′
LⅡb①～②
70号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4
2　灰黄褐色土　10YR4/2
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3
Y=50,322
X=143,605
Y=50,323
X=143,605
71号土坑
Y=50,307.5
X=143,628
X=143,627
Y=50,306.5
X=143,627
Y=50,307.5
A 236.00m A′
LⅡb②
71号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（LⅡb粒多量）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（LⅡb主体土）
72号土坑
Y=50,303.5
X=143,622
Y=50,304.5
X=143,622
GP
X=143,621
Y=50,304.5
A 236.00m A′
LⅡb②
GP
72号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
2　暗褐色土　10YR3/3
73号土坑
X=143,603
Y=50,322
A 236.20m A′
LⅡb③
73号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
74号土坑
Y=50,324
X=143,607
X=143,606
Y=50,323
X=143,606
Y=50,324
A 236.20m A′
LⅡb③
74号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2（炭化物少量）
78号土坑
Y=50,360
X=143,599
X=143,597.5
Y=50,360
X=143,597.5
Y=50,361
A 236.10m A′
78号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2
（炭化物粒・焼土粒極少量）
79号土坑
Y=50,361
X=143,596.5
Y=50,362
X=143,596.5
X=143,595.5
Y=50,361
A 236.00m A′
79号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（炭化物粒・焼土粒少量、暗褐色土塊やや多量）
2　暗褐色土　10YR3/4
（炭化物粒・焼土粒少量）
Y=50,339.5
X=143,619.5
SX24
Y=50,340.5
X=143,619.5
75号土坑
X=143,618
Y=50,339.5
A 235.60m A′
LⅡa③
LⅡb
75号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
（炭化物・焼土粒・米片少量）
2　黒褐色土　10YR3/2
（LⅡb粒多量、炭化物少量）
Y=50,311.5
X=143,611.5
X=143,610.5
Y=50,311.5
Y=50,313
X=143,611.5
81号土坑
A 235.80m A′
81号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土
10YR4/3（LⅡb粒多量）
0　1m
(1/40)

図444　土坑（9）

である。周壁は、上段までは50～60度で立ち上がり、中段より下側は80度前後となる。壁高は、158㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。検出面から120㎝前後の深さで湧水した。遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形の土坑である。機能は井戸跡で、廃絶時に埋めたものと考えている。所属時期は、堆積土や周辺遺構との関係などから中世頃と考えられる。（中　野）

99号土坑　ＳＫ99（図447・460・461、写真426）

本遺構は、Ｖ区のＰ－19グリッド、ＬⅣで検出された。標高236.6ｍの平坦面である。重複する遺構はない。平面形は楕円形で、規模は長径102㎝、短径93㎝、深さ33㎝である。暗褐色砂質土が堆積し、堆積土中から土師器51点、弥生土器１点が出土した。このうち、弥生土器１点を図460－６に、土師器４点を図461－３～６に示した。図460－６は弥生土器の小片で、Ｌの撚糸を施す。３は壺である。外面と口縁部内面にハケメ、内面にナデを施す。４は甕である。輪台状の平底にナデ肩で張りのない体部、直立ぎみに立ち上がる口縁部をもつ。外面にナデ、内面にヘラナデを施す。５は鉢か小型の甕である。平底に球胴、「く」字口縁をもつ。外面にナデとハケメ、内面にハケメを施す。６は台付甕である。最大径を上位にもつ体部を台部にのせ、口縁部は欠損する。内外面にハケメを施す。時期は古墳時代前期である。（青　山）

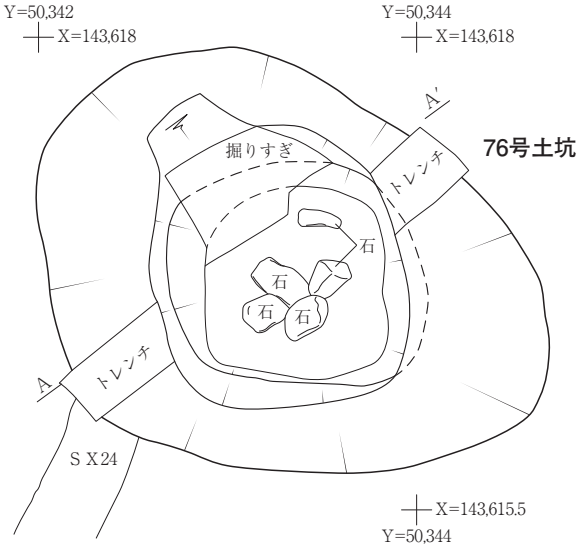
115号土坑　ＳＫ115（図449・461、写真350）

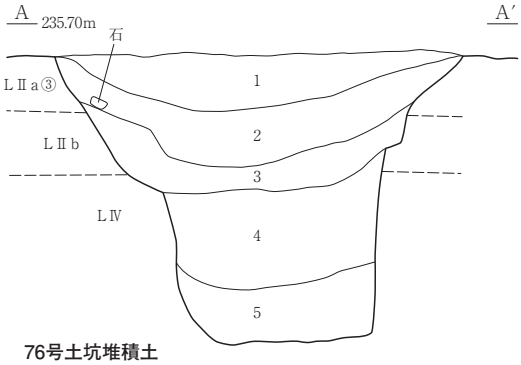
本遺構は、Ｖ区のＭ－17グリッドに位置する。標高236.1ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣ①である。重複する遺構はない。堆積土はＬⅣ粒を多量に含む暗褐色砂質土の単層で、自然堆積土である。平面形は円形である。規模は、直径115㎝である。周壁は、40度で立ち上がる。壁高は、14㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物は土師器２点が出土している。図461－７は鉢の胴部下半から底部片で、正立した状態で出土した。

本遺構は、平面形が円形の土坑である。機能は明らかにできなかった。所属時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期と考えられる。（中　野）

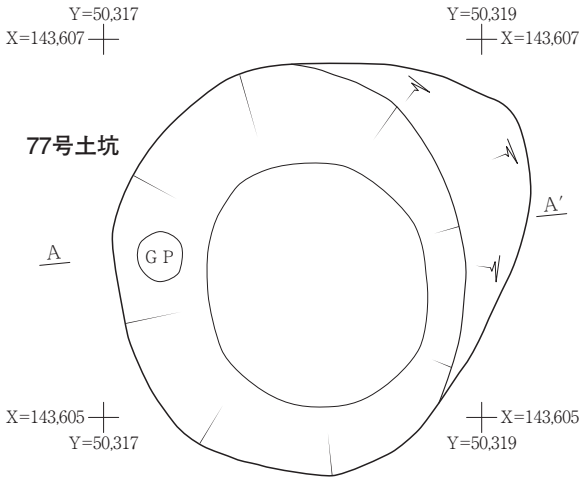
117号土坑　ＳＫ117（図449・460、写真350）

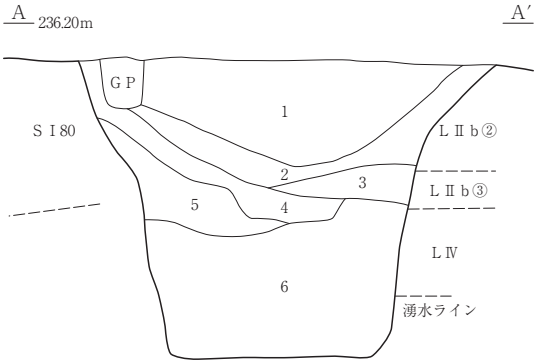
本遺構は、Ｖ区のＭ－15グリッドに位置する。標高235.7ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣ①である。重複する遺構はない。堆積土は５層に区分した。堆積土は焼土粒や炭化物を含む土層が水平状に堆積することから、人為堆積土である。廃絶時に遺物とともに埋めたものと考えられる。平面形はおおむね円形である。規模は、長径173㎝、短径165㎝である。周壁は、南東側がややオーバーハングするが、それ以外は70度で立ち上がる。壁高は、55㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物は弥生土器１点、土師器56点が出土している。堆積土の上層より古墳時代後期の土師器がまとまって出土しており、弥生土器片は混入したものと思われる。図460－７は弥



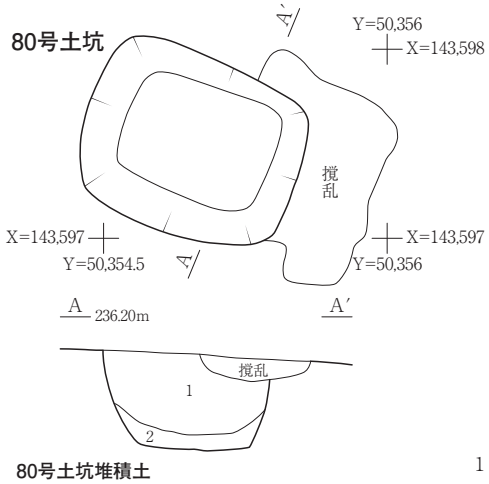


76号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（炭化物・焼土粒微量）
2　黒褐色土　10YR2/2（炭化物・焼土粒少量）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2（LⅣ粒多量）
4　褐灰色粘質土　10YR4/1（LⅣ粒多量）
5　黒褐色粘質土　10YR3/2（植物遺体・炭化物多量）

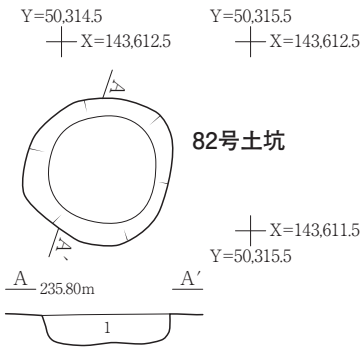




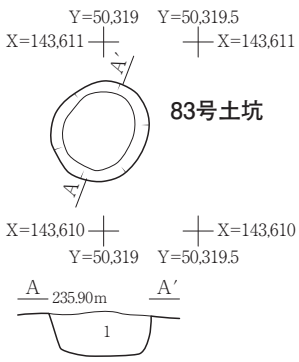
77号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（LⅡb粒多量、炭化物微量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（LⅡb粒多量）
3　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅡb粒少量）
4　暗褐色粘質土　10YR3/3（LⅡb粒少量）
5　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物微量）
6　灰黄褐色砂質土　10YR4/2



80号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（暗褐色土小塊やや多量、炭化物粒少量）
2　暗褐色土　10YR3/3（黒褐色小塊少量）



82号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（LⅡb粒少量）



83号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3

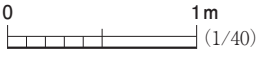
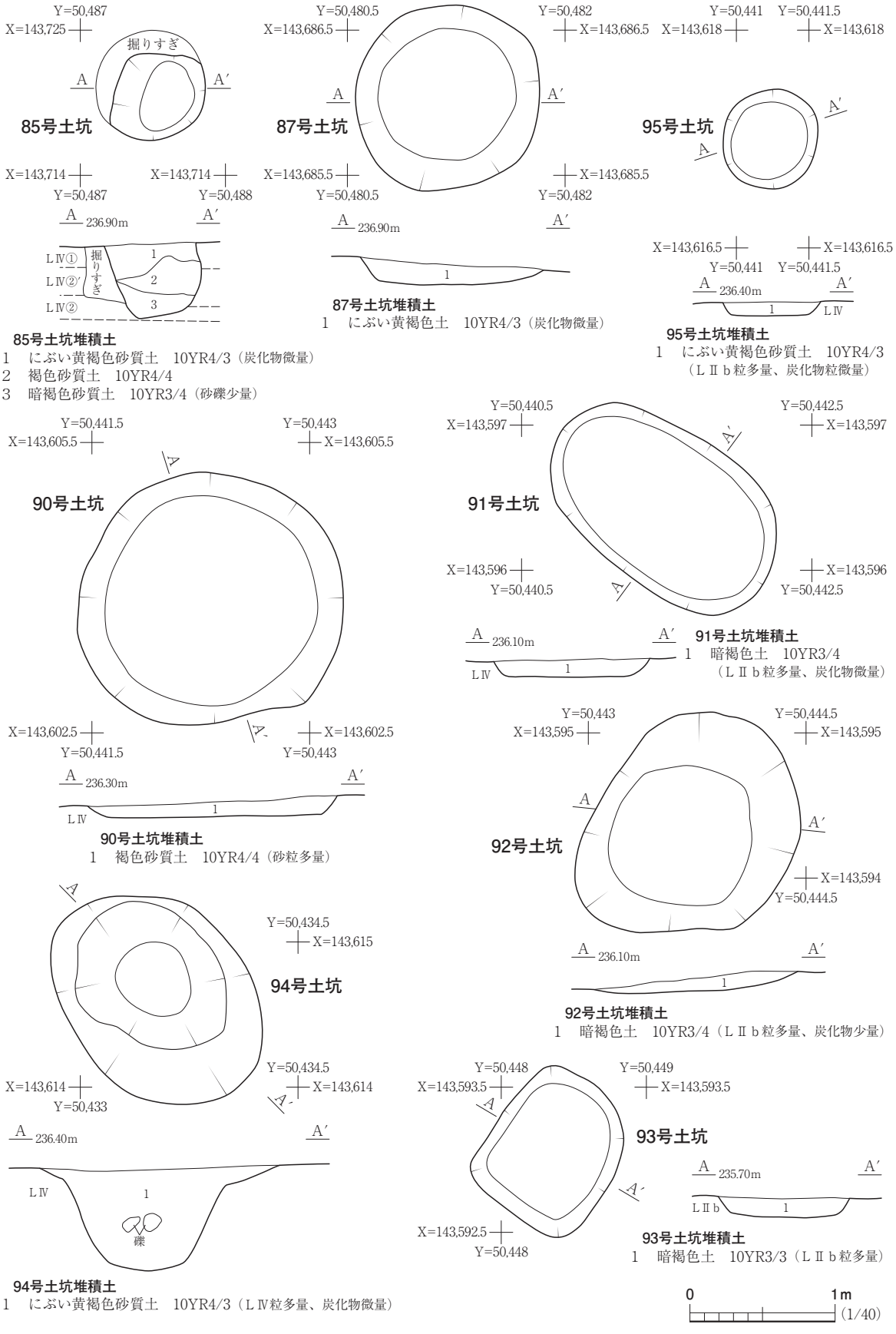


図445　土坑（10）



85号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物微量）
2　褐色砂質土　10YR4/4
3　暗褐色砂質土　10YR3/4（砂礫少量）

87号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物微量）

95号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（ⅡⅡb粒多量、炭化物粒微量）

90号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（砂粒多量）

91号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（ⅡⅡb粒多量、炭化物微量）

92号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（ⅡⅡb粒多量、炭化物少量）

94号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（LⅣ粒多量、炭化物微量）

93号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（ⅡⅡb粒多量）

図446　土坑（11）

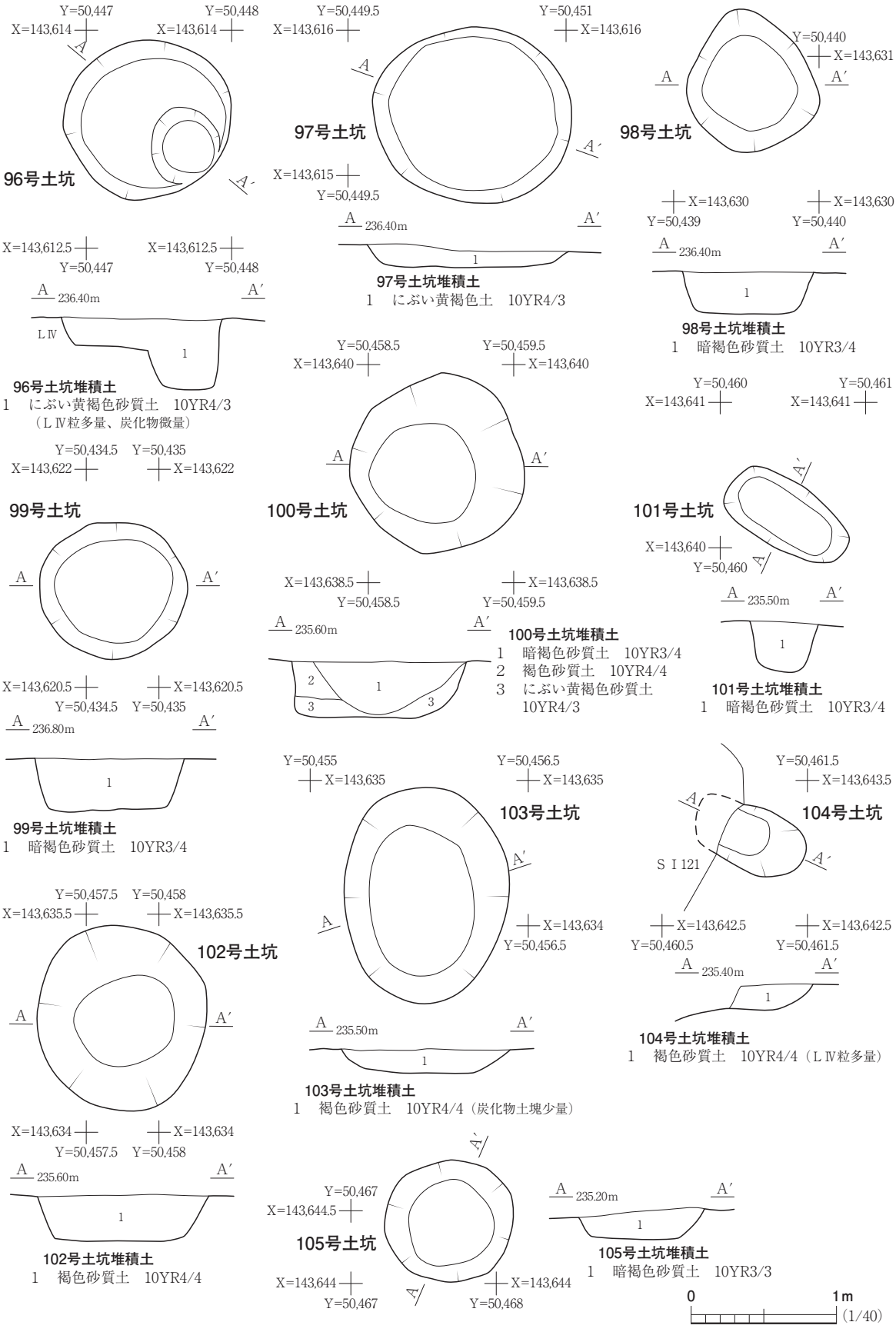

96号土坑
Y=50,447
X=143,614
Y=50,448
X=143,614
A
A′
96号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（LⅣ粒多量、炭化物微量）
97号土坑
Y=50,449.5
X=143,616
Y=50,451
X=143,616
X=143,615
Y=50,449.5
236.40m
97号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
98号土坑
Y=50,440
X=143,631
X=143,630
Y=50,439
X=143,630
Y=50,440
236.40m
98号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
99号土坑
Y=50,434.5
X=143,622
Y=50,435
X=143,622
X=143,620.5
Y=50,434.5
X=143,620.5
Y=50,435
236.80m
99号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
100号土坑
Y=50,458.5
X=143,640
Y=50,459.5
X=143,640
X=143,638.5
Y=50,458.5
X=143,638.5
Y=50,459.5
235.60m
100号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
2　褐色砂質土　10YR4/4
3　にぶい黄褐色砂質土
10YR4/3
101号土坑
Y=50,460
X=143,641
Y=50,461
X=143,641
X=143,640
Y=50,460
235.50m
101号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
102号土坑
Y=50,457.5
X=143,635.5
Y=50,458
X=143,635.5
X=143,634
Y=50,457.5
X=143,634
Y=50,458
235.60m
102号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4
103号土坑
Y=50,455
X=143,635
Y=50,456.5
X=143,635
X=143,634
Y=50,456.5
235.50m
103号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物土塊少量）
104号土坑
Y=50,461.5
X=143,643.5
S I 121
X=143,642.5
Y=50,460.5
X=143,642.5
Y=50,461.5
235.40m
104号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（LⅣ粒多量）
105号土坑
Y=50,467
X=143,644.5
X=143,644
Y=50,467
X=143,644
Y=50,468
235.20m
105号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3
0
1m
(1/40)

図447　土坑（12）

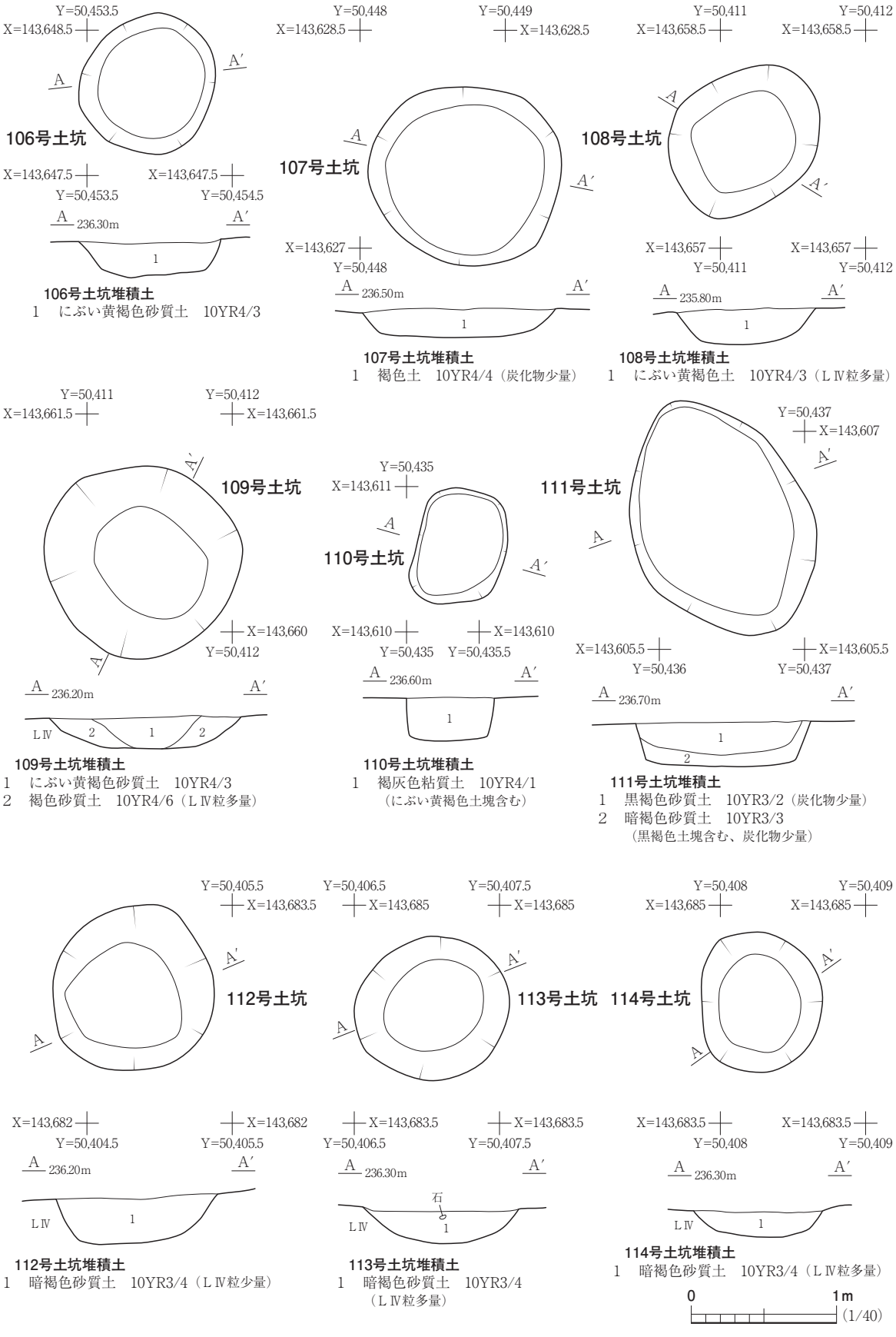

106号土坑
Y=50,453.5
X=143,648.5
A
A′
X=143,647.5
Y=50,453.5
X=143,647.5
Y=50,454.5
236.30m
1
106号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
107号土坑
Y=50,448
X=143,628.5
Y=50,449
X=143,628.5
X=143,627
Y=50,448
236.50m
1
107号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（炭化物少量）
108号土坑
Y=50,411
X=143,658.5
Y=50,412
X=143,658.5
X=143,657
Y=50,411
X=143,657
Y=50,412
235.80m
1
108号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ⅬⅣ粒多量）
109号土坑
Y=50,411
X=143,661.5
Y=50,412
X=143,661.5
X=143,660
Y=50,412
236.20m
ⅬⅣ
2
1
2
109号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
2　褐色砂質土　10YR4/6（ⅬⅣ粒多量）
110号土坑
Y=50,435
X=143,611
X=143,610
Y=50,435
X=143,610
Y=50,435.5
236.60m
1
110号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1
（にぶい黄褐色土塊含む）
111号土坑
Y=50,437
X=143,607
X=143,605.5
Y=50,436
X=143,605.5
Y=50,437
236.70m
1
2
111号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2（炭化物少量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/3
（黒褐色土塊含む、炭化物少量）
112号土坑
Y=50,405.5
X=143,683.5
X=143,682
Y=50,404.5
X=143,682
Y=50,405.5
236.20m
ⅬⅣ
1
112号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（ⅬⅣ粒少量）
113号土坑
Y=50,406.5
X=143,685
Y=50,407.5
X=143,685
X=143,683.5
Y=50,406.5
X=143,683.5
Y=50,407.5
236.30m
石
ⅬⅣ
1
113号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
（ⅬⅣ粒多量）
114号土坑
Y=50,408
X=143,685
Y=50,409
X=143,685
X=143,683.5
Y=50,408
X=143,683.5
Y=50,409
236.30m
ⅬⅣ
1
114号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（ⅬⅣ粒多量）
0
1m
(1/40)

図448　土坑（13）

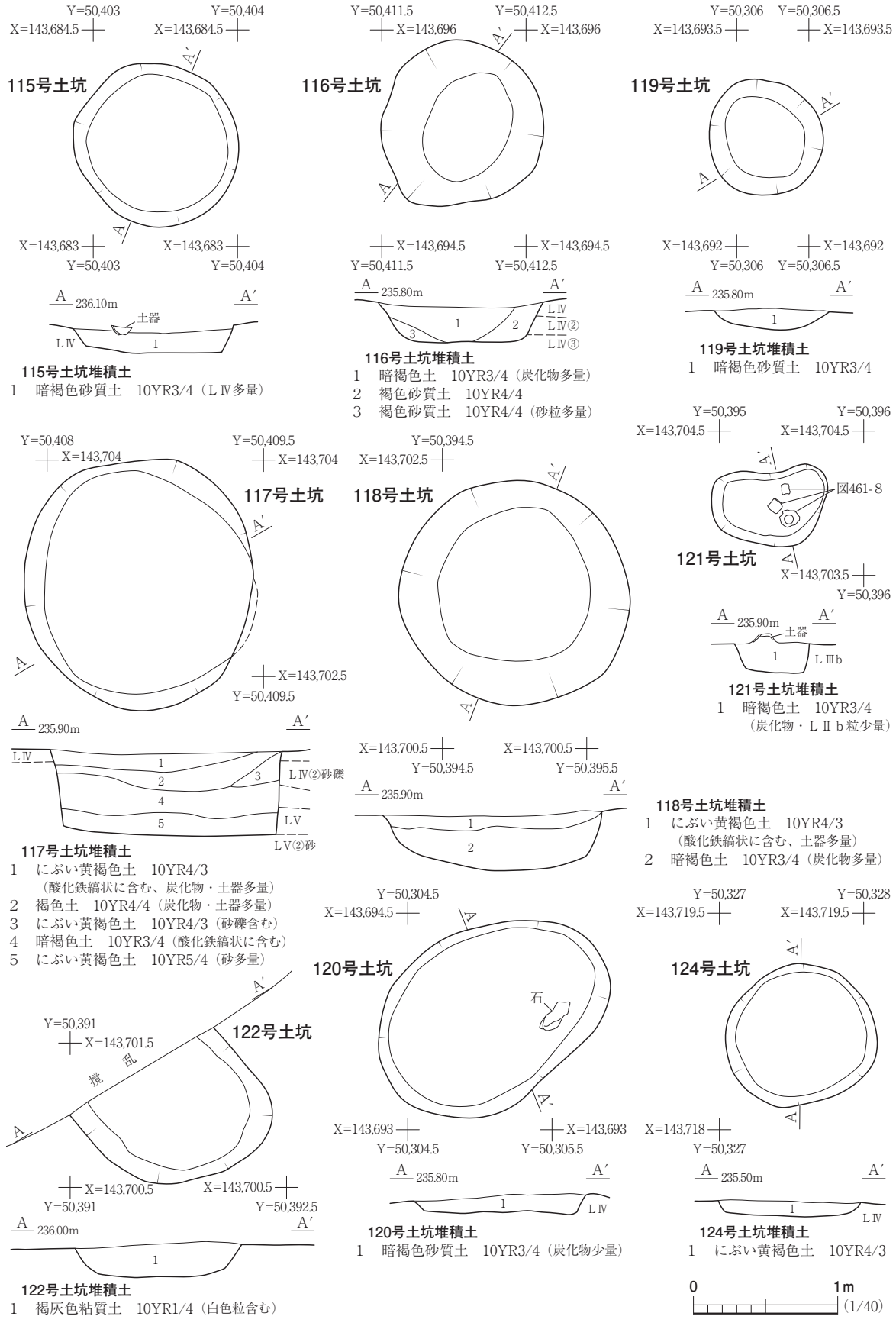

115号土坑
Y=50,403
X=143,684.5
Y=50,404
X=143,684.5
X=143,683
Y=50,403
X=143,683
Y=50,404
A
A′
A 236.10m A′
土器
LⅣ
1
115号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（LⅣ多量）
116号土坑
Y=50,411.5
X=143,696
Y=50,412.5
X=143,696
X=143,694.5
Y=50,411.5
X=143,694.5
Y=50,412.5
A 235.80m A′
1
2
3
LⅣ
LⅣ②
LⅣ③
116号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物多量）
2　褐色砂質土　10YR4/4
3　褐色砂質土　10YR4/4（砂粒多量）
119号土坑
Y=50,306
X=143,693.5
Y=50,306.5
X=143,693.5
X=143,692
Y=50,306
X=143,692
Y=50,306.5
A 235.80m A′
1
119号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4
117号土坑
Y=50,408
X=143,704
Y=50,409.5
X=143,704
X=143,702.5
Y=50,409.5
A 235.90m A′
LⅣ
1
2
3
4
5
LⅣ②砂礫
LV
LV②砂
117号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（酸化鉄縞状に含む、炭化物・土器多量）
2　褐色土　10YR4/4（炭化物・土器多量）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（砂礫含む）
4　暗褐色土　10YR3/4（酸化鉄縞状に含む）
5　にぶい黄褐色土　10YR5/4（砂多量）
118号土坑
Y=50,394.5
X=143,702.5
X=143,700.5
Y=50,394.5
X=143,700.5
Y=50,395.5
A 235.90m A′
1
2
118号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（酸化鉄縞状に含む、土器多量）
2　暗褐色土　10YR3/4（炭化物多量）
121号土坑
Y=50,395
X=143,704.5
Y=50,396
X=143,704.5
図461-8
X=143,703.5
Y=50,396
A 235.90m A′
土器
1
LⅢb
121号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（炭化物・LⅡb粒少量）
122号土坑
Y=50,391
X=143,701.5
撹乱
X=143,700.5
Y=50,391
X=143,700.5
Y=50,392.5
A 236.00m A′
1
122号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR1/4（白色粒含む）
120号土坑
Y=50,304.5
X=143,694.5
石
X=143,693
Y=50,304.5
X=143,693
Y=50,305.5
A 235.80m A′
1
LⅣ
120号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物少量）
124号土坑
Y=50,327
X=143,719.5
Y=50,328
X=143,719.5
X=143,718
Y=50,327
A 235.50m A′
1
LⅣ
124号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
0　1m
（1/40）

図449　土坑（14）

生土器の胴部片である。土坑の機能や性格は明らかにできなかったが、所属時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代後期頃と考えられる。（中　野）

121号土坑　ＳＫ121（図449・461、写真350）

本遺構は、Ⅱ区のＬ－15グリッドの標高235.6ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅢｂである。重複する遺構はない。堆積土は暗褐色土で、堆積過程は不明である。平面形は不整な楕円形で、規模は長径80㎝、短径50㎝である。周壁は80度で立ち上がる。壁高は25㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。遺物は堆積土上層よりややまとまって土師器が21点出土している。図461－８は球胴形の壺の底部から胴部下半の破片である。外面にはハケメ調整が施される。所属時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期頃と考えられる。（中　野）

133号土坑　ＳＫ133（図450・461、写真349・426）

本遺構は、Ⅴ区のＸ－16グリッド、ＬⅣで検出された。標高235.9ｍの平坦面である。重複する遺構はない。平面形は不整な楕円形で、規模は長径113㎝、短径82㎝、深さ16㎝である。暗褐色砂質土が堆積し、堆積土中から土師器片が50点出土した。これらを接合したところほぼ完形に復元でき、図461－９に示した。平底、球胴、「く」字口縁で、外面にミガキ、内面にヘラナデを施す。時期は、検出面と出土した土器から、古墳時代前期に位置づけられる。（青　山）

143号土坑　ＳＫ143（図452・460、写真353・359・426・436・437・440）

本遺構は調査区中央部、Ｊ－15・16グリッドに位置し、標高235.6ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣである。145号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。北側には47号土坑、南側には144号土坑が隣接する。遺構の平面形は東西に長軸をもつ不整楕円形である。規模は長径290㎝、短径240㎝、深さ20㎝である。底面は中央に向かってわずかに傾斜するものの、おおむね水平かつ平坦となっている。堆積土は１層で灰黄褐色の粘質土が堆積していた。基盤層であるＬⅣとの差異はわずかであることから、掘った土を短期間のうちに埋め戻したものと思われる。堆積土中には５～10㎝ほどの炭化物・小礫・土器小片が全体に含まれていた。なお炭化物や小礫は周辺の基盤層には含まれていないため、人為的な要因によって混入したものと思われる。いずれも底面および底面から10㎝ほど浮いた位置で検出された。なかでも中央からやや北に寄った位置では、炭化物が集中する範囲が認められ、そこからは石鏃や土器の小片が出土した。

遺物は３点を図示した。図460－８は弥生土器の口縁部片で下端には段を有する。器面には斜位の単節Ｌ縄文が施される。９は、弥生土器の頸部片とみられ刺突文が施されている。図12の石鏃は、茎の基部に抉りを入れ先端を左右に張り出させており、いわゆるアメリカ式石鏃とみられる。

本遺構は出土した遺物や検出面から弥生時代終末期の土坑と考えられる。堆積土の状況から掘った土を短期間のうちに埋め戻したものと思われ、土坑墓の可能性も考えられる。（神　林）

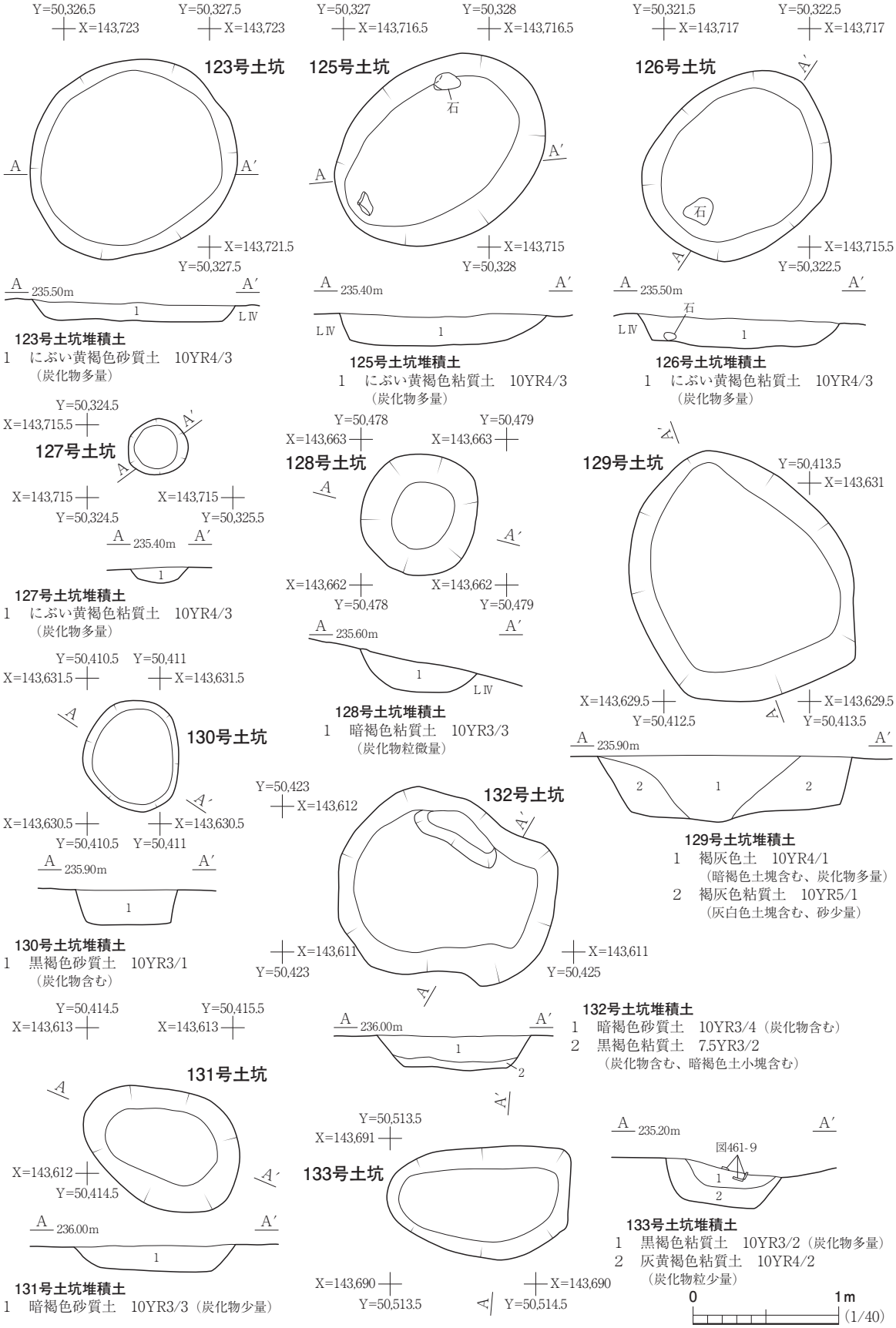

123号土坑
Y=50,326.5
X=143,723
Y=50,327.5
X=143,723
X=143,721.5
Y=50,327.5
A
A′
235.50m
1
LⅣ
123号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（炭化物多量）
125号土坑
Y=50,327
X=143,716.5
Y=50,328
X=143,716.5
石
X=143,715
Y=50,328
235.40m
125号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（炭化物多量）
126号土坑
Y=50,321.5
X=143,717
Y=50,322.5
X=143,717
X=143,715.5
Y=50,322.5
235.50m
126号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（炭化物多量）
127号土坑
Y=50,324.5
X=143,715.5
X=143,715
Y=50,324.5
X=143,715
Y=50,325.5
235.40m
127号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（炭化物多量）
128号土坑
Y=50,478
X=143,663
Y=50,479
X=143,663
X=143,662
Y=50,478
X=143,662
Y=50,479
235.60m
128号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3
（炭化物粒微量）
129号土坑
Y=50,413.5
X=143,631
X=143,629.5
Y=50,412.5
X=143,629.5
Y=50,413.5
235.90m
129号土坑堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1
（暗褐色土塊含む、炭化物多量）
2　褐灰色粘質土　10YR5/1
（灰白色土塊含む、砂少量）
130号土坑
Y=50,410.5
Y=50,411
X=143,631.5
X=143,631.5
X=143,630.5
X=143,630.5
Y=50,410.5
Y=50,411
235.90m
130号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/1
（炭化物含む）
132号土坑
Y=50,423
X=143,612
X=143,611
Y=50,423
X=143,611
Y=50,425
236.00m
132号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物含む）
2　黒褐色粘質土　7.5YR3/2
（炭化物含む、暗褐色土小塊含む）
Y=50,414.5
X=143,613
Y=50,415.5
X=143,613
131号土坑
X=143,612
Y=50,414.5
236.00m
131号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物少量）
Y=50,513.5
X=143,691
133号土坑
X=143,690
Y=50,513.5
X=143,690
Y=50,514.5
235.20m
図461-9
133号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（炭化物多量）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
（炭化物粒少量）
0
1m
(1/40)

図450　土坑（15）

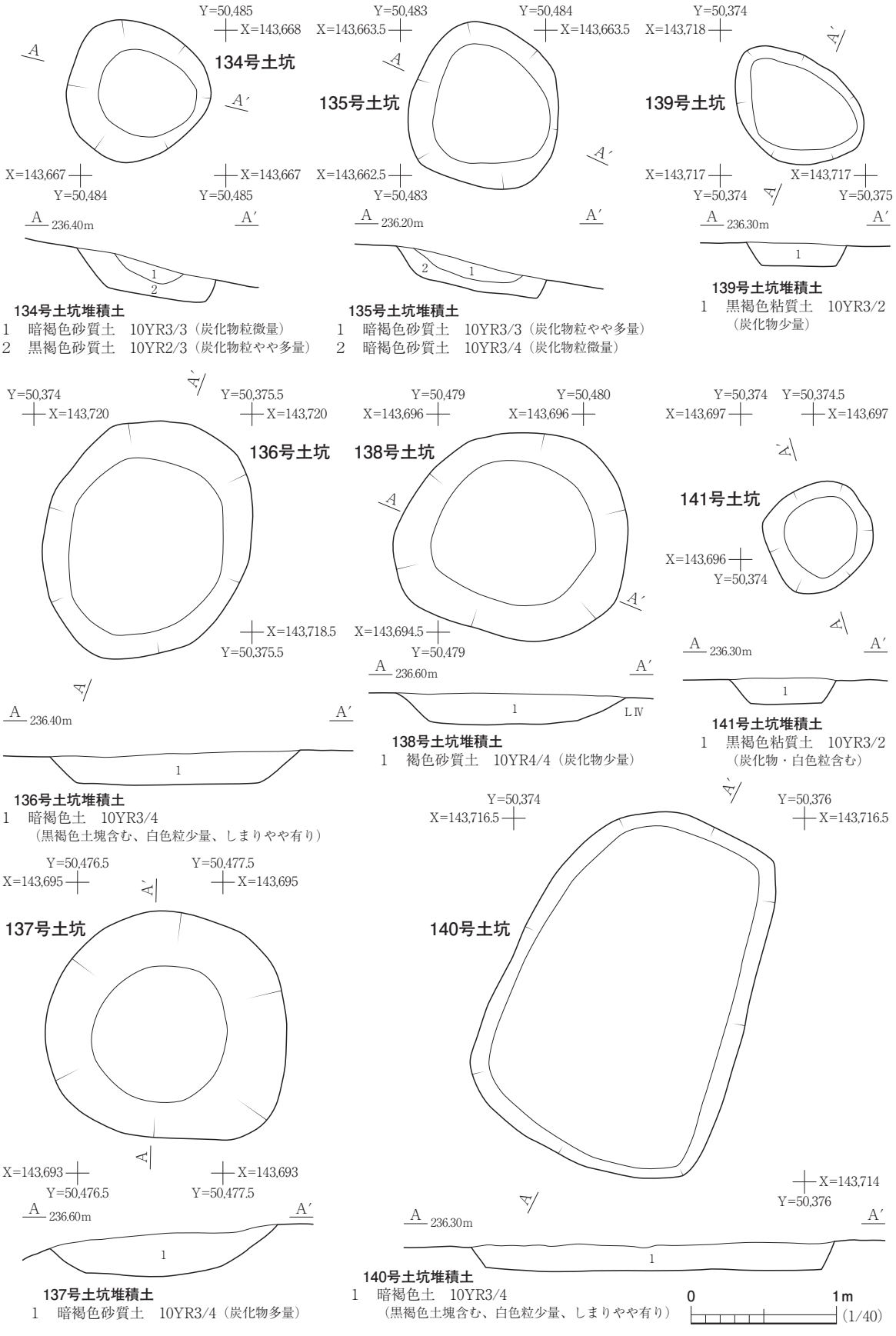

134号土坑
Y=50,485
X=143,668
X=143,667
Y=50,484
Y=50,485
A
A′
A 236.40m
A′
1
2
134号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒微量）
2　黒褐色砂質土　10YR2/3（炭化物粒やや多量）
135号土坑
Y=50,483
Y=50,484
X=143,663.5
X=143,663.5
X=143,662.5
Y=50,483
A 236.20m
2
1
135号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒やや多量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物粒微量）
139号土坑
Y=50,374
X=143,718
X=143,717
Y=50,374
X=143,717
Y=50,375
A 236.30m
1
139号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2
（炭化物少量）
136号土坑
Y=50,374
Y=50,375.5
X=143,720
X=143,720
X=143,718.5
Y=50,375.5
A 236.40m
1
136号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（黒褐色土塊含む、白色粒少量、しまりやや有り）
138号土坑
Y=50,479
Y=50,480
X=143,696
X=143,696
X=143,694.5
Y=50,479
A 236.60m
1
LⅣ
138号土坑堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物少量）
141号土坑
Y=50,374
Y=50,374.5
X=143,697
X=143,697
X=143,696
Y=50,374
A 236.30m
1
141号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2
（炭化物・白色粒含む）
137号土坑
Y=50,476.5
Y=50,477.5
X=143,695
X=143,695
X=143,693
Y=50,476.5
X=143,693
Y=50,477.5
A 236.60m
1
137号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物多量）
140号土坑
Y=50,374
Y=50,376
X=143,716.5
X=143,716.5
X=143,714
Y=50,376
A 236.30m
1
140号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（黒褐色土塊含む、白色粒少量、しまりやや有り）
0
1m
(1/40)

図451　土坑（16）

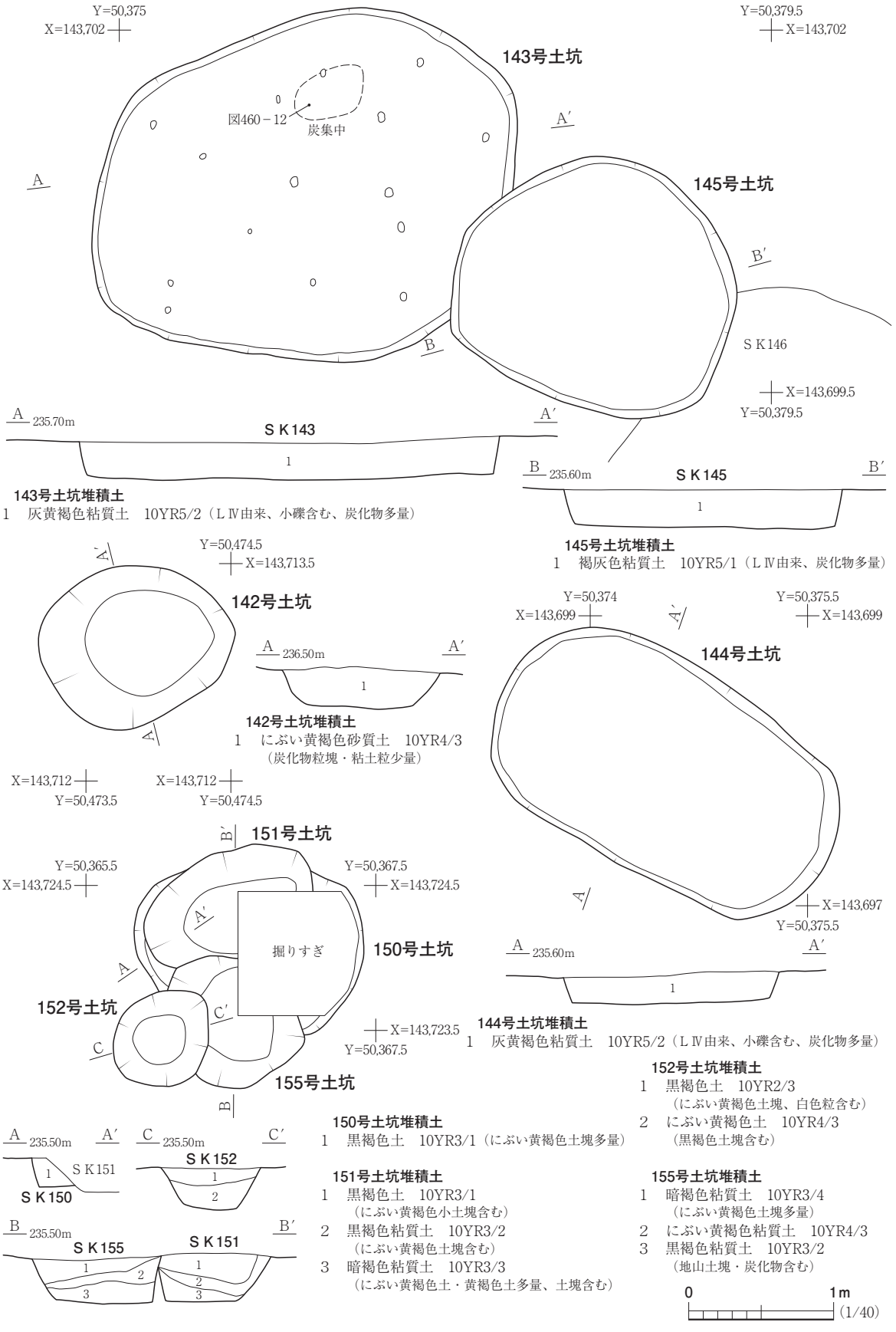

Y=50,375
X=143,702
143号土坑
図460－12
炭集中
A
A′
B
B′
Y=50,379.5
X=143,702
145号土坑
S K146
X=143,699.5
Y=50,379.5
A 235.70m
S K143
1
143号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（ⅬⅣ由来、小礫含む、炭化物多量）
B 235.60m
S K145
1
145号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR5/1（ⅬⅣ由来、炭化物多量）
Y=50,474.5
X=143,713.5
142号土坑
A 236.50m
1
142号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（炭化物粒塊・粘土粒少量）
X=143,712
Y=50,473.5
X=143,712
Y=50,474.5
151号土坑
Y=50,365.5
X=143,724.5
Y=50,367.5
X=143,724.5
掘りすぎ
150号土坑
152号土坑
X=143,723.5
Y=50,367.5
155号土坑
Y=50,374
X=143,699
Y=50,375.5
X=143,699
144号土坑
X=143,697
Y=50,375.5
A 235.60m
1
144号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（ⅬⅣ由来、小礫含む、炭化物多量）
A 235.50m
S K151
1
S K150
C 235.50m
S K152
1
2
B 235.50m
S K155
S K151
1
2
3
150号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（にぶい黄褐色土塊多量）
151号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1
（にぶい黄褐色小土塊含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2
（にぶい黄褐色土塊含む）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3
（にぶい黄褐色土・黄褐色土多量、土塊含む）
152号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3
（にぶい黄褐色土塊、白色粒含む）
2　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（黒褐色土塊含む）
155号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
（にぶい黄褐色土塊多量）
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
3　黒褐色粘質土　10YR3/2
（地山土塊・炭化物含む）
0
1m
(1/40)

図452　土坑（17）

154号土坑　ＳＫ154（図453・461、写真354）

本遺構は、Ⅰ区のＱ－13グリッドに位置する。標高235.9ｍ付近の平坦面に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は49号畑跡で本遺構が新しい。堆積土は炭化物粒塊を多く含むにぶい黄褐色砂質土の単層である。炭化物や遺物、礫の出土状況から人為的な堆積土と考えている。平面形は楕円形である。規模は、長径123cm、短径95㎝である。周壁は、45度で立ち上がる。壁高は、16㎝である。底面は平坦に掘り込まれている。

遺物は土師器が26点出土し、そのうち２点を図示した。いずれも堆積土中から散乱して出土した。その他に直径25㎝ほどの焼けた礫が２点出土している。図461－10は複合口縁の壺の口縁部片である。11は球胴形の甕の口縁部片である。

所属時期は、出土遺物や周辺遺構との関係などから古墳時代前期と考えられる。　（中　野）

158号土坑　ＳＫ158（図454・462、写真354）

本遺構は、Ⅲ区のＦ－12グリッド、ＬⅡｂで検出された。標高235.8ｍの平坦面である。重複する遺構はない。平面形は不整な円形で、規模は長径138cm、短径111㎝、深さ27cmである。暗褐色砂質土が堆積し、堆積土中から石器１点が出土し、図462－15に示した。自然石の一部に両面から剥離を加えたものである。時期は、検出面から古墳時代後期以降である。　（青　山）

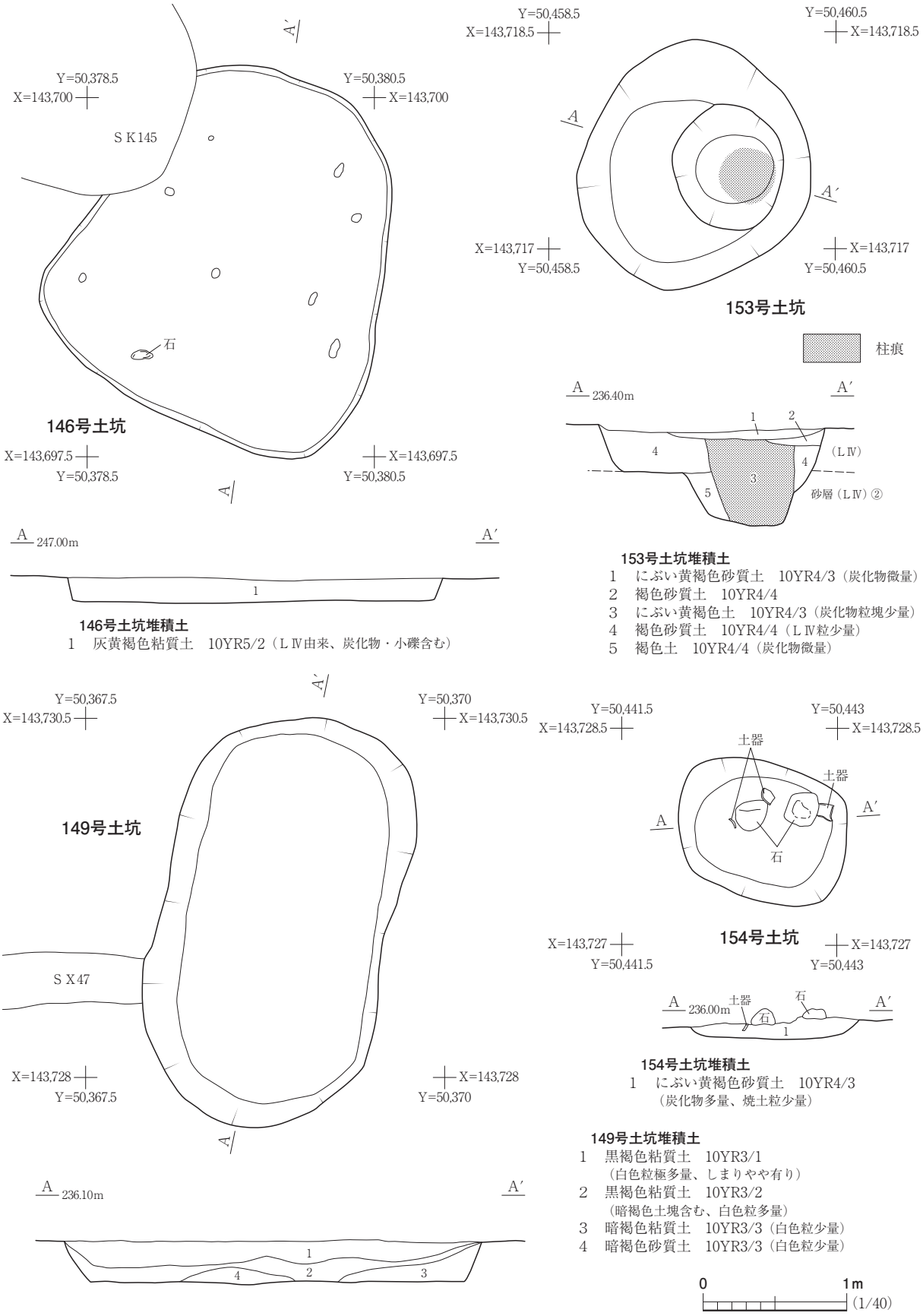
177号土坑　ＳＫ177（図456・462、写真356）

本遺構は、Ⅱ区のＫ－16グリッド、標高235.9ｍ付近に立地する。上層に３号土坑が位置するが、直接の重複関係はない。南側には223号住居跡が隣接する。平面形はやや東西に長い楕円形である。規模は長径200cm、短径170㎝、深さ60㎝である。底面は平坦で、周壁は急斜度で立ち上がる。堆積土は２層に分層した。ℓ１は暗褐色の粘質土で、黒褐色土塊や炭化物、白色粒子が含まれる。ℓ２は本遺構が掘り込まれているＬⅢ～Ⅳに近似した土である。遺物はすべて土師器であるが、破片の状態で出土し、完形に復元できるものはなかった。また５～６㎝ほどのメノウの原石が数点出土している。図示できたのは図462－３の土師器甕の口縁部とみられる破片である。

出土した遺物の特徴から時期は古墳時代後期と思われ、廃棄土坑として利用されていたと思われる。隣接する223号住居跡の堆積土からもメノウの原石が出土しており、いずれも同時期に機能し、埋没過程で遺物が廃棄されたものとみられる。　（神　林）

180号土坑　ＳＫ180（図457、写真356）

本遺構はⅣ区のＩ・Ｊ－15グリッド、標高235.8ｍの平坦面に位置する。検出面はＬⅣである。重複する遺構はない。平面形は東西に長軸をもつ長楕円形である。規模は長径120cm、短径80㎝、深さ20㎝である。堆積土は１層で、粘質のにぶい黄褐色土が堆積していた。遺物は底面より浮いた



146号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR5/2（LⅣ由来、炭化物・小礫含む）

153号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物微量）
2　褐色砂質土　10YR4/4
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物粒塊少量）
4　褐色砂質土　10YR4/4（LⅣ粒少量）
5　褐色土　10YR4/4（炭化物微量）

154号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
（炭化物多量、焼土粒少量）

149号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1
（白色粒極多量、しまりやや有り）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2
（暗褐色土塊含む、白色粒多量）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3（白色粒少量）
4　暗褐色砂質土　10YR3/3（白色粒少量）

図453　土坑（18）

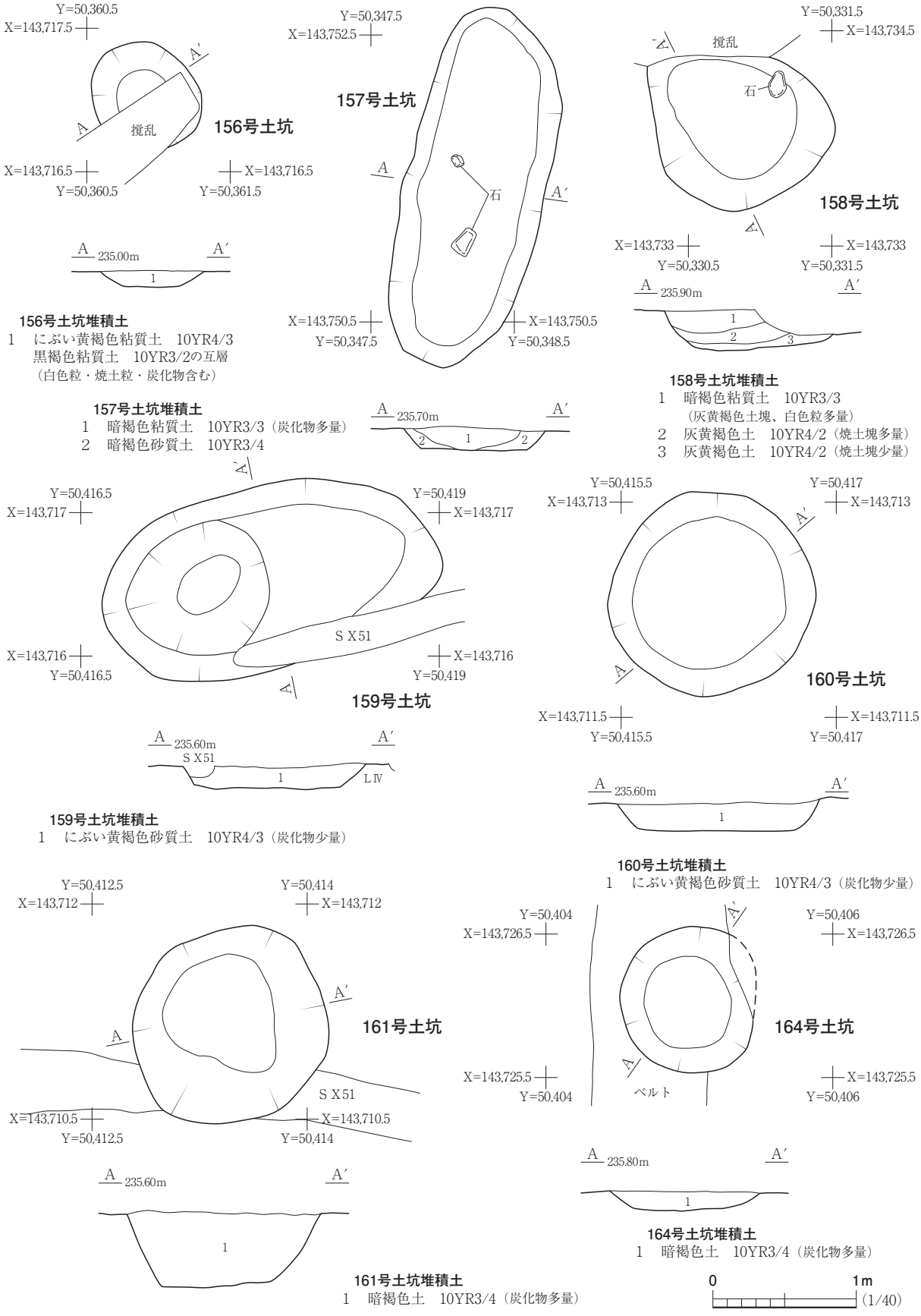

Y=50,360.5
X=143,717.5
A
A'
撹乱
156号土坑
X=143,716.5
Y=50,360.5
X=143,716.5
Y=50,361.5
A
235.00m
A'
1
156号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
黒褐色粘質土　10YR3/2の互層
（白色粒・焼土粒・炭化物含む）
Y=50,347.5
X=143,752.5
157号土坑
A
石
A'
X=143,750.5
Y=50,347.5
X=143,750.5
Y=50,348.5
A
235.70m
A'
2
1
2
157号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物多量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/4
Y=50,331.5
X=143,734.5
A
撹乱
石
A'
158号土坑
X=143,733
Y=50,330.5
X=143,733
Y=50,331.5
A
235.90m
A'
1
2
3
158号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3
（灰黄褐色土塊、白色粒多量）
2　灰黄褐色土　10YR4/2（焼土塊多量）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（焼土塊少量）
Y=50,416.5
X=143,717
A
Y=50,419
X=143,717
S X51
X=143,716
Y=50,416.5
X=143,716
Y=50,419
A'
159号土坑
A
235.60m
A'
S X51
1
L Ⅳ
159号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物少量）
Y=50,415.5
X=143,713
A
Y=50,417
X=143,713
A'
160号土坑
X=143,711.5
Y=50,415.5
X=143,711.5
Y=50,417
A
235.60m
A'
1
160号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物少量）
Y=50,412.5
X=143,712
Y=50,414
X=143,712
A'
A
161号土坑
S X51
X=143,710.5
Y=50,412.5
X=143,710.5
Y=50,414
A
235.60m
A'
1
161号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物多量）
Y=50,404
X=143,726.5
A
A'
Y=50,406
X=143,726.5
164号土坑
X=143,725.5
Y=50,404
ベルト
X=143,725.5
Y=50,406
A
235.80m
A'
1
164号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物多量）
0
1m
(1/40)

図454　土坑（19）

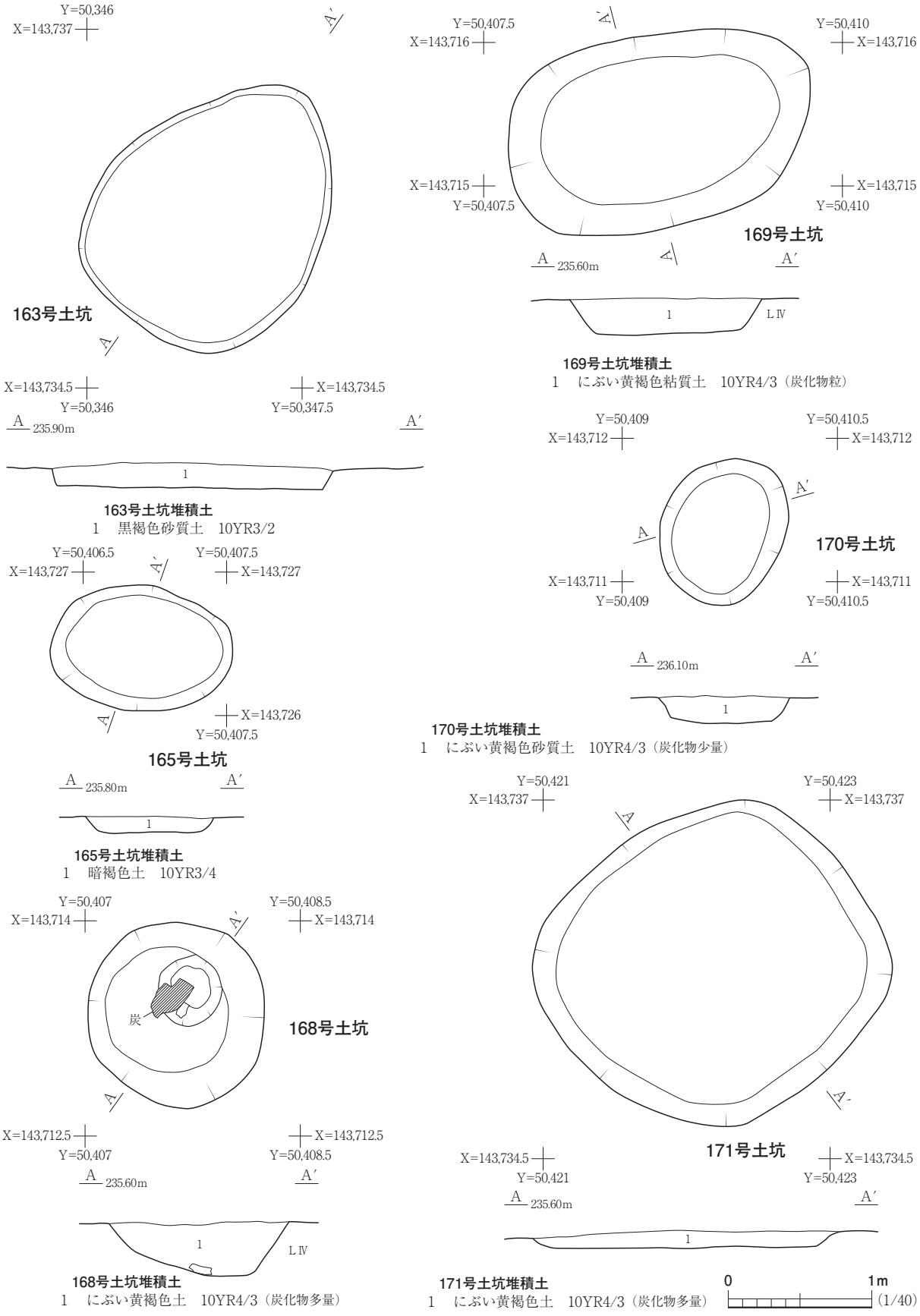
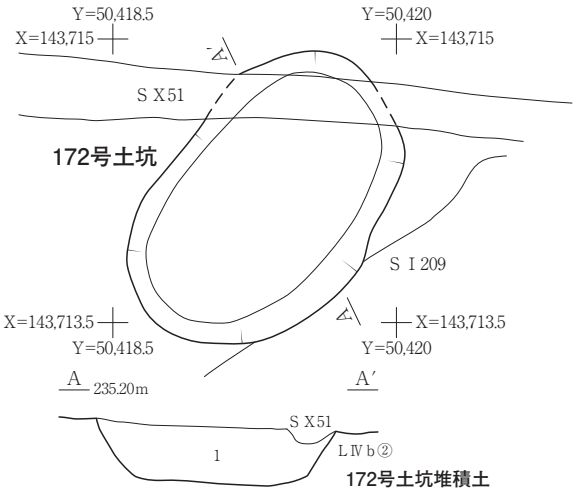
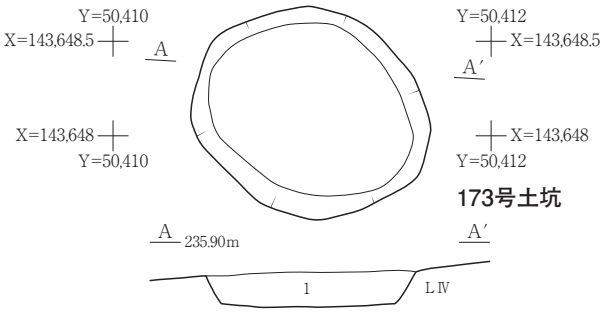

Y=50,346
X=143,737
A
A′
163号土坑
X=143,734.5
Y=50,346
X=143,734.5
Y=50,347.5
A
235.90m
A′
1
163号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/2
Y=50,406.5
X=143,727
Y=50,407.5
X=143,727
X=143,726
Y=50,407.5
165号土坑
A
235.80m
A′
1
165号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
Y=50,407
X=143,714
Y=50,408.5
X=143,714
炭
168号土坑
X=143,712.5
Y=50,407
X=143,712.5
Y=50,408.5
A
235.60m
A′
1
LⅣ
168号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物多量）
Y=50,407.5
X=143,716
Y=50,410
X=143,716
X=143,715
Y=50,407.5
X=143,715
Y=50,410
169号土坑
A
235.60m
A′
1
LⅣ
169号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物粒）
Y=50,409
X=143,712
Y=50,410.5
X=143,712
170号土坑
X=143,711
Y=50,409
X=143,711
Y=50,410.5
A
236.10m
A′
1
170号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（炭化物少量）
Y=50,421
X=143,737
Y=50,423
X=143,737
171号土坑
X=143,734.5
Y=50,421
X=143,734.5
Y=50,423
A
235.60m
A′
1
171号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（炭化物多量）
0
1m
(1/40)

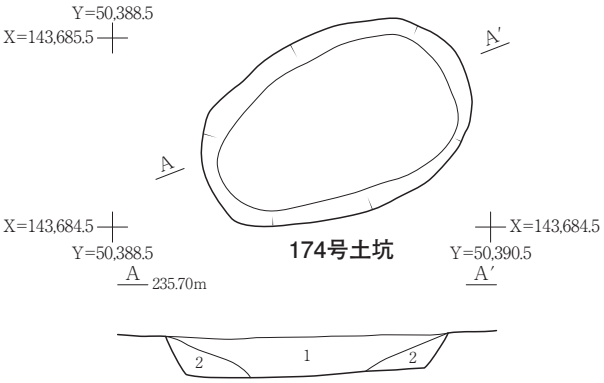
図455　土坑（20）



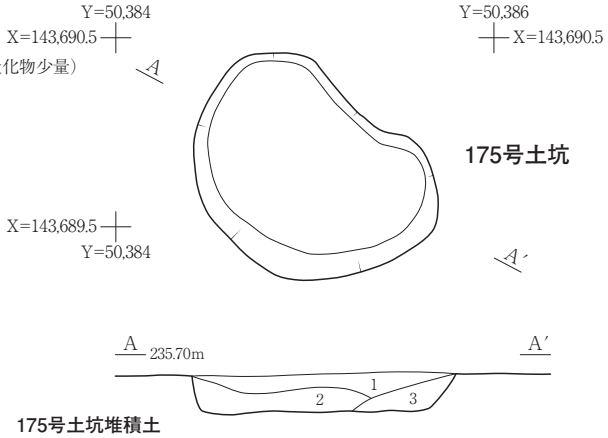
172号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物少量）



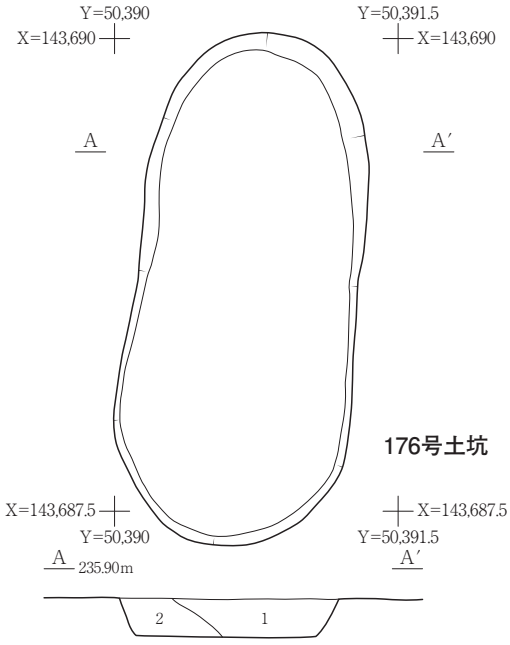
173号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/1（炭化物少量）



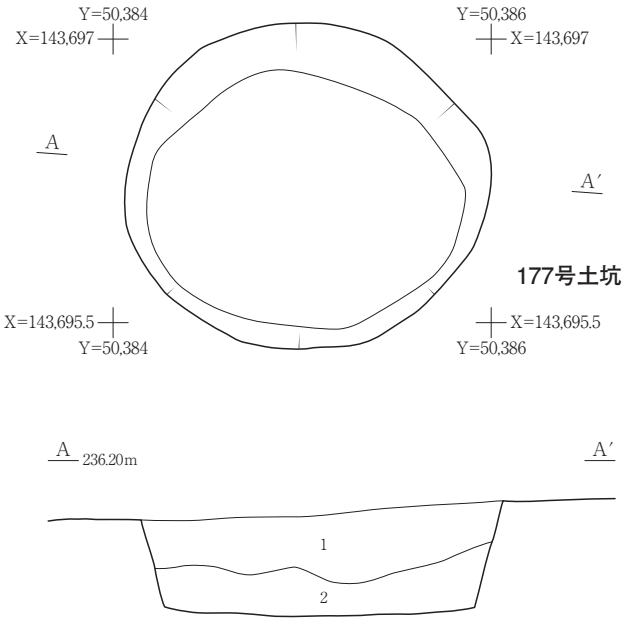
174号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（雲母粒含む）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（炭化物少量）



175号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（にぶい黄褐色土塊・白色粒含む、炭化物多量）
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（白色粒少量）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物少量）



176号土坑堆積土
1　黒褐色砂質土　10YR3/1（炭化物・雲母粒含む）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（雲母粒含む）



177号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（黒褐色土塊・炭化物・白色粒含む、5㎝礫少量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（雲母粒含む）

0　1m
(1/40)

図456　土坑（21）

位置から、土師器壺の口縁部片などが散乱した状態で出土した。機能や時期を明示する所見は得られなかったが、検出面や出土した遺物の特徴から、古墳時代前期と思われる。　（神　林）

181号土坑　ＳＫ181（図457・462、写真357）

本遺構は調査区の中央部Ⅱ区のＫ－15・16グリッドに位置し、標高235.3ｍ付近に立地する。検出面はＬⅢである。重複する遺構はなく南側に３・５・177号土坑や223号住居跡が隣接する。平面形は南北にやや長い楕円形である。規模は長径180㎝、短径160㎝、深さ20㎝ほどである。底面は中央部分がややくぼんでいるがおおむね平坦である。周壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４層に分層した。ℓ２には礫や炭化物、多量の焼土粒が含まれているが、全体の堆積状況としては周辺より徐々に堆積していった様子がうかがえる。遺物は２点を図示した。図462－２は内面に黒色処理を施した土師器杯である。底部は丸底で幅広く、胴部に稜をもち、口縁部は外反しながら立ち上がる。３は台付甕の台部と甕部の接合部片である。外面および台部の内側はハケメが施されている。甕の内面は全体的に黒色化しており、使用時に付着したコゲとみられる。

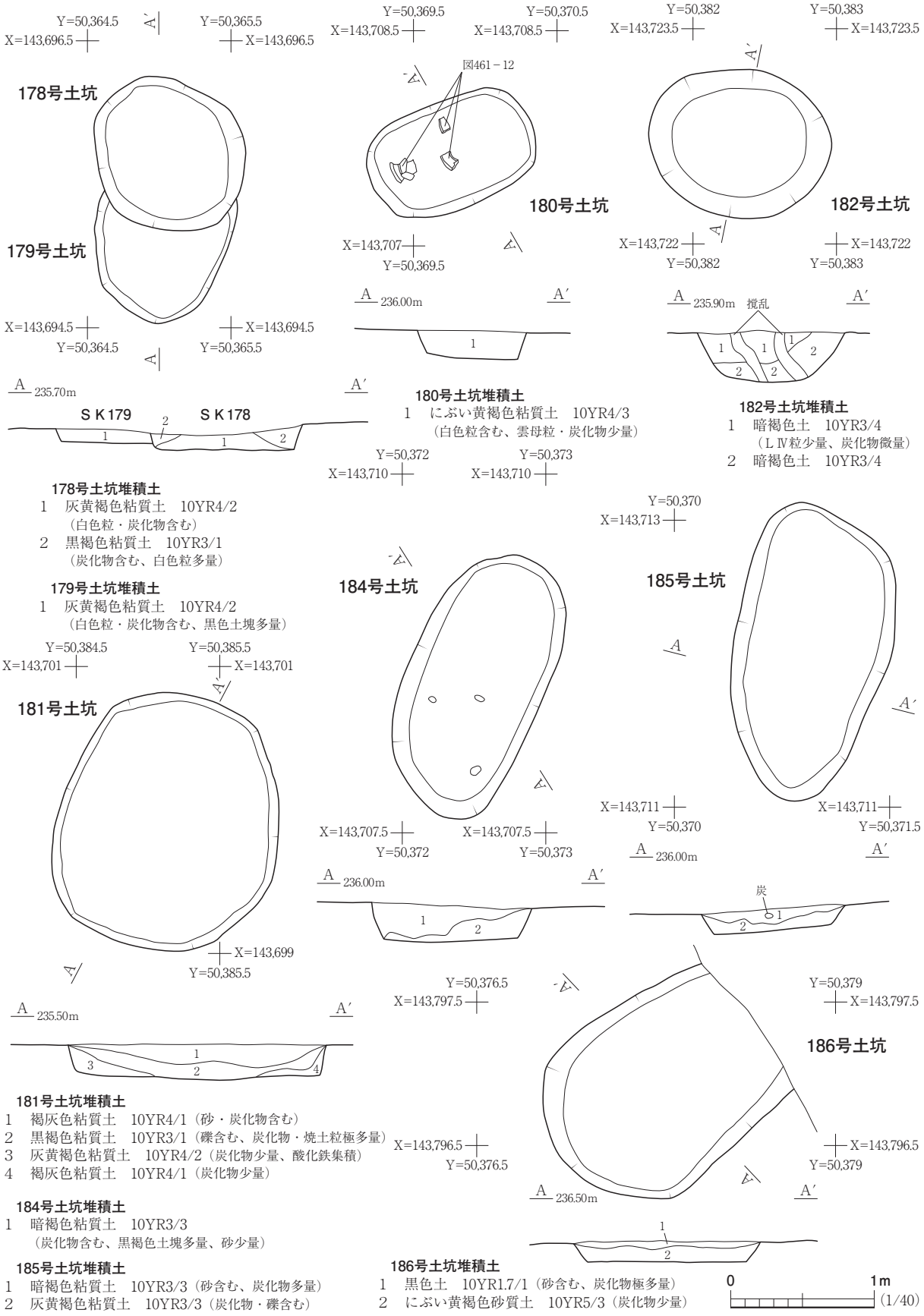
時期は出土した遺物から古墳時代後期と思われる。復元できない土師器の破片が多く出土しており、焼土や炭化材を人為的に投げ込んだような層も認められることから、埋没過程において、廃棄土坑として使用されたものと思われる。　（神　林）

183号土坑　ＳＫ183　（図459・460、写真357・359・426）

本遺構は調査区のⅣ区のＪ－14・15グリッドに位置し、標高235.8ｍ付近に立地する。検出面はＬⅣである。重複する遺構は無く、北側に185号土坑、東側に184号土坑、南側に47号土坑が隣接する。特に184・185号土坑はかなり近接しているが、重複はしていない。

遺構の平面形は南北に長軸をもつ隅丸長方形である。規模は長軸280㎝、短軸130㎝、深さ30㎝である。底面は水平かつ平坦となっている。堆積土は2層に分層した。ℓ１は遺構の上部を覆う暗褐色の粘質土で、ℓ２は底面を覆う灰黄褐色土である。いずれの層も５㎝ほどの小礫や炭化材を多く含んでいる。これらの含有物は周辺の基盤層には含まれていないことから、人為的な要因によって混入したと考えている。また土層断面の観察では、層理面の乱れが著しく、堆積土と基盤層の土質・土色の差異がほとんどないことから、比較的短期間のうちに人為的に埋めたものとみられる。遺物は文様が施された弥生土器と、無文の土器の破片が堆積土中に散らばって出土した。弥生土器は１個体分出土したが、無文の土器は器種や器形を推定できるほどは出土していない。なお弥生土器の底部付近の一部破片がやや離れて位置する191号土坑から出土している。

図460－２は　弥生土器の広口壺である。胎土には砂粒を多く含み、色調はややくすんだ褐色である。口唇部にはわずかであるが山形突起が付く。口縁部下端には段を有し指頭押圧による小波状のキザミが施されている。外面は地文として横位の撚糸文が施されるが、頸部はナデ消している。なお内面は、底面を除いて黒く変色しており、煮炊きの際に形成された薄いコゲの可能性が考えら



178号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
（白色粒・炭化物含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1
（炭化物含む、白色粒多量）

179号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
（白色粒・炭化物含む、黒色土塊多量）

180号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（白色粒含む、雲母粒・炭化物少量）

182号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（Ⅼ Ⅳ粒少量、炭化物微量）
2　暗褐色土　10YR3/4

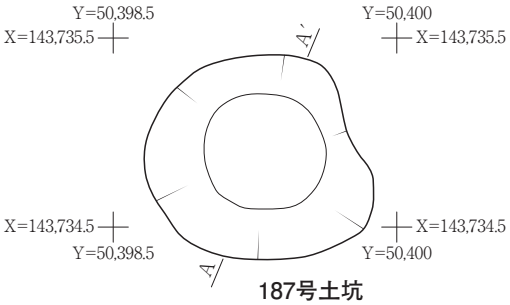
181号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（砂・炭化物含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/1（礫含む、炭化物・焼土粒極多量）
3　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物少量、酸化鉄集積）
4　褐灰色粘質土　10YR4/1（炭化物少量）

184号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3
（炭化物含む、黒褐色土塊多量、砂少量）

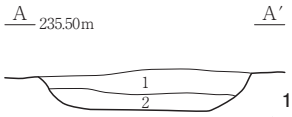
185号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（砂含む、炭化物多量）
2　灰黄褐色粘質土　10YR3/3（炭化物・礫含む）

186号土坑堆積土
1　黒色土　10YR1.7/1（砂含む、炭化物極多量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR5/3（炭化物少量）

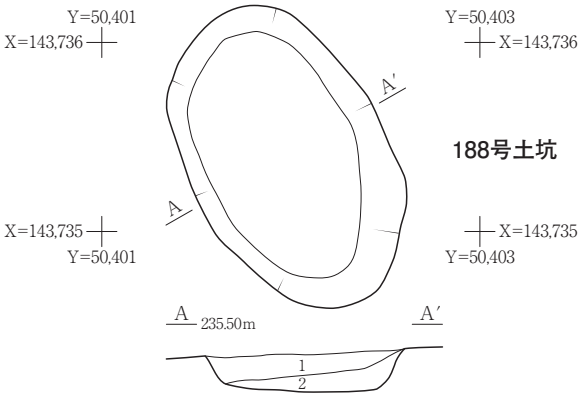
図457　土坑（22）



187号土坑

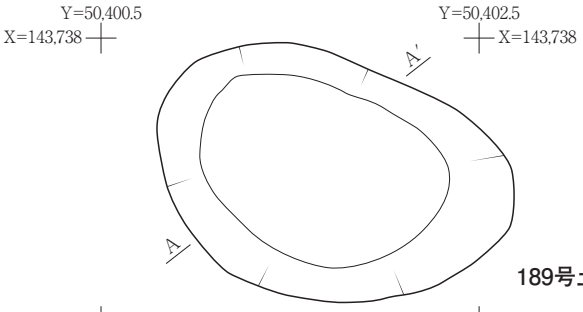


187号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物多量）
2　暗褐色土　10YR3/4

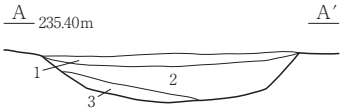


188号土坑

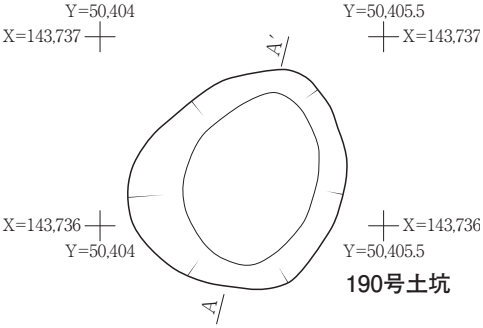
188号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4（炭化物少量）
2　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3



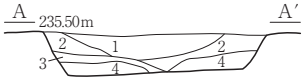
189号土坑



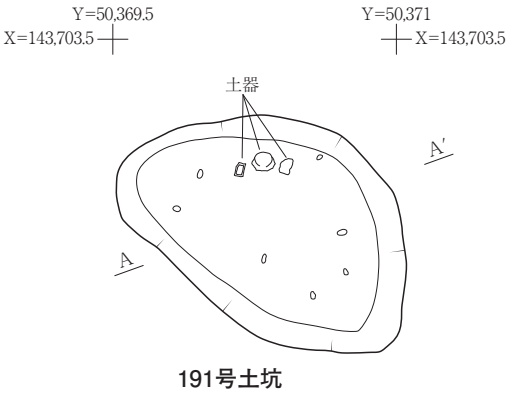
189号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物多量）
2　灰黄褐色砂質土　10YR4/2（炭化物微量）
3　暗褐色土　10YR3/4



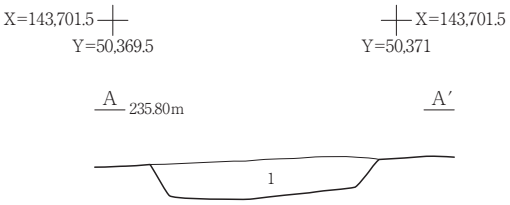
190号土坑



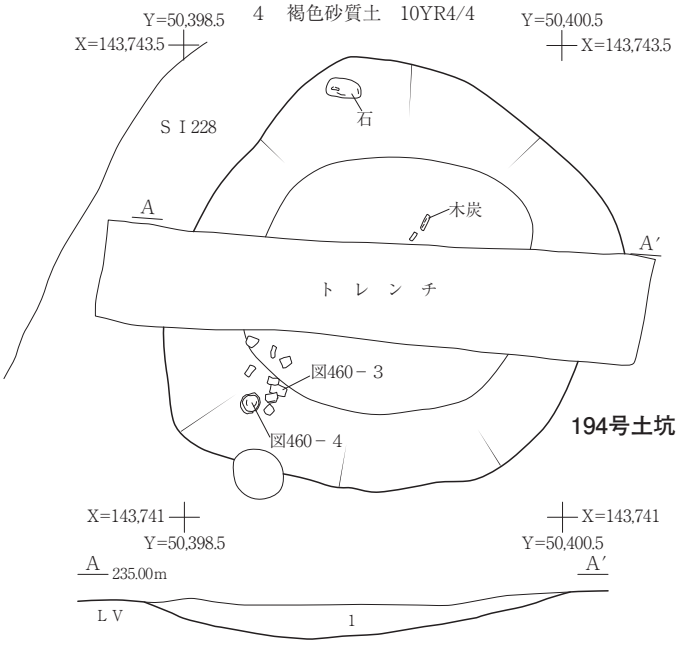
190号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物多量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/4（ＬⅣ砂粒多量）
3　暗褐色土　10YR3/4（炭化物微量）
4　褐色砂質土　10YR4/4



191号土坑



191号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（小礫含む、炭化物少量）



194号土坑

194号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物多量）

0　1m　(1/40)

図458　土坑（23）

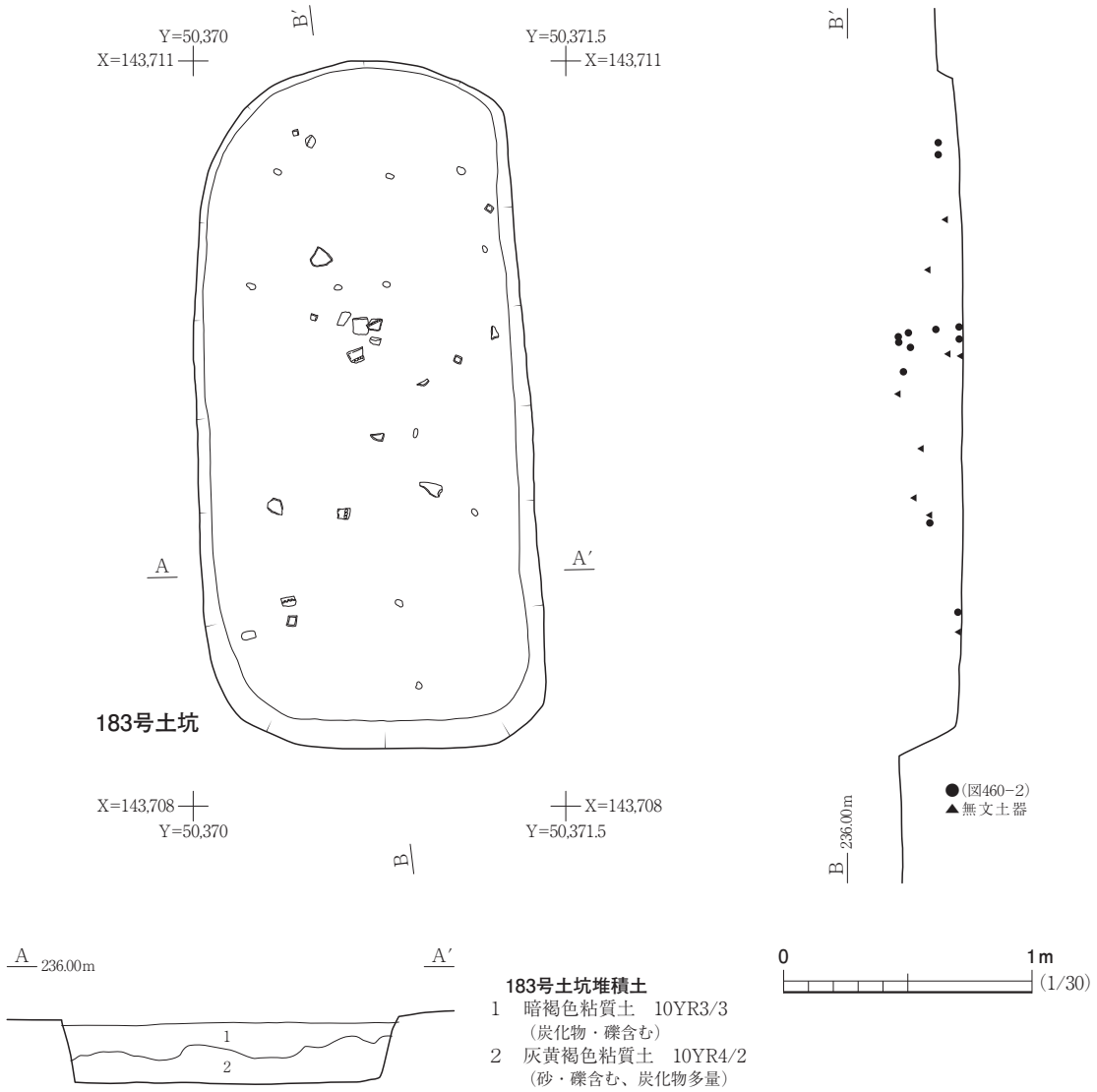


図459　土坑（24）

れるが、外面には炭化物などの付着は認められなかった。

本遺構は、出土した遺物から弥生時代終末期の土坑と思われる。堆積土の状況から、短期間のうちに埋めたものと思われ、土坑墓の可能性も考えられる。（神　林）

194号土坑　ＳＫ194（図458・460、写真358・435・437）

本遺構は、Ⅰ区のＬ・Ｍ－11グリッドに位置する。標高234.8ｍ付近の南側から北側へ下る緩斜面に立地する。検出面はＬⅤである。重複する遺構は228号住居跡で本遺構が古い。

堆積土は炭化物を多く含む灰黄褐色粘質土の単層である。層厚が薄く不明瞭だが、遺物の出土状況や炭化物の入り方から人為堆積と考えている。平面形は楕円形である。規模は、長径250㎝、短径225㎝である。周壁は20～30度で立ち上がる。壁高は18㎝である。底面は擂鉢状に掘り込まれている。遺物は南西側の底面から堆積土の下部より弥生土器が54点出土している。破片は、いず

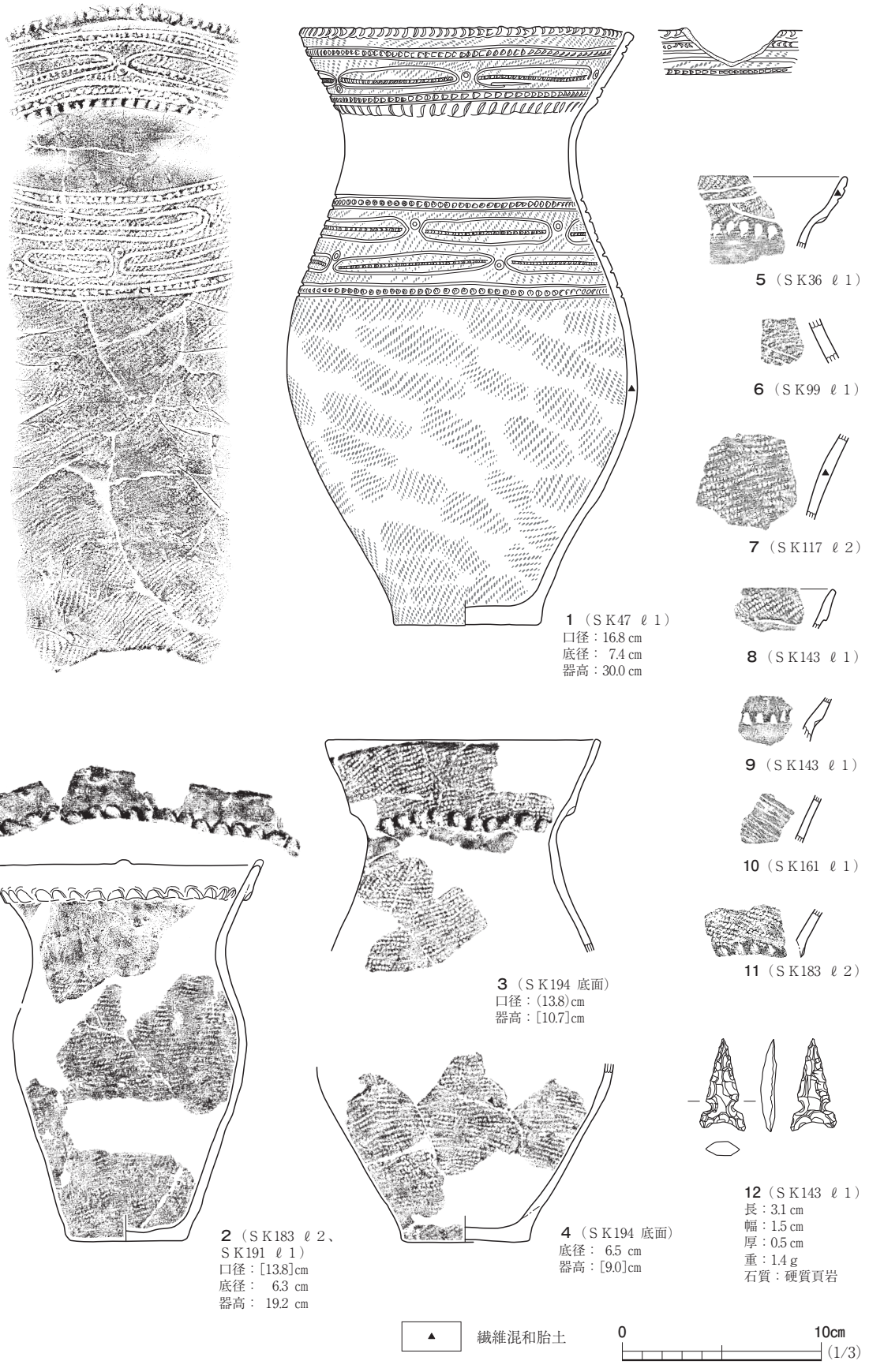
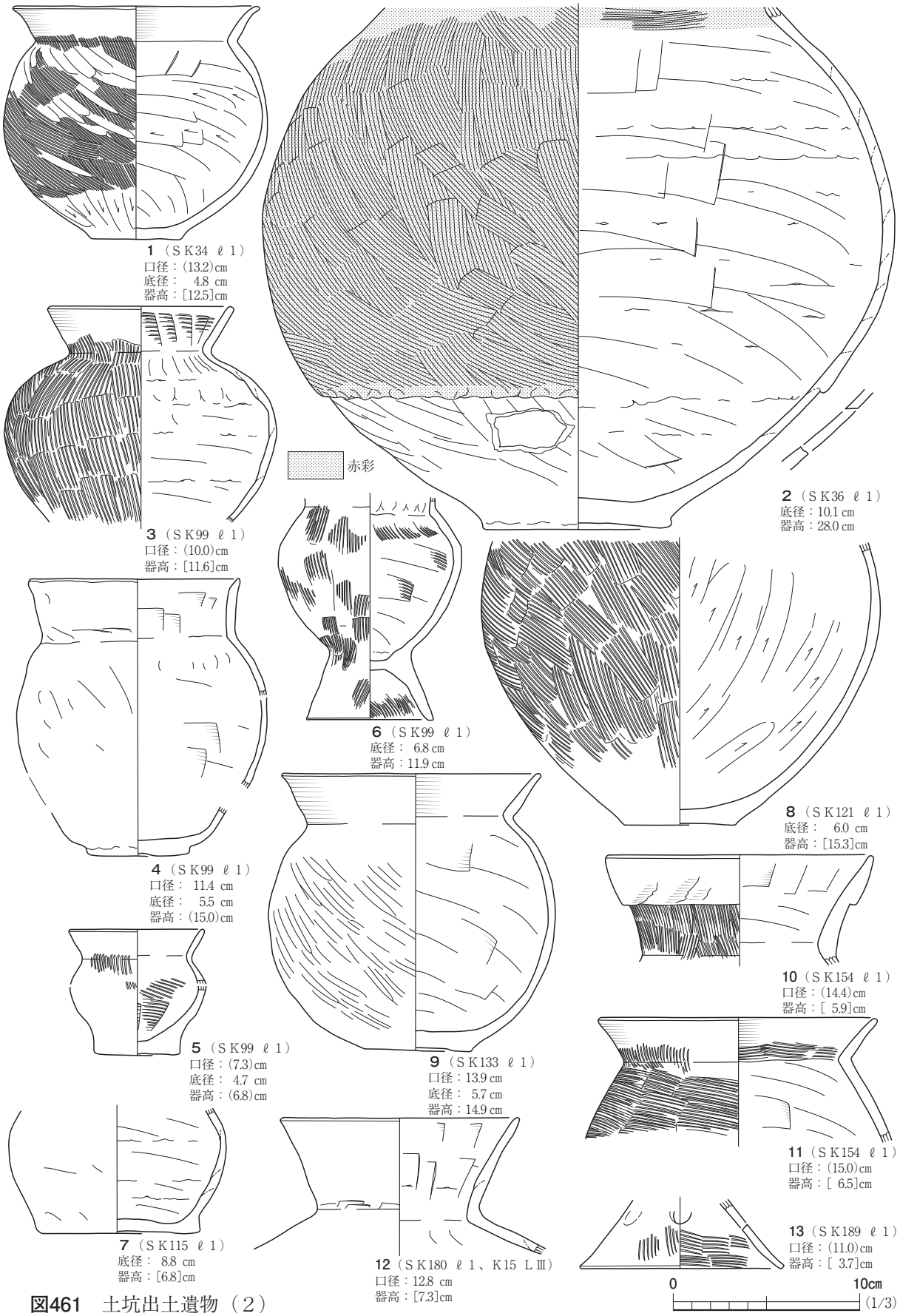


図460　土坑出土遺物（1）



1（ＳＫ34　ℓ１）
口径：(13.2)cm
底径：　4.8 cm
器高：[12.5]cm

2（ＳＫ36　ℓ１）
底径：10.1 cm
器高：28.0 cm

3（ＳＫ99　ℓ１）
口径：(10.0)cm
器高：[11.6]cm

4（ＳＫ99　ℓ１）
口径：　11.4 cm
底径：　5.5 cm
器高：(15.0)cm

5（ＳＫ99　ℓ１）
口径：(7.3)cm
底径：　4.7 cm
器高：(6.8)cm

6（ＳＫ99　ℓ１）
底径：　6.8 cm
器高：11.9 cm

7（ＳＫ115　ℓ１）
底径：　8.8 cm
器高：[6.8]cm

8（ＳＫ121　ℓ１）
底径：　6.0 cm
器高：[15.3]cm

9（ＳＫ133　ℓ１）
口径：13.9 cm
底径：　5.7 cm
器高：14.9 cm

10（ＳＫ154　ℓ１）
口径：(14.4)cm
器高：[5.9]cm

11（ＳＫ154　ℓ１）
口径：(15.0)cm
器高：[6.5]cm

12（ＳＫ180　ℓ１、Ｋ15　ＬⅢ）
口径：12.8 cm
器高：[7.3]cm

13（ＳＫ189　ℓ１）
口径：(11.0)cm
器高：[3.7]cm

図461　土坑出土遺物（２）

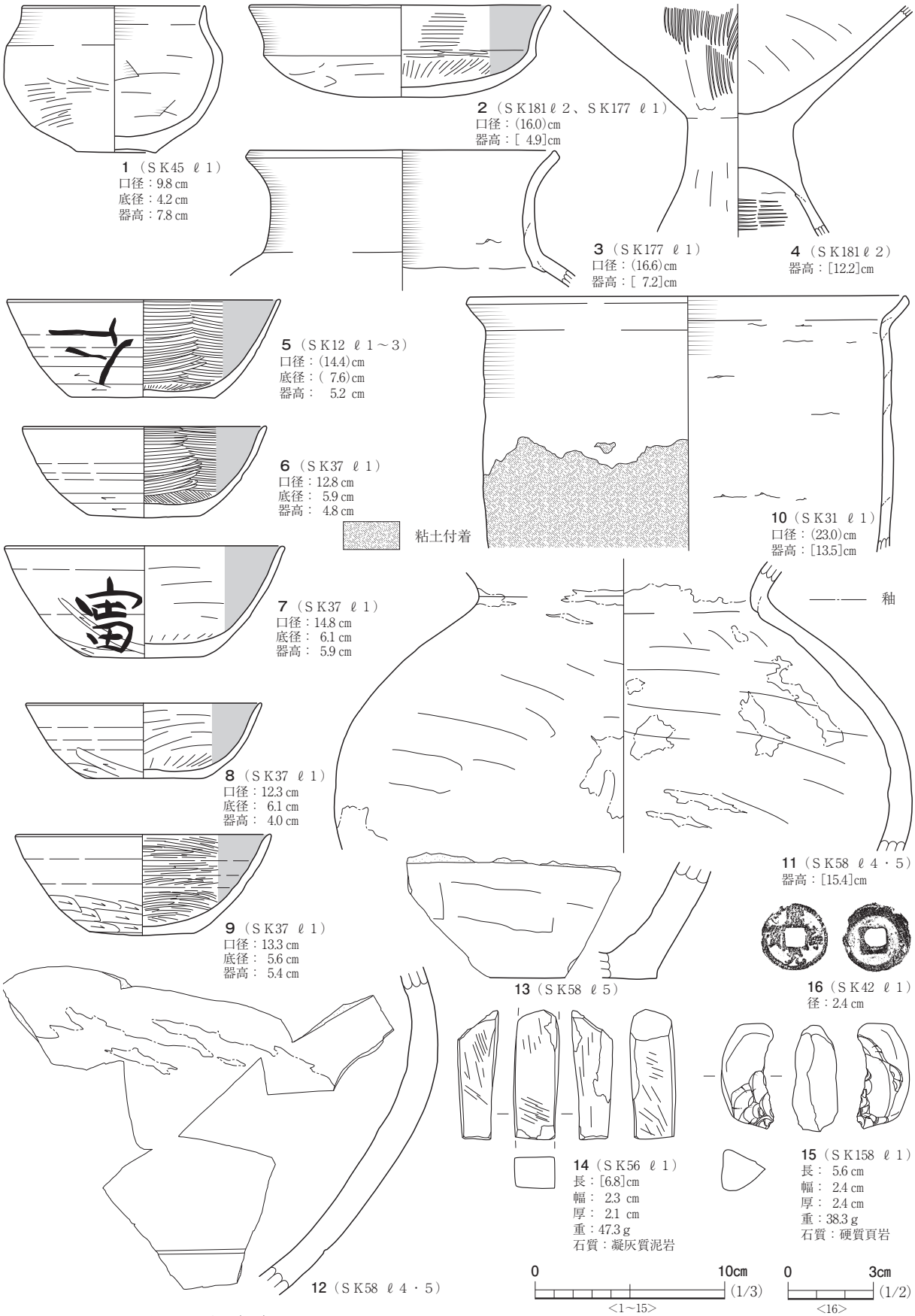


図462　土坑出土遺物（3）

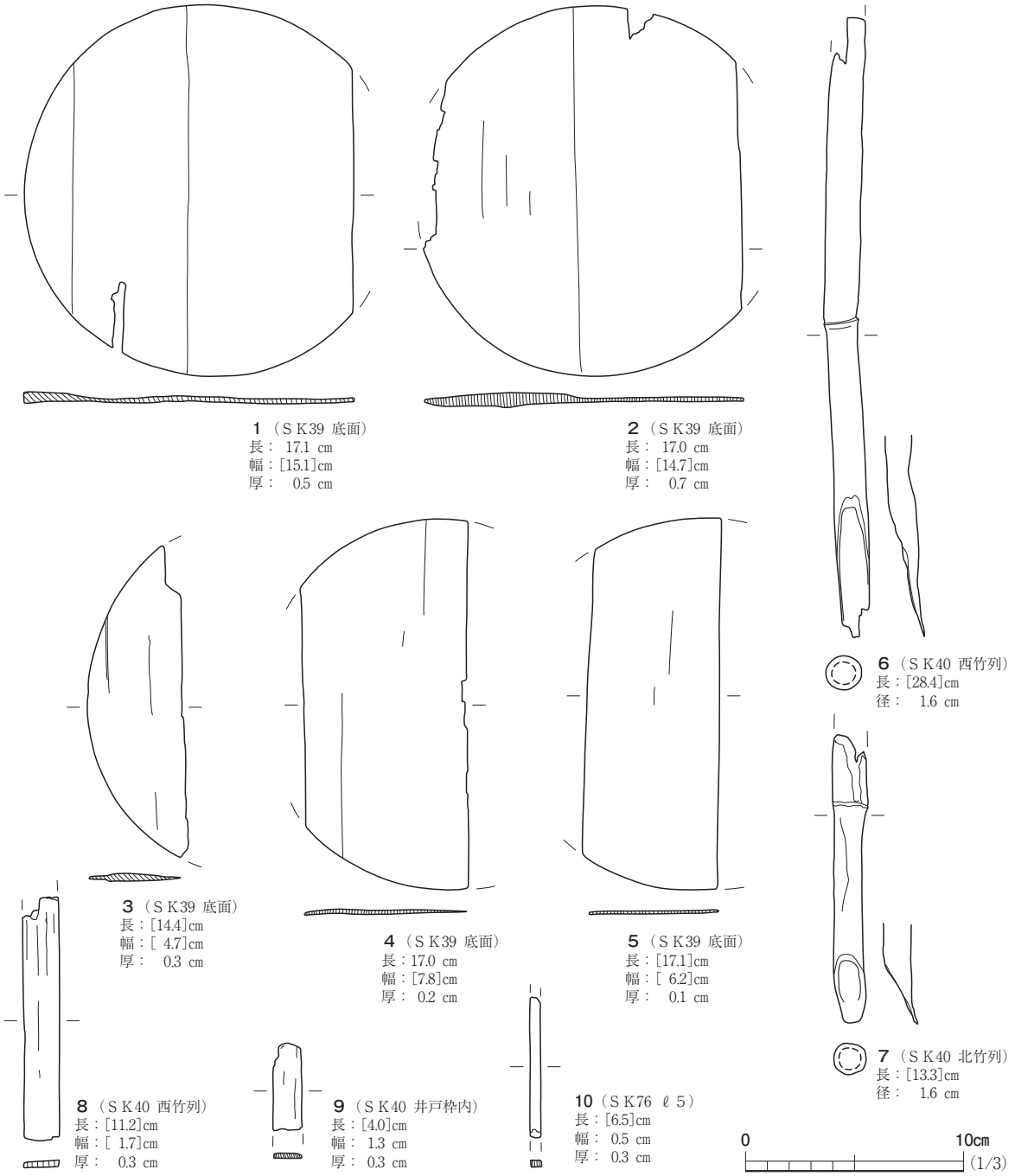


図463　土坑出土遺物（４）

れも同一個体である。図460－３・４は、口縁部下半から頸部にかけて段をもつ壺である。口縁部の一部と胴部下半が復元できた。口縁部は直線的に外反し、胴部がやや膨らむ器形と推定している。地文はＬの附加縄文を斜位方向に施文する。文様は、口縁部下の段に指頭圧痕を連続的に施し、頸部は無文帯となる。

土坑墓と推定しているが断定できない。所属時期は、検出面や出土した遺物などから弥生時代終末期と考えられる。（中　野）

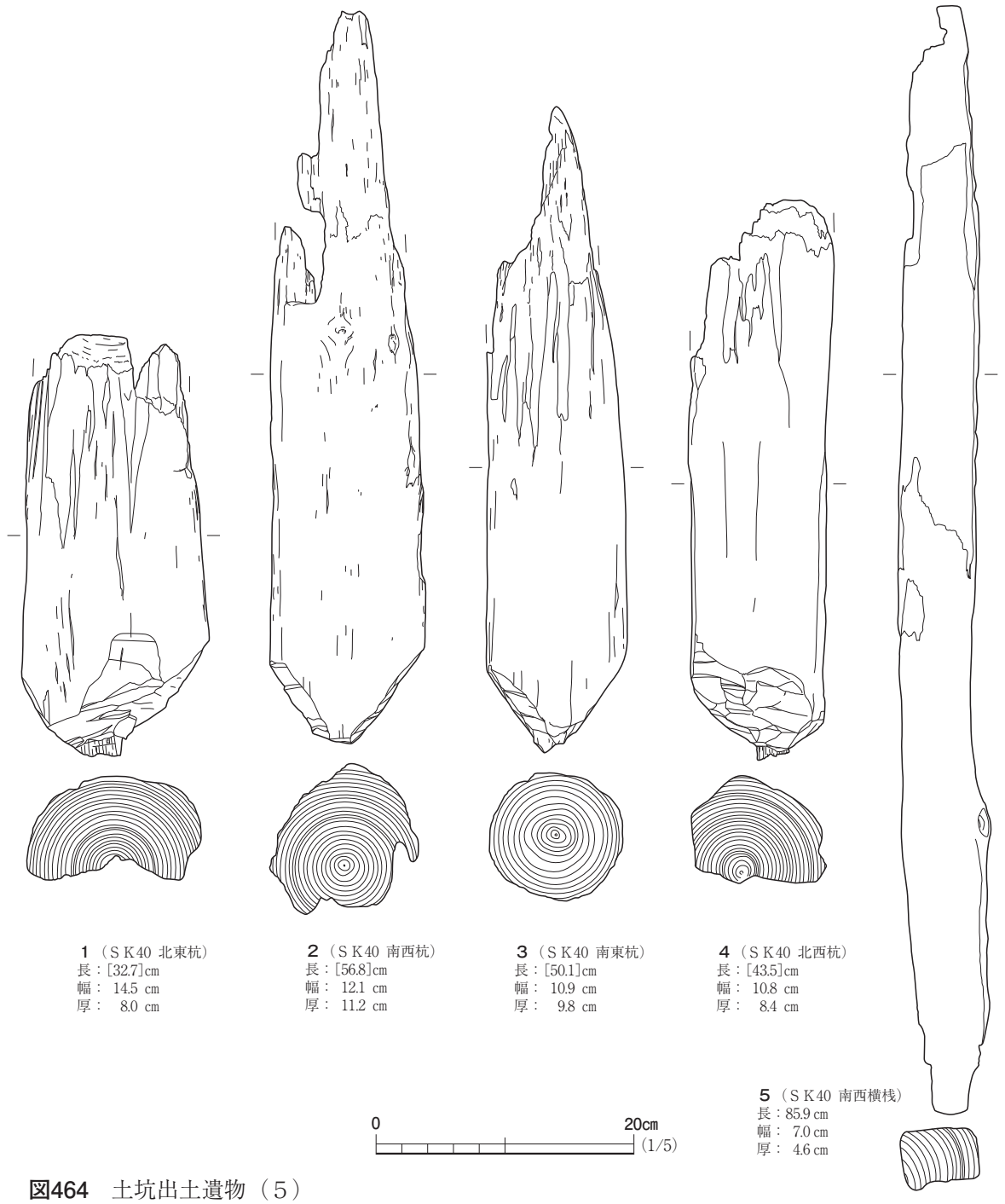


図464　土坑出土遺物（5）

第11節　土器埋設遺構

本遺跡では、4基の土器埋設遺構が検出された。いずれも、Ⅴ区の東へ向かって下る斜面の、東西約10m、南北約9mの範囲に位置し、この4基で土器埋設遺構群ともいえる一つのまとまりをなす。この4基の土器埋設遺構の西側の平坦面には住居跡群が、東側の谷部には畑跡が広がっており、これらは両者の中間に位置する。

いずれも、古墳時代後期～中世の面であるＬⅡｂの調査を終えた後、古墳時代前期の面まで重機で掘り下げ作業中あるいはその掘り下げ作業の事前に行ったトレンチ掘削中に検出された。いずれもまず完形に近い土器を検出し、それを契機に周辺の精査に取り掛かり土器埋設遺構であるとの判断に至ったものであり、土器が顔を出す以前にその掘形をあらかじめ検出することはできなかった。また、掘形と基盤層との区別がきわめて困難で、掘形として図示した線は、平面も断面もあくまで想定にすぎない程度のものである。

１号土器埋設遺構　ＳＭ01

遺　　構（図465、写真361）

本土器埋設遺構は、Ｖ区のＵ－20グリッド、標高235.1ｍで、トレンチの掘削中に検出された。重複する遺構はない。本遺構の南北にはいずれも古墳時代前期の畑跡が上下２面にわたって広がっているが、その下層の畑の検出面のさらに20㎝下に土器の最上部を確認した。本遺構が重機を用いたトレンチの掘削によって検出されたこともあり、掘り込み面がいずれかは明らかにできなかった。ただ、上述したように、土器埋設遺構の掘形埋土と基盤層の区別がほとんどできなかった。掘形の堆積土と基盤層の区別は難しかったが、周囲には灰褐色の砂質土が堆積していた。

掘形内部には、口頸部を打ち欠いて取り去り、体部にも打ち欠き穿孔を施した１点の壺が正位に据えられ、その上に口縁部を下にした鉢もしくは高杯が合わせ口に蓋をした状態で出土した。壺の上の土器は出土時には土圧でつぶれた状態であったが、壺は原形をとどめ、内部は空洞で、体部の穿孔箇所から流入した土が厚さ１㎝ほど底にたまっていただけであった。

遺　　物（図466、写真426・427）

図466－１は、土師器の鉢か高杯であるが、いずれにしても類例に乏しく、蓋の可能性も否定できない。底部から湾曲しながら立ち上がり口縁部に至り、全体の器形は半球形をなす。底部付近がやや突出するが、欠失しているのが底部か脚部か摘かは判断できない。内外面ミガキが施される。

２は、壺である。平底で球形の体部をもつ。口頸部は人為的に打ち欠かれ、割れ口はほぼ円形をなす。体部の最大径付近に外面から内面に向けた打ち欠き穿孔を１箇所有する。外面にミガキ、内面にヘラナデののちミガキが施される。作りは丁寧である。上に置かれていた土器の範囲が、色の違いとして残っている。

ま と め

口頸部を打ち欠いて取り去り、体部に打ち欠き穿孔した壺に、鉢か高杯を伏せ置いて蓋をした土器埋設遺構である。内部は打ち欠き部分から流入した土以外は空洞の状態で出土した。器面の荒れなど、内部に何か入れられていたような痕跡は、土器の内部の状況からはまったく看取されない。おそらく空洞の状態で埋設されたものと思われる。本土器埋設遺構の性格を考える上で重要な属性である。年代は、古墳時代前期である。　（青　山）

２号土器埋設遺構　ＳＭ02

遺　　構（図465）

本土器埋設遺構は、Ｖ区のＵ－20グリッド、標高236.0ｍで検出された。重機による掘削中に土器の上部が爪に当たったため、人力で周囲を掘り下げたところ、口頸部のない横倒しの壺を身とし、その口に土器の破片で蓋をした状態が確認されたため、土器埋設遺構と判断した。検出の際、重機の爪によって据えられた土器の上部を破損した。

掘形は色調や土質の違いとしては認識できなかったが、身とされた壺の周囲、特に口頸部の周辺に土器の破片と２点のこぶし大の礫が散乱していたことから、これらを含む範囲がおおむね掘形の範囲と思われる。このように解釈してよければ、掘形の平面形は楕円形で、その長軸とほぼ一致する方向に土器を横倒しに据え、蓋をして埋めたと考えられる。蓋とされた土器は、検出の際に大半を壊してしまったが、口頸部と体部上半を打ち欠いた土器を合わせ口にしていたと判断される。壺の内部には褐色砂質土が充満していた。内部の土はふるいにかけたが、出土遺物はなかった。

周辺から出土した土器を接合した結果、本土器埋設遺構から出土した壺は３点であることが分かった。身が図467－３、合わせ口に蓋とされていたのが１で、その他に図466－３が復元された。身である図467－３は、合わせ口周辺に散乱していた口頸部の破片が接合した。

遺　　物（図466・467、写真427）

図466－３は、平底で最大径を下位にもつ球胴、外傾する頸部に複合口縁をもつ。外面はハケメのち体部にミガキ、内面にヘラナデを施す。図467－２は、平底で最大径を下位にもつ球胴で、体部上位以上を欠失する。外面にミガキ、内面にヘラナデを施す。３は、平底で、最大径を下位にもつやや長胴でなで肩の体部、外傾する頸部に複合口縁部をもつ。外面はナデとミガキ、内面はナデを施すが輪積み痕を顕著に残す。内面の底部付近は、器面の荒れと剥落がみられる。

ま と め

楕円形の掘形に図467－３の壺の口縁部を打ち欠いて横倒しに据え、やはり口縁部を打ち欠いた同図１の壺を合わせ口の蓋とした土器埋設遺構である。接合関係から、身となっていた壺は口頸部をその場で打ち欠き、破片を掘形内に廃棄したと考えられる。一方、蓋となっていた壺は周囲からは口頸部の破片が出土しなかったことから、別の場所で打ち欠いたと考えられる。

本土器埋設遺構の不可思議な点は、身でも蓋でもない第三の壺が掘形内から破片の状態でほぼ１個体分出土したことである。一解釈ではあるが、身となった壺の口頸部をその場で打ち欠き、次いで蓋とすべく別の壺を打ち欠いたら全損してしまったため、その破片を掘形内に廃棄し、別の壺を用意し合わせ口にして一緒に埋め戻した、のではないだろうか。祭祀行為など何らかの理由で故意に壺を破砕し掘形内に廃棄した可能性も考えられる。

年代は、土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。　（青　山）

３号土器埋設遺構　ＳＭ03

遺　　構（図465、写真361）

本土器埋設遺構は、Ｖ区のＴ－20グリッド、標高236.6ｍで検出された。重機による掘削中に土器の上部が確認できたため、人力で周囲を掘り下げたところ、正位に置いた壺であることが判明し、土器埋設遺構と判断した。ただ検出の際、土器の上部を重機によって破損してしまった。

掘形は色調や土質の違いとしては認識できなかったが、暗褐色砂質土が堆積していた。検出当初は蓋の存在は認識できなかったが、検出の際に回収した破片を接合した結果、もう２点の土器が復元された。一つは口頸部と体部上半を欠失する壺、もう一つは底部から体部下位にかけての壺である。いずれも口頸部から体部上半を打ち欠いた壺で蓋としたものと考えられる。現場では蓋をされた状態を確認することはできなかったが、状況からは合わせ口であった可能性がある。壺の内部には褐色砂質土が充満していた。内部の土はすべてふるいにかけたが出土遺物はなかった。

遺　　物（図468・469、写真427・428）

本土器埋設土器遺構からは、上述のとおり３点の壺が出土した。これを図468－１・２、図469－１に示した。１は底面に木葉痕がある平底で、球形の体部をもつ。体部上半以上を欠失する。外面ミガキを施す。内面は磨滅が激しい。２は、平底で球形の体部をもつ。体部上半以上を欠失する。外面にミガキ、内面にヘラナデを施す。内面底部付近は、器面が荒れ、剥落が激しい。３は、平底で球胴である。外面にヘラミガキ、内面にヘラナデを施す。

ま と め

口頸部を打ち欠いた壺を正位に据え、口頸部と体部上半を打ち欠いた２個体の壺を合わせ口に蓋とした土器埋設遺構である。年代は、土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。　（青　山）

４号土器埋設遺構　ＳＭ04

遺　　構（図465、写真361）

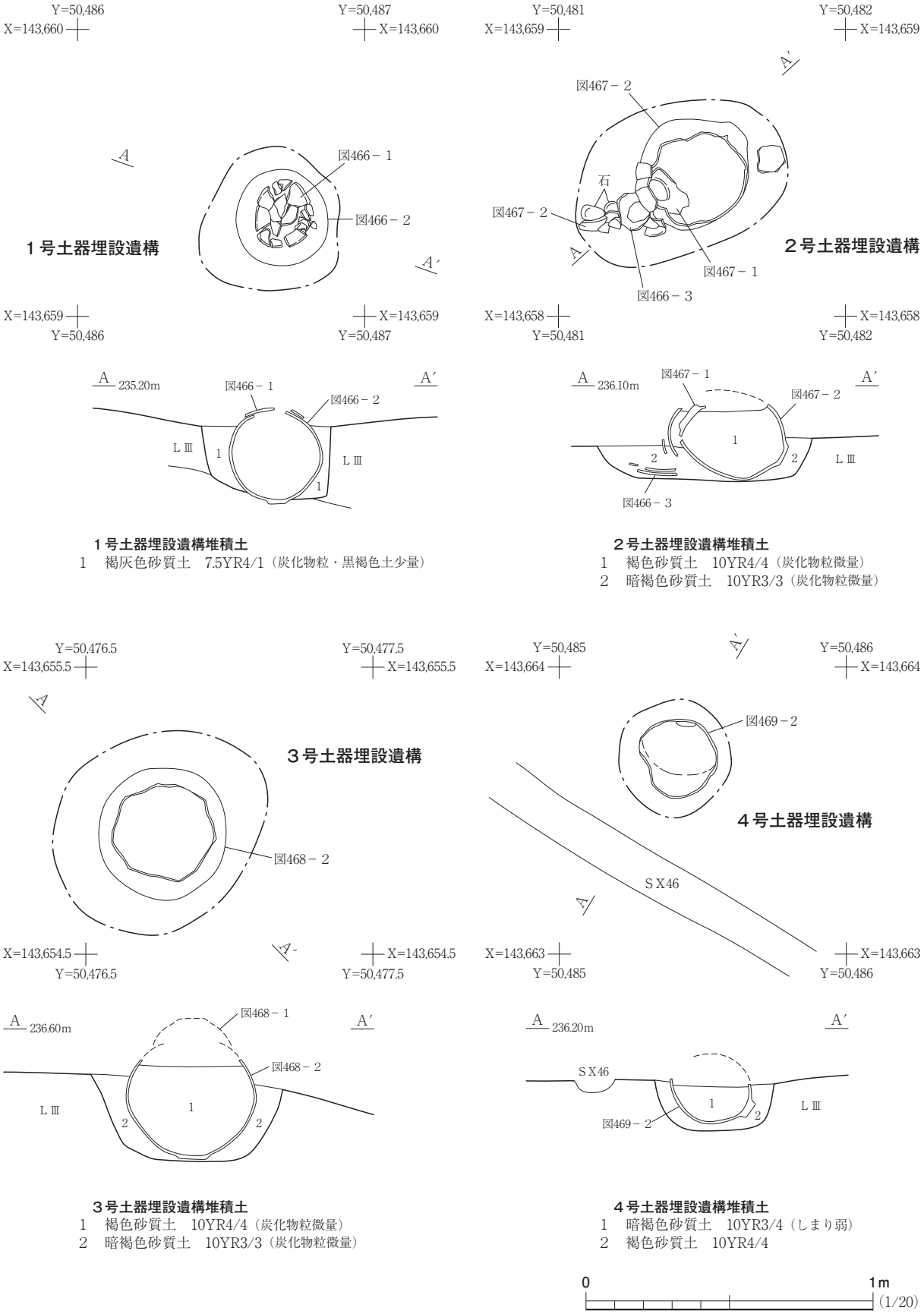
本土器埋設遺構は、Ｖ区のＵ－19グリッド、標高236.1ｍで検出された。重機による掘削中に土器の上部が確認できたため、人力で周囲を掘り下げたところ、横に倒して置いた状態の壺であることが判明し、土器埋設遺構と判断した。検出の際、上部を破損した。

掘形は色調や土質の違いとしては認識できなかったが、暗褐色の砂質土が堆積していた。壺の内部には褐色砂質土が充満していた。内部の土はすべてふるいにかけたが出土遺物はなかった。

重機によって破損した破片の中には別個体の壺の底部が含まれており、それによって壺の口をふさいでいたものと思われる。

遺　　物（図469、写真428）

図469－２は、身として据えられていた壺である。平底で最大径を中ほどより下にもつやや長胴の体部に短く外傾する素口縁の壺である。外面にハケメのちミガキ、内面にヘラナデを施す。３は



1号土器埋設遺構堆積土
1　褐灰色砂質土　7.5YR4/1（炭化物粒・黒褐色土少量）

2号土器埋設遺構堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物粒微量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒微量）

3号土器埋設遺構堆積土
1　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物粒微量）
2　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒微量）

4号土器埋設遺構堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/4（しまり弱）
2　褐色砂質土　10YR4/4

図465　土器埋設遺構

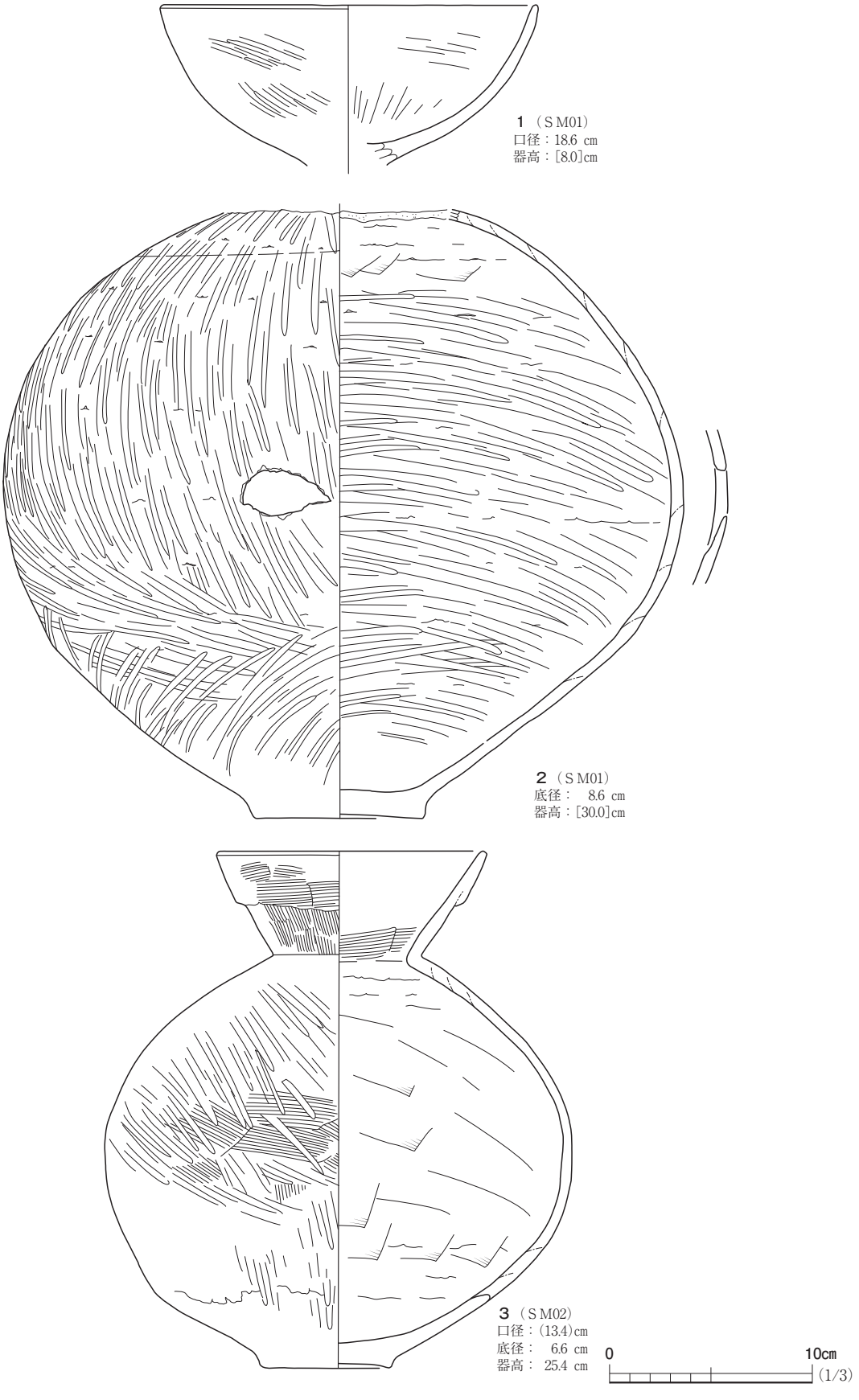


図466　土器埋設遺構出土遺物（１）

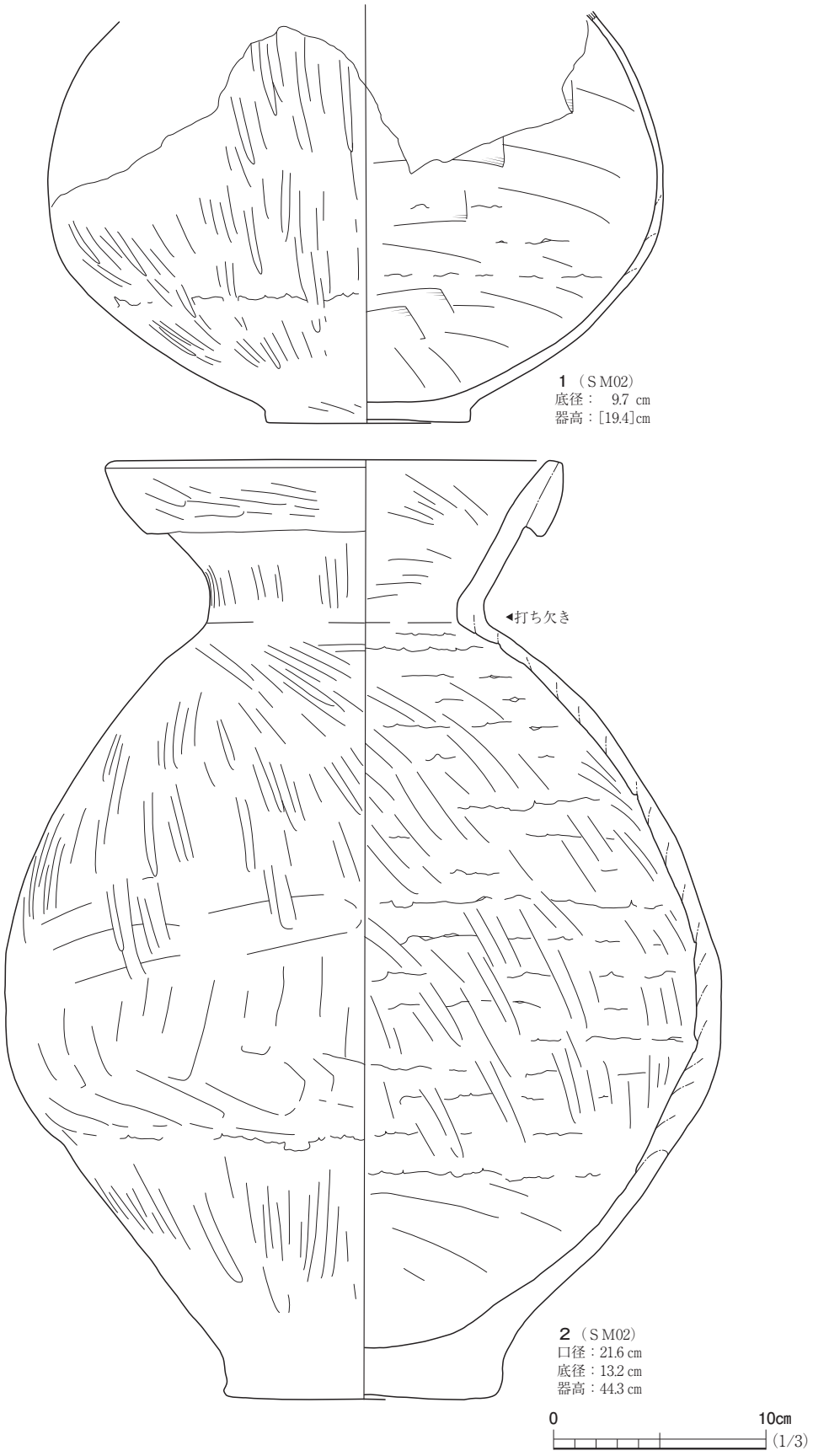


図467　土器埋設遺構出土遺物（２）

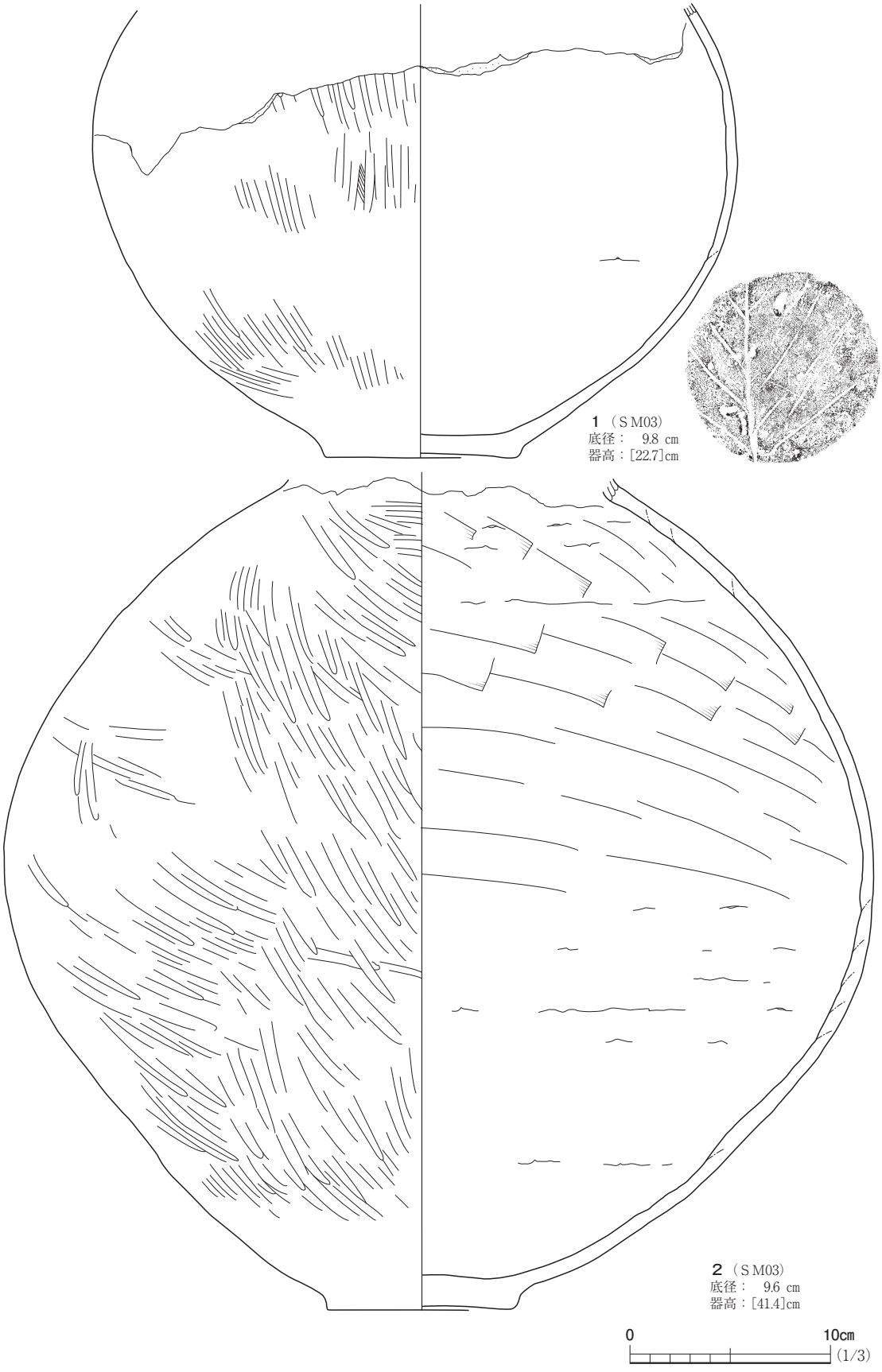


図468　土器埋設遺構出土遺物（3）

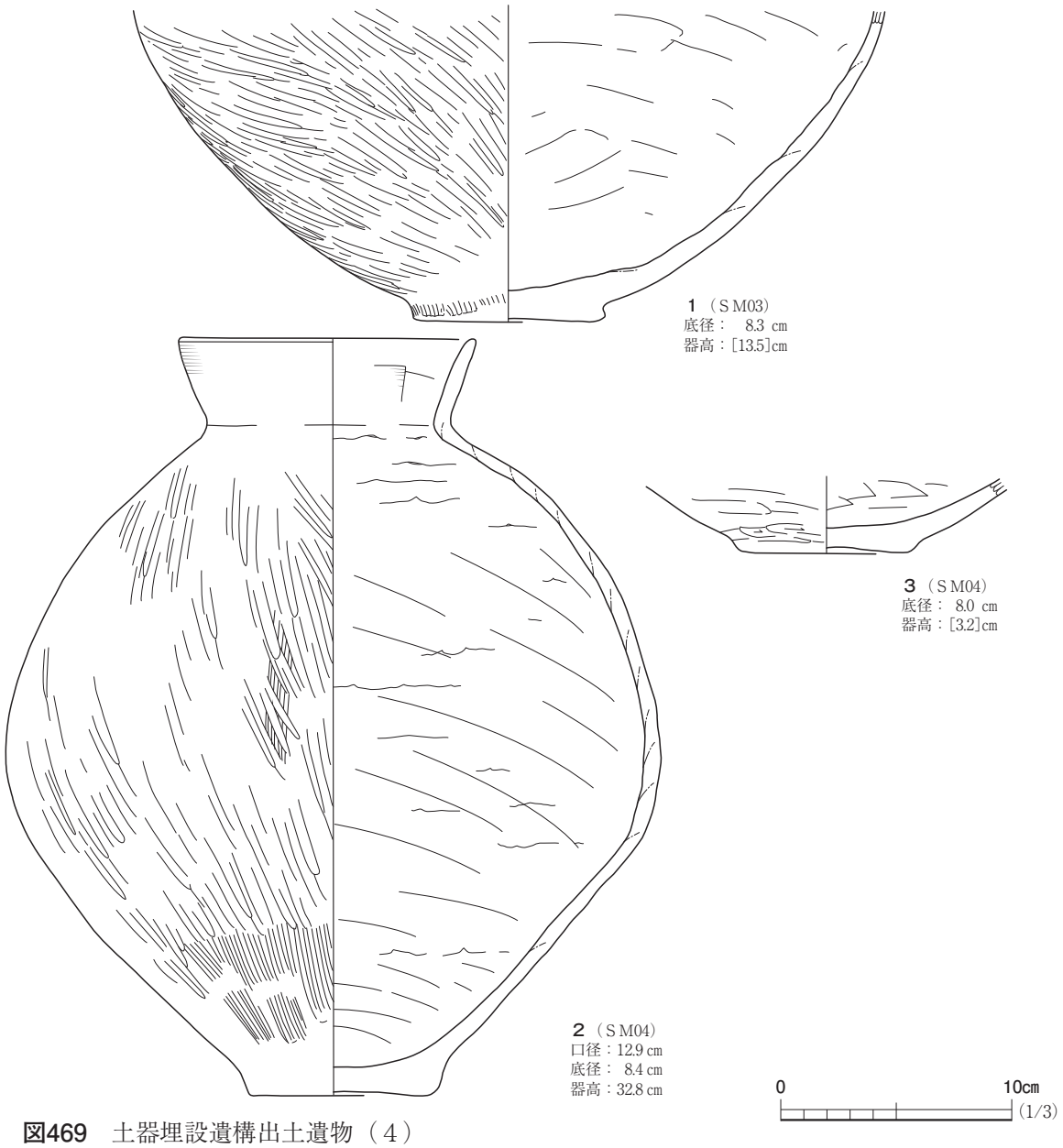


図469　土器埋設遺構出土遺物（4）

平底の底部付近のみの破片である。外面にハケメとミガキ、内面にヘラナデを施す。

ま と め

土器を横倒しにした土器埋設遺構で、検出時に破損し回収した破片に壺の底部が含まれているため、これを蓋としていた可能性がある。土器の特徴から古墳時代前期に位置づけられる。（青　山）

第12節　焼 土 遺 構

1号焼土遺構　ＳＧ01

遺　　構（図470）

本焼土遺構は、Ⅰ区のＯ－14グリッド、標高236.7ｍ、10号住居跡の堆積土上面で検出された。

焼土化した範囲は、南北49㎝、東西29㎝の楕円形で、深さ３㎝に及んでいた。周囲からはロクロ土師器の杯の破片が１点出土しているが、10号住居跡に伴うものと考えられる。年代は、10号住居跡の年代である平安時代の９世紀以降である。　（中　野）

２号焼土遺構　ＳＧ02

遺　　構（図471・472）

本焼土遺構は、Ⅰ区のＬ－12グリッド、標高235.0ｍ、237号住居跡の下層で検出された。

焼土化した範囲は、南西から北東方向に長軸をもつ64×78㎝の楕円形で、周囲よりやや盛り上がり、深さ７㎝にわたって焼土化した範囲が及んでいた。遺物は出土しなかった。弥生時代終末期の237号住居跡の下層で検出されたことから、それ以前のものである。　（中　野）

３号焼土遺構　ＳＧ03

遺　　構（図470）

本焼土遺構は、Ⅴ区のＶ－17グリッド、標高235.8ｍ、畑跡Ｈ群に属する42号畑跡の下層で検出した。古墳時代前期の住居跡が密集する地点の東側に位置する谷部にあり、上層には古墳時代前期の畑跡が二面にわたって検出されていた。その調査を終え、さらに下層の遺構の有無を確認するため重機で掘り下げたところで検出した。

焼土化した範囲は、南北に長い77×45㎝の楕円形で、焼土面の中心部がやや窪んで炭化物を多く含む黒褐色の砂質土が堆積していた。焼土化した範囲は深さ３㎝に及んでいた。遺物は出土しなかった。古墳時代前期の畑跡の下層で検出されたことから、それ以前のものである。　（青　山）

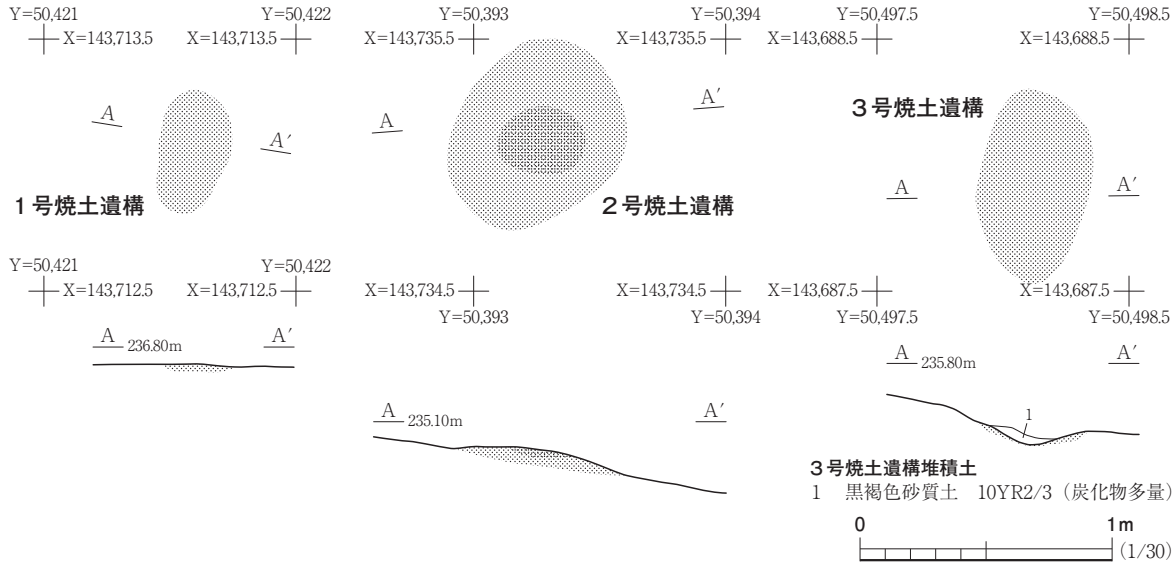


図470　焼土遺構

第13節　遺物包含層

本遺跡の調査区の東部、Ⅴ区には、遺物包含層が１箇所形成されていた。古墳時代前期の住居跡が密集する地点の東側、北東から南西に向かって緩やかに下る谷部の西側斜面で、範囲は南北約100ｍ、東西約40ｍである。グリッドでいえば、Ｒ－23、Ｓ－21～24、Ｔ－20～24、Ｕ－17～21、Ｖ－15～21、Ｗ－15～19、Ｘ－16～22で、上下２層の畑跡Ｇ・Ｈ群の範囲とほぼ重なる。

遺物が含まれていた層は、基本土層のＬⅢａに対応する層である。谷部ではＬⅢａがさらに①～⑦の７層に細分され、そのうちのＬⅢａ④とＬⅢａ⑥に遺物を含み、両層の間には畑跡Ｈ群を埋没させた無遺物層ＬⅢａ⑤をはさむ。ＬⅢａ④は畑跡Ｈ群の耕作土でもある。

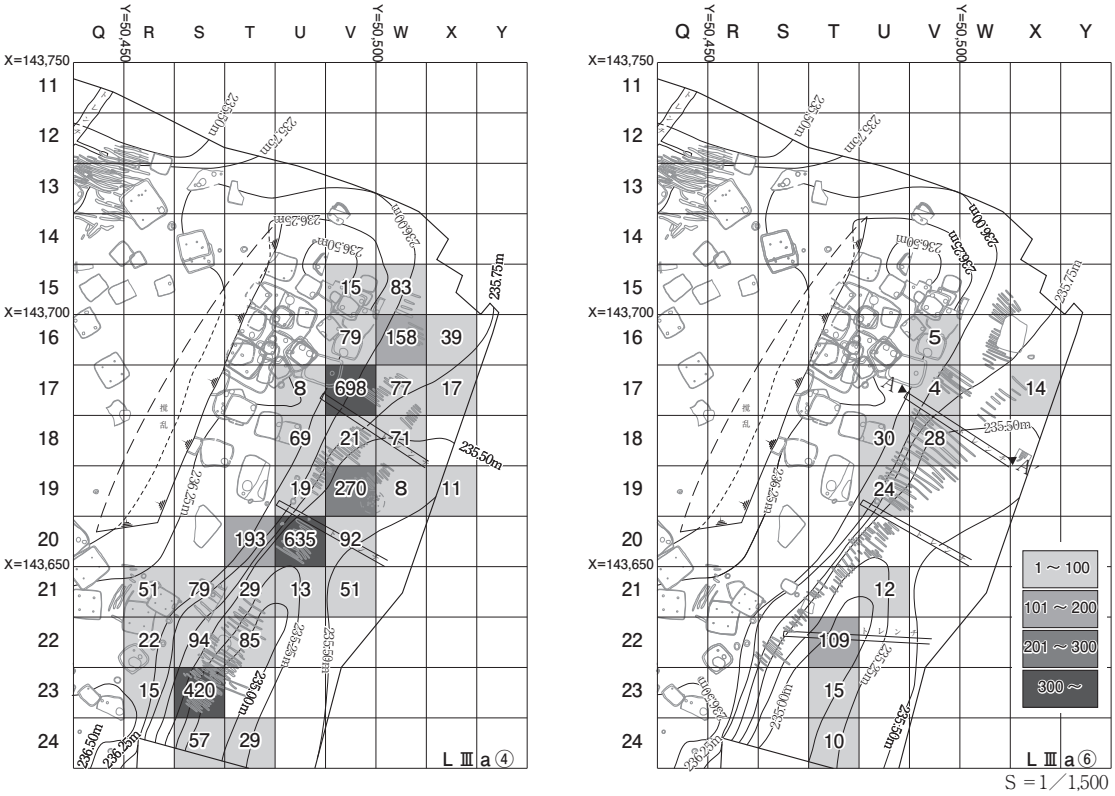
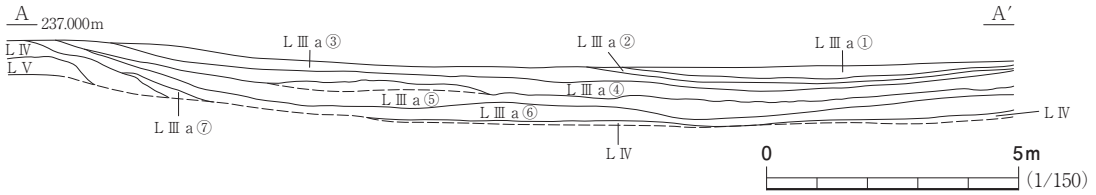


図471　遺物包含層グリッド別土器出土点数



遺物包含層

ＬⅢａ①　褐色砂質土　10YR4/4
ＬⅢａ②　暗褐色砂質土　10YR3/4（炭化物粒微量）
ＬⅢａ③　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物粒微量）
ＬⅢａ④　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭化物粒少量、畑跡耕作土）
ＬⅢａ⑤　褐色砂質土　10YR4/4（炭化物粒微量、上部は砂層）
ＬⅢａ⑥　暗褐色砂質土　10YR3/3（畑跡耕作土）
ＬⅢａ⑦　暗褐色砂質土　10YR3/4

図472　遺物包含層断面図

遺物包含層の出土遺物は、グリッドごとに層位を付してとりあげた。それを集計したのが図471である。ＬⅢａ④と⑥を比較すると、前者の方が遺物の量、範囲とも後者を上回っている。またＬⅢａ④には遺物が多く出土する箇所がＳ－23、Ｕ－20、Ｖ－17グリッドの３箇所認められる。

遺　　物（図473～478、写真360・361・428～432）

本遺物包含層から出土した遺物を、図473～478に示した。

図473－１は弥生土器である。平底で、最大径を体部中ほどにもつ長胴の壺と考えられる。体部の上位を欠失する。外面はＲＬの撚糸の地文のみであるが、体部最大径のやや下に幅３㎝前後の無文帯を巡らせる。撚糸は底部付近で縦走し、それ以外はおおむね斜行する。

２・３は、土師器の高杯である。２は、稜線をもたない浅い椀形の杯部と、裾部を欠失するが「八」字に開く脚部をもつ。内面の底部付近が剥落する。３はつぶれた半球形の体部に長く外反する口縁部をもつ。脚部を欠失する。調整はいずれも丁寧で、内外面に赤彩を施す。

４から12は、土師器の器台である。いずれも受け部から脚部内面頂部に貫通孔を穿つ。このうち４～10は「八」字に開く脚部をもち、11・12はやや内湾する台付甕の台部と同様の脚部をもつ。５は他の器台に比して脚頂部が太く脚部の円窓の径がやや小さい。４・６は外面と受け部内面に、７はこれに加えて脚部内面にも赤彩を施す。

13～15は、土師器の器台もしくは高杯である。いずれも「八」字に開く脚部をもつ。14は内外面に、15は外面と受け部内面の他、脚部内面の裾部にのみ赤彩が施される。脚頂部はやや太く、脚部の円窓がやや小さい。

16～21は、土師器の鉢である。いずれも平底で、16は短く外傾する口縁部をもち、17～19は無頸、20は口縁端部をごく短く反らせるものである。21は、口縁部を欠失する。

22は脚付きの鉢である。口縁部と脚部の裾を欠失する。脚部内面を除く内外面に赤彩を施す。

23はミニチュアで、鉢を模したものである。内外面に赤彩を施す。

図474－１～７は、土師器の鉢である。１は、直線的に長く外傾する口縁部をもつ。２は、つぶれた半球形の体部に平底を削りだし、端部を内面側に屈曲させた口縁部をもつ。全体にはやや浅い器形をもつ。混和材の少ない胎土である。３は、凹み底のややつぶれた半球形の体部に、頸部外面に段を有する口縁部を載せるが、口縁部は大半を欠失する。４は、凹み底で、ややつぶれた球胴に短く外傾する口縁部をもつ。外面にハケメのちミガキ、内面にヘラナデ、底面を除く外面と口縁部内面に赤彩を施す。５・６は、平底で、ややつぶれた球胴に短く外反する口縁部をもつ。調整は、５が外面にハケメのちナデ、６が体部上半にナデ、下半にケズリ、内面はいずれもヘラナデである。いずれも底面を除く外面と口縁部内面に赤彩を施す。いずれも外面に薄く炭化物が付着する。７・８は、５・６と同じ器形で、これらより法量が大きい。７は口縁部と体部上半の一部からの復元で、外面にナデ、内面にヘラナデのちミガキ、外面と口縁部内面に赤彩を施す。外面に薄く炭化物が付着する。８は、外面にハケメとナデ、内面にヘラナデを施す。

９・10は、土師器の小型の素口縁壺である。いずれも平底で、球胴である。口縁部は、９が外

傾、10がやや長く外反する。調整はいずれも、外面にナデ、内面にヘラナデを施す。

11は土師器の素縁壺である。口縁部と体部上半の一部が遺存する。口縁部はきわめてゆるやかに外反する。外面と口縁部内面にハケメのち部分的なミガキ、体部内面にヘラナデを施す。

図475－１は土師器の壺である。素縁と思われる。口縁端部を欠失し、平底に球形の体部、緩やかに外反する口縁部をもつ。外面と口縁部内面にハケメ、体部内面にヘラナデを施す。

２は、土師器の直口壺である。体部の上下は接合しないが、図上復元した。凹み底にややつぶれた球形の体部、長く外傾する口頸部をもつ。外面底部付近にケズリを施す他は丁寧なミガキ、口縁部内面は細目のハケメのちミガキ、体部内面は下半にハケメ、上半にヘラナデを施す。

３は、土師器の小型の直口壺である。平底でややつぶれた球形の体部、長く外傾する口頸部をもつ。外面と口縁部内面にミガキ、体部内面にナデを施す。体部最大径付近を焼成後穿孔する。

４・５は、土師器の複合口縁壺である。いずれも平底の球胴で、外傾あるいは外反する口縁部の外面に肥厚させる。４は外面底部付近にケズリの他はミガキ、内面は口縁部にミガキ、体部にヘラナデを施す。５は、外面ケズリのちミガキ、内面にヘラナデのちミガキを施す。

６～８は、土師器の壺である。いずれも口縁部を欠失する。６・７は平底で球胴、８は、凹み底で、最大径を下位に有するつぶれた球形の体部である。

図476－１～５は、土師器の甕である。いずれも平底で球胴、「く」字口縁をもつ。外面調整は、１～３がハケメ、４・５はナデ、内面はいずれもヘラナデで、２・４は中位にケズリを施す。４・５は内外面に炭化物が薄く付着し、４は体部下半の外面が二次被熱のため薄く剥落する。

図477－１～６は、土師器の台付甕である。口縁部が遺存するものはいずれも「く」字口縁で、体部上位に最大径をもつ。１～４・６は体部と台部の外面にハケメを施し、２～４は口縁部にもハケメを施す。５は、外面にナデを施す。内面調整は、１がミガキ、２～４が口縁部ハケメで体部ヘラナデ、３はこれに加えて体部の下位にケズリ、５がヘラナデを施す。

図478－１～４は、土師器のＳ字状口縁台付甕である。５は、体部と台部のごく一部しか遺存しないが、他のＳ字甕と調整の特徴が一致することからＳ字甕と判断される。１・２は接合しないが、胎土、焼成、色調がよく似ており同一個体と思われる。直線的に開く台部、上位に最大径がある張りのある体部、Ｓ字状に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部の内面側には浅い沈線状のくぼみが巡り、頸部の外面には深い沈線状のくぼみが巡る。台部の上端は閉じ、そこに体部を付加して成形していることが破断面から観察される。台部の裾は内面側に折り曲げられて肥厚し、内面の天井部周縁には金雲母などの混和材を多く含む胎土が塗りつけられている。体部から台部にかけての外面には深いハケメが、肩部より上が右さがり、肩部より下が左さがりに施される。内面は体下部に輪積み痕を残す他は平滑に調整され、器壁は薄い。外面の一部には、炭化物が付着する。３は、口縁部から体部上半の破片からの復元である。体部外面にハケメ、内面は磨滅するが平滑である。４は口縁部付近の小片からの図上復元である。体部外面に深いハケメを施す。５は外面にやはり深いハケメを施し、台部内面の天井に混和材を多く含んだ胎土が塗りつけられている。

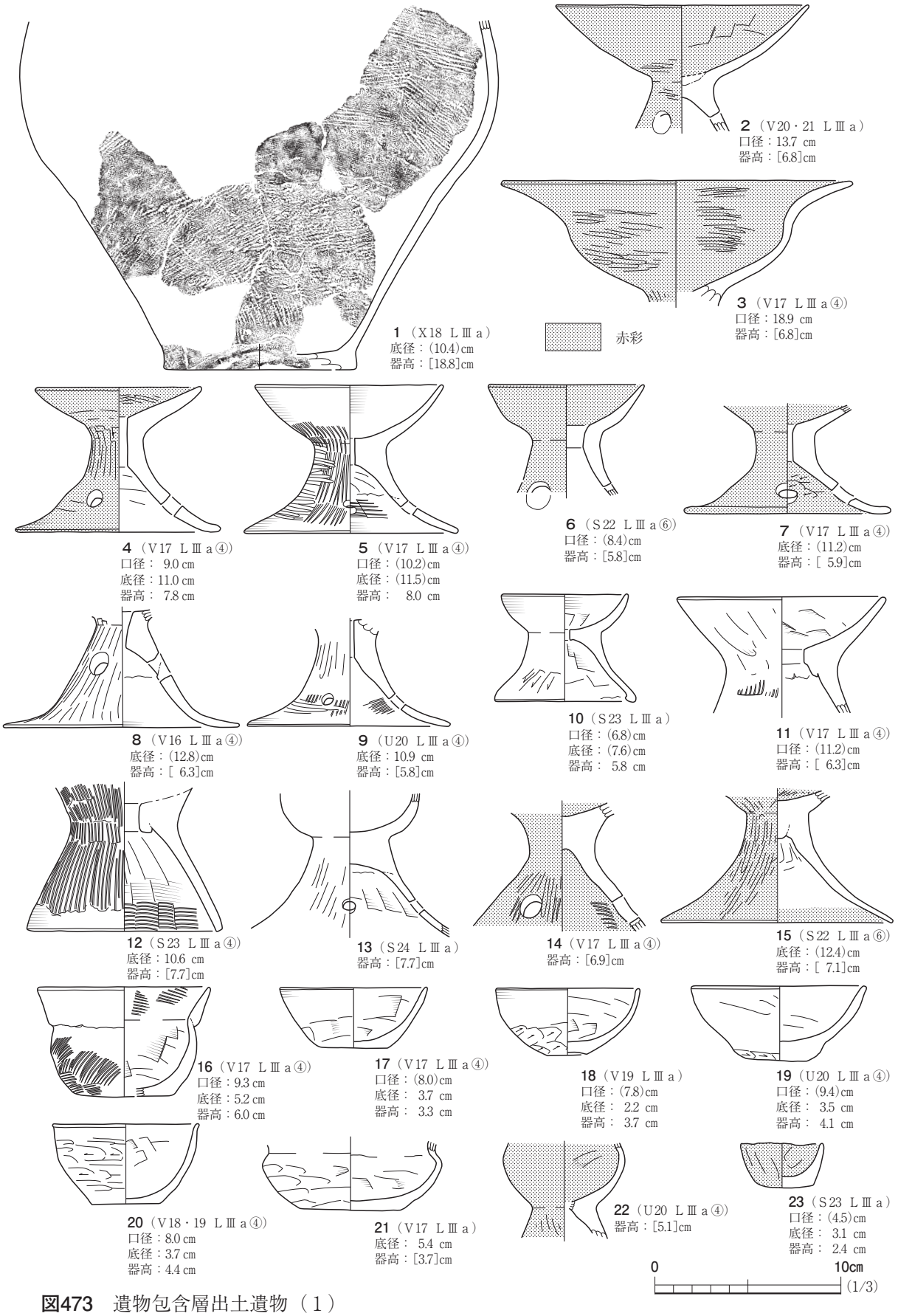


図473　遺物包含層出土遺物（１）

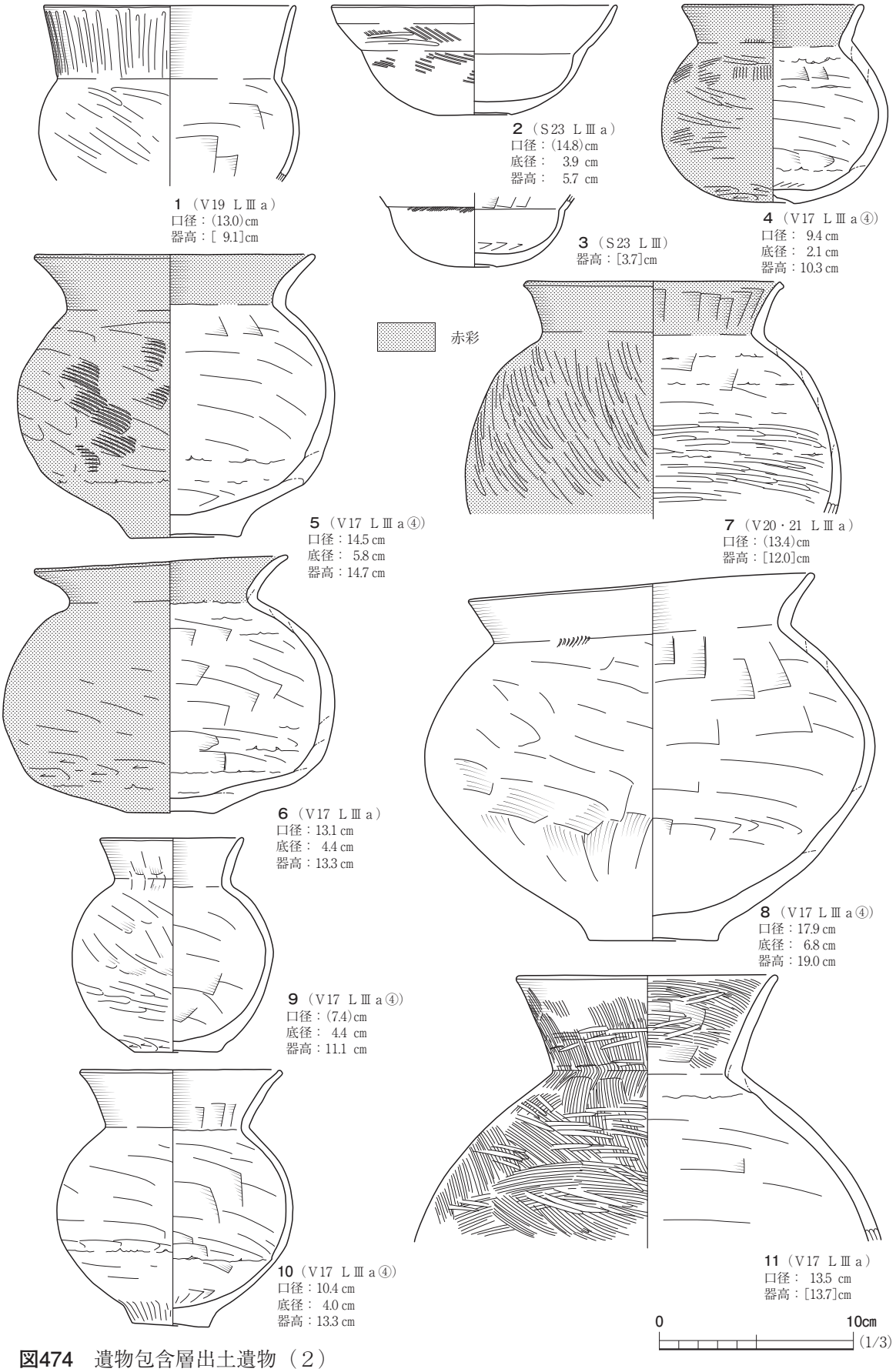


図474　遺物包含層出土遺物（2）

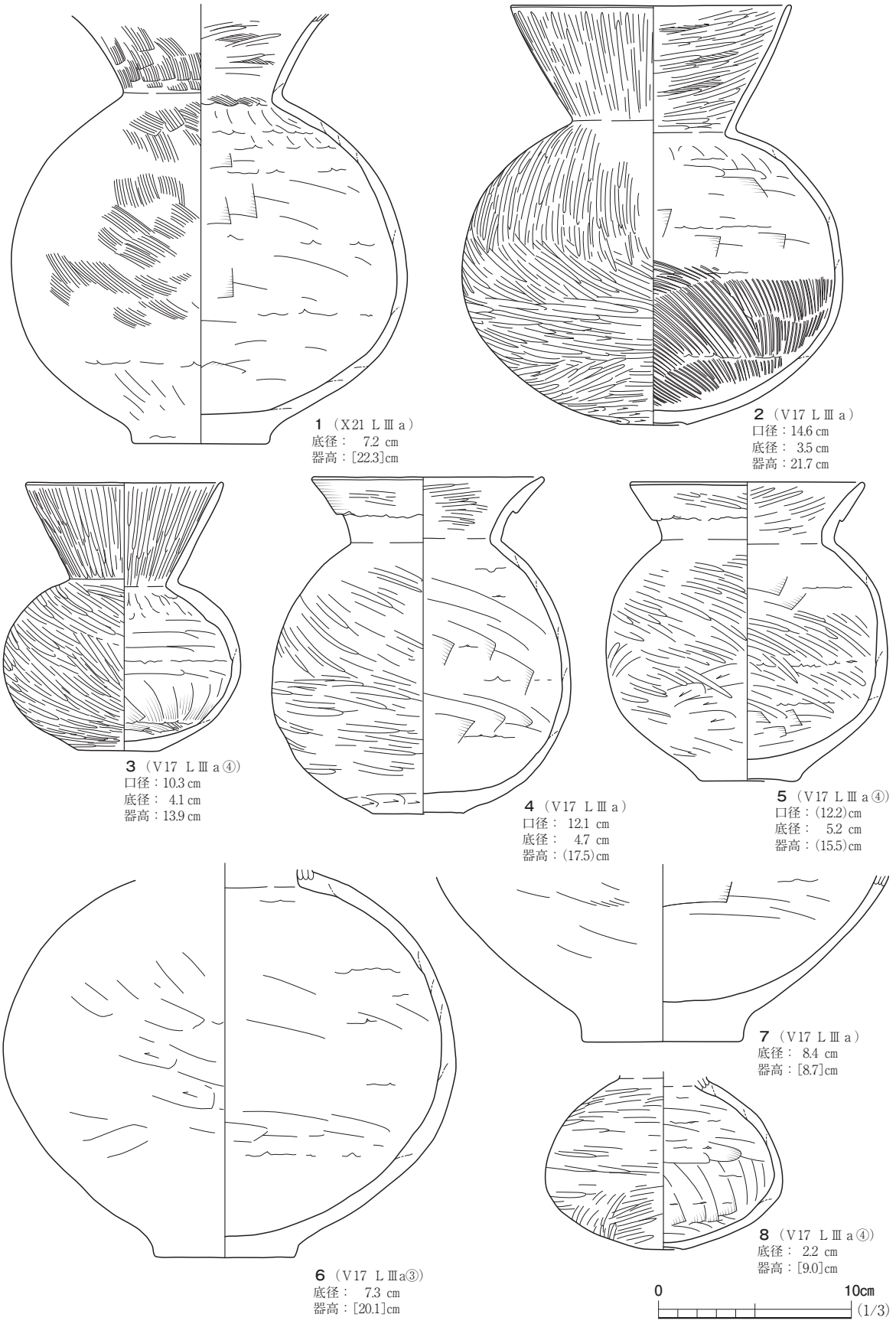


図475　遺物包含層出土遺物（3）

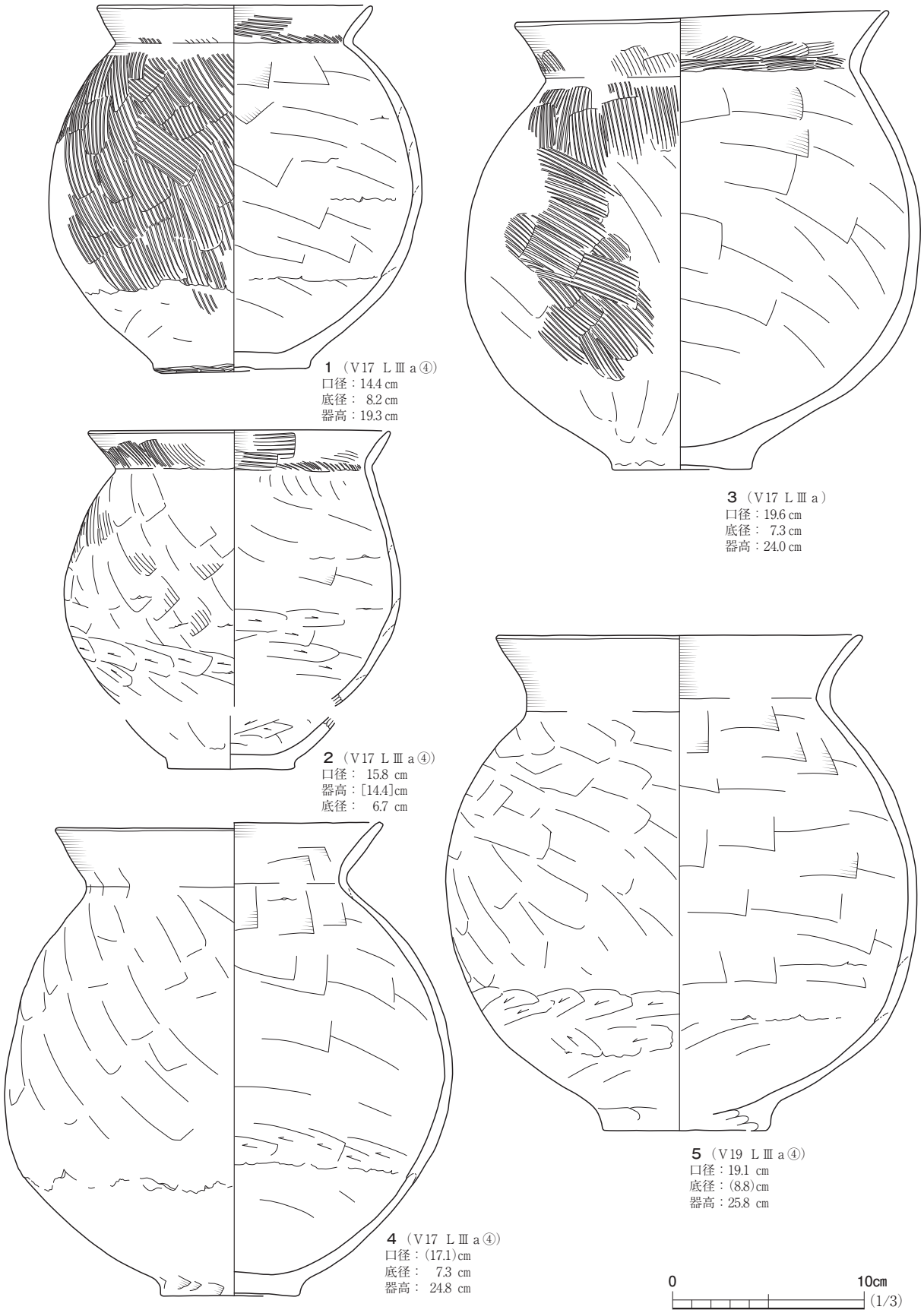


図476　遺物包含層出土遺物（4）

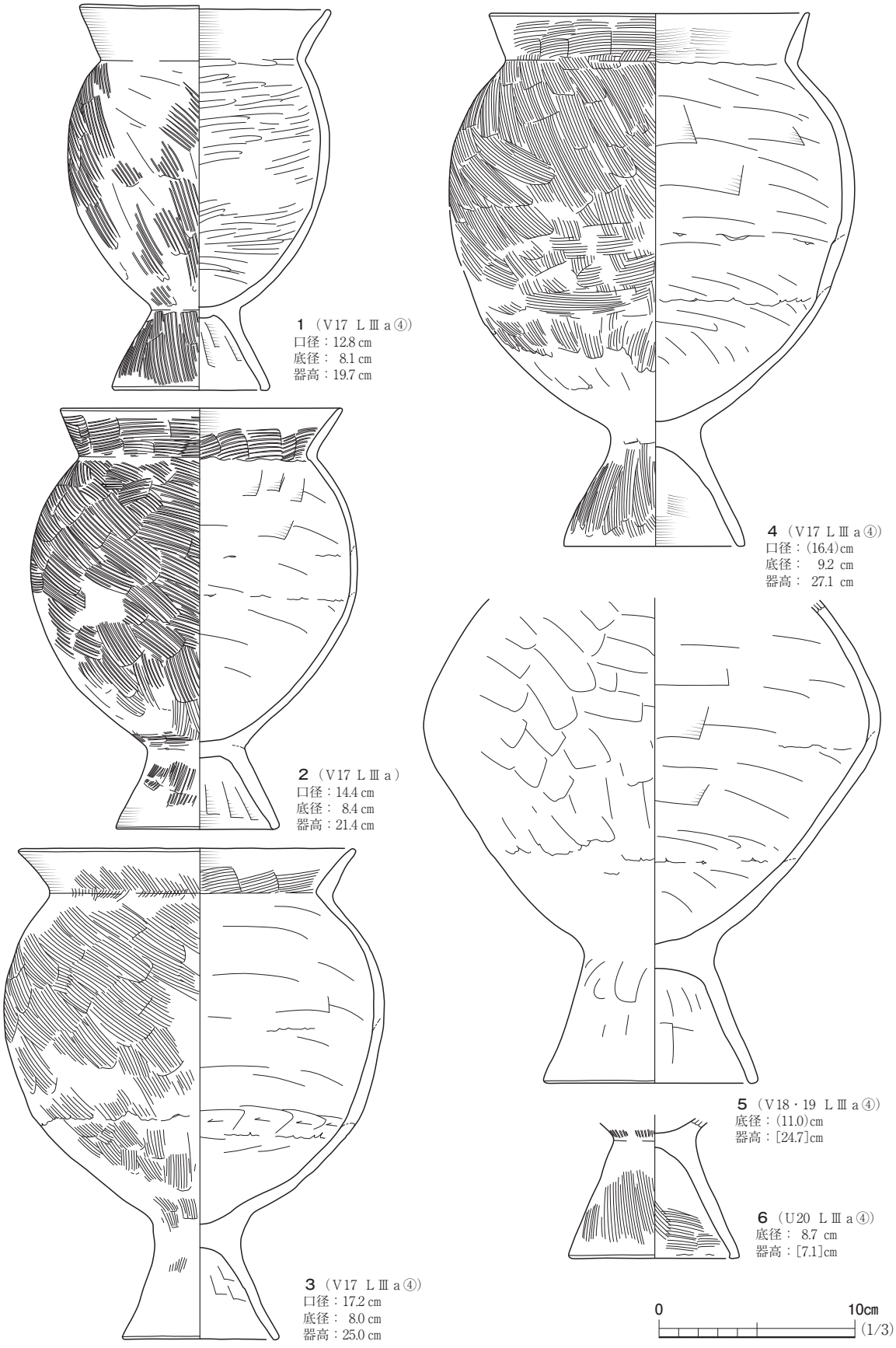


図477　遺物包含層出土遺物（5）

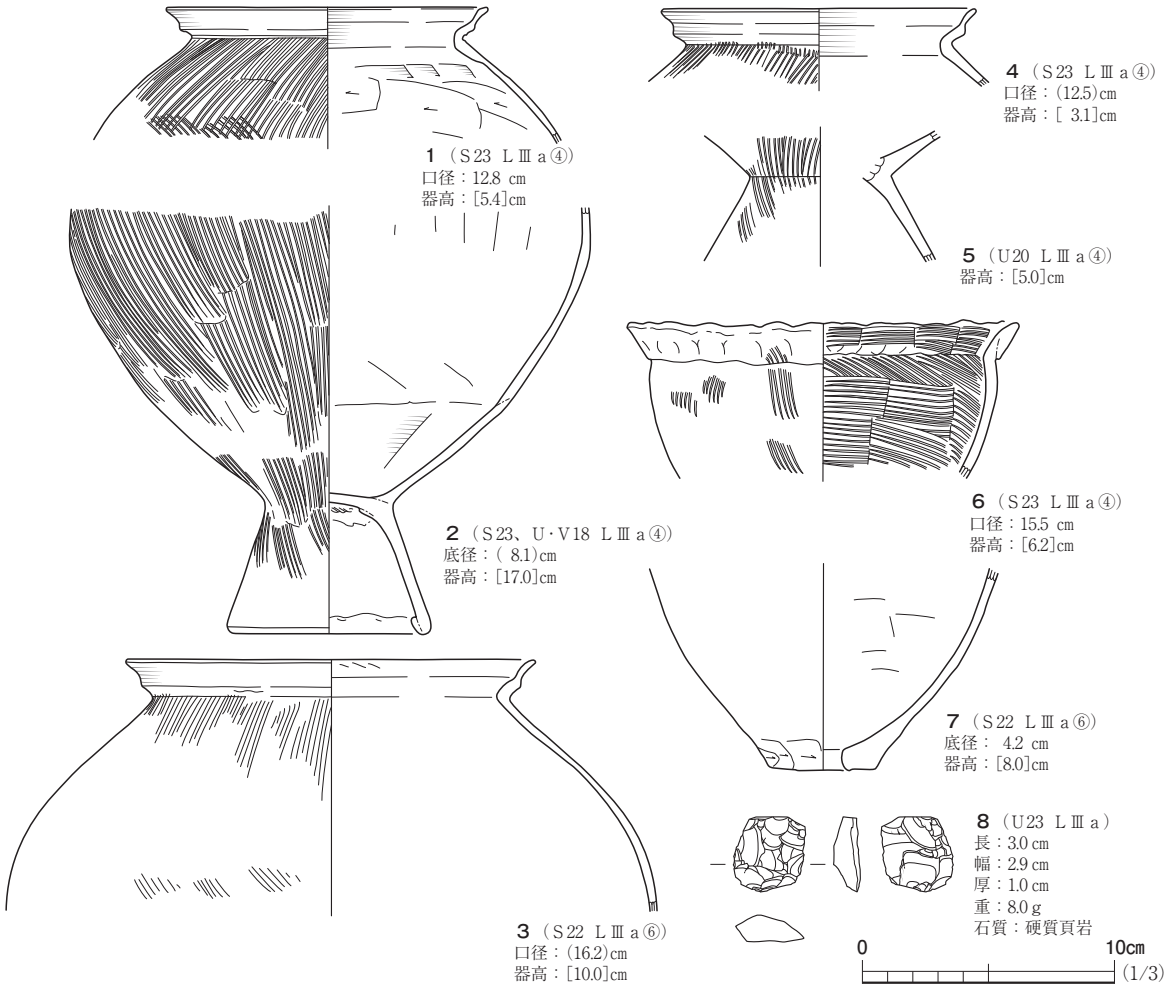


図478　遺物包含層出土遺物（６）

６・７は、有孔鉢である。６は椀形の体部に外傾する口縁部をもち、口縁部外面の下端に輪積みした粘土紐の段を残す。内外面にハケメを施すが、口縁部は内外面に指頭の圧痕を顕著に残す。７は、平底の底部に焼成前の一孔を穿ち、底部付近の外面にケズリを施す。

８は、削器である。両面に加工を加え、一部に自然面を残す。　（青　山）

第14節　遺構間接合遺物

本遺跡から出土した遺物の接合作業を進めるうち、図480と写真433・438・440・441に示した２個体分の弥生土器について、複数の遺構とグリッドにまたがって接合関係にあることがわかった。これら２点の弥生土器については、一つの独立した節を設けて報告することとした。

図481－１～３は、頸部から体部の上半、同下半、底部で、接合はしないが、胎土、焼成、色調が類似し地文が共通することから、同一個体と考えられる。頸部と胴部の境が不明瞭な長胴平底の器形に復元される。外面をＲＬの撚糸文で埋めつくすが、遺存した部分の上端にわずかに無文の部分が認められるので、頸部には無文帯が巡ると思われる。注目されるのは、胎土に繊維の混和痕が

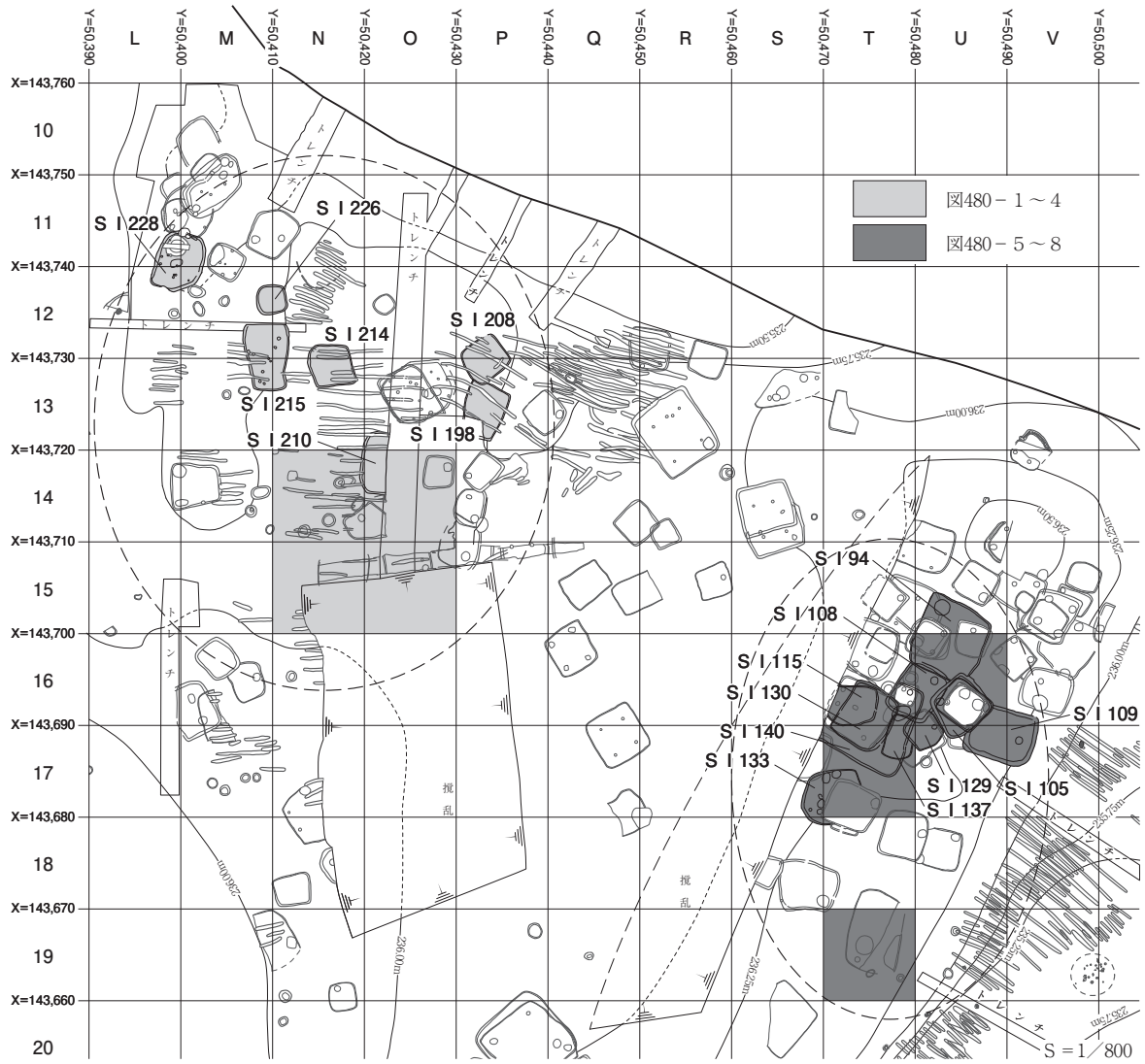


図479　遺構間接合遺物出土遺構・グリッド

顕著にみられることであり、繊維の他に稲の籾殻とおぼしきものが複数認められる。体部外面には炭化物が厚く付着し、これについて^{14}Ｃ年代測定を実施した(付章第３節参照)。

４～７は底部から体部、頸部付近の破片で、接合しないがやはり同一個体と考えられる。頸部との境が不明瞭な張りのある胴部と平底の器形が復元される。地文はＬＲの撚糸で、頸部付近は斜行、体部から底部にかけては斜行と横走が不規則に入り混じる。頸部には無文帯が巡る。内面は磨滅し不明瞭だが、外面の観察から胎土に繊維がごくわずかに混和されているようである。（青　山）

第15節　遺構外出土遺物

ここでは、遺構に伴わずに出土した遺物をまとめて報告する。

弥生土器（図481、写真438・439・441）

図481－１～６は壺で、胎土、焼成、色調から同一個体と考えられる。器形は、平底で長胴、な

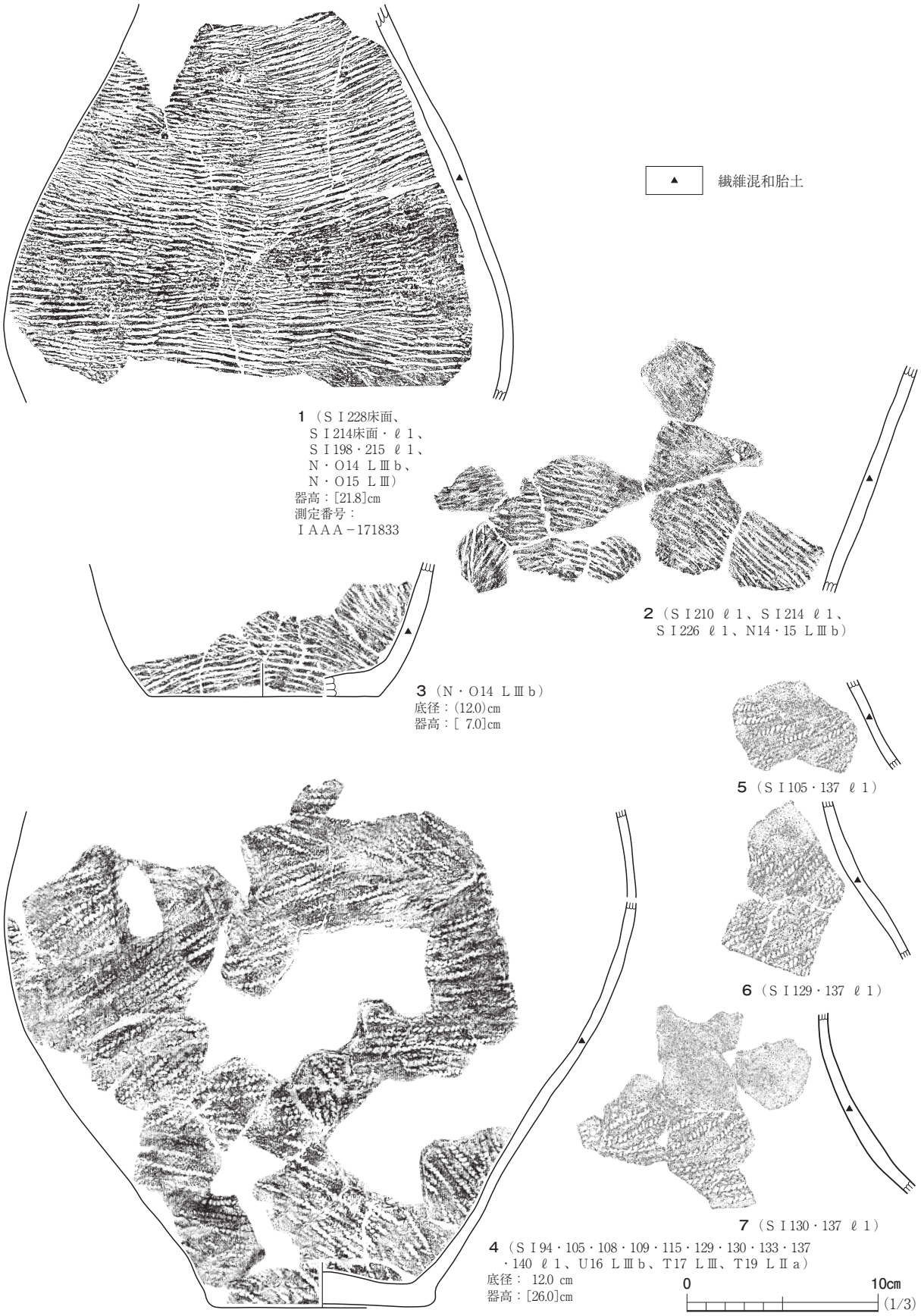


図480　遺構間接合遺物

で肩に筒形の頸部、緩やかに外反する平縁の口縁部からなる。頸部と口縁部の境の外面には段を有する。口縁部と体部にＲＬ縄文を施し、頸部を無文帯とする。口縁端部の直下には、任意の数箇所を起終点とした２・３本の１本描き沈線をおおむね平行に巡らせる。この沈線は起終点で叉状となる。１で五叉、４で六叉である。口頸部を画する段の直上には２本の平行する１本描きの沈線が巡り、これに沿ってさらに対刺突を巡らせる。口縁部下と段直上の平行する沈線の中間には二重の下向き弧線文が巡る。この弧線文と口縁部直下の終起点には、１・２・４のように、弧の中腹どうしをつなぐ弧線あるいは直線が引かれる場合がある。二重の弧線文と終起点の単位数は一致せず、位置も必ずしも一致していない。地文はおおむね斜行するが、回転方向は一定しない。

７・８は、甕もしくは深鉢で、同一個体と思われる。体上部は立ちあがる角度をしだいに増しながら反り上がり、外傾する複合口縁が付く。口縁部と頸部の境には外面に段を有する。口縁部と体部にＬＲ縄文を施し、頸部を無文帯とする。胎土にはごくわずかに短い繊維を混和しているようである。器種は甕か深鉢としたが、炭化物の付着や二次被熱は認められない。

９は鉢で、ＲＬ撚糸を口縁部と体部に施す。判然としないが頸部を無文とするようである。

10は壺と思われる。上下２列と刺突列を巡らす。口縁部には斜行するＲ縄文を施す。

11は、外傾する口縁部と頸部の境に段を有し、段の下端に薄手の粘土紐を張り付け指頭などで押圧を加えてフリル状とする。口縁部と口縁端部に０段多条のＲＬ縄文を施す。

12は壺の体部上半の小片である。地文を施したのち角の鋭角な流水文を沈線で描き、さらに沈線の折り返し部分に竹管による凹点文を１箇所押捺する。地文の大部分は磨り消されている。

13・14は、胎土・焼成・色調から同一個体と思われる。ＲＬの附加条を施したのち、４本櫛歯で連弧文を描き、さらに縦のスリットを入れるようである。外面に炭化物が付着する。

15は、横方向の沈線が３本描かれる。器壁は他の弥生土器に比してかなり厚い。

16・17は底部付近の破片で、16は０段多条のＬＲ縄文を、17はＬＲの撚糸文を施す。

土師器・須恵器（図482・483、写真432・433・434）

図482－１～10は古墳時代前期の土師器である。

１は、器台である。脚部は内湾し、受け部は直線的に外傾する。口縁端部を面取りする。

２は、結合器台である。円窓を３方向に穿つ脚部、端部を面取りする受け部、窓を穿つ鉢部をもつ。受け部から脚部へ貫通孔を穿つ。鉢部の窓は一部が遺存するのみで、数や形状は不明である。

３～５は、鉢である。３は平底で無頸の椀形、４・５は円板形の平底にやや下膨らみの体部をもつ。４は外面に粘土紐の下端を残して段にした口縁部、５は直立し端部が不揃いに小さく波打つ口縁部をもつ。３は外面ケズリ、内面ナデ、４・５は内外面ナデを施す。

６～８は、甕である。６は、輪台風の平底、張りのある球胴、「く」字口縁をもつ。外面にナデとミガキ、内面にヘラナデを施す。外面の体部中位付近と内面底部付近に炭化物が付着する。７は、輪台風の平底、ややなで肩の体部、「く」字口縁をもつ。外面にナデ、内面にヘラナデのちミガキを施す。８は、端部に刻みを施す「く」字口縁のみが遺存する。

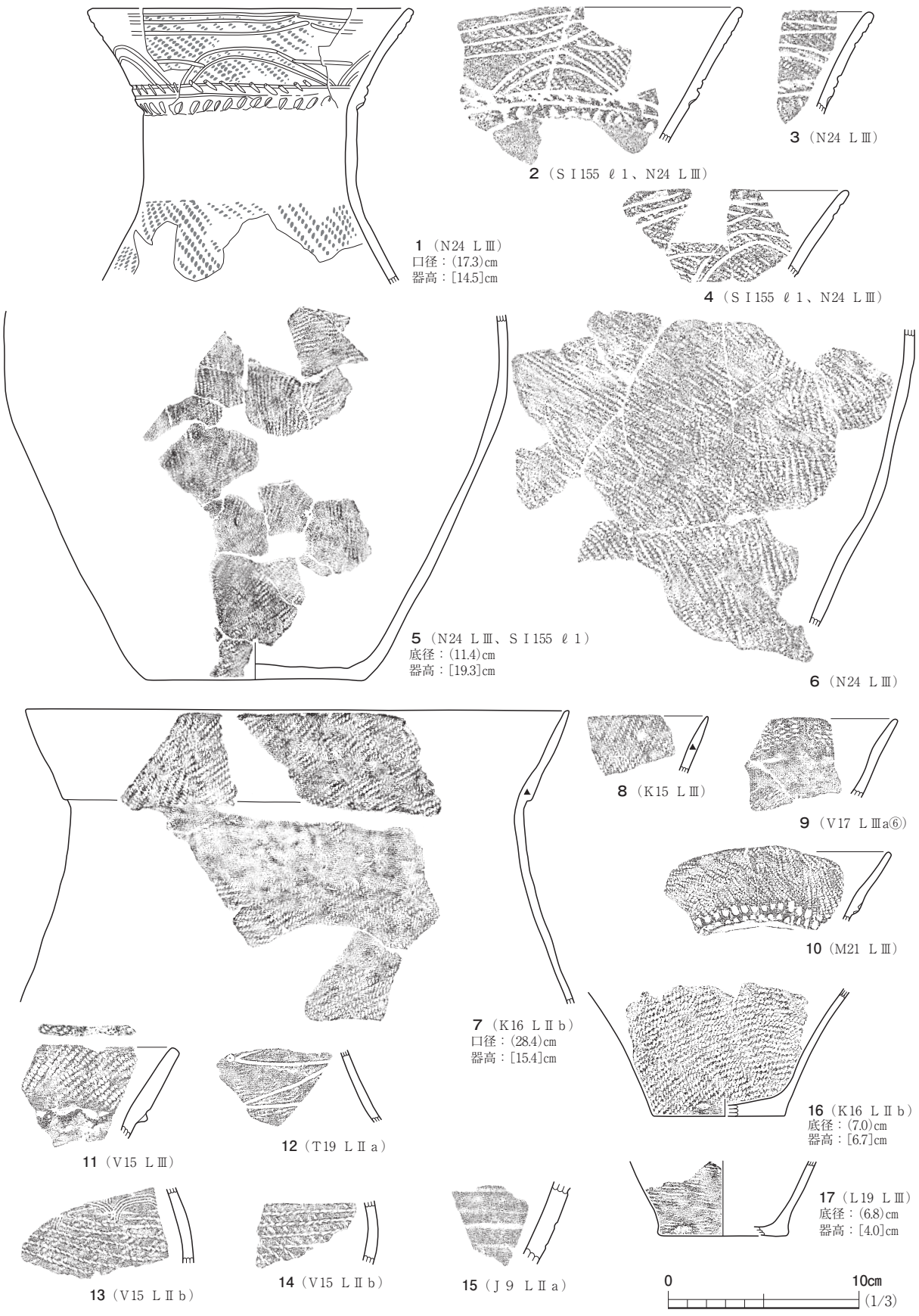


図481　遺構外出土遺物（1）

９・10は、鉢を模したミニチュアで、いずれも手づくねである。

図482－11～13、15は古墳時代後期の土師器である。11～13は杯で、底部が遺存するものはいずれも丸底である。11・12は無頸で、11が底部にケズリを施す他は磨滅、12は内外面にミガキを施す。13は口縁部が外反し、内外面の稜線をもって口縁部と体部を画する。口縁部外面にヨコナデ、体部外面にケズリ、内面にミガキのち黒色処理を施す。15は、甕である。球胴に「く」字に外反する口縁部をもつ。頸部に縦に長い粘土塊を１箇所付す。粘土塊には指頭による押圧が加えられている。外面にナデ、内面にヘラナデを施す。

16～18は古墳時代後期の須恵器である。16は杯、17は蓋で、いずれも小片からの復元である。18は高杯で杯底部が遺存する。内外面にロクロナデを施し、体部外面に櫛描き波状文が巡る。脚部は剥離し剥離面には同心円が刻まれる。剥離面は円形で、周辺に脚部の透かし穴を開ける際に入れた工具痕が残る。この工具痕からすれば透かし孔は４方向で、幅は４㎜であったと考えられる。

14は、奈良時代のものとおぼしき杯である。浅い椀形の器形で、体部に環状の把手を縦に付す。体部から口縁部が一部しか遺存せず把手は１箇所が遺存する。把手の本来の数は不明である。把手の上部の口縁部には二山の小突起が付く。内外面にミガキを施す。

図483－１～３は平安時代の土師器の杯である。いずれもロクロ成形で、外面ロクロナデののち、１・２は回転ヘラケズリ、３は手持ちヘラケズリによる再調整を施す。内面はミガキのち黒色処理を施す。１の底面には墨書があるが、欠損のため判読できない。

陶　　器（図483、写真434）

図483－４は、常滑焼の大甕である。肩が張り、体部上半から頸部にかけて内傾しながら角度を増して反り上がり、折り曲げにより複合させた口縁部に至る。肩部には格子タタキメが部分的にみられる。体部最大径より上部には自然釉が降りかかる。

５は、陶器のすり鉢である。無釉で、外面にロクロナデを施し、内面に櫛目を施す。

６は、陶器の高台付の椀である。小片からの復元である。外面にロクロメをよく残し、内面にヘラによる文様と底面を巡る圏線が描かれる。釉には貫入が多く、色調は灰オリーブ色である。

石器・石製品（図483、写真434）

図483－７は、偏平な自然石を割り、縁辺に加工を加えた石器である。

８は砥石である。約半分を欠失する。４側面をいずれも砥面とする。

９・10は、石製の垂飾である。９は、偏平な涙滴形の自然石の上部の１箇所を片面から穿孔する。片面にみられる剥離面は穿孔後のもので、人為的なものか欠損かは判断できなかった。10は、偏平な楕円形の自然石の縁辺近くの１箇所を両面から穿孔する。穿孔箇所は一部欠損する。

11・12は、石製模造品である。11は、石材を偏平な隅丸長方形に整形し２孔を穿つ。表裏と側面に擦痕を顕著に残す。12は、偏平な自然石に１孔を穿ったものである。

13・14は、石製の臼玉である。側面に擦痕がみられる。

15は凹石である。偏平な自然石の１面に５箇所の凹みが寄りかたまる。　　（青　山）

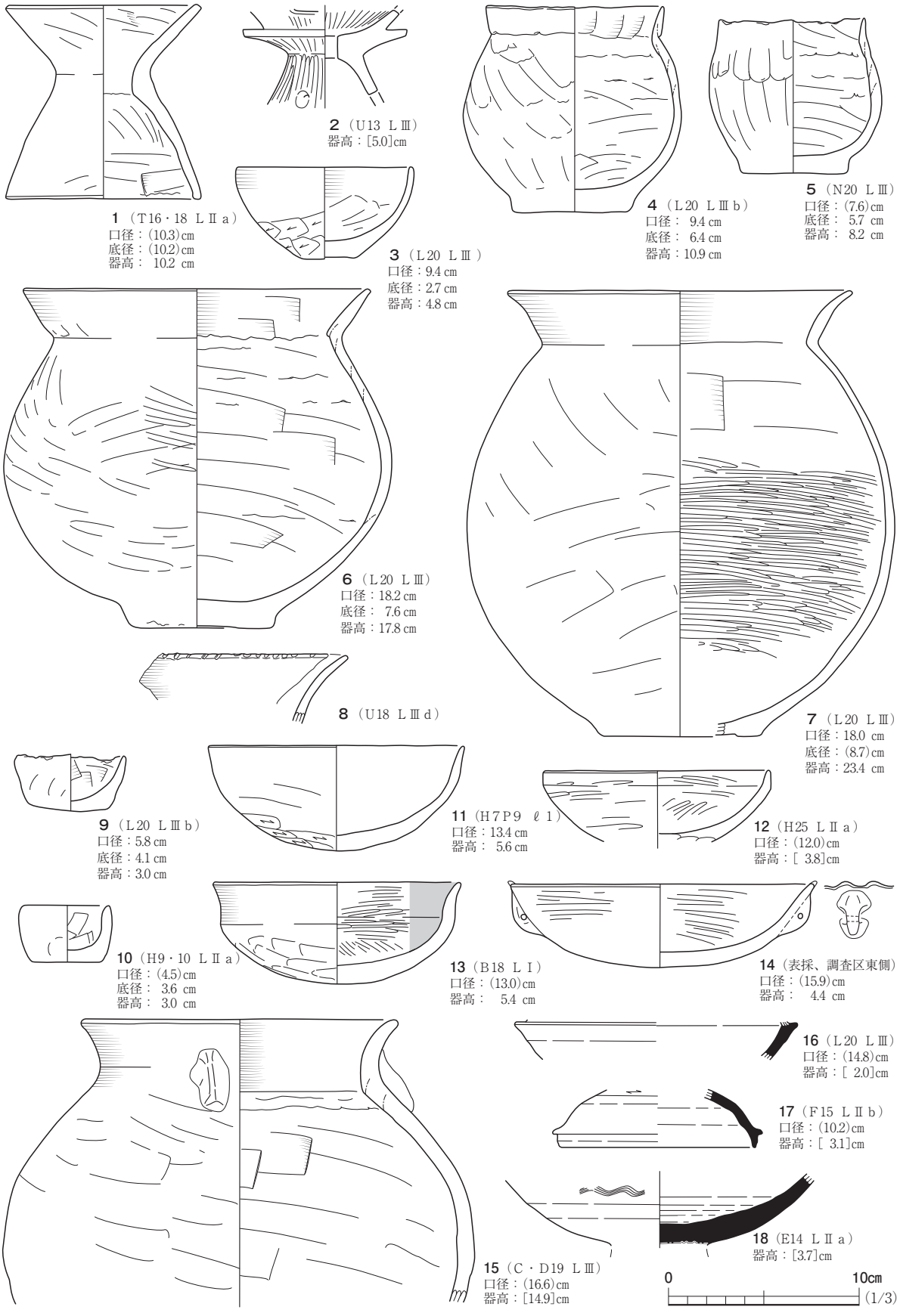


図482　遺構外出土遺物（2）

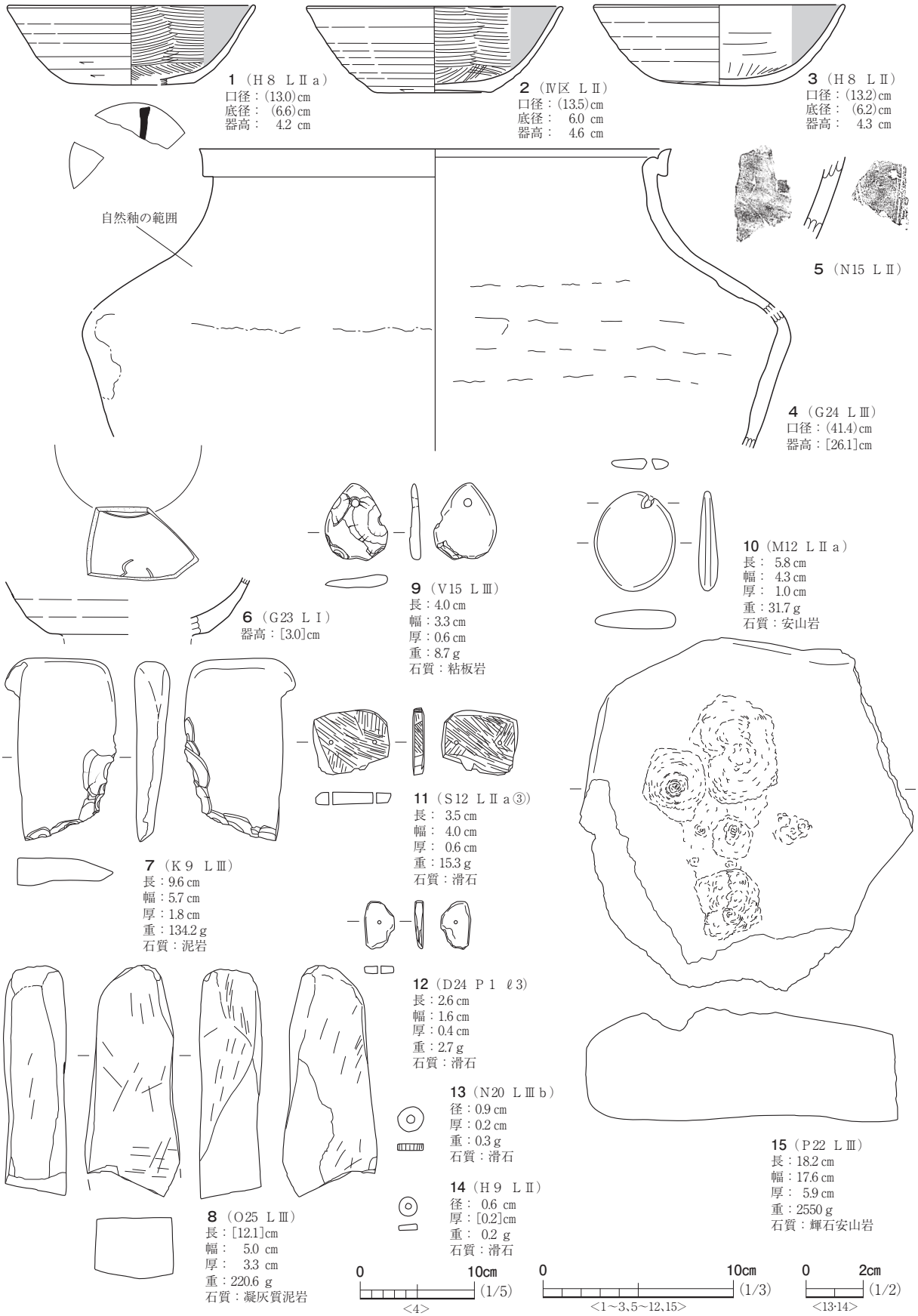


図483　遺構外出土遺物（３）

第３章　総　括

第１節　遺　物

高木遺跡で出土した遺物は、弥生時代終末期、古墳時代前期、同後期、奈良時代、平安時代、中世のものである。

以下では、各時代の遺物について検討を加え、高木遺跡の総括とする。

１　弥生時代終末期

（１）出土資料の概要

本遺跡から出土した弥生時代終末期の遺物は、住居跡、土坑、遺物包含層、遺構外からそれぞれ少量ずつ出土したもので、出土状況としての一括性は有していない。住居跡には重複するものもある。しかし、それぞれの遺物がもつ属性には多くの共通点があり、比較的短い時間幅にある資料群といえるものである。

遺物には、土器、石器、土製紡錘車があり、土器がもっとも多い。石器は、アメリカ式石鏃１点の他、剥片に二次加工を加えた不定形の剥片石器がある。土製紡錘車は円板形で無文である。

以下では、量的なまとまりのある土器について検討する。

（２）　器　種

弥生時代終末期の土器が壺と甕の区別がつきにくいことは、従来から指摘がある（馬目1983）。本遺跡出土土器の大部分も壺と甕の区別がしづらいもので、他に鉢と蓋が各１点出土している。壺・甕は、煮沸の際に器面に炭化物が付着したものと、煮沸の痕跡のまったくないものの二者がある。図484の集成図には、炭化物が付着するものについて、炭化物付着と示した。

（３）　器　形

壺・甕の器形は、径に対して器高が高く、平底で、長い体部の中ほどに最大径もち、体部・口縁部との境が不明瞭な頸部、外反、外傾、受け口状の口縁部をもつ。

鉢は、120号住居跡から出土した口縁部付近の破片から復元されるものが１点あるのみである。全体の器形を知ることはできないが、緩やかに外反する波状口縁をもつ。

蓋は、つまみのない平坦な天井と平縁の複合口縁をもち、天井の上面と体部外面の上端部を貫通する二孔一対の紐通し孔が、天井の相対する位置に穿たれたものである。

（４）　文　様

文様は、沈線文、対刺突文、指頭による連続押捺文、櫛描文、凹点文（円形竹管文）、地文（単節縄文、撚糸文、附加条第１種、附加条第２種、原体不明の縄文）によって施文されている。

（５）三つの土器群

本遺跡から出土した弥生土器は大きく三つのグループに分けることができる。

一つは天王山式系土器群である。本遺跡出土の弥生土器の大部分はこれに該当する。器種は壺・甕が大部分を占め、この他、120号住居跡から出土した鉢、175号住居跡から出土した蓋がある。

口縁部の形態には、平縁、波状口縁、口縁部突起をもつものの三者があり、頸部の形態には、緩やかに湾曲してくびれるものと、筒形の二者がある。口縁部が遺存するものは頸部との境に段を有して外面を肥厚させた複合口縁であるが、鉢は複合口縁をもたない。

文様には、沈線文、対刺突文、指頭もしくは棒状工具による連続押捺文、凹点文、縄文があり、これらの選択・組み合わせによって文様が構成される。

二つめは十王台式である。出土数は少なく、176（図297－１）・202号（図324－１～５）の各住居跡の他、遺構外出土土器（図481－13・14）に確認できるのみである。体部上半より上部に、櫛描きによる、波状文、連弧文、スリット文が描かれ、体部下半の地文は附加条第２種である。202号住居跡出土土器には、刻みを施した２条の隆帯が口縁部に巡る。

三つめは、いずれの土器型式か特定できないものである。131号住居跡出土土器（図239－２・３）、175号住居跡出土土器（図296－２・３）がこれに該当する。175号住居跡出土土器は、口縁端部直下に３条の隆帯をめぐらせ、もっとも上の隆帯には縄文を、以下の隆帯には指頭による連続押捺文を施す。類例を見出すことができなかったものである。

（６－１）天王山式系土器群

次に出土遺物の多い天王山式系土器群について詳述する。上述のように、本遺跡出土の弥生終末期の土器の多くは広義の天王山式の範疇で考えることができる。一方、狭義の天王山式土器とは異なる特徴を有する。

天王山式の指標とされる諸属性（中村1976、馬目1983、佐藤1990）のうち、本土器群に認められるのは、口縁部に突起をもつ点、頸部に無文帯をもつ点である。

一方、本土器群にみられないのは、縦走・横走する縄文、交互刺突文、磨消縄文、体部文様帯下端の連弧文、である（そもそも本遺跡出土土器に体部文様帯がみられるのは47号土坑の１点のみである）。受け口状口縁は出土しているものの、数は少ない。本土器群は天王山式の要件を満たしてはいないことを示している。

ただし、本土器群には天王山式に類似する属性がいくつか認められる。それは、交互刺突文が変化した対刺突文（図481－１・２・10）、地文を施したのち沈線で文様を描き地文を磨消さないこと（図460－１、図481－１・２）である。いずれも天王山式の属性から変化したもので、本土器群が天王山式より後出であることを示す属性である。

本土器群の特徴をさらにいくつか加えれば、口縁部の幅が広く、そこに複数段の施文が行われる（図460－１、図481－１・２）、口縁部と体部上半の文様帯に同じモチーフが施文される（図460－１）、単位文様の接点に１個の凹点文（円形竹管文）を付す（図460－１、遺構外図481－12）（註

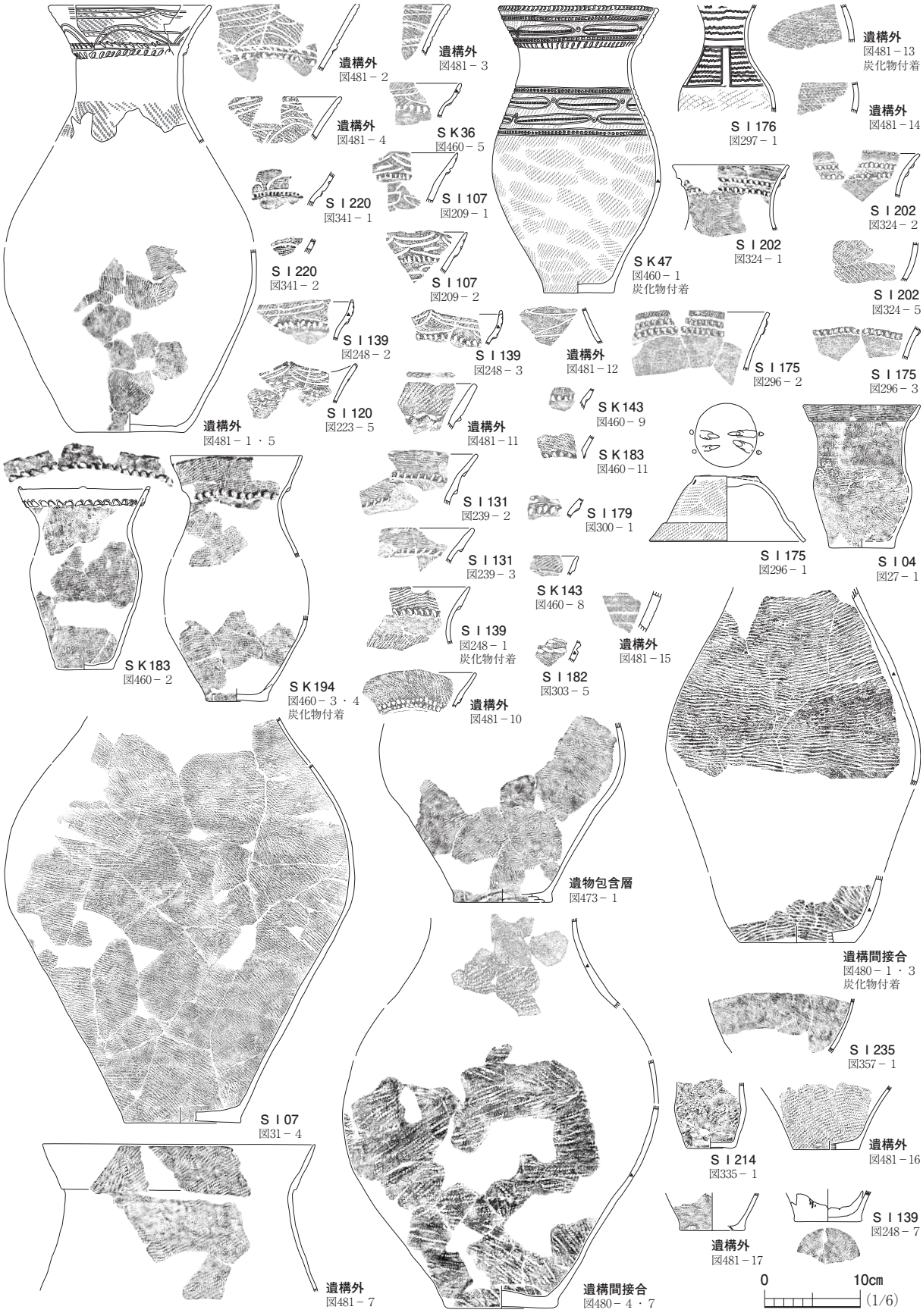


図484　出土土器集成　弥生時代終末期（1）

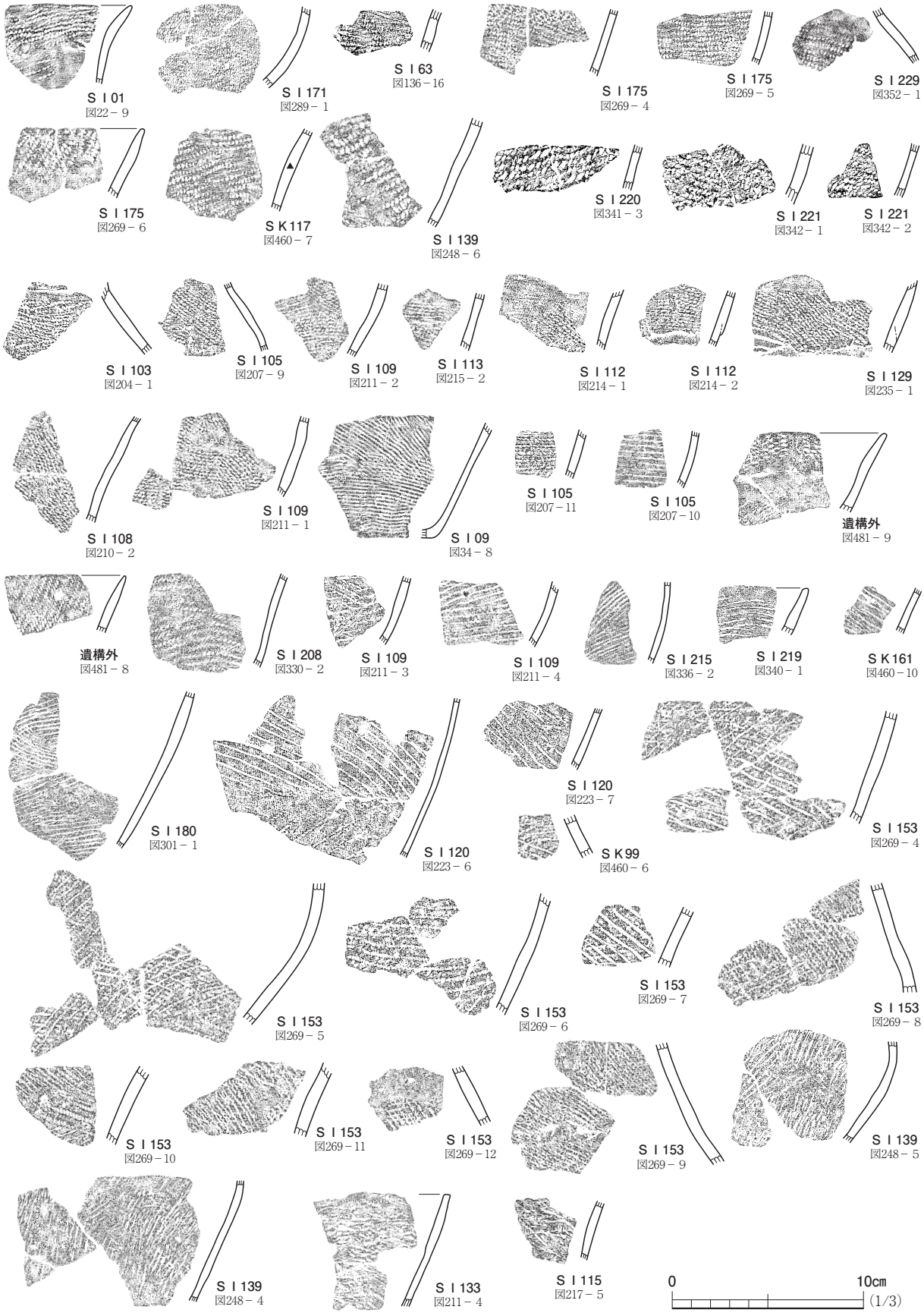


図485　出土土器集成　弥生時代終末期（２）

１)、口縁部の弧線文どうしがしばしば弧状の沈線によって架橋される(図209－１・２、図248－２・３、図460－５、図481－１・２)、縄文原体の側面押圧(図303－５)、単節ＬＲ縄文、撚糸文の他、附加条第２種が特に大型の土器に多い、胎土に繊維を混和する(図460－１、図480－４～７)、繊維と籾殻を混和する(図480－１～３)（註２)、つまみのない平坦な天井部の相対する位置に二孔一対の貫通孔を体部上端へ穿つ蓋を含む(図296－１)、の諸点があげられる。

(６－２)構造的特徴

天王山式の文様は、口縁部(Ⅰ)、頸部(Ⅱａ)、体部上半(Ⅱ)、同下半(Ⅲ)の各文様帯から構成される(鈴木1976、石川2001)。これを参照して本土器群を分類すると以下のとおりとなる。

Ａ　口縁部と体部に地文を施し、頸部を無文帯とするもの。沈線による施文はない。４・175号住居跡、遺構外出土土器(図27－１、図296－１、図481－７)（註３)。

Ｂ　口縁部と体部に地文を施す他に、口縁部の下端に、対刺突文、連続刺突文、連続押捺文のいずれかを巡らせるもの。口縁部の地文は省略されるものがある。139号住居跡、183・194号土坑出土土器(図248－１～３、図460－２・３)。

Ｃ　口縁部と体部に地文を施し、口縁部下端に対刺突文などを巡らせる他、口縁部に沈線などで文様を描くもの。遺構外出土土器の一部(図481－１)。

Ｄ　口縁部と体部に地文を施し、口縁部の下端に対刺突文などを巡らせる他、口縁部と体部上半に沈線などで文様を描くもの。47号土坑出土土器(図460－１)。

以上を整理すると下記のようになる。

Ａ：地文のみ

Ｂ：地文　＋　口縁部下半に施文

Ｃ：地文　＋　口縁部下半に施文　＋　口縁部上半に施文

Ｄ：地文　＋　口縁部下半に施文　＋　口縁部上半に施文　＋　体部上半に施文

Ａ～Ｄの分類は、施文が文様帯を単位とし、その多寡が文様にバリエーションを生じる要素の一つであること、施文部位の多寡には施文の順序に則った一定の法則があること、を示している。

ここに復元される施文の順序とは、①口縁部と体部に地文を施す、②口縁部下端に対刺突文などを巡らせる(註４)、③口縁部に文様を描く、④体部上半に文様を描く、となる。

手順①の前に無文の状態があることは、会津若松市屋敷遺跡(木本ほか1991)や湯川村桜町遺跡(福田2005)、いわき市八幡台遺跡(馬目ほか1980)出土の無文土器を参照せずとも言えることである。また口縁部文様帯(Ⅰ文様帯)が上下に分離していることは、本土器群の指標に加えてよい。量的にはＡが多く、Ｄに向かって少なくなるようである。

(６－３)二つのモチーフ

本土器群の文様の分類には、もう一つの視点がある。それはモチーフである。

ａ　弧線文・重弧線文を主要なモチーフとするもの。

ｂ　横方向に長い楕円形、もしくは流水文を主要なモチーフとするもの。

本土器群がもつ文様のモチーフがこの二つのみであるかは量的な制約のため即断できないが、非常に多くのモチーフをもつ天王山式に比べると、本土器群のモチーフの少なさが指摘できる。ａ・ｂいずれも天王山式から継承されたモチーフである。

（７）明戸遺跡出土資料との比較

従来、天王山式土器に後続する土器群には、踏瀬大山遺跡採集資料をもとにした踏瀬大山式がおかれてきた（中村1976）。近年では、白河市明戸遺跡（辻ほか1984）、会津若松市屋敷遺跡（木本ほか1991）、湯川村桜町遺跡（福田2005ほか）など、発掘調査によるまとまった土器群が知られるようになり、これらにもとづく検討が行われている。

特に、本遺跡と同じ中通り地方に位置する明戸遺跡の出土土器については、鈴木正博氏による詳細な分析がある（鈴木2002）。これによれば、明戸遺跡出土土器には、①複合口縁部を無文帯とする手法がみられる、②交互刺突文から変遷したと思われる二個一対の刺突文である対刺突文がみられる、③単節縄文の他に撚糸文が目立つ、④複合口縁を含む有段口縁が発達し、口縁部幅は沈線文の有無にかかわらず広いものが目立つ、⑤天王山式には定着していない凹点文がしばしばみられる、⑥縄文原体押圧文がみられる、⑦口縁部突起、波状口縁、平縁がある、⑧縄文地文に沈線文を施すものや磨消縄文による文様帯をもつ、⑨口縁部文様帯は天王山式の系統を直接的に継承し、もっとも特徴的なのは弧線間の「三叉（角）構成文」である、⑩方形底の土器が組成している、の諸点が指標として抽出され、これをらもって「明戸式」が提唱されている。

明戸遺跡出土土器に指摘された上記①～⑩の特徴と本土器群のそれを比較すると、①～⑦はまったく同じである一方、⑧・⑨についてやや異なる様相が認められる。⑩についてはみられないが、本土器群には量的な担保がなく、異同は留保するしかない。

⑧についての相違は、本土器群は磨消縄文を含まず、いずれも地文に沈線を引いたまま磨り消さない点である。両者を含む天王山、明戸の両遺跡出土土器より新しい様相といえる。

⑨については、本土器群の「三叉（角）構成文」は、弧線文の間を短い一本の沈線で架橋するものである、という点が異なる。天王山式には、三叉（角）構成文をもたないもの（ア）、これをもつもの（イ）、弧線で架橋するもの（ウ）の三者があり、明戸式はアとイが、本土器群はアとウが同一個体に共存し、さらに上下の反転したもの（エ）が含まれている。また、弧線文の一部が三重となる。

型式学的には、天王山遺跡、明戸遺跡にみる三叉（角）構成文は弧線間に独立した一個の三角形を配置するのに対し、本土器群は同じ位置に描かれる短い沈線による架橋が三角形の底辺の役割をもち、同じ三角形でもより簡素な形へ変遷したとみることができる。この点でも、天王山→明戸→高木の変遷をたどることができる。つけ加えれば、本土器群に後続する位置には大安場古墳の下層から出土した土器（柳沼他1998）をおくことができる（図486）（註５）。

以上の点は、本土器群は明戸式に共通する多くの属性を有しながらも、型式学的に連続する二つの相違点をもって、明戸式に後続する位置にあることを示している。

上述した文様構成に関するＡ～Ｄの構造は、明戸式にも認められる。明戸遺跡出土土器は破片資

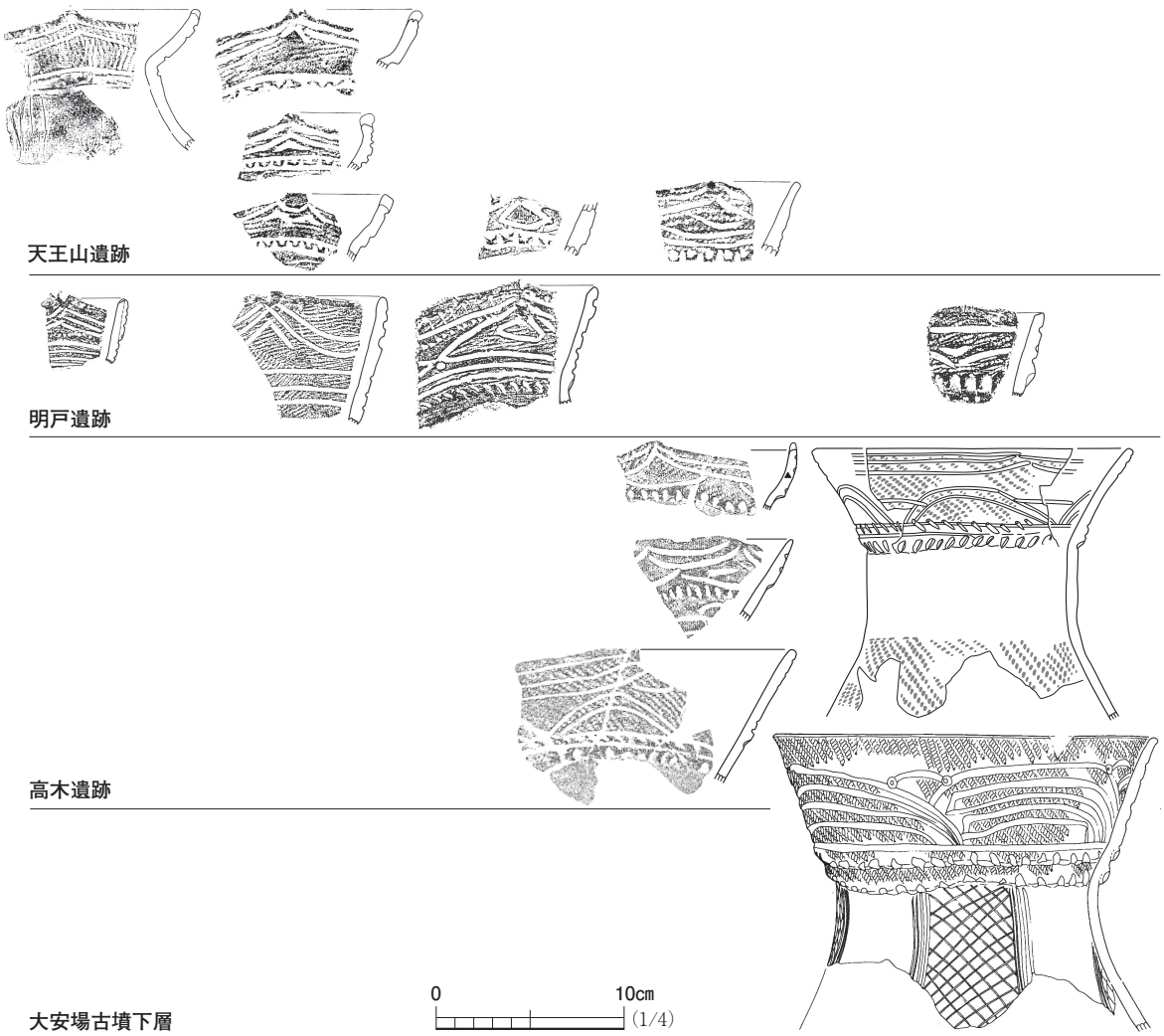


図486　三叉（角）構成文の変遷

料が多いという制約があるにしても、体部上半に文様帯をもつものが少ないことが指摘されるなど（鈴木2002）、すでに同様の構造が成立していることを認めてよい。狭義の天王山式には明確には指摘できない構造である。

明戸遺跡出土土器と様相の異なる点がもう一点ある。それは、北陸系土器の有無である。明戸遺跡をはじめ弥生時代終末期の遺跡には北陸系土器が伴うことが少なくない（木本2008）一方で、本遺跡からはまったく出土しなかった。

以上、本土器群の天王山式系の土器について検討し、天王山→明戸→高木→大安場古墳下層の変遷をあとづけた。本土器群は、明戸と大安場古墳下層をつなぐ資料である。

（8）十王台式

前述のように176号、202号の各住居跡の他、遺構外から小片が出土している。176号住居跡出土土器（図297－1）は、口縁部に櫛描の波状文、頸部に幅の狭い無文帯、体部上半に櫛描の縦区画と波状文、体部下半に附加条第2種を施し、各文様帯は櫛描の直状文で区画されている。202号住居跡出土土器（図324－1～5）は、口唇部に縄文を回転施文し、口縁部が狭く無文で、頸部に棒状工

具の側面を連続押圧した２条の隆帯を巡らせ、頸部の縦区画文間を格子状文と櫛描の波状文で充填し、その下に櫛描の上向き連弧文を、体部下半には附加条第１種を羽状に施す。遺構外出土のもの（図481－13・14）は、体部上半の文様帯下端の櫛描連弧文と附加条第２種が施される。

鈴木素行氏の分類と編年（鈴木1998・2013）に従えば、176号住居跡出土土器は、小型細頸形で、十王台２期（１ｂ式）に、202号住居跡例は、小型太頸形で同２期（１ｂ式）、遺構外出土例は同４～５期（２ａ式～２ｂ式）にそれぞれ位置づけることができる（註６）。

（９）併行関係

鈴木正博氏は前述の論文で、明戸式に伴う十王台式土器はいずれも十王台１式であることを指摘している（鈴木2002）。先述のように本土器群が明戸式に後続すること、本遺跡出土の十王台式土器が十王台１ｂ式と２ａ・２ｂ式であること、さらに天王山遺跡出土土器に東中根１式土器が含まれることを考え合わせれば、福島県域における、天王山→明戸→高木という変遷と、茨城県域北部における東中根式→十王台１式→同１ｂ式～２ｂ式という変遷が、矛盾なく対応する。

本土器群に併行する資料には、宮城県仙台市富沢遺跡第35次調査（平間1991）18層水田跡出土土器があげられる。器形が相似し、幅広の口縁部に描かれた文様が、弧線文の間に一本の短い沈線で架橋する三叉（角）構成文を有する点、上下に反転した弧線文を有する点で、本土器群の図481－１と共通する特徴をもつ。伊達市（旧保原町）大泉みずほ遺跡ＳＫ05出土資料（幕田ほか2000）、新地町師山遺跡遺構外（大竹他1990ａ）には、三重になった弧線文の間に三叉（角）構成文を有する口縁部が含まれる。

大安場古墳下層資料のように弧線文が多条化したものは、国見町仏供田遺跡１号住居跡出土土器（菅原ほか1977）に、また、多条化した弧線文を縄文原体の側面圧痕に置き換えたものが、新地町双子遺跡（大竹ほか1990ｂ）、宮城県塩釜市崎山囲洞窟出土土器（永澤1931、伊東他1965）、同栗原市東館遺跡出土土器（加藤1980）にみられる。天王山式、明戸式にも、弧線文を縄文原体の側面圧痕に置き換えたものが含まれる。

会津地方では、屋敷遺跡や桜町遺跡出土土器の古い部分が本土器群におおむね併行すると思われるが、地域色に帰することのできる相違が認められる。

桜町遺跡出土の北陸系土器は、新潟シンポ編年（日本考古学協会新潟大会実行委員会1993）の２～６期と整理され（笹沢2013）、これを介して西日本の編年に照らせば、ほぼ庄内式期、すなわち弥生時代終末期に併行することが判明する。本土器群を弥生時代終末期とするゆえんである。

（10）その他の弥生土器

131号住居跡から出土した土器（図239－２・３）は、口縁部の小片のみであるが、複合部を上下２段に巡らせ、それぞれの複合部の下端にヘラ状工具による刻み目を施す。いわき市八幡台遺跡（馬目他1980）、同夕日長者遺跡71号住居跡（鈴木他1981）、会津若松市屋敷遺跡68号溝跡（木本ほか1991）などに類例を見出すことができるものである。

175号住居跡出土土器（図296－２・３）については管見では類例を見出すことはできなかった。

(11)蓋の類例

175号住居跡から出土した２孔１対の紐通し孔を天井部の対になる位置に穿つ蓋は、弥生時代後期から終末期の福島県域周辺で類例を見出せる。列挙すれば下記のとおりである。

南相馬市高見町Ａ遺跡２号墳周溝(辻他1996)、同26号土坑(堀2011)

いわき市応時遺跡５号住居跡(廣岡2006)

いわき市平窪諸荷遺跡(高島・梆良1998)

いわき市玉山１号墳下層(木幡他2009)

いわき市植田郷Ｂ遺跡遺構外(和深2002)

いわき市水品遺跡３号竪穴住居跡・遺構外(鈴木・吉田2010)

国見町伊達西部条里34トレンチ(菅原他1977)

須賀川市仏坊古墳群13号墳封土(皆川1998)

須賀川市東館遺跡27トレンチ(佐藤1984)

石川町背戸Ｂ遺跡17トレンチ(金谷1984)

矢祭町大高平遺跡(伊東1964)

会津坂下町能登遺跡遺物包含層(大越他1990)

湯川村桜町遺跡６号掘立柱建物跡(混入)（福田2005)

会津美里町油田遺跡遺構外(阿部・梶原・梶原・猪狩2007)

会津若松市和泉遺跡第２遺物包含層(木本他1991ｂ)

会津若松市屋敷遺跡10号周溝状遺構、20号溝跡(木本他1991ａ)

福島県内に類例を限ったわけではないが不思議と福島県外には類例がみいだせない遺物である。管見では他に、北海道函館市石倉貝塚(村田他1996)、茨城県ひたちなか市差渋遺跡(鈴木2010)に見出したのみである。

(12)７号住居跡の土器棺

７号住居跡から出土した大型の底部に焼成後の穿孔がある土器は、和泉遺跡の土器棺(木本他1991ｂ)に類例がある。本遺跡の場合、住居跡から出土した点がやや特異である。

住居跡に設置された土器棺は、茨城県大洗町髭釜遺跡第８号住居址壁中埋設土器(井上他1980、鈴木2010)に類例がある。岩手県奥州市常盤広町遺跡では、竪穴住居跡の堆積土上層に土器棺があり、土器の内部から石鏃が５点、土器の下から管玉が１点出土している(伊東1954)。これらと比較すると、本遺跡７号住居跡出土の底部の穿孔された土器は土器棺の可能性がある。

２　古墳時代前期

(１)出土資料の概要

古墳時代前期の遺物は、本遺跡から出土した各時代の遺物のうちで量がもっとも多い。住居跡の床面に伴う一括資料も多く、これまで該期の資料が少なかった福島県中通り地方の様相を知るうえ

で基準となりうるものである。

遺物には、土師器、土玉などの土製品(不明土製品を含む)、砥石・凹石・敲石・垂飾などの石製品、鏃・鎌などの鉄製品がある。量的には土師器が大半を占める。

(２)土器群の概要

住居跡55軒、土坑８基、土器集中地点１箇所、土器埋設遺構４基、遺物包含層１箇所などから出土した。器種には、高杯、器台、鉢、壺、甕、有孔鉢、ミニチュアがある。他につまみを有する蓋と思われるものが１点あるが、類例がなく断定できない。

高杯は、杯部の形はさまざまあるものの、脚部は「八」字に開くものと裾が大きく開くものがある(図185－１、図228－１、図316－１、図434－１など)。棒状脚をもつものは出土していない。

器台は、受け部と脚部とに貫通孔を有するものの他、鉢を載せた形を造形する結合器台が含まれる。器台の受け部の形態はさまざまで、脚部はいずれも「八」字に開き、貫通孔と円窓を穿つものが大半を占める。台付甕の台部と同様の脚部をもつ器台は少ない。

鉢は、平底のものが大半で、凹み底が少数含まれる。口縁部は、短く外傾するもの、無頸のもの、長く外傾するものなどがある。出土量も器型も多いが、小型丸底鉢は出土していない。

壺には、素口縁、直口縁、複合口縁、二重口縁がある。他に、複合口縁に多数の棒状付文を付し赤彩で塗り分けたものが16号住居跡(図49－２)で、体部の下位に輪積み痕を残して段を作り出す広口壺が36号土坑から(図461－２)それぞれ出土している。

甕は、「く」字口縁で球胴のものが大部分であるが、底部の形態には平底と台付の二者があり、この両者が量的に拮抗する。図示した甕の底部の数をカウントすれば、平底が35点、台付が43点である。平底甕の底部のみの破片は実測しなかったものがあるが、これを勘案しても両者の比は台付甕がやや多くなると思われる。古墳時代前期の東北南部においては平底甕が卓越し台付甕は少ないことからすれば、台付甕の方が多いという状況は、本土器群の特異な点である。

同様のことは調整にも認められる。すなわち、本遺跡の甕は外面にハケメを施すものよりもナデやヘラナデを施すものの方が多く、ハケメ調整が卓越する東北南部のあり方とは異なっている。ハケメの目が細かく、ヘラナデとの区別に窮するものが本土器群にはしばしばあった。

Ｓ字状口縁台付甕は145号住居跡と遺物包含層から合わせて６点(図257－７、図478－１～５)、片口をもつ甕が143号住居跡から１点(図253－６)、口縁端部に刻み目を施す甕は破片ではあるが100号住居跡(図201－４)と遺構外(図482－８)からそれぞれ１点出土している。

有孔鉢のあり方も特徴的である。器高が口径を凌駕する身の深いものが145号住居跡(図258－３)、多孔のものが143号住居跡と152号住居跡(図253－10、図267－１)から出土している。いずれも東北南部では出土例の少ないものである。

以上、本土器群の概要を述べたが、東北南部の該期の土器群とはやや異なる様相が認められる。

(３)編年的位置

編年的な位置については、高杯の脚部が「八」字に開くもので占められ、棒状脚が含まれないこ

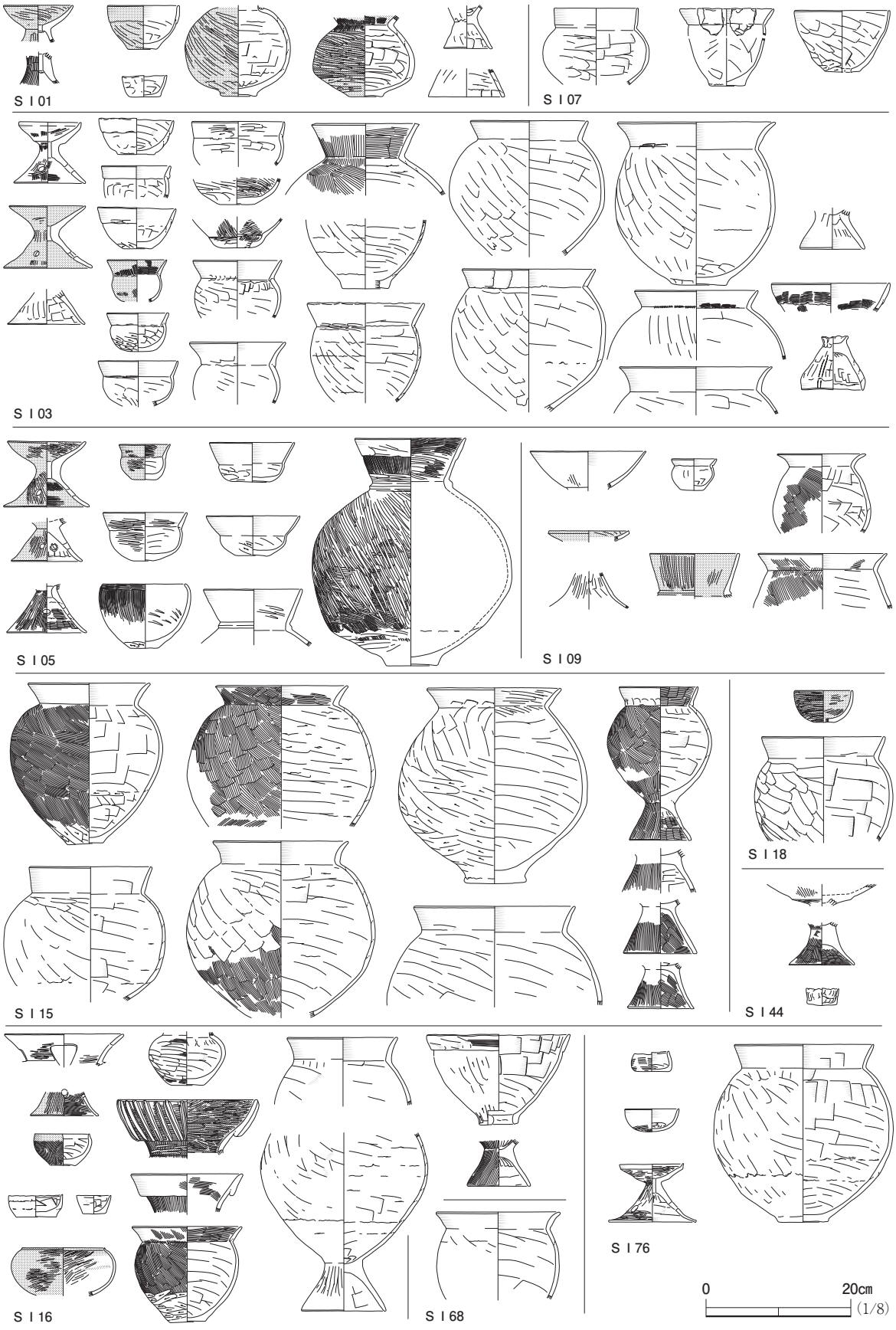


図487　出土土器集成　古墳時代前期（1）

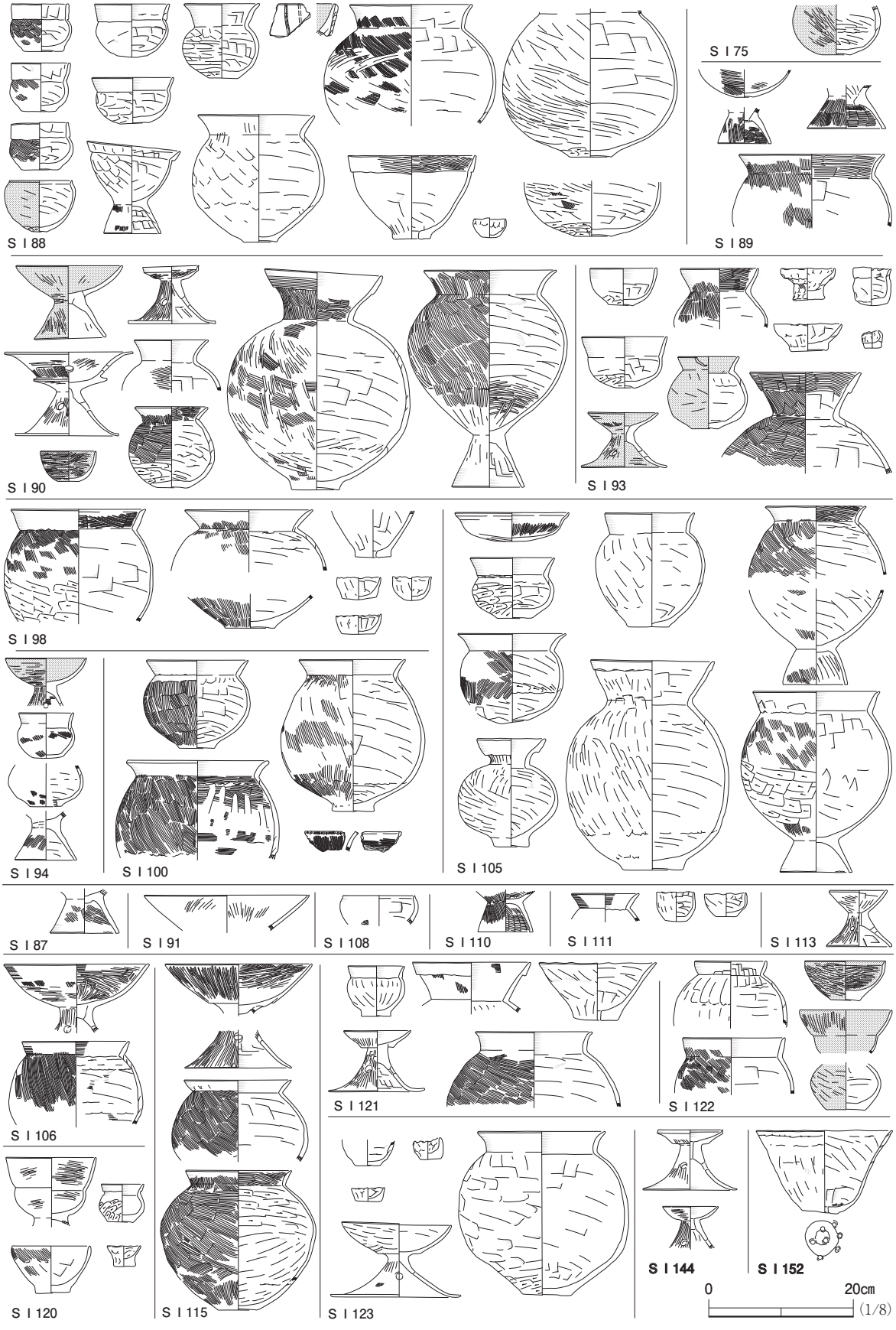


図488　出土土器集成　古墳時代前期（２）

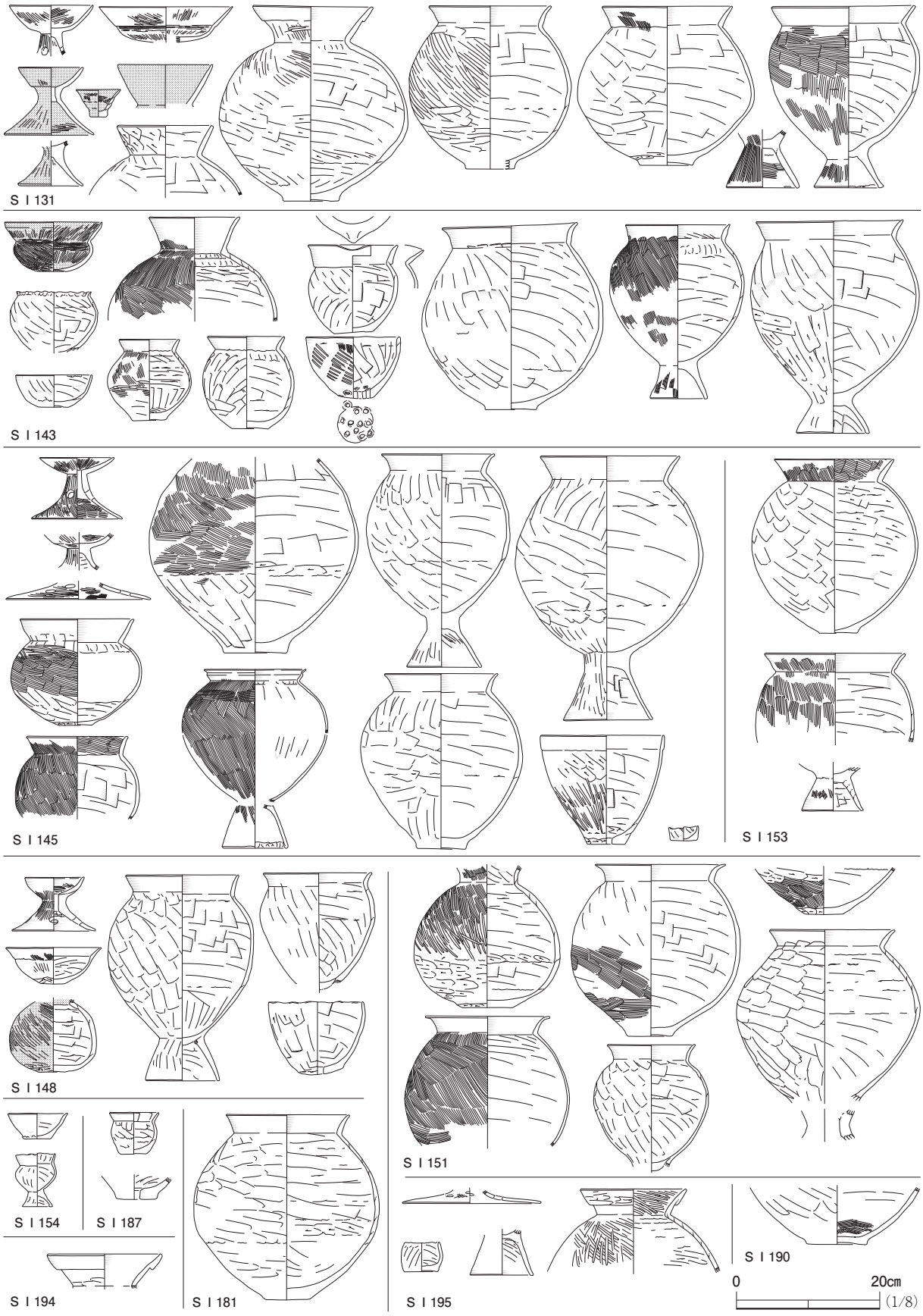


図489　出土土器集成　古墳時代前期（3）

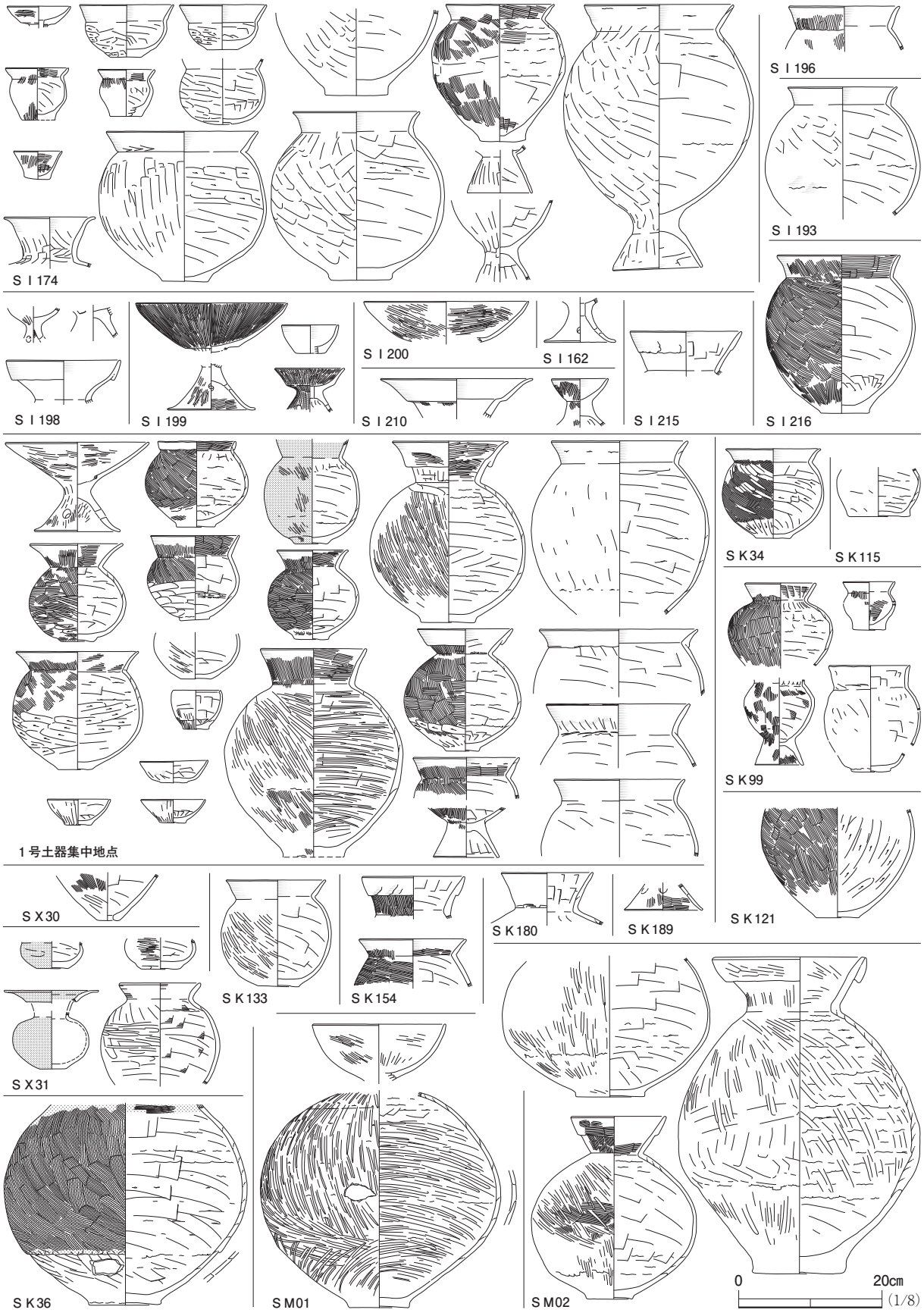


図490　出土土器集成　古墳時代前期（４）

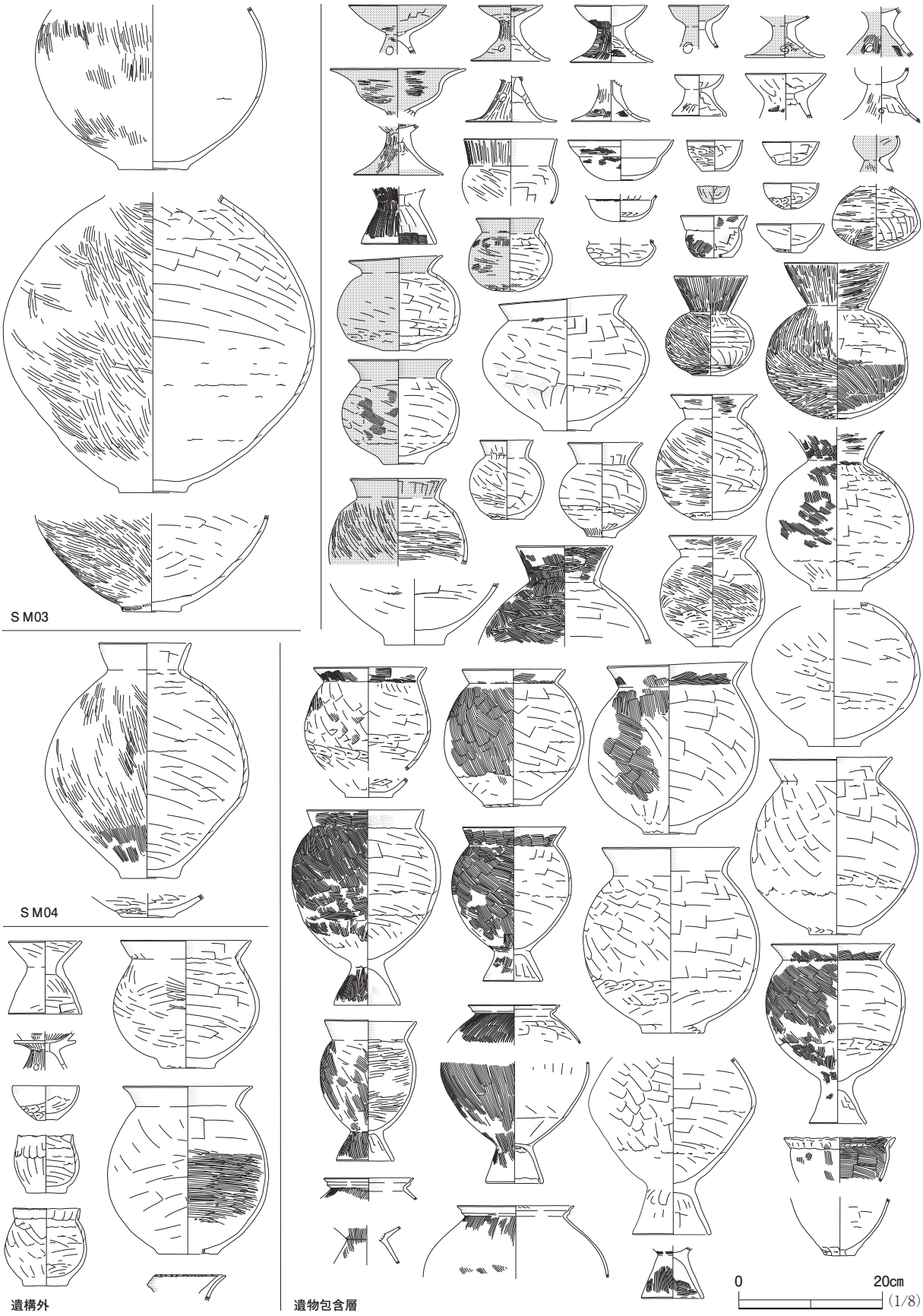


図491　出土土器集成　古墳時代前期（5）

と、平底の鉢が多く、小型丸底鉢が含まれないことなど、古墳時代前期でも古い様相をもっている。福島県域と様相が似る仙台平野の土器編年に対比させれば、Ⅱ期(辻1995)、塩釜１式(青山2010)と同じ様相をもつ。

一方、台付甕が多いこと、甕の外面にナデを施すものが多いこと、結合器台が目立つこと、有孔鉢に多孔のものがあることなどの上述した差異の他、甕の器形にも異なる様相が看取される。

(４)東北南部における本土器群の位置

本土器群の特徴、特に平底甕と台付甕の比率に注目してその内容を検討してみたい。表５は、福島県中通り地方と周辺地域における古墳時代前期の遺跡から出土する平底甕と台付甕の比率をまとめたものである。比率は、報告書に図示されている甕の実測図の底部の数をカウントして求めた。対象とした地域は、本遺跡の位置する福島県中通り地方と隣接地域で、宮城県域、福島県浜通り地方、同会津地方、茨城県域、栃木県域である。入手できた文献と時間の制約のため悉皆的な検討は

表５　平底甕と台付甕の比率

宮城県域			福島県域								栃木県域			茨城県域		
			中通り			浜通り			会　津							
遺跡名	平底	台付	遺跡名	平底	台付	遺跡名	平底	台付	遺跡名	平底	台付	遺跡名	平底	台付	遺跡名	平底	台付
伊治城	7	2	菖蒲沢A	2	0	三貫地田丁場	1	0	中谷内	11	0	下犬塚	3	8	薬師入	12	8
鶴ノ丸	2	1	大泉みずほ	0	0	山中	86	23	東上川原	7	2	烏久保	18	9	薬師入239集	8	4
宇南	1	0	岩田	0	0	桜井高見町A	3	1	内屋敷	4	0	赤羽根	25	31	三反田(1･2次)	9	24
佐沼城	13	4	中ノ内	3	0	荒井前	2	0	宮東	3	0	市ノ塚1分冊	19	12	三反田(3次)	2	2
高幌	3	0	勝口前畑	4	2	五畝田･犬這	5	1	中西	7	6	市ノ塚2分冊	10	9	三反田(4次)	1	10
留沼	14	2	上ノ台	1	0	谷内中	3	0	男檀	1	0	五料	16	29	三反田(5次)	2	10
成田	7	2	百目木	8	2	東広畑B	1	0	樋渡台畑	21	0	治松	0	1	武田西塙	11	9
山前	5	0	北ノ脇	1	0	鹿屋敷	17	3	杵ガ森･稲荷塚	37	1	溜ノ台	2	2	武田原前	3	0
色麻	1	0	徳定A･B	4	1	女迫	4	2	宮ノ北	13	0	古橋Ⅰ･Ⅱ	1	1	戸崎中山	55	14
下草古城	12	2	北山田	1	0	上郡B	0	0	盗人沢	47	0	八剣	25	10	出崎	0	1
須江糠塚	2	0	山中日照田	3	1	応時	3	2	和泉	8	6	エグロ	54	33	新善光寺跡	0	3
新山崎	5	0	東丸山	5	1	内宿	17	2	屋敷	16	0	松山	17	50	羽黒	10	6
新金沼	34	4	鴨打A	0	0	龍門寺	5	4				花の木町	19	2	篠崎	6	5
田道町	8	5	仲ノ平	8	0	水品	2	0				久保	17	2	原口･北前	25	29
山王	8	1	仲の町	1	0	折返A	67	19				寺野東	31	61	宮後	6	0
山王･町	2	2	八ツ木	16	2	菅俣B	15	2				烏森	5	10	金谷	5	12
沼向	33	9	殿畑	3	1	神力前126集	17	13				伯仲	11	8	二の沢A	29	19
今泉城	0	5	大池下	0	0	桜町	2	0				那須八幡塚	1	5	二の沢B	1	0
藤田新田	7	1	江平	0	0	朝日長者	10	4				森後	4	4	ニガサワ古墳群	19	18
下飯田	0	2	舟田中道	10	2	夕日長者	2	2				北原	2	1	高須賀中台東	3	7
西台畑	2	0	道南	1	3	上ノ内	1	0				堀越	17	7	長峰	20	9
土手内	1	0	落合	19	9										境松	5	23
下ノ内	3	0													大戸下郷	3	0
六反田	0	1													部田野山崎	29	25
伊古田	7	0													大串	12	3
大野田古墳群	6	0													奥山A	0	1
安久東	2	0													善長寺	35	15
昭和北	3	2													小田林	27	25
戸ノ内	2	1													神谷森	9	23
今熊野	0	1													裏山	1	1
野田山	20	6													沖餅	11	1
西野田	1	1													南丘	1	0
十三塚	5	2													五斗落	2	0
町裏	1	0													島名前野東	2	5
下増田飯塚	8	0													東前	5	2
北原	10	0													下土師東	29	6
六角	5	0													大塚	3	0
大橋	6	5													鍋山東原	8	2
蔵王堀の内	1	1													栗島	5	3
宮前	18	2													羽黒山	4	0
亘理堀の内	3	8													上野古屋敷	18	2
石垣	5	0													中畑	6	0
中筋	9	0													豆薬師北	1	0
北経塚	0	1													小作	1	2
入の沢	12	2													宮内	5	0
															前田村	8	2
															犬田神社前	5	1
															金谷	5	6
															島名熊野山	4	2
小計	294	75		90	24		263	78		175	15		297	295		471	340
合計		369			114			341			190			592			811
割合(%)	80	20		79	21		77	23		92	8		50	50		58	42

できなかったが、おおよその傾向は把握することができるものと思われる。栃木・茨城両県域はそれぞれの南北で様相が異なることも考えられるが、一括した。

この表から読み取ることができるのは、東北南部の太平洋側においては平底甕と台付甕の比率が８：２で平底甕が卓越する一方、栃木・茨城両県域では遺跡ごとの様相差が認められるものの、おしなべて栃木県域が５：５、茨城県域が６：４と、東北南部に比して台付甕の比率が格段に高い点である。日本海側の会津は９：１で台付甕の比率が低いのは、台付甕の組成率が低い北陸の土器圏にあることによる。

注目されるのは、本土器群における平底甕と台付甕の比率が、栃木・茨城県域に近い点である。

上述したように、本土器群は古墳時代前期のもっとも古い段階に位置づけられる。東北南部では、前期の古い段階には遺跡ごとの様相差が看取され(青山2010)、栃木県域でも隣接する遺跡で土器の様相が異なるという指摘がある(仲山2003)。本遺跡のこのような状況にも同じ背景があると推測している。

(５)本土器群の起源と背景

本遺跡を含め、古墳時代前期の前葉にあって遺跡ごとに異なる様相が認められるという状況をどう考えればいいのだろうか。それには、まず東北南部における弥生時代の終焉と古墳時代開始期の様相にふれる必要がある。

東北南部だけでなく利根川以東の北関東を含めた地域では、古墳時代の開始期に在地の弥生文化がみえなくなり、かわって南関東や北陸の文化をもつ集落が急速に分布を広げ、やがて古墳の築造を開始する、という現象がみられる(西川1995、比田井2004)。と同時に、遺跡数が増え、遺跡の規模も大きくなる。

なぜこのような現象がみられるのか、という点に関しては、南関東や北陸からの移住があり、その結果、それまでの文化と異なった文化をもつ集落群が出現した、という理解が多い(辻1998・2000など)。一方、このような移住説に対する批判も提出されている(斎野2010)。在地の文化、当地においては天王山式系の文化をもつ人々が新来の文化を徐々に受け入れた、という解釈である。

いずれにしても、主に関東の研究者によって、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、南関東とりわけ下総から北関東さらに東北南部に土器圏が拡大するという現象が指摘されている(西川1995、比田井2004など)のは前述のとおりである。その前段階には、平底甕が卓越する東京湾の東岸地域と台付甕が卓越する東京湾西岸地域から下総地域への人口の移動があり、台付甕と平底甕、ハケメ調整とナデ調整が相半ばする土器様相が成立することが指摘されている(比田井1995)。すなわち、東北南部や北関東に土器圏を拡大する直前の南関東には、平底甕が卓越する上総、台付甕が卓越する南武蔵、両者が相半ばする下総、という地域色が存在するとされる。

北関東から東北南部にみる上述のような平底甕と台付甕の比率の違いは、その故地における地域色と関連があるのではなかろうか。すなわち、東北南部は上総から、北関東は下総からそれぞれに土器圏が拡大したことを示唆していると考えられる。

問題となるのは、遺跡ごとの様相差である。前述のように、古墳前期初頭の仙台平野や栃木県域では遺跡ごとの様相差が指摘される一方、福島県中通り地方ではこの点についての情報が不足していた。そこに現れたのが本土器群である。古墳前期初頭における遺跡ごとの様相差は福島県域にも認められるということを、本土器群は示した。

このように、本土器群は北関東や東北南部の古墳時代開始期のあり方を示す土器群の一つであって、そこには南関東における地域色が反映されていると思われる。ここでは、詳細な検討を加えることができなかったものの、本土器群がもつ意味は小さくないことを指摘しておきたい。

（６）石製垂飾

石製垂飾は遺構外から２点出土している（図483－９・10）。いずれも前期の住居跡分布域から出土していることから、該期の遺物の可能性が高い。偏平な自然礫の長軸方向の縁辺近くに一孔を穿つものである。このような石製垂飾は東京都の多摩川上流域に分布が集中するという指摘がある（及川2013）他、埼玉県東松山市反町遺跡に複数の出土例が報告されている（赤熊他2011）。悉皆的な類例探索を行ったわけではなく、この種の遺物をとり上げた先行研究も多くはないが、上述のような指摘からすれば、南関東、とりわけ東京湾の東側に類例が認められる遺物といえる。

（７）鉄 製 品

当遺跡では該期の鉄製品が４点出土した。216号住居跡出土の鎌（図337－2）、152号住居跡出土の鉄鏃（図267－２）、193号住居跡出土の刀子の中茎と不明鉄製品（図314－５・６）である。中通り地方の古墳時代前期の集落跡から出土した鉄製品の確実な例はこれまでなかったが（青山2015）、本遺跡の出土例により４点となった。

宮城・福島両県域で古墳時代前期の集落跡から出土例した鉄鏃を探索すると、福島県会津坂下町樋渡台畑遺跡（古川他1990）17号溝跡、宮城県名取市野田山遺跡（小井川他1992）３号住居跡の２例が管見に入る。本遺跡出土例を含めた３例はいずれも無茎で、本遺跡と樋渡台畑各出土例はいずれも身に穿孔を有する。

弥生時代から古墳時代の鉄鏃を検討した大村直氏の分類に従えば、以上の３例は無茎三角形式で、「東国諸例には身の中央に単孔をもつものが多」いことが指摘されている（大村1983）。本遺跡出土例と樋渡台畑例は穿孔を有する点でもこれと同じ特徴をもつ。

鉄鎌について宮城・福島県両県域の古墳時代前期の集落跡からの出土例を探索すると、宮城県白石市梅田遺跡（遠藤・清野1984）の１例が管見に入る。

（８）土 製 品

16・94・193号の各住居跡から、横腹に貫通孔を穿つ円筒形の土製品が出土している（図49－13、図191－６、図314－４）。長さはもっとも大きな16号住居跡出土例で5.1㎝、径は1.5～2.2㎝と小型である。貫通孔の径は約２㎜である。

このような土製品については、垂飾あるいは錘であるとの解釈があり、弥生時代終末期から古墳時代前期の東海から南関東に分布することが指摘されている（合田1992、葉山2016）。が、本遺跡

出土品は193号住居跡出土例を除いて必ずしも形状は一致しない。

187号住居跡出土の頴稲の圧痕が表裏にある焼成粘土塊の類例は、千葉県流山市市野谷宮尻遺跡のＳＩ083（栗田2006）、同印西市向新田遺跡089号竪穴住居跡（金丸・落合2002）から出土している。後者は「表裏面に籾殻あるいは植物繊維の圧痕がみられる」と報告されている。

122号住居跡からは、杓子形土製品が出土していている。県内では、浪江町鹿屋敷遺跡第55号住居跡（山田1989）に類例がある。ただし、同例は柄の部分が中空である点が本遺跡出例と異なる。

（９）その他

古墳時代前期の遺物には、この他に種々の石製品がある。砥石が16・122号の各住居跡から、敲石が46・88・137・154・199号の各住居跡から、石皿が76号住居跡から、凹石が121・145・181号の各住居跡から出土している。

３　古墳時代後期

（１）出土資料の概要

古墳時代後期の遺物は、本遺跡から出土した各時代の遺物のうち古墳時代前期に次ぐ量がある。住居跡の床面に伴う一括資料も多く、当地域における該期の様相を検討するうえでの基準資料に加えうるものである。

遺物には、土師器、須恵器、石製模造品、砥石、編み錘、土製支脚、土製管玉、土製丸玉、臼玉、凹石、敲石、不明（鏃形）土製品、土製紡錘車がある。鉄製品は出土せず、須恵器は住居跡から出土したものはない。

（２）土器群の概要

住居跡19軒、土坑２基、祭祀跡２箇所、遺構外から出土した。器種には、杯、高杯、鉢、壺、甕、有孔鉢、甑、ミニチュアがある。

杯は、丸底で長く外反する口縁部をもち、口縁部と体部の境に内外面とも稜を有する器型が多くを占める。この他に、無頸の杯と須恵器模倣杯、やや偏平な半球形の体部に短く外反する口縁部をもつ古墳時代中期からの杯が少数みられる。外面調整は、口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけてヘラケズリ、内面調整はミガキが大半である。内面にミガキを施すものの大半は黒色処理を施す。内面にヨコナデとヘラナデが施されるものがまれにある。これには黒色処理は施されないが、器型は在地のものである。実測図を掲載した杯のうち黒色処理を施すものの割合は70％である。

高杯は、「八」字に開く脚部に杯を載せたものである。出土数は少ない。63号住居からはこれとは異なる器型の高杯が出土している（図136－12）。杯部、脚部とも欠損しているため全体の器形は不明であるが、類例をみないものである。

壺の組成率が低い該期にあって本遺跡からは比較的多くの壺が出土した。１・２号祭祀跡からまとまって出土した他、50・51・224号の各住居跡、177号土坑から中・大型のものが出土した。球胴に短く外反する素口縁を載せたものと長い口縁部を載せたものの二者があり、前者が多い。後者

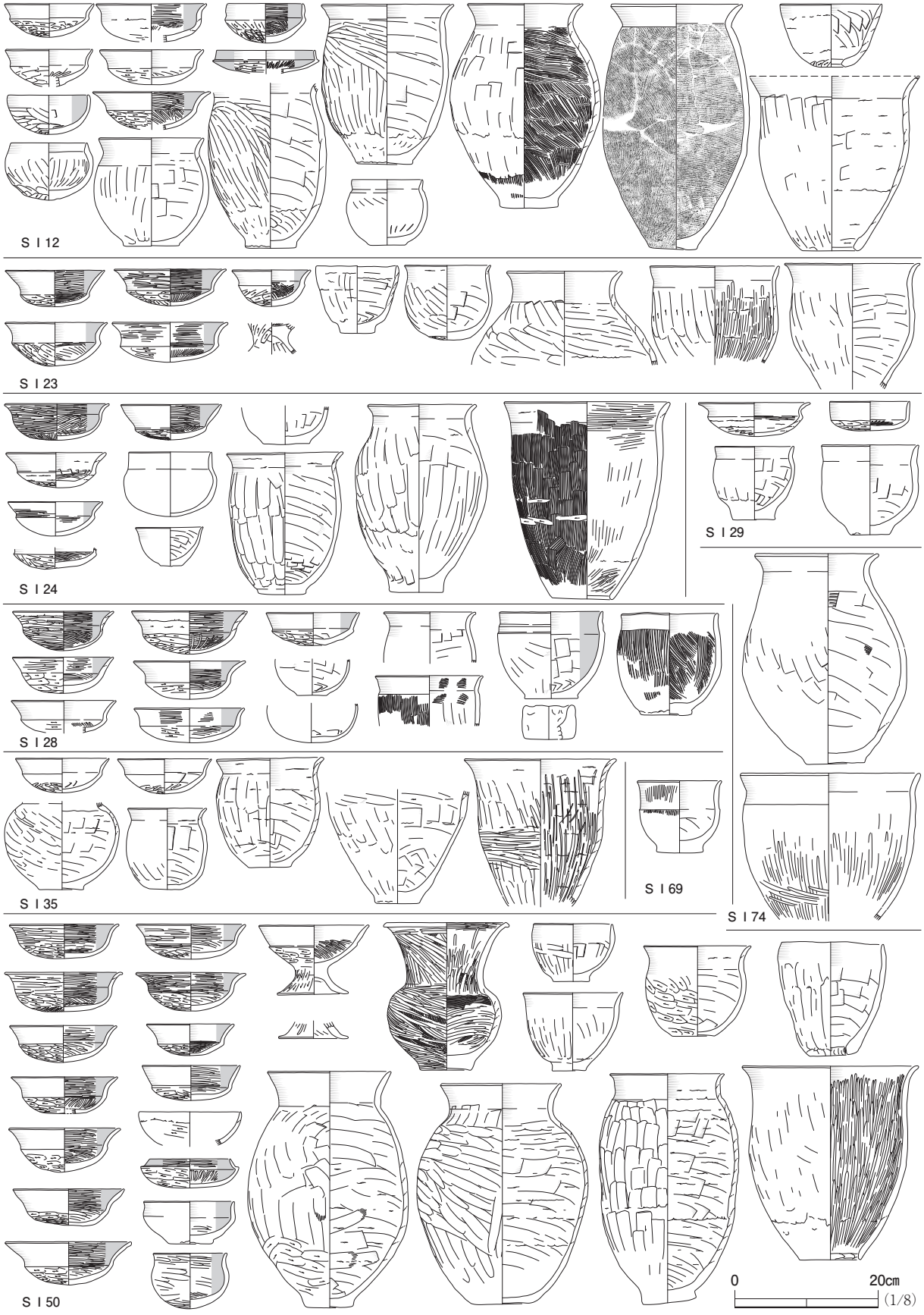


図492　出土土器集成　古墳時代後期（１）

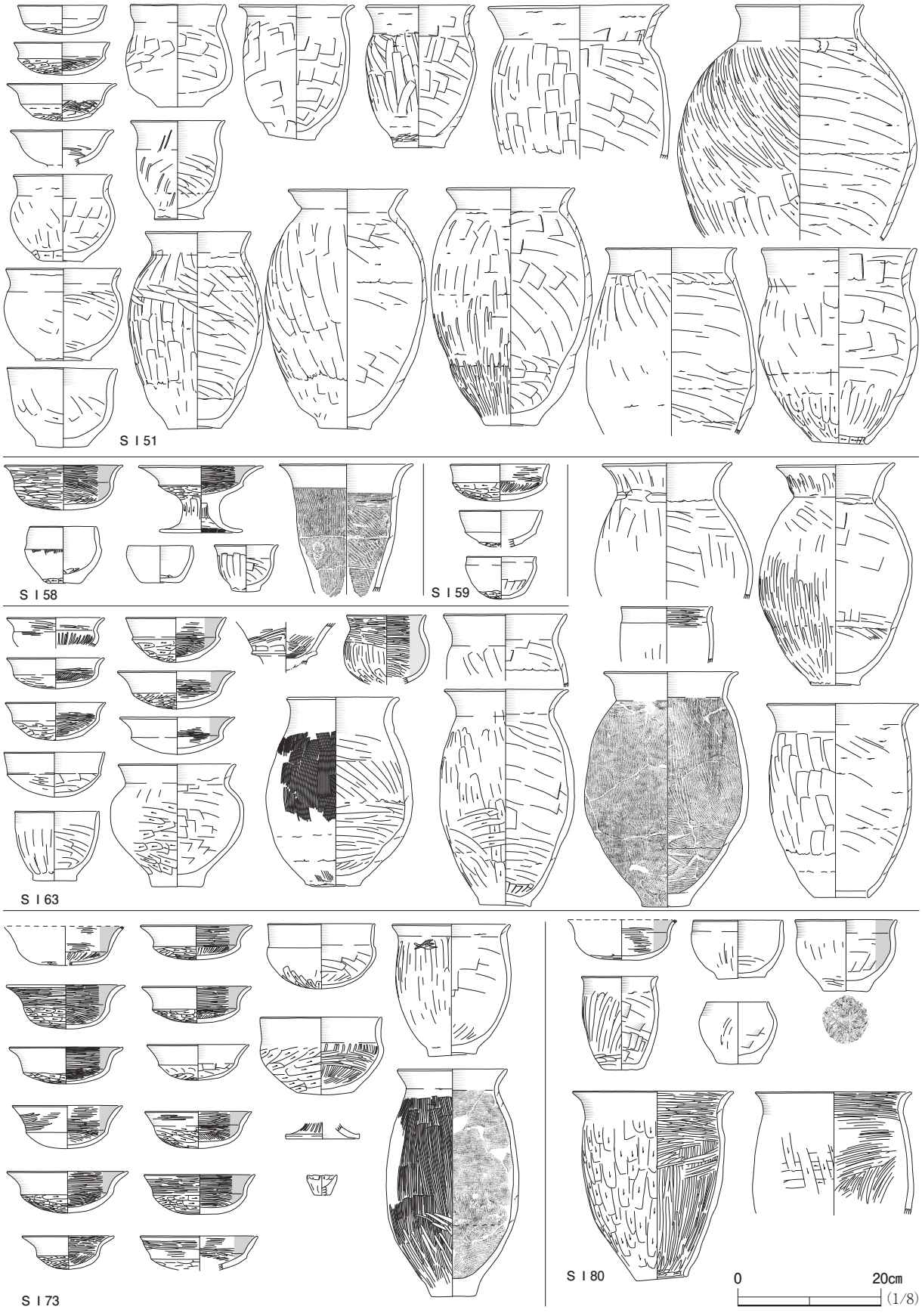


図493　出土土器集成　古墳時代後期（２）

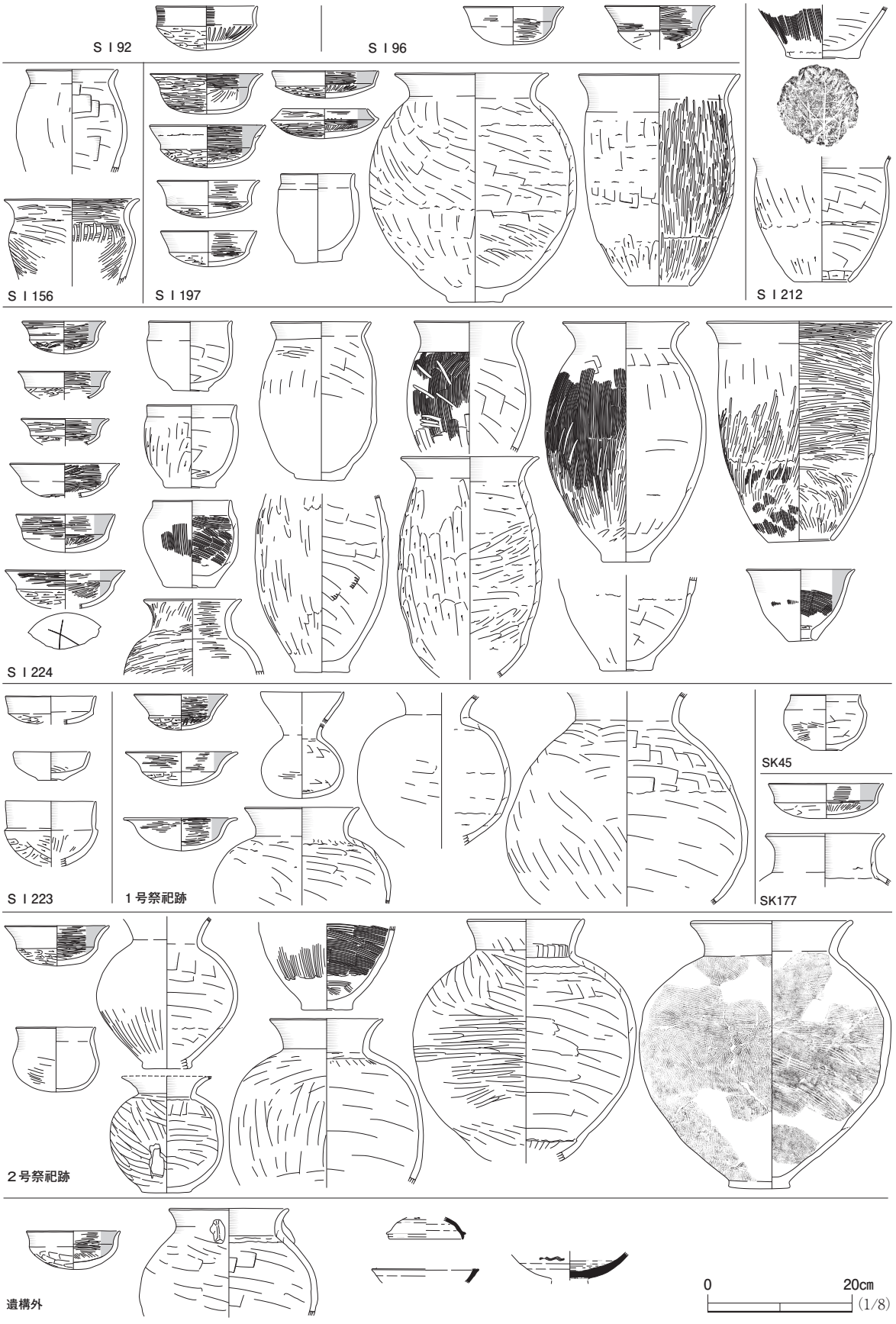


図494　出土土器集成　古墳時代後期（３）

は須恵器模倣であろうか。該期にしばしばみられる小型の壺は出土しなかった。

以上の、杯、高杯、壺には胎土が赤褐色のものが多い。一方、甕、甑、有孔鉢には、赤褐色の胎土をもつものは認められない。

甕は、法量に大中小があり、いずれも平底、口縁部が「く」字に外反もしくは外傾するもので、大型の甕は体部がラグビーボール形のものが多い。外面調整はヘラナデが大半で、ハケメ調整は少ない。底面に木葉痕を付すものが少数みられる。

甑は、寸胴もしくはやや張りのある体部上半から底部にむかってすぼまる器形で、口縁部はいずれも「く」字に外反もしくは外傾する。底部はいずれも無底である。外面調整はヘラナデとミガキが多く、ハケメは少ない。50号住居跡では、中型で無頸のものが１点出土している（図106－15）。

有孔鉢はいずれも小型で鉢形、単孔で、無頸のものと口縁部が短く外反するものがある。

（３）編年的位置

以上の特徴から、本土器群は舞台式に位置づけられる。須賀川市周辺に類例を求めれば、郡山市徳定遺跡（木本他1981）、同大根畑遺跡（柳沼1988）、などがあげられる。

舞台式期には、群馬県の榛名山を噴出源とする榛名－伊香保パミス（Hr－FP）が中通り地方にも降下し、遺構の堆積土が大量に含まれることで層自体が白色を呈することのある事例が知られている。本遺跡においても同パミスが堆積土に多く含まれる例が35・50・51・59号の各住居跡にあるものの、いずれも同パミスが降下した後に竪穴が掘削され、廃絶後に周囲から流れ込んだものである。このことから、本土器群はいずれも榛名－伊香保パミス降下後に位置づけられる。

（４）外来の土器

本土器群には外来の土器がいくつか含まれている。一つは関東系で、一つは会津型（菅原2007）である（註７）。

関東系の土器はいずれも須恵器模倣杯で、12号住居跡で１点（図40－11）、50号住居跡で１点（図106－14）、197号住居跡で２点（図319－５・６）出土した。12号住居跡出土例は内外面に黒色処理が施される。197号住居跡で出土した２点は杯身と杯蓋をそれぞれ模倣したものである。類例は、埼玉県行田市築道下遺跡（劔持和夫2000）、千葉県市原市草刈遺跡（小林他2010）など、南関東に求めることができるものである。

会津型土師器は224号住居跡から１点出土している（図346－６）。口縁部が外傾し、外面調整がミガキであることなど、会津型の特徴を備えている。

（５）本土器群が提起する問題

本土器群が明らかにしたことがいくつかある。古墳時代中期に多い器形であるやや偏平な半球形の体部に短く外反する口縁部をもつ杯が、数は少ないものの一定量含まれていることである。

また、舞台式は大型の壺をほとんど組成しないが、本遺跡では大型の壺が特に祭祀跡からまとまって出土した。このことは、大型の壺が祭祀に伴って用いられる場面があったことを示唆する。類例を加えて検討されるべき課題といえる。

本遺跡では住居跡に伴う一括資料が複数出土した一方、これらに須恵器が伴った例はなかった。須恵器は小片が遺構外から出土しただけである。従来から該期は須恵器の出土例が少ないことが指摘されているが、本遺跡でも該期の須恵器の少なさが認められる。

（６）その他の遺物

須恵器同様、該期に出土例の乏しい遺物に鉄製品がある。鉄製品は古墳時代中期に集落からの出土例が増える一方、後期には減少し、舞台式期にはほとんどみられない遺物で、栗囲式期に再び増加に転じる（青山2015）。本遺跡でも古墳時代後期の遺構からは鉄製品は出土しなかった。

（７）石製模造品

12・80号の各住居跡からは有孔円板が、祭祀跡からは臼玉が出土した。集落遺跡から石製模造品が出土するのは古墳時代中期から同後期前葉までで、後期後葉の舞台式期にはいわき市タタラ山遺跡（安田他1996）など少数例が確認されるのみである。本遺跡では住居跡の他、祭祀跡から臼玉が出土したことにより、舞台式期にも石製模造品を用いた祭祀が例は少ないものの継続して行われていたことが明らかになった。

４　奈良時代

（１）出土資料の概要

奈良時代の遺物は、住居跡６軒から出土した他、遺構外から少量が出土した。遺物には、土師器、須恵器、鉄製品（鑿）、砥石、土製品（カマド支脚）がある。

（２）土器群の概要

土師器と須恵器からなる。量的には土師器が多く、須恵器は少ない。土師器には、杯、蓋、鉢、甕、ミニチュアがあり、高杯、甑、有孔鉢は含まれていない。須恵器には、杯、壺、甕がある。

土師器の杯は、有段丸底、有段平底、内外面に段をもたないものがある。有段丸底杯の調整は、外面がヨコナデ、体部から底部かけてがヘラケズリ、内面にミガキを施すもので、段をもたない杯は内外面とも丁寧なミガキを施すものが多い。この他、125号住居跡出土土器には段をもたない杯の他にロクロ成形の杯が１点含まれている。

蓋は、つまみを有し内外面に黒色処理を施したものが33号住居跡から１点出土している。

甕は長胴で外面をナデ調整するもので、外面に薄く塗布した泥土を焼き固めて覆うものがある。

須恵器の杯は、体部が直線的に外傾する器形で、内外面にロクロナデ、平底の底部に回転ヘラケズリによる再調整を施すものである。

（３）編年的位置

以上の特徴から、本土器群は国分寺下層式の範疇で理解することができる。特に、87号住居跡から出土した一括資料は該期の編年の基準資料となる内容をもつものである。その他の住居跡出土土器については、量は多くないものの型式学的な新古を見出すことができる。

古い様相をもつのは、８・33・65号の各住居跡出土土器で、有段丸底の杯、有段平底の杯を含

む。新しい様相をもつものは、97・125号の各住居跡出土土器で、体部外面に段をもたず外面全体にケズリを施す杯を含み、さらに125号住居跡出土土器にはロクロ成形の杯と甕が含まれる。87号住居跡出土土器は有段の杯と外面に段をもたない杯の両者を含み、中間的な様相をもつ。

以上のことから、奈良時代には同時に多くの住居跡が併存したのではなく、少数の住居跡が小規模な集落を形成したと考えられる。

（4）その他の遺物

遺構外から出土した杯（図482－14）は、体部に把手が付き、把手の付近に二山の口縁部突起をもつなど、他に例を見出せないものである。調査区の東側で表採されたもので、どの時代のものかは不詳であるものの、器形などから本土器群に含めてよいものと思われる。

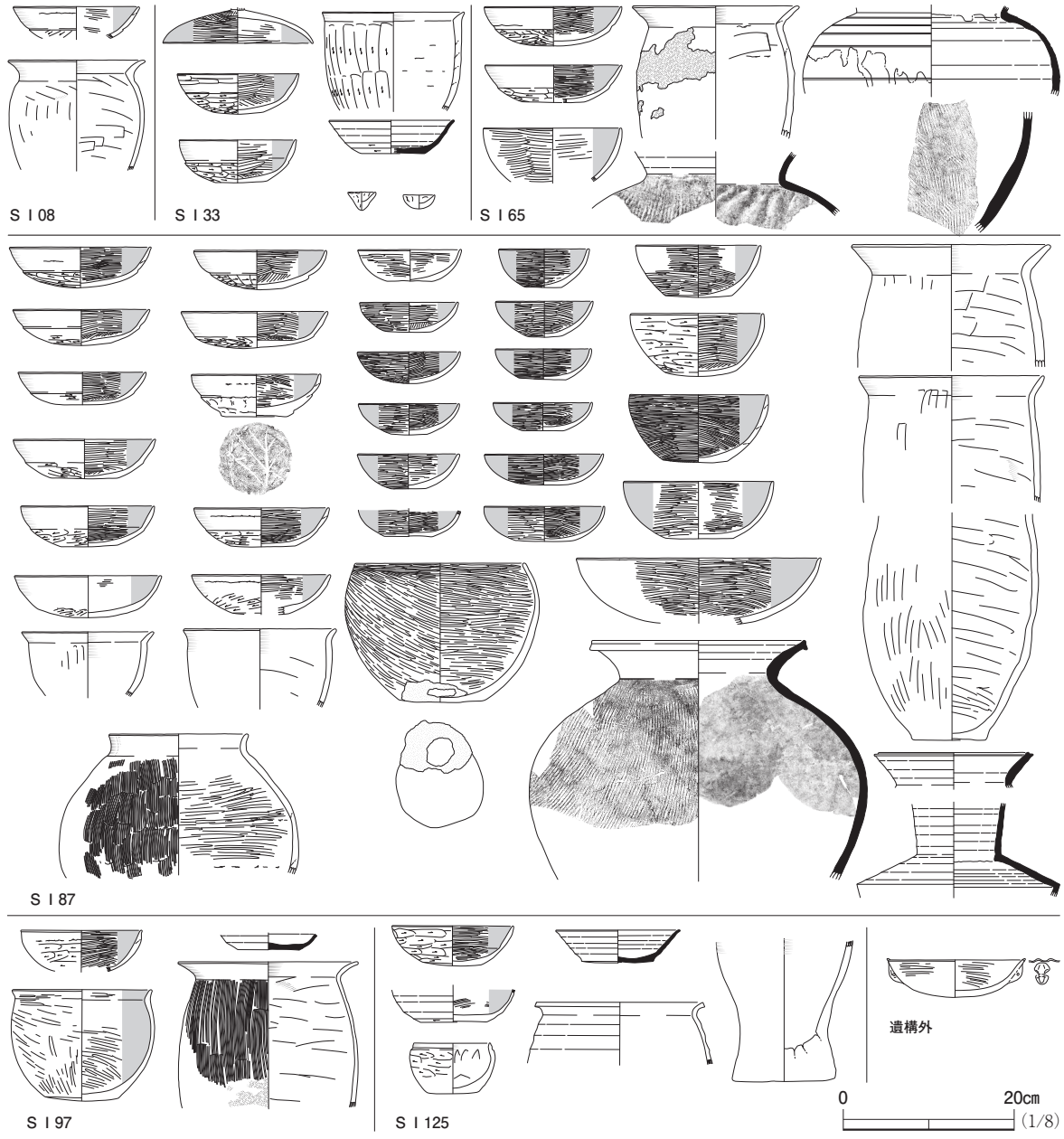


図495　出土土器集成　奈良時代

５　平安時代

（１）出土資料の概要

平安時代の遺物は、住居跡38軒、建物跡１棟、土坑３基と遺構外から出土している。遺物には、土師器、須恵器、石製品（カマド支脚、凹石、敲石、砥石）、鉄製品（刀子、斧、紡錘車、釘）、不明銅製品がある。

（２）土器群の概要

土器群は、土師器、須恵器、赤焼土器からなり、量的には土師器が多く、須恵器と赤焼土器は少ない。土師器には、杯、鉢、甕、甑、筒形土器、須恵器には、杯、瓶類、甕の各器種がある。赤焼土器は杯のみである。

土師器の杯はすべてロクロ成形で、外面にロクロナデののち回転ヘラケズリか手持ちヘラケズリによる再調整を施す。量的には回転ヘラケズリを施すものが多い。内面調整はミガキののち黒色処理を施す。外面にもミガキを施す高台付杯が39号住居跡から１点出土している（図88－８）。鉢と甕には、輪積み成形のものと輪積み成形したのちロクロナデを施すもの、ロクロ成形の小型品がある。甑は無底で底部端が外側に張り出し、体部に把手をもつ。

須恵器は、杯１点と瓶類１点の他は甕で、いずれも土師器と共伴する。

赤焼土器を出土したのは43・191号住居跡で、いずれも赤焼土器のみを出土した。

（３）編年的位置

本土器群は土師器杯の特徴から４つの段階に細分される。以下、古い順に述べる。

第一は、杯の体部が底部から直線的に外傾してそのまま口縁部に至るもので、回転ヘラケズリによる再調整を施すものが多く、手持ちヘラケズリは少数である。37・38・52・155号の各住居跡が典型である。

第二は、上述の杯に加え、体部が緩やかに湾曲しながら口縁部に至る杯を含む一群で、手持ちヘラケズリによる再調整が増加する。13・20・22・26・30・32・39・41・47・54・56・84号の各住居跡が典型である。

第三は、体部が緩やかに湾曲しながら口縁部に至り手持ちヘラケズリで再調整する杯のみからなるもので、42・81・182号の各住居跡が典型である。

第四は、赤焼土器のみからなる、43・191号の各住居跡である。

もっとも古相を呈する第一の土器群は、奈良時代のもっとも新しい土器群と非ロクロ杯の有無以外はほぼ同じ様相をもっている。このことから、本遺跡では奈良時代から平安時代へ断絶することなく継続して集落が営まれたと考えられる。

（４）墨書土器

本土器群には墨書をもつ杯が数点みられる。54・56号の各住居跡からは「主」があわせて５点、57・71号の各住居跡からは「成」がそれぞれ１点、30・67号住居跡からは「田」がそれぞれ１点、

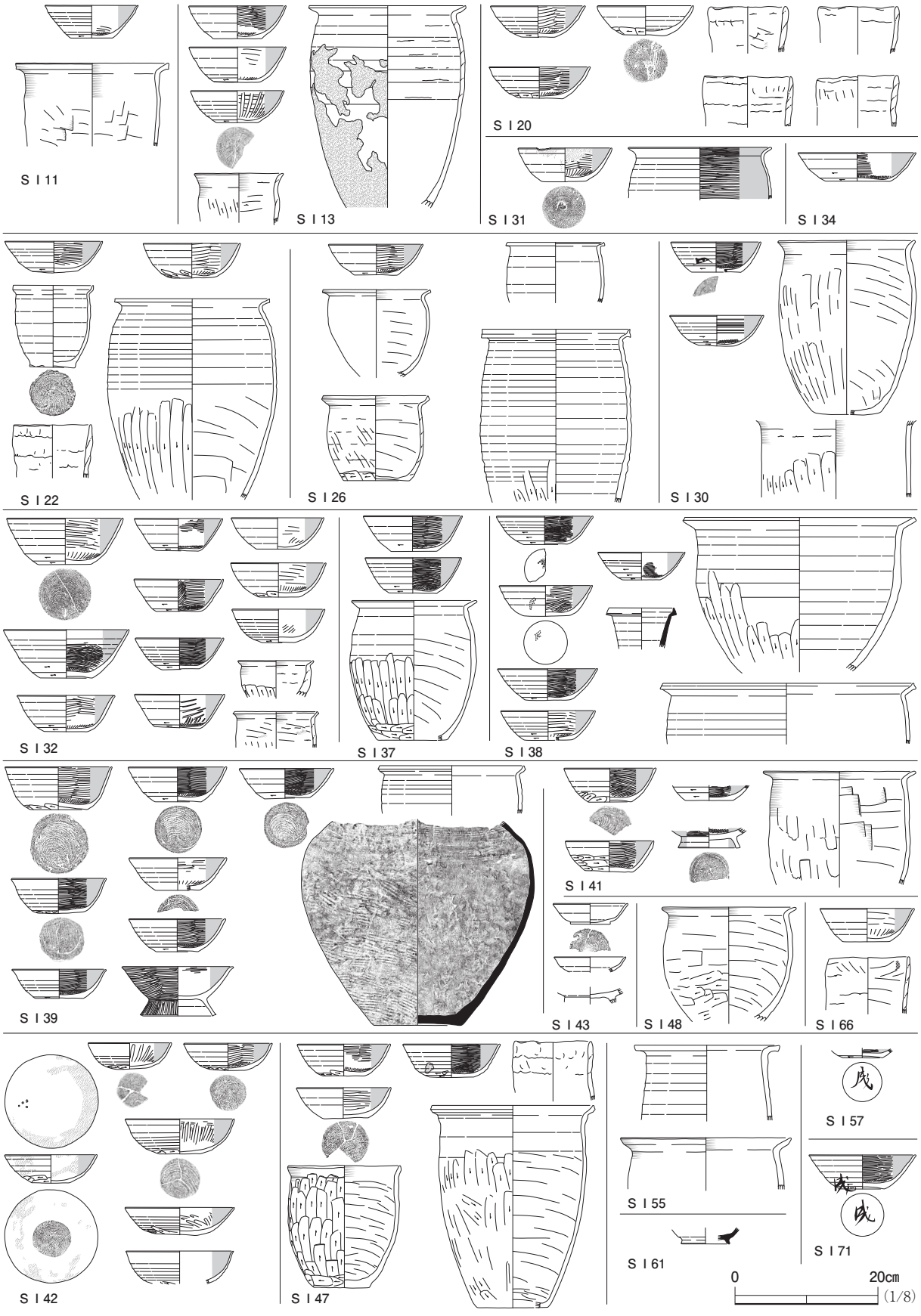


図496　出土土器集成　平安時代（1）

図497　出土土器集成　平安時代（2）

155号住居跡からは「大寶」が１点、12号土坑からは「仁」が１点、37号土坑からは「富」が１点出土した。この他、38号住居跡から判読不明の墨書が２点出土している。

（５）鉄製紡錘車

30号住居跡から出土した鉄製紡錘車は、紡輪の直下で紡茎を折り取り、それを紡輪上方の紡茎に束ね合わせたうえ、糸のような細い繊維でぐるぐる巻きにされている。この状態で床下の貼床層から出土した。糸そのものが遺存しているかは不詳であるが、少なくとも錆化した状態で紡錘車を覆う錆からその一部が露出している状態が観察される。ＣＴスキャンによる撮影によって、紡錘車を覆う錆の下に糸の痕跡が遺存していることが判明した(写真451)。　（青　山）

６　中　　世

（１）出土資料の概要

中世の遺物は、建物跡３棟、柱列１基、方形区画遺構２基、溝跡２条、土坑６基と遺構外から出土している。遺物には、陶磁器、石製品、鉄製品、木製品などがある。他の時期と比べて遺物の出土量が非常に少なく、小片のため図示できなかったものもある。

（２）陶 磁 器

陶磁器は、常滑焼・渥美焼・青磁などが確認される。

もっとも多く出土したのは常滑焼である。17号建物跡、１号方形区画遺構、15号溝跡、Ｇ－24グリッドから出土している。このうち１号方形区画遺構とＧ－24グリッドのものは同一個体の可能性がある甕である。口縁部は折り曲げによって、断面形状が「Ｎ」字状となっており、生産地編年の13世紀後半から14世紀後半の時期（中野1995）に属するものと思われる。

渥美焼は58号土坑から出土している。器種は壺とみられ、肩部に白色の釉薬が施され、胴下部には横位の沈線が認められる。おおよそ12世紀後半から13世紀前半頃の所産かと思われる（八重樫2013、安井2013)。

青磁は11・24号溝跡と、42号土坑から出土しているが、いずれも小片である。11号溝跡のものは器面に蓮弁文を施しており、胎土などの特徴から「龍泉窯青磁」の可能性が考えられ、12世紀前後のものとみられる。

（３）石 製 品

碁石と砥石が出土している。碁石は１号柱列跡から出土している。黒色のホルンフェルスを入念に研磨していた。砥石は24号溝跡と56号土坑から出土している。

（４）　銭　貨

銭貨が４点出土している。いずれも宋銭で、12号建物跡から「元豊通宝」が１点、27号建物跡から「皇宋通宝」と「治平元宝」が１点ずつ、42号土坑から「熙寧元寶」が１点出土している。いずれも11世紀後半に初鋳されたものであるが、流通した時期を考慮すれば13世紀前後に遺棄されたものであろうか。これらが出土した遺構は、屋敷に相当する一連の遺構群とみられ、建物の廃

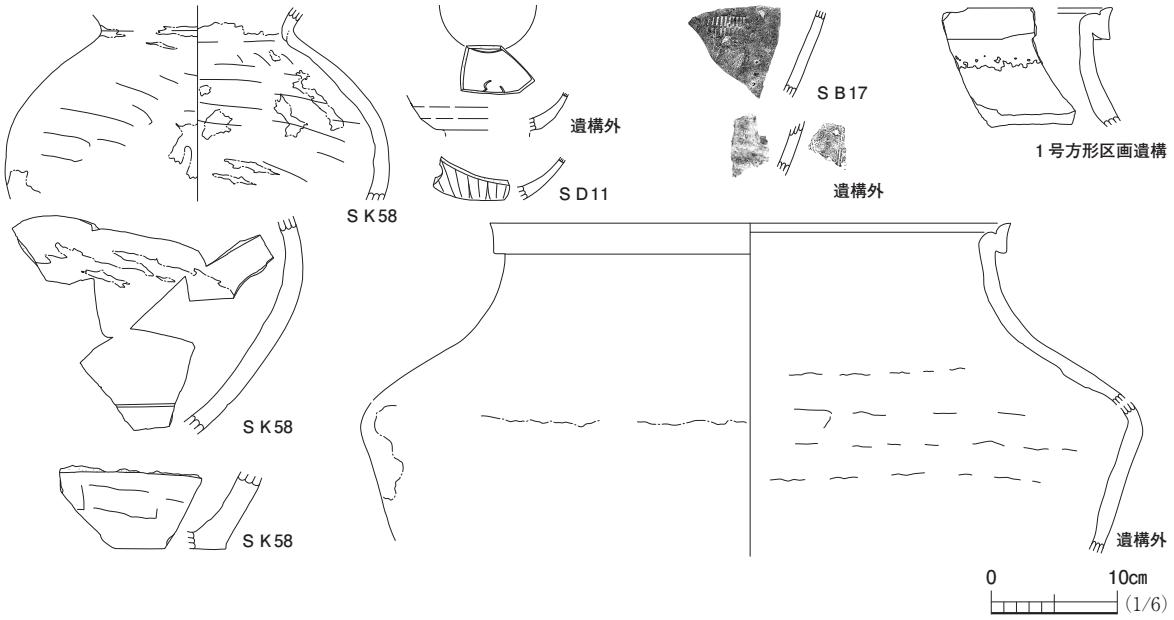


図498　出土土器集成　中世

絶時に意図的に遺棄したものと思われる。

（５）木 製 品

木製品はいずれも土坑から出土している。39号土坑からは曲物の底板が５点出土している。底板以外の部位は確認されず、未成品など不用になった物を廃棄したと思われる。40号土坑のものはいずれも井戸枠の構築材で、木製の杭と横桟および、先端を斜めに切断した竹が出土している。この他に76号土坑からは、箸のような棒状の製品が出土している。

（６）そ の 他

その他の遺物としては、２号方形区画遺構に伴う19号土坑から土製品が出土している。直径13cmほどと比較的大型のもので、周縁部を丁寧に打ち欠いて円板状に整えていた。本来は捏ね鉢などの陶器であったとみられる。（神　林）

第２節　遺　構

高木遺跡では、弥生時代終末期・古墳時代前期・古墳時代後期・奈良時代・平安時代・中世の、６つの時期の集落跡が確認された。ここでは、各時代の集落の概要や構造、主要な遺構の特徴を概観するとともに、若干の検討を行う。

なお主要な遺構である竪穴住居跡・掘立柱建物跡の所属時期は、各調査担当者の所見をもとに以下の通りとした。

弥生時代終末期：ＳＩ04・07・104・114・126・128・133・135・136・139・141・158・160・171・172・175・176・177・178・179・180・185・186・202・205・214・215・220・221・229・234・235・236・237

古墳時代　前期：ＳＩ01・02・03・05・09・15・16・18・44・46・60・68・75・76・77・88・89・90・91・92・93・94・95・98ａ・98b・99・100・101・102・103・105・106・107・108・109・110・111・112・113・115・116・117・118・119・120・121・122・123・127・129・130・131・132・134・137・138・140・142・143・144・145・146・147・148・149・150・151・152・153・154ａ・154b・157・159・161・162・163・164・165・166・167・168・169・170・174・181・184・187・189・190・193・194・195・196・198・199・200・201・203・204・206・207・208・209・210・211・216・217・218・219・222・225・226・227・228

古墳時代　後期：ＳＩ12・23・24・28・29・35・45・50・51・58・59・63・64・69・70・72・73・74・79・80・96・156・197・212・223・224・230

奈　良　時　代：ＳＩ08・33・65・78・87・97・125・183

ＳＢ15・16・18・19・22・23・24

平　安　時　代：ＳＩ10・11・13・14・20・21・22・26・27・30・31・32ａ・32ｂ・34・37・38・39・41ａ・41ｂ・42・43・47・48・49・52・53・54・55・56・57・61・62・66・67・71・72・81・82・83・84・86・124・155・173・182・188・191・231・232

ＳＢ01・04・07・08・09・10・11・37

中　　世：ＳＢ02・03・05・06・12・13・17・20・21・25・26・27・28ａ・28ｂ・29・30ａ・30ｂ・31・32・33・35・36・39

1　弥生時代終末期

（1）集落の概観

高木遺跡において、はじめて人が住み始めた時期である。この時期の遺構が掘り込まれるＬⅢｂ～ＬⅣおよびそれより下の層は、洪水に由来するとみられる厚い砂層や礫層となっている。おそらく弥生時代終末期に起こった大洪水によって多量の土砂が運ばれ、それによって形成された微高地上で生活を営み始めたのであろう。集落は、竪穴住居跡34軒、土坑９基、焼土遺構２基で構成される。この時期の遺構は、全般的に基盤層と遺構内堆積土が非常に酷似しており、遺構の検出はきわめて困難であった。遺物が出土したことで遺構の存在を把握したものも多数あった。

（2）竪穴住居跡

住居跡は西部と北部に集中域があり、東・南部は散発的に位置している。しかし集中域は、西部で８軒中７軒、北部は11軒中５軒がほぼ同一地点で重複しており、実際には、一箇所あたりで同時に存在したのは２軒ほどであったと思われる。また、東部は、古墳時代前期の遺構と激しく重複しており、全体の規模や形状が不明な住居跡も多く、完全に破壊されたものも存在したと思われる。また明確に遺構に伴う状況で出土した遺物もほとんど認められなかった。

図499　弥生時代終末期　遺構配置図

平面形・規模

平面形はおおまかに、隅丸の方形・長方形と楕円形に大別される。いずれも、いびつな不整形となっているものが多く、検出段階では住居跡かどうかを判断し難い状況のものが多かった。楕円形や不整方形となるものは西部と北部に多く、整った方形は東部や南部に多く位置する傾向にある。

規模は長軸長が判明しているもので、3.1～8.8ｍと幅があるが、おおまかに５ｍ前後・６ｍ後半・７ｍ以上の３つのまとまりが存在する。なかでも５ｍ前後の規模が標準的な大きさとみられる。竪穴の掘り込みは、ほとんどが遺存深20㎝未満の浅い掘り込みであった。

床・柱穴

柱穴は、明確な主柱穴構造は確認されず、径20～40㎝前後の規模のピットが、10基前後不規則に位置する。これらがすべて柱穴である確証はないが、柱穴であるとすればかなり細い柱材が用い

られていたと思われる。172・178号住居跡などでは、やや壁に沿って柱穴が並ぶようにもみえるが判然としない。

床は7・220号住居跡に貼床が施され、その他は基盤層をそのまま床面としていた。床面には微細な炭化物が散っていることが多く、また4・180・220・221号住居跡では、炉の周辺に踏み締まりとみられる硬化面が形成されていた。

貯蔵穴

貯蔵穴の可能性があるものは19軒で確認された。平面形は楕円形で、長軸長50～100㎝前後、深さは20～30㎝前後のものが多い。位置は壁付近に設けられるものが多いが、特定の位置に偏るような傾向はみられない。なかには、床面の中央や(180・186・220号住居跡)、炉の脇(133・185号住居跡)に位置するものや、複数箇所に位置するものもある。この中には貯蔵穴以外の機能を持つものも含まれていると思われ、詳細な機能については今後検討していかなければならない。

地床炉・粘土床炉

炉は15軒で確認された。規模は長軸長34～128㎝のものがあり、60㎝前後が平均的な大きさである。位置は、住居の中央からかなり壁側に寄るものが多い。構造は、明確な掘り込みを持たない地床炉が大半である。常に火を絶やさなかったのか、炉床の焼土がしっかりと発達しているものが多く、使用頻度は比較的高かったと思われる。

234・235号住居跡では、炉床に10㎝ほどの厚さの白色粘土が貼られ、その上面を火床としていた。こうした構造の炉は、「粘土床炉」「粘土板炉」(合田1988)と呼称されるものに近似しており、関東では弥生時代中期から古墳時代前期にかけて多く確認されている。分布では東京湾から西側の地域で多く、なかでも荒川下流域(武蔵台地北東部・大宮台地南部)に集中域が認められるという(合田2001)。管見では東北において同様な事例は確認されていない。わずかに茨城県薬王院東遺跡(井上1990)の1軒が認められるのみである。高木遺跡では茨城県に分布する十王台式土器が出土しており、北関東との交流によって、こうした炉がつくられたと考えられる。なお後述する古墳時代前期の住居跡でも、同様の構造が確認されている。

また、220・221・234号住居跡の炉内からは、動物のものとみられる微細な焼骨片が出土している。山形県庚壇遺跡40号住居跡(山形県埋蔵文化財センター2007ａ)でも、炉内から微細な動物骨が出土しており、これらは当時の食生活の一端を示しているものと考えられる。

(3)弥生時代終末期の住居跡の特徴

今回の調査では、非常に多くの住居跡が検出された。これは東北の当該期の遺跡としては屈指であるといえる。住居跡の特徴からは、定型的な構造を持たず、非常に簡素な作りであることが伺える。特に不整形な平面形や、不規則に位置する貯蔵穴やピットからは、どのような構造が復元できるか見当もつかない。これらの特徴から、長期間にわたる居住を想定するのは難しいと思われる。西部や北部で認められた激しい重複は、住居の構造の問題や頻繁に洪水に見舞われる本遺跡の立地条件の結果、頻繁な建て替えが必要であったと捉えるのが妥当と思われる。

当該期でも山形県の庚壇遺跡（山形県埋蔵文化財センター2007ｂ）や向河原遺跡（山形県埋蔵文化財センター2005）では、楕円形または隅丸方形で、４～６本の主柱穴と周壁にそって並ぶ多数の壁柱穴を持つ、比較的しっかりとした構造の竪穴住居跡が確認されている。一方、中通り地域では当該期の竪穴住居跡は、管見では７遺跡で確認されているが、いずれも不明瞭な構造の住居跡が単独で検出される程度である。遺物の出土量も非常に少ないことから、小さな集団が少数の居住人数で、多くの物を持たない生活を営んでいたものと思われる。

これらのことから、今回確認された多数の住居跡は、小さな集団が短期間で頻繁に地点を変えながら、居住を繰り返した結果であり、一時的な景観がはたして「集落」と呼べるほどのものであったかも疑わしいと考えられる。

（４）　土　坑

土坑は194号土坑を除くと、調査区中央部のＩ・Ｊ－14～16付近に８基まとまって位置している。２～３基の土坑が近接するものの、重複はしていない。この周囲には竪穴住居跡は位置しておらず、土坑のみが集中している。基本土層を確認すると、土坑が掘り込まれるＬⅣやその下に堆積するＬⅤが周囲より厚く堆積しており、当時は周辺よりやや小高い空間であったものと思われる。

土坑の特徴

土坑の平面形は楕円形または長楕円形のものが存在する。規模は長軸長で165～290㎝と幅があるが、200㎝前後と250㎝以上の２つにまとまっている。深さはいずれも20㎝前後と浅い掘り込みである。堆積土の特徴は共通しており、土坑を掘り込む基盤層と同質の土が堆積していた。また非常に細かい炭や小礫が堆積土に含まれていた。これらの堆積物は周辺の基盤層には含まれておらず人為的な要因が考えられた。出土遺物は、土器が出土したのが４基（47・183・191・194号土坑）、土器小片とアメリカ式石鏃が出土したものが１基（143号土坑）で、それ以外からは目立った遺物は出土していない。

土坑の性格について

このように、機能や性格を明示するような成果は得られなかった。しかし、規模・形態的特徴や、短期間のうちに埋め戻されているといった共通点が確認できる。また居住域からやや離れた地点に集中し、近接した位置にありながら重複しない点などから、土坑墓の可能性を考えている。

当該期の土坑墓は多くはないが、宮城県下ノ内浦遺跡（下ノ内浦遺跡調査会1988）や新潟県山元遺跡（新潟県教育委員会2009・村上市教育委員会2013）などで確認されている。いずれも複数の土坑墓や埋設土器（土器棺墓）からなる墓域を形成している。副葬品は、石器・剥片・玉類・炭化米などが認められるが、なかでも石鏃を副葬する事例が多く認められる。前述した２遺跡以外で土坑墓以外にも埋設土器内に収められた事例や、湯川村桜町遺跡では方形周溝墓の主体部に副葬されていた（福島県教育委員会2011）。

一方で、副葬品とみられる土器が出土した事例は少なく、47・183号土坑のように小型・中型の完形土器が１点出土する事例は、前述した下ノ内浦遺跡や青森県千歳遺跡（青森県教育委員会

1976）など限られた事例しか知られていない。このような事例はむしろ弥生時代中期に多くみられる。福島県では、下高野遺跡（目黒1969）や岩代陣場遺跡（馬目1971）、一ノ堰Ａ・Ｂ遺跡（福島県教育委員会1988）の土坑墓の一部にみられ、「土器供献土壙墓」といった呼称もされている（鈴木2010）。高木遺跡のこれらの土坑が墓であるならば、弥生時代中期以来の伝統を引き継いでいるのかもしれない。

２　古墳時代前期

（１）集落の概観

弥生時代終末期と同様に、ＬⅢ～ＬⅣを基盤層とする集落である。集落は、竪穴住居跡112軒、畑跡３群・２箇所、土器集中地点１箇所、土坑62基、土器埋設遺構４基、遺物包含層１箇所で構成される。今回の調査で確認されたなかで、もっとも規模の大きな集落が営まれた時期である。また東北の当該期の集落遺跡としても、遺構の数や種類の多様さで、群を抜いている。

弥生時代終末期の集落とほぼ同じ地点を中心に集落が展開しており、調査区の西側にはほとんど広がらない。集落の構造は、竪穴住居群が展開する居住域と、畑跡がつくられる耕作地および祭祀に関する空間が、一部重複しながらも、それぞれ明瞭に分かれて展開する。

なお、東端部の基本土層や遺構の重複状況からは、集落継続期間中に少なくとも２度洪水の被害に遭ったと思われる。集落全体も厚い洪水堆積層に覆われていることから、最終的には大規模な洪水によって集落が廃絶したと思われる。次に集落が展開するのは古墳時代後期まで待たねばならず、大規模な洪水の結果、高木遺跡周辺はしばらくの間、居住に適さない環境となった可能性が高い。

（２）竪穴住居跡

住居跡は北部（Ⅰ区）・東部（Ⅴ区）・南部（Ⅱ・Ⅴ区）にまとまって位置している。Ⅱ区中央部は、やや分布が希薄である。しかしこの範囲は上層・下層ともに攪乱を受けており、本来は調査区東側の全面に、住居跡が展開していたものと想定される。なかでも東部は重複が著しく、最大で８軒前後重複する地点もあり、全体の規模や形状がわからないような住居跡が多数検出された。北部・南部も密接するような位置関係にあるものが多く、上屋や周堤の存在を考慮すると、同時に存在したとは考え難いものが多い。出土遺物の様相からは、遺構間に大きな時間差は認められないことから、洪水などの要因で頻繁に住居を立て替える必要があったものと考えられる。

平面形・規模

平面形は、方形または長方形を基調とするものに分けられるが、比率ではほぼ半々である。また弥生時代終末期にみられた、平面形がいびつな不整形となるものも存在する。住居内施設の配置など、基本的な構造については大きな差は認められない。

規模は長軸長が判明するもので２～10ｍと幅があるが、大きくは３ｍ後半から４ｍ、５～６ｍ、７ｍ以上の３つにまとまる傾向がある。なお最大規模の140号住居跡は、一辺10ｍ以上と想定され、高木遺跡および中通り地域では屈指の規模となるが、重複により住居内の構造など不明な点が多い。

図500　古墳時代前期　遺構配置図

火災住居跡

火災住居跡は、明確なものは５軒（１・３・76・105・121・174号住居跡）だが、それ以外にも堆積土や床面から炭化材が検出されるものがある。ただし多くは住居廃絶後の窪地で、廃材などを燃やしていると判断された。また174号住居跡のように、炭化材とともに特異な出土状態を示す土器が確認される事例も認められた。121号住居跡は、炭化材が壁に密着した状態で立て並んでいた。また火災住居跡ではないが、116号住居跡では葦または萱とみられる炭化材が壁に沿って検出されている。これらの炭化材は上屋または壁の構築材と考えられる。

床・柱穴

床は、大半がＬⅣまたはＬⅤをそのまま床面としていた。貼床は26軒で確認された。このうち中央部を掘り込んで貼床を施すのが６軒（１・３・５・162・201・210号住居跡）、周縁部を溝状

に掘って貼床を施すのが11軒（16・46・88・120・122・123・143・152・153・154ｂ・203号住居跡）、掘形全面に貼床を施すのが９軒（15・90・121・145・148・154ａ・161・195・200号住居跡）であり、特定の傾向は見いだせない。

柱穴は、４本の主柱穴を方形に配置する構造（またはその可能性が高い）のものは15軒（1・３・９・15・16・44・46・88・95・120・121・122・123・131・174号住居跡）で認められた。柱穴の大きさは40～50cmほどのものが多い。この他にも、弥生時代終末期でも認められた、不規則にピットが多数位置する住居跡も存在する。また174号住居跡は主柱穴の内側に、一回り小さい柱穴が並行して位置している。

貯 蔵 穴

貯蔵穴は55軒で確認された。平面形は、円形・楕円形・隅丸方形などがあるが、多くは楕円形である。規模は長軸長や直径で20～200cmと幅があるが、80cm前後のものが多い。深さは20～50cmのものがあり、なかでも40cm前後のものが多い。住居隅に位置にするものが多く、炉の対壁の隅に位置するものが目立つ。88・159号住居跡では２段掘り構造となっている。また93号住居跡の貯蔵穴の底面の砂層上には灰黄褐色粘土が貼られていた。

その他の施設

その他の施設としては174号住居跡のベッド状遺構が挙げられる。住居壁中央に奥行き・幅１ｍ前後の小さな張り出し土壇が設けられている。宮本分類のⅠ－Ⅲ型に類似しており（宮本1990）、祭壇や棚としての機能が考えられる。

また154号住居跡の壁際からは、径50cm、厚さ10cmの円板状の灰白色粘土塊が、浅い窪みの中に置かれた状態で出土している。この粘土は、93号住居跡の貯蔵穴底面や、後述する炉に貼られるものと同質であり、住居内で使用するために保管していたものと思われる。同様の事例は、郡山市山中日照田遺跡Ｄ地区11号住居跡（郡山市教育委員会1982）や山形県の高擶南遺跡ST202（山形県埋蔵文化財センター2004）などで認められる。

炉

炉は59軒で確認された。平面形は円形・楕円形・不整形などがあり、楕円形がもっとも多い。大きさは長軸長で30～150cmと幅があるが、60cm前後がもっとも多い。掘り込みを持つ炉は７・76・174号住居跡の３軒のみで、大多数は明確な掘り込みを持たない。住居内での位置は、中央から一方の壁に寄った部分に作られる傾向がある。主柱穴構造が判明している住居跡では、柱穴同士を結んだ線よりわずかに外側に位置する事例が多い。

炉の多様な構造

古墳時代前期の炉にはいくつかの構造が認められた。もっとも多いのは地床炉で42軒が該当する。ほとんどが明瞭な掘り込みを持たず、床面上でそのまま火を焚いていたと思われる。

次に多いのが炉石を伴う地床炉である。13軒（15・16・76・88・90・93・120・121・123・153・154ｂ・174・195号住居跡）で確認された。炉石は20～30cmほどの細長い自然石が多く、炉の縁や長軸の

一端に、住居壁と平行になるように設置されている。炉石の数は、大半は１個であるが、76・93・120号住居跡では２個横並びに設置されている。多くは炉床や床面に置いただけであるが、174号住居跡などでは、掘形に炉石を据え付けている。これら炉石は、「枕石」・「炉縁石」など慣用的に呼称され、こうした構造の炉は「石添地床炉」などと呼ばれている。機能については明確でないが、東海・中部高地・関東全域で広く存在が認められる（合田1988・鶴見1996など）。

また特異な事例として、145号住居跡では３個の炉石が火床を囲むように「コ」字状に配置されており、中部高地に多く認められる「石囲炉」（小山2017）に近似している。

さらに170号住居跡では、偏平な石の上面が水平になるように設置され、上面に被熱の痕跡が認められた。東京の多摩地域に集中する、偏平な石の上面を火床とする「石床炉」（及川2017ａ・ｂ）に近似している。

また、弥生時代終末期でも認められた「粘土床炉」も確認された。古墳時代前期では２軒（76・98ａ号住居跡）で確認された。いずれも直径40cm前後、厚さ10cmほどの白色粘土を炉床に貼り、上面を火床としている。76号住居跡は石添地床炉から粘土床炉に炉が作り替えられ、98号住居跡では住居の作り替えと同時に、地床炉から粘土床炉に作り替えられている。

周辺地域の様相

弥生時代から古墳時代前期にかけて、多様な炉の構造が認められることは、関東や中部高地では早くから認識されていた。東北では事例が少ないこともあり、さほど注目されなかったようであるが、今回いくつかの類例を見出すことができた。

中通り地域では「石添地床炉」が散発的に認められる。管見では西郷村道南遺跡（福島県教育委員会1980）、白河市舟田中道遺跡（白河市教育委員会2002）、道南北遺跡（白河市教育委員会1982）、大玉村上ノ台遺跡（大玉村教育委員会1992）、郡山市北山田遺跡（郡山市教育委員会1988）、福島市勝口前畑遺跡（福島市教育委員会1995）の６遺跡で確認されている。

また高木遺跡の周辺では、「石床炉」に近似した構造が仲の町遺跡に認められ（須賀川市教育委員会2001）、中部高地系の「埋甕炉」・「土器敷炉」と呼称されるものに炉石を添えた構造が、仲ノ平古墳群５号住居跡で確認されている（須賀川市教育委員会1987）。

「粘土床炉」は東北には今のところ類例は見いだせず、わずかに北関東の栃木県砂部遺跡（栃木県教育委員会1990）に存在が認められる程度である。

このように、他地域にルーツをもつ炉が中通り地域に多く存在するという事実は、この地域の古墳文化が関東を中心としたさまざまな地域の影響のもとに成り立っていたことを示していると思われる。また、弥生時代終末期に続いて「粘土床炉」が確認されたことは、弥生時代終末期の人々と古墳時代前期の人々との関連性を考えるうえで、重要な視点と考えられる。

（３）　畑　跡

畑跡はＦ・Ｇ・Ｈ群の３つのまとまりと、23・52号畑跡の２箇所が該当する。大きくは北部と東端部に位置しており、いずれも東西方向に延びており、竪穴住居跡が展開する居住域を意識して

いるものと思われる。

北部の畑（Ｆ群）は住居群と重複している。重複関係からは、北部に位置する住居が廃絶した後に畑がつくられている。よって居住域は北部から東・南部に展開していき、北部が空閑地になった段階で、耕作地になったものと思われる。

東端部の畑は、東に向かって下がる谷地形の西側斜面に位置している。洪水によって堆積したとみられる厚い砂層を挟んで、上下２面にわたって畑（Ｇ・Ｈ群）がつくられている。いずれの面も南北90ｍと広い範囲にわたって畑をつくり、畝間溝の方向も一致することから、上面の畑は洪水によって埋没した下面を復旧したものと思われる。

下面の畑の傍らには、胴部を穿孔した小型壺や、２点を合わせ口にした小型鉢などが置かれており、なんらかの祭祀の痕跡とみられる。

（４）土器埋設遺構

東端部の畑と居住域との間には、土器埋設遺構が５基（36号土坑を含む）位置している。いずれも大型の壺の口縁部を打ち欠き、別の土器で蓋をする合わせ口の構造となっている。土器の内部は１号土器埋設遺構が空洞で、その他は土が充満した状態であった。いずれも内部から遺物などは出土せず、性格を明示する知見は得られていない。

当概期における東北での類例は、福島県勧請内古墳の２例（辻ほか2011）と宮城県宇賀崎１号墳の１例（宮城県教育委員会1980）であり、けっして多くはない。いずれも古墳の周辺埋葬の「土器棺」と推定されている。

同様の事例は、むしろ弥生時代後期に多く認められている。関東では方形周溝墓の周辺埋葬や、土坑墓群とともに墓域を形成する事例などが知られている（林2008・鈴木2010）。東北では、新潟県山元遺跡（村上市教育委員会2013）、宮城県下之内浦遺跡（吉岡1988）、福島県和泉遺跡（福島県教育委員会1991）などが知られている。いずれも土坑墓とともに墓域を形成し、副葬品が出土した例もあることから、「土器棺」として捉えられている。

これらの事例からは、高木遺跡の事例も「土器棺」である可能性は否定できない。しかし１号埋設土器のように、内部に何かを入れていた形跡が認められないことをどのように考えたらよいのかといった問題もある。また、「合わせ口にした土器を埋設する」という行為が、「弥生時代からの在地の伝統」と捉えるか、「関東からの影響」なのかといった点も重要な問題である。高木遺跡に居住した集団の性格にかかわることであり、周辺地域の様相も含めて今後検討する必要があるだろう。

（５）土器集中地点

土器集中地点は、東端部の畑の東側に位置する。上層の畑が洪水によって埋没した後に形成されたとみられる。高杯・鉢・壺・甕といった土師器がまとめて置かれており、口縁部や底部に人為的な打ち欠きがなされていることから、何らかの祭祀の痕跡とみられる。また、この周辺には土器集中とは別に、遺物包含層として多くの遺物が出土している。この中にも赤彩された壺・鉢・高坏などが比較的多く、同じような性格のものも含まれていたとも考えられる。洪水によって畑が被害を

受けるたびに祭祀を行い、使用した土器を遺棄していったのであろうか。

東北の同様な事例は、山形県川前２遺跡（山形県埋蔵文化財センター2012)、宮城県留沼遺跡（古川市教育委員会1999)、宮城県下草古城跡（宮城県教育委員会1996）などで認められる。このうち川前２遺跡と留沼遺跡では、小型の鉢や壺が組成の大半を占めており。高木遺跡とやや様相が異なる。下草古城跡の事例は、いくつかのまとまりから成り立っており、複数回にわたって土器が遺棄されたとみられる。器種組成も高木遺跡の事例に近い。

このような祭祀に関連する土器の集積は全国的に認められ、もっとも早い例は弥生時代後期に認められる（田中2012)。こうした遺構が形成される場所は、集落と集落外との境界付近や、集落の縁辺で展望が開ける地点、さらには集落の広がる平坦面から沖積地などの変換点付近に多く、関東では古墳時代前期から認められるとされている（鶴間2007)。おそらく高木遺跡の事例も、関東と同様の性格のもので、集落の端に祭祀の道具を繰り返し廃棄したものと思われる。

３　古墳時代後期

（１）集落の概観

集落は竪穴住居跡28軒（うち１軒は古墳時代中期）、畑跡１群・１箇所、溝跡５条、祭祀跡２箇所、土坑29基で構成される。前期に集落が形成されなかった、調査区西側のⅢ・Ⅳ区を中心に展開している。遺構は、古墳時代前期の集落の廃絶後に堆積したＬⅡｂ②･③を掘り込んで作られている。

集落の構造は古墳時代前期と同様に、居住域・耕作地・祭祀関連の遺構が、それぞれ明瞭に分かれて位置する。

（２）竪穴住居跡

竪穴住居跡は調査区の北部と南西部の高まりにまとまって位置している。重複関係にあるのは24・45号住居跡と、35・212号住居跡と、58・69号住居跡の３例で、その他は一定の間隔をあけて位置している。北部には一辺10ｍ前後の高木遺跡では最大規模となる大型住居が３軒（50・51・63号住居跡）位置している。また南西部にも大型住居跡が２軒（73・74号住居跡）位置している。

平面形・規模

平面形は方形を基調とするものが大半で、わずかに長方形のものが存在する。規模は長軸長が判明するもので2.5～10.6ｍと幅があり、大きくは４ｍ以下、５～６ｍ前後、８ｍ以上の３つにまとまる。特に50・51・63・74号住居跡は８～10ｍ前後の規模で、高木遺跡で確認された竪穴住居跡の中では最大規模の大きさである。ただし74号住居跡はカマドや貯蔵穴といった住居内施設が確認されていないことから、他とは性格の異なる建物跡であった可能性が考えられる。

火災住居跡

火災住居跡と判断されたのは50・51号住居跡の２軒のみである。いずれも床面や壁の一部に焼けた痕跡が認められた程度である。よって住居全体を焼失させるような火災ではなく、住居廃絶に伴い部分的に火を焚き、廃材などを燃やしたものと思われる。

図501　古墳時代後期　遺構配置図

床・柱穴

床は、大半がＬⅢ・ＬⅣなどの基盤層を掘り込んでそのまま床面としていた。貼床は５軒（28・29・80・223・224号住居跡）で確認された。このうち224号住居跡は、周縁部に溝状の掘形を掘って、その部分に貼床を施している。他は全面に貼床が施されていた。

柱穴またはその可能性があるピットは５軒（50・63・96・212・224号住居跡）で確認された。このうち50号住居跡は４本の主柱穴が方形に配置される構造が確認される。96・224号住居跡も一部しか検出されていないが、同様な構造である可能性が高い。

カマド

カマドは18軒で確認された。カマドが取り付く方位は、北壁８軒（23・29・45・50・63・73・

96・80号住居跡)、南壁５軒（24・28・35・59・224号住居跡）、東壁３軒（12・51・69号住居跡）、西壁２軒（70・79号住居跡）である。このうち63号住居跡はカマドを作り替えており、当初のカマドの左脇に片袖を再利用して新たなカマドを構築している。カマドはいずれも燃焼部から煙道がほぼ同じ幅で住居外に延びる構造となっている。燃焼部の袖は住居内に向かって長く延びるものが多い。煙道は住居壁から１m前後と長く延びるものと、ほとんど延びずに立ち上がるものに分かれる。燃焼部･煙道ともに天井は崩落しており､機能時の状態を留めていたものは確認されなかった。袖の先端には比較的大きな袖石が立てられており、50・51号住居跡では鳥居状に組んだ礫が崩落したような状態で検出された。住居の一端に、焼けた大型礫がまとめられた状態で検出された住居跡（24･224号住居跡など）もあり、焚口はこうした礫を鳥居状に組んで構築していたと思われる。

28・51・69・224号住居跡では燃焼部に自然石をもちいた支脚が残されていた。また、意図的に遺物を燃焼部に遺棄したとみられる事例が確認された。28号住居跡の支脚は小型の鉢が被せられていた。35号住居では内部に杯を入れた状態の土師器甕２点を、破壊した燃焼部の上に遺棄していた。69号住居跡は大型の鏃型土製模造品が、燃焼部に突き刺さるように出土した。これらの事例は、カマドの廃絶時に何らかの祭祀行為があったことを示すものと推察される。

貯 蔵 穴

貯蔵穴とみられるものは11軒で確認された。平面形は楕円形である。長軸長100cm前後で、深さは20～30cm前後のものが多い。大半がカマド脇に位置しており、カマドに向かって右側に位置するものが６軒（12・23・29・51・63・96号住居跡）、左側に位置するものが３軒（28・59・224号住居跡）、その他の壁側に位置するものが２軒（80・197号住居跡）である。平面規模に対しやや浅い掘り込みのものが目立つ。51号住居跡のＰ２などでは、貯蔵穴内部に甕が置かれたような状態で出土しており、「土器据え穴」のような機能のものも含まれていると思われる。

なお、いわゆる「張り出し貯蔵穴」と呼称される構造は確認されなかった。中通り地域は、「張り出し貯蔵穴」分布の集中域のひとつとされており（鶴間2011)、天栄村舞台遺跡では10軒中４軒と、比較的多く確認されている（天栄村教育委員会1981)。こうした差異が何を示すかについては明らかでないものの、集落の性格を考えるうえで重要な視点になるものと思われる。

棚状施設・石敷き施設

この他に注目する施設として、棚状施設とカマド脇の石敷き施設が挙げられる。棚状施設は63・80号住居跡で確認されている。63号住居跡は古いカマドの燃焼部を埋めて構築し、80号住居跡はカマド脇の壁際に､黄褐色土を盛土して構築している｡いずれも上面には土師器が遺棄されていた。カマド脇に位置する棚状施設の性格については、道具置き場の他､「神棚」的な性格が指摘されている（桐生2005)。今回確認された事例は、いずれも上面には、杯や鉢が遺棄されていることから、食生活に関する道具置き場であったと思われる。

カマド脇の石敷き施設は63号住居跡で確認されている。カマド袖に沿って、小さい川原石を丁寧に敷き詰め、床面よりわずかに高くなるように構築されていた。石の固定にはカマド構築土と同

じ土を用いていることから、カマドと一連の施設であることが考えられる。管見では、栃木県の砂田遺跡１区６号住居跡（栃木県教育委員会2002）と、杉村遺跡13号住居跡（栃木県教育委員会2010）の２例が類例として確認された。しかし時期が異なることや、機能などが明らかではなく、かなり特異な施設といえよう。いずれもカマドおよび貯蔵穴を意識して構築されており、これらに関連する施設と考えられる。

10ｍ以上の大型竪穴住居跡

当該期の竪穴住居跡で特筆される点は、10ｍ前後の大型竪穴住居跡が複数確認されたことである。中通り地域では、この時期に大型住居跡が一時的に姿を消すとされていた（青山2015）。しかし、本遺跡では一辺９～10ｍが４軒（50･51･63･74号住居跡）、一辺８ｍが２軒（73･96号住居跡）確認され、こうした大型竪穴住居跡は中期以降継続的につくられていたことが明らかとなった。

なかでも最大規模の63号住居跡は、２基並列する位置に作り替えられるカマド、カマドに付随する石敷き施設と棚状の施設、壁周溝など、多様かつ特異な住居内施設が認められた。遺物の面で大きな差異は見いだせないが、集落内のなかでも多くの居住人数をかかえる有力な世帯の住居であったと考えられる。

（２）　畑　跡

畑跡は、調査区の中央部Ⅲ・Ⅳ区の境に位置するＣ群や50号畑跡が当該期に属する可能性が高いと考えている。古墳時代前期と同様に居住域からやや離れた緩斜面に位置し、比較的広い範囲にわたって畑がつくられている。畝間溝は南北方向に延びるものが多く、北部の住居群を意識して作られているとみられる。

（３）祭 祀 跡

祭祀跡は２箇所確認された。いずれも当該期の遺構の空白地帯に形成されている。この周辺は、住居跡や畑が立地する位置よりもさらに標高が低く、いわゆる水辺かどうかは明らかでないが、水はけが非常に悪い空間である。遺構が展開し始めるのは後述する奈良時代以降であり、古墳時代後期においては居住や耕作に適さなかった空間とみられる。いずれも遺物の量や広がりは非常に小規模である。遺物はいずれも土師器の壺と杯がまとまって出土し、１号祭祀跡からは臼玉・鍛冶滓・骨片も出土している。なお本遺跡から、鍛冶に関連する遺構は確認されていない。また土師器の壺についても竪穴住居跡からは出土しないことから、これらの遺物は祭祀のために持ち込まれ、最終的にはまとめて居住域から離れた位置に遺棄したものと思われる。

当該期の祭祀に関する遺跡としては、須賀川市西部に位置する桙衝神社祭祀遺跡（長沼町2000）が挙げられる。磐座とみられる巨岩からやや離れた地点に、多量の土器を遺棄する非常に大規模な祭祀跡である。出土遺物は小型の甕や手づくねの鉢・杯が主体であり、高木遺跡で認められた大型の壺や、臼玉・鍛冶滓なども認められない。このように遺跡の立地や、出土遺物の種類や量に大きな差があることから、本遺跡の祭祀跡とは性格が異なるものと考えられる。

群馬県黒井峯遺跡の調査では、竪穴住居跡から離れた畑や道の傍らに小規模な祭祀跡が位置する

ことが明らかになっている（子持村教育委員会1991）。また、居住域や畑からやや離れた地点に、遺構が形成される点は、古墳時代前期の土器集中地点とも共通する要素である。今回確認された祭祀跡も、集落内で行われた小規模な祭祀の残滓であると考えられる。

４　奈良時代

（１）集落の概観

集落は竪穴住居跡８軒、掘立柱建物跡７棟、柱列１基、畑跡１群・１箇所、溝跡１条、土坑２基、で構成される。古墳時代後期に遺構が展開しなかった南東部を中心に位置する。遺構は、古墳時代後期の集落が廃絶した後に堆積する、ＬⅡａ③・ＬⅡｂ①を掘り込んで作られている。攪乱を受けて遺存状態がきわめて悪い住居跡も多く、既に破壊されてしまった遺構もいくつか存在したとみられる。それらを考慮しても検出された遺構数は少なく、もっとも小規模な集落跡といえる。また、竪穴住居跡から出土した土器の様相では、多少の時間差が想定されることから、同時に存在していた遺構は、さらに少なくなるとみられる。

（２）竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区南東部に点在するように位置しており、居住域として認識されるようなまとまりは認められない。また、同時期の竪穴の重複は認められない。

平面形・規模

平面形は方形（65・78・87・97・125号住居跡）が主体で、わずかに長方形（８・33号住居跡）が確認される。

規模は長軸長が判明しているもので4.7～７ｍである。古墳時代後期にみられた８ｍ以上の大型住居跡は認められず、５ｍ前後の規模が主体となっている。

床面・柱穴・貯蔵穴

床面は５軒で貼床が認められた。87・97号住居跡は周縁部を中心に貼床を施し、他は全面に貼床を施している。古墳時代の貼床と比べて、粘性の強い土を使用している。カマド前面を中心に非常に硬く締まっているものが多い。

柱穴は３軒（87・97・125号住居跡）で確認された。いずれも４本の主柱を方形に配置する構造である。貯蔵穴が認められたのは１軒のみで、33号住居跡ではカマドに向かって右側に位置している。古墳時代に比べ、割合が大きく減少したといえる。65・87号住居跡からは須恵器の甕が出土しており、貯蔵穴の機能が須恵器などに移った可能性もあるが、詳細は不明である。

カ マ ド

カマドは６軒で確認された。このうち東壁に位置するもの（８･33･87･97･125号住居跡）がもっとも多く､南壁に位置するものが（65号住居跡）1軒存在する。またこのうち２軒（８･87号住居跡）は北壁から東壁へカマドを作り替えている。カマドの構造は古墳時代後期に比べて、袖が短く燃焼部の幅がやや広いものが多い。87号住居跡は両袖の先端に袖石が立てられている。煙道は長細く、

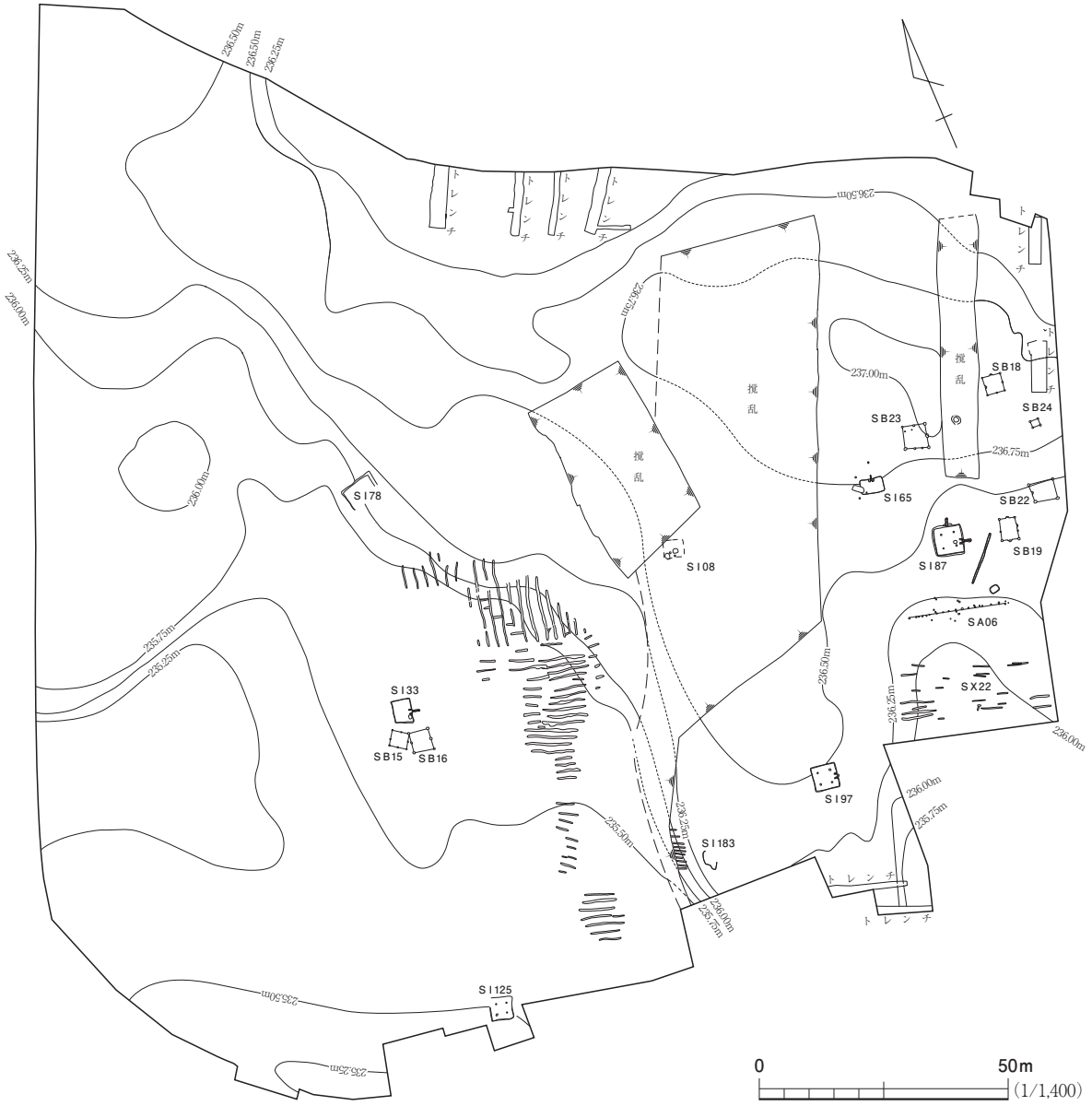


図502　奈良時代　遺構配置図

先端にピット状の煙出しをもつ構造が33・65・87号住居跡で認められる。33号住居跡のカマドの燃焼部からは、土師器と須恵器の杯が1点ずつと手づくねのミニチュア土器が2点出土し、煙道の先端部にも土師器杯が正位で置かれていた。これらは意図的に遺棄されたとみられ、カマド廃絶時に行われた何らかの祭祀行為の痕跡と思われる。なお、高木遺跡の東側に位置する沼平遺跡の５号住居跡では、カマドを中心として多量の土玉とともに、ミニチュアの手づくね土器が出土している（福島県教育委員会1981）。この他に８・９号住居跡でも堆積土から、これらの遺物が出土している。この時期に高木遺跡の周辺では、カマドや住居の廃絶時に、このようなミニチュア土器などの遺物を遺棄する風習があったのかもしれない。

焼失住居跡・スサ入り焼成粘土塊

焼失住居跡は２軒（87・97号住居跡）確認された。87号住居跡では、上屋構築材とみられる炭化

材と、土屋根が検出された。またカマド周辺からは、スサを混ぜ込んだ痕跡のある焼成粘土塊が多く出土しており、土壁が存在していた可能性が考えられた。東北で土壁が確認された事例は、宮城県伊治城跡の357住居跡（築館町教育委員会1995）などがある。カマド側の壁に土壁が施されたとみられる事例は各地で認められており、カマドからの熱を防ぐ目的と考えられる。

97号住居跡からも同じような焼成粘土塊が出土している。しかし量が少なく、平坦に整えられた面が少ないことから、土壁を想定するのは困難であった。土壁以外としては、いわき市タタラ山遺跡27号住居跡で、カマドの燃焼部上面のアーチ部分と掛けられた土器の肩部に、スサ入り粘土を貼り付けている事例が確認されている（福島県教育委員会1996）。報告者はこれを燃焼部の密封および掛けられた土器の固定と推察している。また、東京都中里峡上遺跡の事例では、カマド側の住居壁に土壁を施し、さらに土壁と同じスサ入り粘土を、カマド表面と両脇の棚状施設に貼り付けていた（共和開発2008）。土壁同様に防熱を意図したものか、補強材かは不明であるが、これらの事例からは、97号住居跡から出土したスサ入り焼成粘土塊も、カマドまたは周辺施設に部分的に貼り付けられていたものの可能性が高いと思われる。

管見では中通りにおいて、竪穴住居の構造の一部としてスサ入り粘土が用いた例は認められない。しかし、高木遺跡の東側に位置する大久保Ａ遺跡で確認された、同時期の半地下式の登窯では天井の構築材としてスサ入り粘土を用いていた（福島県教育委員会1981）。このような竪穴以外の技術が、なんらかの理由で竪穴住居の構造に用いられたものと思われる。

（３）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区中央付近に２棟、東端部に５棟位置している。いずれも一辺３～４ｍ前後の規模で、方形を基調とした側柱構造の建物である。方位にまとまりはなく、柱筋の通りもさほど良いとはいえない、ややいびつな平面形となるものが多い。機能を明示する所見は得られていないが、竪穴住居跡に隣接して位置する傾向にあり、倉庫や作業小屋としての機能が考えられる。倉庫であるとするなら、「屋」と呼ばれる平地式構造の建物（山中2004）と考えられる。

（４）畑跡・柱列

畑跡は調査区中央部に位置するＡ群と、南東隅に位置する22号畑跡が、この時期の可能性が高いと考えている。Ａ群は古墳時代と同様に、緩い斜面地に立地し比較的広い範囲にわたって畑をつくっている。一方、22号畑跡はＡ群に比べ、畝間溝の間隔や長さが小規模かつ不揃いである。この畑跡と並行するように６号柱列が位置しており、柵や垣といった性格の一連の遺構である可能性がある。

（５）調査区東隅の遺構群と集落の景観

調査区東隅では、87号住居跡を中心として、小型で長方形の住居跡・倉庫とみられる掘立柱建物跡・柱列・畑跡など複数の遺構がまとまって位置している。仮にこれらが同時に存在していたとするならば、群馬県黒井峯遺跡で確認された、「一世帯に相当する家屋群」や、後の時代の「屋敷地」に近似した景観となるものと思われる。87号住居跡は、土壁が施されていたことや、多量の土器

が残されているなど、他の住居跡とはやや様相が異なる。複数の倉庫を持つ点からも、集落の中でも有力な世帯が居住していた可能性が高い。調査区中央付近に位置する33号住居跡も、同時期とみられる15・16号建物跡が近接し、東側に畑跡が位置している。

このように、この時期の集落は小規模であるが、竪穴住居１軒を中心に、掘立柱建物や畑が周囲を取り囲む単位が点在する「農村」のような景観の集落であったと思われる。

５　平安時代

（１）集落の概観

集落は、竪穴住居跡47軒、掘立柱建物跡８棟、畑跡３群、溝跡５条、土坑37基、焼土遺構１基などで構成される。遺構は調査区のほぼ全域に位置している。特に北側のⅠ・Ⅳ区や、南東部のⅢ区に遺構がまとまっており、奈良時代の集落の範囲から徐々に北および西に範囲が広がったものと思われる。

出土土器の様相からは、大半の遺構は９世紀前半にまとまる。奈良時代からの時間的な断絶は認められないことから、８世紀後半から９世紀前半にかけて継続的に営まれた集落といえる。しかし、43・191号住居跡の２軒は、10世紀前後とやや離れた時期に機能していたとみられる。

（２）竪穴住居跡

竪穴住居跡は３～５軒がまとまって位置している。重複関係にあるものは38・49号住居跡、32・41号住居跡、37・41号住居跡で、さらに32・41号住居跡はそれぞれで建て替えが行われている。遺構の位置関係や出土遺物の様相などを考慮すると、ひとつのまとまりの中で、同時に存在していたのは２～３軒程度であったと思われる。

平面形・規模

平面形は、方形が26軒、長方形が22軒で比率に大きな差は認められない。

規模は長軸長が判明しているもので2.5～９ｍと幅があるが、推定９ｍの１軒（42号住居跡）が飛びぬけて規模が大きく、他はすべて６ｍ未満である。もっとも多いのは3.5～4.5ｍであり、奈良時代のものよりさらに小型化している。特に小さい2.5～３ｍの規模のものは、貼床が施されず、カマドや貯蔵穴認められないものが多く、住居とは異なる機能を有していたものと思われる。

火災住居跡

火災住居跡は３軒（22・47・182号住居跡）確認された。なかでも22号住居跡は、上屋構築材とみられる炭化材が放射状に検出されている。また焼土の検出状況からは、土屋根であった可能性が高いと思われる。

床面・柱穴

床面は、貼床を施すものが29軒（10・11・13・14・22・26・27・30・32ａ・34・37・38・39・41ａ・43・47・52・53・54・66・67・81・84・124・155・173・191・231・232号住居跡）で、基盤層をそのまま床面とするのが18軒（20・21・31・41ｂ・42・47・49・55・56・57・61・62・71・

図503　平安時代　遺構配置図

82・83・86・182・188号住居跡）である。貼床は全面に施す事例が大半となる。また、カマド前面を中心に非常に硬く締まる傾向にある。30号住居跡の貼床からは、紡軸に糸が巻き付けられた鉄製紡錘車が出土している。貼床構築時に意図的に埋められたものと思われる。

柱穴については、確実に柱穴といえるものが少なく、構造についても不明な点が多い。37号住居跡は壁に沿ってピットが位置しており、壁柱穴の可能性も考えられる。小型の86号住居跡は中央に柱穴が２基並んでおり、２本柱で上屋を支える構造であったとおもわれる。

カ マ ド

カマドは37軒で確認された。カマドが取り付く方位は、東壁が26軒（11・13・14・20・22・27・30・31・32ａ・32ｂ・38・39・41ａ・41ｂ・43・47・48・52・54・67・81・84・124・155・191・231号住居跡）で、西壁が７軒（10・26・34・53・66・173・188号住居跡）で、北壁が４軒（21・

37・42・55号住居跡）で、東壁に付くものが圧倒的である。また、この時期には、住居の隅にカマドを設ける事例（53・54・173・188号住居跡）が散見されるが、いずれも煙道のみの検出で、燃焼部は遺存していないことから詳細な構造は不明である。なお、32ｂ・124号住居跡は北から東に、37・54号住居跡は東から北へ、53号住居跡は東隅から南東壁中央へカマドを付け替えている。

燃焼部は、遺存状況があまり良くないものが多く、袖や燃焼面の焼土が完全に片付けられたとみられるものも見受けられた。古墳時代後期や奈良時代のものと比べ、袖や燃焼部の規模は小さい。袖の先端や内側に袖石が立てられるものが14軒（11・13・22・26・27・32ａ・37・41ａ・42・47・48・52・53号住居跡）認められた。38号住居跡では土師器甕の破片を２つに割り、袖の内側に貼り付けていた。また、13・52号住居跡の燃焼部には支脚とみられる自然石が立てられていた。

煙道は長細く住居外に延びて、煙出し部分がピット状になるものが多く認められる。52・53号住居跡では、煙道の天井が遺存していた。

貯 蔵 穴

貯蔵穴は24軒で確認された。奈良時代ではほとんど認められなかったが、この時期になると再び多くの住居跡に設置されるようになる。大半はカマドに向かって右側（11・14・20・21・22・27・32ａ・34・39・42・47・52・54・81・84・173・188・191号住居跡）に位置する。その他は少数で、カマドの左脇（26･41ｂ号住居跡）や、両脇（13･67号住居跡）、カマドと対面する壁隅（10･22・39・91号住居跡）に位置する。

床下ピット

平安時代の住居跡の特徴として、多数の床下ピットの存在が挙げられる。今回の調査では12軒（22・26・32ａ・37・38・39・43・53・66・81・231・232号住居跡）で確認されている。平面形は楕円形が多いが、不整形・隅丸方形などもあり、特定の形を意識したものではないと思われる。規模は長軸長で30～40㎝前後のものが多い。深さは10～40㎝前後と幅があるが、おおよそ20㎝前後のやや浅い掘り込みが多い。位置は、43・53号住居跡のようにカマド周辺を掘り込んでいるものや、22・26号住居跡のようにカマドと対面する壁周辺に集中するものなどあり、明確な傾向は見いだせなかった。

こうした床下ピットに関しては、除湿機能（高橋1983）や、カマド構築用粘土練り施設（大上1986）などの説が出されているが、今のところ明確な機能は判明していない。高木遺跡で確認されたものも、ピットの内部で何かを行ったような痕跡は認められなかった。堆積土も住居内堆積土に近似するようなものから、貼床に近いものまでさまざまである。この時期の住居跡では床下ピットの他に、機能を特定できない不定形なピットがいくつか検出される傾向にある。66号住居跡では、それらの不定形なピットは短期間で埋め戻され、上面は床面となっていた。このことから、床面および床下ピットのなかには、床の構築に関するものが含まれている可能性も考えられる。

（３）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区北側にあたるⅠ・Ⅳ区にのみ位置している。１号建物跡のように、竪穴住

居跡数軒のまとまりに隣接するように位置している。

注目されるのは北部のほぼ同一地点に建てられている、４・８・９号建物跡である。なかでも４号建物跡は、柱穴が一辺１ｍ前後、柱痕跡の直径70㎝前後と大型であり、建物全体の規模も大型である。また、西側の桁行方向に一間分だけ間仕切り、または廂が取り付く特異な構造となっている。この建物の性格を示すような所見は得られなかった。しかし、大型かつ、柱筋の通りが良い規格性の高い建物であることから、集落内において特異な性格の建物であったことが伺える。

４号建物跡が廃絶した後には、ほぼ同一地点で55号住居跡→８号建物跡→９号建物跡の順に住居や建物がつくられている。８・９号建物跡に関しては、規模が大きく縮小し、構造も異なるものとなっている（８号建物跡→側柱建物・９号建物跡→総柱建物）。しかし数回にわたり同一地点で４号建物跡と方位を揃えた建て替えをしていることから、いずれも４号建物跡の機能を引き継いだ住居跡や建物跡と思われる。

桁行方向に間仕切りまたは廂が付く構造

４号建物跡の構造は、会津地域などの豪雪地帯において多く認められており、積雪対策の妻入り建物と考えられている（荒木2000）。会津以外では、郡山市の正直Ｃ遺跡（福島県教育委員会1995）、須賀川市の沼平東遺跡（福島県教育委員会1981）、二塚遺跡（長沼町教育委員会1982）、石川町の大内Ｂ遺跡（福島県教育委員会1986）、玉川村の江平遺跡（福島県教育委員会2002）、小野町の本飯豊遺跡（福島県教育委員会1993）、楢葉町の植松遺跡（楢葉町教育委員会2004）などで確認される。なお須賀川市周辺の事例については、会津と中通りを結ぶ交通路を介した、会津地方からの影響ととらえられている（管野2018）。このような構造をもつ建物の性格などについては判明していない。しかしいずれの事例も、竪穴住居群からやや離れ、単独で位置する傾向が見て取れる。また複数期にわたって建てられた様子が認められないことから、特定の時期に積雪対策を施した建物を建てる要因があったのかもしれない。こうしたことからも集落内における、特異な性格の建物であった可能性は高いと考える。

（４）　畑　跡

畑跡はＢ・Ｄ・Ｅ群や、Ａ群の一部が本時期に属する可能性が高いと考えている。

Ｄ群は、古墳時代～奈良時代同様に、居住域から離れた地点で、広範囲にわたり畑を作っている。なおＤ群の畑が作られている空間は、それまで遺構がほとんど展開しなかった部分であり、平安時代になってようやく土地利用が可能な状況になったものとみられる。

一方Ｂ・Ｅ群は、小規模な畑が点在するように位置している。Ｅ群の畑はいずれも古墳時代後期の住居跡の範囲に作られている。住居跡に堆積する黒色土が耕作に適していたのかもしれない。

（５）土 坑 墓

調査区北側のⅣ区に位置する11号土坑は、その特徴から土坑墓の可能性を考えている。平面形は隅丸長方形で、人為的に埋め戻されていた。土坑の底面には木炭が敷き詰められ、はっきりしないが部分的に焼土化した範囲も認められる。こうしたことから火葬墓の可能性も考えられるが、焼

骨片や骨蔵器は出土していない。なお本土坑は、人為的に埋め戻された32号住居跡の堆積土の中央で、住居跡と主軸方位を合わせて掘り込まれている。本土坑が墓であるとするならば、その被葬者は32号住居跡と深いかかわりを持っていたことが考えられる。

6　中　世

(1)集落の概観

集落は掘立柱建物跡21棟、柱列３基、方形区画遺構２基、溝跡11条、土坑20基前後で構成される。竪穴住居跡は姿を消し、いわゆる「方形竪穴状遺構」と呼ばれる遺構も認められなかった。また畑跡は明確でないものの、Ａ・Ｄ群の一部が中世に属する可能性が考えられる。

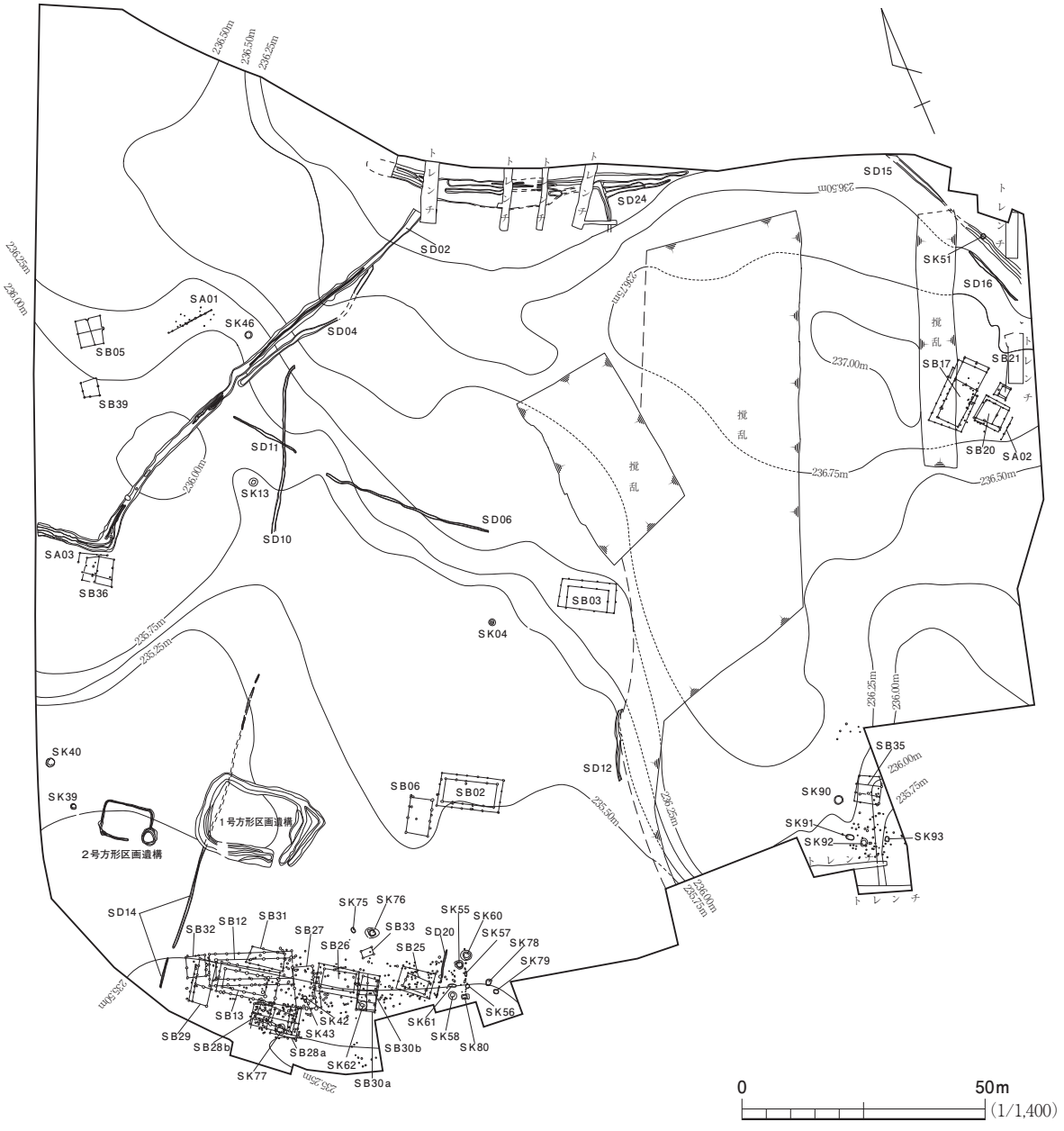


図504　中世　遺構配置図

出土した遺物が非常に少なく、遺構の切り合い関係や検出層位、堆積土の様相から中世と判断したものも多い。

遺構は調査区南西部のⅢ区に集中し、その他は点在するように位置している。なお、Ⅳ区の北端付近やⅠ・Ⅱ区にかけての範囲は、上層が攪乱によって破壊されており、これらの範囲にも遺構が存在した可能性は否定できない。

時期は、大きく13～14世紀前後（Ⅰ期）と、それ以降（Ⅱ期）分かれる可能性が考えられる。このうちⅠ期は、遺構の配置や重複関係から、ⅠＡ期とⅠＢ期に細分されると考えられる。

以下では主要な遺構である掘立柱建物跡が集中するⅢ区を中心に様相を整理する（図505）。

Ⅰ　期

掘立柱建物跡は、建物跡の平面形が長方形で、柱穴は円形がほとんどである。なお、２号建物跡では柱穴１基のみ礎石立ちとなっていた。また12号建物跡は複数の柱穴内に、上面が平坦な石を１個または複数の自然石が入れられていた。前者は礎石または地下式礎石、後者は根石とみられ、いずれも柱の基礎固めの構造と考えられる。

建物跡の配置をみると、複数面に廂を持つ南北軸の大型の建物と、片廂または無廂で東西軸のやや小型の建物が組み合うように位置しており、それぞれ主屋・副屋として機能したと想定される。主屋は長軸長で９～17.3ｍ、副屋は長軸長で7.4～9.2ｍほどの規模である。

ＩＡ期　12号建物跡を主屋とし、27・32号建物跡が副屋として取り付く１単位が該当する。これらの建物群からは、柱穴および火処とみられる土坑（42号土坑）から、11世紀ごろに初鋳された宋銭が出土する点も共通する。また、やや離れた位置にある33号建物跡も主軸の向きが近似しており、この時期のものと思われる。１号方形区画遺構も、この段階にはすでに機能していたものと考えている。

ＩＢ期　13号建物跡を主屋とし、29・31号建物跡が副屋として取り付く建物群と、26号建物跡を主屋とし、30ａ・ｂ号建物跡を副屋とする建物群の２単位が存在する。また、Ⅱ区に位置する２・６号建物跡と３号建物跡も、主軸の方位からこの時期に含まれると考えている。また、通路をもつ14号溝跡も方位がそろっている。また、14号溝跡との重複関係から１号方形区画遺構はこの時期には廃絶し、２号方形区画遺構が機能していたと考えられる。14号溝跡の通路は、建物群と２号方形区画遺構を結ぶものであったと思われる。

Ａ・Ｂ期ともに、建物に隣接するように井戸とみられる土坑が位置する。複数の建物跡からなる単位は、当時の屋敷の単位に相当するものと思われる。また、建物群の配置からは、南側を正面とした配置であることが伺える。想像ではあるが、南側に存在した道などの交通路を意識した可能性も考えられる。

Ⅱ　期

建物跡は25・28ａ・28ｂ号建物跡の他に、北部の５・36・39号建物跡、南東部の35号建物跡と周辺の柱穴群、東端部に位置する17・20・21号建物跡などが該当すると考えている。

Ⅰ期に比べて柱筋の通りが悪く、柱穴の距離もまばらとなり、柱穴自体も小振りで浅いものが多

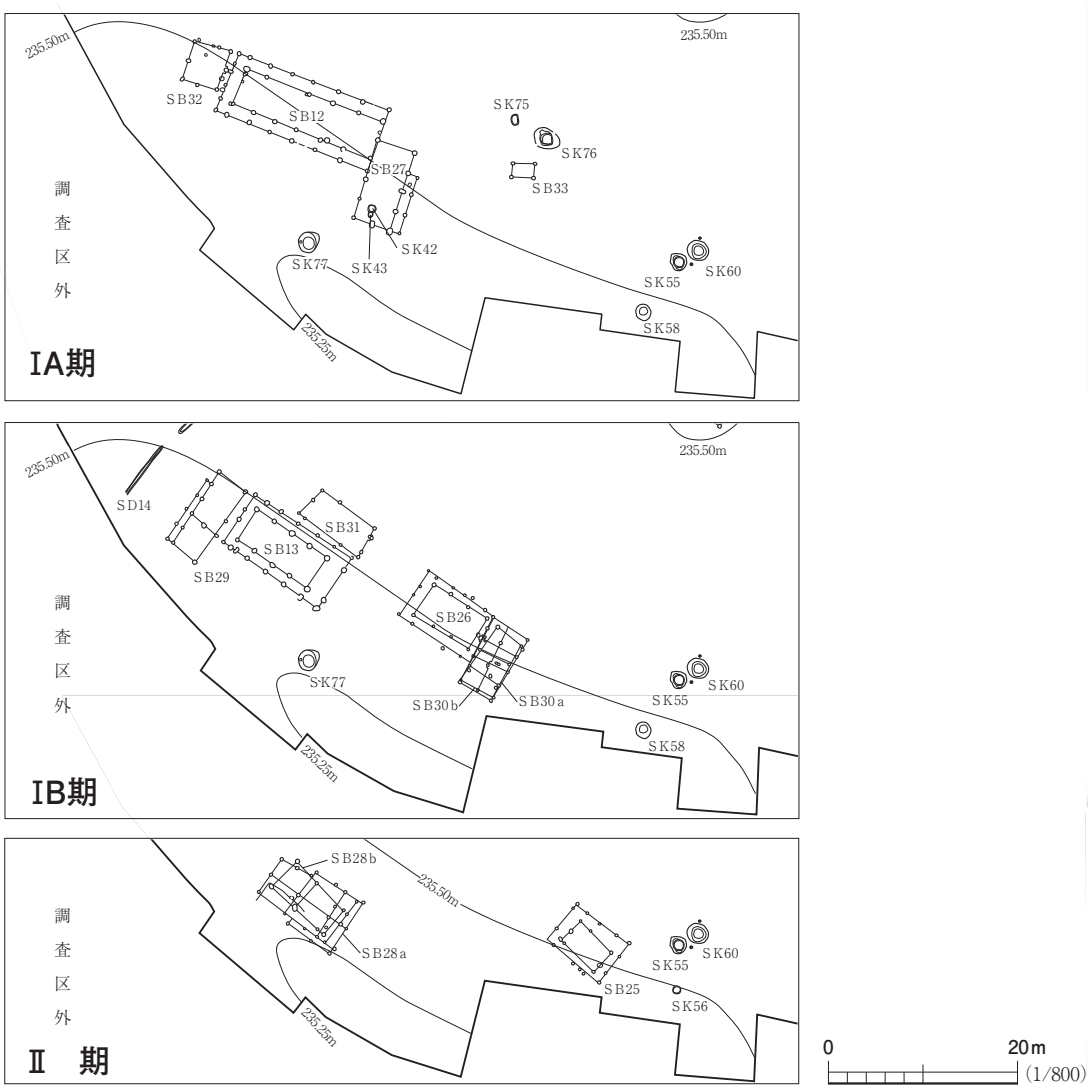


図505　中世　Ⅲ区掘立柱建物跡　変遷図

い。平面形は長方形が基調であるが、ややいびつなものが多い。また、内部に間仕切り構造が多く認められるのも特徴である。Ⅲ区の遺構配置をみると、Ⅰ期に建物が存在した部分を避けて建物が位置しているようにみえる。東端部は17号建物跡を主屋として20・21号建物跡が副屋として機能したとみられる建物配置となっている。しかしⅠ期と配置が大きく異なり、主屋は南北主軸となり、東面に副屋が南北方向に２棟並んでいる。

（２）方形区画遺構と掘立柱建物群

２基の方形区画遺構は規模こそ大きく異なるが、溝を長方形に巡らせ、南東隅に土橋状の通路を設けるという共通した構造をもっている。２号方形区画遺構にのみ、井戸の可能性が高い大型土坑が取り付くが、区画の内部には建物や施設の痕跡は認められない。また、墳丘や土塁が存在した痕跡もなく、墓や防御施設などの区画溝とも性格が異なると考えている。

いずれも一貫して南東隅に入口を設けていることから、南側に位置する掘立柱建物群を意識した構造であることは明らかである。なかでも特に本遺構との関連が高い遺構としては、ＩＡ期の12・

27・32号建物群とＩＢ期13・29・31号建物群が挙げられる。これらの建物群は、同一地点においてほぼ同様の配置の建物を作り替えており、方形区画遺構の作り替えに対応するかのようである。

また、それぞれの主屋である12・13号建物跡は、規模が大きく柱筋の通りが比較的良い建物である。建物の性格を示す知見は得られてはいないが、方形区画遺構に関連する性格を持っていた可能性は高い。

類似する遺構

管見では、このような方形周溝による区画遺構は、宗教施設との関連で捉えられる傾向が強い。栃木県下古館遺跡の方形周溝遺構（栃木県教育委員会1995）や、福島県内屋敷遺跡の１号方形区画施設（塩川町教育委員会2004）などは、内部に建物が伴っている。周辺には墓に関連する遺構が位置しており、「墳墓堂」のような性格が考えられる。新潟県宝積寺館跡の事例（新発田市教育委員会1990）では、平地の館跡内に、二重の方形周溝が巡る遺構が存在しており、「仏堂」の可能性が指摘されている。ただしこれらの事例は、遺跡の性格や、周辺遺構との関連などから、本遺跡のものとはやや性格が異なるものと考えられる。

高木遺跡の方形区画遺構に類似した事例は、いずれも「神社」とみられるものである。栃木県諏訪山北遺跡では、溝によって長方形に区画される遺構が確認されており、伝承などから「神社」の跡地とされている（栃木県教育委員会1994）。内部からは建物の痕跡は確認されていない。溝は複数回の掘り直しが確認され、一貫して西側中央付近を掘り残して通路とするなど、高木遺跡の１号方形区画遺構と共通する要素が多く見て取れる。岩手県衣関遺跡で確認された「神社跡」とされる遺構は、細い塀溝によって「コ」字状に小型建物跡を区画している（平泉町教育委員会1993）。また溝が途切れる通路部分には、やや大型の土坑が取り付いている。細い区画溝と通路部分に接して土坑が取り付く構造は、２号方形区画遺構に認められる要素である。

方形区画遺構の性格

上述した類例からは、本遺跡の方形区画遺構が、「葬送」以外の宗教的な性格を帯びていた可能性が考えられる。しかし性格を示す遺物などが皆無な点や、区画内部に施設の痕跡が認められず、詳細な点は不明といわざるを得ない。

これらの遺構の性格を考えるうえで、注目したのが荒川正夫氏の研究である。荒川氏は方形周溝によって区画される遺構と、掘立柱建物群との位置関係に着目し、方形周溝遺構が屋敷とみられる建物群からみて「北西」に位置することが多いことを指摘した。そして民俗学にみられる屋敷神信仰の様相から、これらの遺構の性格を「氏神・屋敷神信仰の社」と推測している（荒川1993）。

高木遺跡の方形区画遺構も、掘立柱建物群からみて「北」または「北西」に位置しており、非常に興味深い。また、『一遍上人絵伝』などの中世の絵巻物には、建物の傍らや道端に小規模で、掘立柱構造ではない祠や社が描かれており、なかには柵や塀で方形に区画しているものも見受けられる。想像を逞しくするならば、高木遺跡の方形区画遺構の内部には、南側の屋敷地に居住した人々が祀る、小規模な祠が置かれていたのかもしれない。

（３）土坑（井戸跡）

中世の土坑は20基前後確認された。このうち深さ１ｍを超えるものは井戸跡の可能性が高いと考えている（19・39・40・55・58・60・62・76・77号土坑など）。井戸枠などの構造物が確認されたものは少ない。55・60号土坑は底面に円形の圧痕や、鉄分の集積が確認されている。本来は曲物などを利用した井戸枠が存在したが、機能が停止し、埋める前に撤去されたものと思われる。２号方形区画遺構に伴う19号土坑は、人為的に埋められる過程で、焼土や炭化物とともに陶器を再加工した大型の円板状土製品を廃棄している。埋め戻しに伴う何らかの祭祀の痕跡とみられる。

竹を用いた構造の井戸枠

井戸枠の構造が判明しているのは40号土坑である。井戸枠の平面形は方形で、四隅に太い杭が配置され、その間に隙間なく立て並べた細い竹を横桟で組む構造となっていた。

同様の構造は、玉川村湯神前遺跡で１例（福島県教育委員会1989）、浪江町の沢東Ｂ遺跡で２例（福島県教育委員会2005・2007）確認されている。年代については、前者は中世で、後者は18世紀ごろとされており、事例は少ないが比較的長期にわたって用いられた構造と思われる。高木遺跡では時期を明示する遺物は出土しなかったが、堆積土の様相や、周辺の遺構との関連から中世に機能していたものと思われる。（神　林）

第３節　ま　と　め

高木遺跡の調査成果は多岐にわたる。これまでにない知見も得ることができた。ここでは、事実報告と、遺物と遺構の考察を加えて総括し、まとめとしたい。

１　弥生時代以前

高木遺跡は阿武隈川が運んだ土砂によってできた微高地に形成され、阿武隈川が運んだ土砂に埋もれていた。同様の立地条件にある遺跡は、近年の進捗が著しい河川改修事業を原因とする発掘調査によっていくつかその姿を現している。本遺跡がそうであるように、概して大規模で密度の高い遺跡が少なくなく、やはり各時代の文化層が塁重する。

阿武隈川の沿岸に立地し、その洪水層下に確認された最古の遺跡は、本宮市高木遺跡や郡山市町Ｂ遺跡など、縄文時代中期にさかのぼる集落跡である。本遺跡も縄文時代の遺跡が埋もれているのではないか、という指摘があったものの、縄文時代の遺構や遺物は検出されなかった。

２　弥生時代終末期

本遺跡におけるもっとも古い文化は弥生時代終末期のものである。本章の第１節で述べたように、土器については出土状況にまとまりはないものの、型式学的にはほぼ同じ特徴を有し、狭義の天王山式に後続する弥生時代終末期の比較的短い時間幅の中にまとまる土器群と考えることができた。

本遺跡の調査成果の一つは、不確実なもの、可能性のあるものもふくめれば34軒という、当該期の東北地方においては前代未聞の数の住居跡が検出されたことである。ちなみに、これまで調査された弥生時代終末期の遺跡で検出された住居跡の数は、最多でも８軒である。

数多くの住居跡が確認された一方、遺物の出土量は多くはない。この点は、当該期の他の多くの遺跡と変わるところがない。

住居跡の構造は簡素であるが、炉が強く焼土化したものが多いことが特徴的である。重複が激しいことは、短い期間に住居跡を繰り返し同じ場所に構築した結果ではないかとも考えられる。

墓の可能性が指摘される土坑や底部を打ち欠き穿孔した大型の土器も竪穴住居内から出土した。ただし、人骨や副葬品は出土せず、それらが墓であることを可能性以上に示すことはできなかった。

弥生時代終末期は、他地域との交流が盛んな時期であり、本遺跡においても、茨城県北部に分布する十王台式土器が出土した。

３　弥生時代と古墳時代のあいだ

次の古墳時代前期との間には、土器の検討からも重複する遺構の層位的な関係からも、人の活動の痕跡が認められない無人の期間があったことを明らかにすることができた。

ほぼ同じ場所のあい前後する時期に営まれた弥生時代終末期と古墳時代前期の集落は、互いに無関係であるらしい。古墳時代前期の集落を建設した人々は、この場所に天王山式系の文化をもった人々が暮らしていたことを知ってか知らずか、ともかくこの場所を居住地に選んで集落を築き、やがて大規模集落へ発展させた。

本章第１節でふれたように、利根川以東においては弥生文化と古墳文化は不連続の関係にある。縄文時代的な要素を多分に保持する天王山式系の文化は古墳時代には継続せず、古墳時代前期の文化は南関東の弥生文化に系譜をたどることができるものである。系譜の異なる二つの文化は、弥生時代と古墳時代の間を境に転換してしまう。両者がどのような関係にあったのかを示す考古資料は、両者が共伴するわずかな事例があるにすぎず、大きな課題の一つである。

本遺跡では、両者が重複関係にあっても共伴することはなかった。本遺跡では二つの文化は接触することはなかったことになる。

４　古墳時代前期

古墳時代前期は本遺跡においてもっとも大規模に集落が展開した。出土した土器からすれば、前期の初頭に形成され、小型丸底鉢の波及以前、前期前葉のうちに終焉したと結論づけられる。

これまで福島県中通り地方では、古墳時代前期の大規模な集落は未確認であった（青山2015）。ところが、本遺跡における古墳時代前期の集落は大型の住居跡を含んだ総数100軒をこす大規模なものである。本遺跡の調査はこれまでの知見をくつがえし、中通り地方にも古墳時代前期の大規模集落が存在することを明らにした。

出土した土器も大きな問題を提起する。本章第１節で述べたので繰り返さないが、注目されるのは、平底甕が多い東北南部にあって台付甕がその約半数を占める点である。土器にみるこのような様相は、本遺跡に集落を建設した集団の出自に関係するのだと考え、関東地方に類似する土器群の分布域を見出すことを目指したが、千葉県北部から栃木・茨城両県域に同様の土器群が分布しているという見通しを得たのみであり、さらなる検討を要する。

また、この問題に関連して、一部の住居跡で炉石を置いた炉が存在するという事象が本遺跡の調査で注意された。詳しくは本章第２節を参照されたいが、炉石のある炉は、本遺跡が成り立った背景を物語る資料の一つである。東北地方ではこれまで注意されてこなかったが、東北南部の古墳文化の成り立ちを考えるうえで看過できない事象である。

古墳時代前期の集落は、住居跡、畑跡、土器埋設遺構、土器集中地点から構成される。集落に近接して検出された複数の畑跡のうち、東部の谷部で検出された畑跡は、上下の二面からなることが確認された。下層の畑跡を覆っていた約10㎝の層厚をもつ砂質土はおそらく洪水によって運ばれてきたものである。すなわち、一度は洪水によって埋没したものの、その堆積層の上面の同じ位置にもう一度畑を造成したことになる。この畑は洪水堆積層によって再び埋没したが、その上面には１号土器集中地点がぽつんと検出されただけである。畑は一度は復旧されたものの、二度目の復旧はなされずに放置されたことになる。そして、そこでは多数の土器を打ち欠く祭祀が行われた。本遺跡において古墳時代前期の集落が終焉したのはこのときであるとも考えられる。

本遺跡の南に約1.3㎞離れたところにある八ツ木遺跡では、小型丸底鉢や棒状脚をもつ高杯を出土する古墳時代前期中葉以降の住居跡が確認されている（皆川他2002）。そのような遺跡が移転先の候補にあがるが、八ツ木遺跡も阿武隈川の河畔に位置し、洪水によって埋没した遺跡である。

阿武隈川の河畔にあって畑跡が検出された遺跡は少なくない。二本松市トロミ遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての畑跡がやはり洪水堆積層に埋もれながら復旧を行ったことが明らかになっている。阿武隈川の洪水が運ぶ土砂が肥沃であることを示す事象であろうか。中通り地方において、阿武隈川の河畔ではない遺跡における畑跡の検出例は多くない。

本遺跡で検出された畑跡はいずれも古墳時代以降のものである。畑跡は伴う遺物が少なく、時期の特定には難しさが伴うが、本遺跡で検出された古墳時代以降の集落には必ずといっていいほど畑跡を伴っている。しかし、弥生時代終末期の畑跡のみは確認されなかった。

古墳時代前期の集落跡、それから土器集中地点もまた、洪水堆積層におおわれていた。古墳時代前期の集落跡を埋没させた洪水が、そこに居住者がいた段階に起きたのか、あるいは集落の廃絶後に起きたのかを判断できる所見は、調査では得ることができなかった。

５　古墳時代後期

古墳時代後期の集落跡は、古墳時代前期の集落を埋没させた洪水層の上面に掘り込まれていた。古墳時代前期の集落の廃絶が４世紀の前葉、同後期の集落の成立が６世紀の前葉と考えれば、その

間の約200年は無人だったことになる。

本遺跡における古墳時代後期の集落跡についても、これまでの知見をあらためる成果がえられた。本章第１節に記したように、当該期における大型住居跡を含んだ集落の中通り地方での初めての確認である。古墳時代の大型住居跡は大規模集落に含まれていることが多い（青山2015）ことを勘案すれば、本遺跡における28軒からなる古墳時代後期の集落もそれを指向すると考えてよい。

また、阿武隈川の河畔に位置していることも、大きな問題を提起している。すなわち、本遺跡の古墳時代後期の集落跡はその後半にあたる舞台式期のものであるが、つづく古墳時代終末期、栗囲式期になると、中通り地方における集落の立地に変化が生じて、台地上から阿武隈川の沿岸に移動し大規模化することが指摘されている（菅原2004）からである。

さらに、これら舞台式～栗囲式期の集落では、関東、会津、東北北部などとの交渉を示す外来の土器が出土することも知られている（菅原2007）。このことは、阿武隈川沿岸の集落が同河川を幹線とするネットワークを形成していたことを示し、それらの遺跡から外来の土器が出土することは、そのネットワークの他地域への接続を示している。

本章第１節で述べたように、本遺跡の古墳時代後期の集落は舞台式でもその新しい段階、栗囲式の前段階のものである。つまり本遺跡の調査成果の一つは、栗囲式期における集落立地の変革の前段階に、それと同じ意図をもった大規模集落がすでに阿武隈川の沿岸に成立していたことが明確になったことにある。そして、会津型と関東系の土師器が出土したように、やはり他地域との交渉を示す外来の土器を保有している。

ただ、古墳時代後期（舞台式期）において阿武隈川沿岸に位置する遺跡の確認例は多くない。阿武隈川沿岸に位置する同時期の遺跡に郡山市の徳定遺跡（木本他1981）、須賀川市八ツ木遺跡（皆川2002）があって、やはり関東系土器の出土が指摘されている（菅原2007）。本遺跡とこれらの遺跡は同様の性格をもつと考えられるが、現在確認できるのはこの３遺跡のみで、舞台式期の集落の多くはなお台地上にある。

本遺跡と徳定・八ツ木の両遺跡にみる共通点は、栗囲式期における阿武隈川を介した集落間のネットワーク成立には前史があって、栗囲式期に至ってにわかに成立したのではないことを示している。

仙台平野では、古墳時代後期、住社式期の集落から関東系土師器を出土する例が、仙台市太白区西台畑遺跡、同郡山遺跡（工藤他2013・2016）、同長町駅東遺跡（荒井他2014）で知られている。これら３遺跡は互いに隣接する一つの遺跡群で、本遺跡の古墳時代後期の集落と同時期の遺跡である。仙台平野のこの３遺跡は、古墳時代終末期に大規模集落へ成長し、隣接する郡山官衙遺跡の成立基盤となる。その端緒は、関東系土師器を包蔵する後期の集落にある。

本遺跡の場合、終末期には継続しないものの、八ツ木遺跡は奈良時代まで継続し、石背郡衙推定地の栄町遺跡の成立基盤の一部となったと考えられる。律令官衙の成立にいたる道のりの地域をこえた類似と、石背郡の成立に関与する個々の遺跡のさまざまなあり方がそこに示されているものと思われる。いずれにしても、古墳時代社会から古代国家への移行の当地域における第一歩を本遺跡

の中に見出すことができる。

本遺跡の古墳時代後期の集落の廃絶要因は調査では見出せなかったものの、奈良・平安時代と古墳時代後期の遺構が検出面を同じくすることから、少なくとも洪水による被災が原因ではない。

６　奈良・平安時代

本遺跡における古墳時代後期の集落の廃絶のあと、よたび集落が営まれるのは奈良時代である。古墳時代後期の集落の廃絶が６世紀の中葉、奈良時代の集落の始まりが８世紀の中葉と考えれば、そこには200年の間隙が認められる。

古墳時代の前期と後期の集落に比して、本遺跡の奈良時代の集落の規模は小さい。しかし、続く平安時代に住居跡47軒、掘立柱建物跡８棟からなる集落へと成長する。集落規模の拡大は９世紀の前葉のことで、それも９世紀の中葉に廃絶する。

10世紀の前葉には２軒からなる小規模な集落が営まれるが、継続しない。

７　中世以降

本遺跡において調査を行ったもっとも新しい集落は、13～14世紀のものである。掘立柱建物跡と井戸跡を含む土坑からなる３群の建物跡群が検出された他、大小２基の方形区画遺構が確認された。建物跡群はいずれも廂を有する大小の建物跡が複数軒配置されたもので、井戸跡が伴う場合がある。集落というよりそれぞれ屋敷地と考えられる。

１号方形区画遺構は、数度にわたって溝の掘りなおしが行われたことが判明したように、いくばくかの期間にわたって維持された施設である。中世の遺跡のつねで、出土した遺物はごくわずかであり、本遺跡の調査からはその大規模な施設の性格について事実報告した以上の所見は得られなかったが、類例との比較はそれが神社などの宗教施設の可能性を示唆する。

近世の遺構や遺物は確認されず、土地利用についての具体的な様相はわからない。

以上が、発掘調査によって明らかにしえた高木遺跡の歴史である。　（青　山）

註

１）天王山遺跡出土土器の壺（『白河市史』図444－３）は、本遺跡の壺体部の小片（図481－12）と同じモチーフが描かれているが、凹点文が付されていない。

２）弥生時代終末期の土器の胎土に繊維混和痕があるという指摘は、白河市明戸遺跡（辻1984）、郡山市正直15号墳墳丘・周溝出土土器（押山ほか1996）、いわき市横山古墳群１号竪穴住居跡出土土器（椚良・廣岡2002）にある。

胎土に籾殻を混和した土器については、会津若松市田中原遺跡（藤崎1977）、宮城県栗原市（旧志波姫町）宇南遺跡（斉藤1979）、大崎市（旧岩出山町）一本松遺跡（佐藤1984）、仙台市富沢遺跡104次調査（工藤1999）、同大野田古墳群（竹田2000）で指摘されている。

中村五郎氏は、上述の田中原遺跡の他に大玉村破橋遺跡の土器に籾殻を混和した痕跡があること（中村1983）、また「福島県･宮城県の土器の一部に相当量の籾殻を混入した例があり､短い繊維の痕跡が認められるものもある。」と述べている（中村1988）。

郡山市正直15号墳の墳丘と周溝から出土した弥生時代終末期の土器は「このうちいくつかは胎土に繊維を含むが含有量が少なく判別が難しい。」とされ（押山ほか1996）､いわき市横山古墳群１号竪穴住居跡出土土器には､繊維を多量に含むもの、

少量含むもの、籾殻を混入したものがあることが報告されている（梶良・廣岡2002）。混和される繊維の量に多寡があるという状況は、本遺跡出土土器にもみられる。

弥生時代中期後半の土器の胎土に繊維を含むものがあることは、玉川村江平遺跡で指摘がある（芳賀2002）。

山内清男著『日本先史土器の縄紋』（山内1979）の図版５Ａには、直前段半撚の例として掲げられている土器片に繊維と籾の混和痕が確認できる。地文と籾痕から弥生土器と考えられるが、出土地については記述がない。

３）本土器群にはいずれの土器にも頸部無文帯が認められるものの、同時期と思われる他遺跡の資料には頸部を無文帯としない例が少なくない。これを考慮すれば、頸部無文帯の有無は必ずしも本土器群の指標にはならない。

４）本土器群にはないものの、他遺跡出土土器にはこの段階に口唇部に刻み目を施すものが散見される。

５）大安場古墳下層出土土器は、口縁部の弧線文が上下に反転していることのほかに弧線の本数が増えて４～５本になっていること、三叉（角）構成文に２個の凹点文が付け加えられていること、口縁部下端の段の数が増えて２段になっていること、口縁部の幅が拡張していること、十王台式と折衷していること、の諸点を新しい要素としてあげることができる。なお、ここで大安場古墳下層出土とした土器には、墳丘盛土に含まれていたものを含む。

６）鈴木素行氏、稲田健一氏のご教示をいただいた。

７）その他、28号住居跡から出土した直立する口縁部の外面に二つの段を巡らせる鉢（図68－10）が、東北北部系ではないかという指摘を菅原祥夫氏から受けている。

引用・参考文献

青山博樹　2010「古墳時代前期の土器編年」『北杜』辻秀人先生還暦記念論集刊行会
青山博樹　2015「集落遺跡はなにを語るか」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』
青山博樹　2017「東北弥生後期の社会」『月刊　考古学ジャーナル』No.696　ニューサイエンス社
赤熊浩一他　2011『反町遺跡』Ⅱ　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
阿部健太郎・梶原圭介・梶原文子・猪狩俊哉　2007『油田遺跡』会津美里町文化財調査報告書第２集
荒井　格他　2014『長町駅東遺跡第５・６・７・９次調査』仙台市文化財調査報告書第421集　仙台市教育委員会
荒川正夫　1993「中世における「周溝に囲まれた小型建物址」の問題について」『翔古論聚』
荒木　隆　2000「会津若松域（古代会津郡東半部）における奈良・平安時代掘立柱建物跡の特質」『若松北部　県営ほ場整備発掘調査報告書』Ⅱ　会津若松市文化財調査報告書第66号
石川日出志　2001「弥生後期湯船沢式土器の系譜と広がり」『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
伊東信雄　1950「東北地方の弥生式文化」『文化』２－４
伊東信雄　1954「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」『古代学』３－２　古代学協会
伊東信雄　1964「東北地方Ⅰ」『弥生式土器集成』本編　東京堂出版
伊東信雄他　1965『崎山囲洞窟遺跡調査概報』宮城県教育委員会
稲村圭一　2013「福島県内の弥生時代中期の住居跡について」『福島県文化財センター白河館　研究紀要2013』
井上義安他　1980『髭釜』大洗地区遺跡発掘調査会
井上義安　1990『薬王院東遺跡』薬王院東遺跡調査会
遠藤　智・清野俊太朗　1984『梅田遺跡調査報告書』白石市文化財調査報告書第22集　白石市教育委員会
大上周三　1986「床下粘土土壙について」『神奈川県考古同人会10周年記念論集』
大越道正他　1990「能登遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告』10　福島県文化財調査報告書第242集　福島県教育委員会
大越道正他　2002『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』12　福島県文化財調査報告書第394集
大竹　篤他　1990ａ「師山遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告』Ⅱ　福島県文化財調査報告書第234集　福島県教育委員会
大竹　篤他　1990ｂ「双子遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告』Ⅱ　福島県文化財調査報告書第234集　福島県教育委員会
大玉村教育委員会　『上ノ台遺跡発掘調査報告（第１次）』大玉村文化財調査報告第４集
大村　直　1983「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』30－３　考古学研究会
押山雄三他　1996『正直Ｂ遺跡』郡山市教育委員会
及川良彦　2013「宇津木向原遺跡・尾崎遺跡」『新八王子市史』資料編１原始・古代　八王子市
及川良彦　2017ａ「炉を巡る諸問題１　石床炉の研究（１　前編）」『西相模考古』第26号　西相模考古学研究会
及川良彦　2017ｂ「炉を巡る諸問題１　石床炉の研究（２　後編）」『青山考古』第33号　青山考古学会
加藤道男　1980「東館遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』Ⅲ　宮城県文化財調査報告書第65集　宮城県教育委員会
金谷光男　1984「背戸Ｂ遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告』Ⅷ　福島県教育委員会
金丸　誠・落合章雄　2002『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』ＸＶ　千葉県文化財センター調査報告第423集

菅野和博　2018 「岩背国の成立と岩背郡衙関連遺跡」『第44回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
菊地芳朗　2001 「東北地方の古墳時代集落－その構造と特質－」『考古学研究』47－4
木本元治　2008 「弥生時代後期の南東北と周辺地域」『芹沢長介先生追悼考古・民族歴史学論集』六一書房
木本元治他　1981 「徳定遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅲ福島県文化財調査報告書第92集　福島県教育委員会
木本元治他　1991ａ 『東北横断自動車道遺跡調査報告』12　屋敷遺跡　福島県文化財調査報告書第262集　福島県教育委員会
木本元治他　1991ｂ 『東北横断自動車道遺跡調査報告』13　和泉遺跡　福島県文化財調査報告書第263集　福島県教育委員会
共和開発株式会社　2009 『東京都北区中里峡上遺跡発掘調査報告書』
桐生直彦　2005 『竈をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房
工藤信一郎他　2013 『西台畑遺跡第４・５・７次調査』仙台市文化財調査報告書第411集　仙台市教育委員会
工藤信一郎他　2016 『郡山遺跡第243次調査・西台畑遺跡第11次調査』仙台市文化財調査報告書第442集　仙台市教育委員会
工藤哲司　1999 「籾殻混入の弥生土器について」『富沢遺跡』第104次発掘調査報告書　仙台市文化財調査報告書第235集
栗田則久　2006 『流山新市街地地区埋蔵文化財調査報告書』１　千葉県教育振興財団調査報告第545集
劔持和夫　2000 『築道下遺跡』Ⅲ埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第245集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
小井川和夫他　1992 『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書第145集　宮城県教育委員会
郡山市教育委員会 『郡山東部８』
郡山市教育委員会 『郡山東部』Ⅱ　大善寺地区遺跡
合田芳正　1988 「炉址小考」『青山考古』第６号　青山考古学会
合田芳正　1992 「弥生時代土製垂飾の二・三について」『青山考古』第10号　青山考古学会
合田芳正　2001 「粘土床炉・石床炉」『東京都あきる野市　余田』
後藤守一他　1954 『登呂本編』日本考古学協会
木幡成雄他　2009 『県指定史跡玉山古墳』いわき市埋蔵文化財調査報告第135冊　いわき市教育委員会
小林清隆他　2010 『千原台ニュータウン』ＸＸＶ　市川市草刈遺跡(Ｌ区)　千葉県教育振興財団調査報告第646集
子持村教育委員会　1991 『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告書第11集
小山岳夫　2017 「弥生時代の炉　再々考」『長野県考古学会誌』第155号　長野県考古学会
斉藤吉弘　1979 『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
斎野裕彦　2010 「仙台平野中北部における沼向遺跡の遺構群の位置づけ」『沼向遺跡第４～34次調査』仙台市文化財調査報告書第360集　仙台市教育委員会
佐々木慎一他　1994 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告』33　殿畑遺跡　福島県文化財調査報告書第287集
笹沢浩史　2013 「桜町遺跡の北陸系土器の編年的位置」『東北南部における弥生後期から古墳出現前夜の社会変動』福島県湯川村桜町遺跡資料見学・検討会予稿集　弥生時代研究会
佐藤耕三　1984 「東館遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告』Ⅷ　福島県教育委員会
佐藤信行　1984 「宮城県岩出山町一本松遺跡採集の遺物」『籾』第５号　弥生時代研究会
佐藤祐輔　2015 「東北」『弥生土器』考古調査ハンドブック12　ニューサイエンス社
菅原祥夫　2004 「東北古墳時代終末期の在地社会再編」『原始・古代日本の集落』同成社
菅原祥夫　2007 「東北・北海道における６～８世紀の土器変遷と地域の相互関係　福島県中通り地方南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部
菅原文也他　1977 『伊達西部条里遺構発掘調査概報』Ⅰ　福島県文化財調査報告書第59集　福島県教育委員会
塩川町教育委員会　2004 『内屋敷遺跡』塩川町文化財調査報告書第12集
新発田市教育委員会　1990 『三光館跡・宝積寺館跡』新発田市埋蔵文化財調査報告第13集
下ノ内浦遺跡調査団　1988 『下ノ内浦遺跡』
白河市　1982 『道南北遺跡』白河市埋蔵文化財調査報告書第６集
白河市　2002 『舟田中道遺跡』２　白河市埋蔵文化財調査報告書第33集
須賀川市教育委員会　1987 『仲ノ平古墳群　昭和61年度調査概報』
須賀川市教育委員会　2001 『仲の町遺跡』須賀川市文化財調査報告書第43集
鈴木重美他　1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第６冊　いわき市教育委員会
鈴木公雄　1999 『出土銭貨の研究』 東京大学出版会
鈴木隆康・吉田生哉　2010 『水品遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第142冊　いわき市教育委員会
鈴木正博　1976 「十王台式土器理解のために(２)」『常総台地』８　常総台地研究会
鈴木正博　2002 「『十王台式』と『明戸式』」『婆良岐考古』第24号　婆良岐考古同人会

鈴木素行　1998「４　武田石高遺跡における十王台式土器の編年について」『武田石高遺跡』旧石器・縄文・弥生編　（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第15集　ひたちなか市教育委員会
鈴木素行　2005「５　船窪遺跡群における集落の軌跡－「生者の家」と「死者の家」の集落論－」『船窪遺跡』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第32集　ひたちなか市教育委員会
鈴木素行　2010「続・部田野のオオツタノハ」『古代』第123号　早稲田大学考古学会
鈴木素行　2013「旅する『十王台』」『ひたちなか埋文だより』38　ひたちなか市埋蔵文化財センター
高橋一夫　1983「集落分析の一視点　―入口と集落の道―」『埼玉考古』第21号埼玉県考古学会
高島好一・椚良幸広　1998『平窪諸荷遺跡』いわき市教育委員会
高橋信一他　1980「道南遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅰ　福島県文化財調査報告書第80集　福島県教育委員会
竹田幸司　2000「大野田古墳群」『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡』仙台市文化財調査報告書第243集
田中大輔　2012「古墳時代における土器集積について」『祭祀儀礼と景観の考古学』
築館町教育委員会　1995『伊治城跡』築館町文化財報告書第８集
辻　秀人　1995「東北南部における古墳出現期の土器編年－その２－」『東北学院大学論集』歴史学・地理学第27号
辻　秀人　1998「列島における東北世界の成立」『歴史の中の東北』河出書房新社
辻　秀人　2000「古墳の出現と謎の塩釜式」『仙台市史』通史編２　古代・中世　仙台市
辻　秀人他　1984『明戸遺跡発掘調査概報』福島県立博物館調査報告第８集　福島県教育委員会
辻　秀人他　1996『桜井高見町Ａ遺跡発掘調査報告書』原町市埋蔵文化財調査報告書第12集　原町市教育委員会
辻　秀人他　2011「福島県南相馬市小高区勧請内古墳発掘調査報告」『東北学院大学論集　歴史と文化』第47号
坪井清足　1953「福島県天王山遺跡の弥生式土器」『史林』36－１
鶴間正昭　2007「祭祀遺構にみる土器集積」『原始・古代日本の祭祀』同成社
鶴間正昭　2011「竪穴住居にみられる張り出し貯蔵穴」『東京考古』第29号　東京考古談話会
鶴見貞雄　1996「炉石住居覚書」『研究ノート』第５号　財団法人茨城県教育財団
栃木県教育委員会　1990『砂部遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第108集
栃木県教育委員会　1994『諏訪山・諏訪山北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第147集
栃木県教育委員会　1995『下古館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第166集
栃木県教育委員会　2002『東谷・中島地区遺跡群』２　栃木県埋蔵文化財調査報告第265集
栃木県教育委員会　2010『東谷・中島地区遺跡群』10　栃木県埋蔵文化財調査報告第331集
永澤譲次　1931「陸前国塩釜港字崎山囲洞窟の石器及び古墳時代に関する略報」『史前学雑誌』第３巻第１号
長沼町教育委員会　1982『二塚遺跡』長沼町文化財調査報告書第６集
長沼町教育委員会　2000『桙衝神社祭祀遺跡発掘調査報告書』
中野晴久　1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
中村五郎　1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』東出版寧楽社
中村五郎　1983「東北中・南部と新潟」『三世紀の考古学』下巻　学生社
中村五郎　1988『弥生文化の曙光』90頁　未来社
仲山英樹　2003「栃木県佐野市松山・エグロ遺跡の検討」『研究紀要』第11号　財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
椚良幸広・廣岡　敏　2002『横山古墳群』いわき市埋蔵文化財調査報告第82冊　いわき市教育委員会
楢葉町教育委員会　2004『植松遺跡』楢葉町文化財調査報告書第12集
新潟県教育委員会　2009『山元遺跡』県内遺跡調査報告書Ⅰ
西川修一　1995「東・北関東と南関東－南関東圏の拡大－」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学出版部
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
芳賀英一　2002「第３節　弥生時代の遺物について」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』12　福島県文化財調査報告書第394集　福島県教育委員会
林　純子　2008「弥生時代中期後半における方形周溝墓と土器棺墓の様相」『法政考古学』第34集　法政考古学会
葉山茂英　2016「弥生時代後期～古墳時代前期の錘状土製品」『海と考古学』第９号　海交史研究会
比田井克人　1995「下総地域の主体性」『法政考古学』第21集　法政考古学会
比田井克人　2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』第33号　史館同人
平間亮輔　1991『富沢遺跡第35次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集　仙台市教育委員会
平間亮輔他　1985『松並平遺跡』棚倉町教育委員会

廣岡　敏　2006 『応時遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第115冊　いわき市教育委員会
福島県教育委員会　1981 『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告書』Ⅶ　福島県文化財調査報告書第96集
福島県教育委員会　1986 『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告』21　福島県文化財調査報告書第163集
福島県教育委員会　1988 『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告』Ⅵ　福島県文化財調査報告書第191集
福島県教育委員会　1980 『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅰ　福島県文化財調査報告書第80集
福島県教育委員会　1989 『福島空港関連遺跡発掘調査報告』Ⅱ　福島県文化財調査報告書第213集
福島県教育委員会　1991 『東北横断自動車道遺跡調査報告』13　福島県文化財調査報告書第263集
福島県教育委員会　1993 『東北横断自動車道遺跡調査報告』24　福島県文化財調査報告書第295集
福島県教育委員会　1995 『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告』36　福島県文化財調査報告書第305集
福島県教育委員会　1996 『常磐自動車道遺跡調査報告』 9　福島県文化財調査報告書第331集
福島県教育委員会　2002 『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告』12　福島県文化財調査報告書第394集
福島県教育委員会　2005 『常磐自動車道遺跡調査報告』39　福島県文化財調査報告書第421集
福島県教育委員会　2007 『常磐自動車道遺跡調査報告』49　福島県文化財調査報告書第444集
福島県教育委員会　2011 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書』10福島県文化財調査報告書第474集
福島市教育委員会　1995 『勝口前畑遺跡』 2　福島市文化財調査報告書第68集
福田秀夫　2005 「第２編　桜町遺跡（１次）」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書』 5　福島県文化財調査報告書第430集
藤崎富雄　1977 「河東村田中原遺跡」『福島考古』第18号　福島県考古学会
藤谷　誠　1987 「大池下遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告』11　福島県文化財調査報告書第173集
古川市教育委員会　1999 『留沼遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第25集
古川利意他　1990 『福島県営会津南部ほ場整備事業若宮地区遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第17集
堀　耕平　2011 「高見町Ａ遺跡」『原町市史』第３巻　資料編Ⅰ考古　南相馬市
幕田一義他　2000 『大泉みずほ遺跡発掘調査報告書』保原町文化財調査報告書第15集　保原町教育委員会
馬目順一　1971 『岩代陣場遺跡の研究』福島県本宮町教育委員会
馬目順一　1983 「東北南部」『弥生土器』Ⅱ　ニュー・サイエンス社
馬目順一他　1981 『八幡台遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第５冊　いわき市教育委員会
皆川隆男　1998 「仏坊古墳群」『福島空港アクセス道路関連遺跡発掘調査報告』Ⅳ　須賀川市教育委員会
皆川隆男他　2002 『八ツ木遺跡・西館跡』須賀川市文化財調査報告書第44集　須賀川市教育委員会
宮城県教育委員会　1980 『金剛寺貝塚　宇賀崎貝塚　宇賀崎１号墳　他』宮城県文化財調査報告書第67集
宮本長二郎　1990 「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』第32号　雄山閣
村上市教育委員会　2013 『山元遺跡　市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』村上市埋蔵文化財調査報告書第５集
村田　大他　1996 『函館市石倉貝塚』北海道埋蔵文化財センター調査報告書第109集　財団法人北海道埋蔵文化財センター
目黒吉明　1969 「30、下高野遺跡」『福島県史』 1
八重樫忠郎　2013 「東北地方の渥美と常滑」『知多半島の歴史と現在』第17巻
柳沼賢治　1988 『大根畑遺跡』郡山市教育委員会
柳沼賢治他　1998 『大安場古墳群』第２次調査報告　郡山市教育委員会
安井俊則　2013 「渥美窯の展開」『知多半島の歴史と現在』第17巻
安田　稔他　1996 『常磐自動車道遺跡調査報告』 9　福島県文化財調査報告書第331集　福島県教育委員会
山形県埋蔵文化財センター　2004 『高擶南遺跡・菖蒲江１遺跡・菖蒲江２遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告第132集
山形県埋蔵文化財センター　2005 『向河原遺跡　第５・６次調査』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第141集
山形県埋蔵文化財センター　2007ａ 『梅野木前１遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集
山形県埋蔵文化財センター　2007ｂ 『庚壇遺跡』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集
山形県埋蔵文化財センター　2012 『川前２遺跡　第３・４次調査』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第204集
山田　廣　1989 『鹿屋敷遺跡発掘調査報告』浪江町埋蔵文化財調査報告第６冊　浪江町教育委員会
山中敏史　2004 「正倉の建築構造」『古代の官衙遺跡Ⅱ　遺物・遺跡編』奈良文化財研究所
山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
吉岡恭平　1984 「Ⅳ　下ノ内浦遺跡」『仙台市高速鉄道関連遺跡調査概報』Ⅲ　仙台市文化財調査報告書第69集
吉田博行　1995 『杵ガ森古墳・稲荷塚遺跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第33集　会津坂下町教育委員会
渡辺　誠　1985 「杓子形土製品の研究」『日高見国』菊池啓治郎学兄還暦記念会
和深俊夫　2002 『植田郷Ｂ遺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第85冊　いわき市教育委員会

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あぶくまがわじょうりゅうかせんかいしゅうじぎょうたかぎちくいせきちょうさほうこく
書名	阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告
副書名	高木遺跡
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第531集
編著者名	青山博樹、吉野滋夫、小暮伸之、谷中　隆、植松暁彦、中野幸大、神林幸太朗、菅野美旬、荒木麻衣、松本　茂
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部 〒960－8115　福島県福島市山下町1－25　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町2－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2019年（平成31年）３月11日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
高木（たかぎ）遺跡	福島県須賀川市浜尾字高木	07207	00184	37°17′39″	140°24′7″	2015年５月12日～2016年２月26日 2016年４月18日～2017年１月31日 2017年４月18日～2018年１月29日	36,000㎡	河川改修（浜尾遊水地整備）に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高木（たかぎ）遺跡	集落跡	弥生時代終末期 古墳時代前期 古墳時代後期 奈良・平安時代 中世	住居跡 229軒 建物跡 36棟 柱列跡 4列 畑跡 55箇所 方形区画遺構 2基 溝跡 22条 祭祀遺構・土器集中地点 3箇所 土坑 170基 土器埋設遺構 4基 焼土遺構 3箇所 遺物包含層 1箇所	弥生土器 土師器 須恵器 赤焼土器 陶器 土製品 鉄製品 石製品 石器 銭貨	阿武隈川の河畔に立地する、弥生時代終末期、古墳時代前期、同後期、奈良・平安時代、中世の遺跡で、洪水の被害をたびたび被っていた。

要約

弥生時代終末期　住居跡34軒などからなる集落跡が確認された。住居跡は重複が多く、同時に併存したものは数軒程度と考えられる。

古墳時代前期　112軒の住居跡などからなる大規模な集落跡である。出土土器から前期前葉に位置づけられる。住居跡の他、畑跡、土坑、土器埋設遺構、遺物包含層が検出された。甕の約半数を台付甕が占める点が特記される。

古墳時代後期　28軒の住居跡などからなる集落跡である。住居跡の他、畑跡、溝跡、土坑、祭祀遺構が検出された。土器はいずれも舞台式の新しい段階のものである。出土土器に会津や関東からの外来の土器が含まれる。

奈良・平安時代　奈良時代は住居跡８軒、建物跡７棟、平安時代は住居跡47軒、建物跡８棟からなる集落跡が確認され、奈良時代から平安時代へ継続して営まれた集落であったことが判明した。住居跡と建物跡の他、畑跡、土坑、柱列跡が確認された。

中　　世　建物跡21棟、柱列跡、井戸跡を含む土坑、大型の方形区画遺構、畑跡が検出された。建物跡は３つの群を構成する。方形区画遺構は宗教施設と考えられる。

＊経緯度数値は世界測地系（測地成果2011）による。

福島県文化財調査報告書第531集

阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告

高木（たかぎ）遺跡

第２分冊［本文編２］

平成31年３月11日発行

編　集	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部	
発　行	福島県教育委員会	（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
	公益財団法人福島県文化振興財団	（〒960－8116）福島市春日町５－54
	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所	（〒960－8584）福島市黒岩字榎平36
印　刷	株式会社日進堂印刷所	（〒960－2194）福島市庄野字柿場１－１